新幹線文化財調査事務所調査報告書　第11集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ＸＩ

竹松遺跡Ⅳ

（たけまついせき）

中　巻

弥生・古墳編

２０１９

長崎県教育委員会

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第11集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ＸＩ

竹松遺跡Ⅳ

（たけまついせき）

中　巻

弥生・古墳編

発刊にあたって

本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に伴って実施した、大村市竹松遺跡の発掘調査報告書です。

竹松遺跡は、かねてより原始・古代の遺跡として知られておりましたが、九州新幹線の車両整備のため、保守基地（後に車両基地に拡大）が建設されることになりましたので、やむなく発掘調査に至ったものです。

併せて新幹線の車両が走ります路線部の発掘調査も行いました。

調査面積は、約10万㎡にも及び、原始時代から、古代、中世に至る住居跡や墓地など、約700基の遺構が検出され、出土した遺物は約70万点にも上りました。

同遺跡の発掘調査は、平成23年度から着手し、同28年度に終了いたしましたが、これほどの広大な土地を発掘調査いたしましたのは、本県では、壱岐市にある国の特別史跡の原の辻遺跡ぐらいでしたので、本土部では初めての調査規模となりました。

本書は、平成26年度の発掘調査成果のうち、弥生時代と古墳時代の成果を掲載しております。本書を含め、竹松遺跡の一連の発掘調査報告書が、郷土の歴史に新たな発見と展開をもたらすことを期待しております。

最後になりましたが、発掘調査を支援していただいた共同企業体の皆様や、暑さ寒さの厳しいなか、発掘調査に従事された外業作業員の方々をはじめ、さまざまな形でご協力いただいた大村市教育委員会や独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の皆様など、関係者の皆様に厚く御礼申し上げまして、刊行のあいさつといたします。

令和元年７月31日

長崎県教育委員会教育長
池　松　誠　二

例　　言

1. 本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設（事業主体：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構）に伴って実施した長崎県大村市に所在する竹松遺跡のTAK201403調査区（大村市竹松町676番地3ほか所在、調査面積6,320㎡）とTAK201404調査区（大村市竹松町1201番地1ほか所在、調査面積7,720㎡）、TAK201405調査区（大村市竹松町1101番地ほか所在、調査面積9,487㎡）、TAK201406調査区（大村市竹松町733番地ほか所在、調査面積4,920㎡）、TAK201407調査区（大村市竹松町1,093番1ほか所在、調査面積6,876㎡）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
なお、本報告書である『竹松遺跡Ⅳ』中巻は、上記の各調査区から出土した弥生および古墳時代の遺構、遺物の報告を掲載している。
2. 調査は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所が主体となり、TAK201403調査区は㈱埋蔵文化財サポートシステムと扇精光コンサルタンツ㈱の共同企業体の支援を得た。また、TAK201404調査区は国際文化財㈱と㈱三基の共同企業体の支援を得、TAK201405調査区は大成エンジニアリング㈱と㈱創建の共同企業体の支援を得て行い、TAK201406調査区は㈱島田組と扇精光コンサルタンツ㈱の共同企業体の支援を得て行った。さらにTAK201407調査区は㈱大信技術開発と㈱プロレリックの共同企業体の支援を得て行った。調査期間は以下のとおりである。
(1)範囲確認調査（【　】は遺跡調査番号）
TAK201403調査区：平成25(2013)年1月10日（木）～同年2月20日（水）【TAK201217】
TAK201404調査区、TAK201405調査区、TAK201406調査区、TAK201407調査区
：平成25(2013)年10月21日（月）～同年12月2日（月）【TAK201309】
(2)本調査
TAK201403調査区：平成26年5月28日（水）～平成26年10月20日（月）
TAK201404調査区：平成26年5月30日（金）～平成27年2月10日（火）
TAK201405調査区：平成26年5月28日（水）～平成27年2月27日（金）
TAK201406調査区：平成26年7月3日（木）～平成27年2月9日（月）
TAK201407調査区：平成26年7月1日（火）～平成27年3月6日（金）
3. 遺物写真撮影は中川潤次、一瀬勇士が行った。デジタルトレースは松屋祥子、中脇（旧姓中島）美希、鈴田粧子、新久保恒和が行った。また、一部は（株）島田組に委託した。
4. 本報告書の執筆・編集は中川潤次が行った。
5. 本書で用いた座標は、すべて世界測地系を用い、方位はすべて座標北である。
6. 記録類および出土遺物は、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所に保管している。
7. 遺跡調査番号はTAK201403、TAK201404、TAK201405、TAK201406、TAK201407である。
8. 本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。
SA：柵　SB：掘立柱建物跡　SC：竪穴建物跡　SD：溝　SK：土坑　SL：炉、カマド、焼土、鍛冶遺構
SP：柱穴　ST：埋葬施設　SX：不明遺構　SS：集石　SU：遺物集積　TP：試掘坑
SZ：古墳・墳丘墓・周溝墓　NR：自然流路
9. 本書は紙幅の都合により「調査の経緯」「歴史的環境、地理的環境」を割愛した。『竹松遺跡Ⅰ』『竹松遺跡Ⅱ』を参照いただきたい。
10. 発掘調査にあたっては、福永伸哉先生（大阪大学教授）、立平進先生（長崎国際大学（当時））を招聘し、ご指導を得た。
11. 弥生時代終末から古墳時代初頭の土器については、九州考古学会、九州前方後円墳研究会で御教示を得た。

総　目　次

※（　　）内は執筆者

上巻

Ⅰ　調査組織と方法（古門）
1　調査組織……1
2　遺跡位置……3
3　調査方法……4
Ⅱ　層序（古門・川畑）
1　共通土層……5
2　TAK201403の基本層序……5
3　TAK201404の基本層序……5
4　TAK201405の基本層序……6
5　TAK201406の基本層序……6
6　TAK201407の基本層序……6
Ⅲ　遺構と遺物
1　旧石器時代（川道）
(1)TAK201404調査区の包含層出土の旧石器……23
(2)TAK201406調査区の包含層出土の旧石器……23
2　縄文時代（村川・川道）
(1)調査区（TAK201403・201404・201405・201406・201407）の概要…26
(2)主な遺構と遺物……26
(3)包含層出土の縄文土器……46
(4)遺物（石器）……75
(5)蛍光X線分析による黒曜石製石器の産地同定……166
(6)小結……173

中巻

3　弥生時代（中川）
(1)掘立柱建物（SB）……8
(2)竪穴建物（SC）……13
(3)溝（SD）……56
(4)土坑（SK）……71
(5)焼土（SL）……87
(6)柱穴（SP）……88
(7)集石（SS）……93
(8)墳墓（ST）……95
(9)不明遺構（SX）……134
(10)畦畔……144
(11)自然流路（NR）……149
(12)包含層出土遺物……151
4　古墳時代（中川）
(1)掘立柱建物（SB）……167
(2)竪穴建物（SC）……173
(3)溝（SD）……245
(4)土坑（SK）……249
(5)カマド・焼土（SL）……254
(6)柱穴（SP）……255
(7)遺物集積（SU）……260
(8)古墳周溝（SZ）……282
(9)畦畔……285
(10)包含層出土遺物……287
(11)まとめ……305

下巻

5　古代（川畑）
(1)柵列（SA）……6
(2)掘立柱建物跡（SB）……8
(3)竪穴建物跡（SC）……13
(4)溝・河川（SD）……18
(5)土坑（SK）……32
(6)焼土（SL）……38
(7)柱穴（SP）……39
(8)集石（SS）……49
(9)墓（ST）……50
(10)遺物集積（SU）……51
(11)不明遺構（SX）……54
(12)自然流路（NR）……56
(13)包含層（2層）出土の遺物……57
(14)包含層（3層）出土の遺物……65
(15)小結……88
6　中世（川畑）
(1)柵列（SA）……99
(2)掘立柱建物（SB）……103
(3)溝状遺構（SD）……136
(4)道路状遺構（SF）……211
(5)土坑（SK）……214
(6)畦畔……225
(7)柱穴（SP）……228
(8)集石（SS）……242
(9)墓（ST）……251
(10)不明遺構（SX）……252
(11)包含層（2層）出土の遺物……257
(12)包含層（3層）出土の遺物……278
(13)小結……300
7　その他（古門）
長崎県本土部における古代の土師器坏研究の現状整理と若干の考察－9世紀の彼杵郡・高来郡の土師器坏を中心に－…315

Ⅳ　附編（自然科学分析結果）……327

Ⅴ　まとめ（古門）……370

中巻本文目次(1)

※(　　)内は執筆者

3　弥生時代(中川)……8
(1)掘立柱建物(SB)……8
① TAK201404 B6西区 SB3……8
② TAK201404 B6西区 SB4……9
③ TAK201404 B1区 SB5……10
④ TAK201404 B6東区 SB6……11
⑤ TAK201406 2区 SB1……12
(2)竪穴建物(SC)……13
① TAK201403 3区 SC1……13
② TAK201403 3区 SC2……18
③ TAK201403 3区 SC3……19
④ TAK201403 3区 SC5……22
⑤ TAK201403 3区 SC7……22
⑥ TAK201403 3区 SC8……23
⑦ TAK201404 B6東区 SC4……24
⑧ TAK201404 B7東区 SC5……26
⑨ TAK201405 6区 SC7……27
⑩ TAK201405 6区 SC8……30
⑪ TAK201406 3区 SC11……31
⑫ TAK201406 3区 SC12……34
⑬ TAK201406 4区 SC16……36
⑭ TAK201407 1区 SC6……37
⑮ TAK201407 1区 SC7……41
⑯ TAK201407 1区 SC8……43
⑰ TAK201407 4区 SC9……46
⑱ TAK201407 4区 SC12……47
⑲ TAK201407 4区 SC13……49
⑳ TAK201407 2区 SC19……53
㉑ TAK201407 2区 SC20……55
(3)溝(SD)……56
① TAK201403 3区 SD4……56
② TAK201403 3区 SD6……56
③ TAK201403 3区 SD7……58
④ TAK201404 A6東区 SD3……59
⑤ TAK201404 B6東区 SD5……60
⑥ TAK201404 B6西区 SD6……61
⑦ TAK201405 3・4区 SD16……62
⑧ TAK201405 3・4区 SD17……65
⑨ TAK201406 3・4区 SD6……66
⑩ TAK201406 4区 SD7……68
⑪ TAK201406 3・4区 SD8……68
(4)土坑(SK)……71
① TAK201403 3区 SK4……71
② TAK201405 3区 SK16……71
③ TAK201407 1区 SK10……72
④ TAK201407 1区 SK11……74
⑤ TAK201407 4区 SK21……75
⑥ TAK201407 4区 SK22……76
⑦ TAK201407 2区 SK23……77
⑧ TAK201407 2区 SK28……77
⑨ TAK201407 2区 SK29……78
⑩ TAK201407 2区 SK30……78
⑪ TAK201407 2区 SK31……82
⑫ TAK201407 2区 SK32……84
⑬ TAK201407 2区 SK33……86
(5)焼土(SL)……87
① TAK201405 1区 SL2……87
(6)柱穴(SP)……88
① TAK201404 A6東区 SP69……88
② TAK201404 B8北区 SP1081……88
③ TAK201405 2区 SP76……90
④ TAK201405 2区 SP161……90
⑤ TAK201405 2区 SP232……91
⑥ TAK201405 2区 SP287……91
⑦ TAK201405 6区 SP1441……92
⑧ TAK201406 4区 SP433……92
(7)集石(SS)……93
① TAK201407 2区 SS2……93
(8)墳墓(ST)……95
① TAK201403 3区 ST1……95
② TAK201403 3区 ST2……95
③ TAK201403 3区 ST3……96
④ TAK201403 3区 ST4……97
⑤ TAK201403 3区 ST6……97
⑥ TAK201403 3区 ST7……98
⑦ TAK201403 3区 ST8……98
⑧ TAK201404 B6西区 ST1……99
⑨ TAK201404 B8南区 ST2……101
⑩ TAK201404 B8南区 ST3……102
⑪ TAK201405 5区 ST1……103
⑫ TAK201405 2・3区 ST2……104
⑬ TAK201405 3区 ST3……106
⑭ TAK201405 5区 ST4……108
⑮ TAK201405 3区 ST6……110
⑯ TAK201405 3区 ST7……112
⑰ TAK201405 5区 ST8……114
⑱ TAK201405 3区 ST9……115
⑲ TAK201406 2区 ST1……119
⑳ TAK201406 2区 ST2……122
㉑ TAK201406 3区 ST3……125
㉒ TAK201406 3区 ST4……127
㉓ TAK201407 2区 ST1……128
㉔ TAK201407 2区 ST2……130
㉕ TAK201407 2区 ST3……132
(9)不明遺構(SX)……134
① TAK201403 3区 SX3……134
② TAK201403 3区 SX9……134
③ TAK201406 2区 SX3……135
(10)畦畔……144
① TAK201406 2区 畦畔2……144
(11)自然流路(NR)……149
① TAK201404 A6南区 NR1……149
(12)包含層出土遺物……151
① TAK201403調査区……151
② TAK201404調査区……151
③ TAK201405調査区……153
④ TAK201406調査区……158
⑤ TAK201407調査区……159
4　古墳時代(中川)……167
(1)掘立柱建物(SB)……167
① TAK201406 4区 SB3……167
② TAK201406 4区 SB4……168
③ TAK201406 2区 SB5……169
④ TAK201407 1区 SB3……169
⑤ TAK201407 2区 SB7……170
⑥ TAK201407 2区 SB8……171
⑦ TAK201407 2区 SB9……172
(2)竪穴建物(SC)……173
① TAK201403 3区 SC6……173
② TAK201403 3区 SC9……174
③ TAK201405 2区 SC1……175
④ TAK201405 6区 SC5……176
⑤ TAK201405 4区 SC6……179
⑥ TAK201406 2区 SC1……180

中巻本文目次(2)

※(　　)内は執筆者

⑦ TAK201406 2区 SC2 ……184
⑧ TAK201406 2区 SC3 ……188
⑨ TAK201406 2区 SC4 ……189
⑩ TAK201406 2区 SC5 ……191
⑪ TAK201406 2区 SC6 ……193
⑫ TAK201406 2区 SC7 ……195
⑬ TAK201406 2区 SC8 ……198
⑭ TAK201406 2区 SC9 ……203
⑮ TAK201406 4区 SC13 ……204
⑯ TAK201406 4区 SC14 ……206
⑰ TAK201406 4区 SC15 ……208
⑱ TAK201407 1区 SC1 ……212
⑲ TAK201407 1区 SC3 ……214
⑳ TAK201407 1区 SC4 ……217
㉑ TAK201407 1区 SC5 ……221
㉒ TAK201407 4区 SC10 ……223
㉓ TAK201407 4区 SC11 ……226
㉔ TAK201407 2区 SC14 ……227
㉕ TAK201407 2区 SC15 ……231
㉖ TAK201407 2区 SC16 ……236
㉗ TAK201407 2区 SC17 ……239
㉘ TAK201407 2区 SC18 ……241
(3)溝(SD) ……245
① TAK201406 3区 SD2 ……245
② TAK201406 3区 SD3 ……247
(4)土坑(SK) ……249
① TAK201405 2区 SK1 ……249
② TAK201407 1区 SK9 ……249
③ TAK201407 4区 SK18 ……253
(5)カマド・焼土(SL) ……254
① TAK201404 B6東区 SL3 ……254
② TAK201404 B6東区 SL6 ……255
(6)柱穴(SP) ……255
① TAK201403 3区 SP143 ……255
② TAK201405 3区 SP484 ……256
③ TAK201405 4区 SP531 ……257
④ TAK201405 4区 SP982 ……257
⑤ TAK201405 4区 SP987 ……258
⑥ TAK201406 2区 SP23 ……258
⑦ TAK201406 2区 SP49 ……259
⑧ TAK201406 2区 SP283 ……259
(7)遺物集積(SU) ……260
① TAK201405 1区 SU1 ……260
② TAK201405 1区 SU2 ……261
③ TAK201405 1区 SU3 ……261
④ TAK201405 1区 SU4 ……263
⑤ TAK201405 1区 SU5 ……264
⑥ TAK201405 2区 SU6 ……264
⑦ TAK201405 2区 SU7 ……266
⑧ TAK201405 2区 SU8 ……268
⑨ TAK201405 2区 SU9 ……269
⑩ TAK201405 3区 SU10 ……270
⑪ TAK201405 5区 SU12 ……271
⑫ TAK201405 4区 SU13 ……274
⑬ TAK201405 4区 SU14 ……276
⑭ TAK201407 4区 SU1 ……278
⑮ TAK201407 4区 SU2 ……280
(8)古墳周溝(SZ) ……282
① TAK201403 3区 SZ1 ……282
(9)畦畔 ……285
① TAK201406 4区 畦畔4 ……285
(10)包含層出土遺物 ……287
① TAK201403調査区 ……287
② TAK201404調査区 ……287
③ TAK201405調査区 ……290
④ TAK201406調査区 ……297
⑤ TAK201407調査区 ……300
(11)まとめ ……305
竪穴建物、墳墓について ……305
①竪穴建物について ……305
②弥生時代の墳墓について ……307
a 弥生時代の墳墓とグルーピングについて ……307
b 弥生時代の竪穴建物のグルーピングについて ……307
c 古墳時代の竪穴建物のグルーピングについて ……309
③弥生時代墳墓と弥生時代竪穴建物の関係について ……309
④弥生時代における竪穴建物の平面形態の変遷について …312

中巻挿図目次(1)

第1図　TAK201403調査区 弥生時代遺構配置図(S＝1/600) ……1
第2図　TAK201404調査区 弥生時代遺構配置図(S＝1/600) ……2
第3図　TAK201404調査区 B8北・南区 弥生時代遺構配置図(S＝1/600) …3
第4図　TAK201405調査区 ①・②区 弥生時代遺構配置図(S＝1/600) …4
第5図　TAK201405調査区 ③・④・⑤・⑥区 弥生時代遺構配置図(S＝1/600) …5
第6図　TAK201406調査区 弥生時代遺構配置図(S＝1/600) ……6
第7図　TAK201407調査区 ①・②・④区 弥生時代遺構配置図(S＝1/600) …7
第8図　SB3 出土遺物実測図(S＝1/3) ……8
第9図　SB3 平・断面図(S＝1/60) ……9
第10図　SB4 平・断面図(S＝1/60) ……10
第11図　SB5 平・断面図(S＝1/60) ……11
第12図　SB6 平・断面図(S＝1/60)及びSB6・SC5平面位置図(S＝1/120) …11
第13図　SB1 平・断面図(S＝1/80) ……12
第14図　SB1 出土遺物実測図(S＝1/3) ……13
第15図　SC1 平・断面図(S＝1/40) ……14
第16図　SC1 出土遺物実測図(S＝1/3) ……14
第17図　TAK201403調査区SD6・TAK201301調査区SD2接合図(S＝1/120) …16
第18図　TAK201403調査区SC2・SD6・SD7・SX4周辺図(S＝1/150) …17
第19図　SC2 平・断面図(S＝1/40) ……18
第20図　SC3 平・断面図(S＝1/40) ……20
第21図　SC3 出土遺物実測図(S＝1/3, 1/4) ……21
第22図　SC5・SC7 平・断面図(S＝1/40) ……22
第23図　SC8 平・断面図(S＝1/60) ……23
第24図　SC4 平・断面図(S＝1/60) ……25
第25図　SC4 出土遺物実測図(S＝1/3, 1/1) ……25
第26図　SC5 平・断面図(S＝1/60) ……27
第27図　SC7 平・断面図(S＝1/50) ……28
第28図　SC7 出土遺物実測図(S＝1/3) ……29
第29図　SC8 平・断面図(S＝1/50) ……30
第30図　SC8 出土遺物実測図(S＝1/3) ……31
第31図　SC11 平・断面図(S＝1/40) ……32
第32図　SC11 出土遺物実測図(S＝1/3) ……33
第33図　SC12 平・断面図(S＝1/40) ……34
第34図　SC12 出土遺物実測図(S＝1/3) ……35
第35図　SC16 平・断面図(S＝1/40) ……36
第36図　SC6 平・断面図(S＝1/60) ……38
第37図　SC6 出土遺物実測図(S＝1/3) ……39
第38図　SC7 出土遺物実測図(S＝1/3) ……41
第39図　SC7 平・断面図(S＝1/60) ……42
第40図　SC8 平・断面図(S＝1/60) ……44
第41図　SC8 出土遺物実測図(S＝1/3) ……45
第42図　SC9 平・断面図(S＝1/40) ……46

中巻挿図目次(2)

第43図　SC9 出土遺物実測図(S＝1/3) ……47
第44図　SC12 平・断面図(S＝1/40) ……48
第45図　SC12 出土遺物実測図(S＝1/3) ……48
第46図　SC13 平・断面図(S＝1/60) ……50
第47図　SC13 出土遺物実測図(S＝1/3) ……51
第48図　SC19 平・断面図(S＝1/40) ……54
第49図　SC19 出土遺物実測図(S＝1/3) ……54
第50図　SC20 平・断面図(S＝1/40) ……55
第51図　SD4 平・断面図(S＝1/40) ……56
第52図　SD4 出土遺物実測図(S＝1/3) ……56
第53図　SD6 平・断面図(S＝1/80) ……57
第54図　SD6 出土遺物実測図(S＝1/3) ……57
第55図　SD7 平・断面図(S＝1/200) ……58
第56図　SD7 出土遺物実測図(S＝1/3) ……58
第57図　SD3 平・断面図(S＝1/80) ……59
第58図　SD3 出土遺物実測図(S＝1/3) ……59
第59図　SD5 平・断面図(S＝1/40) ……60
第60図　SD5 出土遺物実測図(S＝1/3) ……60
第61図　SD6 平・断面図(S＝1/120) ……61
第62図　SD6 出土遺物実測図(S＝1/3) ……61
第63図　SD16 出土遺物実測図(S＝1/3) ……62
第64図　SD16・SD17 平面図(S＝1/200)・断面図(S＝1/80) …64
第65図　SD17 出土遺物実測図(S＝1/3) ……65
第66図　SD6 出土遺物実測図(S＝1/3) ……66
第67図　SD6・SD7 平・断面図(S＝1/150) ……67
第68図　SD7 出土遺物実測図(S＝1/3) ……68
第69図　SD8 平・断面図(S＝1/200) ……69
第70図　SD8 出土遺物実測図(S＝1/3) ……70
第71図　SK4 平・断面図(S＝1/40) ……71
第72図　SK16 平・断面図(S＝1/40) ……71
第73図　SK16 出土遺物実測図(S＝1/3) ……71
第74図　SK10 平・断面図(S＝1/10) ……72
第75図　SK10 出土遺物実測図(S＝1/3) ……73
第76図　SK11 平・断面図(S＝1/10) ……74
第77図　SK11 出土遺物実測図(S＝1/3) ……74
第78図　SK21 平・断面図(S＝1/20) ……75
第79図　SK21 出土遺物実測図(S＝1/3) ……76
第80図　SK22 平・断面図(S＝1/20) ……76
第81図　SK22 出土遺物実測図(S＝1/3) ……76
第82図　SK23 平・断面図(S＝1/40) ……77
第83図　SK28 平・断面図(S＝1/40) ……77
第84図　SK28 出土遺物実測図(S＝1/3) ……77
第85図　SK29 平・断面図(S＝1/40) ……78
第86図　SK29 出土遺物実測図(S＝1/3) ……78
第87図　SK30 平・断面図(S＝1/20) ……79
第88図　SK30 出土遺物実測図(S＝1/3) ……80
第89図　SK31 平・断面図(S＝1/20) ……82
第90図　SK31 出土遺物実測図(S＝1/3) ……83
第91図　SK32 平・断面図(S＝1/20) ……84
第92図　SK32 出土遺物実測図(S＝1/3) ……85
第93図　SK33 平・断面図(S＝1/20) ……86
第94図　SK33 出土遺物実測図(S＝1/3) ……86
第95図　SL2 平・断面図(S＝1/40) ……87
第96図　SL2 出土遺物実測図(S＝1/3) ……87
第97図　SP69 平・断面図(S＝1/20) ……88
第98図　SP69 出土遺物実測図(S＝1/3) ……88
第99図　SP1081 平・断面図(S＝1/20) ……89
第100図　SP1081 出土遺物実測図(S＝1/3) ……89
第101図　SP76 平・断面図(S＝1/20) ……90
第102図　SP76 出土遺物実測図(S＝1/3) ……90
第103図　SP161 平・断面図(S＝1/20) ……90
第104図　SP161 出土遺物実測図(S＝1/3) ……90
第105図　SP232 平・断面図(S＝1/20) ……91
第106図　SP232 出土遺物実測図(S＝1/3) ……91
第107図　SP287 平・断面図(S＝1/20) ……91
第108図　SP287 出土遺物実測図(S＝1/1) ……91
第109図　SP1441 平・断面図(S＝1/20) ……92
第110図　SP1441 出土遺物実測図(S＝1/3) ……92
第111図　SP433 平・断面図(S＝1/20) ……92
第112図　SP433 出土遺物実測図(S＝1/3) ……92
第113図　SS2 出土遺物実測図(S＝1/3) ……93
第114図　SS2 平・断面図(S＝1/60) ……94
第115図　ST1 平・断面図(S＝1/40) ……95
第116図　ST1 出土遺物実測図(S＝1/3) ……95
第117図　ST2 平・断面図(S＝1/40) ……96
第118図　ST3 平・断面図(S＝1/40) ……96
第119図　ST4 平・断面図(S＝1/40) ……97
第120図　ST6 平・断面図(S＝1/40) ……97
第121図　ST7 平・断面図(S＝1/20) ……98
第122図　ST8 出土遺物実測図(S＝1/1) ……98
第123図　ST8 平・断面図(S＝1/40) ……99
第124図　ST1 平・断面図(S＝1/20) ……100
第125図　ST2 平・断面図(S＝1/20) ……101
第126図　ST3 平・断面図(S＝1/40) ……102
第127図　ST1 平・断面図(S＝1/20) ……103
第128図　ST1 出土遺物実測図(S＝1/4) ……104
第129図　ST2 平・断面図(S＝1/40) ……105
第130図　ST3 出土遺物実測図(S＝1/4) ……106
第131図　ST3 平・断面図(S＝1/20) ……107
第132図　ST4 平・断面図(S＝1/20) ……109
第133図　ST6 平・断面図(S＝1/20) ……110
第134図　ST6 出土遺物実測図(S＝1/5) ……111
第135図　ST7 平・断面図(S＝1/20) ……113
第136図　ST7 出土遺物実測図(S＝1/4) ……113
第137図　ST8 平・断面図(S＝1/20) ……114
第138図　ST8 出土遺物実測図(S＝1/4) ……114
第139図　ST9 平・断面図(S＝1/20) ……116
第140図　ST9 出土遺物実測図(S＝1/4) ……117
第141図　ST1 平・断面図(S＝1/20) ……119
第142図　ST1 出土遺物実測図(S＝1/4) ……120
第143図　ST2 平・断面図(S＝1/20) ……122
第144図　ST2 出土遺物実測図(S＝1/4) ……123
第145図　ST3 平・断面図(S＝1/20) ……125
第146図　ST3 出土遺物実測図(S＝1/4) ……126
第147図　ST4 平・断面図(S＝1/10) ……127
第148図　ST4 出土遺物実測図(S＝1/4) ……128
第149図　ST1 平・断面図(S＝1/10) ……128
第150図　ST1 出土遺物実測図(S＝1/4) ……129
第151図　ST2 平・断面図(S＝1/10) ……130
第152図　ST2 出土遺物実測図(S＝1/4, 1/3) ……131
第153図　ST3 平・断面図(S＝1/20) ……133
第154図　SX3 平・断面図(S＝1/40) ……134
第155図　SX3 出土遺物実測図(S＝1/3) ……134
第156図　SX9 平・断面図(S＝1/40) ……134
第157図　SX9 出土遺物実測図(S＝1/3) ……135
第158図　SX3 平面図(S＝1/40) ……136
第159図　SX3 出土遺物実測図 その1(S＝1/3) ……137
第160図　SX3 出土遺物実測図 その2(S＝1/3) ……138
第161図　SX3 出土遺物実測図 その3(S＝1/3, 1/5) ……139
第162図　畦畔2 平面図(S＝1/80) ……144
第163図　畦畔2 出土遺物実測図 その1(S＝1/3) ……145
第164図　畦畔2 出土遺物実測図 その2(S＝1/5, 1/3) ……146
第165図　NR1 平・断面図(S＝1/80) ……149
第166図　NR1 出土遺物実測図(S＝1/3) ……150

中巻挿図目次(3)

第167図　TAK201403･TAK201404調査区 包含層出土遺物実測図(S＝1/3, 1/1) …151
第168図　TAK201405調査区 包含層出土遺物実測図 その1(S＝1/3) …154
第169図　TAK201405調査区 包含層出土遺物実測図 その2(S＝1/3, 1/1) …155
第170図　TAK201406調査区 包含層出土遺物実測図(S＝1/3) …158
第171図　TAK201407調査区 包含層出土遺物実測図(S＝1/3, 1/1) …159
第172図　TAK201403調査区 ①･②･③区 古墳時代遺構配置図(S＝1/600) …161
第173図　TAK201404調査区 古墳時代遺構配置図(S＝1/600) …162
第174図　TAK201405調査区 ①･②区 古墳時代遺構配置図(S＝1/600) …163
第175図　TAK201405調査区 ③･④･⑤･⑥区 古墳時代遺構配置図(S＝1/600) …164
第176図　TAK201406調査区 古墳時代遺構配置図(S＝1/600) …165
第177図　TAK201407調査区 ①･②･④区 古墳時代遺構配置図(S＝1/600) …166
第178図　SB3 平・断面図(S＝1/80) …167
第179図　SB3 出土遺物実測図(S＝1/3) …167
第180図　SB4 平・断面図(S＝1/80) …168
第181図　SB5 平・断面図(S＝1/80) …169
第182図　SB3 出土遺物実測図(S＝1/3) …169
第183図　SB3 平・断面図(S＝1/80) …170
第184図　SB7 出土遺物実測図(S＝1/3) …170
第185図　SB7 平・断面図(S＝1/80) …171
第186図　SB8 出土遺物実測図(S＝1/3) …171
第187図　SB8 平・断面図(S＝1/80) …172
第188図　SB9 平・断面図(S＝1/80) …172
第189図　SB9 出土遺物実測図(S＝1/3) …173
第190図　SC6 平・断面図(S＝1/60) …173
第191図　SC9 平・断面図(S＝1/60) …174
第192図　SC1 平・断面図(S＝1/80) …175
第193図　SC1 出土遺物実測図(S＝1/3) …176
第194図　SC5 平・断面図(S＝1/60) …177
第195図　SC5 出土遺物実測図(S＝1/3) …178
第196図　SC6 平・断面図(S＝1/80) …179
第197図　SC6 出土遺物実測図(S＝1/3) …179
第198図　SC1 平・断面図(S＝1/60) …181
第199図　SC1 出土遺物実測図(S＝1/3) …182
第200図　SC2 平・断面図(S＝1/80) …185
第201図　SC2 出土遺物実測図(S＝1/3) …186
第202図　SC3 平・断面図(S＝1/40) …189
第203図　SC4 平・断面図(S＝1/60) …190
第204図　SC4 出土遺物実測図(S＝1/3) …190
第205図　SC5 平・断面図(S＝1/40) …191
第206図　SC5 出土遺物実測図(S＝1/3) …192
第207図　SC6 平・断面図(S＝1/60) …193
第208図　SC6 出土遺物実測図(S＝1/3) …194
第209図　SC7 平・断面図(S＝1/60) …196
第210図　SC7 出土遺物実測図(S＝1/3) …197
第211図　SC8 平・断面図(S＝1/60) …199
第212図　SC8 出土遺物実測図 その1(S＝1/3) …200
第213図　SC8 出土遺物実測図 その2(S＝1/3) …201
第214図　SC9 平・断面図(S＝1/60) …203
第215図　SC9 出土遺物実測図(S＝1/3) …204
第216図　SC13 平・断面図(S＝1/60) …205
第217図　SC13 出土遺物実測図(S＝1/3) …205
第218図　SC14 平・断面図(S＝1/40) …207
第219図　SC14 出土遺物実測図(S＝1/3) …207
第220図　SC15 平・断面図(S＝1/60) …209
第221図　SC15 出土遺物実測図(S＝1/3) …210
第222図　SC1 平・断面図(S＝1/80) …213
第223図　SC1 出土遺物実測図(S＝1/3) …214
第224図　SC3 平・断面図(S＝1/60) …215
第225図　SC3 出土遺物実測図(S＝1/3) …216
第226図　SC4 平・断面図(S＝1/80)及びSC4・SC7切り合い関係平・断面図(S＝1/120) …218
第227図　SC4 出土遺物実測図(S＝1/3) …219
第228図　SC5 平・断面図(S＝1/60) …221
第229図　SC5 出土遺物実測図(S＝1/3) …222
第230図　SC10 平・断面図(S＝1/40) …223
第231図　SC10 出土遺物実測図(S＝1/3) …224
第232図　SC11 平・断面図(S＝1/60) …226
第233図　SC14 平・断面図(S＝1/60) …228
第234図　SC14 出土遺物実測図(S＝1/3) …229
第235図　SC15 平・断面図(S＝1/60) …232
第236図　SC15 出土遺物実測図 その1(S＝1/3) …233
第237図　SC15 出土遺物実測図 その2(S＝1/3) …234
第238図　SC16 平・断面図(S＝1/60) …237
第239図　SC16 出土遺物実測図(S＝1/3) …238
第240図　SC17 平・断面図(S＝1/60) …240
第241図　SC17 出土遺物実測図(S＝1/3) …240
第242図　SC18 平・断面図(S＝1/80) …242
第243図　SC18 出土遺物実測図(S＝1/4, 1/3) …243
第244図　SD2 平・断面図(S＝1/200) …245
第245図　SD2 出土遺物実測図(S＝1/3) …246
第246図　SD3 平・断面図(S＝1/80) …247
第247図　SD3 出土遺物実測図(S＝1/3) …248
第248図　SK1 平・断面図(S＝1/40) …249
第249図　SK1 出土遺物実測図(S＝1/3) …249
第250図　SK9 平・断面図(S＝1/20) …250
第251図　SK9 出土遺物実測図(S＝1/3) …251
第252図　SK18 平・断面図(S＝1/20) …253
第253図　SK18 出土遺物実測図(S＝1/3) …253
第254図　SL3 平・断面図(S＝1/40) …254
第255図　SL3 出土遺物実測図(S＝1/3) …254
第256図　SL6 平・断面図(S＝1/40) …255
第257図　SL6 出土遺物実測図(S＝1/3) …255
第258図　SP143 平・断面図(S＝1/20) …256
第259図　SP143 出土遺物実測図(S＝1/4) …256
第260図　SP484 平・断面図(S＝1/20) …256
第261図　SP484 出土遺物実測図(S＝1/3) …256
第262図　SP531 平・断面図(S＝1/20) …257
第263図　SP531 出土遺物実測図(S＝1/3) …257
第264図　SP982 平・断面図(S＝1/20) …257
第265図　SP982 出土遺物実測図(S＝1/3) …257
第266図　SP987 平・断面図(S＝1/20) …258
第267図　SP987 出土遺物実測図(S＝1/3) …258
第268図　SP23 平・断面図(S＝1/20) …258
第269図　SP23 出土遺物実測図(S＝1/3) …258
第270図　SP49 平・断面図(S＝1/20) …259
第271図　SP49 出土遺物実測図(S＝1/3) …259
第272図　SP283 平・断面図(S＝1/20) …259
第273図　SP283 出土遺物実測図(S＝1/3) …259
第274図　SU1 平面図(S＝1/40) …260
第275図　SU1 出土遺物実測図(S＝1/3) …260
第276図　SU2 平面図(S＝1/40) …261
第277図　SU2 出土遺物実測図(S＝1/3) …261
第278図　SU3 平面図(S＝1/40) …262
第279図　SU3 出土遺物実測図(S＝1/3) …262
第280図　SU4 平面図(S＝1/40) …263
第281図　SU4 出土遺物実測図(S＝1/3) …263
第282図　SU5 平面図(S＝1/40) …264
第283図　SU5 出土遺物実測図(S＝1/3) …264
第284図　SU6 平面図(S＝1/80) …264
第285図　SU6～SU9 平面位置図(S＝1/100) …265
第286図　SU6 出土遺物実測図(S＝1/3) …265
第287図　SU7 出土遺物実測図(S＝1/3) …267
第288図　SU8 出土遺物実測図(S＝1/3) …268
第289図　SU9 出土遺物実測図(S＝1/3) …269
第290図　SU10 平・断面図(S＝1/40) …270

中巻挿図目次(4)

第291図　SU10 出土遺物実測図(S＝1/3) ……270
第292図　SU12 平・断面図(S＝1/80) ……271
第293図　SU12 出土遺物実測図(S＝1/3) ……272
第294図　SU13 平面図(S＝1/80) ……274
第295図　SU13 出土遺物実測図(S＝1/3) ……275
第296図　SU14 平面図(S＝1/40) ……277
第297図　SU14 出土遺物実測図(S＝1/3) ……277
第298図　SU1 平・断面図(S＝1/20) ……278
第299図　SU1 出土遺物実測図(S＝1/3) ……279
第300図　SU2 平・断面図(S＝1/20) ……280
第301図　SU2 出土遺物実測図(S＝1/3) ……281
第302図　SZ1 平・断面図(S＝1/100) ……283
第303図　SZ1 出土遺物実測図(S＝1/3) ……284
第304図　畦畔4 平面図(S＝1/80) ……286
第305図　畦畔4 出土遺物実測図(S＝1/3) ……286
第306図　TAK201403・TAK201404調査区 包含層出土遺物実測図(S＝1/3, 2/3, 1/1) …288
第307図　TAK201405調査区 包含層出土遺物実測図 その1(S＝1/4, 1/3) …292
第308図　TAK201405調査区 包含層出土遺物実測図 その2(S＝1/3) …293
第309図　TAK201406調査区 包含層出土遺物実測図(S＝1/3, 1/1) …298
第310図　TAK201407調査区 包含層出土遺物実測図 その1(S＝1/3) …301
第311図　TAK201407調査区 包含層出土遺物実測図 その2・TAK1208調査区 包含層出土遺物実測図(S＝1/3, 1/1) …302
第312図　弥生時代墳墓グルーピング図(S＝1/1, 500) ……306
第313図　弥生時代竪穴建物グルーピング図(S＝1/1, 500) …308
第314図　古墳時代竪穴建物グルーピング図(S＝1/1, 500) …311
第315図　竹松遺跡の弥生時代 竪穴建物平面プランの変遷(S＝1/200) …314
第316図　竹松遺跡の古墳時代 竪穴建物平面プランの変遷(S＝1/200) …315
第317図　竹松遺跡の弥生時代 墳墓の変遷 その1(後期前半)(S＝1/40) …320
第318図　竹松遺跡の弥生時代 墳墓の変遷 その2(後期後半・時期不明)(S＝1/40) …321
第319図　竹松遺跡全体遺構配置図(S＝1/1, 500) ……323～324

中巻表目次(1)

第1表　SB3出土土器観察表 ……8
第2表　SB1出土土器観察表 ……13
第3表　SC1出土土器観察表 ……15
第4表　SC3出土土器観察表 ……21
第5表　SC3出土石器観察表 ……21
第6表　SC4出土土器観察表 ……26
第7表　SC4出土金属製品観察表 ……26
第8表　SC4出土石器観察表 ……26
第9表　SC4出土ガラス小玉観察表 ……26
第10表　SC7出土土器観察表 ……29
第11表　SC7出土石器観察表 ……29
第12表　SC8出土土器観察表 ……31
第13表　SC11出土土器観察表 ……32
第14表　SC12出土土器観察表 ……35
第15表　SC6出土土器観察表 ……40
第16表　SC6出土石器観察表 ……40
第17表　SC7出土土器観察表 ……41
第18表　SC8出土土器観察表 ……46
第19表　SC9出土土器観察表 ……47
第20表　SC12出土土器観察表 ……49
第21表　SC13出土土器観察表 ……53
第22表　SC13出土石器観察表 ……53
第23表　SC19出土土器観察表 ……54
第24表　SD4出土土器観察表 ……56
第25表　SD6出土土器観察表 ……57
第26表　SD7出土土器観察表 ……58
第27表　SD3出土土器観察表 ……59
第28表　SD5出土土器観察表 ……60
第29表　SD6出土土器観察表 ……61
第30表　SD16出土土器観察表 ……63
第31表　SD17出土土器観察表 ……66
第32表　SD17出土石器観察表 ……66
第33表　SD6出土土器観察表 ……66
第34表　SD7出土土器観察表 ……68
第35表　SD8出土土器観察表 ……70
第36表　SD8出土石器観察表 ……70
第37表　SK16出土土器観察表 ……72
第38表　SK10出土土器観察表 ……72
第39表　SK11出土土器観察表 ……75
第40表　SK21出土土器観察表 ……76
第41表　SK22出土土器観察表 ……76
第42表　SK28出土土器観察表 ……77
第43表　SK29出土土器観察表 ……78
第44表　SK30出土土器観察表 ……79
第45表　SK31出土土器観察表 ……82
第46表　SK31出土石器観察表 ……82
第47表　SK32出土土器観察表 ……84
第48表　SK33出土土器観察表 ……86
第49表　SL2出土土器観察表 ……87
第50表　SP69出土土器観察表 ……88
第51表　SP1081出土土器観察表 ……89
第52表　SP76出土土器観察表 ……90
第53表　SP161出土土器観察表 ……90
第54表　SP232出土土器観察表 ……91
第55表　SP287出土ガラス小玉観察表 ……91
第56表　SP1441出土土器観察表 ……92
第57表　SP433出土土器観察表 ……92
第58表　SS2出土土器観察表 ……93
第59表　ST1出土土器観察表 ……95
第60表　ST8出土ガラス小玉観察表 ……98
第61表　ST1出土土器観察表 ……104
第62表　ST3出土土器観察表 ……107
第63表　ST6出土土器観察表 ……111
第64表　ST7出土土器観察表 ……113
第65表　ST8出土土器観察表 ……114
第66表　ST9出土土器観察表 ……118
第67表　ST1出土土器観察表 ……121
第68表　ST2出土土器観察表 ……124
第69表　ST3出土土器観察表 ……126
第70表　ST4出土土器観察表 ……127
第71表　ST1出土土器観察表 ……130
第72表　ST2出土土器観察表 ……131
第73表　SX3出土土器観察表 ……134
第74表　SX9出土土器観察表 ……135
第75表　SX3出土土器観察表 ……143
第76表　SX3出土石器観察表 ……143
第77表　畦畔2出土土器観察表……148
第78表　畦畔2出土石器観察表……148
第79表　NR1出土土器観察表 ……150
第80表　TAK201403調査区・TAK201404調査区包含層出土土器観察表…152
第81表　TAK201404調査区 包含層出土石器観察表 ……152
第82表　TAK201404調査区 包含層出土ガラス小玉観察表 ……153
第83表　TAK201405調査区 包含層出土土器観察表 ……157
第84表　TAK201405調査区 包含層出土石器観察表 ……157
第85表　TAK201405調査区 包含層出土石製品(管玉)観察表 …157
第86表　TAK201405調査区 包含層出土ガラス小玉観察表 ……157
第87表　TAK201406調査区 包含層出土土器観察表 ……158
第88表　TAK201406調査区 包含層出土石器観察表 ……158

中巻表目次(2)

第89表　TAK201407調査区 包含層出土土器観察表 ……160
第90表　TAK201407調査区 包含層出土石器観察表 ……160
第91表　TAK201407調査区 包含層出土ガラス小玉観察表 ……160
第92表　SB3出土土器観察表 ……168
第93表　SB3出土土器観察表 ……169
第94表　SB7出土土器観察表 ……171
第95表　SB8出土土器観察表 ……171
第96表　SB9出土土器観察表 ……173
第97表　SC1出土土器観察表 ……176
第98表　SC1出土土製品(土錘)観察表 ……176
第99表　SC5出土土器観察表 ……178
第100表　SC6出土土器観察表 ……180
第101表　SC1出土土器観察表 ……183
第102表　SC2出土土器観察表 ……188
第103表　SC2出土石器観察表 ……188
第104表　SC4出土土器観察表 ……190
第105表　SC5出土土器観察表 ……192
第106表　SC6出土土器観察表 ……195
第107表　SC7出土土器観察表 ……197
第108表　SC7出土石器観察表 ……197
第109表　SC8出土土器観察表 ……203
第110表　SC8出土石器観察表 ……203
第111表　SC9出土土器観察表 ……204
第112表　SC13出土土器観察表 ……206
第113表　SC14出土土器観察表 ……208
第114表　SC15出土土器観察表 ……211
第115表　SC1出土土器観察表 ……214
第116表　SC3出土土器観察表 ……217
第117表　SC4出土土器観察表 ……220
第118表　SC4出土金属製品観察表 ……220
第119表　SC5出土土器観察表 ……222
第120表　SC10出土土器観察表 ……225
第121表　SC10出土金属製品観察表 ……225
第122表　SC10出土金属製品(鍬鋤先)観察表 ……225
第123表　SC10出土石器観察表 ……225
第124表　SC14出土土器観察表 ……229
第125表　SC15出土土器観察表 ……234
第126表　SC16出土土器観察表 ……239
第127表　SC17出土土器観察表 ……241
第128表　SC18出土土器観察表 ……244
第129表　SC18出土石器観察表 ……244
第130表　SD2出土土器観察表 ……247
第131表　SD3出土土器観察表 ……248
第132表　SK1出土土器観察表 ……249
第133表　SK9出土土器観察表 ……252
第134表　SK18出土土器観察表 ……253
第135表　SL3出土土器観察表 ……254
第136表　SL6出土土器観察表 ……255
第137表　SP143出土土器観察表 ……256
第138表　SP484出土土製品(土錘)観察表 ……256
第139表　SP531出土金属製品(鍬鋤先)観察表 ……257
第140表　SP982出土土器観察表 ……257
第141表　SP987出土土器観察表 ……258
第142表　SP23出土土器観察表 ……258
第143表　SP49出土土器観察表 ……259
第144表　SP283出土土器観察表 ……259
第145表　SU1出土土器観察表 ……261
第146表　SU2出土土器観察表 ……261
第147表　SU3出土土器観察表 ……262
第148表　SU4出土土器観察表 ……263
第149表　SU5出土土器観察表 ……264
第150表　SU6出土土器観察表 ……266
第151表　SU7出土土器観察表 ……267
第152表　SU8出土土器観察表 ……269
第153表　SU9出土土器観察表 ……269
第154表　SU10出土土器観察表 ……270
第155表　SU12出土土器観察表 ……274
第156表　SU13出土土器観察表 ……276
第157表　SU14出土土器観察表 ……278
第158表　SU1出土土器観察表 ……280
第159表　SU2出土土器観察表 ……281
第160表　SZ1出土土器観察表 ……285
第161表　畦畔4出土土器観察表 ……286
第162表　TAK201403調査区・TAK201404調査区 包含層出土土器観察表…290
第163表　TAK201404調査区 包含層出土金属製品観察表 ……290
第164表　TAK201405調査区 包含層出土土器観察表 ……296
第165表　TAK201405調査区 包含層出土金属製品観察表 ……296
第166表　TAK201406調査区 包含層出土土器観察表 ……297
第167表　TAK201406調査区 包含層出土石製品(管玉)観察表…297
第168表　TAK201407調査区 包含層出土土器観察表 ……304
第169表　TAK201407調査区・TAK201208調査区包含層出土金属製品観察表…304
第170表　長崎県本土部の弥生から古墳時代の竪穴建物の平面形の変遷…313
第171表　弥生時代竪穴建物一覧表……316
第172表　古墳時代竪穴建物一覧表……317
第173表　弥生時代墳墓一覧表……319

中巻図版目次(1)

図版1　SB3 遺構状況 ……8
図版2　SB3 出土遺物 ……8
図版3　SB4 遺構状況 ……10
図版4　SB5 遺構状況 ……11
図版5　SB1 遺構状況 ……12
図版6　SB1 出土遺物 ……13
図版7　SC1 遺構状況 ……13
図版8　SC1 出土遺物 ……15
図版9　SC2 遺構状況 ……18
図版10　SC3 遺構状況 ……19
図版11　SC3 出土遺物 ……21
図版12　SC5・SC7 遺構状況 ……23
図版13　SC8 遺構状況 ……24
図版14　SC4 遺構状況 ……24
図版15　SC4 出土遺物 ……26
図版16　SC5 遺構状況 ……27
図版17　SC7 遺構状況 ……29
図版18　SC7 出土遺物 ……29
図版19　SC8 遺構状況 ……31
図版20　SC8 出土遺物 ……31
図版21　SC11 遺構状況 ……31
図版22　SC11 出土遺物 ……33
図版23　SC12 遺構状況 ……34
図版24　SC12 出土遺物 ……35
図版25　SC16 遺構状況 ……36
図版26　SC6 遺構状況 ……37
図版27　SC6 出土遺物 ……40
図版28　SC7 遺構状況 ……41
図版29　SC7 出土遺物 ……41
図版30　SC8 遺構状況 ……43
図版31　SC8 出土遺物 ……45
図版32　SC9 遺構状況 ……47

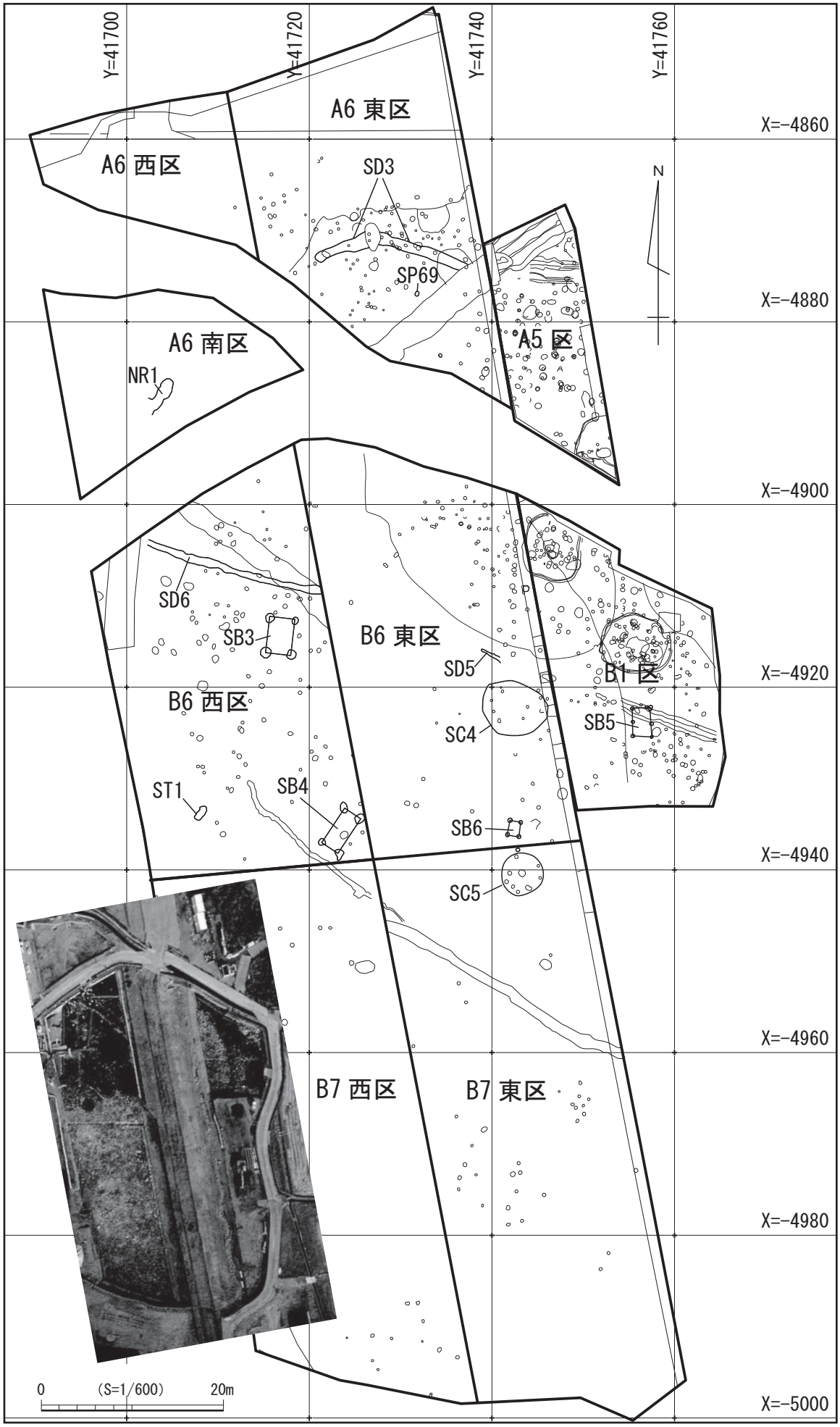
中巻図版目次(2)

図版33　SC9 出土遺物 ……47
図版34　SC12 遺構状況 ……47
図版35　SC12 出土遺物 ……49
図版36　SC13 遺構状況 ……50
図版37　SC13 出土遺物 ……52
図版38　SC19 遺構状況 ……53
図版39　SC19 出土遺物 ……54
図版40　SC20 遺構状況 ……55
図版41　SD4 遺構状況 ……56
図版42　SD4 出土遺物 ……56
図版43　SD6 遺構状況 ……57
図版44　SD6 出土遺物 ……57
図版45　SD7 遺構状況 ……58
図版46　SD7 出土遺物 ……58
図版47　SD3 遺構状況 ……59
図版48　SD3 出土遺物 ……59
図版49　SD5 遺構状況 ……60
図版50　SD5 出土遺物 ……60
図版51　SD6 遺構状況 ……61
図版52　SD6 出土遺物 ……61
図版53　SD16 出土遺物 ……63
図版54　SD16・SD17 遺構状況 ……63
図版55　SD17 出土遺物 ……65
図版56　SD6 出土遺物 ……66
図版57　SD6・SD7 遺構状況 ……67
図版58　SD7 出土遺物 ……68
図版59　SD8 遺構状況 ……69
図版60　SD8 出土遺物 ……70
図版61　SK4 遺構状況 ……71
図版62　SK16 遺構状況 ……71
図版63　SK16 出土遺物 ……71
図版64　SK10 遺構状況 ……72
図版65　SK10 出土遺物 ……73
図版66　SK11 遺構状況 ……74
図版67　SK11 出土遺物 ……75
図版68　SK21 遺構状況 ……75
図版69　SK21 出土遺物 ……76
図版70　SK22 遺構状況 ……76
図版71　SK22 出土遺物 ……76
図版72　SK23 遺構状況 ……77
図版73　SK28 遺構状況 ……77
図版74　SK28 出土遺物 ……77
図版75　SK29 遺構状況 ……78
図版76　SK29 出土遺物 ……78
図版77　SK30 遺構状況 ……79
図版78　SK30 出土遺物 ……81
図版79　SK31 遺構状況 ……82
図版80　SK31 出土遺物 ……83
図版81　SK32 遺構状況 ……84
図版82　SK32 出土遺物 ……85
図版83　SK33 遺構状況 ……86
図版84　SK33 出土遺物 ……86
図版85　SL2 遺構状況 ……87
図版86　SL2 出土遺物 ……87
図版87　SP69 出土遺物 ……88
図版88　SP1081 遺構状況 ……89
図版89　SP1081 出土遺物 ……89
図版90　SP76 出土遺物 ……90
図版91　SP161 出土遺物 ……90
図版92　SP232 出土遺物 ……91
図版93　SP287 出土遺物 ……91
図版94　SP1441 出土遺物 ……92
図版95　SP433 遺構状況 ……92
図版96　SP433 出土遺物 ……92
図版97　SS2 出土遺物 ……93
図版98　SS2 遺構状況 ……94
図版99　ST1 遺構状況 ……95
図版100　ST1 出土遺物 ……95
図版101　ST2 遺構状況 ……96
図版102　ST3 遺構状況 ……96
図版103　ST4 遺構状況 ……97
図版104　ST6 遺構状況 ……98
図版105　ST7 遺構状況 ……98
図版106　ST8 出土遺物 ……98
図版107　ST8 遺構状況 ……99
図版108　ST1 遺構状況 ……99
図版109　ST2 遺構状況 ……101
図版110　ST3 遺構状況 ……102
図版111　ST1 遺構状況 ……104
図版112　ST1 出土遺物 ……104
図版113　ST2 遺構状況 ……106
図版114　ST3 出土遺物 ……106
図版115　ST3 遺構状況 ……107
図版116　ST4 遺構状況 ……108
図版117　ST6 遺構状況 ……110
図版118　ST6 出土遺物 ……112
図版119　ST7 遺構状況 ……113
図版120　ST7 出土遺物 ……113
図版121　ST8 出土遺物 ……114
図版122　ST8 遺構状況 ……115
図版123　ST9 遺構状況 ……115
図版124　ST9 出土遺物 ……118
図版125　ST1 遺構状況 ……119
図版126　ST1 出土遺物 ……121
図版127　ST2 遺構状況 ……123
図版128　ST2 出土遺物 ……124
図版129　ST3 遺構状況 ……125
図版130　ST3 出土遺物 ……126
図版131　ST4 遺構状況 ……127
図版132　ST4 出土遺物 ……128
図版133　ST1 遺構状況 ……129
図版134　ST1 出土遺物 ……129
図版135　ST2 遺構状況 ……130
図版136　ST2 出土遺物 ……131
図版137　ST3 遺構状況 ……132
図版138　SX3 遺構状況 ……134
図版139　SX3 出土遺物 ……134
図版140　SX9 遺構状況 ……135
図版141　SX9 出土遺物 ……135
図版142　SX3 遺構状況 ……136
図版143　SX3 出土遺物 その1 ……140
図版144　SX3 出土遺物 その2 ……141
図版145　SX3 出土遺物 その3 ……142
図版146　畦畔2 遺構状況……144
図版147　畦畔2 出土遺物 その1……147
図版148　畦畔2 出土遺物 その2……148
図版149　NR1 遺構状況 ……149
図版150　NR1 出土遺物 ……150
図版151　TAK201403・TAK201404調査区 包含層出土遺物 ……152
図版152　TAK201405調査区 包含層出土遺物 その1 ……156
図版153　TAK201405調査区 包含層出土遺物 その2 ……157
図版154　TAK201406調査区 包含層出土遺物 ……158
図版155　TAK201407調査区 包含層出土遺物 ……160
図版156　SB3 遺構状況 ……167

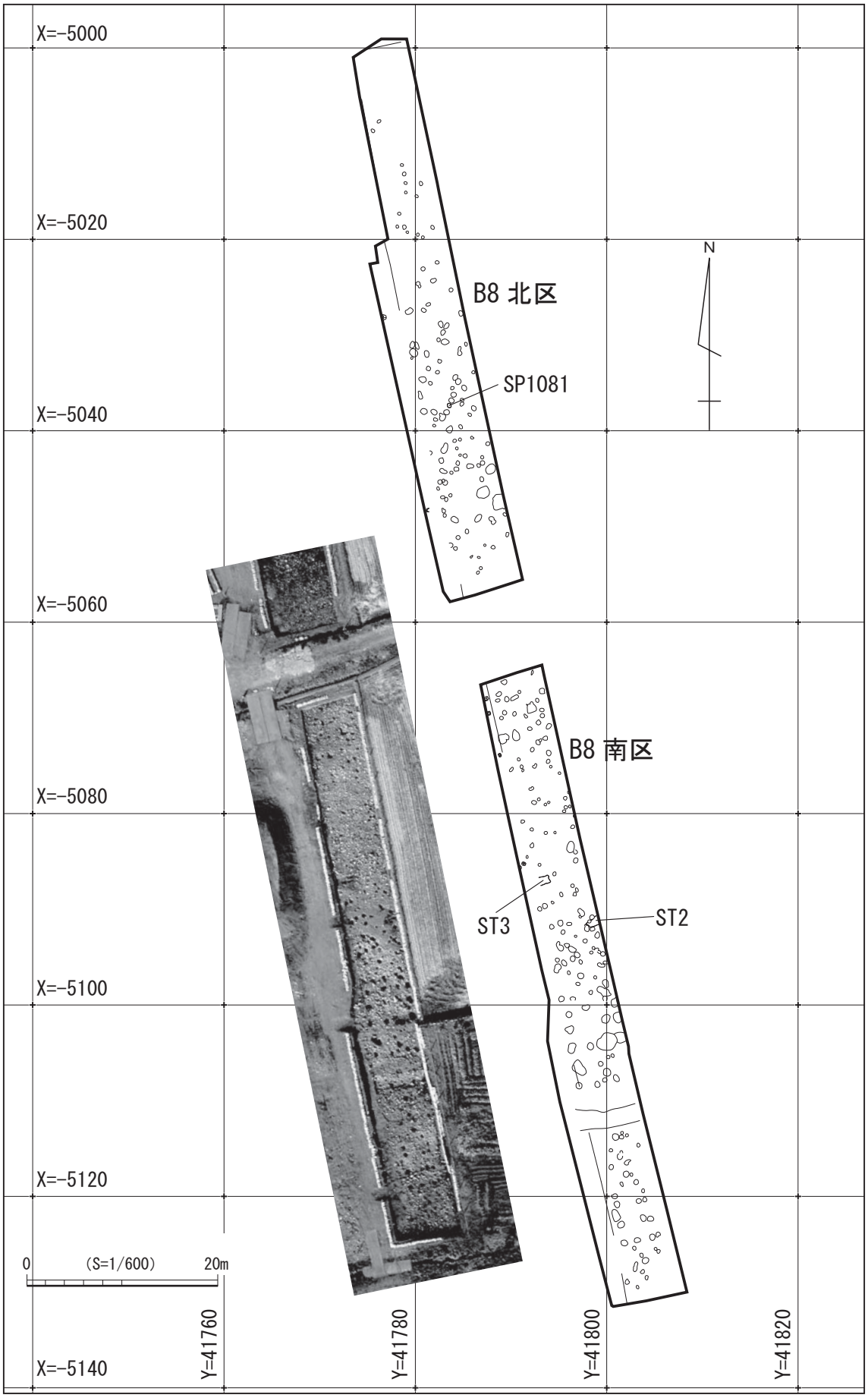
中巻図版目次(3)

図版157　SB3 出土遺物 ……168
図版158　SB4 遺構状況 ……168
図版159　SB5 遺構状況 ……169
図版160　SB3 出土遺物 ……169
図版161　SB3 遺構状況 ……170
図版162　SB7 出土遺物 ……170
図版163　SB7 遺構状況 ……171
図版164　SB8 出土遺物 ……171
図版165　SB8 遺構状況 ……172
図版166　SB9 遺構状況 ……172
図版167　SB9 出土遺物 ……173
図版168　SC6 遺構状況 ……173
図版169　SC9 遺構状況 ……174
図版170　SC1 遺構状況 ……176
図版171　SC1 出土遺物 ……176
図版172　SC5 遺構状況 ……177
図版173　SC5 出土遺物 ……178
図版174　SC6 遺構状況 ……179
図版175　SC6 出土遺物 ……180
図版176　SC1 遺構状況 ……180
図版177　SC1 出土遺物 ……183
図版178　SC2 遺構状況 ……184
図版179　SC2 出土遺物 ……187
図版180　SC3 遺構状況 ……188
図版181　SC4 遺構状況 ……190
図版182　SC4 出土遺物 ……190
図版183　SC5 遺構状況 ……192
図版184　SC5 出土遺物 ……192
図版185　SC6 遺構状況 ……194
図版186　SC6 出土遺物 ……194
図版187　SC7 遺構状況 ……195
図版188　SC7 出土遺物 ……197
図版189　SC8 遺構状況 ……198
図版190　SC8 出土遺物 その1 ……201
図版191　SC8 出土遺物 その2 ……202
図版192　SC9 遺構状況 ……204
図版193　SC9 出土遺物 ……204
図版194　SC13 遺構状況 ……204
図版195　SC13 出土遺物 ……206
図版196　SC14 遺構状況 ……207
図版197　SC14 出土遺物 ……207
図版198　SC15 遺構状況 ……208
図版199　SC15 出土遺物 ……211
図版200　SC1 遺構状況 ……212
図版201　SC1 出土遺物 ……214
図版202　SC3 遺構状況 ……215
図版203　SC3 出土遺物 ……216
図版204　SC4 遺構状況 ……219
図版205　SC4 出土遺物 ……220
図版206　SC5 遺構状況 ……222
図版207　SC5 出土遺物 ……223
図版208　SC10 遺構状況 ……224
図版209　SC10 出土遺物 ……225
図版210　SC11 遺構状況 ……226
図版211　SC14 遺構状況 ……227
図版212　SC14 出土遺物 ……230
図版213　SC15 遺構状況 ……231
図版214　SC15 出土遺物 その1 ……235
図版215　SC15 出土遺物 その2 ……236
図版216　SC16 遺構状況 ……237
図版217　SC16 出土遺物 ……238
図版218　SC17 遺構状況 ……239
図版219　SC17 出土遺物 ……241
図版220　SC18 遺構状況 ……242
図版221　SC18 出土遺物 ……244
図版222　SD2 遺構状況 ……246
図版223　SD2 出土遺物 ……246
図版224　SD3 遺構状況 ……247
図版225　SD3 出土遺物 ……248
図版226　SK1 遺構状況 ……249
図版227　SK1 出土遺物 ……249
図版228　SK9 遺構状況 ……250
図版229　SK9 出土遺物 ……252
図版230　SK18 遺構状況 ……253
図版231　SK18 出土遺物 ……253
図版232　SL3 遺構状況 ……254
図版233　SL3 出土遺物 ……254
図版234　SL6 遺構状況 ……255
図版235　SL6 出土遺物 ……255
図版236　SP143 出土遺物 ……256
図版237　SP484 出土遺物 ……256
図版238　SP531 出土遺物 ……257
図版239　SP531 遺構状況 ……257
図版240　SP982 遺構状況 ……257
図版241　SP982 出土遺物 ……257
図版242　SP987 遺構状況 ……258
図版243　SP987 出土遺物 ……258
図版244　SP23 出土遺物 ……258
図版245　SP49 出土遺物 ……259
図版246　SP283 出土遺物 ……259
図版247　SU1 遺構状況 ……260
図版248　SU1 出土遺物 ……260
図版249　SU2 遺構状況 ……261
図版250　SU2 出土遺物 ……261
図版251　SU3 遺構状況 ……262
図版252　SU3 出土遺物 ……262
図版253　SU4 遺構状況 ……263
図版254　SU4 出土遺物 ……263
図版255　SU5 遺構状況 ……264
図版256　SU5 出土遺物 ……264
図版257　SU6～SU9 遺構状況 ……265
図版258　SU6 出土遺物 ……266
図版259　SU7 出土遺物 ……268
図版260　SU8 遺構状況 ……268
図版261　SU8 出土遺物 ……269
図版262　SU9 出土遺物 ……269
図版263　SU10 遺構状況 ……270
図版264　SU10 出土遺物 ……270
図版265　SU12 遺構状況 ……271
図版266　SU12 出土遺物 ……273
図版267　SU13 遺構状況 ……274
図版268　SU13 出土遺物 ……276
図版269　SU14 遺構状況 ……277
図版270　SU14 出土遺物 ……277
図版271　SU1 遺構状況 ……278
図版272　SU1 出土遺物 ……279
図版273　SU2 遺構状況 ……280
図版274　SU2 出土遺物 ……281
図版275　SZ1 遺構状況 ……282
図版276　SZ1 出土遺物 ……284
図版277　畦畔4 遺構状況……285
図版278　畦畔4 出土遺物……286
図版279　TAK201403・TAK201404調査区 包含層出土遺物 ……289
図版280　TAK201405調査区 包含層出土遺物 その1 ……294
図版281　TAK201405調査区 包含層出土遺物 その2 ……295
図版282　TAK201406調査区 包含層出土遺物 ……299
図版283　TAK201407調査区 包含層出土遺物 その1 ……302
図版284　TAK201407調査区 包含層出土遺物 その2・TAK201208調査区 包含層出土遺物 …303

第1図　TAK201403調査区弥生時代遺構配置図(S=1/600)

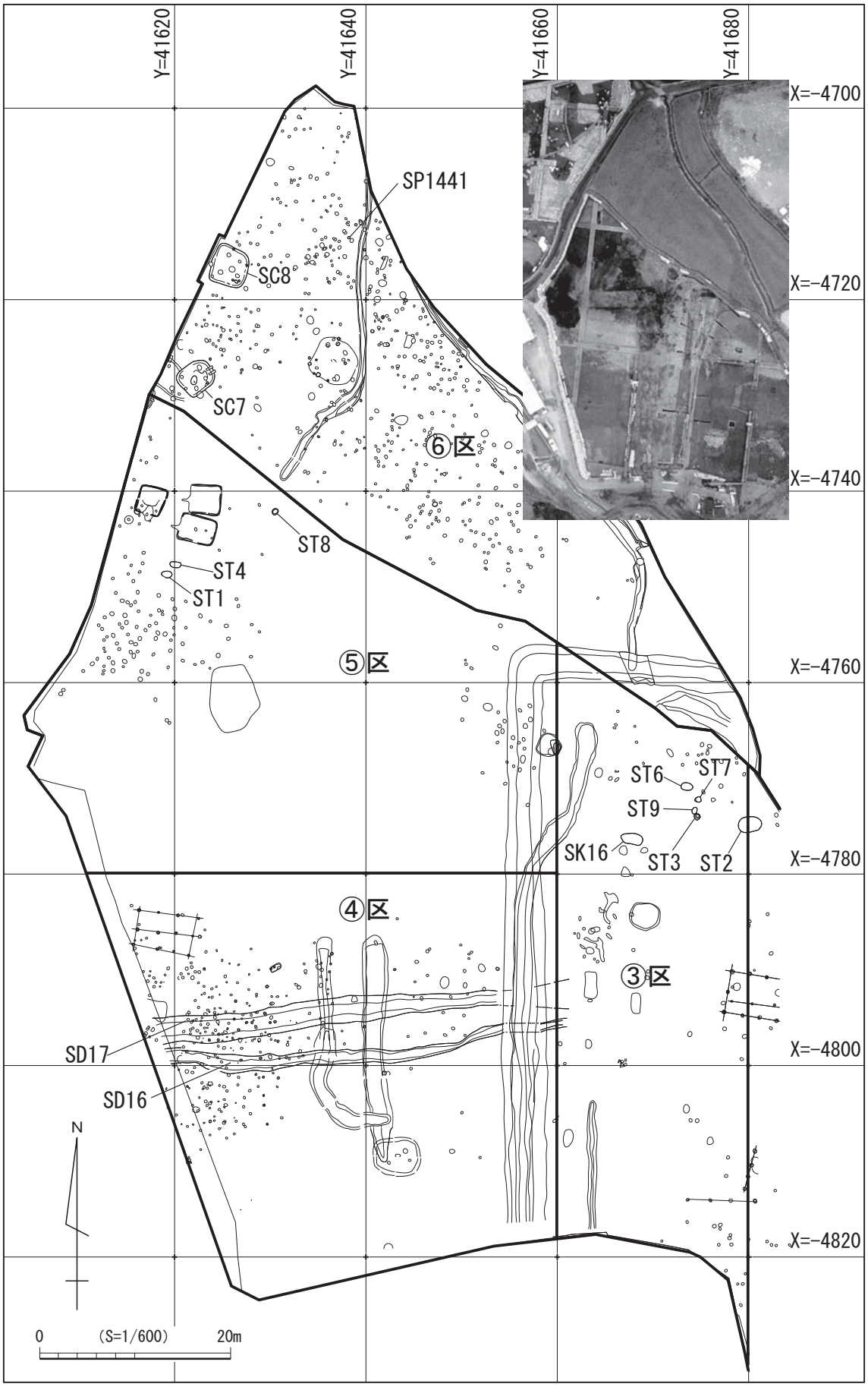


第2図　TAK201404調査区弥生時代遺構配置図(S=1/600)

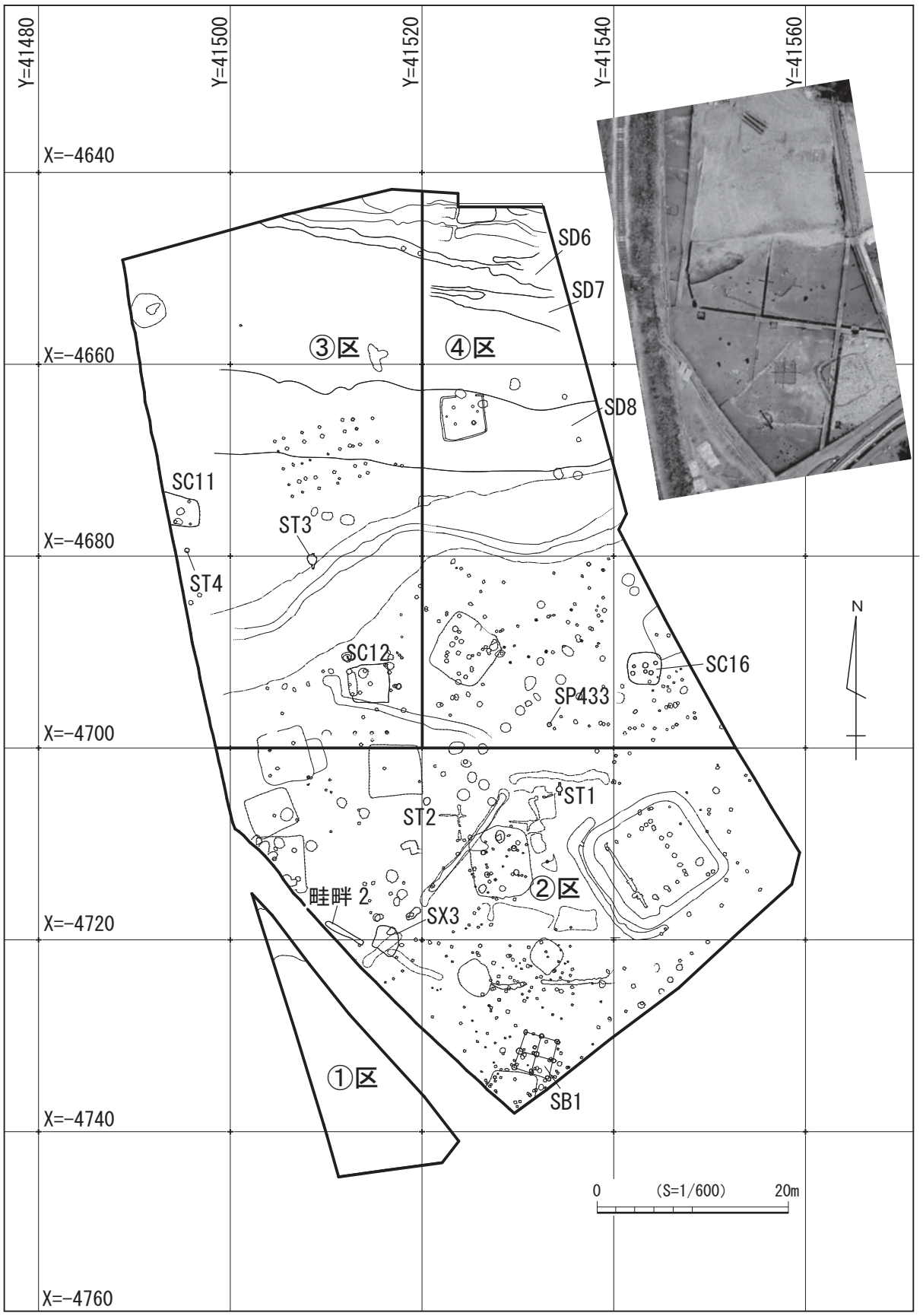


第3図　TAK201404調査区B8北・南区弥生時代遺構配置図(S=1/600)

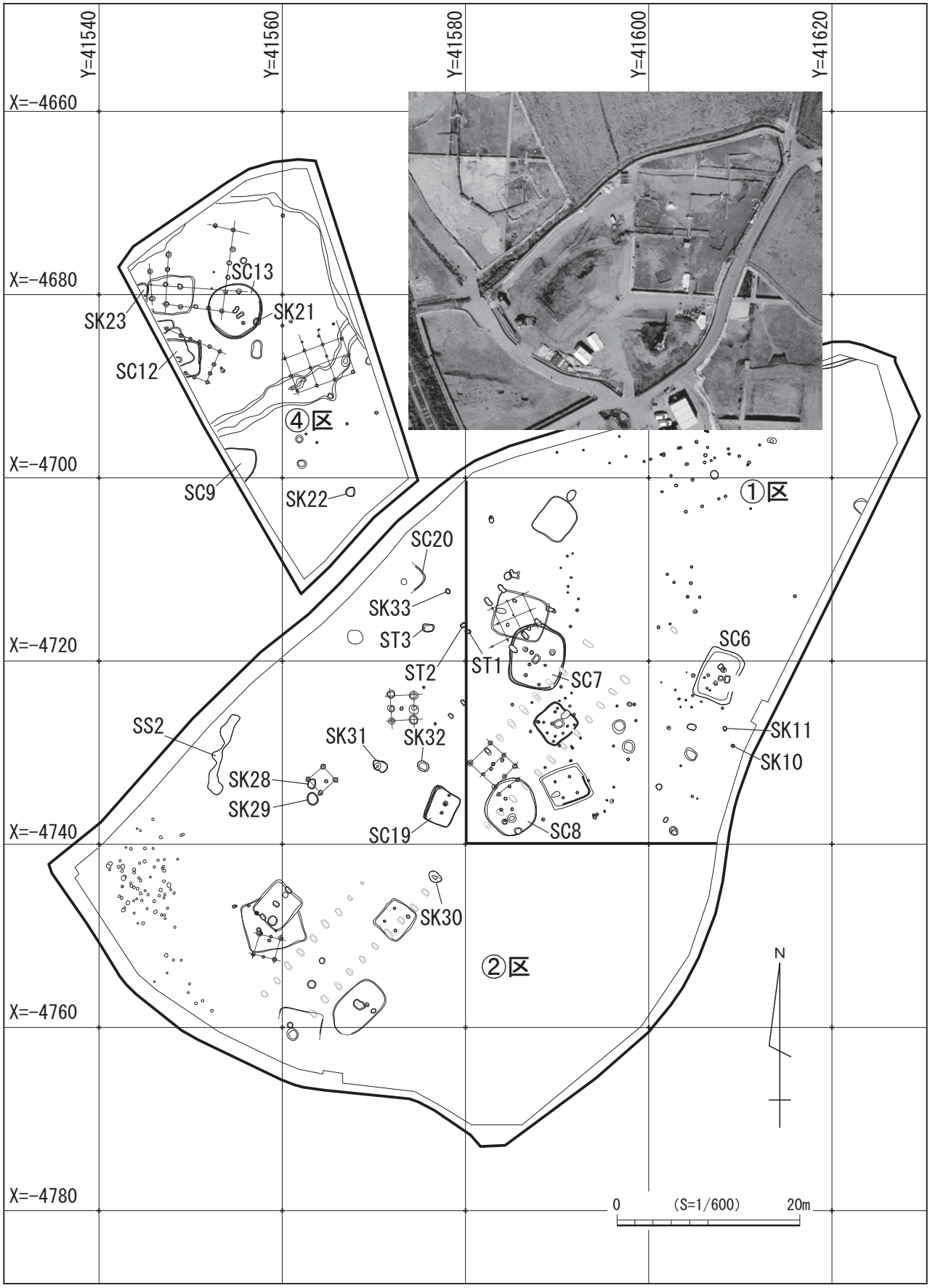
第4図　TAK201405調査区①・②区弥生時代遺構配置図(S=1/600)



第5図　TAK201405調査区③・④・⑤・⑥区弥生時代遺構配置図(S=1/600)



第6図　TAK201406①②③④調査区弥生時代遺構配置図(S=1/600)



第7図　TAK201407調査区①・②・④区弥生時代遺構配置図(S=1/600)

3　弥生時代

平成26年度に調査したTAK201403～07調査区は5工区で発掘調査面積は35.323㎡を実施した。弥生時代の遺構が確認されたのは5つの調査区全てである。遺構内容は竪穴建物(SC)、掘立柱建物(SB)、箱式石棺墓・甕棺墓・単棺墓(ST)、土坑(SK)、集石(SS)、溝(SD)、不明遺構(SX)を確認した。特に墓と竪穴建物との関係、生産遺構との関係は集落復元の極めて重要な史料となる。以下TAK201403調査区から順に個別遺構、遺物の説明を行い、弥生時代の地域社会を考えてみたい。尚竪穴建物跡の遺物の取り上げについては一括取り上げを行っている発掘担当者と覆土、床面直上に分けて取り上げている発掘担当者がいた。このため一括取り上げの場合、図面、写真等を精査し、床面直上の土器を選択し時期的位置付けを行った。

(1)掘立柱建物(SB)

①TAK201404　B6西区SB3(掘立柱建物)(第8・9図　図版1・2　表1)

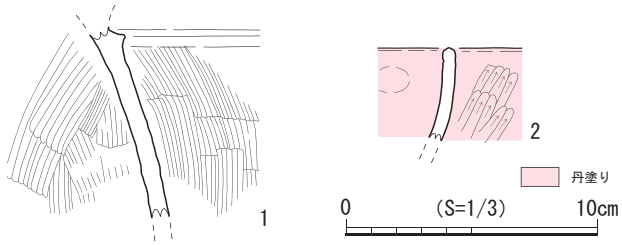
SB3はB6西区9070グリッドに位置する。1間×1間で桁行3.8m、梁行2.9mを測りほぼ南北方向に沿って構築された建物である。柱穴の形状は円形及び楕円で直径0.66～1.10m、深さ0.25～0.35mを測る。柱穴内には拳大から人頭大の円礫が少量出土した。柱材の固定に使用したものであろうか。またSP1、SP2の中央北側にSP505が位置する。直径55cm、深さ約60cmでSB3に登る階段の設置痕の可能性が高い。出土遺物はSP3、SP4から甕胴部片、椀片等が出土した。**1**は甕の頸部片で三角凸帯を有す。内外面にハケメ調整を施す。**2**は椀？の口縁部片で端部は丸い。外面はケズリを施し、内面は指圧痕が残る。

SB3-SP3 断面（南から）

SB3-SP4 断面（北から）

完掘状況（東から）

図版1　SB3遺構状況

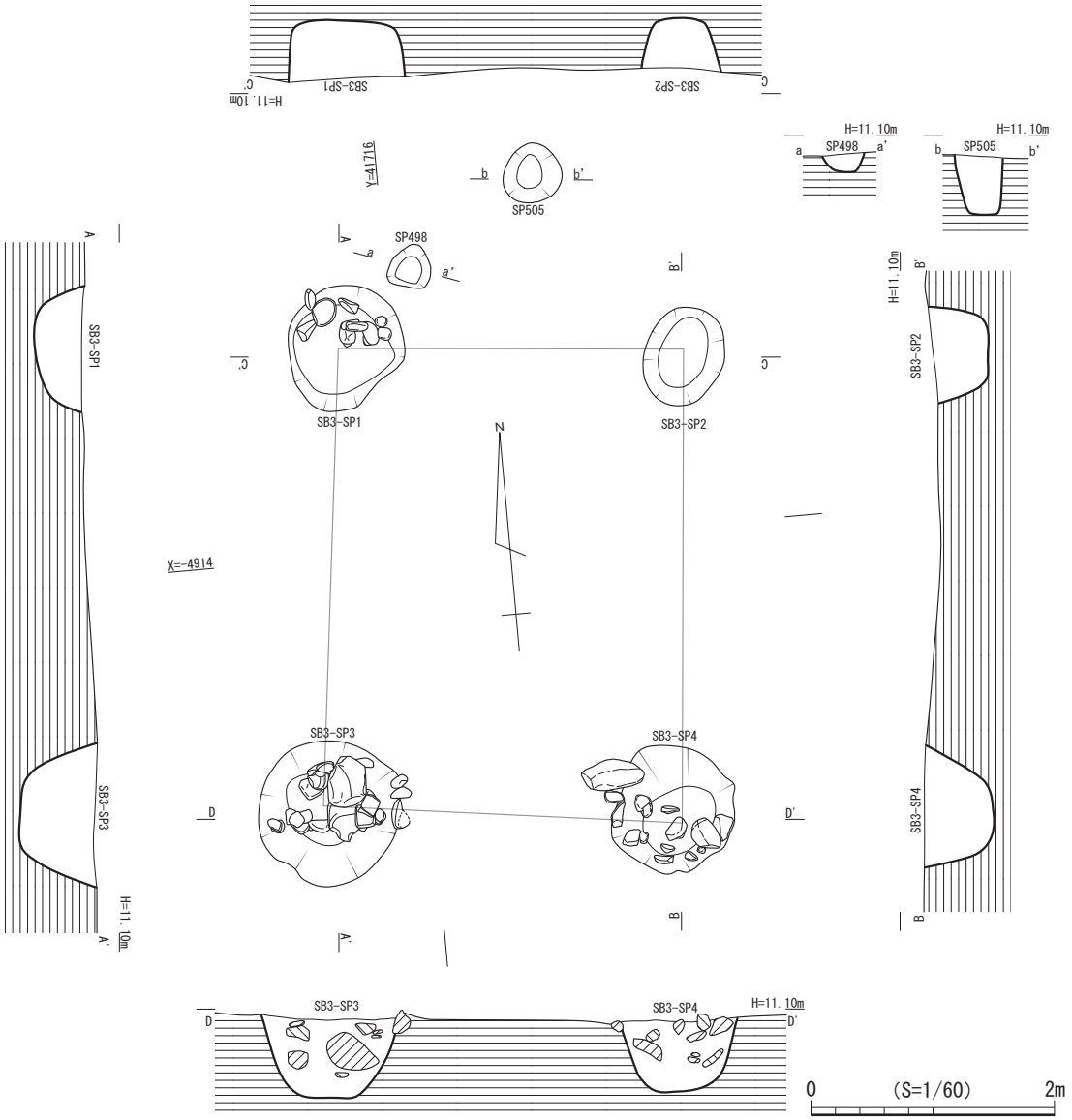


第8図　SB3出土遺物実測図(S=1/3)

図版2　SB3出土遺物

第1表　SB3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考口径
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
1	甕	頸部	—	残存(7.4)	—	縦方向のハケメ	斜め方向のハケメ	10YR4/3にぶい黄褐	10YR7/3にぶい黄橙	良	長石	一条の凸帯あり
2	椀？	口縁部	—	残存(3.7)	—	右斜めケズリナデ	ナデ指オサエ	5YR6/6橙	10YR7/3にぶい橙	良	長石	丹塗りあり

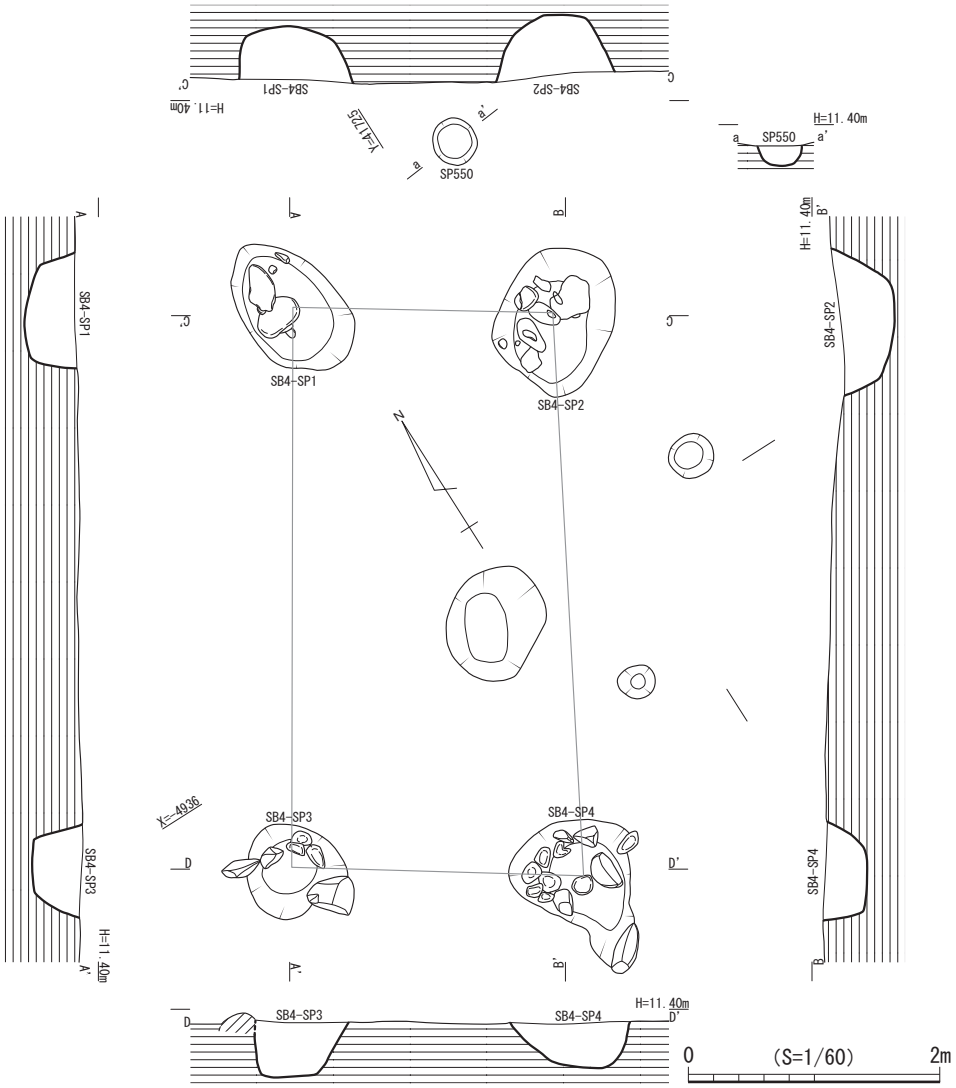


SB3-SP1: 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト しまりやや強い 粘性やや強い
拳大の円礫を 30% と人頭大の円礫をわずかに含む
SB3-SP2: 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト しまりやや強い 粘性やや強い
SB3-SP3: 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト しまりやや強い 粘性やや強い
拳大の円礫を 30% と人頭大の円礫を 20% ずつ含む 小礫も少々含む
弥生時代の土器片出土
SB3-SP4: 黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト しまりやや強い 粘性やや強い
拳大の円礫と人頭大の円礫を 60% 程度含む
SP498・SP505: 黒褐色 (10YR2/3) シルト質土 しまりやや強い 粘性やや強い

第9図　SB3平・断面図(S=1/60)

② TAK201404　B6西区 SB4(掘立柱建物)(第10図　図版3)

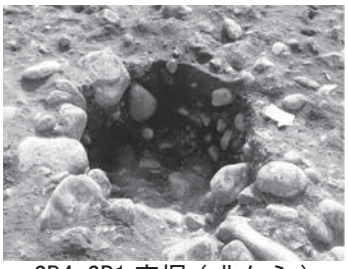
SB4は B6西区9272グリッドに位置する。1間×1間で桁行4.4m、梁行2.1m を測る。柱穴の平面は円形及び楕円形である。直径は0.7～1.2m、深さ0.36～0.46m を測る。柱穴内には拳大から人頭大の円礫が散発的に出土した。SP1と SP2のやや北東中央に SP505が位置する。SP505は直径0.4m、深さ約0.2m 程である。この柱穴は SB4建物に対しての距離と方向から考えて、建物に出入りする階段の設置痕の可能性が考えられる。遺物の出土はなかった。



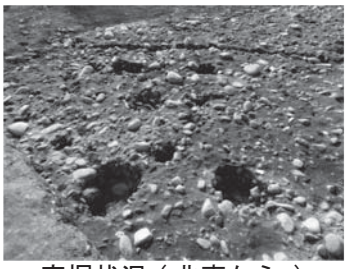
SB4-SP1: 黒褐色（10YR2/2）砂質シルト しまりやや強い 粘性やや強い
人頭大の円礫を 10% と小礫を 30% 含む
SB4-SP2: 黒褐色（10YR2/2）砂質シルト しまりやや強い 粘性やや強い
人頭大の円礫を 10% と小礫を 30% 含む
（SB4 のほかのピットよりも少し粒が粗い）
SB4-SP3: 黒褐色（10YR2/2）砂質シルト しまりやや強い 粘性やや強い
拳大の円礫を 20% と小礫を 10% 含む
SB4-SP4: 黒褐色（10YR2/2）砂質シルト しまりやや強い 粘性やや強い
拳大の円礫を 30% と人頭大の円礫を 10% 含む
SP550：黒褐色（10YR2/3）シルト質土 しまりやや強い 粘性やや強い
小円礫を 40% 含む

第10図　SB4平・断面図(S=1/60)

SB4-SP2 断面（南から）



SB4-SP1 完掘（北から）



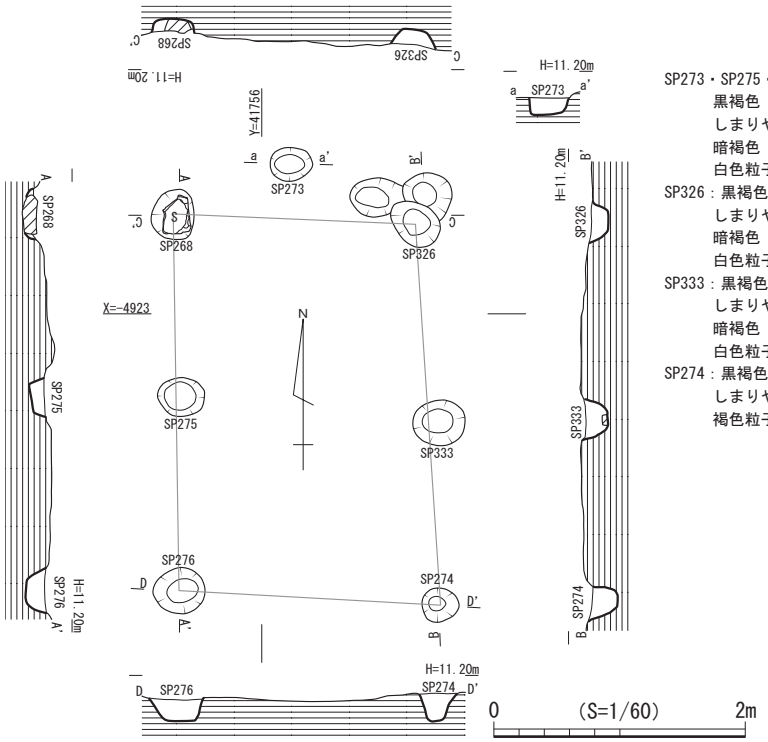
完掘状況（北東から）

図版3　SB4遺構状況

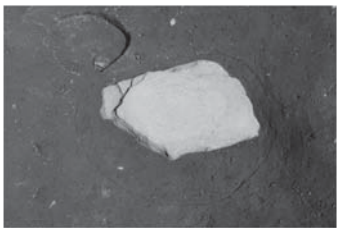
③ TAK201404　B1区 SB5(掘立柱建物)(第11図　図版4)

SB5は B1区9274グリッドに位置する、桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。桁行方向がほぼ南北方向に構築されている。桁行長は3.0～3.08m で梁行長は1.96～2.04m である。柱穴は円形及び楕円形で規模は長軸0.30～0.40m、深さ0.12～0.30m を測る。SP268、SP333は礎石を柱穴底部に配置する。

SP268とSP326の中央北側にSP273が位置している。直径0.30m、深さ0.18mのこの柱穴はSB5の出入り口である階段施設が設置された痕である可能性がある。



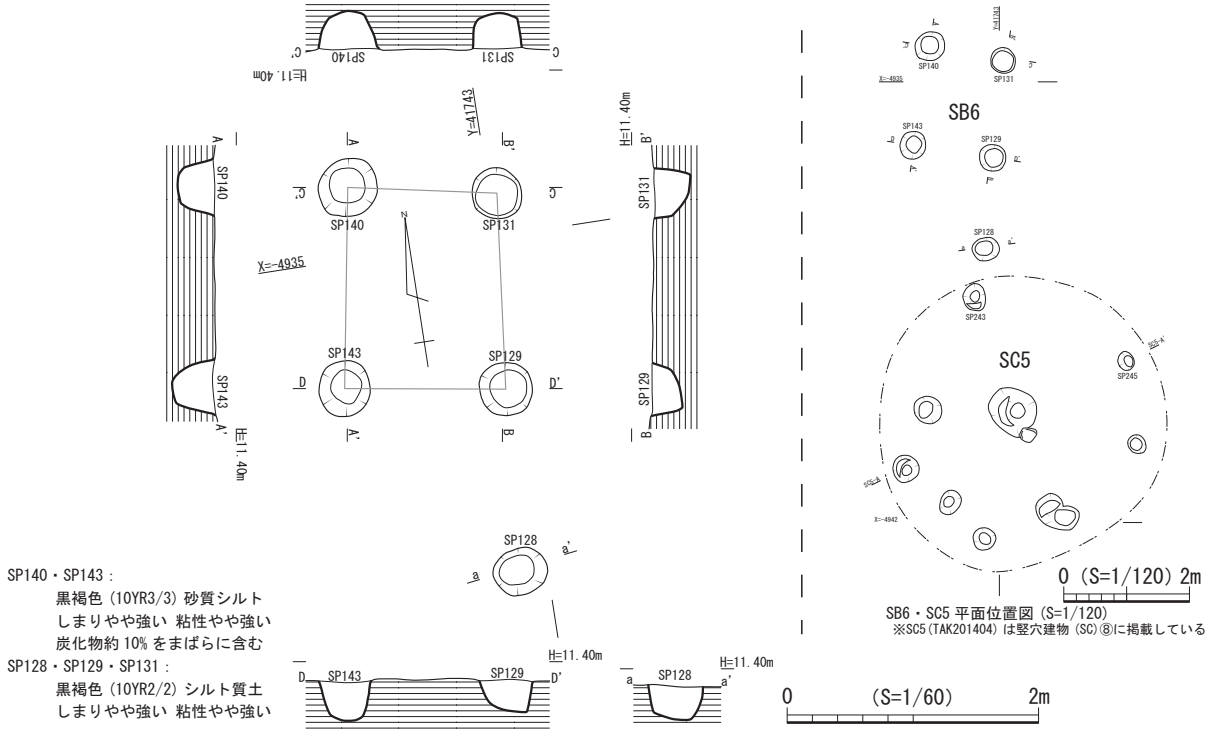
第11図　SB5平・断面図(S=1/60)



石皿出土状況（西から）
図版4　SB5遺構状況

④ TAK201404　B6東区 SB6(掘立柱建物)(第12図)

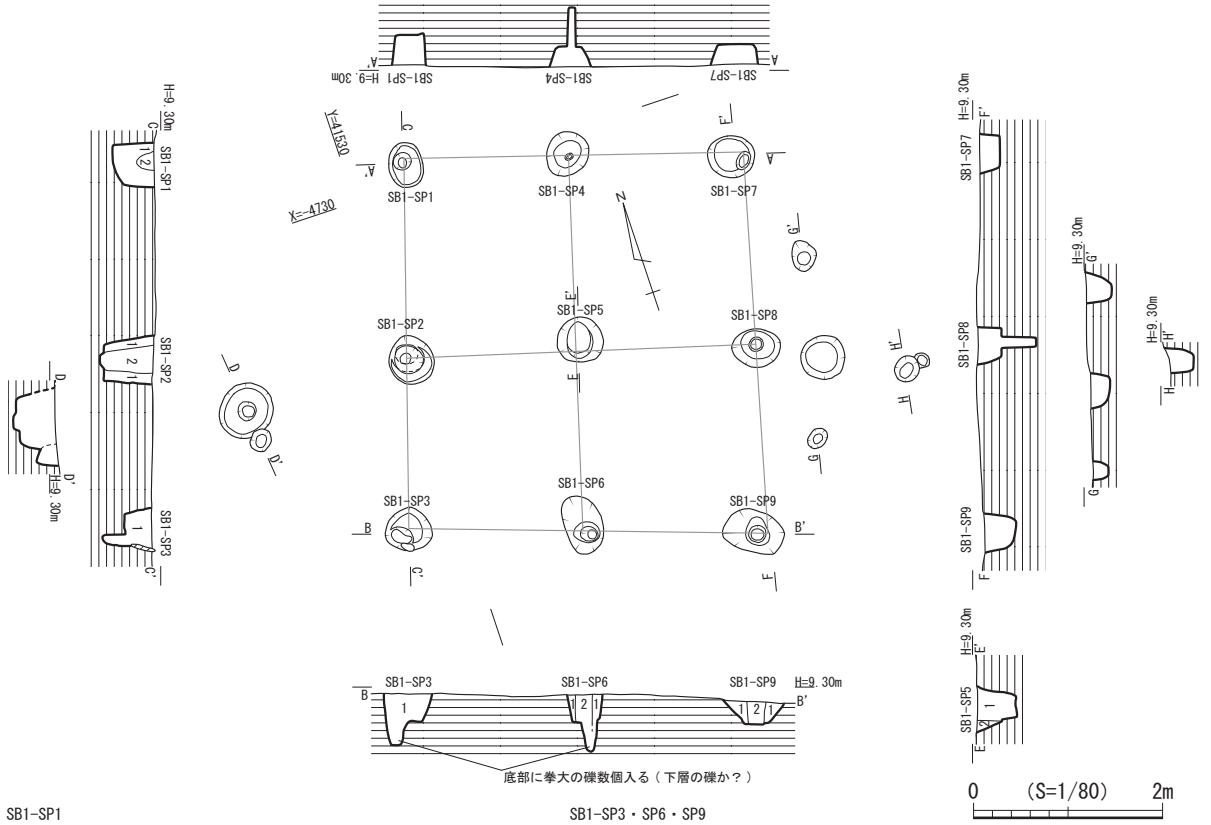
SB6はB6東区9274グリッドに位置する。規模は桁行1間1.56～1.60m、梁行1間1.20～1.28mの小形の掘立柱建物である。柱穴は0.40～0.46m、深さ0.20～0.30mを測る円形である。建て方は桁行がほぼ南北方向で構築している。またSC5(竪穴建物跡)との位置関係が興味深い。構築方向が南北方向でSC5との距離は1mである。



第12図　SB6 平・断面図(S=1/60)及びSB6・SC5 平面位置図(S=1/120)

⑤ TAK201406　2区 SB1(掘立柱建物)(第13・14図　図版5・6　表2)

SB1は2区7252グリッドに位置する。桁行長3.9～4.0m、梁行長3.5～3.8m、柱穴の直径は0.4～0.7m、深さ0.24～0.50m を測る。平面プランは2間×2間のほぼ方形の掘立柱建物である。柱穴間隔は桁行2.0m、梁行1.8m 程である。建物は北西から南東方向に構築されており、出入り口の階段施設と思われる柱穴3個が南東側桁行と並行に構築されている。遺物は甕、壺の小片が柱穴の覆土から出土した。**3**は小形の広口壺の口縁部である。口縁部はやや外反し端部は細く丸い。多くの砂粒を含む。



SB1-SP1
1. 黒褐色（10YR2/2）シルト質 しまりなし
　マンガン粒を 1%、赤色粒を 2%、白色粒を 3% 含む
　にじむようににぶい黄褐色土（10YR4/3 シルト質 しまりなし）が 2% 入る
2. 黒褐色（10YR2/3）シルト質 ややしまりあり
　マンガン粒を 2%、黄色粒を 3%、白色粒を 2% 含む
　にぶい黄褐色土（10YR4/3 シルト質 しまりなし）が
　にじむようなブロック状に 15% 入る

SB1-SP2・SP3
1. 暗褐色（10YR3/3）シルト質 ややしまりあり
　SB1-SP6・SP9 と同じ
2. 黒褐色（10YR2/3）シルト質 しまりなし
　SB1-SP6・SP9 と同じ

SB1-SP3・SP6・SP9
1. 暗褐色（10YR3/3）シルト質 ややしまりあり
　マンガンを 2%、白色粒を 1%、黄色粒を 1% 含む
2. 黒褐色（10YR2/3）シルト質　しまりなし
　直径 1mm 程度の炭化物を 1% 含む
　全体的ににぶい黄褐色土（10YR4/3 シルト質 しまりなし）が
　にじむように 10% 広がる　とりわけ境に強く入る

SB1-SP5
1. 暗褐色（10YR3/2）砂質
　直径 5mm 程度の炭化物を 2%、1 ～ 3cm 程度の礫を 5% 含む
　5mm ～ 1cm 程度の太さで線状になったにぶい黄褐色土（10YR5/3）を 10% 含む
2. 褐色（10YR4/6）砂質
　直径 1 ～ 4cm 程度の礫を 5% 含む
　1 と同様の 5mm ～ 1cm 程度の太さで線状になったにぶい黄褐色土（10YR5/3）を 5% 含む

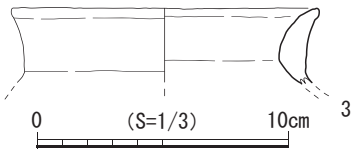
第13図　SB1平・断面図(S=1/80)

検出状況（北から）

SB1-SP5 断面（北東から）

完掘状況（北から）

図版5　SB1遺構状況



第14図　SB1出土遺物実測図(S=1/3)

図版6　SB1出土遺物

第2表　SB1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
3	広口壺	口縁部	(12.3)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、褐色粒子	

(2)竪穴建物(SC)

①TAK201403　3区 SC1(竪穴建物)(第15・16図　図版7・8　表3)

SC1は3区1270グリッドに位置する竪穴建物である。長軸4.0m+、短軸2.0m+程しか残存していない。深さは10cm 程で後世のカク乱でかなり削平されている。平面プランは1辺しか残存していないが楕円形を呈するものと思われる。壁の立ち上がりは10～15cm 程残存している。屋内施設は長軸1.70m、短軸1.30m、深さ10cm を測る土坑を検出した。土坑内には礫が集中し焼土、炭化物等は認められなかった。周壁溝が北側と南側で確認され幅15～24cm、深さ6～10cm を測る。柱穴は直径30～50cm、深さ30cm 程を測る円形、楕円形を呈する。竪穴建物と関連する主柱穴は判然としない。出土遺物は床面直上及び覆土からの出土である。壺口縁部～胴部片は床面直上で、広口壺口縁部～胴部片、甕底部片は覆土からの出土である。以下遺物の説明を記す。**4**は壺で口縁部～胴部の破片である。口縁部はやや外傾し緩やかなくの字口縁を呈する。口縁部の器壁は厚い。内外面は斜め、縦方向のハケメ調整を施す。**5**は広口壺の口縁部～胴部片である。口縁部は短く外傾し端部は丸い。内外面は多方向にハケメ調整を施す。**6**は壺の底部片で完全な丸底ではない。外面は粗いハケメ調整を施し、内面は粗いハケメ、ケズリ痕が残る。時期は弥生時代終末から古墳時代初め頃であろう。

遺構検出状況（北から）

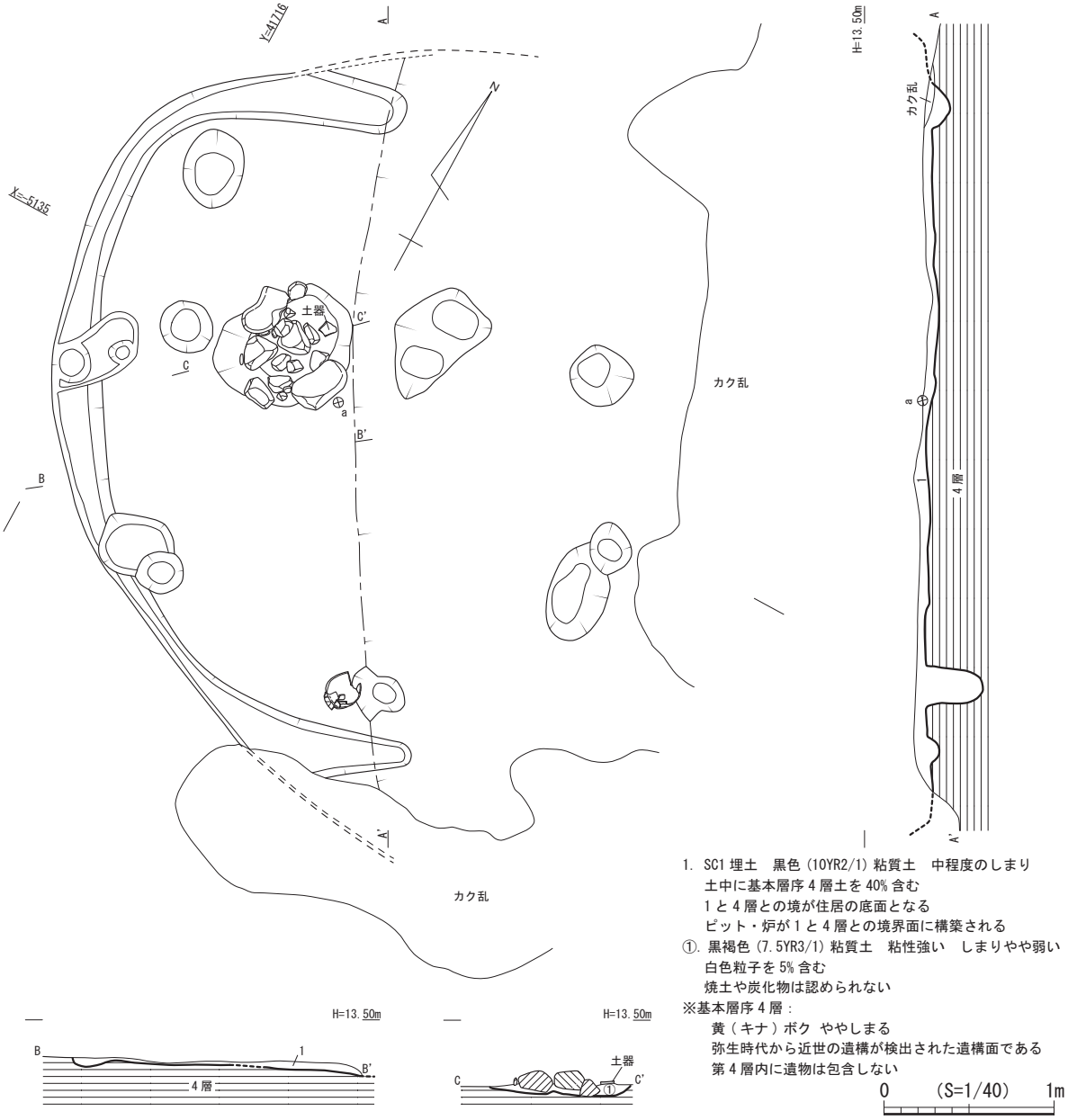
遺物出土状況（西から）

全景（西から）

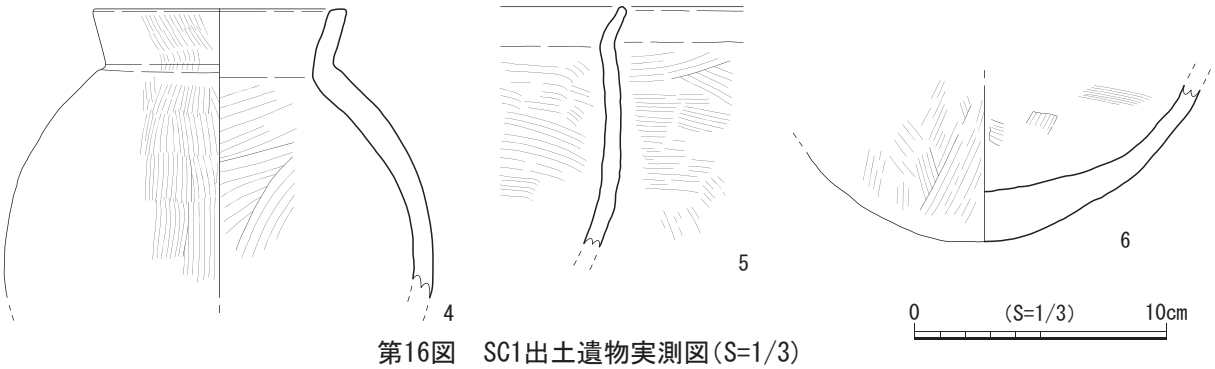
土坑検出状況（東から）

完掘状況（東から）

図版7　SC1遺構状況



第15図　SC1平・断面図(S=1/40)

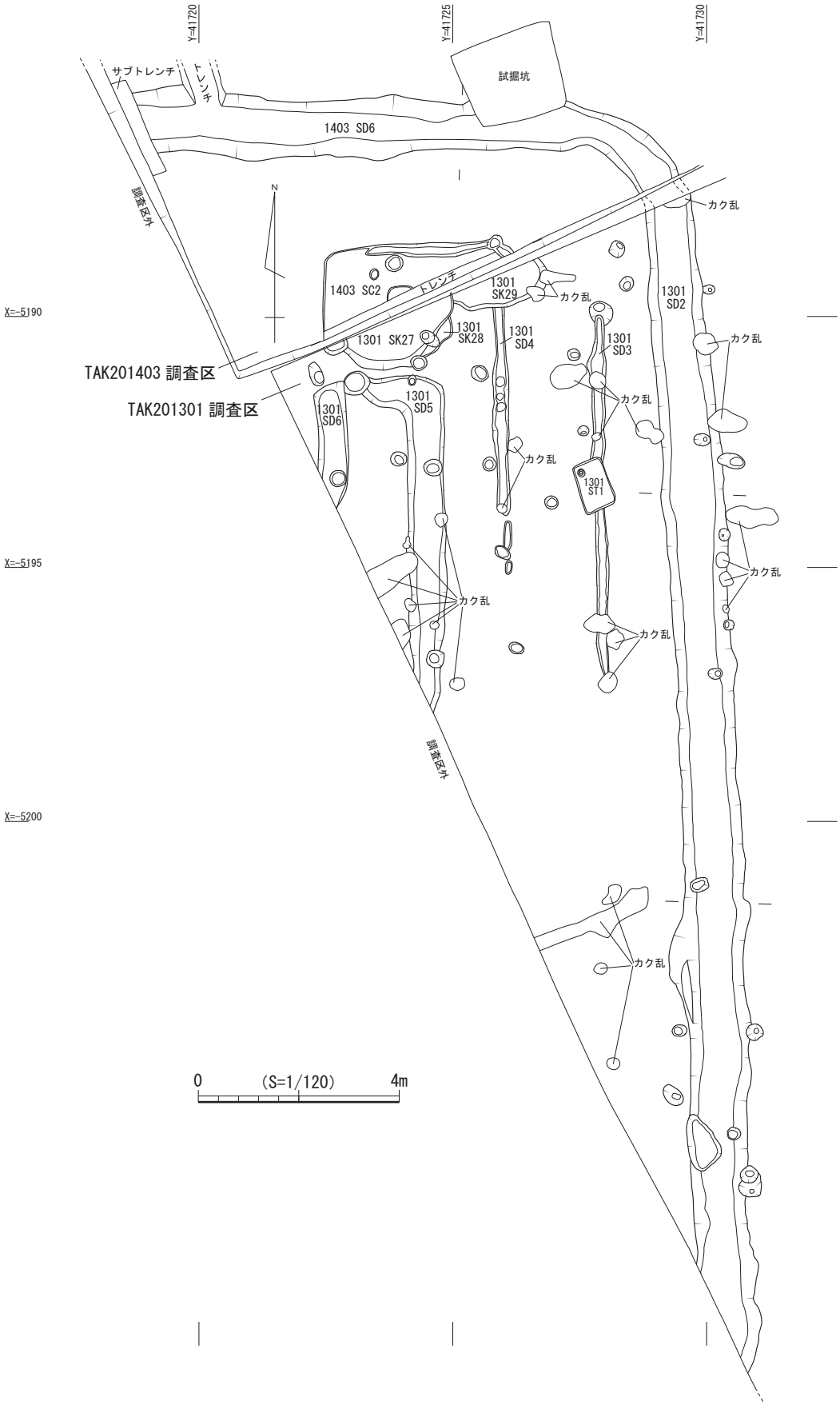


第16図　SC1出土遺物実測図(S=1/3)

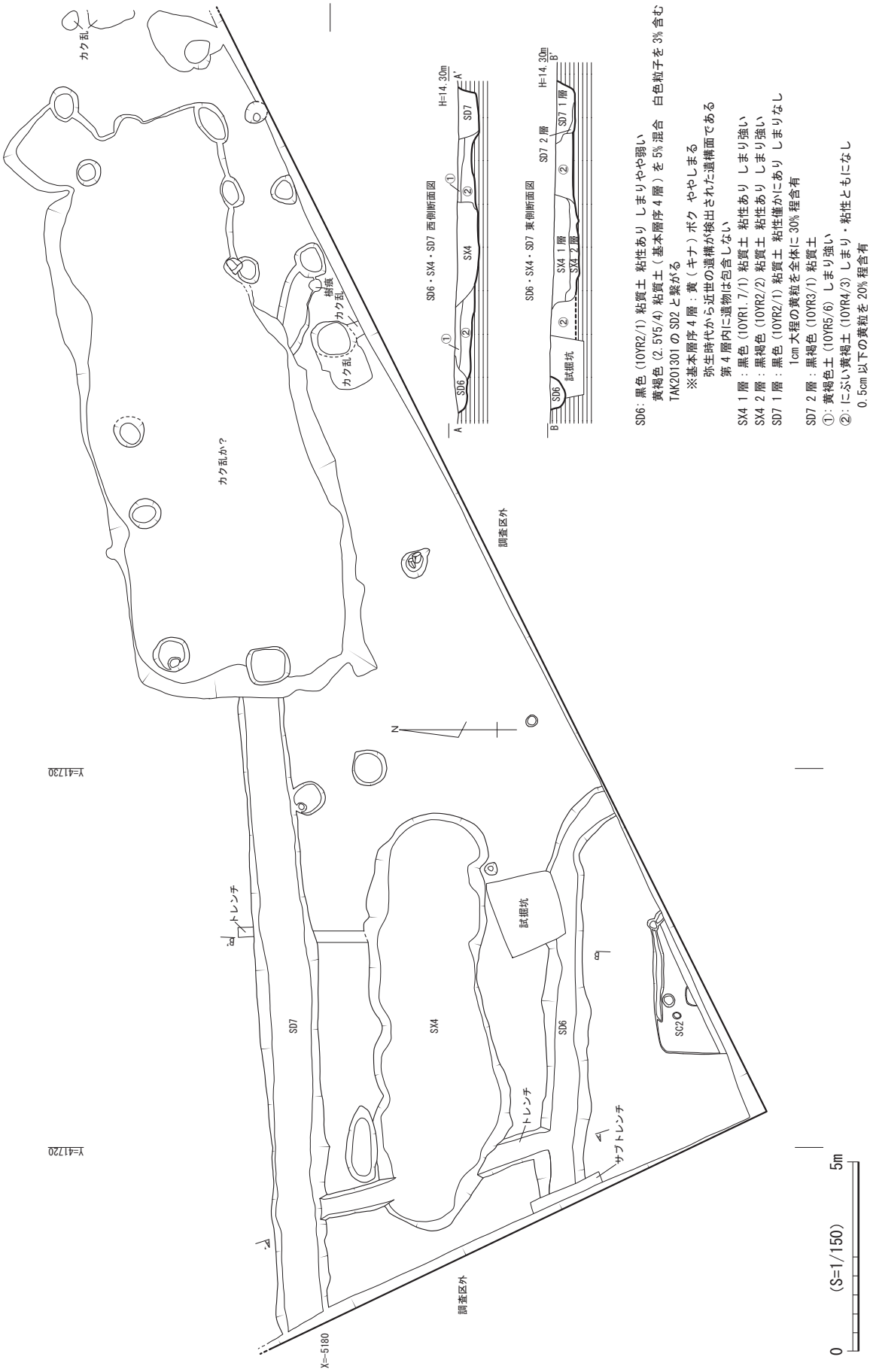
図版8　SC1出土遺物

第3表　SC1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
4	壺	口縁部～胴部	(9.8)	残存(11.4)	—	縦方向のハケメ	斜め、縦方向のハケメ	7.5YR4/4褐	7.5YR4/4褐	良	長石、赤色粒子	全体的に器壁が厚い
5	広口壺	口縁部～胴部	—	残存(9.5)	—	多方向のハケメ	斜め方向のハケメ	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/6浅黄橙	良	石英、長石	粗い作り
6	壺	底部	—	残存(6.2)	—	多方向のハケメ	ハケメケズリ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	良	石英	完全な丸底ではない　粗いハケメを全体的に施す



第17図　TAK201403調査区SD6・TAK201301調査区SD2接合図(S=1/120)

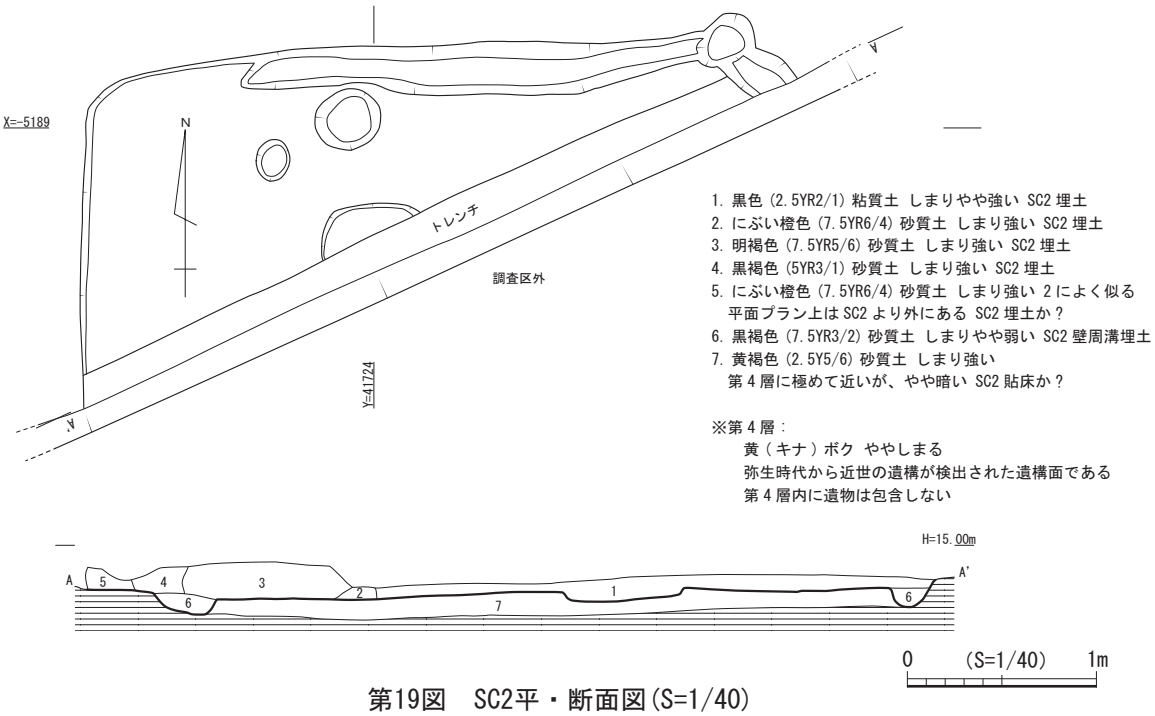


第18図　TAK201403調査区SC2・SD6・SD7・SX4周辺図(S=1/150)

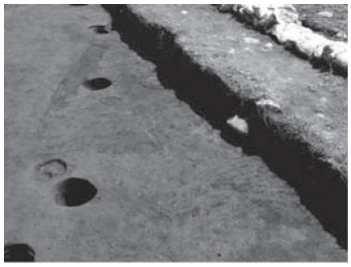
② TAK201403　3区 SC2(竪穴建物)(第19図　図版9)

SC2は3区1872グリッドに位置する竪穴建物で2／3は調査区外である。平面プランは長軸(東西)3.8m+、短軸(南北)1.6m+で2辺の残存から方形又は長方形と思われる。屋内施設は北、東側に幅12～22cm、深さ10cm 程の周壁溝を構築している。柱穴、土坑を検出したが竪穴建物と関連する主柱穴は判然としない。遺構はかなり削平を受けており残存高は6～10cm 程である。遺物は出土しなかった。

この竪穴建物の北側1.8m に SD6が位置する。幅0.7～1.1m、深さ0.4m でほぼ東西に構築され東端が南に湾曲し、TAK201301調査区の SD2に繋がる溝で SC2を取り囲む様相を呈する。SD2から弥生時代後期の器台、壺胴部片、その他小片が出土している。しかしながら竪穴建物と溝の関係は大部分が調査区外に位置するため全容が判然としないが、構築時期が同時代の可能性も考えられる。この事から SC2は弥生時代の遺構に入れることにする。

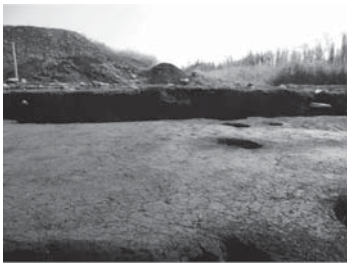


第19図　SC2平・断面図(S=1/40)



検出状況(西から)

完掘状況 (西から)



断面(北から)

図版9　SC2遺構状況

③ TAK201403　3区 SC3(竪穴建物)(第20・21図　図版10・11　表4・5)

SC3は3区1470グリッドに位置する竪穴建物である。平面プランの一部はSZ1(円墳の周溝)から切られている。規模は長軸(東西)6.48m、短軸(南北)5.28m+の長方形の平面プランで、上面の削平は著しく残高4～10cm程である。遺構中央に0.7×0.8mの規模で焼土、炭を含む炉跡を確認した。また硬化面が南側に0.7m、東西に1.1mに渡り確認できた。周壁溝は南、北東側、西側で確認でき幅0.2m、深さ14cm程である。主柱穴は炉を囲むように6本が考えられる。幅0.4m、深さ0.4～0.5m程である。また周壁溝の中及び内側で直径5～8cm程の小柱痕を検出した。補助材の痕跡であろうか。出土遺物は床面直上で器台等が出土した。**7**は二重口縁壺の口縁部片である。口縁端部は凹状で内面は僅かに稜を成す。器壁は厚く、内外面は細かなハケ目調整を施している。**8**は小形の丸底壺(坩)の口縁部～胴部片である。口縁部は直線的に立ち上がり僅かに外傾する。端部は丸い。佐賀平野周辺の在地の土器か。**9**は器台片である。復元口縁部径は32cmを測る。口縁部は上方向に肥厚し、つまみ上げている。筒部は長方形の透かしを上下に施し、その間に横方向に沈線を施す。縦方向にハケメ調整を施す。口縁部内外面は斜め方向に暗文風のミガキを施す。これらの土器から時期は惣座2式から夕ヶ里式古相頃で3世紀初頭～中頃が考えられる。**10**は10cm程の砥石片である。両面が砥石として使用されている。石材は硬質砂岩である。

検出状況(東から)

遺物出土状況

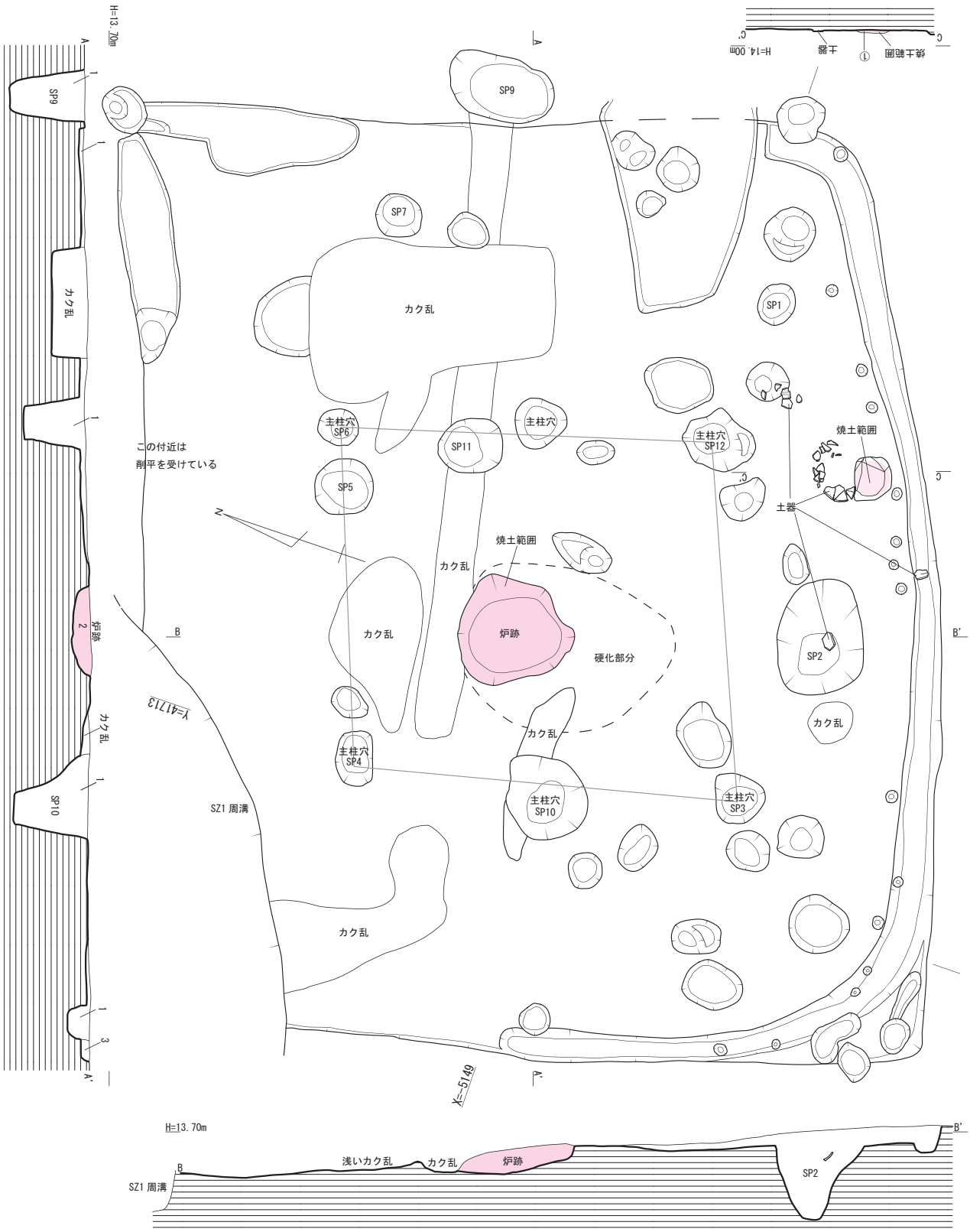
炉・遺物出土状況(南から)

炉完掘状況(北から)

遺物出土状況(すり石)(北から)

完掘状況(北から)

図版10　SC3遺構状況



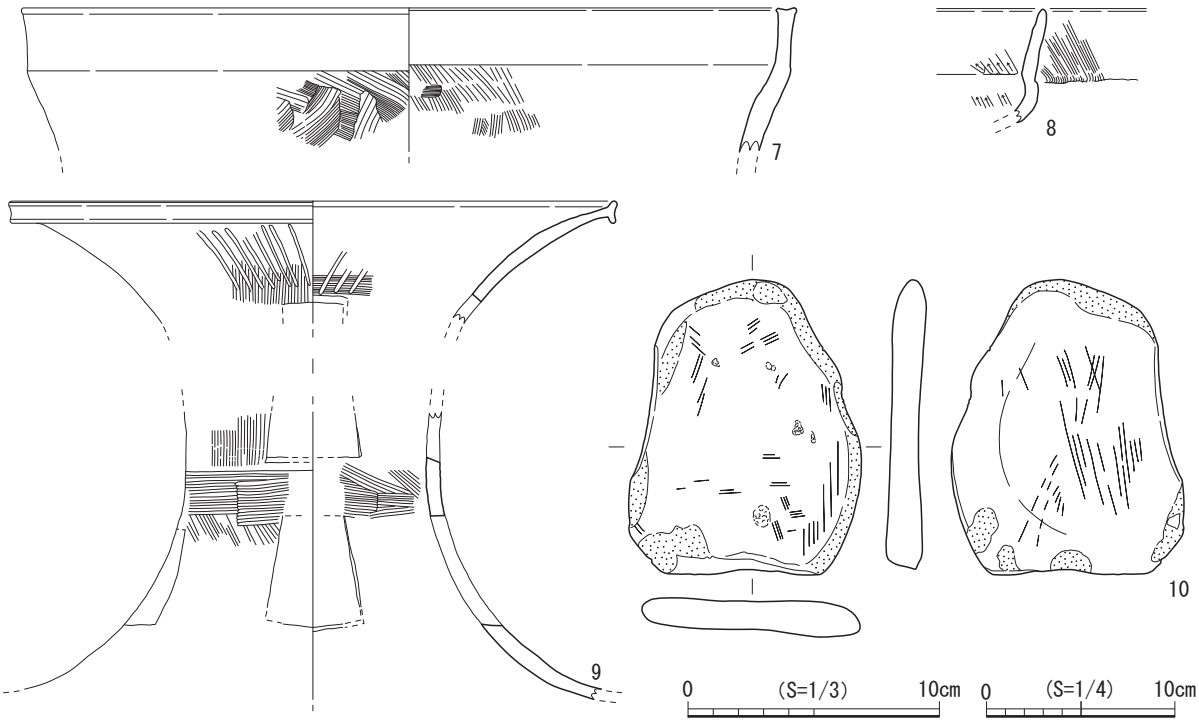
1. 黒褐色（10YR3/1）粘質土 しまりやや強い SC3 の埋土
2. 橙色（2.5YR7/8）焼土 炉跡
土は硬く、赤褐色（2.5YR4/6）粘質土を 30% 程含む
また、炭化物も見つかっている
3. 黒褐色（10YR2/2）粘質土 しまりやや弱い
第 4 層がブロック状に 3% 入る 壁溝の埋土
①黒褐色（10YR3/1）粘質土 しまりやや強い
橙色（2.5YR7/8）の焼土を 40% 含んでいる
くぼみの確認はできなかった

※第 4 層：
黄（キナ）ボク ややしまる
弥生時代から近世の遺構が検出された遺構面である
第 4 層内に遺物は包含しない

0 （S=1/40） 1m

焼土

第20図　SC3平・断面図(S=1/40)



第21図　SC3出土遺物実測図（No.7・9はS=1/4, No.8・10はS=1/3）

図版11　SC3出土遺物

第4表　SC3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
7	壺	口縁部	(41.0)	残存(11.4)	—	多方向ハケメ	多方向ハケメ	10YR7/4にぶい黄橙	5YR7/6橙	良	雲母	二重口縁壺 雲仙市龍王遺跡に類例あり 弥生終末
8	壺(坩)	口縁部～胴部	—	残存(4.5)	—	斜め方向ハケメ	ケズリ後ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	良	結晶片岩、石英	在地の坩形土器 弥生終末
9	器台	口縁部裾部	(32.0)	—	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	7.5YR7/6橙	7.5YR8/4浅黄橙	良	長石、角閃石石英	暗文風のミガキ 暗文は高杯の技術の転用か 脚は径が小さく、上下の透かし間の沈線が条線化しており、形式学的に新しい 冷泉遺跡の一括資料に近い

第5表　SC3出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
10	砥石	硬質砂岩	116.00	92.00	17.00	255.00	

④ TAK201403　3区 SC5(竪穴建物)(第22図　図版12)

SC5は3区1470グリッドに位置しSC7と隣接する。平面プランは長方形を呈し規模は短軸(南北)3.0m、長軸(東西)3.5mで深さは10cm程でかなり削平を受けている。周壁溝が北東側と南西側に僅かに残る。柱穴は20ヶ所確認しているが主柱穴は判断に迷う。また炉は確認できず遺物も覆土から弥生式土器片、古代の土師器片、黒曜石チップが少量出土した。いずれの土器も小細片で遺物実測は不可能である。

⑤ TAK201403　3区 SC7(竪穴建物)(第22図　図版12)

SC7は3区1470グリッドに位置する。SC5と隣接するが切り合いはない。近世の溝及び攪乱により切られたため全体の様相が判然としない。平面プランは長軸3.2m+、短軸1.1m+が残存し、外形が僅かに弧を描いている事から円形か楕円形を呈するものであろう。周壁溝、主柱穴等は判然としない。出土遺物は弥生式土器の甕の胴部片が1点覆土から出土した。胴部片は被熱を受けている。

1. 黒褐色 (10YR2/2) 粘性ややあり
しまり弱い 3層の土に似る
2. 黒褐色 (10YR2/2) 粘性ややあり
しまり弱い 白色・橙色粒を2%ずつ含む
2～3cm大の礫をまばらに含む
3. 暗褐色 (10YR3/3) 粘性あり
しまり弱い 土層3・4の境は不明瞭である
4. 暗褐色 (10YR3/3) 粘性あり
しまり弱い 4層に似る 3よりやや明るい
5. 黄褐色 (10YR5/8)4層の土
部分的に古土層の盛り上がりがある

※基本層序3層：
黒ボク しまりのない土
主として弥生時代から中世の遺物を含む遺物包含層である
基本層序4層：
黄（キナ）ボク ややしまる
弥生時代から近世の遺構が検出された遺構面である
第4層内に遺物は包含しない

第22図　SC5・SC7平・断面図(S=1/40)

SC5 検出状況(北から)

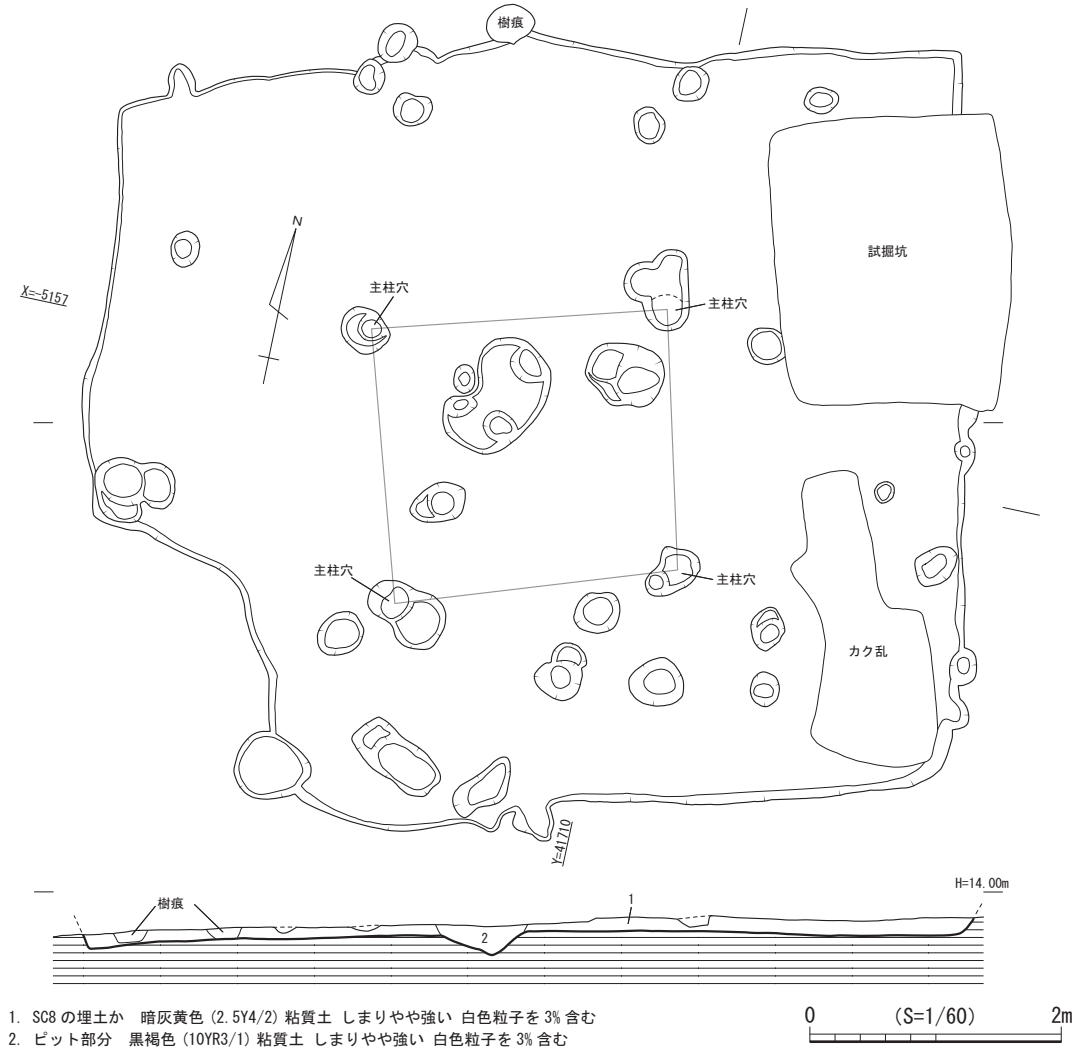
SC5 東西ベルト断面

SC5・SC7完掘状況(北から)
(奥がSC5)

図版12　SC5・SC7遺構状況

⑥ TAK201403　3区 SC8(竪穴建物)(第23図　図版13)

SC8は3区1470グリッドに位置しSC7、9と隣接する。平面プランは方形で西側に長方形の張り出し部を構築している張り出し住居である。規模は短軸(東西)5.8m、張り出し部1.3m。長軸(南北)6.0m、深さ10cmを測る。中央に長軸1.0m×短軸0.5m、深さ10cmを測る土坑が位置する。それを囲むように主柱が4本構築されている。柱穴は直径40cm、深さ18～30cm程である。全体的に削平が著しい。遺物は出土しなかった。張り出し住居の形状から弥生時代後期～終末頃に位置付け出来そうである。



第23図　SC8平・断面図(S=1/60)

検出状況（西から）

完掘状況（東から）

図版13　SC8遺構状況

⑦ TAK201404　B6東区 SC4(竪穴建物)(第24・25図　図版14・15　表6・7・8・9)

SC4はB6東区9274グリッドに位置する。平面プランは円形を呈すると考えられる。長軸6.82m、短軸5.4m+で壁の立ち上がりも判然としない。中央部に1.0m×0.8mの楕円形の土坑があり、その周りには長軸2.6m、短軸1.8mの広がりで焼土面、炭化物の堆積等が確認できた。柱穴は6本で直径20～40cmで、中央土坑を囲むように配置しているが間隔等の規則性はない。竪穴内部の土層堆積は10～12cm程で硬化面も確認できた。壁の立ち上がりは僅かに認識できる程度である。全体的に後世の洪水等による破壊が著しい。以下出土遺物の説明を記す。**11**は小形の甕口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字を呈する。内外面はハケメ調整を施す。**12・13**は台付甕の脚部である。**12**は脚部の開きは小さい。復元底径は8.0cmを測り端部は丸い。**13**は復元底径が9.0cmで、脚部の開きはハの字形で端部は丸い。**14**は壺の口縁部～胴部片である。復元口径は8.0cmを測る。口縁部はやや垂直気味で端部は丸い。外面は斜め方向にハケメ調整を施す。**15**は鉄製品の破片である。厚さはとても薄い。器種は鉄鏃？である。**16**は磨石で大きさは8cm程である。石材は安山岩である。**17**、**18**はガラス小玉で淡青色、紺色である。**18**は床面からの出土である。いずれもカリガラスである。時期は後期前半頃の所産であろうか。

鉄製品出土状況

ガラス小玉出土状況

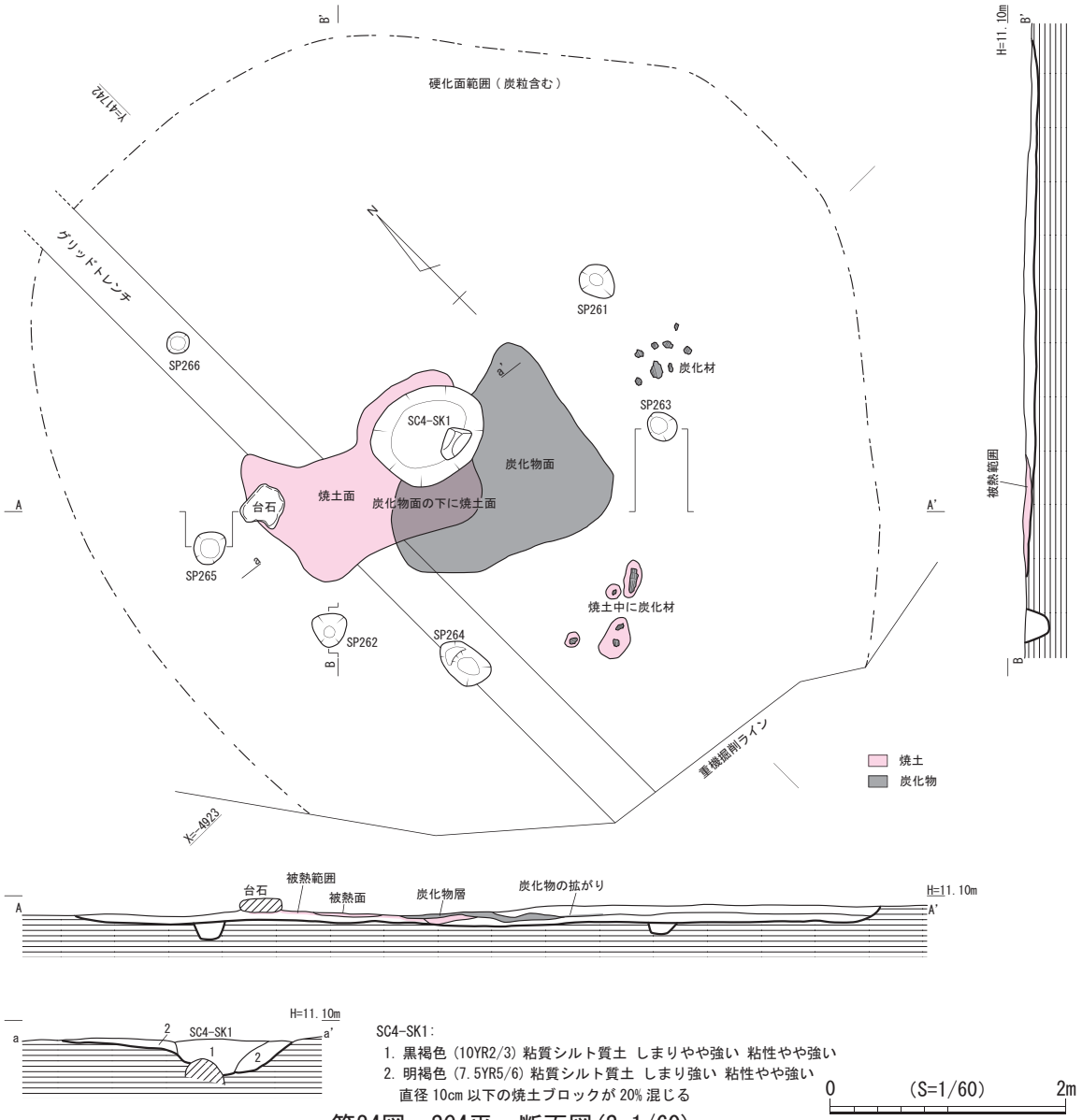
SC4-SK1 検出（西から）

SC4-SK1 断面

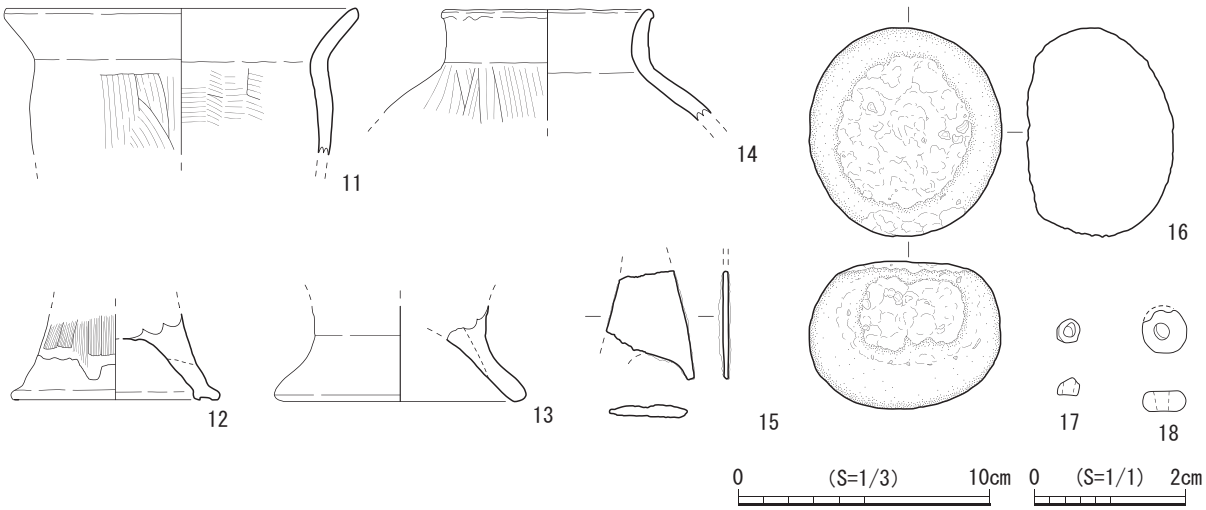
SC4-SK1 完掘（南から）

SC4 全景（東から）

図版14　SC4遺構状況



第24図　SC4平・断面図(S=1/60)



第25図　SC4出土遺物実測図（S=1/3、No.17・18のみS=1/1）

図版15　SC4出土遺物

第6表　SC4出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
11	小形甕	口縁部～胴部	(13.8)	残存(5.7)	—	横方向ハケメ	縦方向ハケメ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	良	角閃石、長石	
12	台付甕	脚部	—	—	(8.0)	縦方向ハケメ	ナデ	7.5YR6/6にぶい橙	7.5YR6/6橙	良	長石、雲母、角閃石	
13	台付甕	脚部	—	—	(9.0)	ナデ	ナデ	5YR6/8橙	7.5YR6/6橙	良	角閃石、長石	
14	壺	口縁部～胴部	(8.0)	残存(4.3)	—	斜め方向ハケメ	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/2灰褐	良	長石、雲母、角閃石	

第7表　SC4出土金属製品観察表

遺物番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
15	鉄鏃？	鉄	5.8	1.0	1.0	12.10	鶏頭型

第8表　SC4出土石器観察表

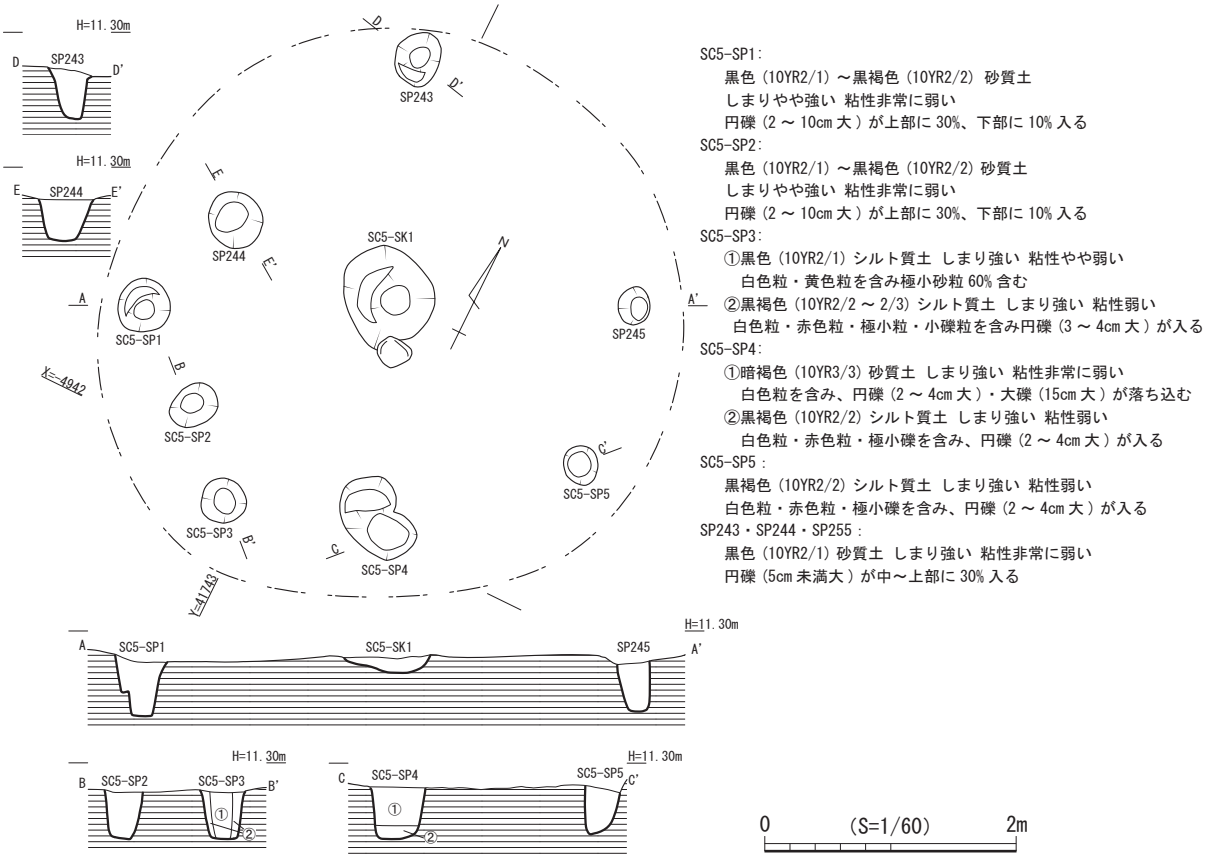
遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
16	磨石	安山岩	82.00	76.00	58.00	395.00	

第9表　SC4出土ガラス小玉観察表

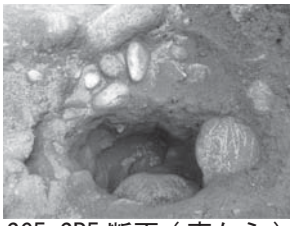
遺物番号	色調	内径①(mm)	内径②(mm)	外径①(mm)	外径②(mm)	厚①(mm)	厚②(mm)	直径(mm)	備考
17	淡青色	1.282	1.291	2.459	2.293	1.830	2.620	2.558	カリガラス
18	紺色	1.746	1.367	5.536	—	2.531	—	5.664	カリガラス、正円に近い

⑧ TAK201404　B7東区 SC5(竪穴建物)(第26図　図版16)

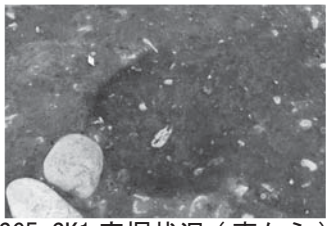
SC5はB7東区9274・9474グリッドに位置しSB6と隣接する。SC5の中央に長軸0.8m、短軸0.7m、深さ10cmの楕円形の土坑(SK1)が構築してあり、土坑を取り囲むように柱穴が7本配置している。柱穴は直径30～48cm、深さは30～42cmで円形及び楕円形を呈する。7本の配置は距離間隔等不揃いで規則性はない。更にSB6との間にSP128が位置する。SP243までSC内柱穴に含めると直径4.6m程の円形竪穴建物と考えられる。SP243は入り口に関する施設？なのか。またはSB6の東側桁行方向から直線的に並ぶためSB6に関係するものなのか。壁の立ち上がりは削平され硬化面が僅かに残る。全体的に極めて残りが悪い。遺物はSC5－SP5から土器小片が4点程出土した。(SB6との位置関係は第12図を参照。)



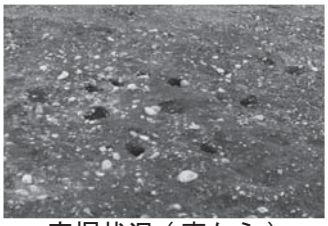
第26図　SC5平・断面図(S=1/60)



SC5-SP5 断面（東から）



SC5-SK1 完掘状況（東から）

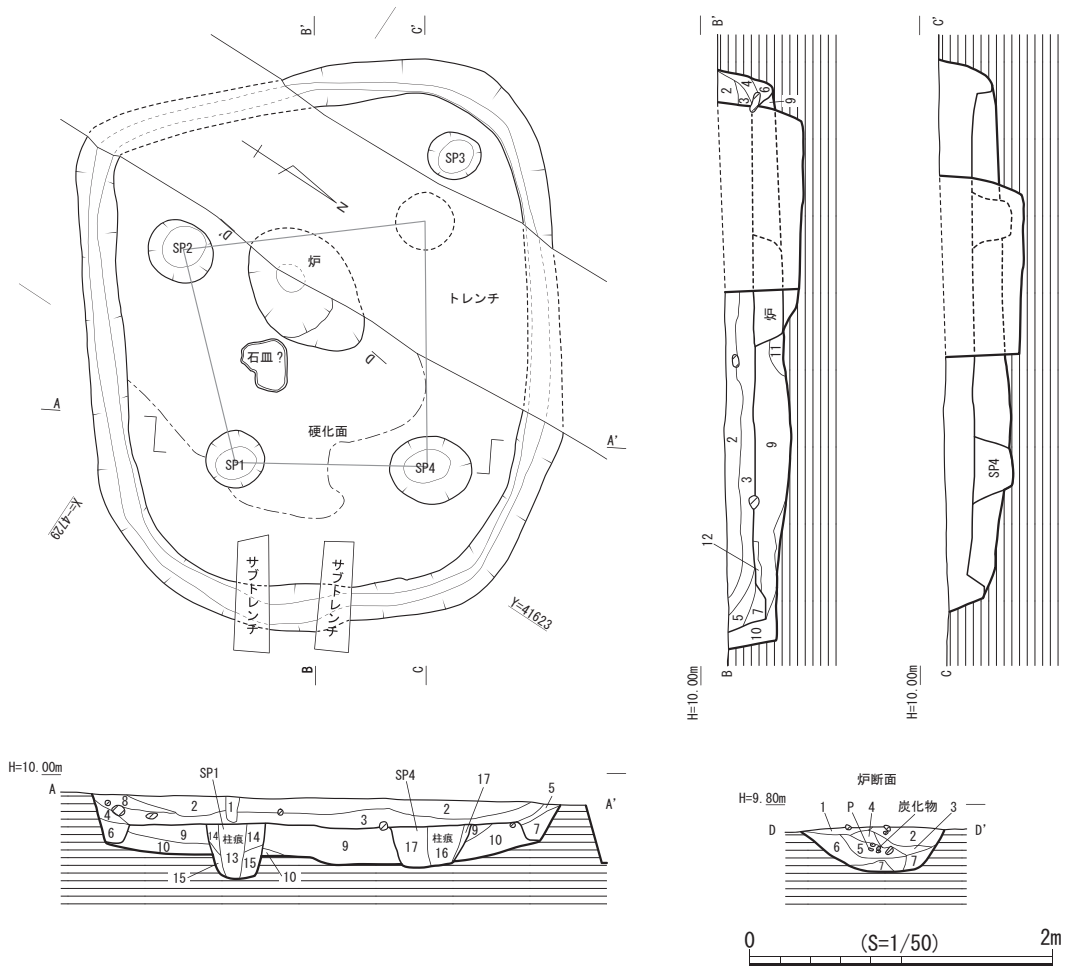


完掘状況（東から）

図版16　SC5遺構状況

⑨ TAK201405　6区 SC7(竪穴建物)(第27・28図　図版17・18　表10・11)

SC7は6区7262グリッドに位置する。平面プランは長軸3.6m、短軸3.1m、深さ25～40cm程を測る隅丸方形を呈する。中央に長軸1.0m、短軸0.40m+、深さ0.20m程の炉跡があり、硬化面が東側に広がる32×30cmの石皿が出土した。主柱は4本(SP1～4)である。直径36～54cm、深さ0.20～0.52mで円形及び楕円形を呈する。SP3の配置はやや壁際である。主柱穴の配置から外れる可能性がある。トレンチ内の炉の西側に存在した可能性もある。周壁溝は幅18cm、深さ12cm程で全周している。床面までの深さは20cmでほぼ水平である。掘り方の地山は床面から20cm程下である。全体的に小さな竪穴建物と考えられる。遺物は覆土及び床面から出土した。**19**、**20**は甕の口縁部片である。**19**は三角口縁を呈し、**20**は逆L字形口縁を呈し、端部は丸く仕上げられている。表面に丹塗りが残る。**21**は台付甕の底部である。底部はやや内側に窪む。外面は縦方向にハケメ調整後ナデ調整を施している。全体的に丁寧な仕上げである。**22**は砥石片である。石材は硬質砂岩である。甕口縁部から考えて時期は中期末頃の所産であろう。



【 A-A’ ・ B-B’ 】

1. 黒褐色(7.5YR3/2)砂質土　白・橙色粒20%、マンガンを10%含む しまり強い
2. 暗褐色(7.5YR3/3)粘質土～シルト　橙・白・黄色粒を含む
   マンガンの沈着がみられる 焼土を僅かに含む
3. 黒褐色(10YR3/2)粘質土～シルト　橙・白色粒を僅かに含む
   こぶし大の礫をまばらに含む
4. 暗褐色(10YR3/4)粘質土～シルト　焼土を僅かに含む　1～2cm大の礫を僅かに含む
5. 暗褐色(10YR3/3)粘質土～シルト　細粒砂を多く含む　2～3cm大の礫を僅かに含む
6. 暗褐色(10YR3/3)シルト　橙・白色粒をわずかに含む　こぶし大の礫を僅かに含む
7. 暗褐色(10YR3/3)シルト～砂質土　粗粒砂を多く含む　焼土を僅かに含む　もろい
8. 暗褐色(10YR3/3)砂質土　白・黄色粒2%、灰黄褐色の粘土塊を2%含む　しまり強い
9. 褐色(10YR4/4)粘質土～シルト　細粒砂を多く含む　しまりが強い
   焼土を僅かに含む
10. 暗褐色(10YR3/4)粘質土　細粒砂を多く含む　橙・白色粒を2%含む
    ややしまり強い
11. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　褐色(7.5YR4/6)粒が15%入る　粘性なくしまり強い
12. 暗褐色(10YR3/4)粘質土～シルト　砂粒多い　白色粒を僅かに含む
    ややしまり強い

【SP1】

13. 黒褐色(10YR3/2)砂質土～シルト　白・橙色粒を2%含む　粗砂粒を多く含む
    14・15より柔らかい土
14. 暗褐色(10YR3/3)砂質土　白・橙色粒を2%含む　粗砂粒を多く含む　しまり強い
15. 黒褐色(10YR3/2)砂質土～シルト　白・橙色粒を2%含む　粗砂粒を多く含む
    ややしまり強い

【SP4】

16. 黒褐色(10YR3/2)粘質土　白色粒を僅かに含む　細砂粒を多く含む　ややしまり強い
17. 暗褐色(10YR3/3)砂質土　白・橙色粒を2%含む　粗砂粒を多く含む　しまり強い

【 D-D’ (炉)】

1. 黒褐色(10YR3/2)砂質土　炭化物・白色粒を僅かに含む
   橙色粒を20%含む　ややしまり強い
2. 黒褐色(10YR3/2)砂質土～シルト
   炭化物3%、白・橙色粒を僅かに含む　ややしまり強い
3. 黒褐色(10YR3/2)砂質土～シルト
   炭化物3%、橙色粒3%、白色粒を僅かに含む　ややしまり強い
4. 黒褐色(10YR3/2)粘質土～シルト
   炭化物3%、橙色粒3%、白色粒を僅かに含む　ややしまり強い
5. 黒褐色(10YR3/2)砂質土～シルト
   炭化物5%、橙色粒3%、白色粒を僅かに含む
   2cm×1cmの土器片を含む　ややしまり強い
6. 黒褐色(10YR3/2)砂質土　白・橙色粒を僅かに含む
   マンガンを2%含む　1cm大の小石をまばらに僅かに含む
   灰褐色の粘土塊をまばらに2%含む　ややしまり強い
7. 暗褐色(10YR3/3)砂質土　白・橙色粒を僅かに含む
   マンガンを2%含む
   1cm大の小石をまばらに僅かに含む
   灰褐色の粘土塊をまばらに2%含む
   ややしまり強い
   細砂粒を多く含む

第27図　SC7平・断面図(S=1/50)

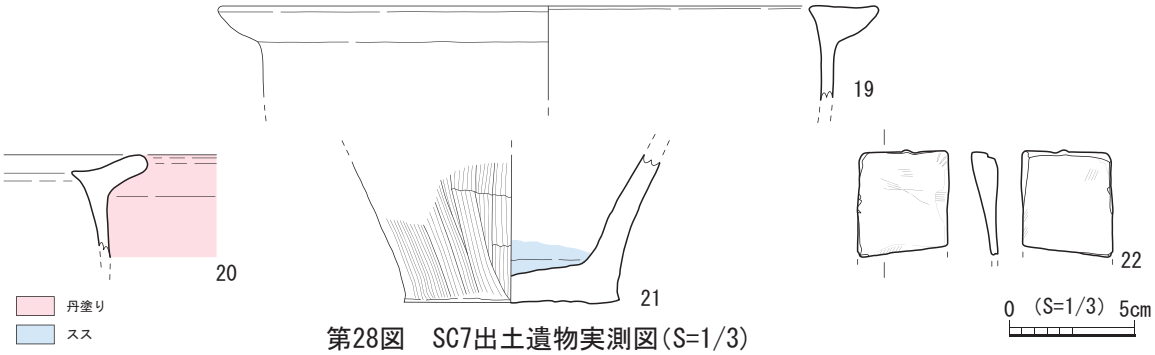
検出状況（北東から）

完掘状況（北東から）

炉完掘状況（西から）

炉完掘状況（西から）

図版17　SC7遺構状況



第28図　SC7出土遺物実測図(S=1/3)

図版18　SC7出土遺物

第10表　SC7出土土器観察表

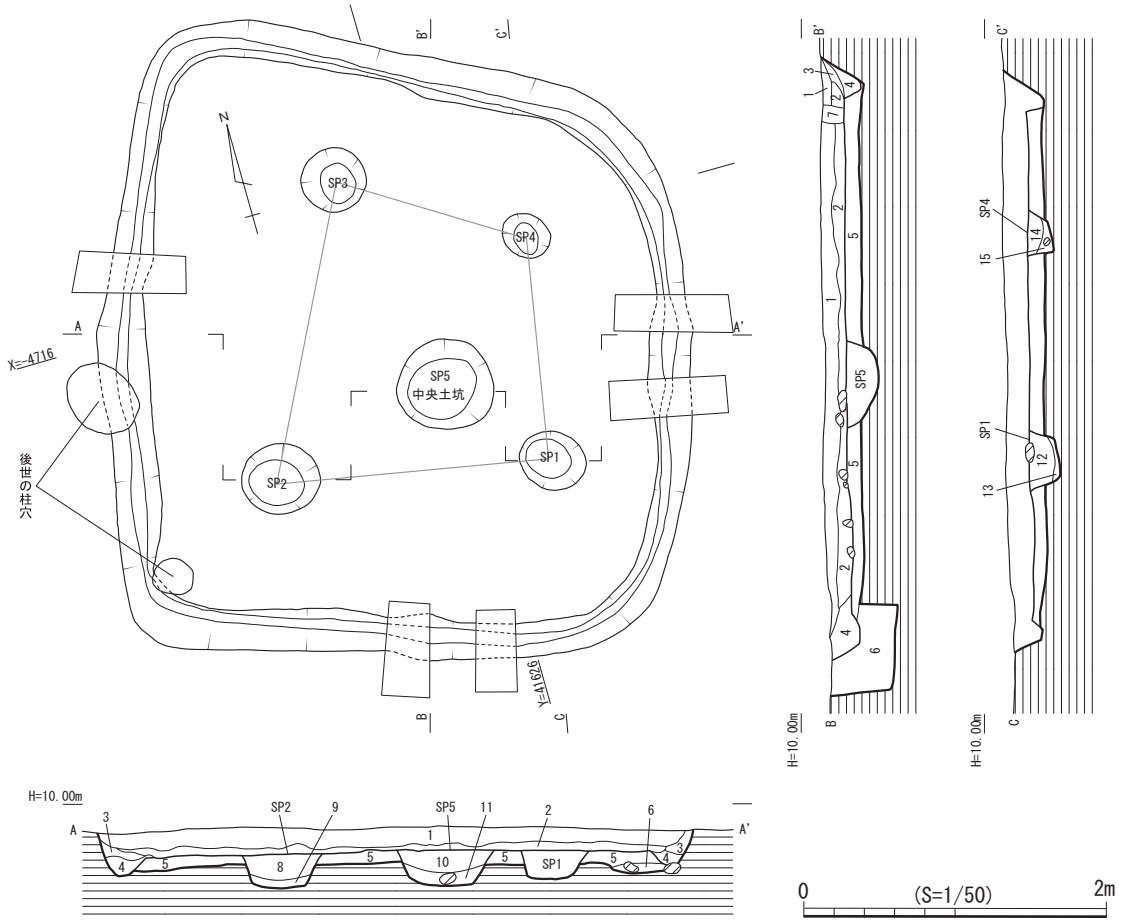
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
19	甕	口縁部	(25.8)	残存(3.7)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR5/2 灰褐	良	雲母、石英、赤色粒子 黒色粒子、白色粒子	内外面に被熱を受けている
20	甕	口縁部	—	残存(4.0)	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	石英、角閃石 長石	外面に丹塗りが薄く残る
21	甕	底部	—	残存(5.8)	(8.5)	縦方向のハケメ	ナデ	7.5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	雲母、長石	脚部欠損、底部内面にスス付着あり

第11表　SC7出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
22	砥石	硬質砂岩	42.00	36.00	10.50	17.57	

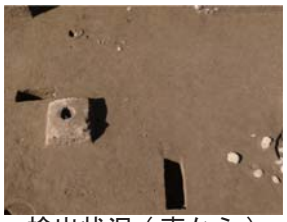
⑩ TAK201405　6区 SC8(竪穴建物)(第29・30図　図19・20版　表12)

SC8は6区7062グリッドに位置する。平面プランは長軸4.0m、短軸3.9m、床面までの深さ18cm 程を測る隅丸方形を呈する。中央に長軸0.62m、短軸0.56m、深さ0.20m の楕円形を測る土坑が構築している。主柱穴は4本で直径0.30m～0.48m、深さ0.20m 程で、平面プランは円形及び楕円形である。周壁溝は幅22～24cm、深さ10～12cm を測り全周する。検出面から床面までの深さは18cm 程で、掘り方地山までの深さは10cm を測る。遺物は小片が出土している。**23**は甕口縁部片である。断面は三角口縁を呈し、焼成は良好である。**24**は鉢の口縁部片である。端部は丸い。甕口縁部から中期末頃と考えられる。



1. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土　白・橙色粒を 2%、灰黄褐色の粘土塊と 1 ～ 2cm 大の礫を僅かに含む　ややしまり強い土
2. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土～シルト　焼土を僅かに、こぶし大の礫を 2% 含む　1 より柔らかい土
3. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土　炭化物を僅かに含む
4. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土～シルト　灰黄褐色の粘土塊を 10% 含む
5. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土　白・橙色粒を僅かに、灰黄褐色の粘土塊をまばらに 5% 含む　粗・細砂粒を多く含む　ややしまり強い土
6. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土　粗・細砂粒を多く含む　5 よりしまり強い土
7. 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土～シルト　白色粒を 3% と橙色粒を僅かに含む　ややしまり強い土
8. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土　白・橙色粒を僅かに含む　細砂粒を多く含む　白色粒と橙色粒の混じったブロックを下部に僅かに含む　ややしまり強い土
9. 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質土～シルト　黄色粒を僅かに含む　粗砂粒を多く含む　1 ～ 2cm 大の礫を 10% 含む　8 より柔らかい土
10. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土　炭化物・白色粒を僅かに含む 下部に灰黄褐色の粘土塊を僅かに含む 粗砂粒を多く含む
    2 ～ 3cm 大の礫を 2% 含む ややしまり強い土
11. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土　炭化物を僅かに含む　粗砂粒を多く含む　2 ～ 3cm 大の礫を 2% 含む　こぶし大の礫を僅かに含む
    10 より柔らかい土
12. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土～シルト　下部に灰黄褐色の粘土塊を 5% 含む　細砂粒を多く含む　ややしまり強い土
13. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土～シルト　細砂粒を多く含む　2 ～ 3cm 大の礫を 40% 含む　ややしまり強い土
14. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土～シルト　白・橙色粒を 2% 含む　粗砂粒を多く含む　ややしまり強い土
15. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質土～シルト　2 ～ 3cm 大の礫を 2% 含む　14 より柔らかい土

第29図　SC8平・断面図(S=1/50)


検出状況（東から）

ベルトセクション（南西から）

完掘状況（東から）

図版19　SC8遺構状況

第30図　SC8出土遺物実測図(S=1/3)

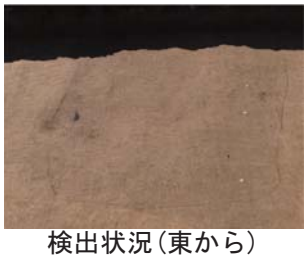
図版20　SC8出土遺物

第12表　SC8出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
23	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	長石、雲母 角閃石	小片
24	鉢	口縁部	—	残存 (1.6)	—	ナデ	ナデ	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	良	長石	小片

⑪ TAK201406　3区 SC11(竪穴建物)(第31・32図　図版21・22　表13)

SC11は3区6648グリッドに位置する。平面プランは長軸(東西)3.2m+、短軸(南北)2.9m で西側が調査区外のため判然としないが長方形と思われる。建物内部は炭の堆積を伴う中央土坑1基、土器を伴う土坑1基、柱穴は3基を検出した。床面までの残存高は36cm 程である。中央土坑は端に20cm 程の石が置かれている。土坑の規模は長軸80cm、短軸68cm、深さ11cm を測る。土坑内の覆土は炭の堆積が3cm 程確認できた事から炉と考えられる。SP2付近の床面から炭化材の破片が数片確認できた。焼失住居の可能性がある。遺物は台付甕、甕、壺胴部片等が出土した。以下遺物の説明を記す。**25**は台付甕の口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字口縁で先端はやや外反し端部は丸い。内外面はハケメ調整を施す。**26**、**27**は甕口縁部～胴部片である。くの字口縁で胴部はやや丸い。**28**は台付甕脚部片である。脚部は先端部でやや開き端部は丸い。**29**はグラス状を呈する土器である。高さ9.2cm を測る口縁部は僅かに外反し端部はやや尖る。外面は縦方向のハケメ調整を施し、丹塗りを行っている。**30**は二重刻目凸帯壺の胴部片である。内外面は斜め方向のハケメ調整を行っている。**31**は壺口縁部片である。口縁端部に刻目を施す。**32**は須恵器杯蓋で覆土上面から出土した口縁部片である。口縁端部はやや尖る。時期は後期前半頃であろう。


検出状況(東から)

遺物出土状況(炭化物)(南から)

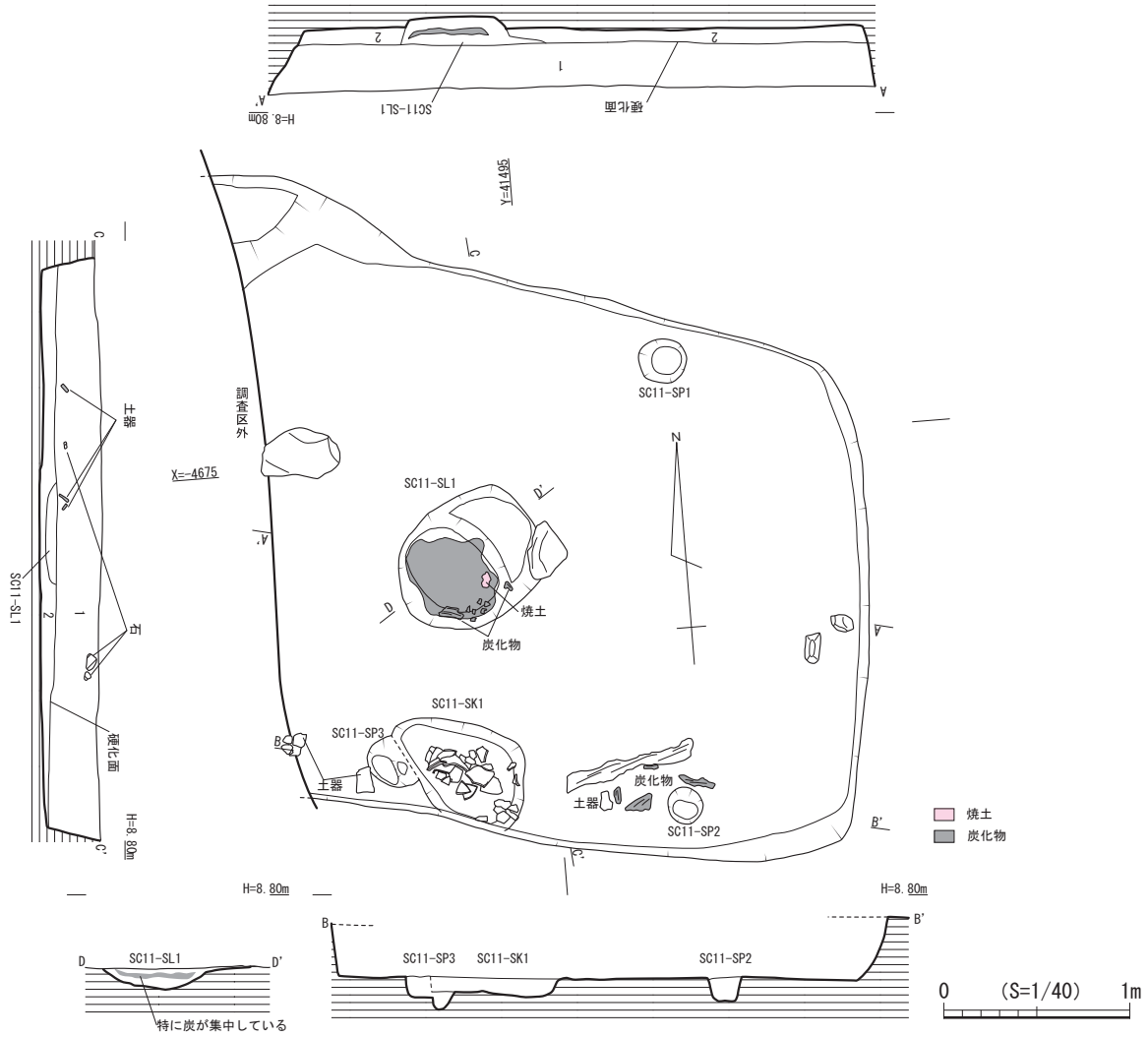
SK1遺物出土状況(南から)

遺物出土状況（東から）

SL1断面(北西から)

SL1完掘状況(北西から)

図版21　SC11遺構状況



1. 暗褐色（10YR3/4）極細粒砂質土 しまりなし
　1～3cmのブロック状に灰黄褐色（10YR4/2 シルト質 粘性あり しまりなし）が5%入る
　2～5cmのブロック状に褐色（10YR4/4 極細粒砂質土 しまりなし）が7%入る
　5mm～5cmの炭化物が3%点在する
　大きな炭化物も出土する（平面図参照）が、建物内の焼けはあまり見られない
　白色粒2%、黄色粒1%、弥生後期とみられる土器片が1%入る
2.（硬化面より下） 褐色（10YR4/4 シルト質 しまりあり）が広がる

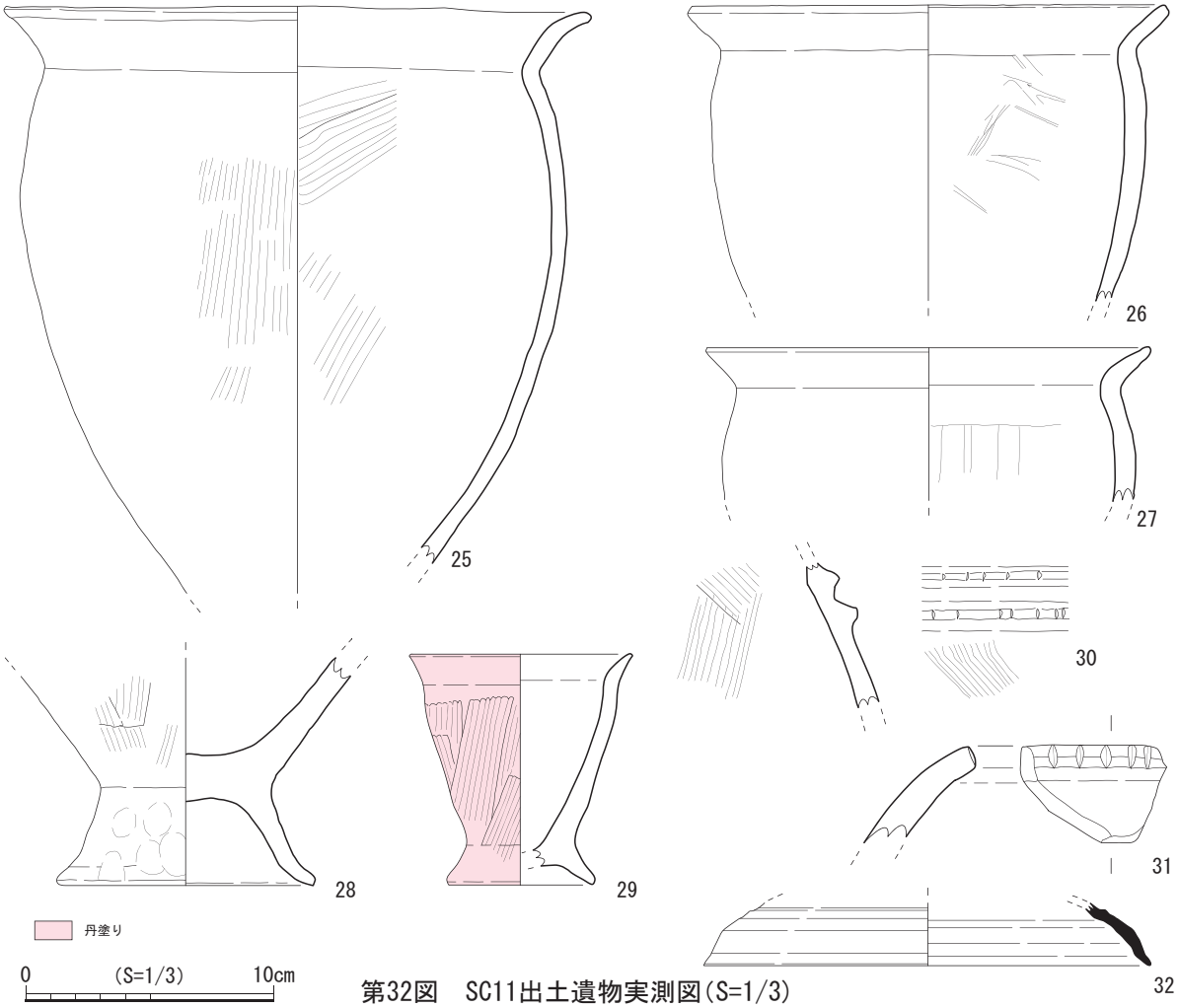
SC11-SL1:
　黒褐色（10YR3/2）砂質シルト しまりなし
　炭の粒子がほぼ全面に入る
　径5mm程の焼土粒が1%入る
　褐色土（10YR4/4）が小ブロック状に混じる
　特に炭が集中している部分は図示している
　プラン上部には炭化材（3×15cm）が出土している

SC11-SP1～SP3:
　暗褐色（10YR3/4）砂質土 しまりなし
　小ブロック状に褐色（10YR4/4）が2%混じる

第31図　SC11平・断面図(S=1/40)

第13表　SC11出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
25	台付甕	口縁部～胴部	23.3	残存(23.6)	—	縦方向のハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR3/1 黒褐	良	角閃石、長石	底部欠損
26	甕	口縁部～胴部	(19.0)	残存(12.8)	—	ナデ	ハケメ	2.5YR5/6 明赤褐	10YR5/4 にぶい黄褐	良	長石、雲母	柳田Ⅳ様式
27	甕	口縁部～胴部	(18.0)	残存(6.0)	—	ナデ	ヘラ削り	2.5Y3/1 明赤褐	2.5Y4/1 黄灰	良	長石、角閃石 石英	
28	台付甕	胴部～脚部	—	残存(9.1)	10.2	ハケメ・ナデ 指オサエ	ナデ	10YR7/6 明黄褐	10YR5/3 にぶい黄橙	良	長石、角閃石 雲母	
29	グラス型土器	口縁部～底部	(11.2)	残存(9.2)	6.0	縦方向のハケメ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	1/2残存、外面丹塗りあり
30	壺	胴部片	—	残存(5.7)	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、褐色粒子 角閃石、雲母	二条の刻目凸帯あり
31	壺	口縁部	—	残存(3.9)	—	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	良	長石、雲母	口唇部に刻目あり
32	杯蓋	口縁部	(18.0)	残存(2.5)	—	ナデ	ナデ	7.5YR5/1 褐灰	5YR5/4 にぶい赤褐	良好	長石、赤色粒子	酸化炎焼成

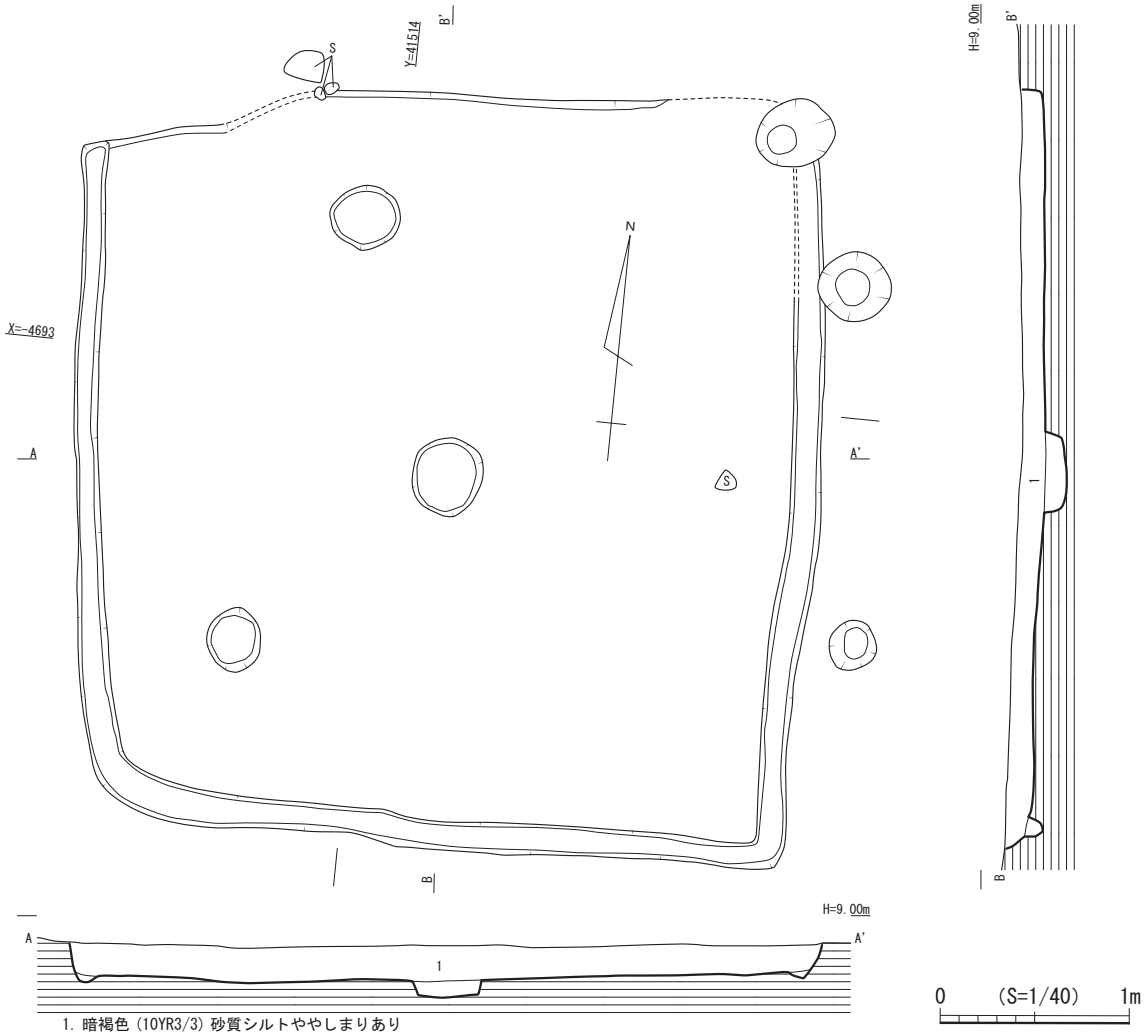


第32図　SC11出土遺物実測図(S=1/3)

図版22　SC11出土遺物

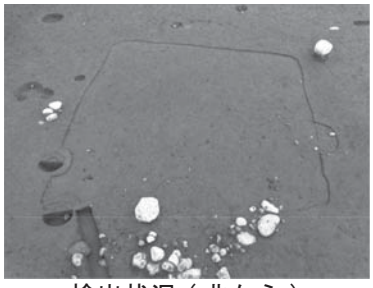
⑫ TAK201406　3区 SC12(竪穴建物)(第33・34図　図版23・24　表14)

SC12は3区6850グリッドに位置する。規模は長軸(南北)4.0m、短軸(東西)4.0m、深さ20cm を測る方形の平面プランである。周壁溝は北側を除き東西、南側で構築されている。幅12cm、深さ4cm 程である。建物内施設は直径40cm 程、深さ8cm の円形の中央土坑が位置している。柱穴は2ヶ所で確認した。しかしながらこの2ヶ所の柱穴に対応する柱穴は確認出来なかった。覆土は単層で暗褐色砂質シルト層である。遺物は覆土及び床面から甕口縁部片、壺胴部片、台付甕脚部片が出土した。**33～37**、**40～42**は甕口縁部片である。断面はやや斜め上方向のＬ字状で端部は丸い。**38**は一条の刻目凸帯壺胴部片である。内外面ハケメ調整の後ナデ調整を施している。**39**は台付甕脚部片である。出土遺物から竪穴建物の時期は中期末から後期初頭であろうか。

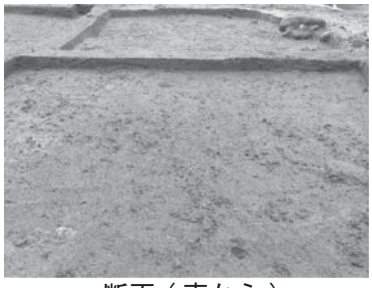


1. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルトややしまりあり
白色粒 2%, 5mm 程の炭化物 1%, 5cm 程の小礫 1%, マンガン粒 1% が入る
弥生土器片が出土している

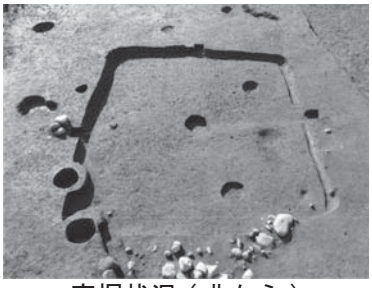
第33図　SC12平・断面図(S=1/40)



検出状況（北から）

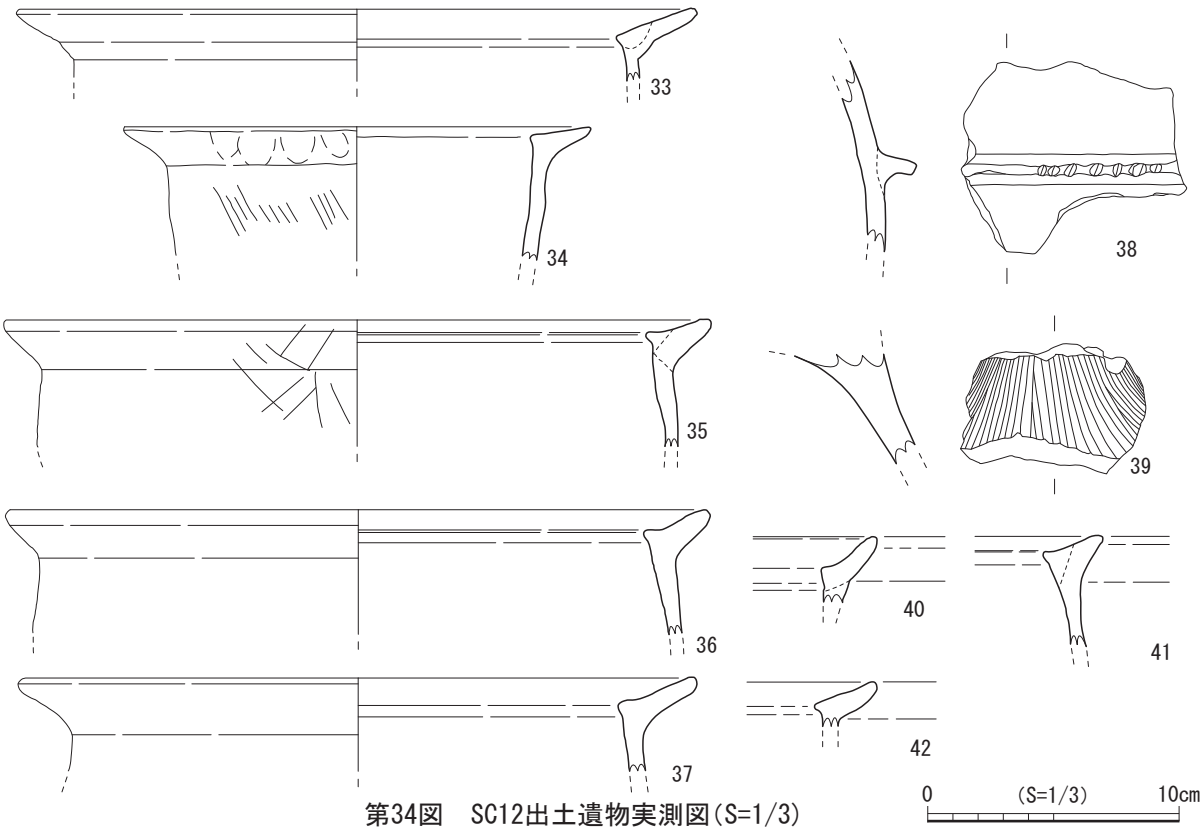


断面（東から）

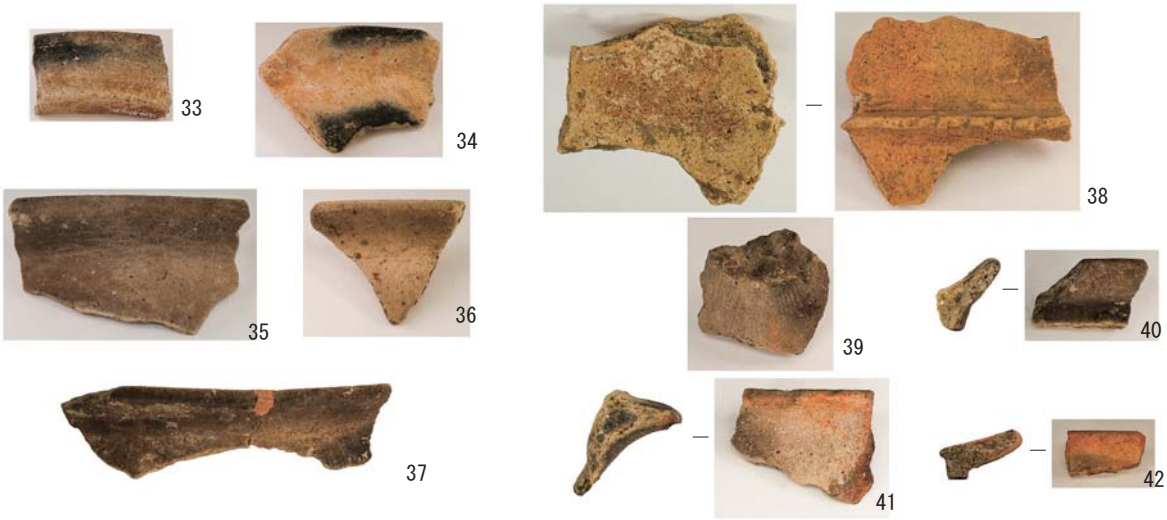


完掘状況（北から）

図版23　SC12遺構状況



第34図　SC12出土遺物実測図(S=1/3)



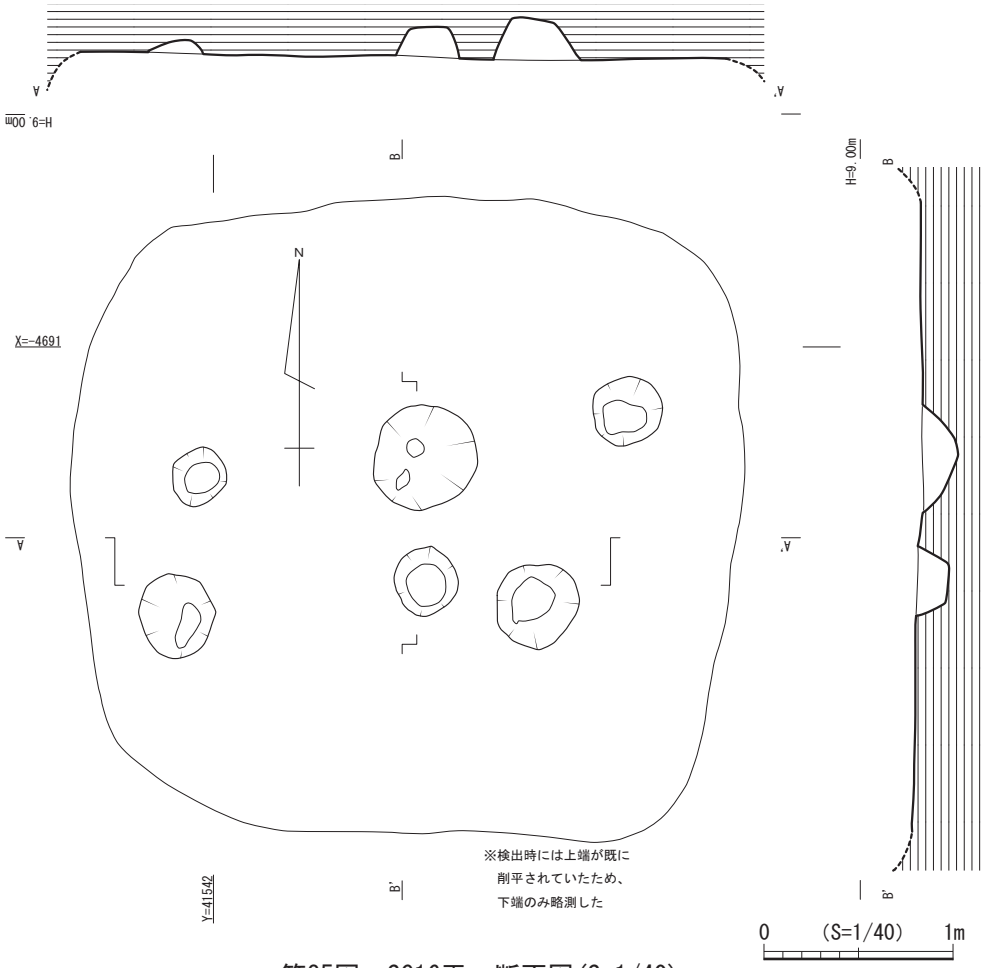
図版24　SC12出土遺物

第14表　SC12出土土器観察表

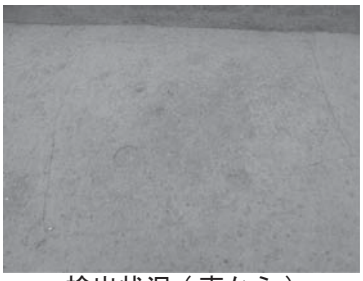
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
33	甕	口縁部	(26.4)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR7/2 明灰褐	良	角閃石、石英	
34	甕	口縁部	(18.6)	—	—	ハケメ 指圧痕	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石、褐色粒子 雲母	
35	甕	口縁部	(28.0)	残存 (5.0)	—	ナデ	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR8/2 灰白	良	石英、黒色粒子	
36	甕	口縁部	(28.0)	残存 (4.8)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR8/2 灰白	良	石英、長石 角閃石	黒髪式土器
37	甕	口縁部	(26.3)	—	—	ナデ	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、角閃石 石英	
38	壺	胴部	—	—	—	ハケメ後 ナデ	ハケメ後 ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石、角閃石 雲母	一条の刻目凸帯あり 凸帯の張り出し長い
39	台付甕	脚部	—	残存 (4.3)	—	縦方向の ハケメ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	雲母、長石 角閃石	黒髪式土器
40	甕	口縁部	—	残存 (2.5)	—	ナデ	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR8/3 浅黄橙	良	石英、長石	黒髪式土器
41	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR6/6 橙	2.5Y8/2 灰白	良	長石、石英 角閃石	黒髪式土器
42	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR5/8 赤褐	5YR5/8 赤褐	良	石英、長石 角閃石	黒髪式土器

⑬ TAK201406　4区 SC16(竪穴建物)(第35図　図版25)

SC16は4区6854グリッドに位置する。平面プランは方形で長軸(東西)3.58m、短軸(南北)3.36m を測る。削平されて壁の立ち上がりが残存しないため深さは不明である。中央に直径50cm 程の土坑を構築している。柱穴は5ヶ所を確認したが主柱穴と考えられるものは直径40cm 程を呈する SP1、3、4である。しかしながら柱穴の配置は不揃いで、主柱穴としての判断は難しい。遺物は出土しなかった。



第35図　SC16平・断面図(S=1/40)



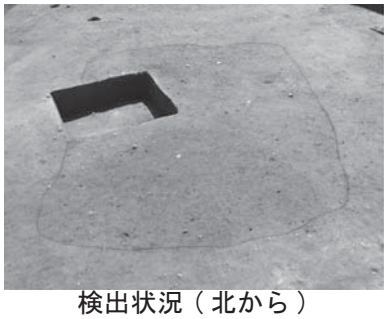
検出状況（東から）

完掘状況（東から）

図版25　SC16遺構状況

⑭ TAK201407　1区 SC6(竪穴建物)(第36・37図　図版26・27　表15・16)

SC6は1区7060・7260グリッドに位置する。規模は長軸中心で5.66m、短軸中心で4.16m、中央の深さ0.54m を測る、長方形の平面プランを呈する。主柱穴は2本(P1、2)で、P1は直径0.40m、深さ0.36m、柱穴下端幅から12cm 程の柱痕が考えられる。P2は直径0.50m、深さ0.44m、柱痕20cm である。中央土坑は2ヶ所 SK1、2を検出した。SK1は円形の平面プランで長軸0.58m、短軸0.52m、深さ0.20m を測る。SK2は長方形の平面プランで長軸0.80m、短軸0.60m、深さ0.20m を測る。中央土坑 SK1を挟むように SP1、SP2が配置している。硬化面は床全面に付設されており、周壁溝は構築されていない。中央土坑を2本の柱が挟む形態は松菊里型住居に類似する。以下出土土器について記す。遺物は竪穴建物の覆土及び床面から出土した。**43～53**は甕の口縁部～胴部、台付甕の脚部片である。**43**、**44**は逆 L 字状の口縁部片で端部は丸い。**45**、**47**、**50**はくの字口縁で**46**、**48**、**49**は緩やかなくの字口縁を呈し端部は丸い。**51～53**は台付甕の脚部片である。脚部の開きは狭く端部は丸い。外面はハケメ調整を施す。**54**は鉢の口縁部～体部片である。口縁部は短く外傾し端部は丸い。**55**は砥石で一部が欠損している。表裏に磨き痕が残る。石材は硬質砂岩である。**56**は打製石斧である。一部側面が欠損する。石材は玄武岩である。台付甕、くの字口縁の甕から中期末から後期初頭頃の所産であろう。

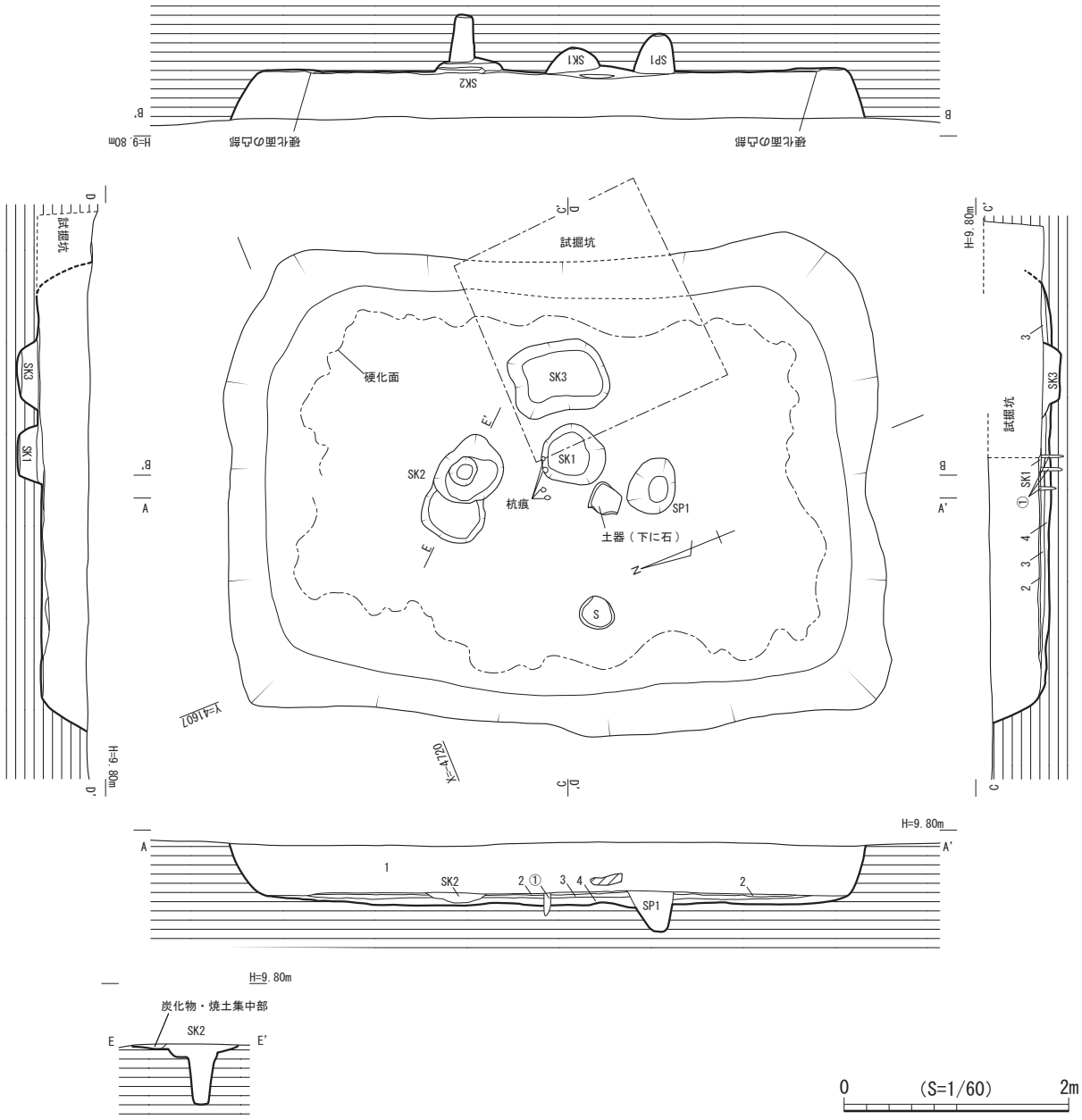

検出状況（北から）

床面検出状況（北から）

炉跡(SK1)・杭痕(北から)

完掘状況（北から）

図版26　SC6遺構状況



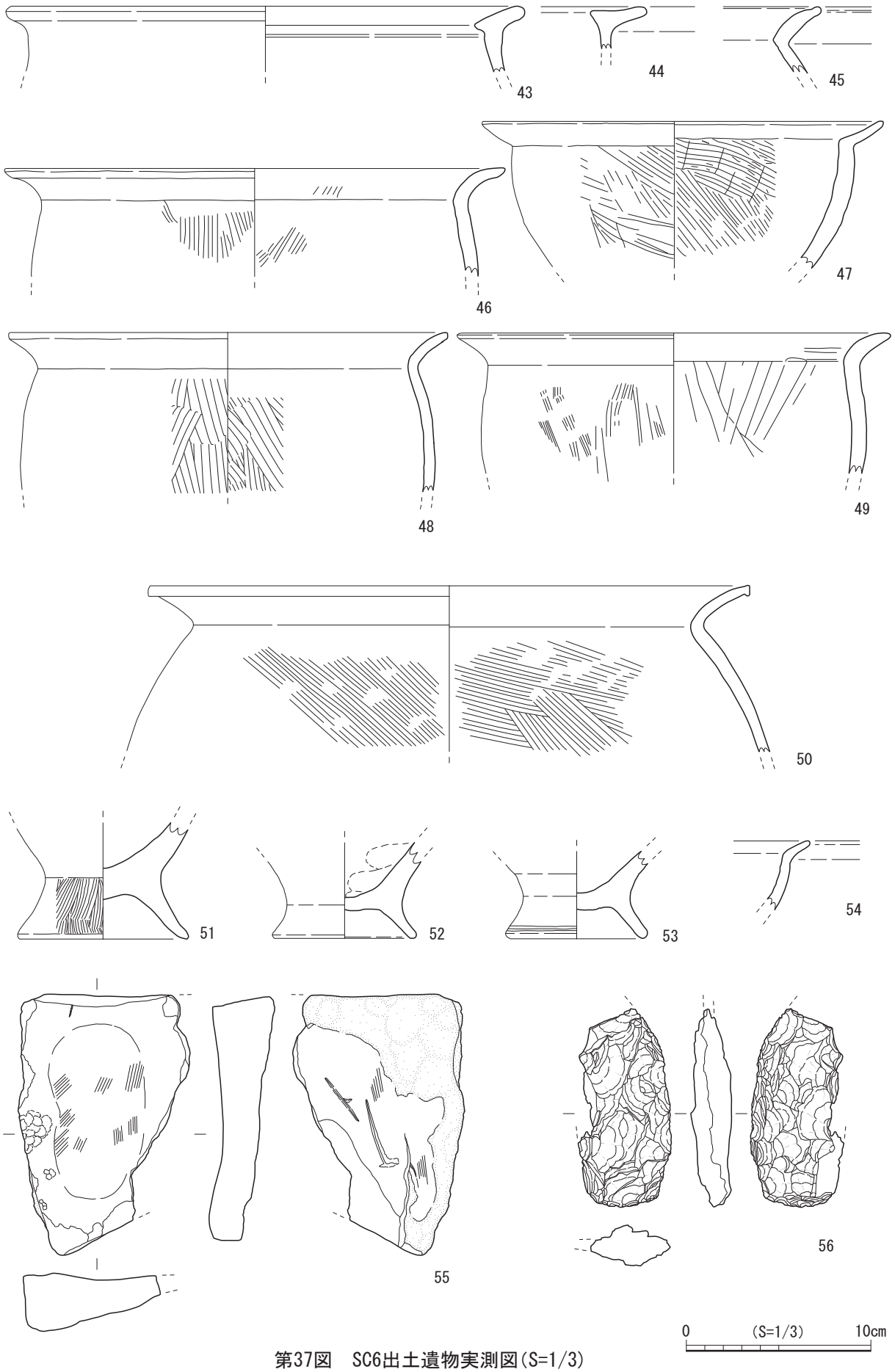
0 (S=1/60) 2m

1. 暗褐色土（10YR3/3）
しまりあり 粘性弱い
0.5～3cmほどの小石を
約10%含む
10～20cmほどの礫を1%含む
硬化面直上に黒褐色土（10YR2/2）が
薄く見られる（中央付近）
2. 砂質層 硬化面（生活面）
褐色土（10YR4/4）
しまり非常に強い 粘性弱い
上面に暗褐色土（10YR3/4）が
極めて薄くみられる
3. 砂質層 褐色土（10YR4/4）
しまり強い 粘性弱い
1～5cmほどの小石を約1%含む
4. 砂質層 暗褐色土（10YR3/4）
しまりあり 粘性弱い
2cmほどの小石を約1%含む
①. 杭痕と思われる
黒褐色土（10YR2/2）
しまり弱 粘性あり
褐色土（10YR4/4）が約3%混合する

SK1:
黒褐色土（10YR2/2）に黒褐色土（10YR2/3）を
30%と暗褐色土（10YR3/4）20%が混合する
しまり弱い 粘性強い
1～3mmほどの炭化物を約2%含む
炉跡と考えられる
SK2:
暗褐色土（10YR3/3）
しまり弱い 粘性弱い
ポイントE側に炭化物を20%・焼土を
0.5～1cmほどの大きさで約3%含む

SK3:
暗褐色土（10YR3/3）
しまり弱い 粘性あり
2～10cmほどの礫を約2%含む
5mmほどの炭化物を約1%含む
SP1:
暗褐色土（10YR3/3）砂質
しまり弱い 粘性強い
1cmほどの小石を約1%,
1mmほどの炭化物を約1%含む

第36図　SC6平・断面図(S=1/60)



第37図　SC6出土遺物実測図(S=1/3)

図版27　SC6出土遺物

第15表　SC6出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
43	甕	口縁部	(27.3)	残存(3.5)	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR6/2 灰褐	良	長石、石英	
44	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	長石、雲母 角閃石	
45	甕	口縁部	—	残存(3.6)	—	ナデ	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	石英、雲母 角閃石	
46	甕	口縁部～胴部	(26.8)	残存(5.8)	—	ナデ	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/3 にぶい黄褐	良好	赤色粒子、雲母 角閃石、石英	
47	甕	口縁部～胴部	(21.6)	残存(7.8)	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	雲母、長石 褐色粒子	
48	甕	口縁部～胴部	(23.6)	残存(8.5)	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	長石、角閃石 石英、赤色粒子	
49	甕	口縁部～胴部	(23.4)	残存(7.4)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ヘラケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	良好	長石、石英 角閃石	
50	甕	口縁部～胴部	(32.2)	残存(9.0)	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	
51	台付甕	脚部	—	残存(5.8)	9.2	ハケメ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	長石、角閃石 赤色粒子、石英	
52	台付甕	脚部	—	残存(5.2)	(7.6)	ナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	良	石英、角閃石 長石、赤色粒子	
53	台付甕	脚部	—	—	(7.2)	ナデ	ハケメ ナデ消し	10R6/6 赤橙	10R6/6 赤橙	良好	長石、雲母	
54	鉢	口縁部～体部	—	残存(3.7)	—	ナデ	ヘラ後 ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	良	石英、角閃石 雲母	

第16表　SC6出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
55	砥石	硬質砂岩	140.00	92.00	39.00	510	側面欠損
56	打製石斧	玄武岩	107.00	50.50	22.00	110	側面欠損

⑮ TAK201407　1区 SC7(竪穴建物)(第38・39図　図版28・29　表17)

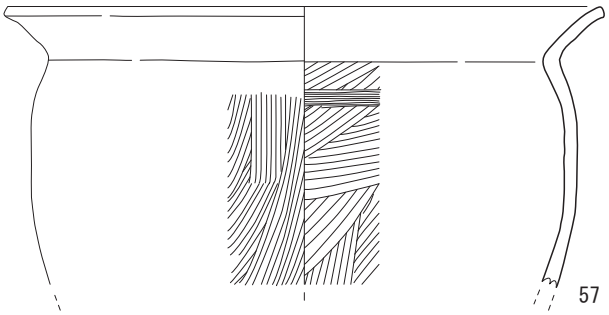
SC7は1区7058・7258グリッドに位置する。SC4(古墳時代竪穴建物⑳)から切られている。規模は長軸中心で7.0m、短軸中心で6.06m、中心の深さで0.26m を測る、隅丸楕円形の平面プランを呈する。柱穴は6ヶ所確認した。この中で深さから主柱穴と考えられるものは SP6、SP8の2本である。SP6は深さ56cm、SP8は深さ36cm である。その他は14～4cm と浅く補助材に伴う柱穴であろう。竪穴建物のほぼ中央に SK1が構築されている。長軸1.04m、短軸0.70m、深さ0.36m を測る、隅丸楕円形の平面プランで、北東～南東方向に構築されている。この中央土坑 SK1の長軸方向に直行する形で主柱穴の SP6、SP8が構築されている。SK1との距離は0.90～1.0m である。周壁溝は全周し、幅は0.22m～0.40m、深さ0.12m 程である。硬化面は中央土坑を中心にやや外側に向かって広がる。**57**は甕の口縁部～胴部片である。くの字口縁部を呈し内外面にハケメ調整を施す。**58**は台付甕の胴部～脚部片である。脚部の開きは狭く端部は丸い。後期前半の時期と思われる。

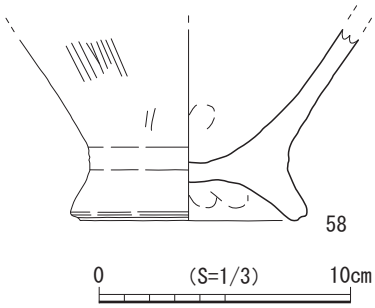
検出状況（北から）

床面・柱穴・周溝検出状況（北から）

完掘状況（北から）

図版28　SC7遺構状況



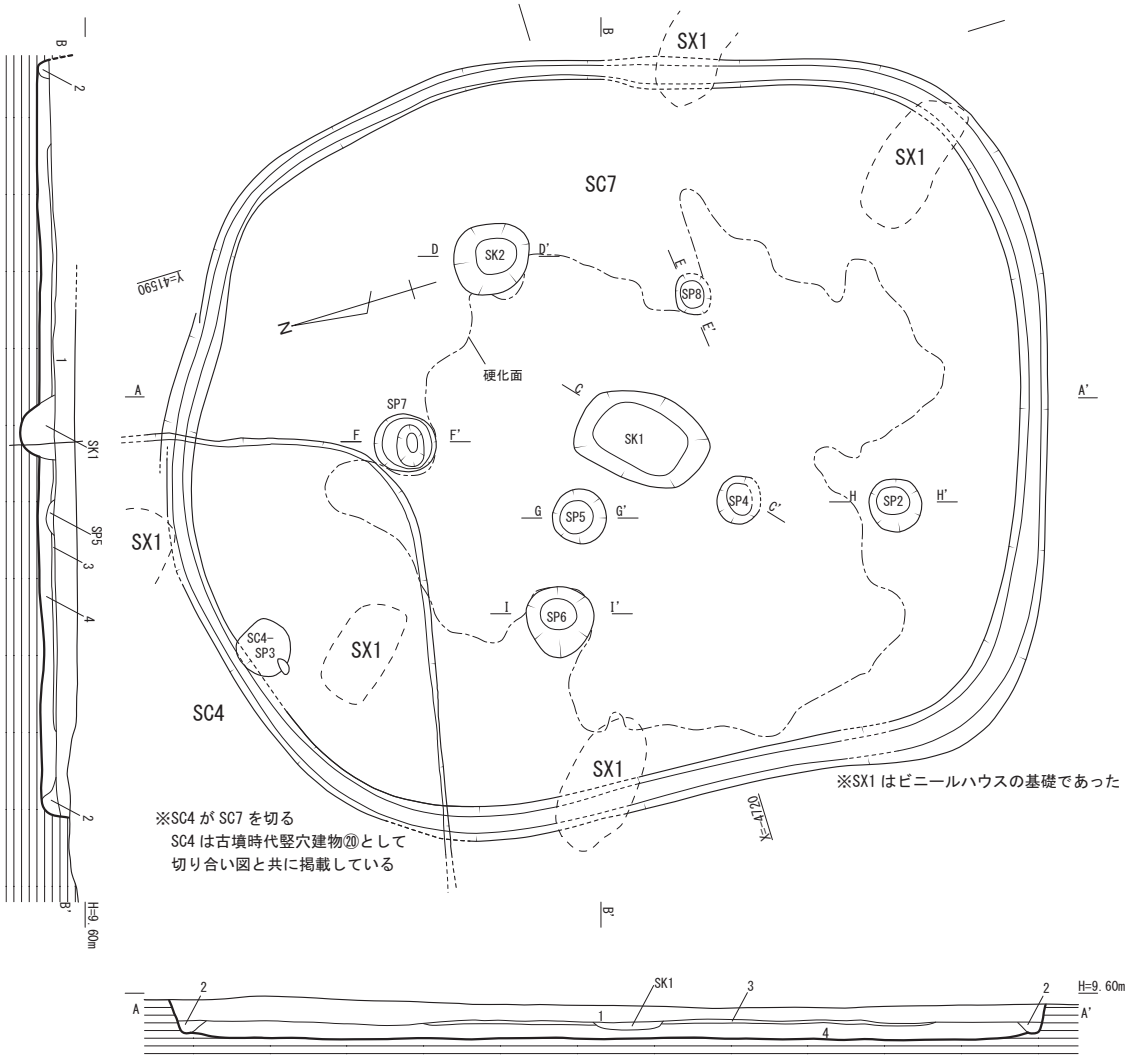


第38図　SC7出土遺物実測図(S=1/3)

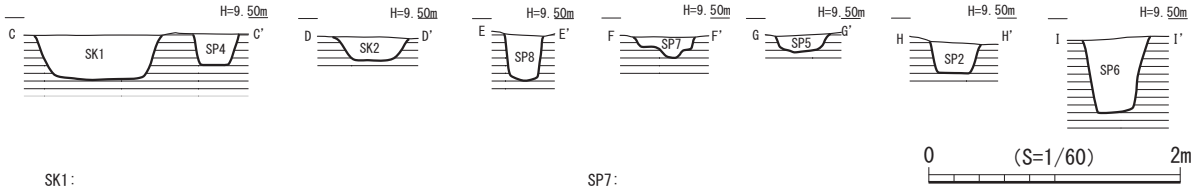
図版29　SC7出土遺物

第17表　SC7出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
57	甕	口縁部～胴部	(23.4)	残存(11.1)	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR4/3 褐	7.5YR7/6 橙	良好	長石、角閃石 石英、赤色粒子	
58	台付甕	胴部～脚部	—	残存(7.5)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	良	石英、角閃石、雲母	



1. 灰黄褐色土（10YR4/2） しまり強い 粘性あり 砂質土　1～4cmほどの礫含む　3mmほどの炭化物含む　住居廃絶後の堆積層である
2. 暗褐色土（10YR3/4） しまりあり 粘性あり 砂質土　壁周溝埋土
3. 暗褐色土（10YR3/4） しまり非常に強い 粘性弱い 砂質土　表面に極めて薄く暗褐色土（7.5YR3/4）がみられる　硬化面である
4. 褐色土（10YR4/4） しまり強い 粘性あり 0.5～1cmほどの礫含む　床面整地層



SK1:
暗褐色土（10YR3/3） しまり弱い 粘性あり 砂質土
黒褐色土（10YR3/2）とにぶい黄褐色土（10YR4/3）を含む
0.1～1cm程の炭化物を含む　3cm程の礫を含む
中央炉跡と考えられるが、底部・周辺部に
焼土はみられない

SP4:
暗褐色土（10YR3/4）しまりあり 粘性あり 砂質土
褐色土（10YR3/3）含む 2mmほどの炭化物を含む

SK2・SP8:
暗褐色土（10YR3/4）しまり弱い 粘性あり
2mmほどの炭化物を含む
2cmほどの礫を含む

SP7:
にぶい黄褐色土（10YR4/3）に褐色土（10YR4/4）を含む砂質土
2～3cmほどの礫を含む

SP5:
暗褐色土（10YR3/3）と黒褐色土（10YR2/3）の混合土
しまりあり 粘性あり

SP2:
褐色土（10YR4/4）しまりあり 粘性強い 砂質土
3cmほどの礫を含む

SP6:
褐色土（10YR4/4）
しまりあり 粘性あり 砂質土
2～7cmほどの礫を含む

第39図　SC7平・断面図(S=1/60)

⑯ TAK201407　1区 SC8(竪穴建物)(第40・41図　図版30・31　表18)

SC8は1区7258グリッドに位置する。規模は長軸中心6.32m、短軸中心5.64m、深さは中心で0.20m を測る、楕円形の平面プランを呈する。長軸はほぼ南北方向である。柱穴は SP1～SP6まで6ヶ所検出しているが配置がランダムで主柱穴が判然としない。SP1～SP3は0.52m～0.56m で主柱穴として考えられるが配置が南西方向に固まりすぎる。SP2は建物のほぼ中心に位置する。周壁溝は構築されていない。また中央土坑、炉跡の痕跡も存在しない。硬化面は中心から西側に残存する。遺物は覆土及び床面から出土した。**59～64**は甕の口縁部～胴部、底部にかけての破片である。**59**、**60**は緩やかな、くの字口縁を呈し端部は丸い。**61**は頸部片で内外面に丹塗りがある。**62～64**は台付甕の胴部～脚部片である。**64**は脚部の開きは狭く端部は丸い。**65**は鉢口縁部～体部片である。口縁部は内湾し端部は丸い。**66**、**67**は壺の頸部～胴部片である。**66**は刻目三角凸帯を一条有し、外面に丹塗りを施す。**67**は頸部に三角凸帯を一条有する。

検出状況（西から）

遺物出土状況（北から）

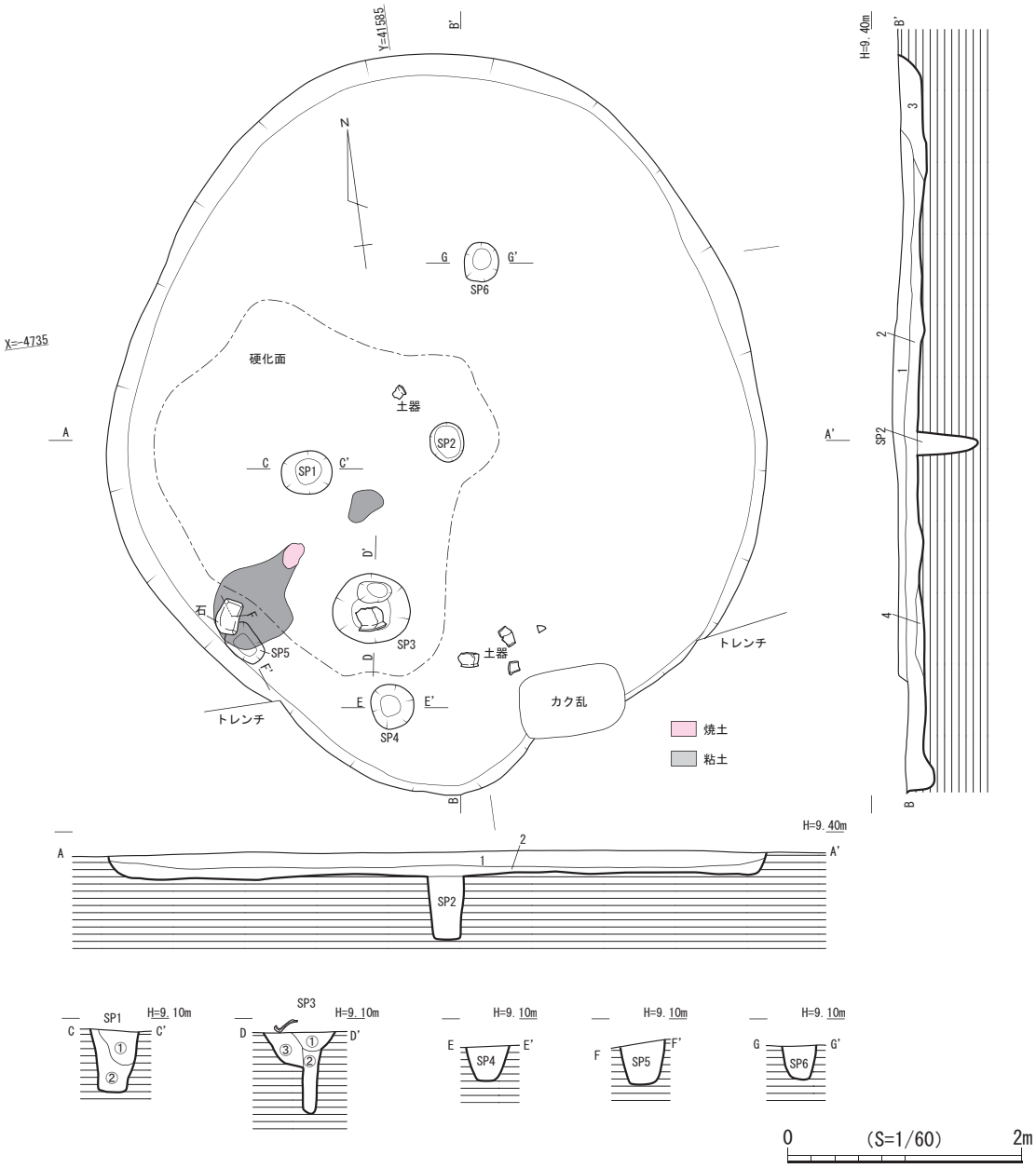
床面検出状況（西から）

SC8-SP2 断面（南から）

完掘状況（西から）

SC8-SP3 完掘（東から）

図版30　SC8遺構状況

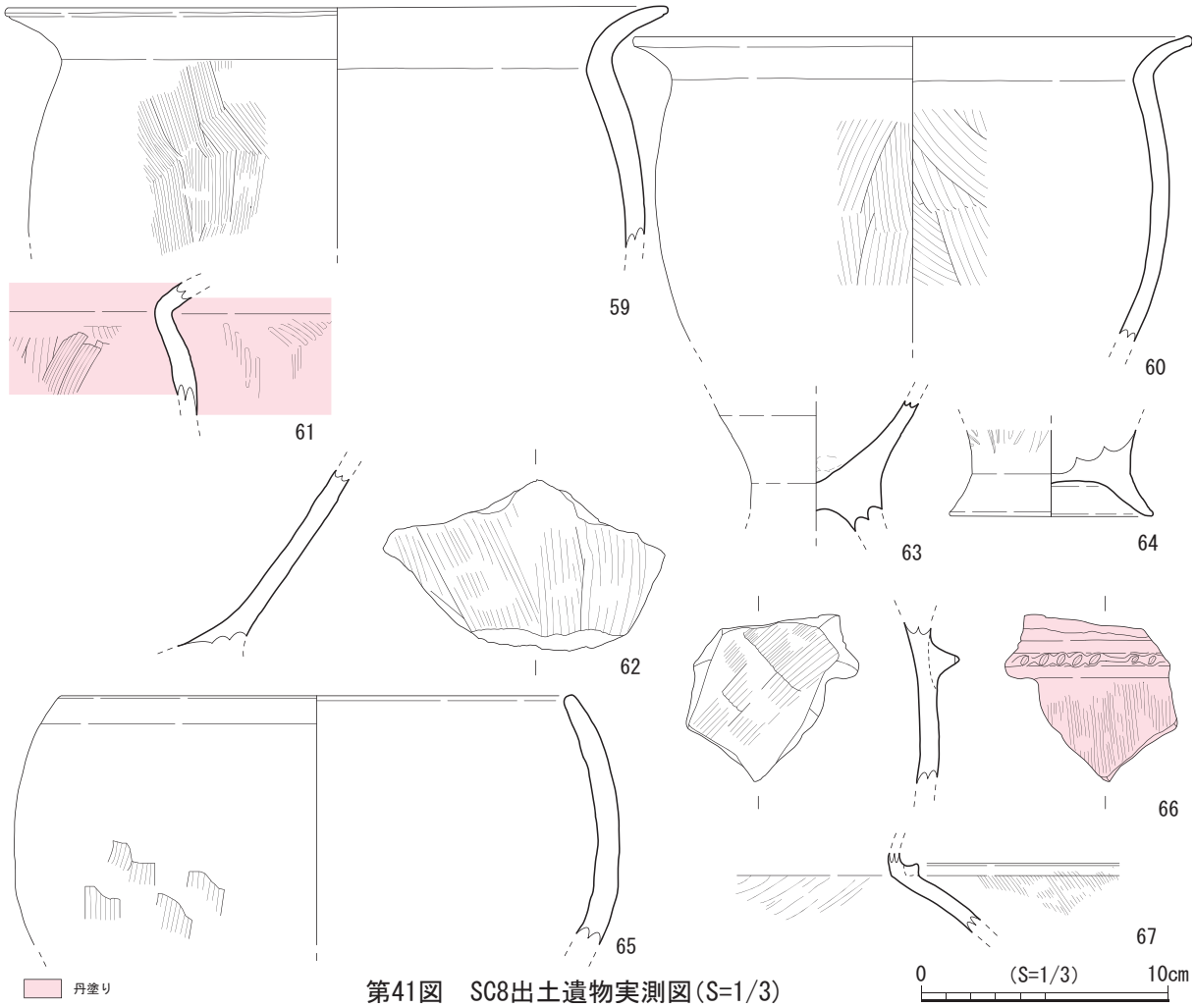


1. にぶい黄褐色土（10YR4/3）シルト しまりあり 粘性あり
　φ1～2cmの小礫を少量含む
2. にぶい黄褐色土（10YR5/3）砂質シルト しまりやや弱い
　粘性やや弱い
　黄褐色土ブロックを中量含む　下面一部に硬化面あり
3. 褐色土（10YR4/4）しまりあり 粘性あり
　φ3～10cmの礫をやや多く含む
4. 黒褐色土（2.5Y3/2）シルト しまり弱い 粘性ややあり
　炭化物を多く含む層

SP2：暗褐色土（10YR4/4）

SP1：①暗褐色土（10YR3/3）
　②にぶい黄褐色土（10YR4/3）
　φ1～3cmの小礫を多く含む
SP3：①暗褐色土（10YR4/4）1層より暗い
　炭化物を微量含む
　②にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり弱い
　φ1～3cmの小礫を多く含む
　③暗褐色土（10YR4/4）
　φ3～10cmの小礫を多く含む
SP4・SP5・SP6：暗褐色土（10YR4/4）

第40図　SC8平・断面図(S=1/60)



第41図　SC8出土遺物実測図(S=1/3)

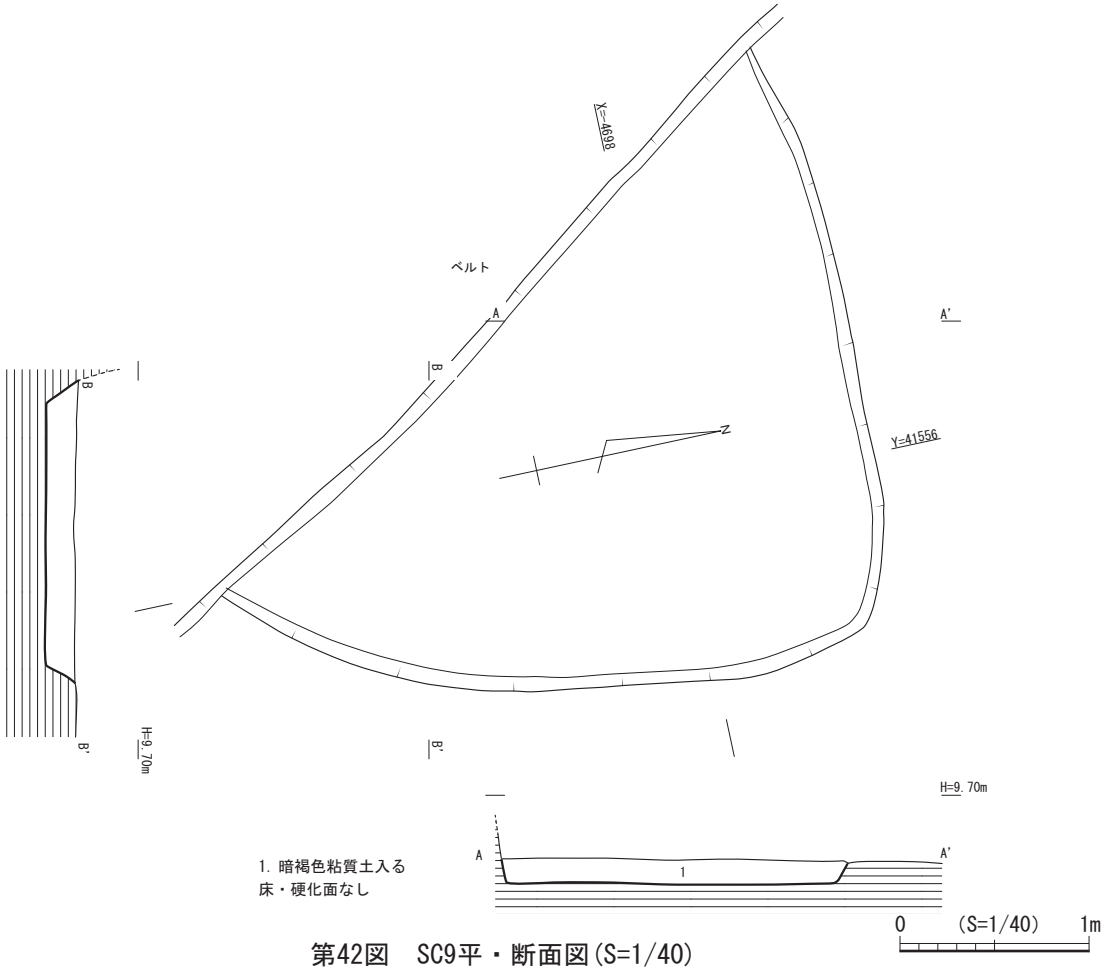
図版31　SC8出土遺物

第18表　SC8出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
59	甕	口縁部	(28.6)	残存(9.7)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR4/4褐	7.5YR4/4褐	良	雲母、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	
60	甕	口縁部～胴部	(22.2)	残存(12.3)	—	ハケメ	ハケメ	5YR5/8明赤褐	10YR7/3にぶい黄橙	良	長石、角閃石 石英、赤色粒子	
61	甕	頸部	—	—	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	5YR8/2灰白	5YR8/2灰白	良	長石、石英 赤色粒子	内外面に丹塗りあり
62	台付甕	胴部	—	残存(6.6)	—	ハケメ	ハケメ ナデ	2.5YR6/6橙	10YR7/3にぶい黄橙	良	長石、赤色粒子	
63	台付甕	胴部～脚部	—	残存(5.2)	(5.2)	ナデ	ナデ	2.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	良	赤色粒子、角閃石 石英、雲母、長石	
64	台付甕	脚部	—	—	(8.0)	ナデ	ナデ	2.5YR5/8明赤褐	7.5YR4/3にぶい橙	良好	長石、石英 角閃石	
65	鉢	口縁部～体部	体部径(24.4)	—	—	ナデ ハケメ	ナデ	5YR6/2灰褐	5YR7/2明褐灰	良	長石、雲母	
66	壺	胴部	—	残存(6.4)	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/1浅黄橙	良	長石、雲母	一条の刻目凸帯あり 外面に丹塗りあり
67	壺	頸部	—	—	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白	良	長石、石英 角閃石	一条の凸帯あり

⑰ TAK201407　4区 SC9(竪穴建物)(第42・43図　図版32・33　表19)

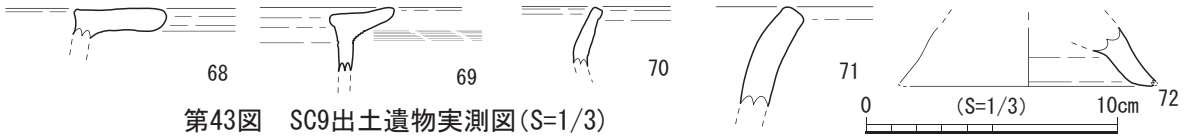
SC9は4区6854・7054グリッドに位置する。規模は長軸3.46m+、短軸3.30m+、深さ16cm を測る。竪穴建物の東側コーナー付近であろう。しかしながら周壁溝、柱穴、硬化面等が見当たらないことなどから竪穴建物とすることは消極的である。遺物は覆土から出土した。**68～72**は甕の口縁部、台付甕の脚部片である。**68**、**69**は逆Ｌ字状の口縁部で端部は丸い。**70**、**71**は外傾する口縁部で端部は方形である。**72**は台付甕の脚部片である。脚部の開きは狭く端部はやや尖る。



第42図　SC9平・断面図(S=1/40)

検出状況（北東から）　断面状況（北西から）　完掘状況（北から）

図版32　SC9遺構状況



第43図　SC9出土遺物実測図(S=1/3)

図版33　SC9出土遺物

第19表　SC9出土土器観察表

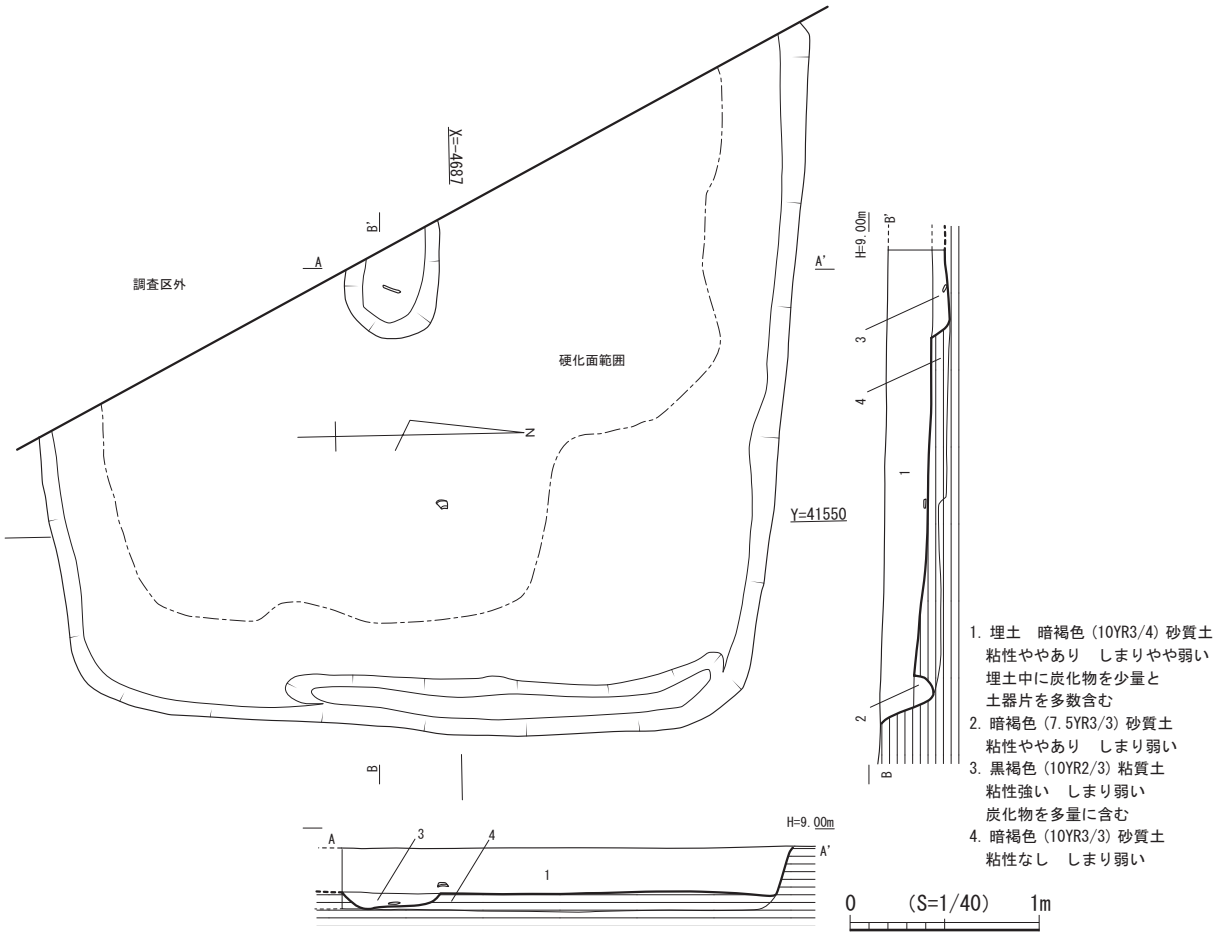
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
68	甕	口縁部	—	残存(1.2)	—	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	雲母、長石 褐色粒子	
69	甕	口縁部	—	残存(2.4)	—	ナデ ハケメ	ヘラケズリ	10YR5/2 灰黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良	長石、角閃石、雲母	
70	甕	口縁部	—	残存(2.3)	—	ハケメ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y4/2 暗灰黄	良	雲母、褐色粒子	
71	甕	口縁部	—	残存(3.9)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良	長石、石英	
72	台付甕	脚部	—	残存(2.3)	(10.5)	ナデ	ナデ	2.5Y6/6 橙	2.5Y6/4 にぶい橙	良	長石、石英	

⑱ TAK201407　4区 SC12(竪穴建物)(第44・45図　図版34・35　表20)

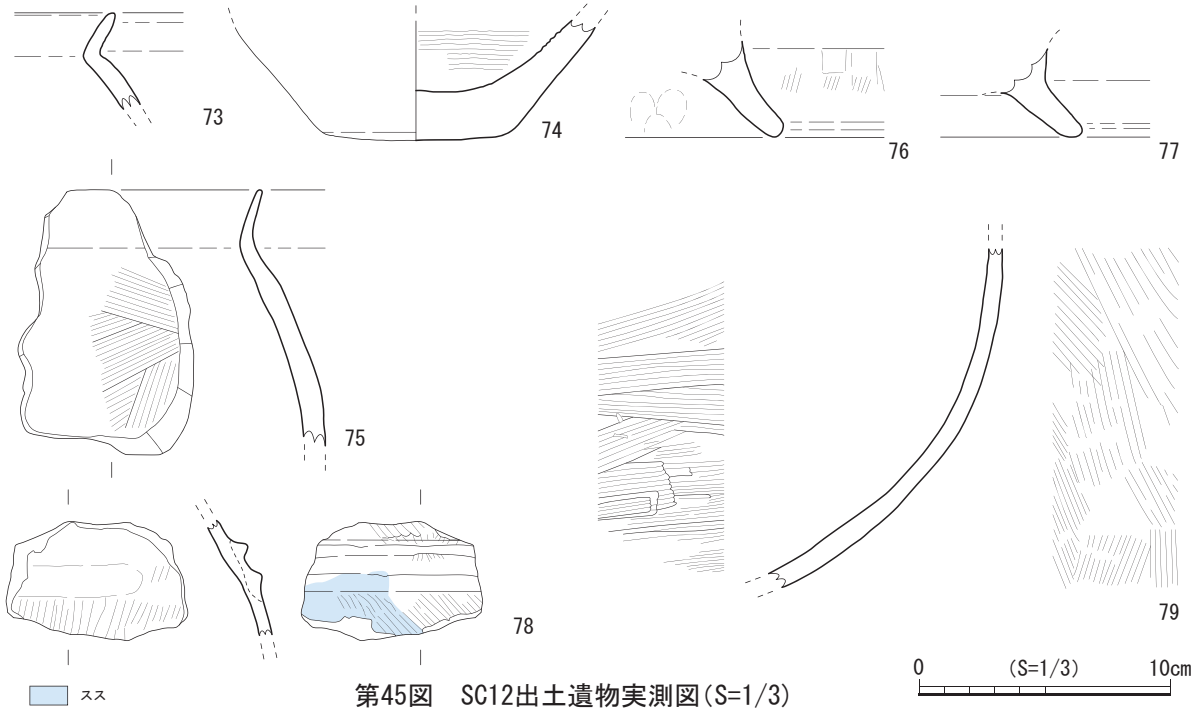
SC12は4区6854グリッドに位置する。SC10(古墳時代竪穴建物㉒223頁)から切られている。規模は長軸3.74m+、短軸3.94m、深さは中心で0.34m を測る長方形の平面プランを呈する。約1／2が調査区外のため竪穴建物内の施設が判然としない。柱穴は確認できなかった。中央に長軸0.60m+、短軸0.50m、深さ10cm の楕円形の平面プランを呈する炉跡を検出した。硬化面は全体に残存する。周壁溝は東側の一部に残存しており幅0.32m、深さ10cm を測る。遺物は覆土及び床面からの出土である。**73～75**は甕口縁部～底部片である。**73**は短く外傾する口縁部で端部は丸い。**74**は底部片で平底である。**75**は緩やかに外反し端部は細く丸い。**76**、**77**は台付甕の脚部片である。脚部の開きは狭く端部は丸い。**78**、**79**は壺の胴部片である。**78**は二条三角凸帯を有する。内外面に細かなハケメ調整を施す。

検出状況（北から）　床面検出状況（北から）　完掘状況（北から）

図版34　SC12遺構状況



第44図　SC12平・断面図(S=1/40)



第45図　SC12出土遺物実測図(S=1/3)

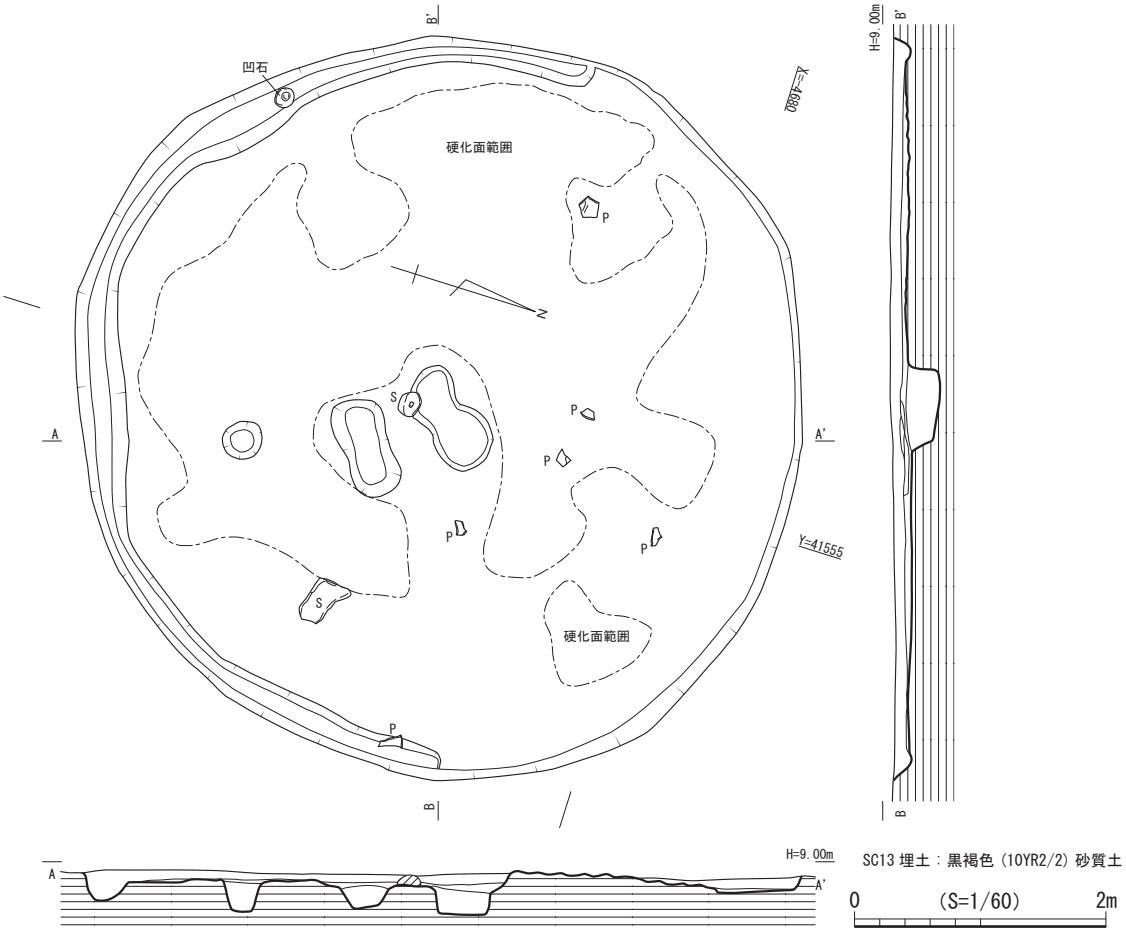
図版35　SC12出土遺物

第20表　SC12出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
73	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR8/1 灰白	良	石英、角閃石	
74	甕	底部	—	残存 (4.7)	(3.5)	ナデ	ハケメ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	長石、石英	底部は凸レンズ状である
75	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ハケメ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母 角閃石	
76	台付甕	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ 指オサエ	5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/8 橙	良好	長石、石英	
77	台付甕	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR7/6 橙	2.5YR6/6 橙	良	長石、黒色粒子	
78	壺	胴部	—	残存 (4.6)	—	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR7/3 にぶい橙	良	雲母、角閃石 褐色粒子、石英	二条の凸帯あり 外面にスス付着
79	壺	胴部	—	—	—	ハケメ ナデ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR4/1 褐灰	良	雲母、長石、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	

⑲ TAK201407　4区 SC13(竪穴建物)(第46・47図　図版36・37　表21・22)

SC13は4区6654・6854グリッドに位置する。規模は中心長軸5.92m、中心短軸5.74m、深さ12cm を測る円形の平面プランを呈する。柱穴は SP1だけでその他は検出できなかった。中央土坑は2基確認し、規模は長軸0.80m、短軸0.40m、深さ0.20m を測る横長楕円形の平面プランを呈する。硬化面はほぼ全面に残存する。周壁溝は円形建物の南側に残存し幅20～40cm、深さ5～20cm を測る。全体的に削平が著しい。遺物は覆土及び床面から出土した。**80～85**は甕の口縁部～胴部片である。**84**は逆Ｌ字状の口縁部を呈し、その他は、くの字口縁で端部は丸い。**86～90**までは壺の胴部片である。二条・三条刻目三角凸帯を付設する。**91**は壺底部片で緩やかに凸レンズ状を呈する。**92**は甕底部片で平底である。**93**、**94**は、大きさは違うが形状は同じで円形の凹石である。石材はいずれも花崗岩である。



第46図　SC13平・断面図(S=1/60)

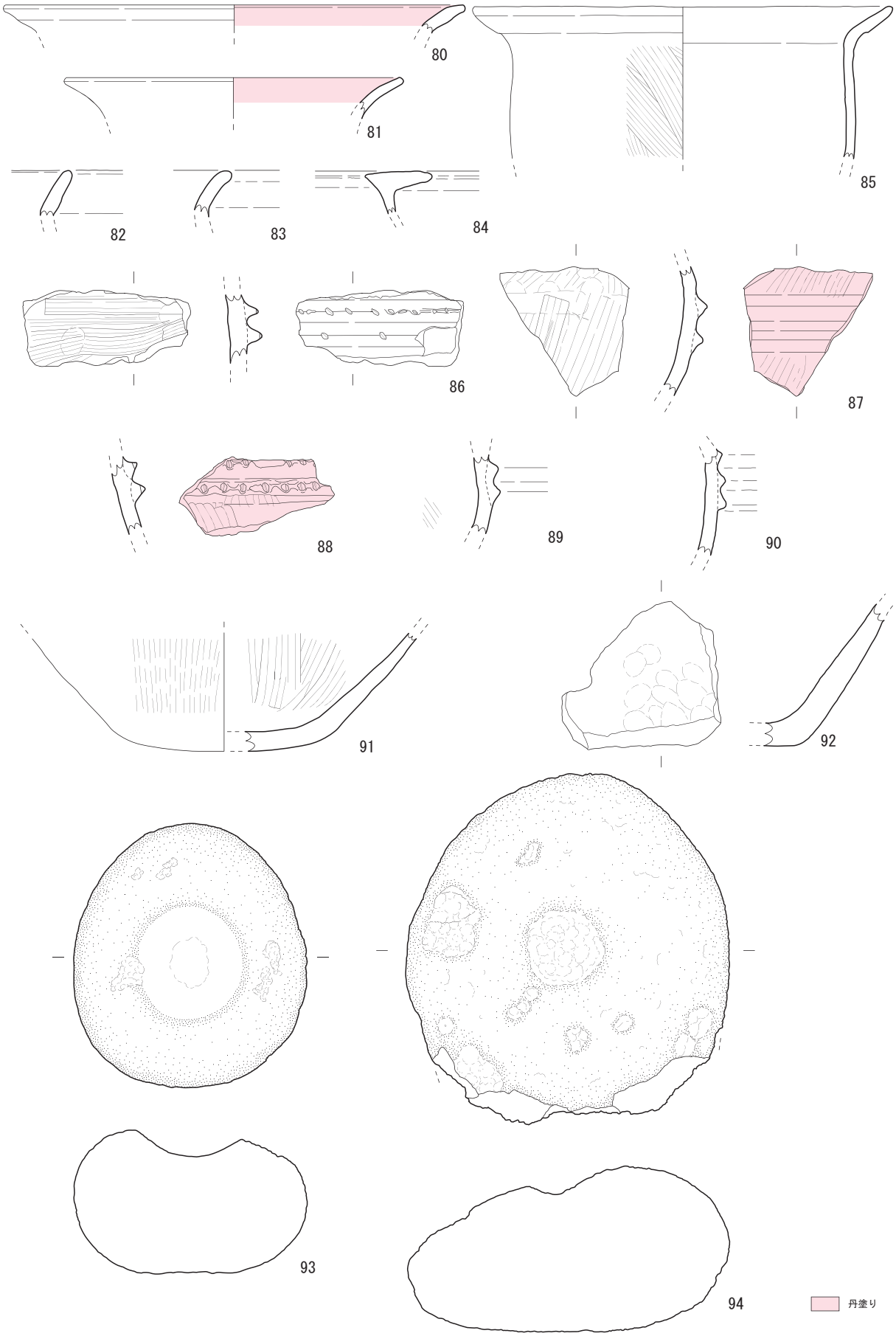
検出状況（北西から）

床面検出状況（北西から）

完掘状況（北西から）

凹石出土状況(周溝より)(北から)

図版36　SC13遺構状況



第47図　SC13出土遺物実測図(S=1/3)

0　(S=1/3)　10cm

図版37　SC13出土遺物

第21表　SC13出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
80	甕	口縁部	(24.6)	残存(1.5)	—	ナデ	ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR7/3 橙	良	石英、長石、雲母 赤色粒子、角閃石	口縁部内面に僅かに丹塗りあり
81	甕	口縁部	(18.0)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 にぶい橙	2.5YR5/6 暗赤褐	良好	石英、長石、雲母 角閃石、褐色粒子	口縁部内面に僅かに丹塗りあり
82	甕	口縁部	—	残存(2.7)	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石、角閃石、雲母	
83	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	長石	
84	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	5YR7/8 橙	良	雲母、長石 褐色粒子	
85	甕	口縁部～胴部	(22.2)	残存(8.1)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR3/1 黒褐	良	長石、角閃石 石英、赤色粒子	
86	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ハケメ	7.5YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母	二条の刻目凸帯あり
87	壺	胴部	—	—	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	良	長石、石英、雲母 黒色粒子	二条の三角凸帯あり 外面に丹塗りあり
88	壺	胴部	—	残存(4.2)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良	石英、角閃石	二条の刻目三角凸帯あり 外面に丹塗りあり
89	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	二条の三角凸帯あり
90	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ハケメ 指オサエ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	褐色粒子	三条の三角凸帯あり
91	壺	底部	—	残存(6.3)	—	ナデ	ハケメ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石	底部は凸レンズ状である
92	甕	底部	—	残存(6.6)	—	ハケメ ナデ	ナデ 指オサエ	10YR7/8 黄橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、褐色粒子	底部は僅かに凸レンズ状である

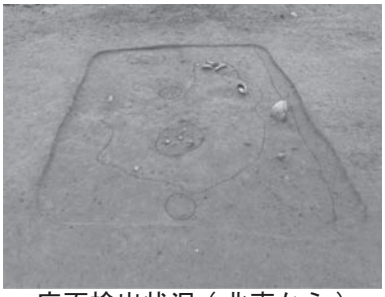
第22表　SC13出土石器観察表

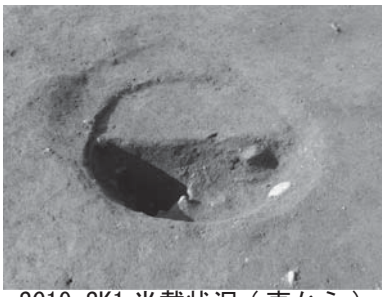
遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
93	凹石	花崗岩	142.00	125.00	77.00	1,935.00	
94	凹石	花崗岩	189.00	174.00	89.00	3,570.00	側面一部欠損

⑳ TAK201407　2区 SC19(竪穴建物)(第48・49図　図版38・39　表23)

SC19は2区7256グリッドに位置する。規模は中心長軸3.76m、中心短軸3.10m、中心の深さ6cm を測る長方形の平面プランを呈する。土坑 SK1は直径0.54m、深さ0.30m の円形の平面プラン。柱穴 SP1は直径0.34m、深さ0.20m、SP2は直径0.30m、深さ0.16m を測る。こうした土坑、柱穴は1.1m の間隔で直線状に並ぶ。周壁溝は西側のみに構築され幅20～40cm、深さ10cm を測る。硬化面は中心部分に残存する。遺物は覆土上面から出土した。**95**は甕口縁部～胴部片である。口縁部は外湾し端部は方形である。**96**は甕の口縁部片である。逆Ｌ字状の口縁部で端部は丸い。

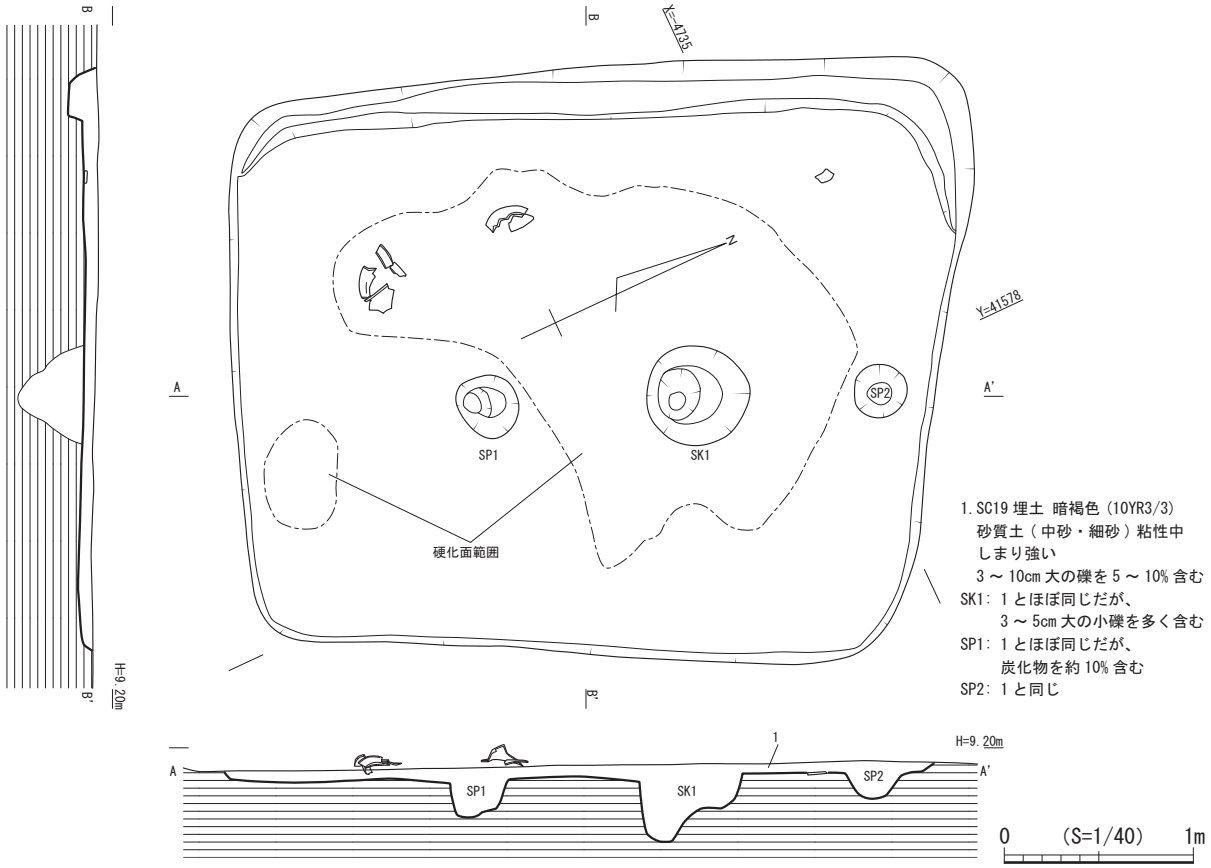
検出状況（北から）


床面検出状況（北東から）

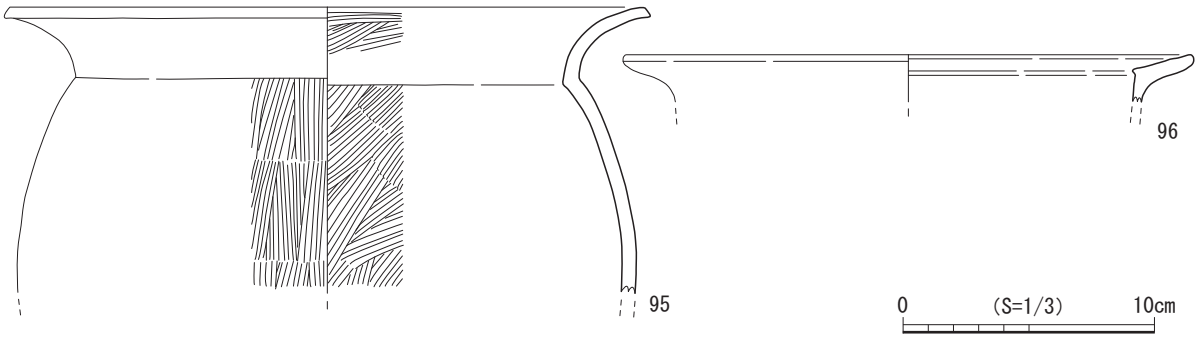

SC19-SK1 半截状況（東から）

完掘状況（北から）

図版38　SC19遺構状況



第48図　SC19平・断面図(S=1/40)



第49図　SC19出土遺物実測図(S=1/3)

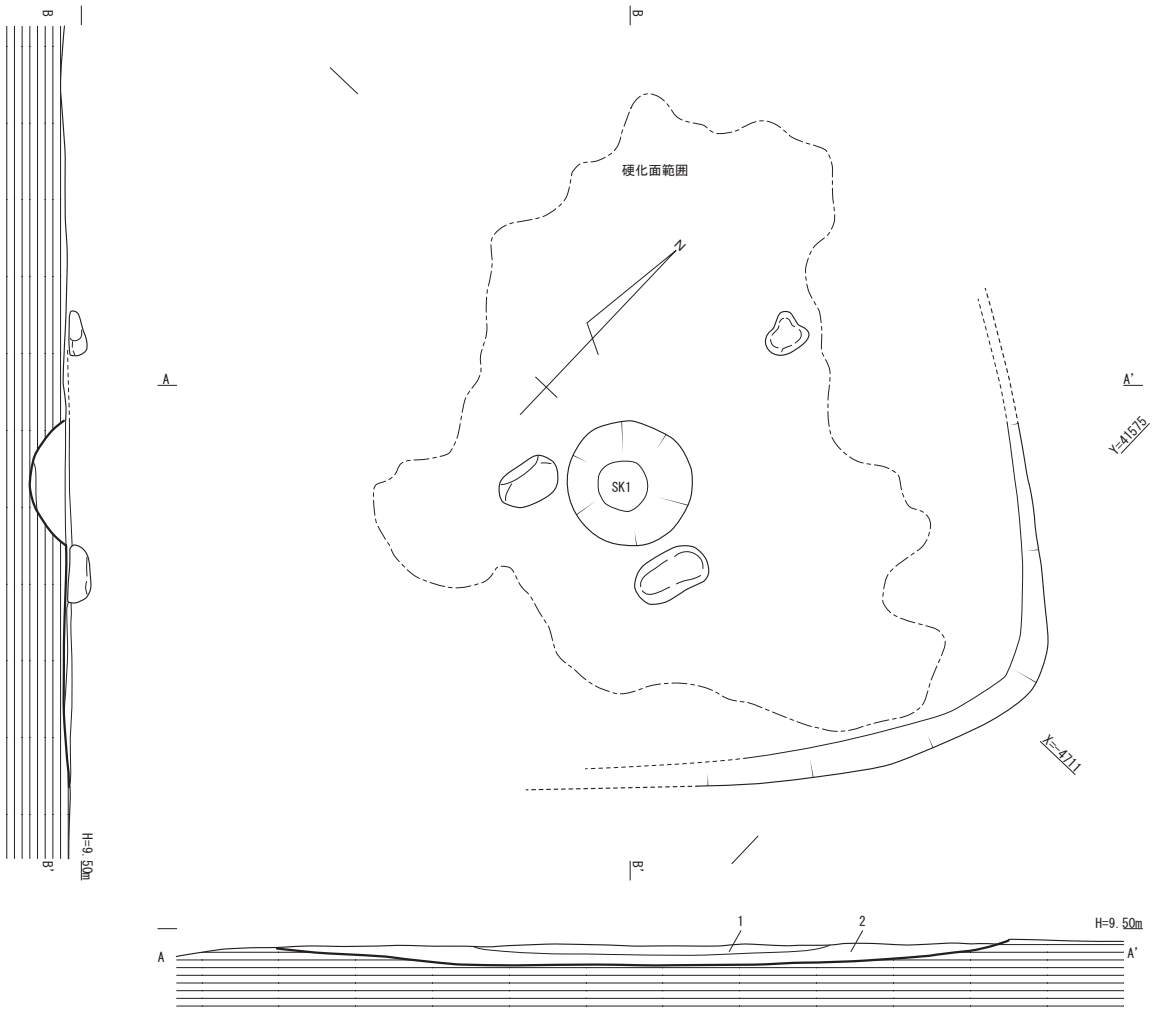
図版39　SC19出土遺物

第23表　SC19出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
95	甕	口縁部～胴部	25.2	残存(11.3)	—	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	長石、雲母 赤色粒子	口縁部は完形である
96	甕	口縁部	(22.4)	残存(1.8)	—	ナデ	ヘラケズリ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR5/2 灰褐	良	雲母、角閃石 褐色粒子、石英	

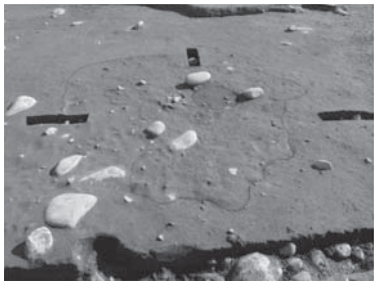
㉑ TAK201407　2区 SC20(竪穴建物)(第50図　図版40)

SC20は2区7056グリッドに位置する。SC20は全体に削平が著しく建物のコーナーの一部の検出である。また直径66cm、深さ20cm の円形の平面プランの土坑を検出した。土坑の横には円礫が2個出土した。炉跡か。竪穴建物に伴う施設が殆ど失われており、また出土遺物も小細片であるため時代等の判断は極めて難しい。



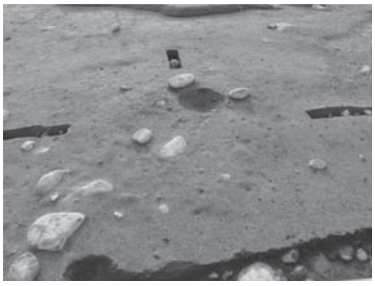
1. 灰黄褐色土 (10YR5/2) に黒褐色土 (10YR2/3) を 50% 以上含む
　しまり強い 粘性なし 硬化面と思われる
2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 砂質土 しまりあり 粘性なし
SK1: 黒褐色土 (10YR2/3) に黒色土 (5YR1.7/1) がまだらに混合する
　しまりあり 粘性なし 約 3 ～ 5cm の小礫を約 1% 含む

第50図　SC20平・断面図(S=1/40)



検出状況（北西から）

断面状況（南西から）



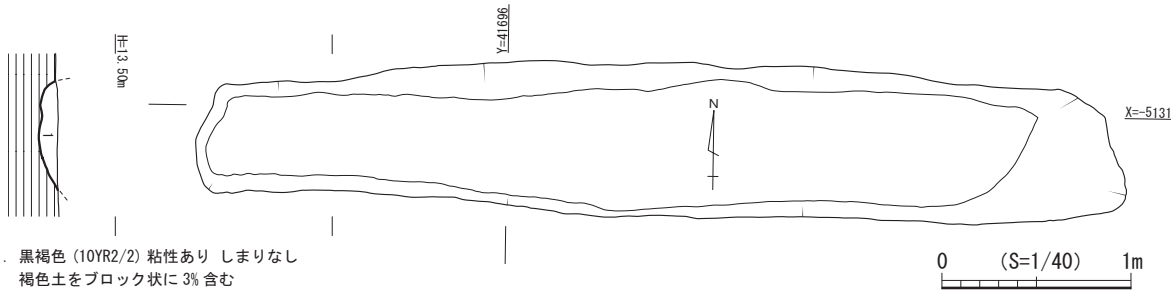
完掘状況（北西から）

図版40　SC20遺構状況

(3)溝(SD)

① TAK201403　3区 SD4(溝)(第51・52図　図版41・42　表24)

SD4は3区1268グリッドに位置する溝である。規模は長軸4.9m、短軸0.6m、深さ10cm を測る。溝は全体的に浅く、遺物も散発的に出土した。器種は袋状口縁壺、甕の胴部片等が出土した。**97**は袋状口縁壺の口頸部片である。口縁部は欠損し口頸部端に刻目を施す。



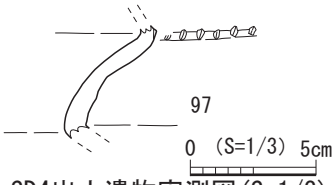
第51図　SD4平・断面図(S=1/40)

検出状況 (1)

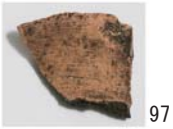
検出状況 (2)

断面 (西から)

図版41　SD4遺構状況



第52図　SD4出土遺物実測図(S=1/3)



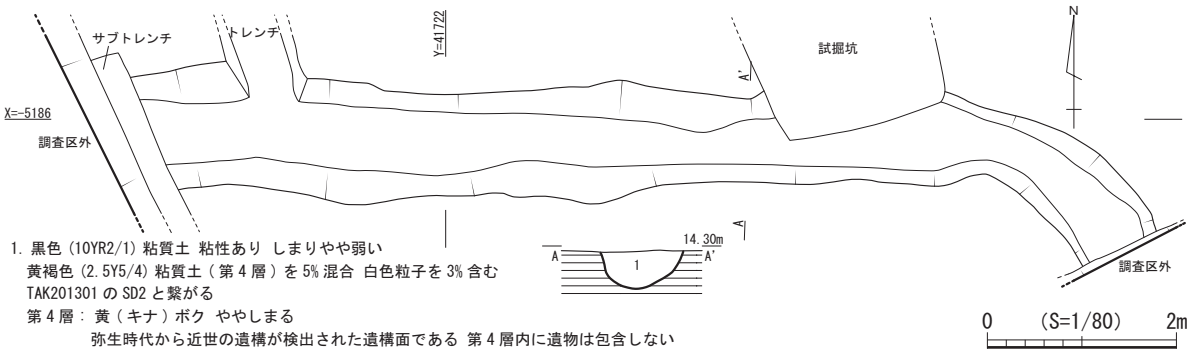
図版42　SD4出土遺物

第24表　SD4出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
97	壺	口頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR4/2 灰黄褐	良	長石	袋状口縁壺　器壁が薄い

② TAK201403　3区 SD6(溝)(第53・54図　図版43・44　表25)

SD6は3区1870・1872グリッドに位置する。東西方向に構築され東側はやや南方向に延びるが調査区外のため判然としない。規模は長さ約11.0m+、幅0.7～1.1m、深さ0.4m を測る。溝の断面形は半月状である。遺物は覆土から器台片、壺片、甕片等が多く出土した。この溝は SC2等(調査区外につき竪穴建物が存在する可能性があるため SC2等とした。SC2は18頁で報告済み)を囲む区画溝の可能性がある。遺物は小片ではあるが器台片が出土した。**98～103**はくびれ部付近の器台片である。横方向に粗いハケメ調整を行い多くの砂粒を含む。焼成は良である。時期は弥生時代後期後半頃であろう。



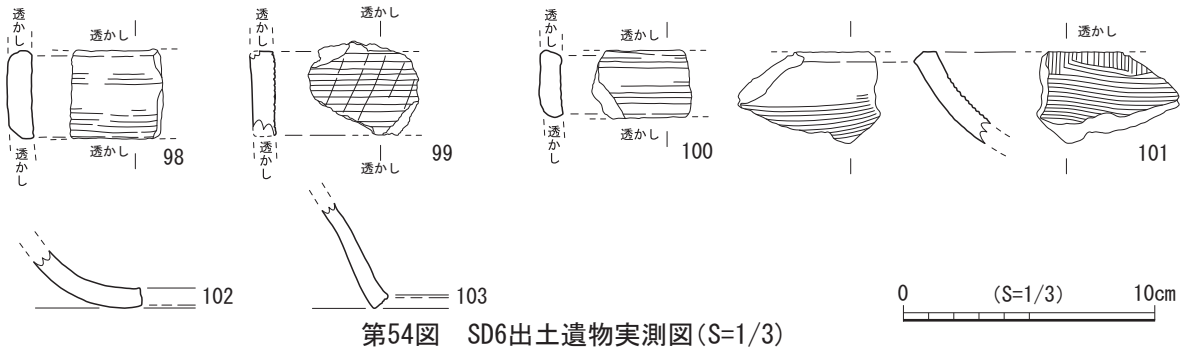
1. 黒色（10YR2/1）粘質土 粘性あり しまりやや弱い
黄褐色（2.5Y5/4）粘質土（第4層）を5%混合 白色粒子を3%含む
TAK201301のSD2と繋がる
第4層： 黄（キナ）ボク ややしまる
弥生時代から近世の遺構が検出された遺構面である 第4層内に遺物は包含しない

第53図　SD6平・断面図(S=1/80)

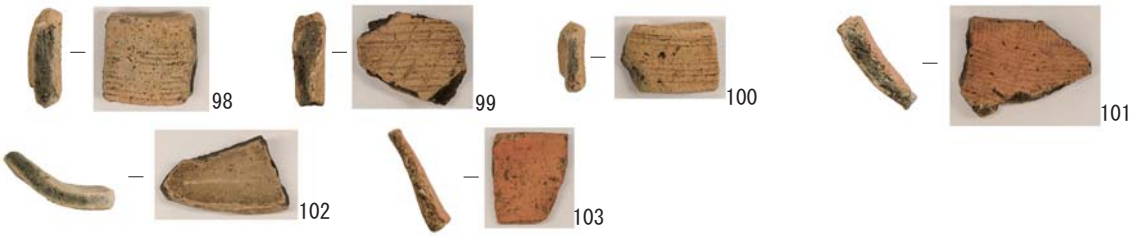
断面（東から）

完掘状況（南東から）

図版43　SD6遺構状況



第54図　SD6出土遺物実測図(S=1/3)



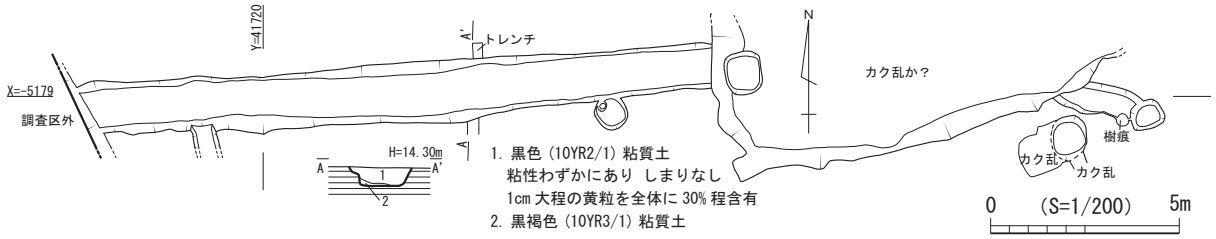
図版44　SD6出土遺物

第25表　SD6出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
98	器台	くびれ部	—	残存(3.45)	—	ハケメ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/6 橙	良	石英	剥離が目立つ
99	器台	くびれ部	—	残存(3.3)	—	ハケメ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英	
100	器台	くびれ部	—	残存(2.65)	—	ハケメ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	石英	剥離が目立つ
101	器台	くびれ部	—	残存(3.6)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石	
102	器台	脚部	—	残存(2.2)	—	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	長石	
103	器台	脚部	—	残存(4.1)	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、石英	

③ TAK201403　3区 SD7(溝)(第55・56図　図版45・46　表26)

SD7は3区1670・1672グリッドに位置する。東西方向に構築された溝で長さ約15m+、幅1.3～1.6m、深さ0.5m を測る。溝の壁の立ち上がりがやや急である。遺物は器台片、高杯片等が覆土から出土した。**104**は甕口縁部片である。口縁部は直線的で端部は丸い。**105**は器台片である。くびれ部片で粗い横方向のヘラ描き調整を施す。**106～109**は高杯口縁部、脚部片である。**106**は杯端部片で端部は丸い。**107～109**は脚部片で**109**は脚端部で端部は丸い。時期は弥生時代後期後半頃の所産であろう。

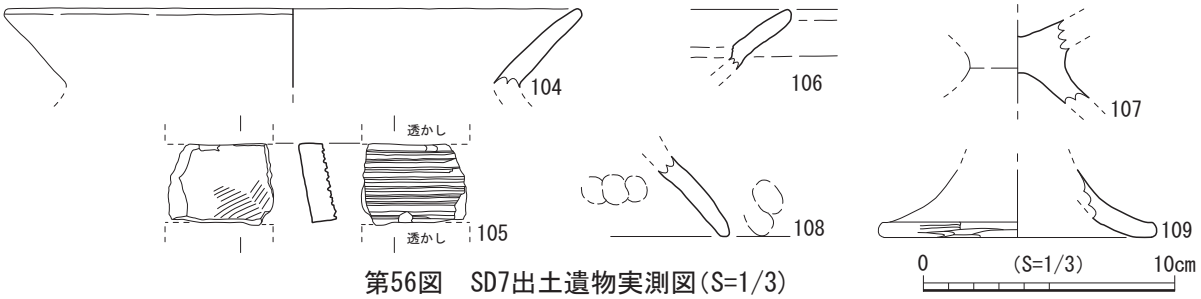


第55図　SD7平・断面図(S=1/200)

完掘状況(1)(東から)

完掘状況(2)(東から)

図版45　SD7遺構状況



第56図　SD7出土遺物実測図(S=1/3)

図版46　SD7出土遺物

第26表　SD7出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
104	甕	口縁部	(22.4)	残存 (22.4)	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、赤色粒子	全体的に粗い作り
105	器台	くびれ部	—	—	—	ヘラ描き	ハケメナデ消し	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	石英、角閃石	
106	高杯	杯部	—	残存 (2.1)	—	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい橙	良	石英	
107	高杯	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石、雲母	
108	高杯	脚部	—	—	—	ナデ 指オサエ	指オサエ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	良	長石、雲母	
109	高杯	脚部	—	残存 (3.6)	(10.6)	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良好	長石、雲母	

④ TAK201404　A6東区 SD3(溝)(第57・58図　図版47・48　表27)

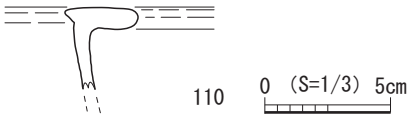
SD3はA6東区8672グリッドに位置する。SK5、SD2から切られている。長さ約16m、幅0.8～1.1m、深さ0.22mを測る。覆土は2層である。遺物は甕口縁部が出土した。**110**は甕の口縁部片である。口縁部は鋤先口縁で端部は丸い。中期末頃であろう。

検出状況（東から）

断面（東から）

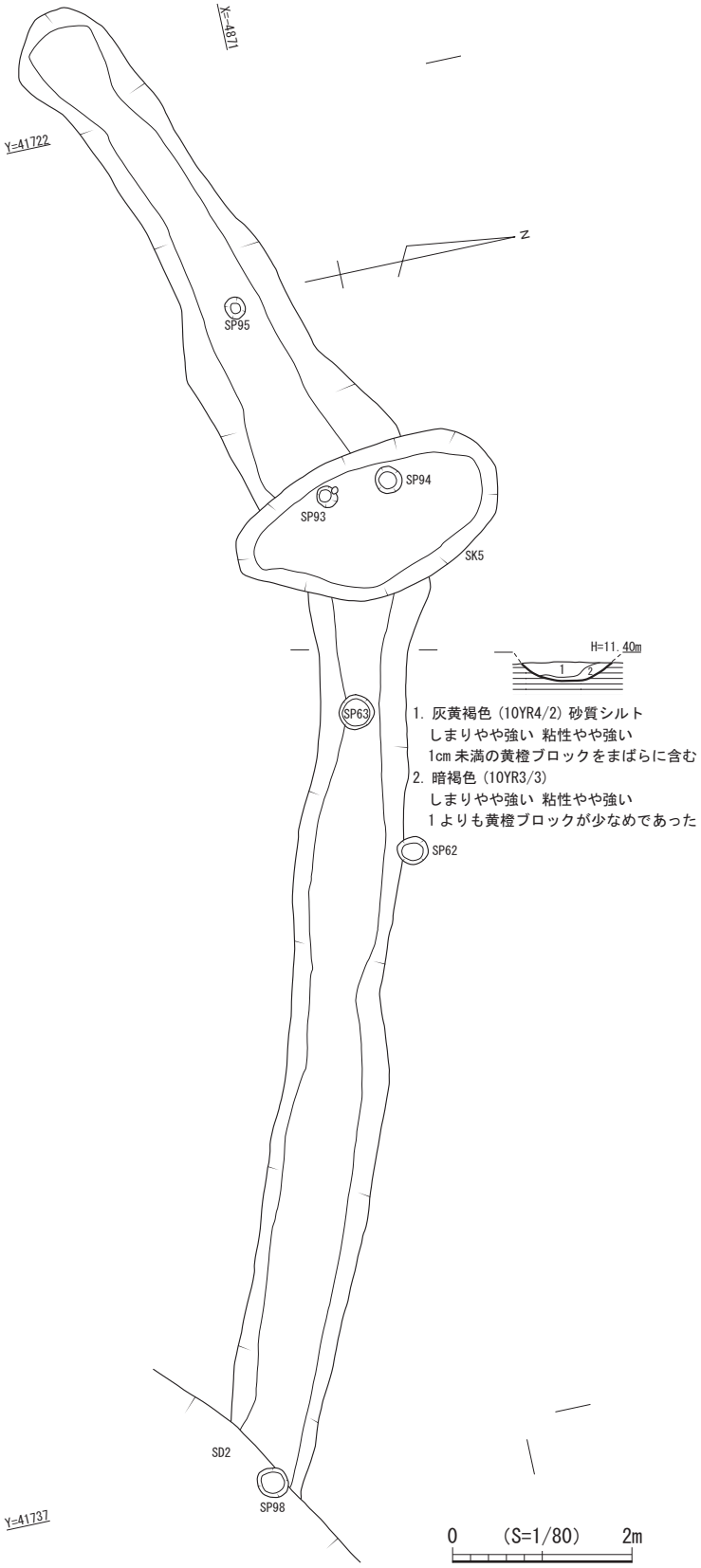
完掘状況（東から）

図版47　SD3遺構状況



第58図　SD3出土遺物実測図(S=1/3)

図版48 SD3出土遺物



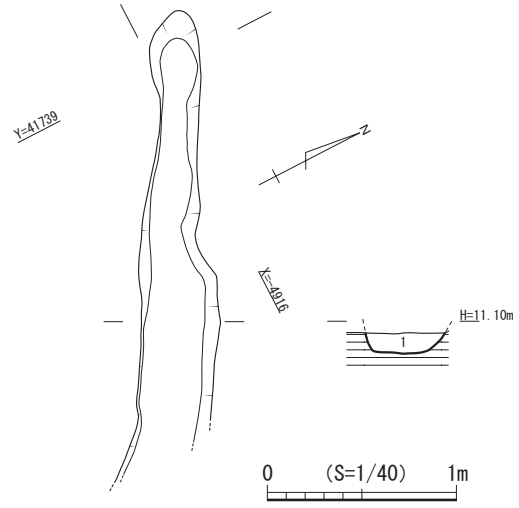
第57図　SD3平・断面図(S=1/80)

第27表　SD3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
110	甕	口縁部	—	残存(3.2)	—	ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	良	長石、石英	全体的に粗い作り

⑤ TAK201404　B6東区 SD5(溝)(第59・60図　図版49・50　表28)

SD5はB6東区9072・9074グリッドに位置する。規模は長さ2.5m+、幅0.2～0.4m、深さ0.1mを測る。遺物は甕、台付甕脚部、壺口縁部片等が出土した。**111**は壺の口縁部～頸部片である。口縁部は直線的でくの字口縁を呈し、頸部に一条の凸帯を有する。**112**、**113**は台付甕の脚部片である。**112**は脚部が欠損しているが**113**は端部まで残存する。端部は丸くやや開く。時期は後期前半頃であろう。



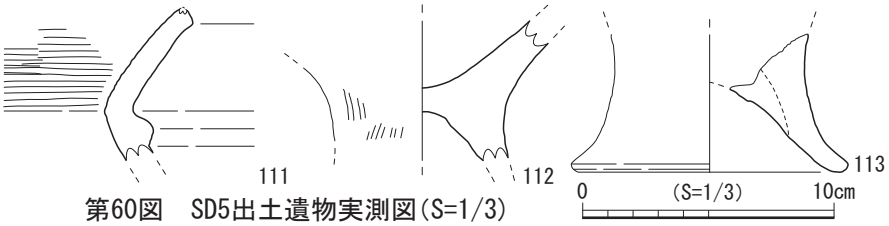
1. 黒褐色 (10YR2/2) 粘質シルト土 しまりやや強い 粘性やや強い
SD 底面から弥生時代高杯脚部 2 点出土

第59図　SD5平・断面図(S=1/40)

土層ベルト（東から）

完掘状況（東から）

図版49　SD5遺構状況



第60図　SD5出土遺物実測図(S=1/3)

図版50　SD5出土遺物

第28表　SD5出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
111	壺	口縁部～頸部	—	残存(6.0)	—	ナデ	横方向のハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	石英、結晶片岩	頸部に一条の凸帯あり
112	台付甕	脚部	—	残存(5.5)	—	ハケメ後ナデ	ケズリ後ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐	良	長石、石英 角閃石	全体的に粗い作り
113	台付甕	脚部	—	残存(5.4)	(10.4)	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	石英、長石、雲母 角閃石	全体的に粗い作り

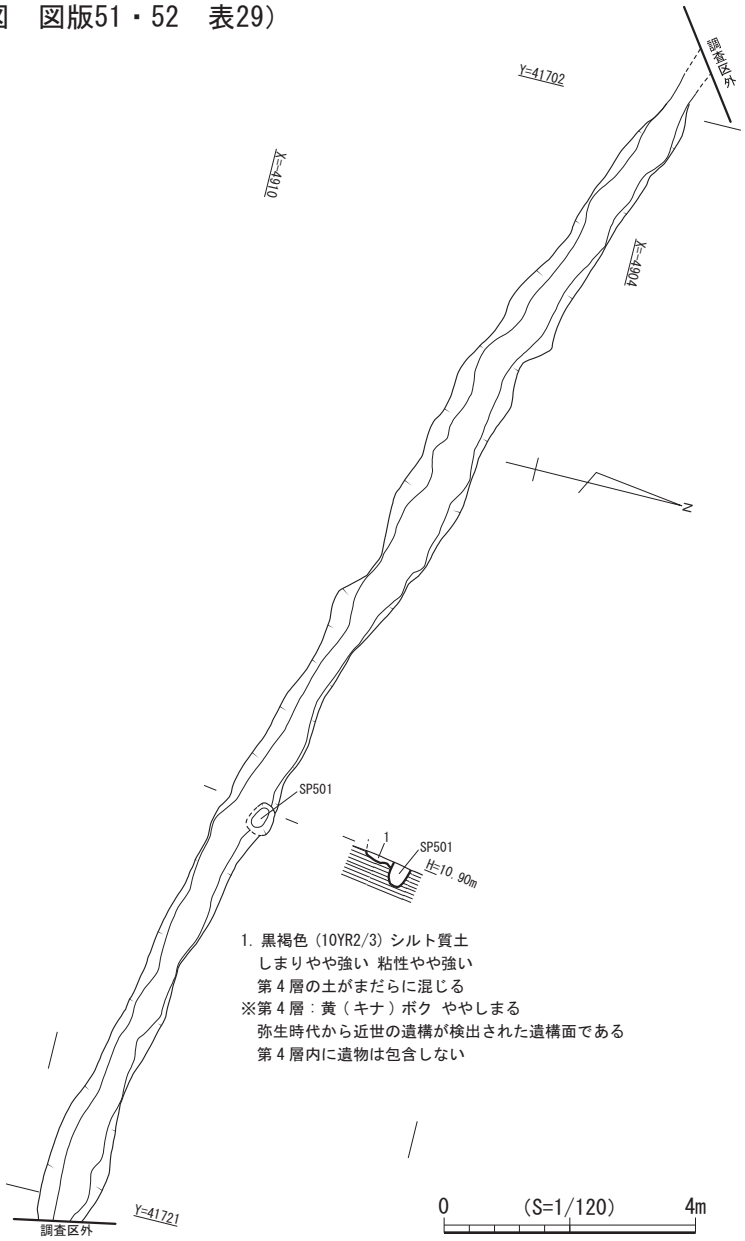
⑥ TAK201404　B6西区 SD6(溝)(第61・62図　図版51・52　表29)

SD6はB6西区9068・9070・9072グリッドに位置する。構築方向は南東～北西であり規模は長さ21m+、幅0.5～1.0m、深さ10cm程である。全体的に浅い。**114**は長頸壺の長頸部で溝底面からの出土である。外面は縦方向に細かなミガキを施している。胴部に繋がる部分に短い段を三段有す。免田式土器で後期後半頃の所産であろう。

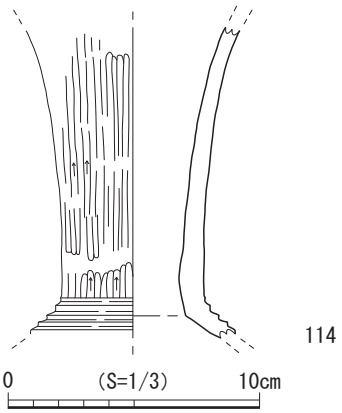
半截状況（東から）

完掘状況（東から）

図版51　SD6遺構状況



第61図　SD6平・断面図(S=1/120)



第62図　SD6出土遺物実測図(S=1/3)

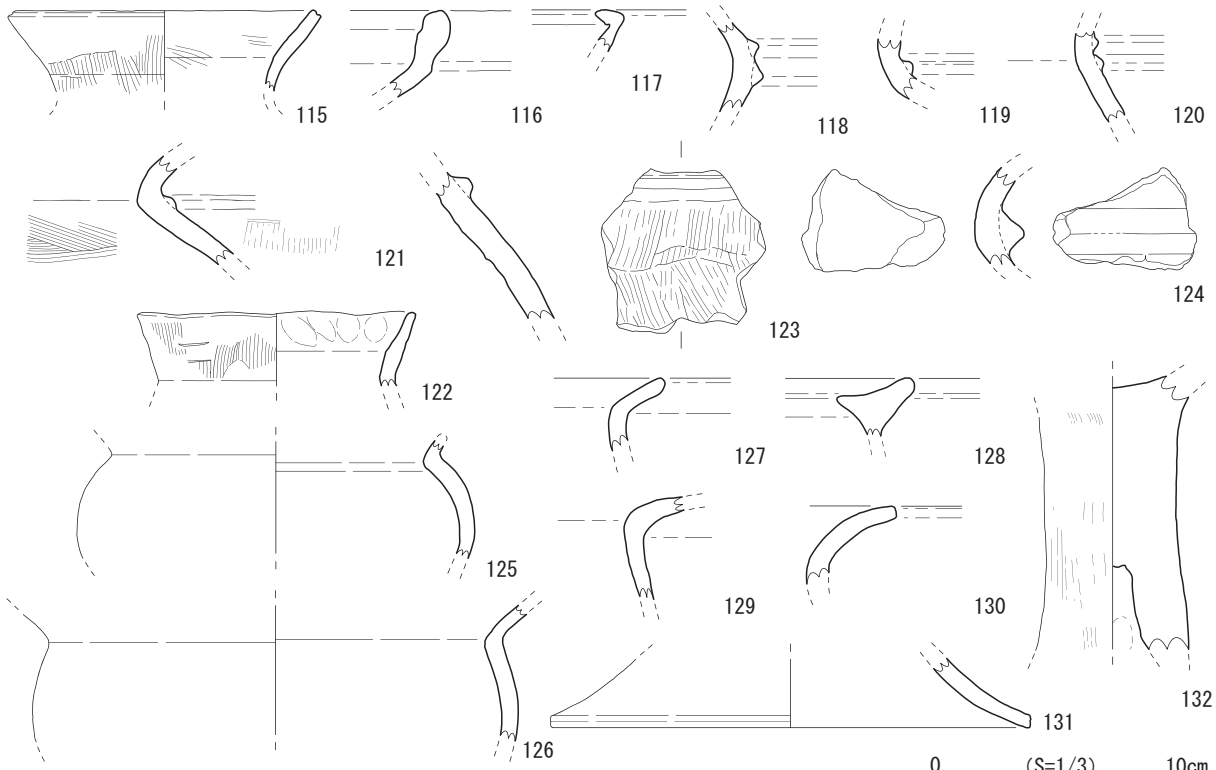
図版52　SD6出土遺物

第29表　SD6出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
114	長頸壺	頸部	—	残存(12.2)	—	ミガキ	ナデ	2.5YR4/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	良	角閃石、雲母	免田式

⑦ TAK201405　3・4区 SD16(溝)(第63・64図　図版53・54　表30)

SD16は3・4区7862・7864・7866グリッドに位置し東西方向に構築された溝である。長さ42m+、幅0.5m～2.0m、深さ0.6m 程を測る。出土遺物は高杯、甕口縁部片、壺口縁部片が出土した。**115**は壺の口縁部片である。口縁部はやや直線的に外反し、端部は方形である。内外面はハケメ調整を施す。**116**は二重口縁壺の口縁部片である。細かな砂粒を含み全体的にナデ調整を施している。丁寧な仕上げである。**117**は複合口縁壺の口縁部片である。端部はやや丸い。**118**は壺胴部片で二条の三角凸帯を有す。**119～121**は壺の頸部小片である。頸部に一条の三角凸帯を有し、**120**は二条の三角凸帯を有す。**122**は壺の口縁部片である。外面は縦方向にハケメ調整を施し、内面は指圧痕が残る。**123**は壺の頸部片である。頸部に三角凸帯を有し、外面はハケメ調整を施している。**124**は壺の胴部片である。一条の三角凸帯を有す。**125**は壺の頸部～胴部片である。口縁部は欠損する。全体にナデ調整を施す。**126**は甕の口頸部片である。口縁端部は欠損する。口縁部～胴部にかけては、くの字口縁を呈する。**127～129**は甕の口縁部片である。**127**、**129**は、くの字口縁を呈し、**128**は鋤先口縁を呈する。**130**、**131**は器台片である。**130**は口縁部片で端部は方形である。**131**は裾部片で端部は方形である。**132**は高杯脚部片である。外面はハケメ調整後ナデ調整を施す。



第63図　SD16出土遺物実測図(S=1/3)

図版53　SD16出土遺物

第30表　SD16出土土器観察表

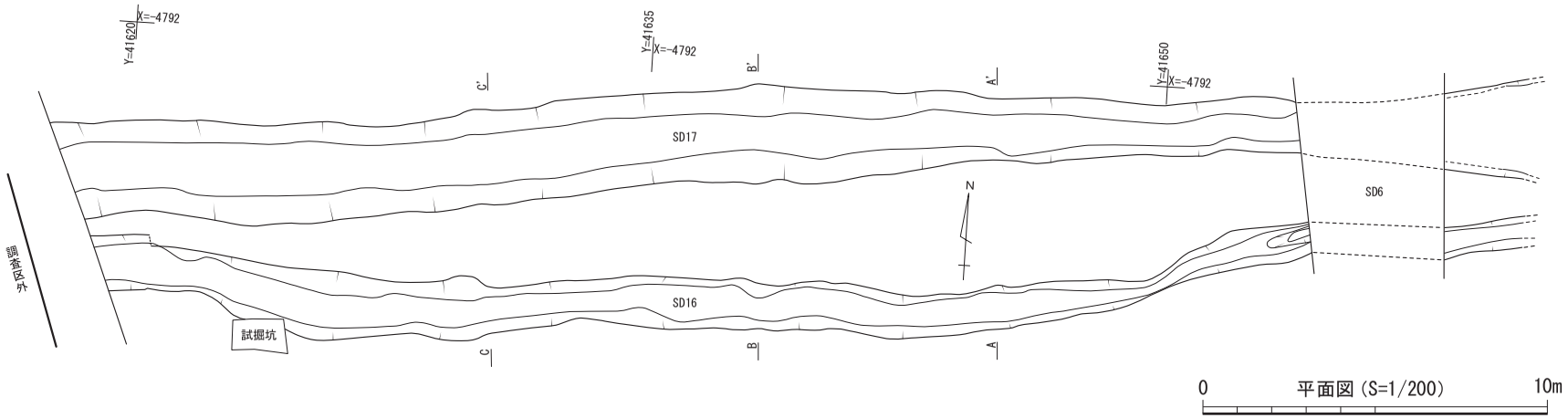
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
115	壺	口縁部	(11.8)	残存(3.2)	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/2明褐灰	良	長石、角閃石	器壁が薄い
116	壺	口縁部	—	残存(3.4)	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4ぶい橙	良	長石、赤色粒子	二重口縁壺
117	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	良	褐色粒子	複合口縁壺
118	壺	胴部	—	残存(3.5)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR6/2灰褐	良	長石、石英	二条の三角凸帯あり
119	壺	頸部	—	残存(2.3)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/1灰白	7.5YR8/3浅黄橙	良	石英、角閃石雲母	一条の三角凸帯あり
120	壺	頸部	—	残存(3.4)	—	ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	良	長石、結晶片岩	二条の三角凸帯あり
121	壺	頸部	—	残存(4.2)	—	薄いハケメ	ハケメ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	良	長石、雲母赤色粒子	一条の三角凸帯あり
122	壺	口縁部	(10.6)	残存(2.9)	—	ハケメ	ナデ指オサエ	7.5YR5/2灰褐	7.5YR6/3にぶい褐	良	長石、結晶片岩	
123	壺	頸部～胴部	—	—	—	ハケメ	ナデ	5YR6/6橙	10YR8/6黄橙	良	長石、褐色粒子	一条の三角凸帯あり
124	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	良	長石、石英	一条の三角凸帯あり
125	壺	頸部～胴部	胴部径(15.8)	残存(4.6)	—	ナデ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良	長石、石英	口縁部欠損
126	甕	口頸部	—	残存(5.3)	—	ナデ	ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	良	長石、石英	口縁部欠損
127	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR7/4淡黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	良	長石、石英角閃石	内外に被熱を受けている
128	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR8/1灰白	7.5YR6/2灰白	良	長石、褐色粒子	
129	甕	頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/2灰白	良	長石、石英	
130	器台	口縁部	—	残存(3.0)	—	ナデ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	良	長石、石英角閃石	
131	器台	裾部	—	残存(2.7)	(19.0)	ナデ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良	長石、石英角閃石	
132	高杯	脚部	—	残存(10.7)	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	7.5YR8/2灰白	10YR7/3にぶい黄橙	良	石英、角閃石褐色粒子	脚部は中実である

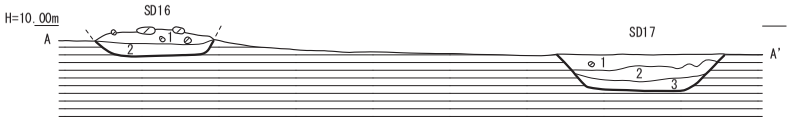
SD16 検出状況（東から）

SD16 完掘・SD17 検出（東から）

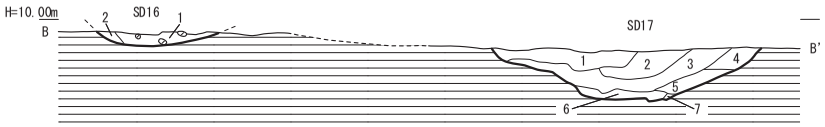
SD16・SD17 完掘（東から）
（左が SD16、右が SD17）

図版54　SD16・SD17遺構状況

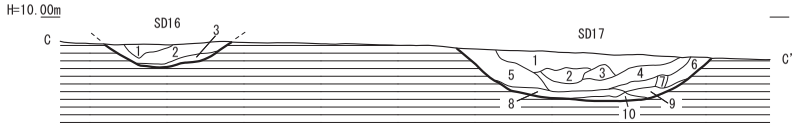




【SD16】1. 暗褐色（10YR3/3）粘質土　粒子の粗い砂が集中する 5 ～ 20cm 大の礫が多く含まれる
2. 暗褐色（10YR3/3）砂質土　しまりがある 黄色粒子 10%、赤色粒子 3% を含む
【SD17】1. 黒褐色（10YR3/2）粘質土　粒子が粗い 白色粒子 10%、黄色粒子 3% を含む
2. 暗褐色（10YR3/3）粘質土　白色粒子 3%、黄色粒子 3% を含む
3. 暗褐色（10YR3/3）砂質土　黄色粒子 3%、赤色粒子 1% を含む



【SD16】1. 暗褐色（10YR3/3）粘質土　5 ～ 10cm 大の礫をまばらに含む　黄色粒子 3% を含む
2. 暗褐色（10YR3/4）砂質土　粘性あり　黄色粒子 5% を含む
【SD17】1. 黒褐色（10YR3/2）粘質土　白色粒子 10%、黄色粒子 3% を含む
2. 暗褐色（10YR3/3）粘質土　白色粒子 3%、黄色粒子 3% を含む
3. 暗褐色（10YR3/4）粘質土　黄色粒子 3%、赤色粒子 1% を含む
4. 暗褐色（10YR3/4）粘質土　黄色粒子 5%、赤色粒子 3% を含む
5. 褐色（10YR4/4）粘質土　2 ～ 3cm 大の礫 10%、黄色粒子 5% を含む
6. 暗褐色（10YR3/3）砂質土　粘性あり　2 ～ 3cm 大の礫 5%、黄色粒子 3%、赤色粒子 3% を含む
7. 暗褐色（10YR3/4）粘質土　黄色粒子 10%、赤色粒子 3% を含む



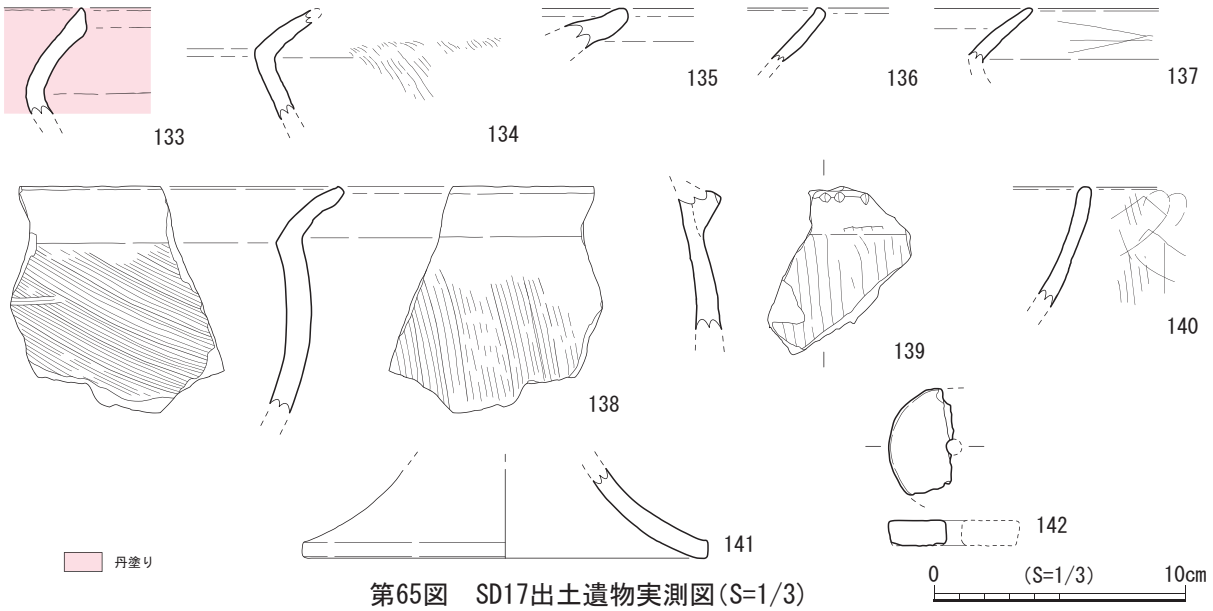
【SD16】1. 暗褐色（10YR3/3）砂質土　粘性あり　粒が粗い　黄色粒子 7%、赤色粒子 1% を含む
2. 暗褐色（10YR3/4）砂質土　黄色粒子 5% を含む
3. 暗褐色（10YR3/4）砂質土　2 より粒子が細かい　黄色粒子 3% を含む
【SD17】1. 黒褐色（10YR3/2）粘質土　黄色粒子 5%、白色粒子 3%、炭化物 1% を含む
2. 暗褐色（10YR3/3）粘質土　黄色粒子 5%、炭化物 3% を含む
3. 暗褐色（10YR3/3）粘質土　黄色粒子 1% を含む
4. にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　炭化物 5%、黄色粒子 1% を含む
5. 黒褐色（10YR3/2）粘質土　黄色粒子 5%、炭化物 1% を含む
6. 暗褐色（10YR3/3）粘質土　黄色粒子 5%、赤色粒子 3% を含む
7. 黒褐色（10YR3/2）粘土ブロック、炭化物を 10% を含む
8. 黒褐色（10YR3/2）粒の大きい砂質だが、粘性あり　炭化物 15%、黄色粒子 3% を含む
9. 黒褐色（10YR3/2）砂質土　黄色粒子 10%、赤色粒子 5% を含む
10. 黒褐色（10YR3/2）砂質土　黄色粒子 5%、赤色粒子 3% を含む

0　断面図(S=1/80)　4m

第64図　SD16・SD17平面図(S=1/200)・断面図(S=1/80)

⑧ TAK201405　3・4区 SD17(溝)(第64・65図　図版54・55　表31・32)

SD17はSD16と並行して構築された溝である。SD17が北側に構築されている。長さ42m+、幅1.8m～3.0m、深さ1.2m～1.6mを測る。出土遺物は石製紡錘車片、甕口縁部片等が出土した。**133～138**は甕の口縁部～胴部片である。**133**、**134**、**138**は、くの字口縁で、**135～137**は口縁部破片である。**138**は内外面ハケ目調整を施す。**139**は壺胴部片で三角凸帯を有する。**140**は鉢の口縁部～体部片で口縁端部は丸い。**141**は器台裾部片で裾端部はやや丸い仕上げである。**142**は石製紡錘車で半分が欠損する。石材は結晶片岩である。これらの遺物から遺構の時期を考えると後期後半頃の所産であろう。



第65図　SD17出土遺物実測図(S=1/3)

図版55　SD17出土遺物

第31表　SD17出土土器観察表

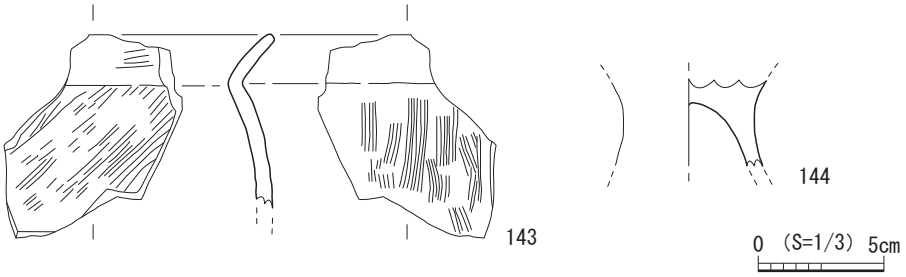
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
133	甕	口縁部～頸部	—	残存(4.2)	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、黒色粒子	内外面に丹塗りあり
134	甕	頸部	—	残存(4.3)	—	ナデ、ハケメ	ナデ	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	良	長石、角閃石 雲母	口縁端部欠損
135	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	角閃石、石英 長石、赤色粒子	砂粒を多く含む
136	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良	角閃石、長石 石英	
137	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR6/6 橙	5YR6/3 にぶい橙	良	角閃石、石英 長石、赤色粒子	
138	甕	口縁部～胴部	—	残存(8.95)	—	縦方向の ハケメ	斜め方向の ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	石英、角閃石、 赤色粒子、長石	
139	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	角閃石、石英 長石、赤色粒子	一条の刻目凸帯あり
140	鉢	口縁部～体部	—	残存(4.7)	—	ナデ	ハケメ後ヘラ 指オサエ	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	良	長石、角閃石 雲母、金雲母	砂粒を多く含む
141	器台	裾部	—	残存(3.5)	(15.5)	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR3/3 浅黄橙	良	長石	砂粒を多く含む

第32表　SD17出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
142	紡錘車	結晶片岩	42.00	23.00	11.00	20.00	

⑨ TAK201406　3・4区 SD6(溝)(第66・67図　図版56・57　表33)

SD6は3・4区6450・6452グリッドに位置する。長さ31.2m、幅0.6～1.0m、深さ6～10cm+程で浅くかなり削平されている。方向は東西方向に構築されている。遺物は全て破片で甕口縁部～胴部片、高杯脚部片等が覆土から出土した。**143**は甕口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字で内外面はハケメ調整を施す。**144**は台付甕脚部で破片である。

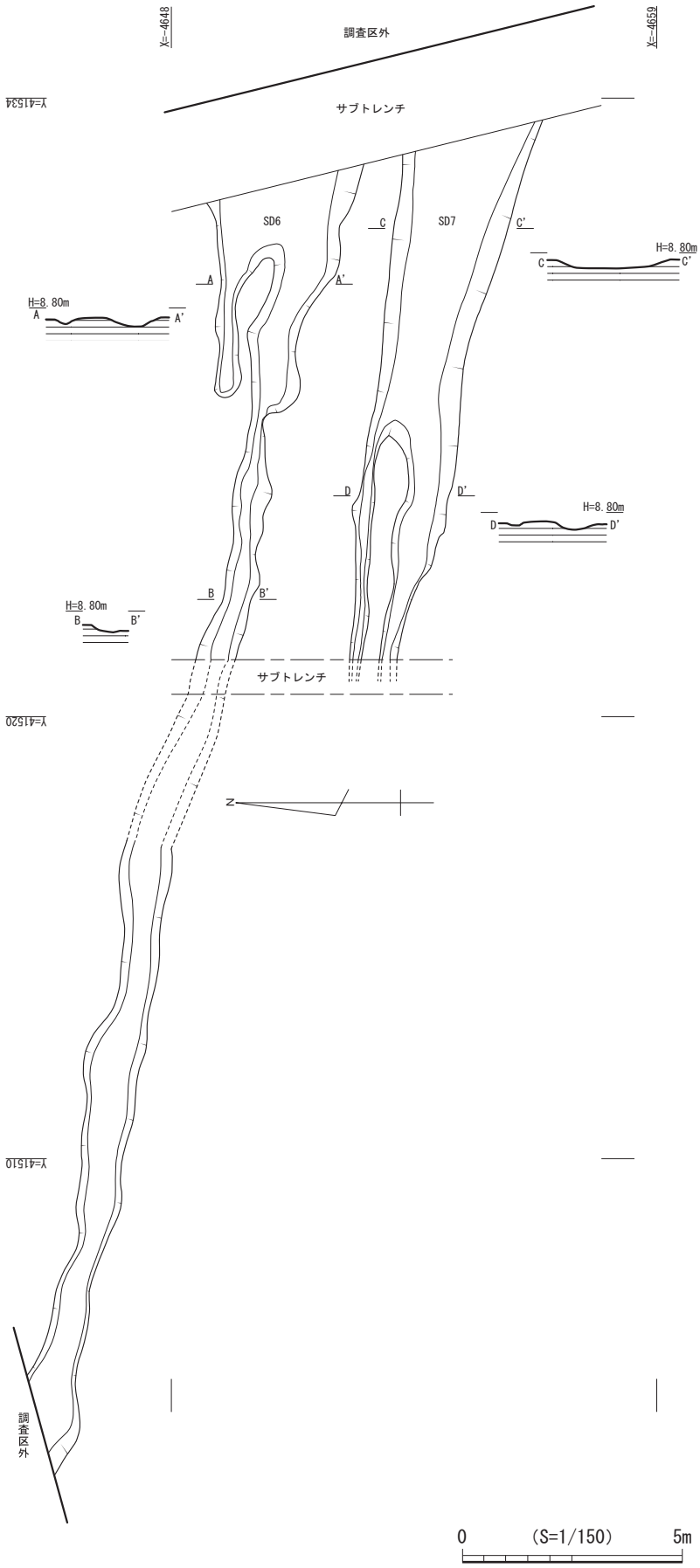


第66図　SD6出土遺物実測図(S=1/3)

図版56　SD6出土遺物

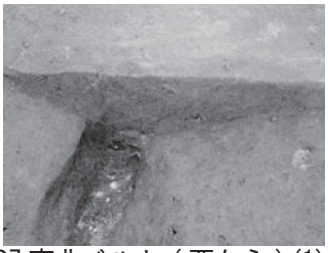
第33表　SD6出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
143	甕	口縁部～胴部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/8 黄橙	良	長石、褐色粒子	
144	台付甕	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、石英 赤色粒子	

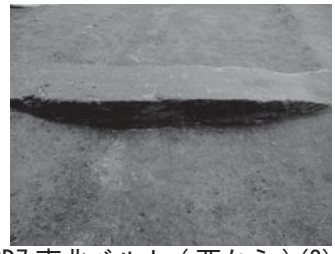


第67図　SD6・SD7平・断面図(S=1/150)

SD7 南北ベルト（東から）

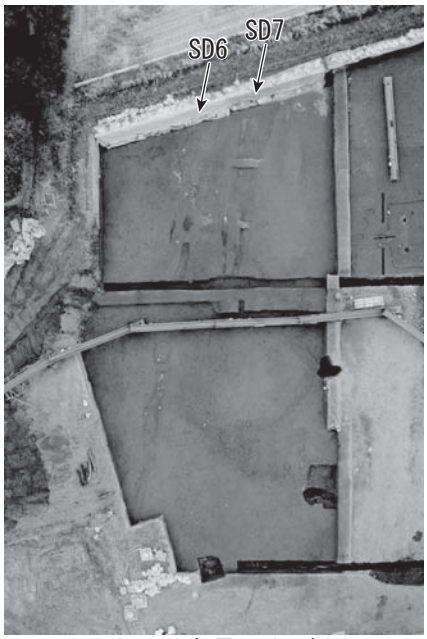


SD7 南北ベルト（西から）(1)



SD7 南北ベルト（西から）(2)

SD7 南北ベルト（西から）(3)

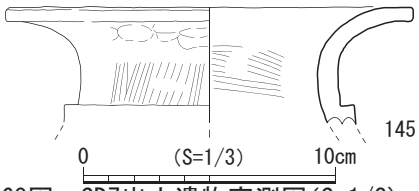


SD6・SD7 全景（左が北）

図版57　SD6・SD7遺構状況

⑩ TAK201406　4区 SD7(溝)(第67・68図　図版57・58　表34)

SD7は4区6452グリッドに位置する。長さ11.8m+、幅1.1～3.0m、深さ12～20cm を測る。方向は東西方向に構築され SD6と並行する。遺物の出土は壺口縁部片。器台片、甕口縁部片が出土した。**145**は壺口縁部～頸部片である。口縁部は大きく外湾し頸部に三角凸帯を有す。内外面にハケメ調整を施し、外面に一部指圧痕が残る。



第68図　SD7出土遺物実測図(S=1/3)

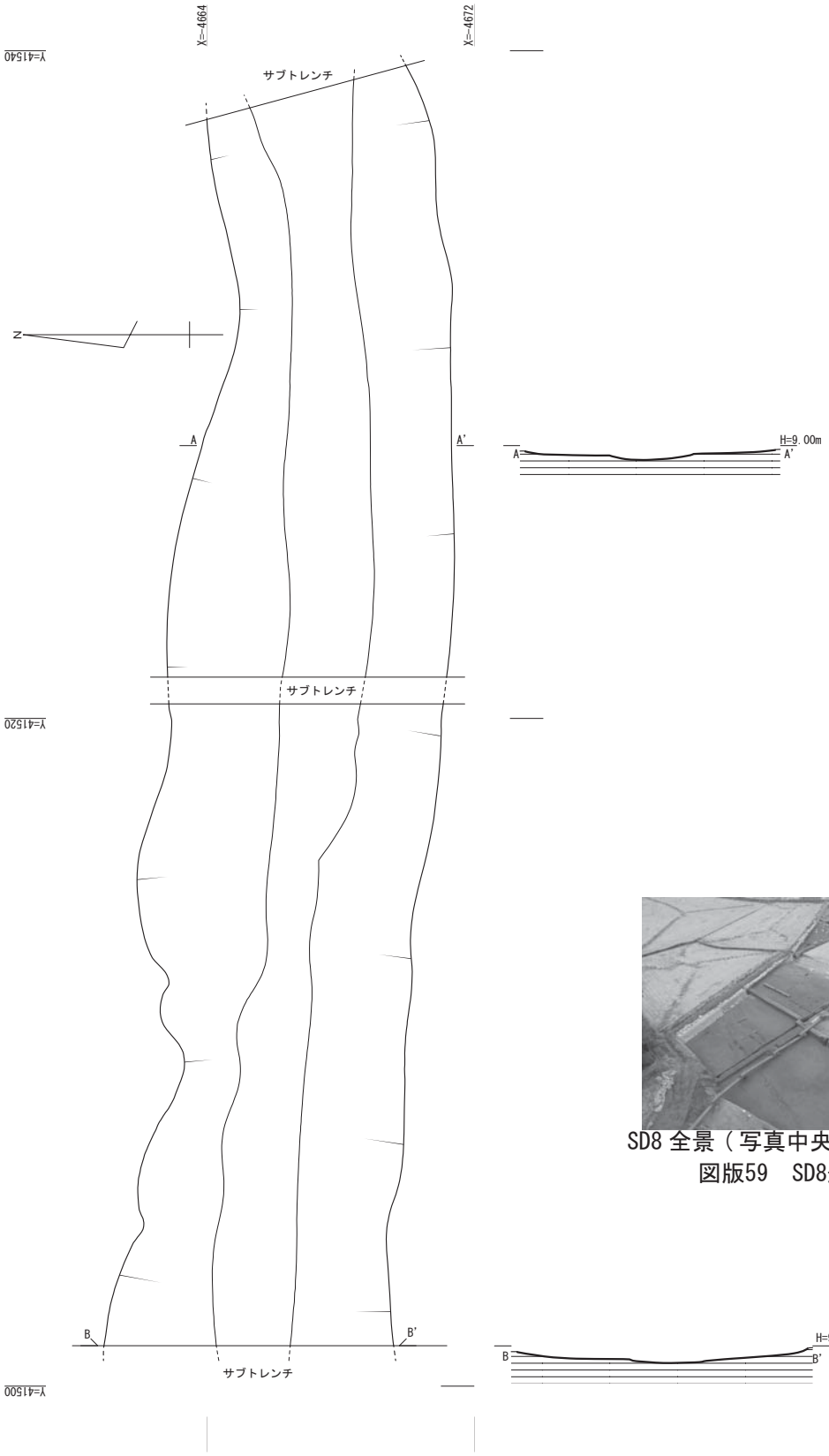
図版58　SD7出土遺物

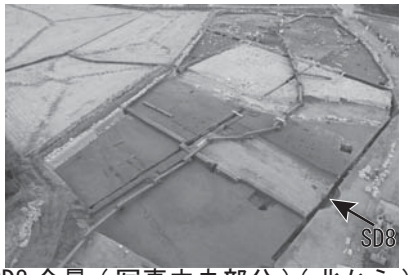
第34表　SD7出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
145	壺	口縁部～頸部	(16.2)	残存(4.6)	—	縦方向のハケメ	ハケメ	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良	長石、角閃石 赤色粒子	

⑪ TAK201406　3・4区 SD8(溝)(第69・70図　図版59・60　表35・36)

SD8は3・4区6650・6652グリッドに位置する。長さ38m+、幅7～8m、深さ0.3～0.37m を測る。構築方向は東西で上面はかなりの削平を受けている。遺物は覆土及び底面から弥生式土器、甕口縁部、胴部片、台付甕脚部片、双角石器等が出土した。**146～149**は甕の口縁部～底部片である。**146**は逆Ｌ字状で端部は丸い。**147**は外湾し端部は丸い。**148**は緩やかに外湾し端部はやや尖る。**149**は底部片で平底である。外面は縦方向のハケメ調整を施す。**150**、**151**は台付甕の脚部片である。いずれも開きは狭い。**152**、**153**は壺の口縁部である。**152**は口縁端部に刻目を施す。**153**は口頸部に三角凸帯を有す。**154**は双角状礫器で石材は泥岩か粘板岩であろう。

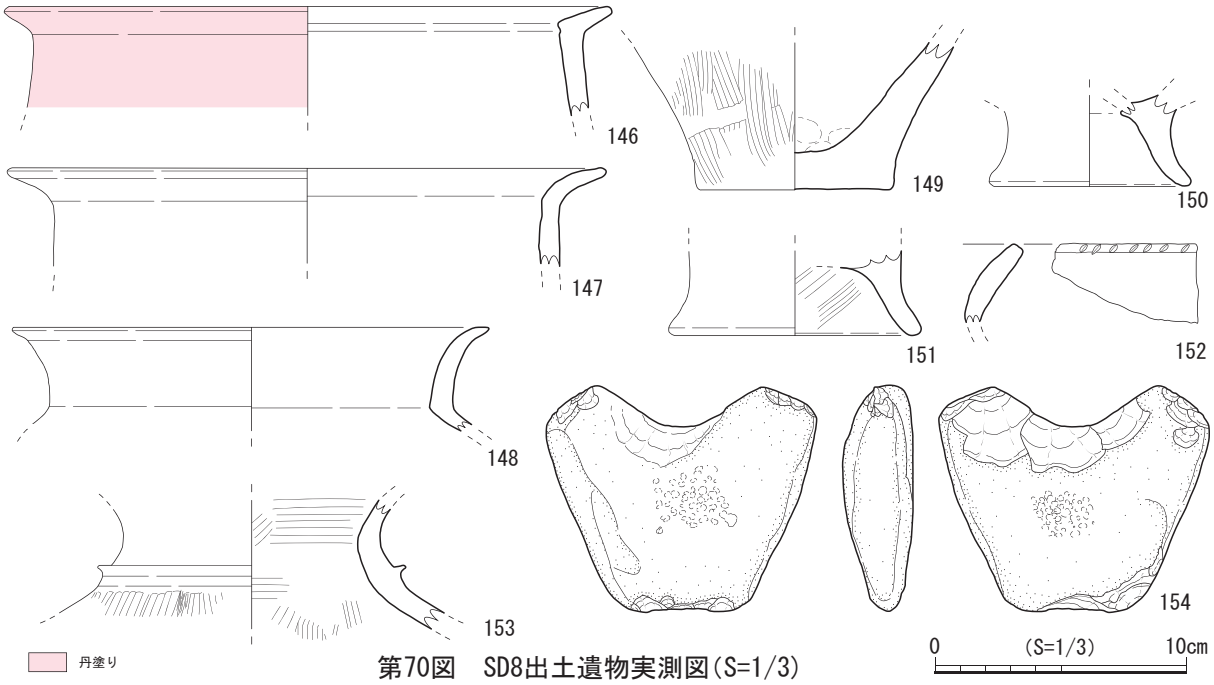




SD8 全景（写真中央部分）（北から）
図版59　SD8遺構状況

0　(S=1/200)　10m

第69図　SD8平・断面図(S=1/200)



第70図　SD8出土遺物実測図(S=1/3)

図版60　SD8出土遺物

第35表　SD8出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
146	甕	口縁部～頸部	(23.7)	残存(4.3)	—	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	長石、角閃石 石英	外面に丹塗りがわずかに残る
147	甕	口縁部	頸部径(20.0)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐	良	長石、石英	
148	甕	口縁部	(18.8)	残存(4.0)	—	ナデ	ナデ	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	良好	長石、石英	
149	甕	底部	—	残存(5.8)	(8.0)	ハケメ	ナデ 指オサエ	2.5YR6/8 橙	7.5YR8/2 灰白	良	石英、長石、雲母 黒色粒子	
150	台付甕	脚部	—	—	(7.6)	ナデ	ナデ	10R4/2 灰赤	10R6/3 にぶい赤橙	良	長石、石英	
151	台付甕	脚部	—	—	(9.4)	ナデ	ハケメ	2.5YR7/4 淡赤橙	2.5YR7/4 淡赤橙	良	長石、雲母	
152	壺	口縁部	—	—	—	ハケメ後 ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、石英 黒色粒子	口唇部に刻目あり
153	壺	頸部	頸部径(11.0)	残存(3.8)	—	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英 角閃石	口縁端部欠損 一条の三角凸帯あり

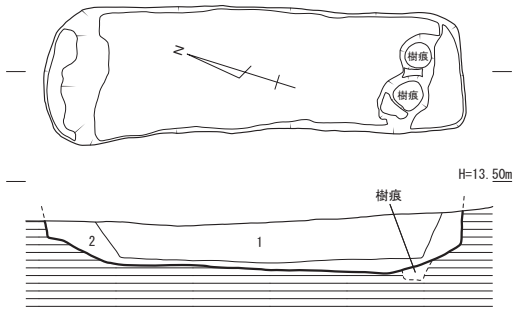
第36表　SD8出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
154	双角状礫器	泥岩？	89.00	107.00	28.00	330.00	カキ(貝)打ち

(4)土坑(SK)

① TAK201403　3区 SK4(土坑)(第71図　図版61)

SK4は3区1270グリッドに位置する。SC1と隣接する。規模は長軸2.22m、幅0.65m、深さ中心で0.25mを測る。平面プランは長方形で北側はやや丸い。平面及び断面形状から土坑墓または木棺墓と考えられる。出土遺物は小片の弥生式土器が出土したがすべて小細片で実測は不可能である。



1. 赤黒色 (2.5YR2/1) 粘質土 しまりやや弱い SK4 埋土
土中に4層土(細砕)を5%含む
棺材の設置位置を2との分層線(下面)は示す
左右の分層線が外に開くのは、棺材が1の土の土圧で外側に
押された際に外側に倒れたことによるものと考えられる
2. 橙色 (7.5YR7/6) 粘質土 しまりやや弱い (1よりもしまりは強い)
土中に1の土を30%含む SK4墓坑構築時の土 いわゆる「古土層」
面まで掘り抜いたのち、棺材に合わせて充填・整形したものと考えられる
その際、掘りあげた4層土を用いたことで、4層に近い土色を呈するものと考えられる

※基本層序4層:
黄(キナ)ボク ややしまる
弥生時代から近世の遺構が検出された遺構面である
第4層内に遺物は包含しない

0　(S=1/40)　1m

第71図　SK4平・断面図(S=1/40)

検出状況(東から)

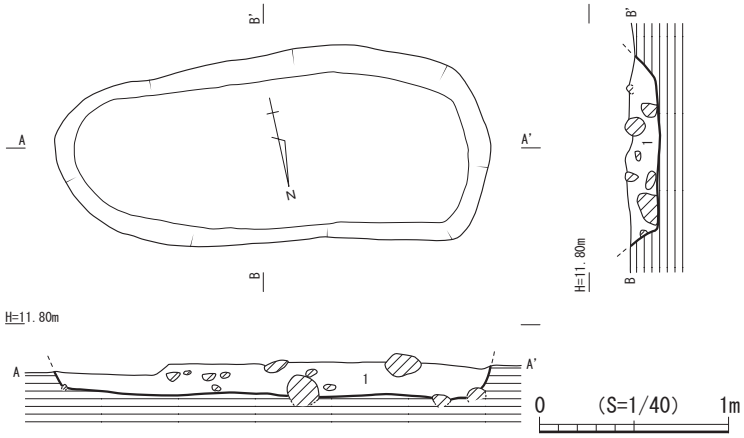
完掘状況(西から)

完掘状況(北から)

図版61　SK4遺構状況

② TAK201405　3区 SK16(土坑)(第72・73図　図版62・63　表37)

SK16は3区7666グリッドに位置する。長さ2.45m、幅1.0m、深さ0.2mを測る。平面形は横長楕円形である。遺物は覆土から甕口縁部片が出土した。**155**は甕口縁部片である。鋤先口縁で復元口径28.4cmを測る。中期末頃の所産であろう。

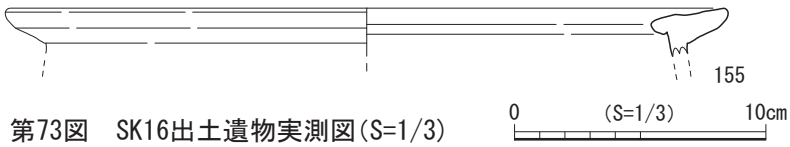


1. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土　3～10cm大の礫をまばらに含む　赤色粒子3%を含む

第72図　SK16平・断面図(S=1/40)

半截状況(北から)

図版62　SK16遺構状況



第73図　SK16出土遺物実測図(S=1/3)

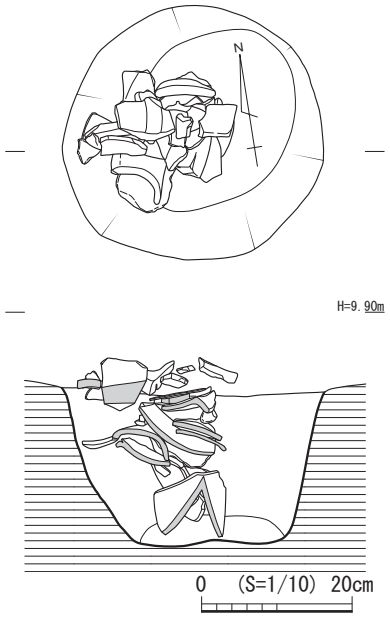
図版63　SK16出土遺物

第37表　SK16出土土器観察表

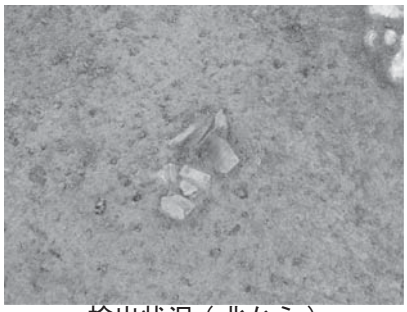
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
155	甕	口縁部	(28.4)	残存(1.9)	—	ナデ	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	良	角閃石、雲母長石	

③ TAK201407　1区 SK10(土坑)(第74・75図　図版64・65　表38)

SK10は1区7260グリッドに位置する。規模は中心長軸34.4cm、短軸33.4cmを測る円形を呈する土坑である。遺物は土坑内の床面、覆土から出土したが破片が多く出土状況から廃棄土坑と考えられる。**156～158**は甕の口縁部～胴部片である。**156**、**158**は口縁部が、くの字に屈曲し端部はやや尖る。**157**は緩やかに湾曲する。**159**、**160**は壺である。**159**は大きく外湾した口縁部で端部は丸い。口頸部に刻目三角凸帯を付設する。**160**は胴部に一重の凸帯を有している。**161**は不明土器で両面穿孔が二ヶ所確認する。側面は平坦で1/2は欠損する。後期前半の所産であろう。

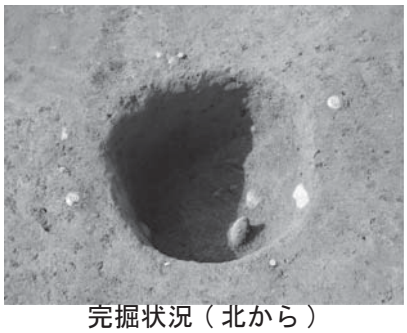


第74図　SK10平・断面図(S=1/10)



検出状況（北から）

遺物出土状況（北から）

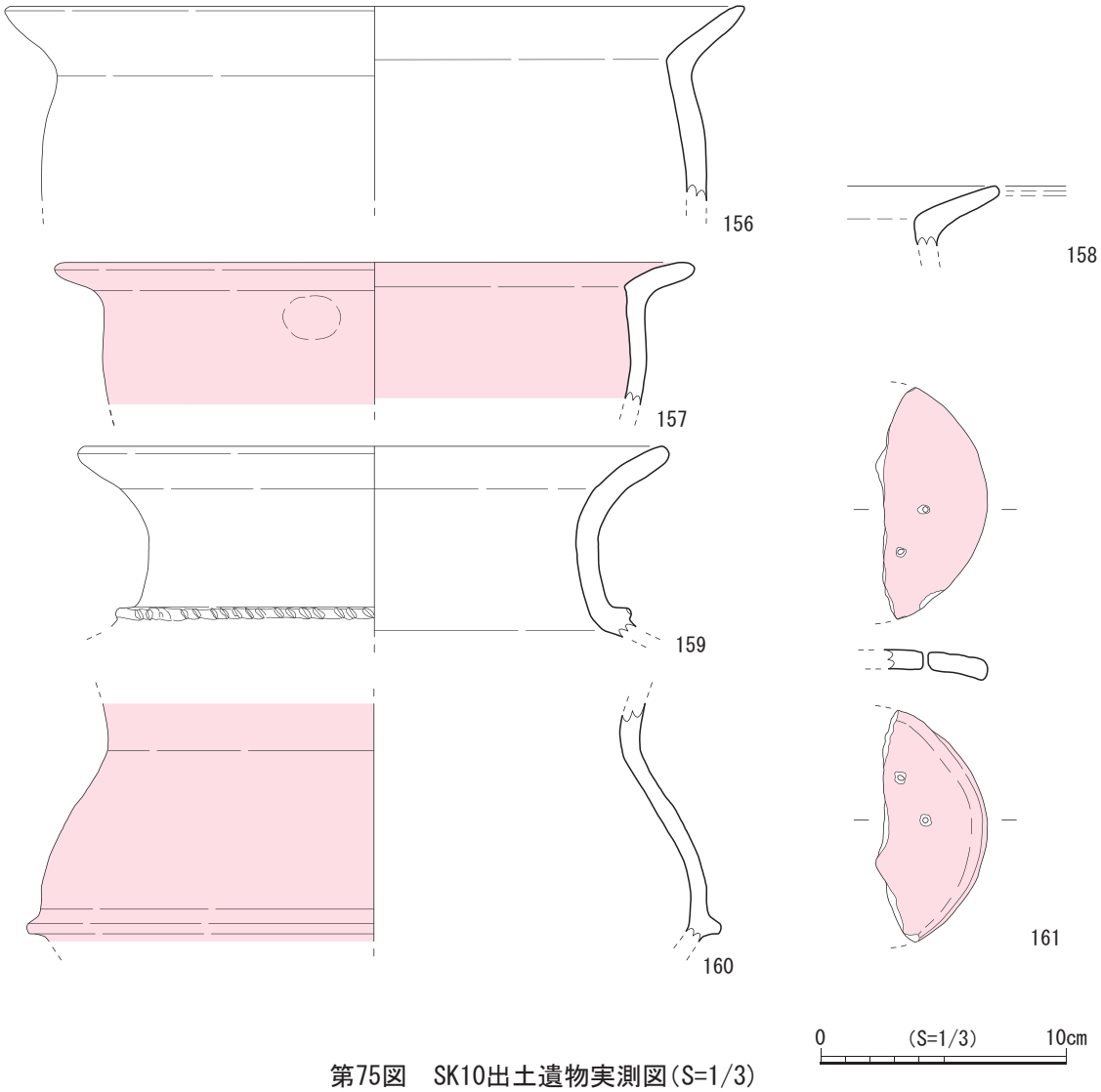


完掘状況（北から）

図版64　SK10遺構状況

第38表　SK10出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
156	甕	口縁部～胴部	(29.4)	残存(7.9)	—	ハケメ後ナデ	ナデ	10YR8/6黄橙	10YR8/3浅黄橙	良	長石、角閃石石英	
157	甕	口縁部～胴部	(24.6)	残存(5.7)	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良	長石、石英	内面に丹塗りあり
158	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR4/3にぶい黄褐	10YR8/3浅黄橙	良	長石、石英、雲母	
159	壺	口縁部～頸部	(23.4)	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/2明褐灰	7.5YR8/1灰白	良好	長石、雲母	外面口頸部に刻目凸帯あり
160	壺	胴部	—	残存(9.6)	—	ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐	10YR5/1褐灰	良	雲母、黒色粒子赤色粒子、白色粒子	外面に丹塗りあり
161	壺蓋？	不明	(10.0)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/1灰白	良	長石、石英金雲母	穿孔2ヶ所あり内外面に丹塗りあり

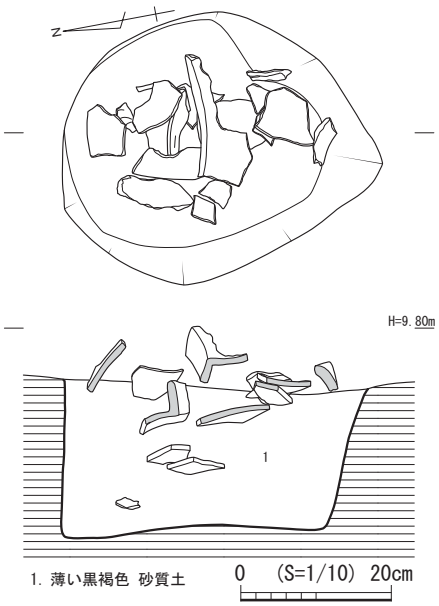


第75図　SK10出土遺物実測図(S=1/3)

図版65　SK10出土遺物

④ TAK201407　1区 SK11(土坑)(第76・77図　図版66・67　表39)

SK11は1区7260グリッドに位置する。規模は中心長軸40cm、中心短軸35.2cm、深さ18cmを測る楕円形を呈する土坑である。覆土は黒褐色砂質土で土器はこの中からの出土である。出土状況から廃棄土坑と考えられる。遺物は覆土から出土した。**162～164**は甕の口縁部～胴部片である。**162**はくの字口縁で端部はやや尖る。**163**、**164**の端部は丸い。**165**、**166**は壺の頸部～胴部片である。いずれも一条の三角凸帯を有す。後期前半の所産であろう。



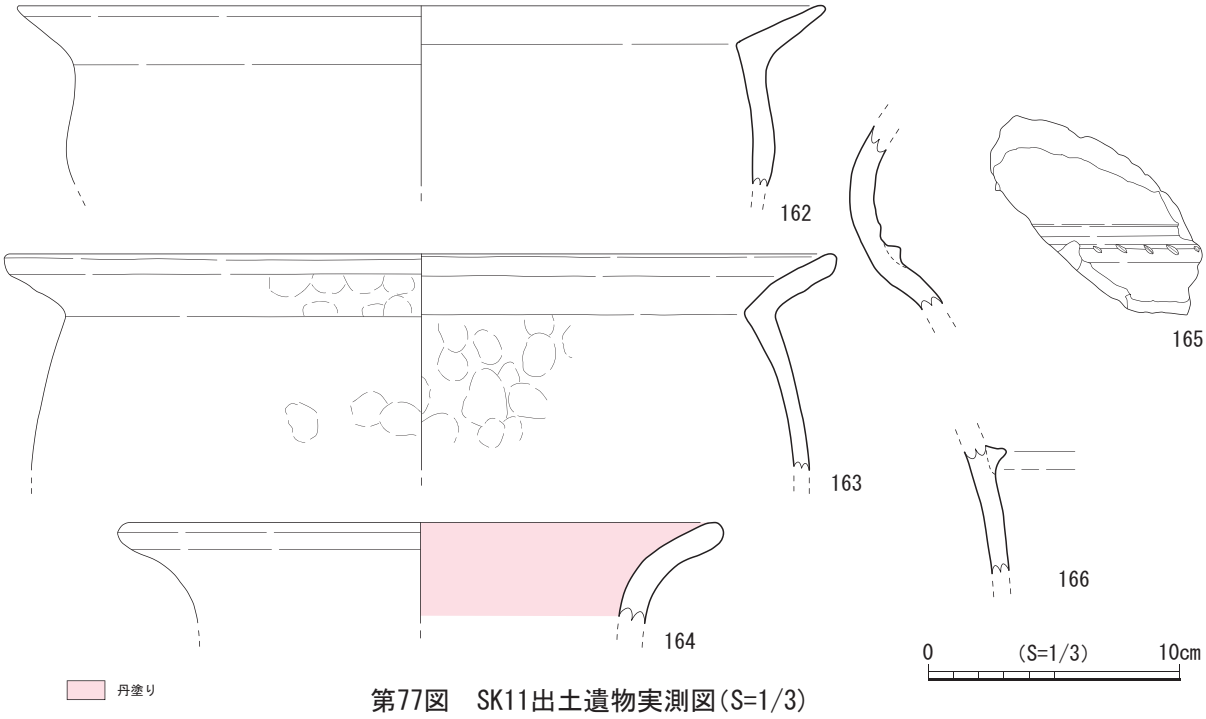
第76図　SK11平・断面図(S=1/10)

検出状況（北から）

完掘状況 (1)（北から）

完掘状況 (2)（北から）

図版66　SK11遺構状況



第77図　SK11出土遺物実測図(S=1/3)

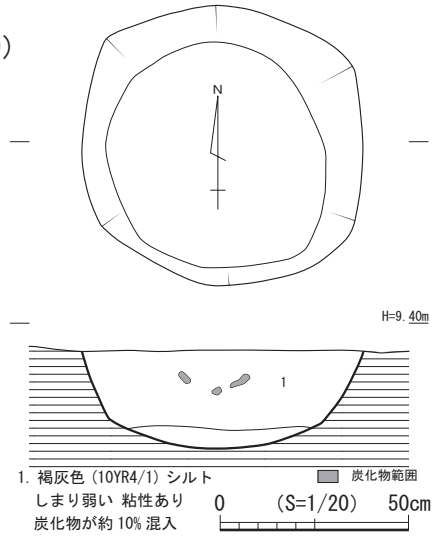
図版67　SK11出土遺物

第39表　SK11出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
162	甕	口縁部～胴部	(32.0)	残存(7.1)	—	ナデ	ナデ	N2/黒	N2/黒	良好	石英、角閃石	
163	甕	口縁部～胴部	(32.6)	残存(8.5)	—	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	長石、褐色粒子	
164	甕	口縁部	(23.0)	残存(3.9)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良好	長石、石英 角閃石	口縁部内面に丹塗りあり
165	壺	頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR3/3 暗褐	10YR2/2 黒褐	良	角閃石、石英 褐色粒子	口頸部に一条の刻目凸帯あり 口縁部欠損
166	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英、雲母	一条の三角凸帯あり

⑤ TAK201407　4区 SK21(土坑)(第78・79図　図版68・69　表40)

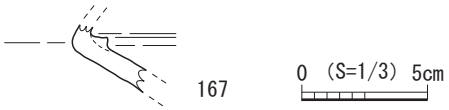
SK21は4区6854グリッドに位置する。規模は長軸0.74m、短軸0.74m、深さ27cmを測る円形の平面プランを呈する。覆土は単層で褐灰色、炭化物を含む。**167**は甕口頸部片で三角凸帯を有す。



第78図　SK21平・断面図(S=1/20)

検出状況（北から）　半截状況（南から）　完掘状況（北から）

図版68　SK21遺構状況



第79図　SK21出土遺物実測図(S=1/3)

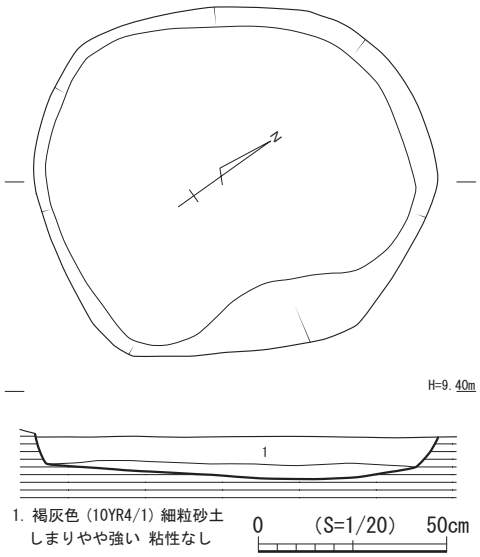
図版69　SK21出土遺物

第40表　SK21出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
167	甕	頸部	—	—	—	ナデ	ハケメ後 ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	石英、雲母 角閃石	

⑥ TAK201407　4区 SK22(土坑)(第80・81図　図版70・71　表41)

SK22は4区7056グリッドに位置する。規模は長軸1.06m、短軸0.9m、深さ11cmを測る楕円形の平面プランである。覆土は単層で褐灰色である。遺物は覆土から弥生式土器が出土した。**168**は壺の胴部片である。胴部に三角凸帯が一条残る。**169**は甕の底部片で平底である。

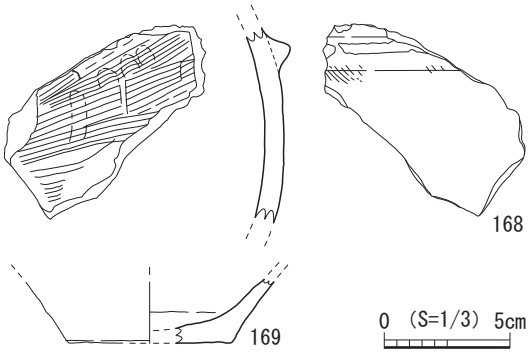


第80図　SK22平・断面図(S=1/20)

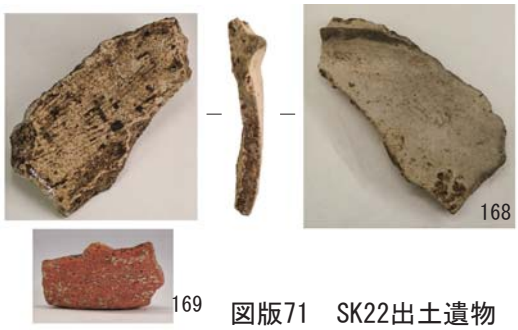
検出状況（北から）

完掘状況（北から）

図版70　SK22遺構状況



第81図　SK22出土遺物実測図(S=1/3)



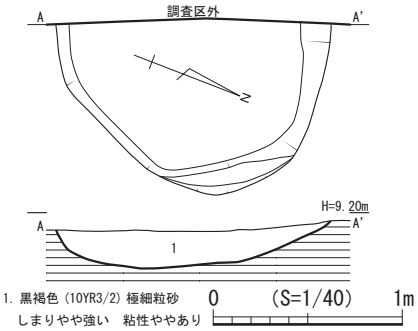
図版71　SK22出土遺物

第41表　SK22出土土器観察表

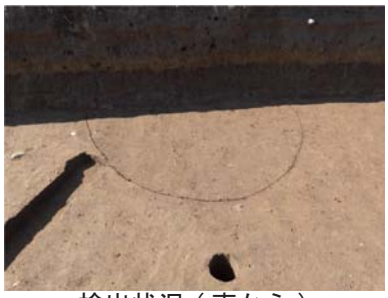
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
168	壺	胴部	—	—	—	ハケメナデ消し	ハケメ 指オサエ	7.5YR8/1 灰白	10YR8/2 灰色	良	長石、雲母	一条の三角凸帯あり
169	甕	底部	—	残存 (2.5)	(6.4)	ナデ	ナデ	10YR5/9 赤	10YR5/9 赤	良	雲母、長石 褐色粒子、	

⑦ TAK201407　2区 SK23(土坑)(第82図　図版72)

SK23は2区6654グリッドに位置する。土坑は半分が調査区外である。規模は長軸1.46m、短軸0.94m、深さ0.19m を測る推定楕円形の平面プランを呈する。覆土は黒褐色土である。



第82図　SK23平・断面図(S=1/40)



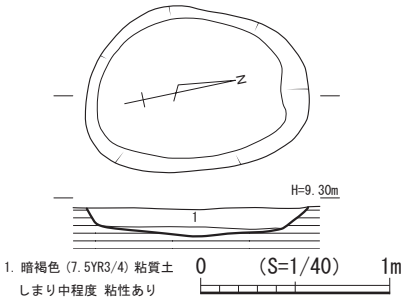
検出状況（東から）

断面・完掘状況（東から）

図版72　SK23遺構状況

⑧ TAK201407　2区 SK28(土坑)(第83・84図　図版73・74　表42)

SK28は2区7256グリッドに位置する。規模は長軸1.18m、短軸0.87m、深さ14cm を測る楕円形の平面プランを呈する。覆土は単層で暗褐色粘質土である。**170**は甕の口縁部片で短く湾曲する。端部は丸い。



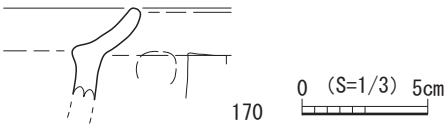
第83図　SK28平・断面図(S=1/40)

検出状況（北から）

半截状況（東から）

完掘状況（北から）

図版73　SK28遺構状況



第84図　SK28出土遺物実測図(S=1/3)

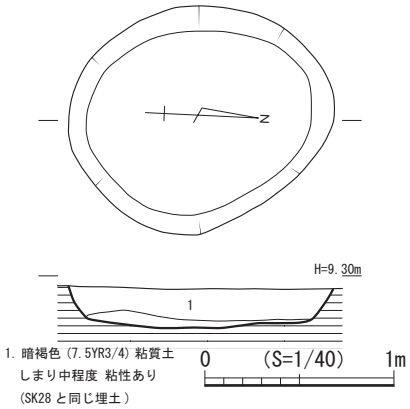
図版74　SK28出土遺物

第42表　SK28出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
170	甕	口縁部	—	残存(3.6)	—	ハケメ 指オサエ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	

⑨ TAK201407　2区 SK29(土坑)(第85・86図　図版75・76　表43)

SK29は2区7256グリッドに位置する。規模は長軸1.40m、短軸1.21m、深さ0.20mを測る楕円形の平面プランを呈する。覆土は単層で暗褐色粘質土である。**171**は高杯脚部片である。



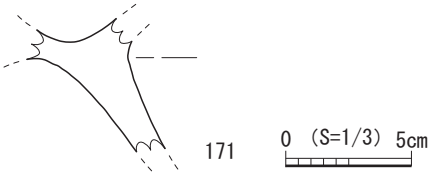
第85図　SK29平・断面図(S=1/40)

検出状況(北から)

半截状況(東から)

完掘状況(北から)

図版75　SK29遺構状況



第86図　SK29出土遺物実測図(S=1/3)

171

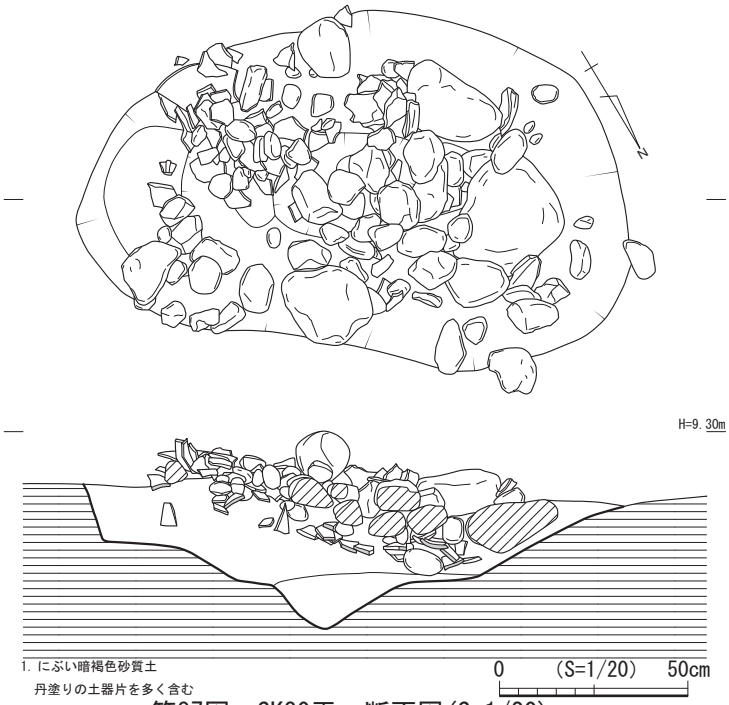
図版76　SK29出土遺物

第43表　SK29出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
171	高杯	脚部	—	残存(5.1)	—	ハケメ後ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	2.5YR6/2 灰黄	良	長石、雲母 褐色粒子	

⑩ TAK201407　2区 SK30(土坑)(第87・88図　図版77・78　表44)

SK30は2区7456グリッドに位置する。規模は長軸1.43m、短軸0.90m、深さ0.38mを測る楕円形の平面プランを呈する。土坑内には拳大、人頭大の円礫が散乱しその間に土器片が位置する。土器片は丹塗りの土器が多いことから祭祀に伴う土坑の可能性がある。**172**は甕口縁部片でT字口縁を呈し端部は丸くやや下がる。**173**は広口壺で時期は須玖Ⅱ式祭祀土器で福岡平野を中心とする地域からの搬入品であろう。中期後半～末頃であろう。**174**は直口壺である。口縁部は直線的で端部は丸い。底部は一部欠損する。



第87図　SK30平・断面図(S=1/20)

検出状況 (1)(北から)

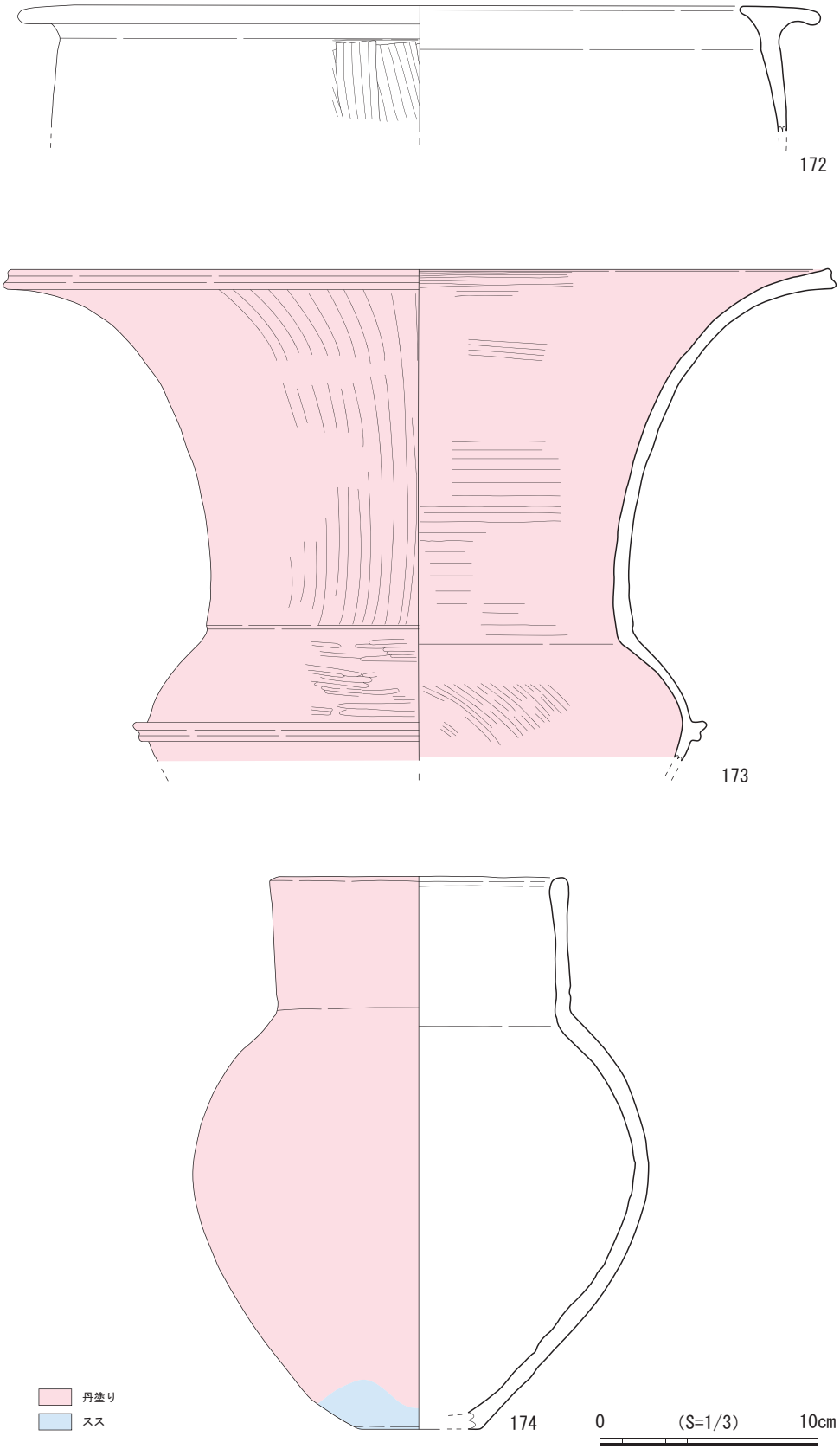
検出状況 (2)(北から)

完掘状況(北から)

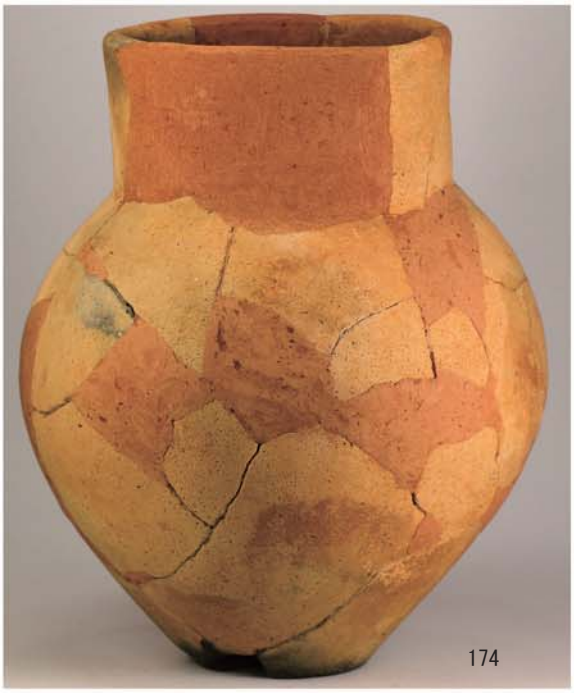
図版77　SK30遺構状況

第44表　SK30出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
172	甕	口縁部	(29.6)	残存(5.6)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR6/6 橙	5YR7/8 橙	良好	長石、石英、雲母	T字状口縁
173	広口壺	口縁部～胴部	(37.4)	残存(23.1)	—	暗文 ミガキ	暗文 ナデ	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	良好	長石、雲母	須玖Ⅱ式、祭祀土器 胴部に一条のM型凸帯あり　暗文及び内外面に丹塗りあり
174	直口壺	接合完形	(12.8)	(25.3)	(5.4)	ハケメ後 ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	石英、長石 角閃石	外面に丹塗り・スス



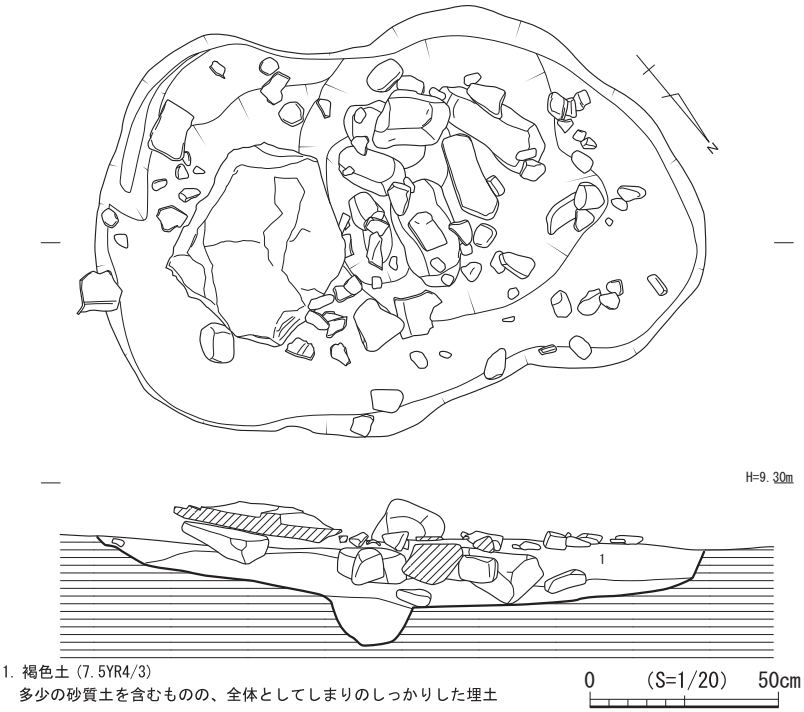
第88図　SK30出土遺物実測図(S=1/3)



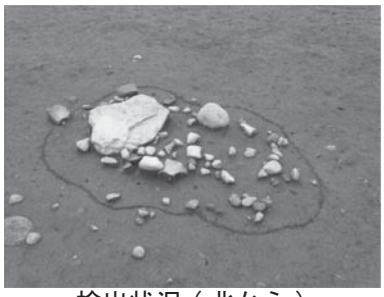
図版78　SK30出土遺物

⑪ TAK201407　2区 SK31(土坑)(第89・90図　図版79・80　表45・46)

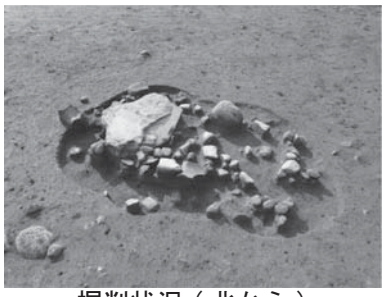
SK31は2区7256グリッドに位置する。規模は長軸1.60m、短軸1.06m、深さ14cm を測る不正楕円の平面プランを呈する。遺構内は円礫、平石等が散発的に位置し、その間に土器が所在する。**175**は甕の口縁部～胴部片である。口縁部は緩やかな、くの字口縁で端部は丸い。外面は縦方向にハケメ調整を行う。**176**は甕の口縁部で端部は丸い。**177**は砥石で一部欠損する。表裏両側面に磨き痕が残る。石材は砂岩である。



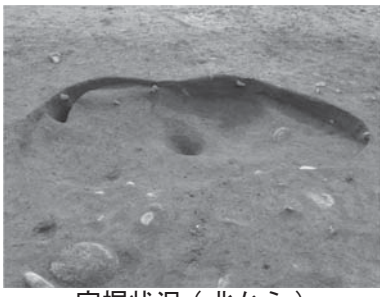
第89図　SK31 平・断面図(S=1/20)



検出状況（北から）



掘削状況（北から）



完掘状況（北から）

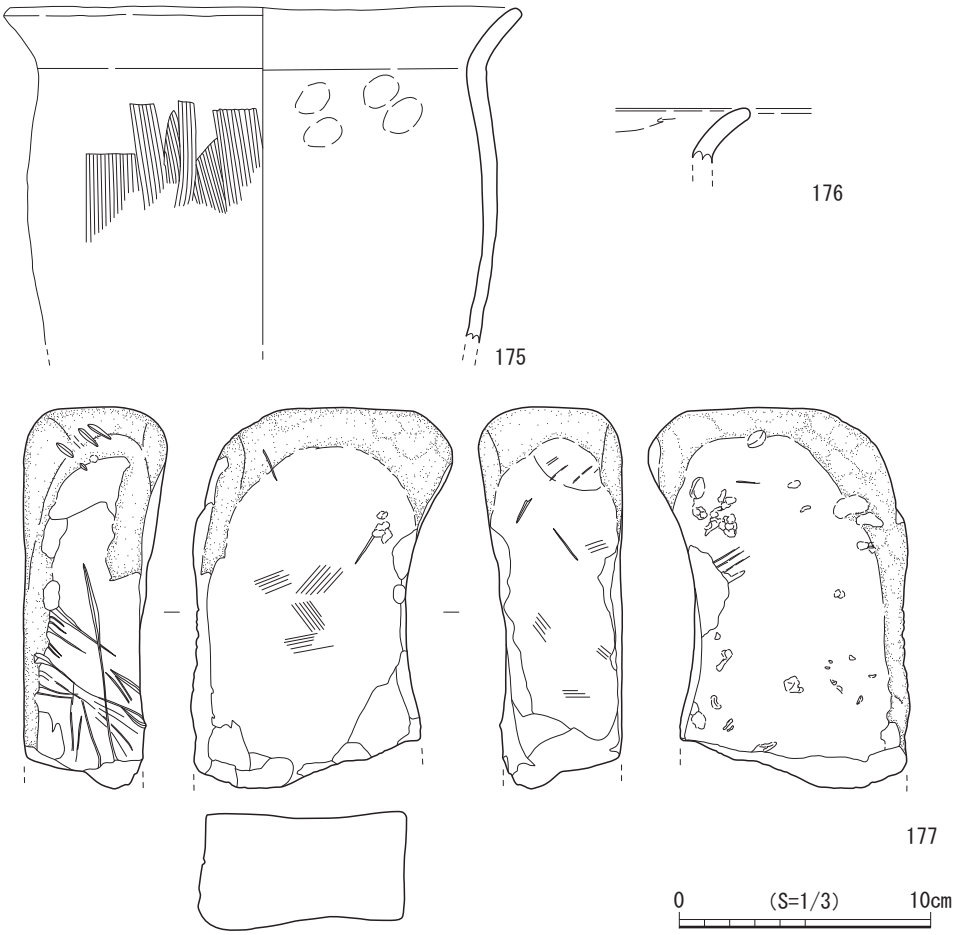
図版79　SK31遺構状況

第45表　SK31出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
175	甕	口縁部～胴部	20.6	—	—	ナデ ハケメ	ナデ・ハケメ 指オサエ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR8/2 灰白	良好	長石、雲母	
176	甕	口縁部	—	残存 (2.2)	—	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	長石、雲母	

第46表　SK31出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
177	砥石	砂岩	152.00	104.00	57.00	1,140.00	一部欠損

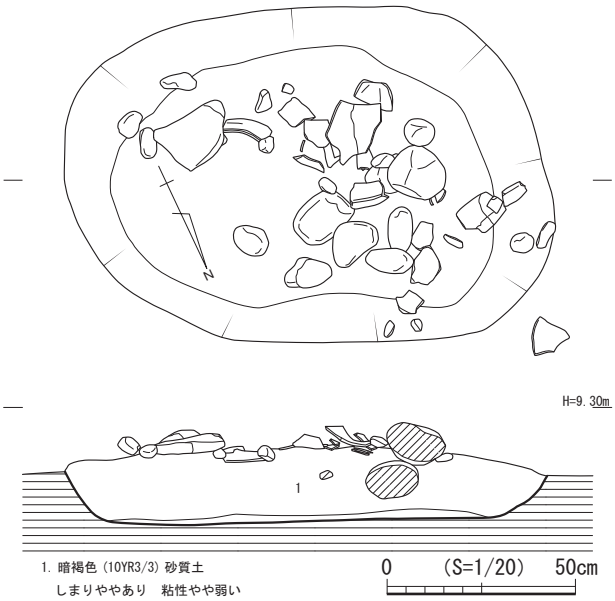


第90図　SK31出土遺物実測図(S=1/3)

図版80　SK31出土遺物

⑫ TAK201407　2区 SK32(土坑)(第91・92図　図版81・82　表47)

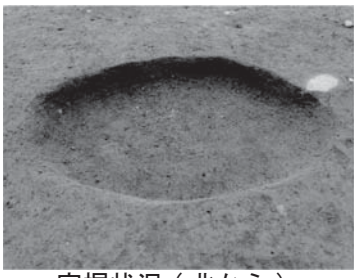
SK32は2区7256グリッドに位置する。規模は長軸1.27m、短軸0.89m、深さ0.19m を測る楕円形の平面プランを呈する。覆土は単層で暗褐色砂質土である。この覆土内に円礫及び土器が入る。土器は覆土上層から出土した。**178**は甕口縁部片である。口縁部は逆Ｌ字状を呈する。須玖Ⅱ式である。端部は丸い。**179**は黒髪式の台付甕で脚部は欠損する。口縁部は短くややくの字状である。



第91図　SK32平・断面図(S=1/20)

検出状況 (1)(北から)

検出状況 (2)(北から)

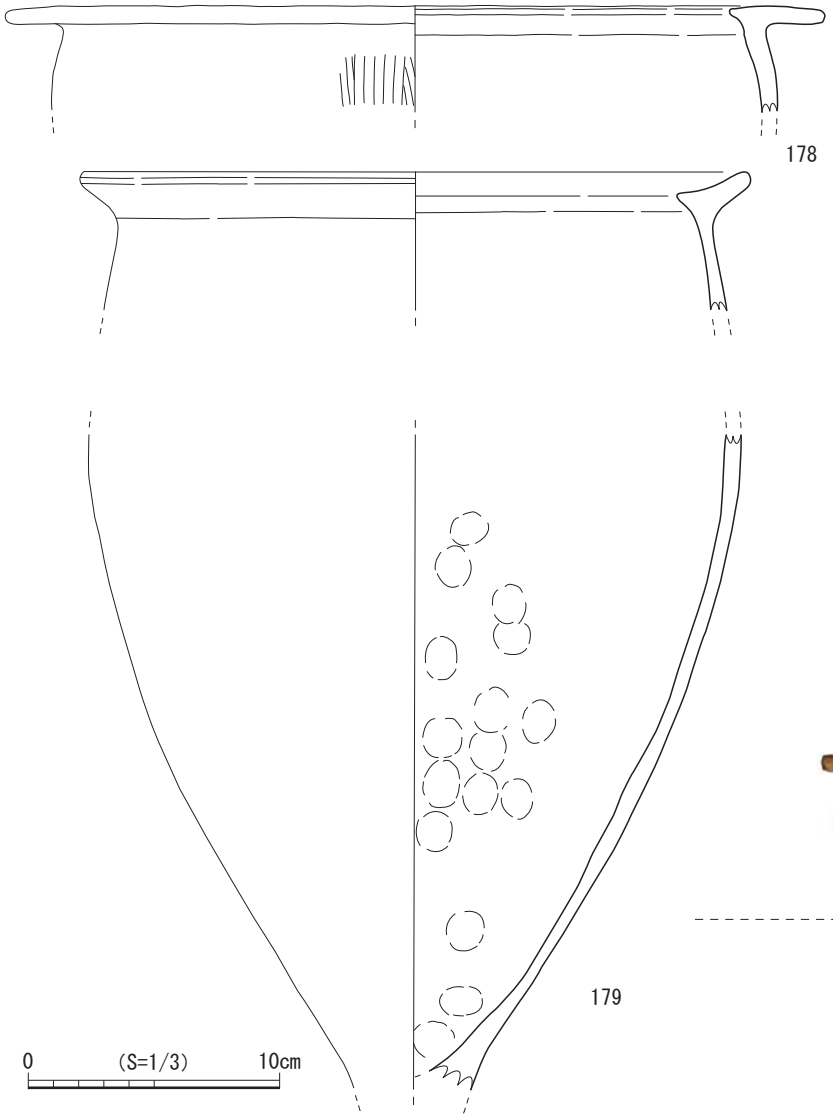


完掘状況(北から)

図版81　SK32遺構状況

第47表　SK32出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
178	甕	口縁部	(25.2)	残存 (4.1)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石、石英、雲母	
179	台付甕	口縁部～胴部	(26.4)	—	—	ハケメ ナデ消し	ナデ 指オサエ	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	角閃石、石英 雲母、長石	

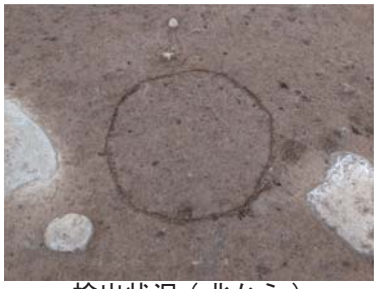


第92図　SK32出土遺物実測図(S=1/3)

図版82　SK32出土遺物

⑬ TAK201407　2区 SK33(土坑)(第93・94図　図版83・84　表48)

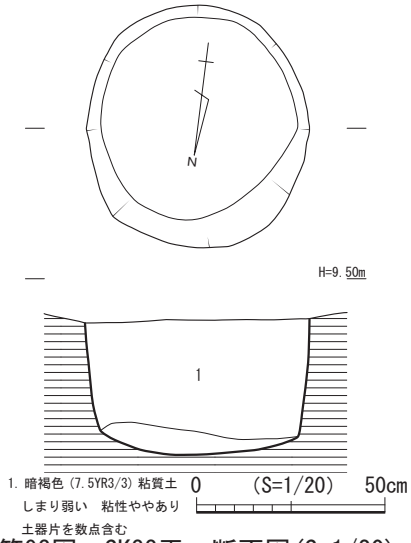
SK33は2区7056グリッドに位置する。規模は長軸0.64m、短軸0.59m、深さ35cm を測る円形の平面プランを呈する。覆土は単層で暗褐色粘質土である。覆土内から土器が数点出土した。**180**は甕の頸部～胴部の破片である。胎土は多くの砂粒を含む。


検出状況（北から）

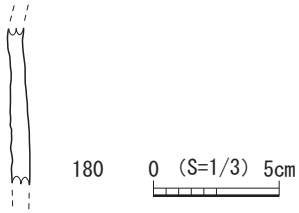
断面・半截状況（南から）

完掘状況（北から）

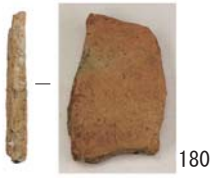
図版83　SK33遺構状況



第93図　SK33平・断面図(S=1/20)



第94図　SK33出土遺物実測図(S=1/3)



図版84　SK33出土遺物

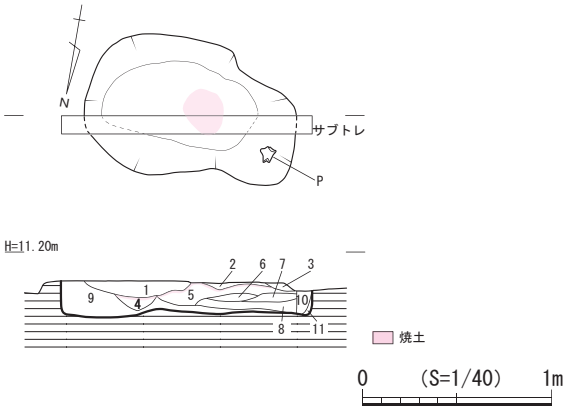
第48表　SK33出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
180	甕	頸部～胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	長石、褐色粒子	砂粒を多く含む

(5)焼土(SL)

① TAK201405　2区 SL2(焼土)(第95・96図　図版85・86　表49)

SL2は2区8270グリッドに位置する。長さ1.15m、幅0.7m、深さ0.16mを測る楕円形の平面プランである。土坑中央部に22cm程の円形の焼土痕が位置する。遺物は甕の胴部片、土器小片が出土した。**181**は甕胴部片である。外面は斜め方向にハケメ調整を行う。器壁は薄い。



1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土　東側の上部から下部にかけて焼土を30%ほど含む
上部に炭化物を10%ほど含む
2. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土　焼土を全体的に50%ほど含む
炭化物を全体的に50%ほど含む
3. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土　焼土を僅かに含む　炭化物を僅かに含む
マンガンによるシミを僅かに含む
4. 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土　焼土を僅かに含む　1よりも砂粒を若干多く含む
5. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土　焼土を50%ほど含む　炭化物を20%ほど含む
6. 暗赤褐色 (5YR3/3) 粘質土　下部に焼土と炭化物を僅かに含む
下部は若干黄色味がかった土を含む
7. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土　上部に炭化物を5%ほど含む
8. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土　焼土を西側に10%ほど、東側に僅かに含む
炭化物を全体的に15%ほど含む
9. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土～シルト　焼土をまばらに僅かに含む
東側上部に炭化物を10%ほど含む
東側中央部にマンガンによるシミを僅かに含む
10. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土　焼土を僅かに含む　炭化物を僅かに含む
マンガンによるシミを僅かに含む
11. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土　焼土を僅かに含む　炭化物を僅かに含む

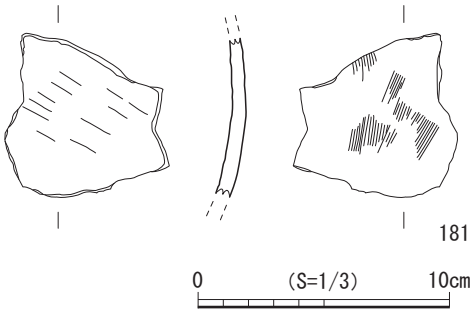
第95図　SL2平・断面図(S=1/40)

焼土検出状況（北から）

半截状況（北から）

完掘・遺物出土状況（北から）

図版85　SL2遺構状況



第96図　SL2出土遺物実測図(S=1/3)

図版86　SL2出土遺物

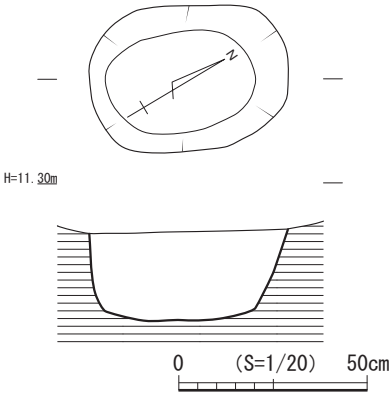
第49表　SL2出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
181	甕	胴部	—	残存(6.1)	—	ハケメ	ハケメ後ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄橙	良	長石、赤色粒子石英、角閃石	砂粒を多く含む

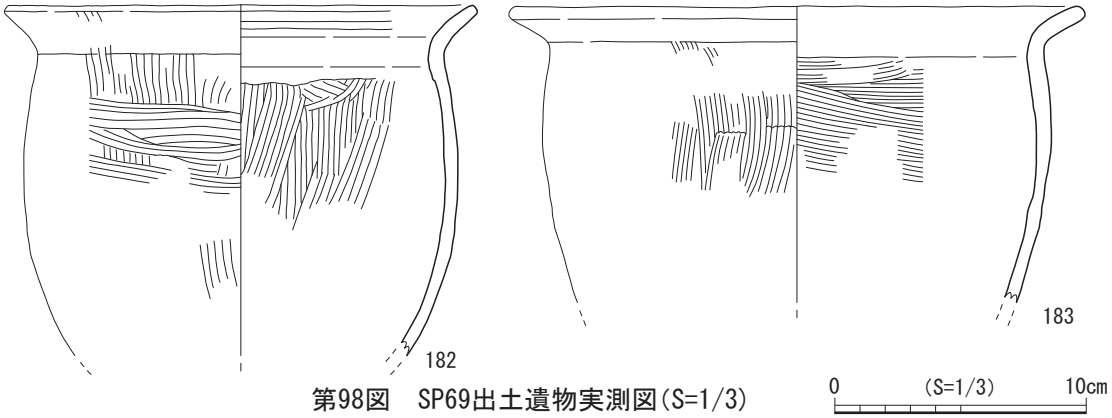
(6)柱穴(SP)

① TAK201404　A6東区 SP69(柱穴)(第97・98図　図版87　表50)

SP69はA6東区8672グリッドに位置する。平面プランは長軸0.54m、短軸0.38m、深さ0.22mを測る楕円形を呈する。にぶい黄褐色シルトの覆土から甕の口縁部～胴部片が出土した。**182**は甕の口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字口縁で端部は丸い。内外面はハケメ調整を施す。**183**は甕の口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字口縁でやや開き気味である。端部は丸い。内外面はハケメ調整を施す。後期前半の所産であろう。



第97図　SP69平・断面図(S=1/20)



第98図　SP69出土遺物実測図(S=1/3)

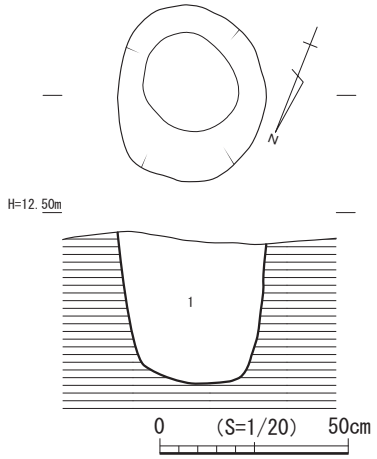
図版87　SP69出土遺物

第50表　SP69出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
182	甕	口縁部～胴部	(18.4)	残存(13.9)	—	縦方向のハケメ	縦、横方向のハケメ	7.5YR3/1黒褐	10YR6/2にぶい赤褐	良	雲母、石英、長石石角閃石	
183	甕	口縁部～胴部	(22.2)	残存(11.7)	—	縦方向のハケメ	横方向のハケメ	10YR3/2黒褐	10YR6/3にぶい黄橙	良	角閃石	

② TAK201404　B8北区 SP1081(柱穴)(第99・100図　図版88・89　表51)

SP1081はB8北区0278グリッドに位置する。平面プランは長軸0.46m、短軸0.38mを測る楕円形を呈する。黒色シルト質土の覆土から台付甕口縁部～胴部片、器台片が出土した。**184**は器台片で裾部である。復元底径29.8cmを測る。内面は横方向のハケメ調整を施す。**185**は台付甕で口縁部～胴部片であり、脚部が欠損している。口縁部は、くの字口縁で鋭角に屈曲する。内外面は細かいハケメ調整を施す。後期後半の所産であろう。



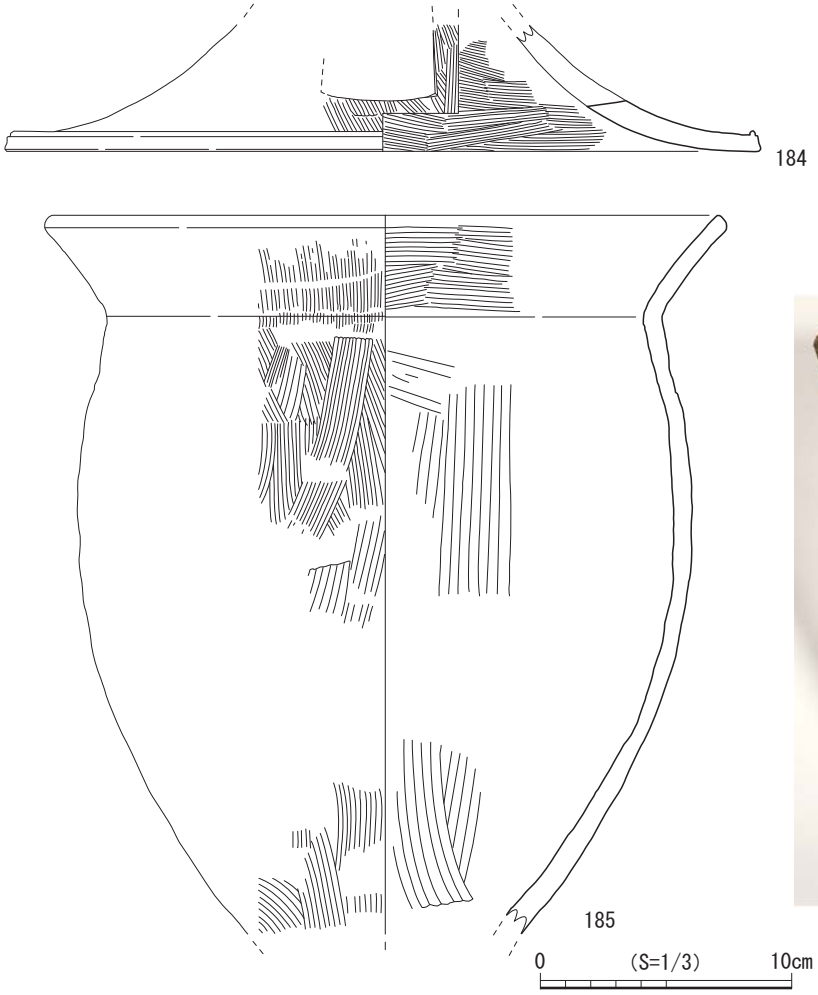
1.黒色(10YR2/1)シルト質土しまりやや弱い
粘性弱い 直径10cm以下の円礫を10%含む

第99図 SP1081平・断面図(S=1/20)

検出状況

半截状況(北から)

図版88 SP1081遺構状況



第100図 SP1081出土遺物実測図(S=1/3)

184

185

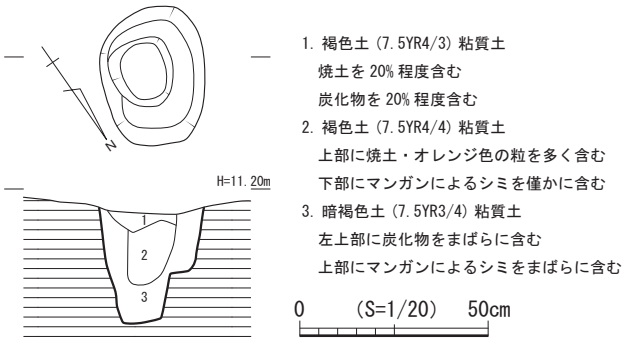
図版89 SP1081出土遺物

第51表 SP1081出土土器観察表

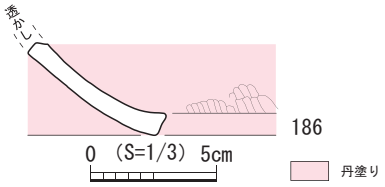
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
184	器台	裾部	—	残存(5.0)	(29.8)	斜め方向のハケメ	横方向のハケメ	10YR7/4にぶい黄橙	5YR6/6橙	良	長石、石英	全体的に砂粒を多く含む
185	台付甕	口縁部～胴部	(25.4)	残存(28.5)	—	縦方向のハケメ	縦方向のハケメナデ	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	良	石英	全体的に砂粒を多く含む

③ TAK201405　2区 SP76(柱穴)(第101・102図　図版90　表52)

SP76は2区8268グリッドに位置する。長軸36cm、短軸26cm、深さ30cm、柱痕16cmを測る楕円形の平面プランである。覆土は褐色粘質土、暗褐色粘質土である。覆土から内外面丹塗りの器台片が出土した。**186**は器台裾部片である。裾端部は方形で外面はミガキを施し、暗文が残る。焼成は良好である。



第101図　SP76平・断面図(S=1/20)



第102図　SP76出土遺物実測図(S=1/3)

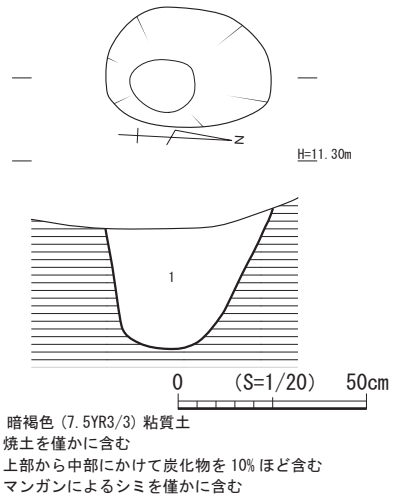
図版90　SP76出土遺物

第52表　SP76出土土器観察表

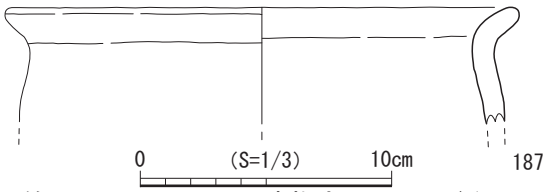
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
186	器台	裾部	—	残存(3.5)	—	ヘラ後ナデ	ヘラ後ナデ	2.5YR5/68 明赤褐	2.5YR5/68 明赤褐	良	長石、雲母	暗文あり、丹塗りあり

④ TAK201405　2区 SP161(柱穴)(第103・104図　図版91　表53)

SP161は2区8468グリッドに位置する。長軸44cm、短軸34cm、深さ30cmを測る楕円形の平面プランを呈する。覆土は暗褐色粘質土で甕口縁部片が出土した。**187**は甕口縁部片である。口縁部は緩やかにくの字状を呈し、端部は丸い。



第103図　SP161平・断面図(S=1/20)



第104図　SP161出土遺物実測図(S=1/3)

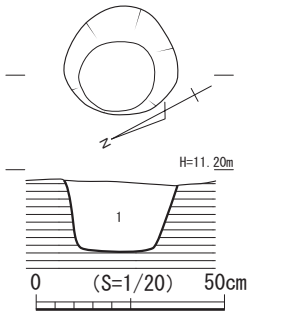
図版91　SP161出土遺物

第53表　SP161出土土器観察表

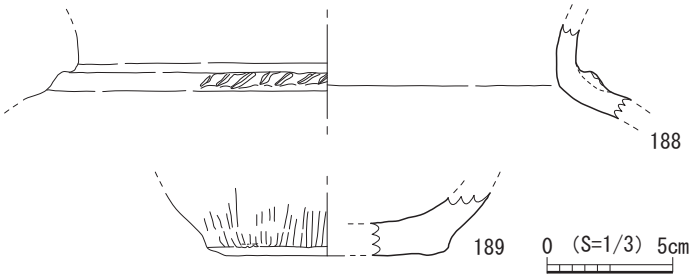
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
187	甕	口縁部	(19.6)	残存(4.6)	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/1 褐灰	良	石英、角閃石 雲母	

⑤ TAK201405　2区 SP232(柱穴)(第105・106図　図版92　表54)

SP232は2区8068グリッドに位置する。長軸30cm、短軸28cm、深さ20cm を測り、ほぼ円形を呈する。覆土は黒褐色粘質土で壺、甕片が出土した。**188**は壺頸部片、**189**は甕底部片である。**188**は口頸部に刻目三角凸帯を有する。**189**は平底である。全体的に粗い作りである。



第105図　SP232平・断面図(S=1/20)



第106図　SP232出土遺物実測図(S=1/3)

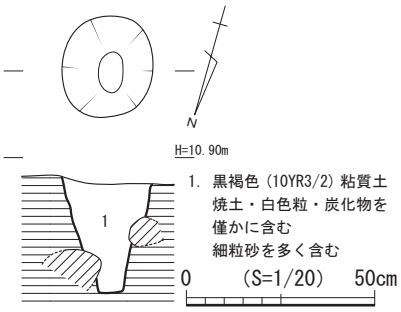
図版92　SP232出土遺物

第54表　SP232出土土器観察表

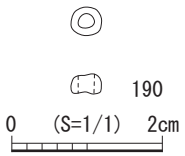
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
188	壺	頸部	—	残存(3.7)	—	ナデ	ナデ	8.5YR7/4 にぶい橙	8.5YR7/4 にぶい橙	良	石英、角閃石 雲母	口縁部欠損 一条の刻目凸帯あり
189	甕	底部	—	—	(9.6)	ハケメ後ナデ	ナデ	2.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、角閃石 雲母	

⑥ TAK201405　2区 SP287(柱穴)(第107・108図　図版93　表55)

SP287は2区8068グリッドに位置する。長軸26cm、短軸24cm、深さ30cm を測るほぼ円形の平面プランを呈する。覆土は黒褐色粘質土で覆土から淡青色のガラス小玉が1点出土した。**190**はガラス小玉で直径3.788mm、厚さ2.4mm を測るカリガラスである。



第107図　SP287平・断面図(S=1/20)



第108図　SP287出土遺物実測図(S=1/1)

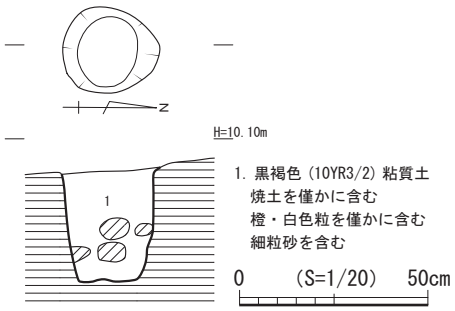
図版93　SP287出土遺物

第55表　SP287出土ガラス小玉観察表

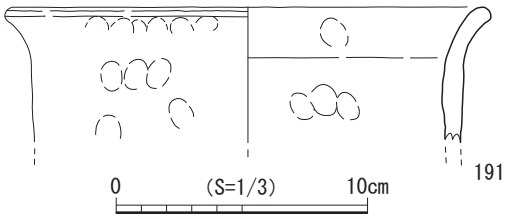
遺物番号	色調	内径①(mm)	内径②(mm)	外径①(mm)	外径②(mm)	厚①(mm)	厚②(mm)	直径(mm)	備考
190	淡青色	1.979	1.503	3.681	—	2.400	—	3.788	カリガラス

⑦ TAK201405　6区 SP1441(柱穴)(第109・110図　図版94　表56)

SP1441は6区7062グリッドに位置する。長軸26cm、短軸24cm、深さ30cm を測るほぼ円形の平面プランを呈する。覆土は黒褐色粘質土で甕口縁部片が出土した。**191**は甕口縁部で緩やかに外反し端部は丸い仕上げである。



第109図　SP1441平・断面図(S=1/20)



第110図　SP1441出土遺物実測図(S=1/3)

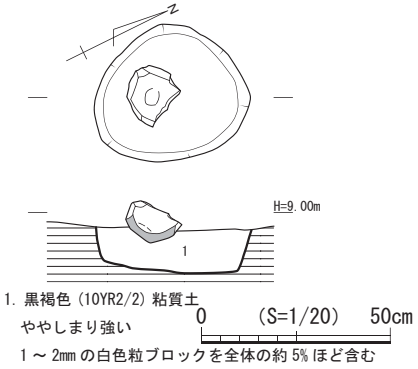
図版94　SP1441出土遺物

第56表　SP1441出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
191	甕	口縁部	(18.8)	残存(4.3)	—	ナデ 指圧痕	ナデ 指圧痕	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR6/6 橙	良	石英、角閃石、雲母	

⑧ TAK201406　4区 SP433(柱穴)(第111・112図　図版95・96　表57)

SP433は4区6852グリッドに位置する。柱穴の規模は長軸0.42m、短軸0.37m、深さ0.1m で楕円形の平面プランを呈する。黒褐色粘質土の覆土上面から甕底部片が出土した。**192**は甕底部片である。底径は7.6cm で平底である。

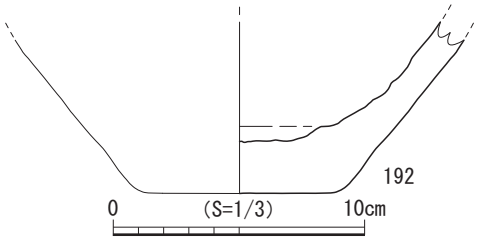


第111図　SP433平・断面図(S=1/20)

遺物出土状況（東から）

断面（東から）

図版95　SP433遺構状況



第112図　SP433出土遺物実測図(S=1/3)

図版96　SP433出土遺物

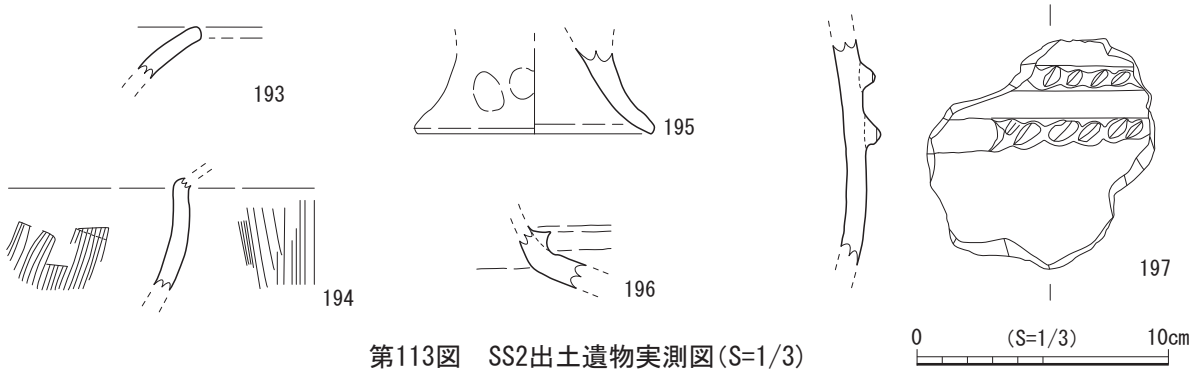
第57表　SP433出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
192	甕	底部	—	残存(6.7)	(7.6)	ナデ	ナデ	7.5YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	長石	平底

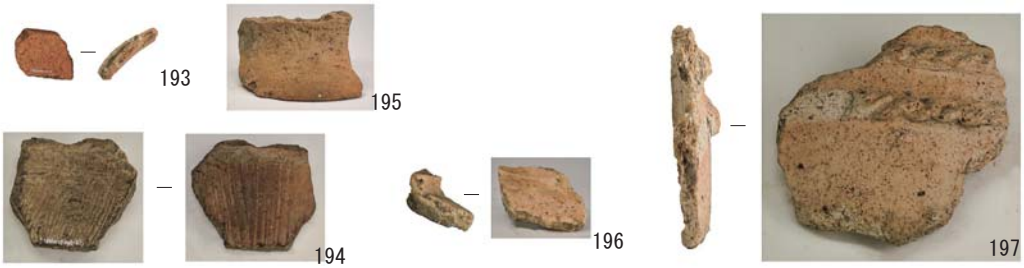
(7)集石(SS)

① TAK201407　2区 SS2(集石)(第113・114図　図版97・98　表58)

SS2は2区7254グリッドに位置する。規模は長さ9.6m、幅1.0～1.2m、高さ0.50～0.70m を測る集石遺構である。集石は人頭大～拳大の円礫である。この集石内から土器が出土した。**193**は甕の口縁部片である。直線的で端部はやや丸い。**194**は甕で頸部～胴部の破片である。内外面は斜め方向にハケメ調整を施す。**195**は台付甕の脚部片である。脚部の開きは狭く端部は丸い。**196**は壺頸部片である。頸部に三角凸帯を有す。**197**は壺の胴部で二条の刻目三角凸帯を付設している。



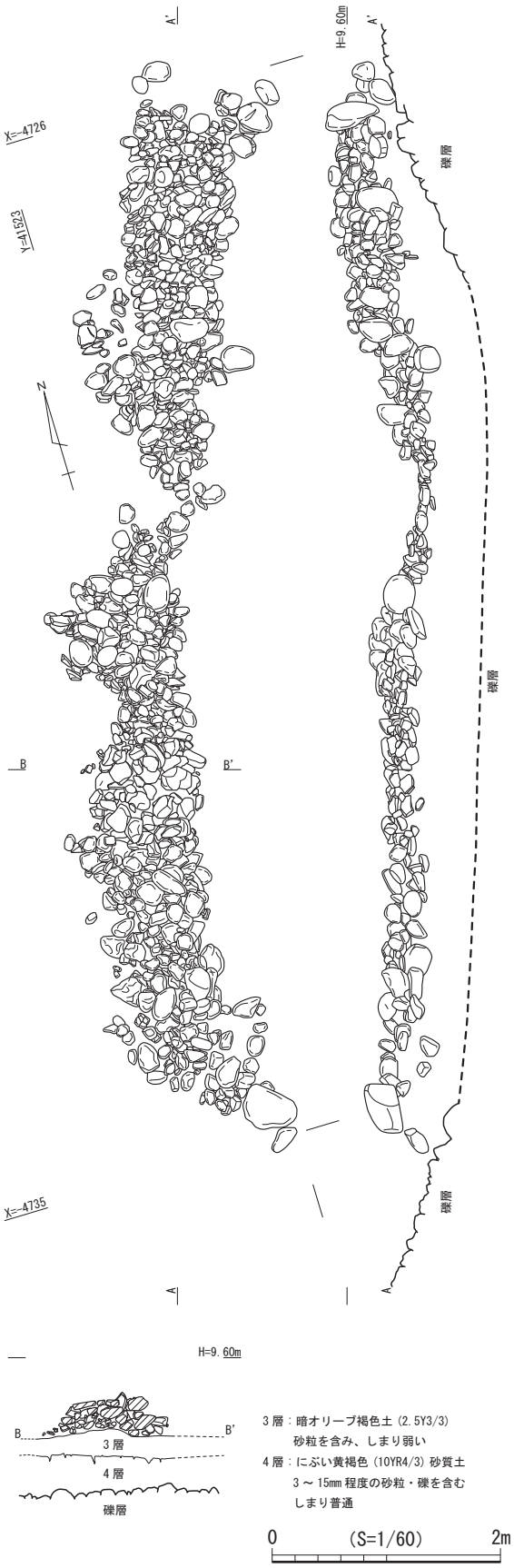
第113図　SS2出土遺物実測図(S=1/3)



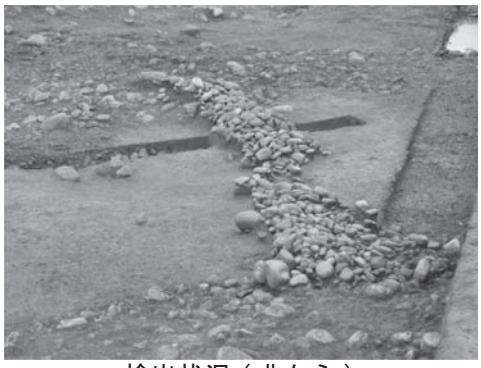
図版97　SS2出土遺物

第58表　SS2出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
193	甕	口縁部	—	残存(2.0)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、石英	
194	甕	頸部～胴部	—	残存(4.4)	—	ハケメ	ハケメ	5YR7/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良	赤色粒子、雲母	
195	台付甕	脚部	—	-	(9.2)	ナデ 指オサエ	ナデ	5YR7/4 にぶい褐	5YR7/2 明褐灰	良	長石、雲母	
196	壺	頸部	—	残存(2.4)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	10YR3/1 黒褐	良	褐色粒子	
197	壺	胴部	—	残存(8.9)	—	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	長石、石英	二条の刻目凸帯あり 剥離が多い



第114図　SS2平・断面図(S=1/60)



検出状況（北から）

側面状況（東から）

長崎国際大学立平教授指導・視察

図版98　SS2遺構状況

長崎国際大学立平教授の所見

集石遺構について

・（魚を取るための）「筌（うけ）」であれば、設置するための大石や杭等があってもよいが、そのようなものが見受けられない。

・「石干見（いしひび）」=「スクイ；島原地方の特有呼称」（干潟などの遠浅の海岸に石を積み上げ、潮の干満で石積の内側に取り残された魚介類を捕る伝統的な漁法、及び、それに用いられた石積）は、有明海沿岸などで江戸時代には270ヶ所で見られたが、昭和には74ヶ所、現在は5ヶ所ほどで見られる。内湾性の「石干見」かどうかは、隣接する調査区の状況を確認したい。

・石を積んでいる下に黒い腐植土が認められるので、柴を敷いたのではないか。

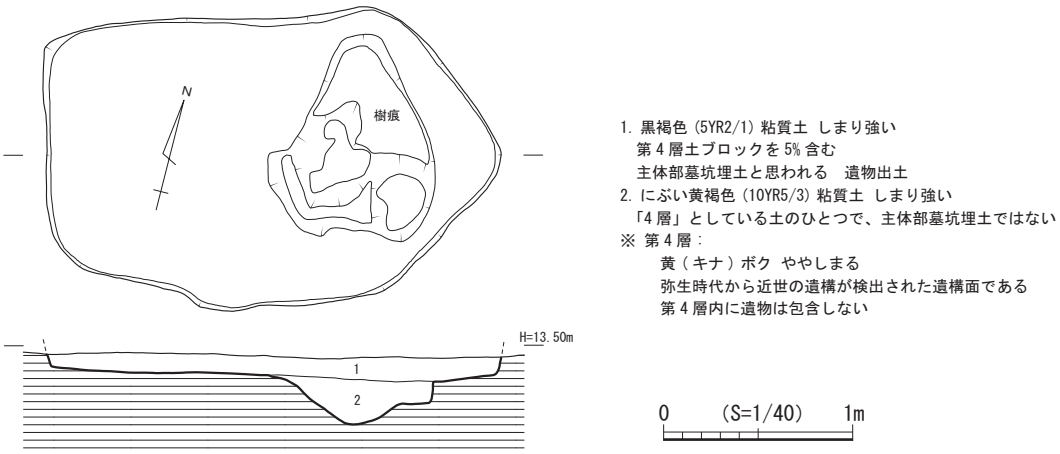
・嘉瀬川の河川敷では、泥土が動くのを防ぐためにこのようなものをつくる例もある。

・泥土が動くのを防ぐために設置したもののようにも見受けられる。

(8)墳墓(ST)

① TAK201403　3区 ST1(土坑墓)(第115・116図　図版99・100　表59)

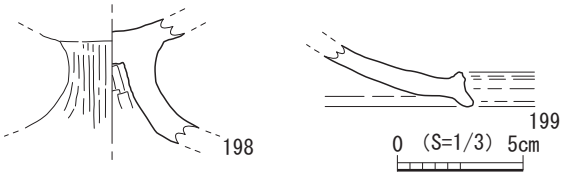
ST1は3区1270・1470グリッドに位置する土坑墓である。平面プランは中央長軸上端2.40m+、下端2.34m、中央短軸上端1.52m+、下端1.46m、深さ10cm を測り東側小口がやや尖る。深さが10cm+であることから考えてかなりの削平を受けている。出土遺物は高杯脚部片、器台脚部片である。**198**は高杯脚部片である。外面は縦方向にハケメ調整を施す。**199**は器台裾部片である。裾端部はつまみ上げを行っている。内面はナデ調整、外面は縦方向にハケメ調整後にナデ調整を施す。器台の裾部形態から弥生後期終末段階頃の所産であろう。



第115図　ST1平・断面図(S=1/40)

検出状況（北から）　検出状況（南から）　完掘状況（東から）

図版99　ST1遺構状況



第116図　ST1出土遺物実測図(S=1/3)

図版100　ST1出土遺物

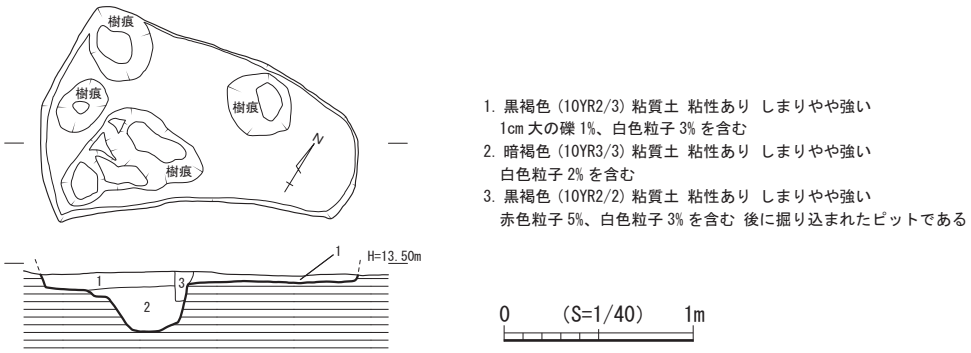
第59表　ST1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
198	高杯	脚部	—	—	—	縦方向のハケメ	ケズリ ナデ	5YR6/6 橙	5YR5/3 にぶい橙	不良	石英	
199	器台	裾部	—	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/4 にぶい橙	良	角閃石、長石 雲母	弥生終末

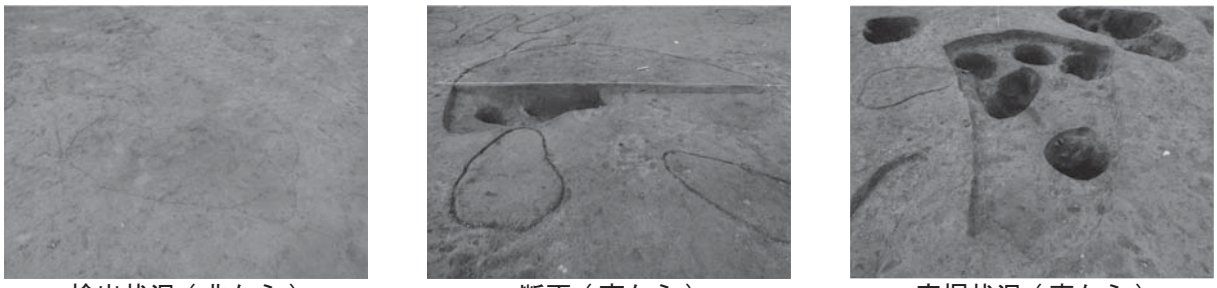
② TAK201403　3区 ST2(土坑墓)(第117図　図版101)

ST2はST1の南側に構築された遺構である。平面プランは先細り長方形で主軸はS－58°－Wである。中心長軸1.70m、短軸0.8m、深さ5～8cm を測る。小口幅は西側が1.0m、東側は0.5m であることから

西側が頭位と考えられる。樹痕跡、後世の削平により原形は僅かに残る程度である。遺物は出土しなかった。



第117図　ST2平・断面図(S=1/40)

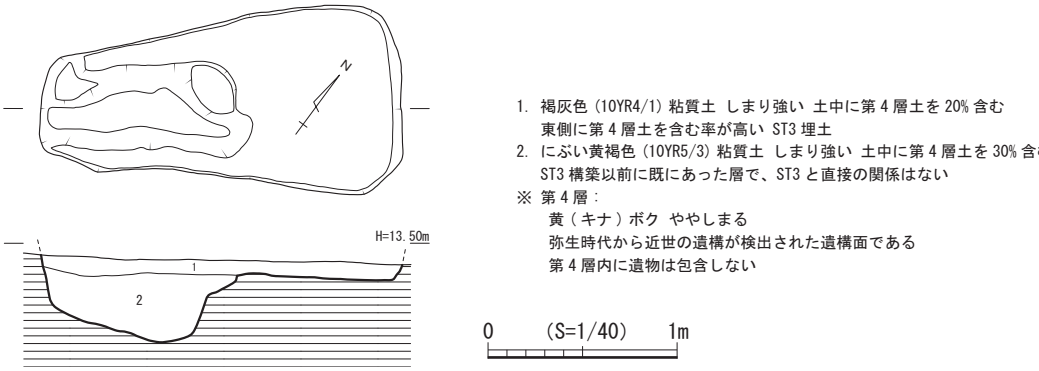


検出状況（北から）　断面（南から）　完掘状況（東から）

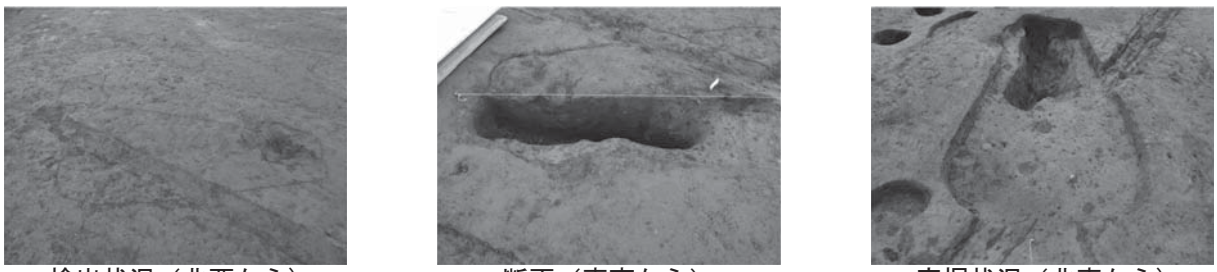
図版101　ST2遺構状況

③ TAK201403　3区 ST3(土坑墓)(第118図　図版102)

ST3は3区1270グリッドでST1の北側に位置する。平面プランは中央長軸上端1.9m、下端1.80m 中央短軸上端0.8m、下端0.76m、北東小口1.0m、南西小口で0.5m を測る、先細りの長方形を呈する。深さは15～18cm で大部分が削平されている。中央部から南西小口にかけて長さ1.0m、幅0.45m、深さ0.35m を測る土坑を配する。小口の幅から北東小口側が頭位と考えられる。遺物は出土しなかった。



第118図　ST3平・断面図(S=1/40)

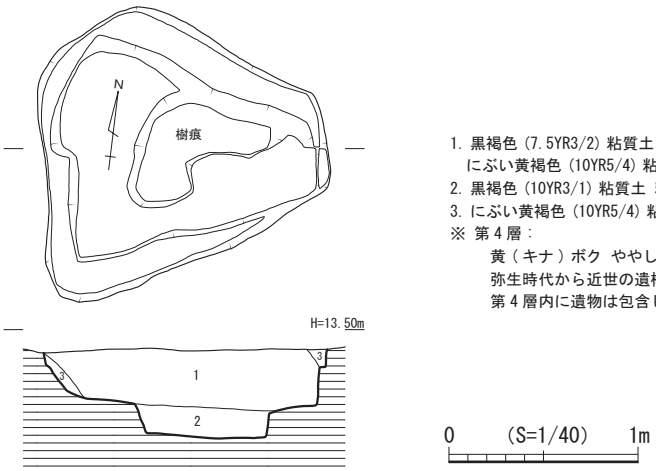


検出状況（北西から）　断面（東南から）　完掘状況（北東から）

図版102　ST3遺構状況

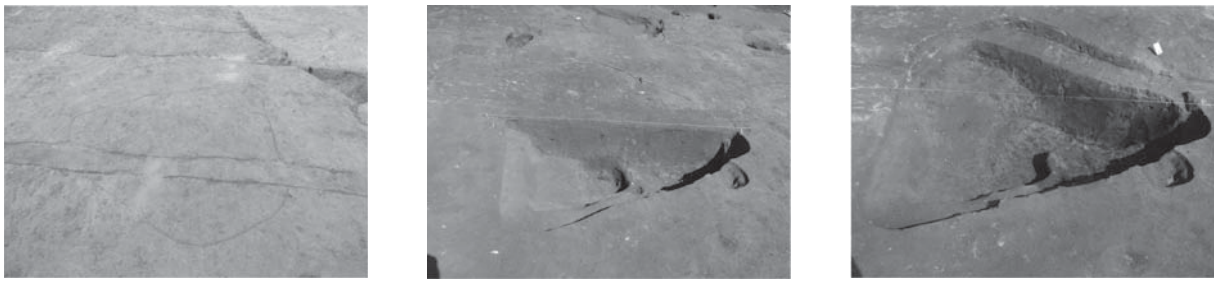
④ TAK201403　3区 ST4(土坑墓)(第119図　図版103)

ST4は3区1270グリッドに位置する。中心長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.3m を測る不整三角形の平面プランである。墓壙の平面プランが不整形ではあるが二段掘りの様相を呈する。西側に幅0.7m を測る埋葬壙の小口らしき痕跡がみられることから土壙墓と考えられる。しかしながら後世の樹痕等によりかなり破壊されているためこれ以上の復元は不可能である。遺物は出土しなかった。



1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 粘性ややあり しまり強い
　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土を 7% 混合 中央部下部に集中して混合している
2. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 粘性あり しまり強い 樹痕
3. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土　粘性ややあり しまり強い (第 4 層)
※ 第 4 層：
　黄 (キナ) ボク ややしまる
　弥生時代から近世の遺構が検出された遺構面である
　第 4 層内に遺物は包含しない

第119図　ST4平・断面図(S=1/40)

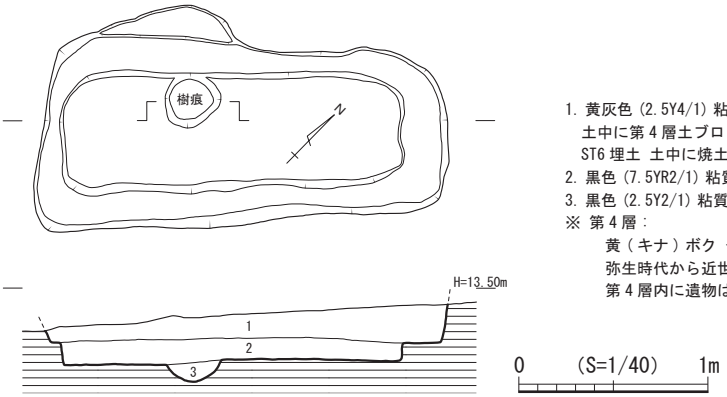


検出状況 (北から)　断面 (南から)　完掘状況 (南から)

図版103　ST4遺構状況

⑤ TAK201403　3区 ST6(土坑墓)(第120図　図版104)

ST6は3区1470グリッドに構築された土坑墓である。平面プランは長方形で、二段掘りで主軸はS－44°－W で南西から北西方向に構築された土坑墓である。墓壙規模は中央長軸2.14m、中央短軸0.92m、深さ8～20cm を測る。その中心に埋葬壙を構築する。規模は長軸1.80m、短軸0.6m、深さ9～12cm を測る。小口幅は南西側が0.46m、北東側が0.42m であることから南西側が頭位であろう。遺物は出土しなかった。



1. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 しまり強い
　土中に第 4 層土ブロックを 10% 含む
　ST6 埋土 土中に焼土を含む
2. 黒色 (7.5YR2/1) 粘質土 中程度のしまりをもつ ST6 埋土
3. 黒色 (2.5Y2/1) 粘質土 しまり弱い ST 構築以前の土 樹痕の跡か
※ 第 4 層：
　黄 (キナ) ボク ややしまる
　弥生時代から近世の遺構が検出された遺構面である
　第 4 層内に遺物は包含しない

第120図　ST6平・断面図(S=1/40)

検出状況（東から）

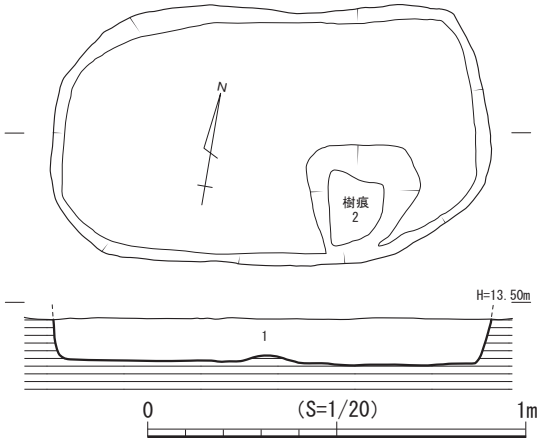
検出状況（北東から）

完掘状況（南東から）

図版104　ST6遺構状況

⑥ TAK201403　3区 ST7（土坑墓）（第121図　図版105）

ST7は3区1470グリッドに位置する。規模は中心長軸1.16m、中心短軸0.68m、深さ12cm を測る隅丸長方形を呈する。全体に削平を受けているが土坑墓と考えられる。壁は垂直に立ち上がり土層の堆積は1層で黄灰色粘質土、しまりは強い。出土遺物は覆土から小片が出土した。



1. 黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　しまり強い　土中に第４層ブロックを 5% 含む
ST7 埋土　遺物出土
2. 橙色（7.5YR7/6）粘質土　しまり強い　広義で「第４層」と捉えている土
ST7 とは直接の関係はない
※ 第４層：黄（キナ）ボク　ややしまる
弥生時代から近世の遺構が検出された遺構面である
第４層内に遺物は包含しない

第121図　ST7平・断面図(S=1/20)

検出状況（北から）

半截状況（南から）

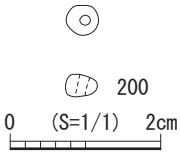
完掘状況（東から）

図版105　ST7遺構状況

⑦ TAK201403　3区 ST8（箱式石棺墓）（第122・123図　図版106・107　表60）

ST8は3区1470グリッドで SC5の西側に隣接し位置する。墓壙の平面プランは長軸2.1m、短軸1.1m+、深さ0.25m+を測る横長楕円形を呈する。遺構の中心部に長さ1.45m×幅0.9m の長方形の後世のカク乱が切り込んでいるため ST8はかなり破壊されている。

遺構検出時及び掘削時に覆土から板石材が数枚出土した。またカク乱土からも板石材が複数枚確認された。床面から側石、小口部石材の痕跡も確認した事から箱式石棺墓であることを確認した。出土遺物は弥生式土器小片、ガラス小玉1点（淡青色）が出土した。200は淡青色のガラス小玉でカリガラスである。時期は後期前半以降であろう。

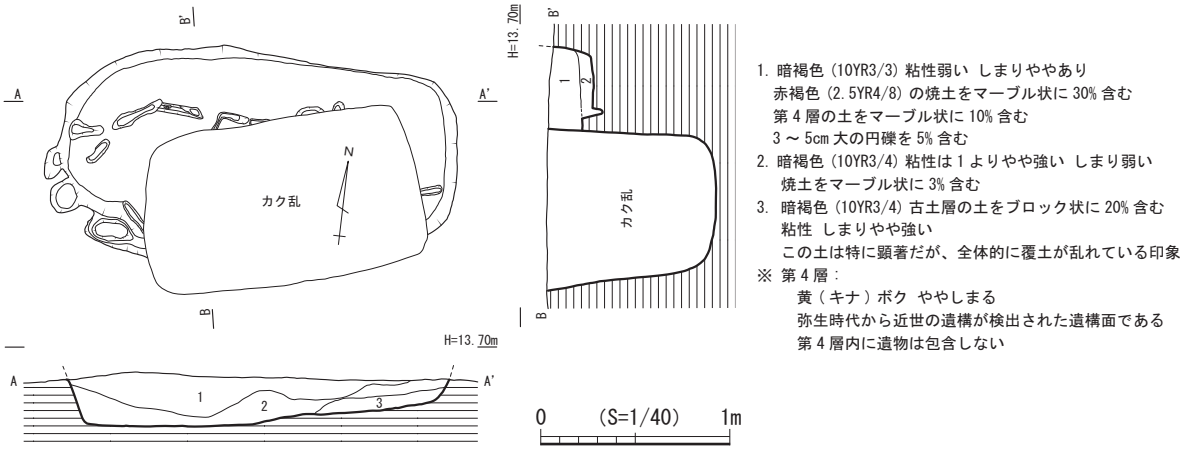


第122図　ST8出土遺物実測図(S=1/1)

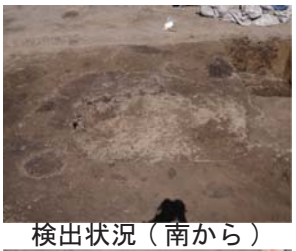
図版106　ST8出土遺物

第60表　ST8出土ガラス小玉観察表

遺物番号	色調	内径①(mm)	内径②(mm)	外径①(mm)	外径②(mm)	厚①(mm)	厚②(mm)	直径(mm)	備考
200	淡青色	1.382	1.262	4.108	—	1.955	2.876	4.003	正円に近い　カリガラス



第123図　ST8平・断面図(S=1/40)


検出状況（南から）

ガラス小玉出土状況

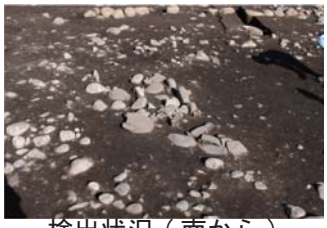
焼土検出状況（南から）

完掘状況（東から）

図版107　ST8遺構状況

⑧ TAK201404　B 6西区 ST1(箱式石棺墓)(第124図　図版108)

ST1はB6西区9270グリッドに位置する。長軸上端1.75m、下端1.45m、短軸上端0.78m、下端0.48m、深さ0.3～0.4mを測る。全体的に大きく削平、カク乱を受けているため原形を保っていない。墓壙の床面がやや原形を保っている。検出時の様相は安山岩の板材とやや細長い円礫を利用した箱式石棺であることが考えられた。主体部を掘り進むと石棺材が原位置を保っていない。すべて動いている状況であった。僅かな痕跡から推察すると側石は円礫を使用し、蓋石は安山岩の板石を使用している様子が窺える。また北東側小口幅0.5m、南西側小口幅0.4mから考えて北西側が頭位と考えられる。


検出状況（南から）

崩落蓋石検出状況（西から）

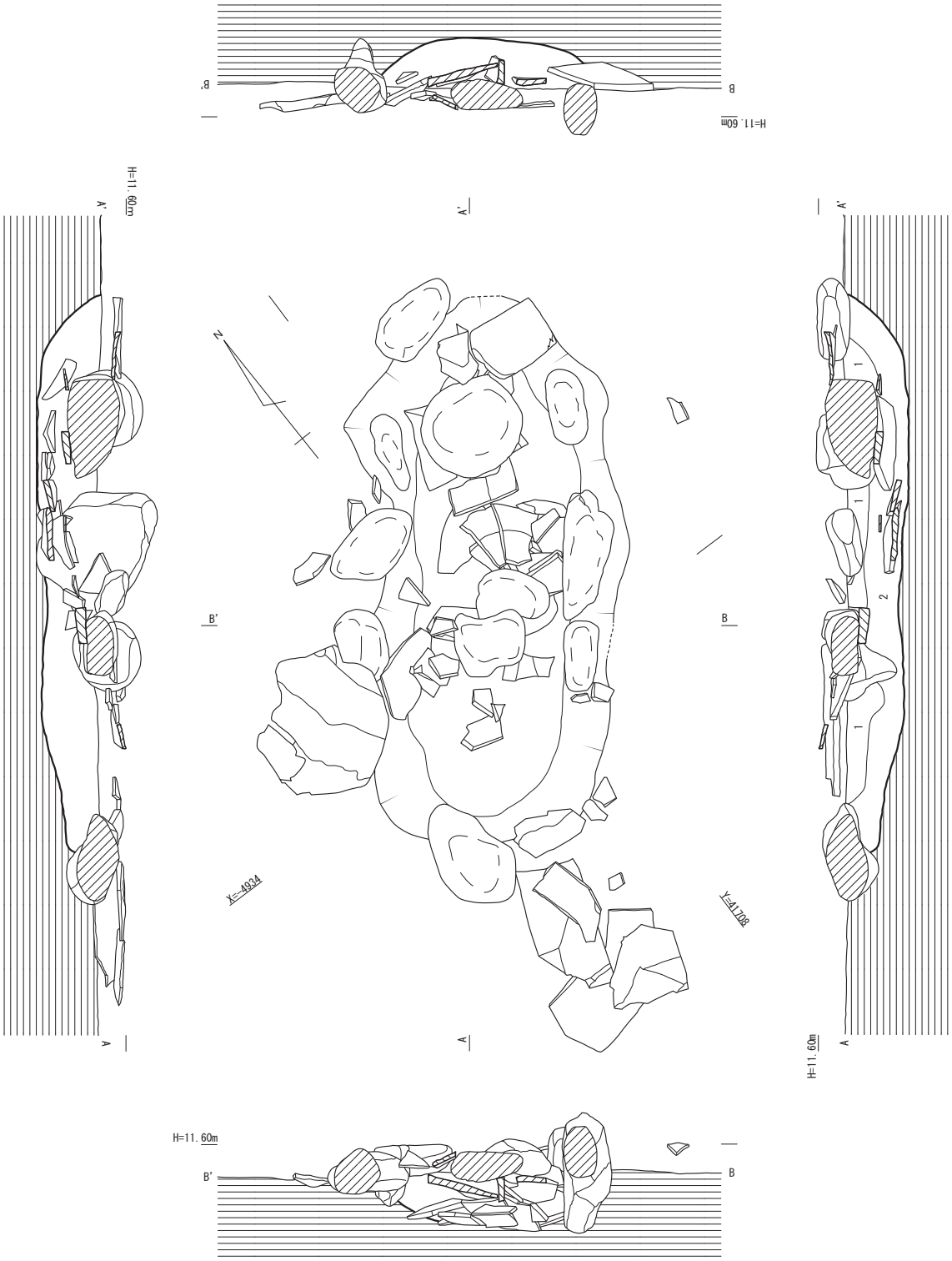
半截状況（東から）

墓坑完掘状況（西から）

完掘状況（西から）

完掘状況（西から）

図版108　ST1遺構状況

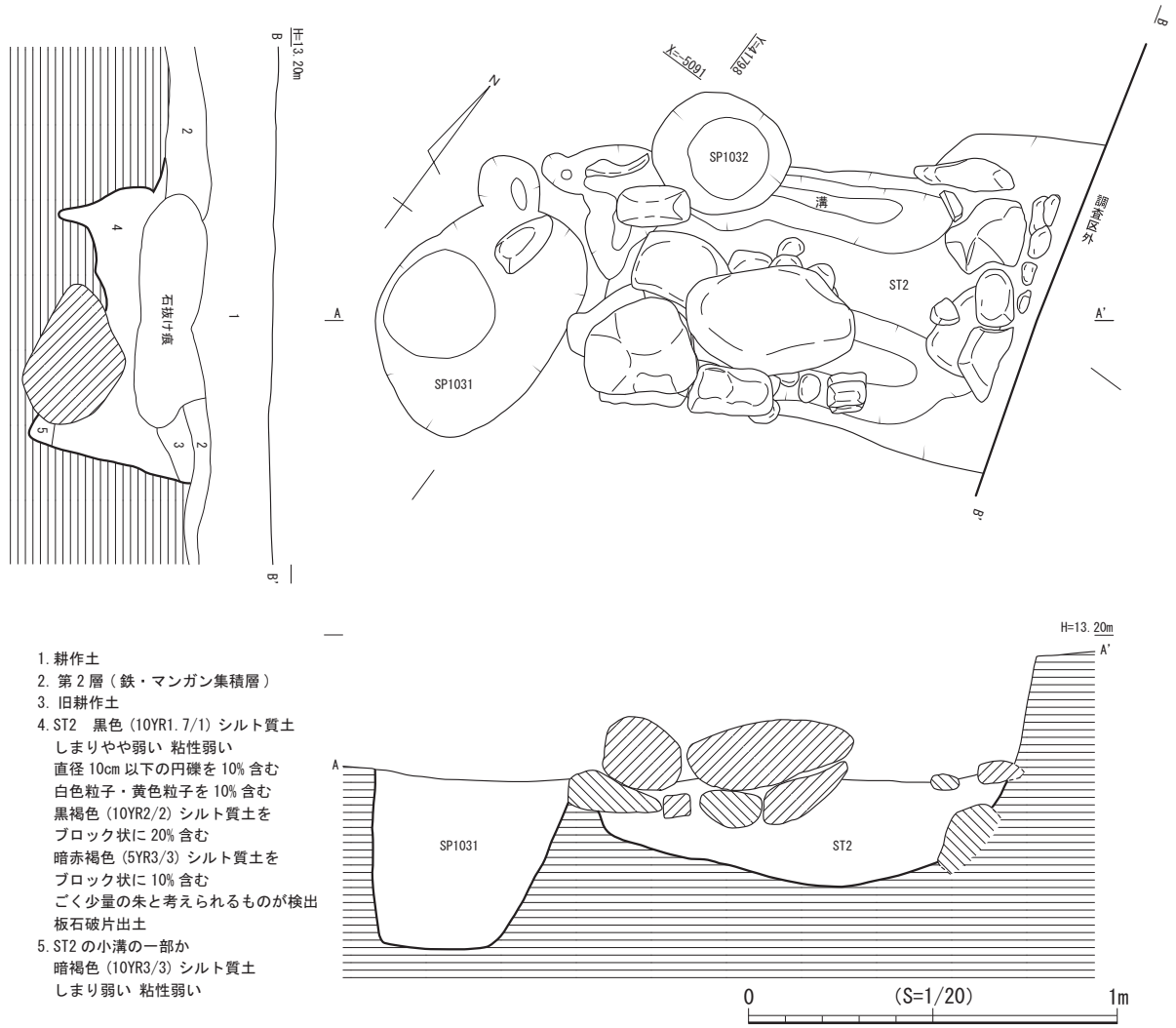


1. 黒褐色（10YR2/2）シルト質土 しまり強い 粘性やや弱い
2. 黒褐色（10YR2/3）シルト質土 しまり１よりやや弱い 粘性やや弱い
現代の耕作による削平を受けている

第124図　ST1平・断面図(S=1/20)

⑨ TAK201404　B8南区 ST2(土坑墓)(第125図　図版109)

ST2は B8南区0878グリッドに位置する。調査区の制限から遺構の半分しか調査が出来なかった。遺構は土坑墓で円礫が覆土の上面に残存する。規模は長軸1.2m+、短軸0.68m、深さ0.30m を測る。完掘状況から側石は円礫を使用していた様子である。出土遺物は僅かな朱の塊が出土した。



第125図　ST2平・断面図(S=1/20)

検出状況（北西から）

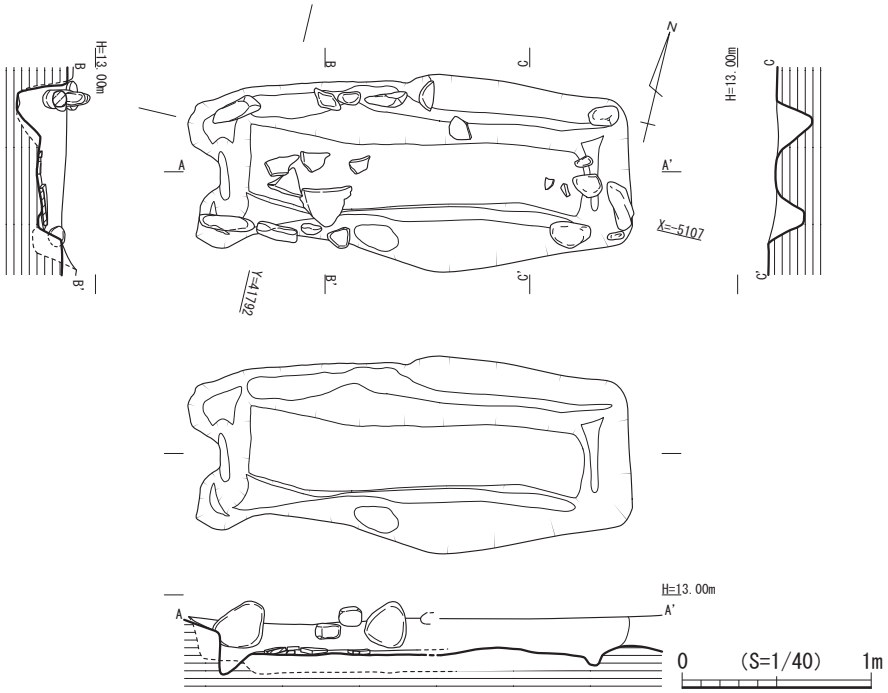
半截状況（南西から）

溝（南東から）

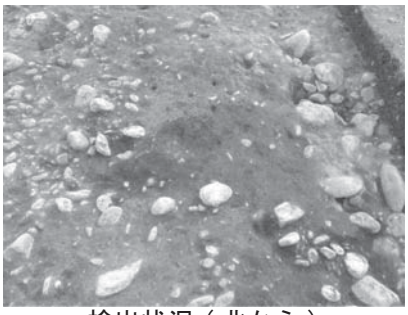
図版109　ST2遺構状況

⑩ TAK201404　B8南区 ST3(箱式石棺墓)(第126図　図版110)

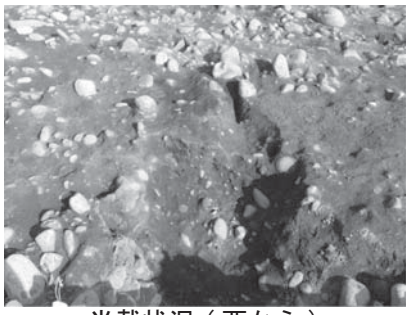
ST3はB8南区0878グリッドに位置する。この石棺墓はTAK201208調査区(竹松遺跡Ⅱ)において半分しか調査できなかった石棺墓である。今回その半分が調査できたため改めて全容を報告する。規模は長軸2.18m、短軸1.06m、深さ18cmを測る横長の平面プランを呈する箱式石棺墓である。構築方向は東西方向で側石、蓋石等は後世において破壊され、遺構内の残存状況は不良である。出土遺物は管玉が1点出土した(この管玉はTAK201208調査区の、ST3出土の管玉で報告済みである。長崎県教育委員会編2017『竹松遺跡Ⅱ』)



第126図　ST3平・断面図(S=1/40)

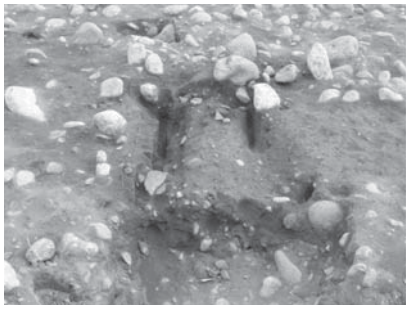


検出状況（北から）



半截状況（西から）

朱検出状況（南東から）

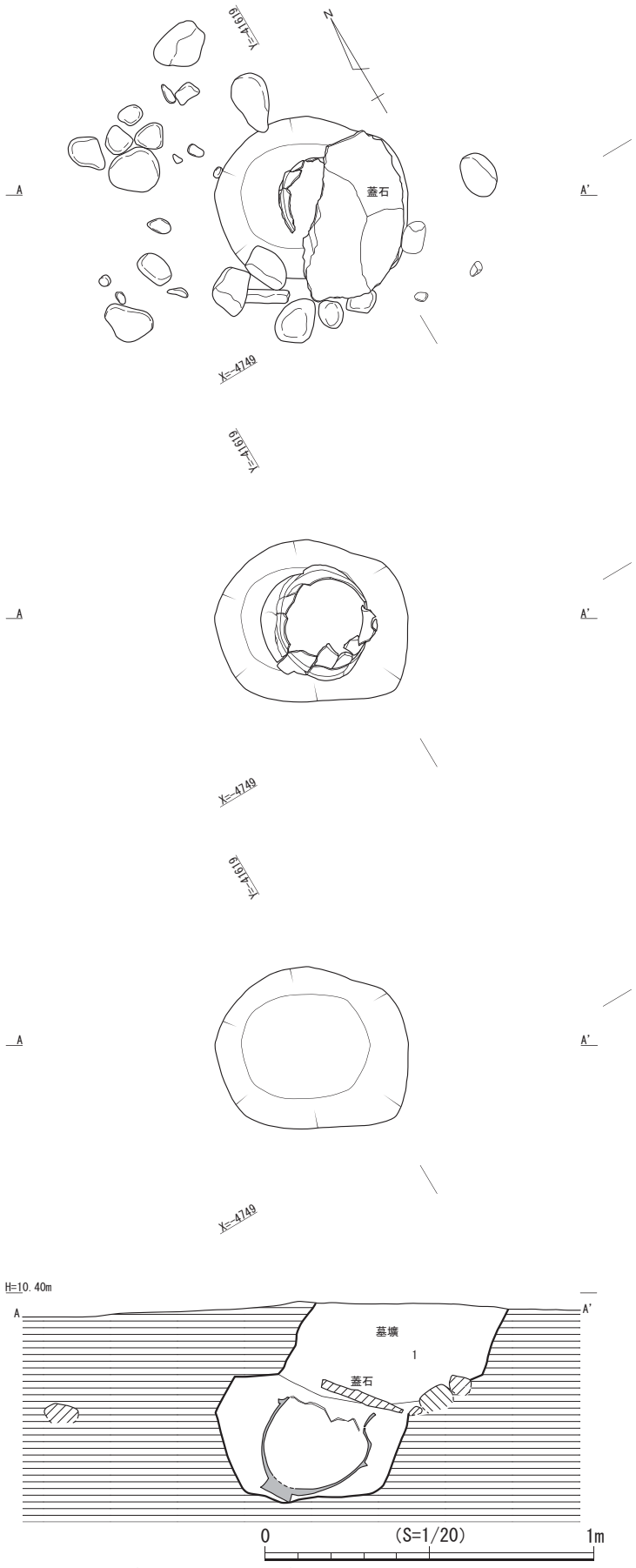


完掘状況（西から）

図版110　ST3遺構状況

⑪ TAK201405　5区 ST1(甕棺墓)(第127・128図　図版111・112　表61)

ST1は5区7460グリッドに位置する。4b層上面(黒褐色粘質土)でST1を検出した。墓壙の平面プランは長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.25mを測る楕円形を呈する。主体部の甕(壺)は単棺で蓋は平石(安山岩)である。棺は東側に35°程傾斜して埋葬している。棺の大きさから乳幼児棺であろう。**201**は甕で口縁端部は欠損する。高さ39.0cm、幅34.0cm胴部上位に一条の刻目凸帯を有し、底部は平底である。胴部下位に3cm程の穿孔を有す。内面にススが付着している事から日常容器の転用であろう。内外面は斜め及び縦方向にハケメ調整を施す。甕棺(壺)の時期は後期前半頃と考えられる。



1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土 褐色 (7.5YR4/6) 粒を 20% 含む ややしまる

第127図　ST1平・断面図(S=1/20)

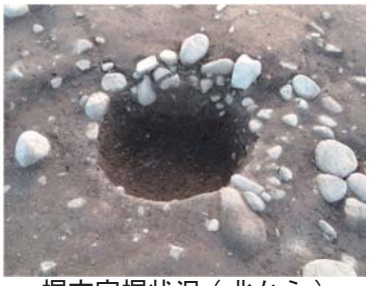
検出状況（西から）

検出状況（北西から）

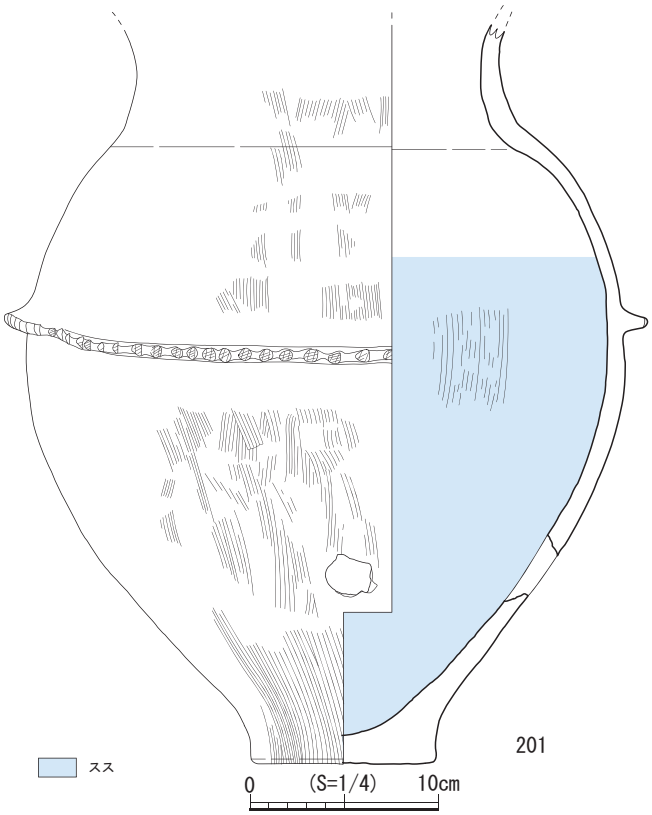
蓋石（東から）

蓋石除去状況(北から)

棺内覆土完掘状況（北から）


掘方完掘状況（北から）

図版111　ST1遺構状況



第128図　ST1出土遺物実測図(S=1/4)

図版112　ST1出土遺物

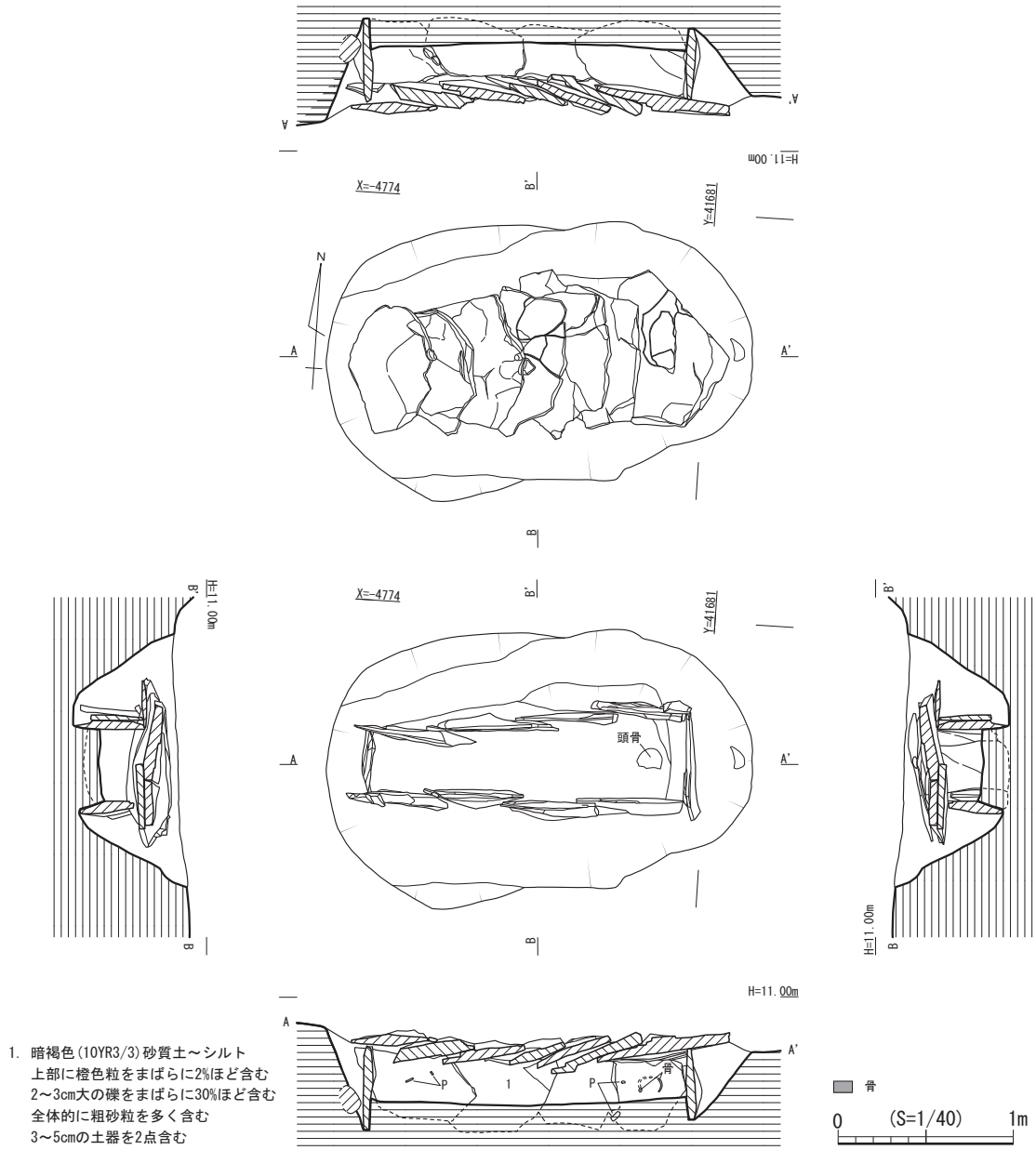
第61表　ST1出土遺物観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
201	甕棺	接合 ほぼ完形	—	残存 (39.0)	9.0	ハケメ ナデ	ハケメ後 ナデ	10YR7/4 にぶい橙	2.5Y7/2 灰黄	良好	角閃石、石英 長石	口縁端部欠損、底部平底 胴部に一条の刻目凸帯あり 内面にススが残る

⑫ TAK201405　2・3区 ST2(箱式石棺墓)(第129図　図版113)

ST2は2区7668・3区7666グリッドに位置する。墓壙の平面プランは長軸中央で2.48m、短軸中央で1.44m、深さ0.65m を測る楕円形を呈する。主軸方位はN－86°－E でほぼ東西方向に構築された箱式

石棺墓である。蓋石は7枚で構成され東側から順に鎧積みで設置されている。両小口は板石1枚で、両側石は4枚で構築されている。石棺墓の規模は長軸中心で1.80m、中心で幅0.40m、高さ0.25m を測る。小口幅は東側で45cm、西側小口で33cmであることから東側小口が頭位と考えられる。床面までの高さは25cm程である。遺物は頭位から頭骨片が出土した。遺物は弥生土器の小細片が出土した。



第129図　ST2平・断面図(S=1/40)

プラン検出(東から)

検出状況(南から)

蓋石除去後検出状況(北から)

頭骨検出状況(西から)

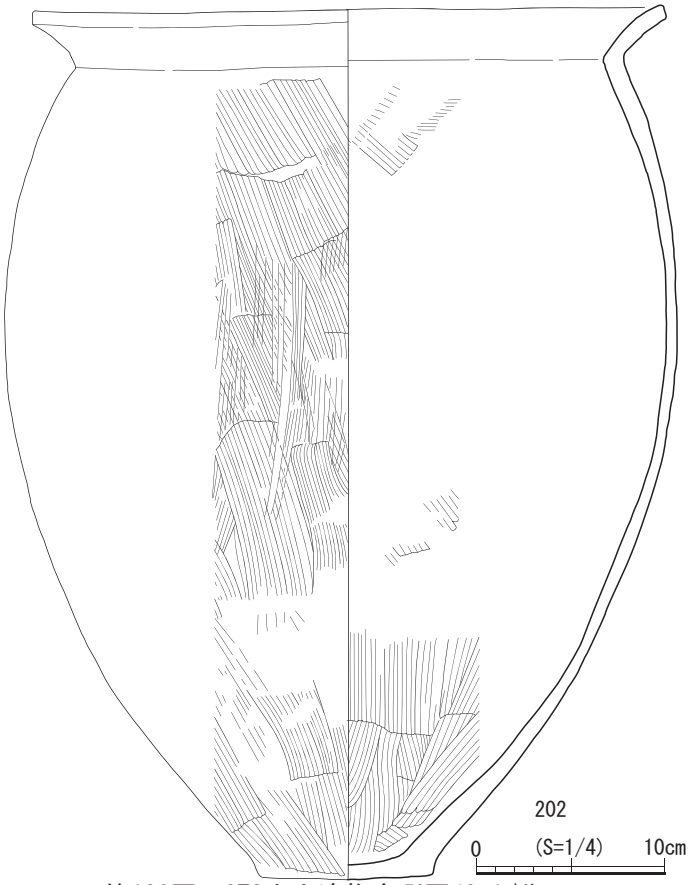
石棺内完掘状況(北から)

掘方状況(北から)

図版113　ST2遺構状況

⑬ TAK201405　3区 ST3(甕棺墓)(第130・131図　図版114・115　表62)

ST3は3区7666グリッドに位置する。墓壙の平面プランは長軸0.90m、短軸0.85m、深さ0.30m を測る台形状を呈する。その中心部に長軸0.50m、短軸0.45m、深さ10cm の楕円形の埋葬壙を構築している。埋葬壙に甕を65°傾斜させ設置して甕口縁部に石蓋(安山岩)で閉塞している。**202**は接合復元で完形になった甕である。口縁部は、くの字で端部は方形である。底部は僅かに凸レンズ状を呈する。内外面はハケメ調整を行い、器高は46.1cm、口径33.4cm、底径9.0cm を測る。規模から小児棺であろう。時期は後期前半頃であろう。

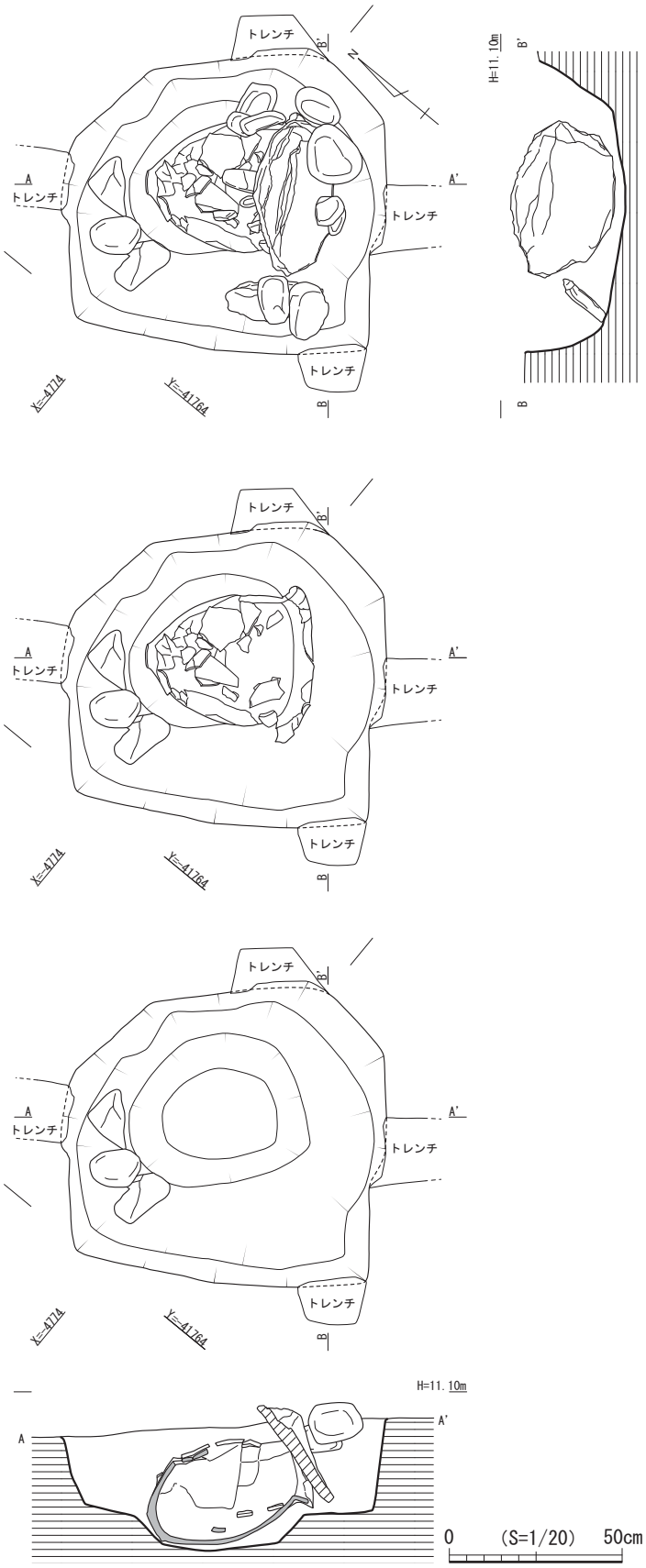


第130図　ST3出土遺物実測図(S=1/4)

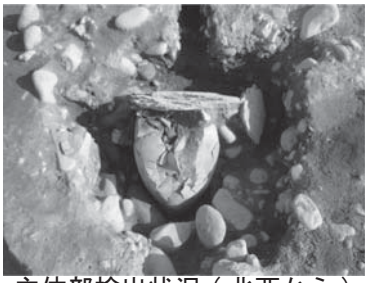
図版114　ST3出土遺物

第62表　ST3出土土器観察表

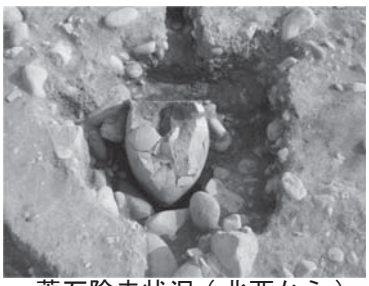
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
202	甕棺	接合 ほぼ完形	33.4	46.1	9.0	ハケメ 口縁部ナデ	ハケメ後ナデ 底部ハケ痕	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	雲母、石英、長石 角閃石	蓋石あり



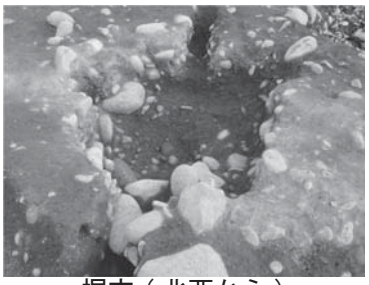
第131図　ST3平・断面図(S=1/20)



主体部検出状況（北西から）



蓋石除去状況（北西から）



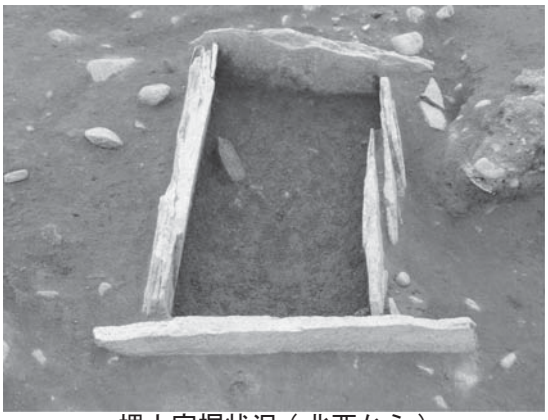
掘方（北西から）

図版115　ST3遺構状況

⑭ TAK201405　5区 ST4(箱式石棺墓)(第132図　図版116)

ST4は5区7460・7462グリッドに位置する。墓壙の平面プランは長軸上端1.20m、下端0.85m、短軸上端0.87m、下端0.56m、深さ0.30m を測る楕円形である。その中央に板状の安山岩で長方形の石棺墓を構築している。側石は1枚と2枚で構築し、小口は頭位、足位ともに1枚で構築されている。裏込めの円礫等もやや認められる。蓋石は1枚検出した。残りの蓋石は周辺には見当たらない。箱式石棺墓の規模から考えて小児棺と思われる。出土遺物は弥生土器小細片で器種は不明である。石棺の形状から後期前半頃の所産であろうか。

検出状況（北西から）

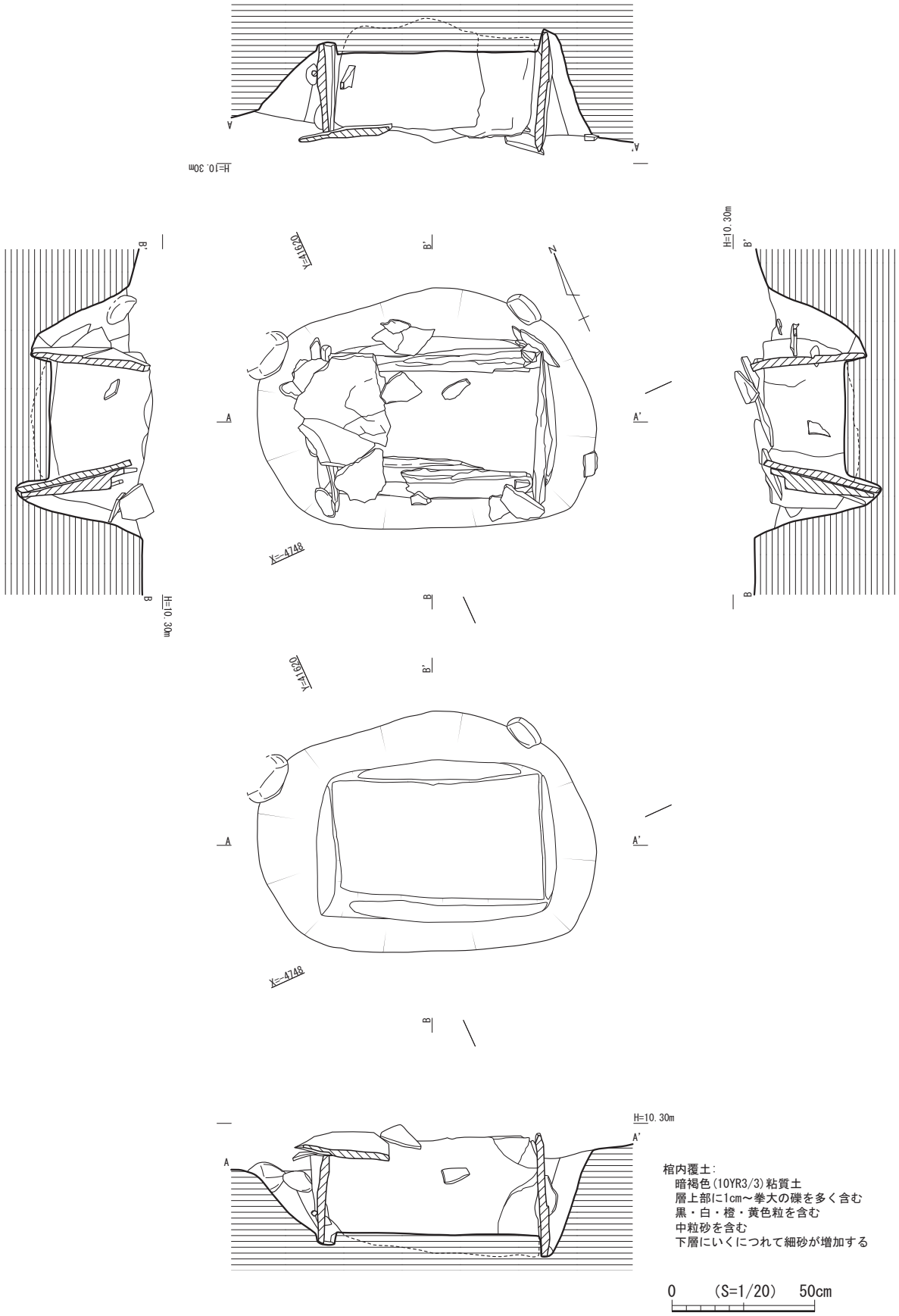

埋土完掘状況（北西から）

掘方内検出状況（北西から）

棺材除去状況（南西から）

完掘状況（北東から）

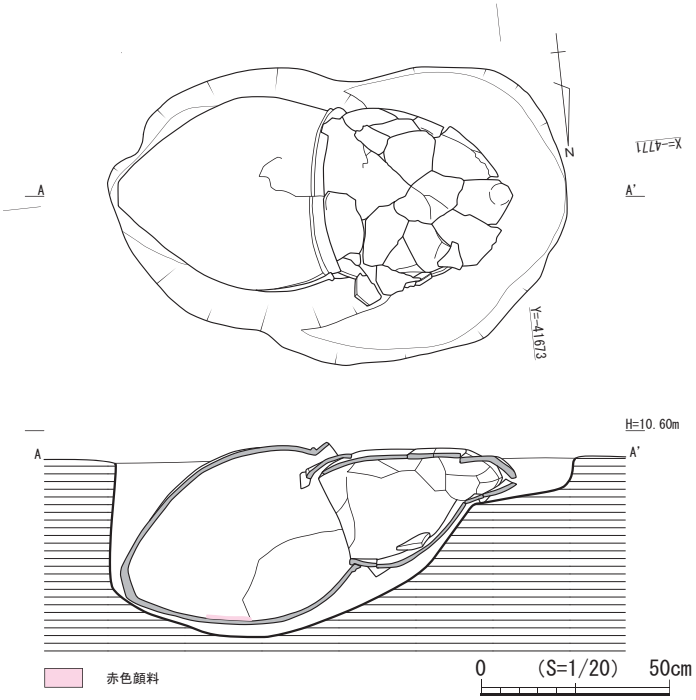
図版116　ST4遺構状況



第132図　ST4平・断面図(S=1/20)

⑮ TAK201405　3区 ST6(甕棺墓)(第133・134図　図版117・118　表63)

ST6は3区7666グリッドに位置する。墓壙の平面プランは長軸1.20m、短軸0.75m、深さ0.95m を測る楕円形を呈する。墓壙は上甕が安定するように幅0.25m のテラス状の段差を設けている。甕棺は覆口式で下甕が長軸0.65m、短軸0.45m、上甕の長軸は0.50m、短軸0.30m を測る。下甕の外面に朱の痕跡及び僅かな骨片が出土した。全体的に残りは良好である。**203**は上甕、**204**は下甕である。上甕・下甕共に残存状況は良好である。口縁部は、くの字口縁を呈し、頸部に三角凸帯を有す。胴部はやや丸く仕上げられ底部は僅かに凸レンズ状を呈する。上甕、下甕共に内外面が縦、斜め方向にハケメ調整を施し全体的に丁寧な仕上げである。口径は42.7cm、器高は64.9cm、座径8.4cm を測る。甕棺の規模から小児棺であろう。甕棺の形式から時期を考えると後期前半頃であろう。



第133図　ST6平・断面図(S=1/20)

検出状況(北から)

甕棺検出状況(北から)

下甕内部 朱 検出状況(西から)

完掘状況(北から)

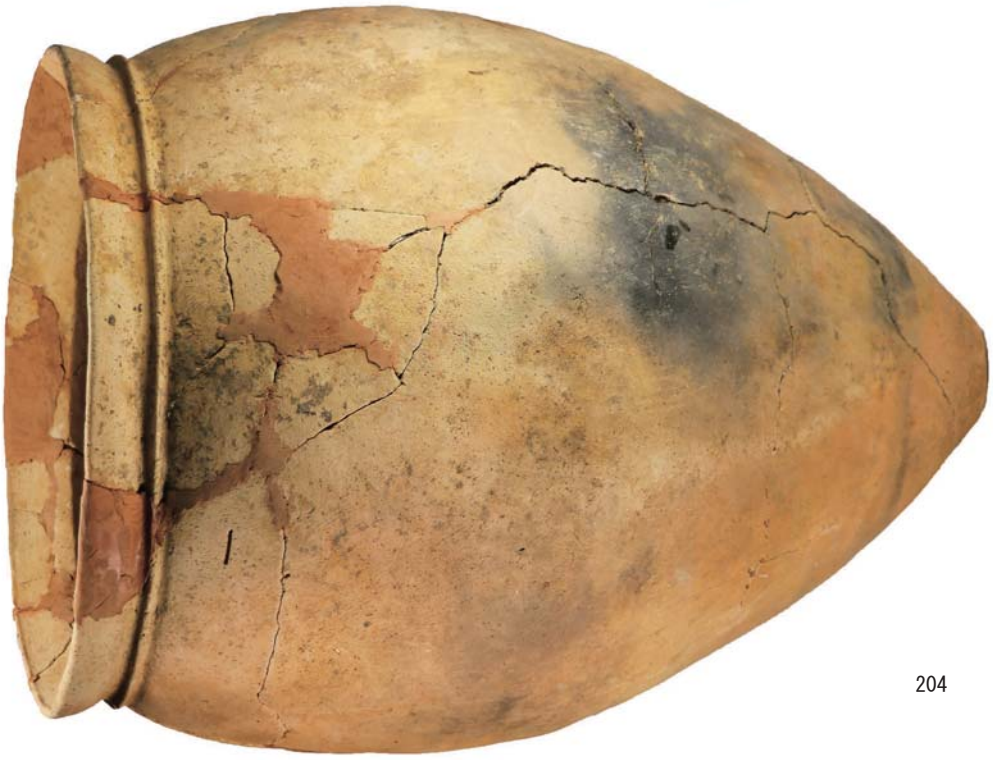
図版117　ST6遺構状況

第134図　ST6出土遺物実測図(S=1/5)

第63表　ST6出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
203	甕棺上甕	接合 ほぼ完形	—	残存 (46.9)	6.2	斜め方向の ハケメ	斜め方向の ハケメ	5YR5/8 明赤褐	5YR4/1 褐灰	良好	角閃石、長石 石英、	覆口式甕棺、口縁部欠損 上下甕棺共頸部に一条の 凸帯あり。丹塗りあり
204	甕棺下甕	接合 完形	42.7	64.9	8.4	多方向のハケメ	多方向のハケメ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良好	角閃石、長石 石英、	

203

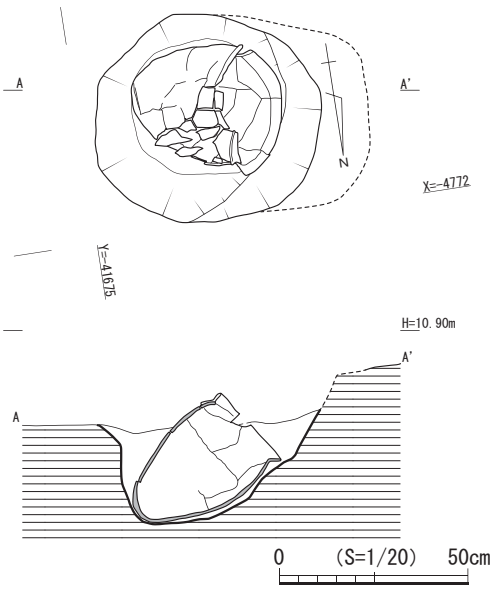


204

図版118　ST6出土遺物

⑯ TAK201405　3区 ST7(甕棺墓)(第135・136図　図版119・120　表64)

ST7は3区7666グリッドに位置する。墓壙の平面プランは長軸0.58m、短軸0.55m、深さ0.25～0.30mを測る楕円形を呈する。墓壙中央に甕棺を30°倒して西側に開口させ設置している。甕棺は単棺で蓋は見当たらなかった。接合復元でほぼ完形の甕となり規模は高さ37.4cm、口径27.0cmを測る。甕が小形である事から、乳幼児用甕棺であろう。**205**は甕で口縁部はくの字で、底部は平底である。外面は斜め方向にハケメ調整を施し、甕の形状から後期前半頃であろう。



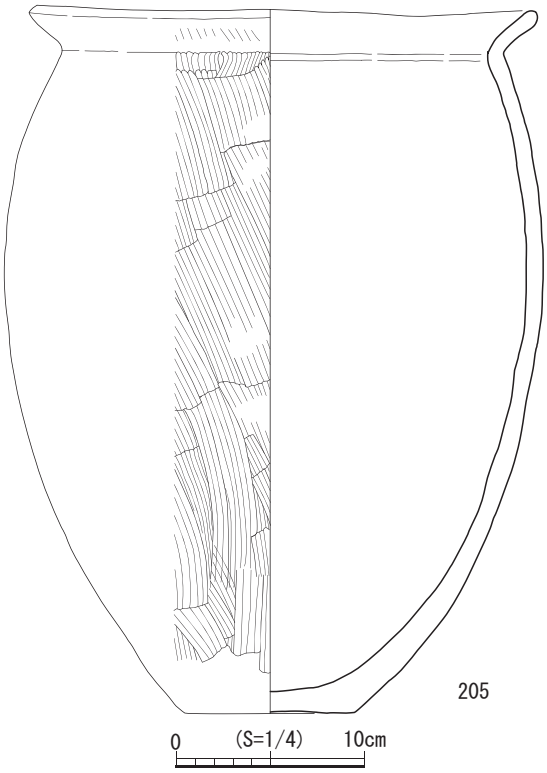
第135図　ST7平・断面図(S=1/20)

検出状況（北から）

検出状況（北から）

完掘状況

図版119　ST7遺構状況



第136図　ST7出土遺物実測図(S=1/4)

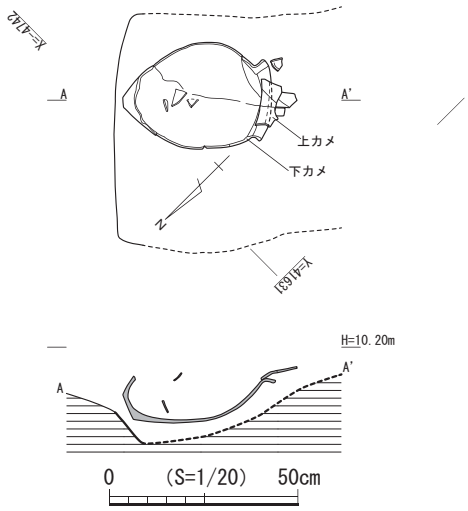
図版120　ST7出土遺物

第64表　ST7出土土器観察表

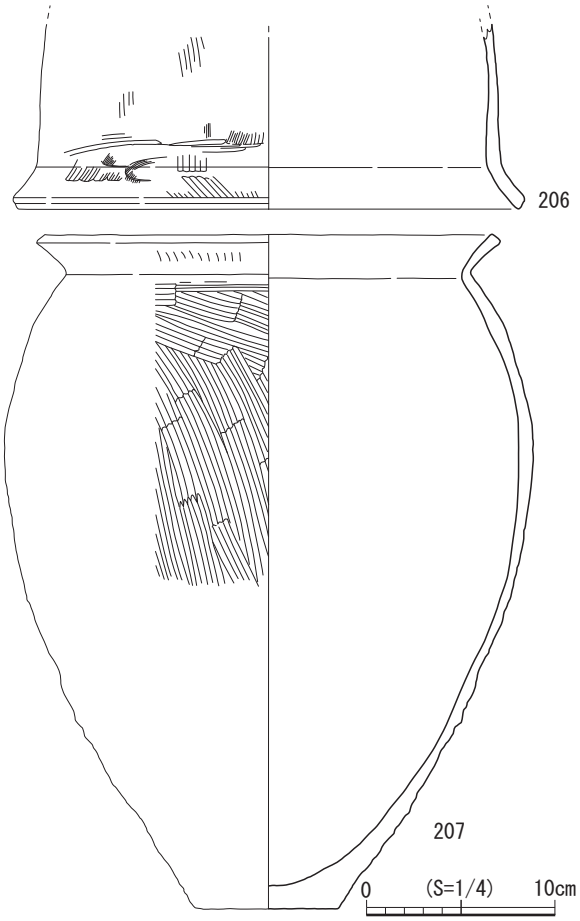
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
205	甕棺	接合 ほぼ完形	27.0	37.4	9.0	ハケメ 縁部ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良好	金雲母、石英 長石	単棺、蓋なし

⑰ TAK201405　5区 ST8(甕棺墓)(第137・138図　図版121・122　表65)

ST8は5区7462グリッドに位置する。墓壙、埋葬壙はかなり削平されているため確認できない。甕棺の残存状況から下甕の口縁部に上甕の口縁部片が接した状態で検出したことから覆口式の甕棺であろう。甕棺の設置方向は北東～南西方向である。上甕は僅かに口縁部の一部だけ、下甕は口縁部～底部の1/2が残存している。**206**は上甕、**207**は下甕である。**206**は口縁部～胴部片である。口縁部は緩やかなくの字で端部は方形である。外面は僅かにハケメ調整痕が残る。**207**は下甕で口径23.6cm、器高35.6cmを測る完形である。口縁部は、くの字で胴部は緩やかに膨らみを持ち底部へ続く。底部は平底である。外面は斜め方向にハケメ調整を施す。こうした形状から後期前半頃であろう。



第137図　ST8平・断面図(S=1/20)



第138図　ST8出土遺物実測図(S=1/4)

図版121　ST8出土遺物

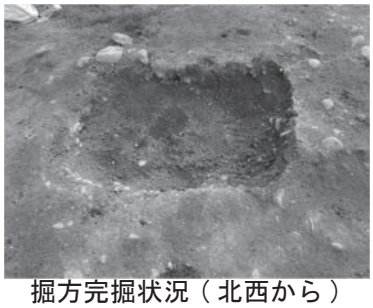
第65表　ST8出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
206	甕棺上甕	口縁部～胴部	26.4	残存(9.7)	—	ハケメ後ナデ	ナデ	10YR3/3 暗褐	5YR5/6 明褐	良	赤色粒子、長石 雲母、角閃石	覆口式の甕棺 下甕は剥離が多い
207	甕棺下甕	1/2残存	(23.6)	35.6	7.8	ハケメ 摩耗激しい	ナデ	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	良	長石、石英 角閃石	

検出状況（北西から）

覆土断面(骨粉)状況(北東から)

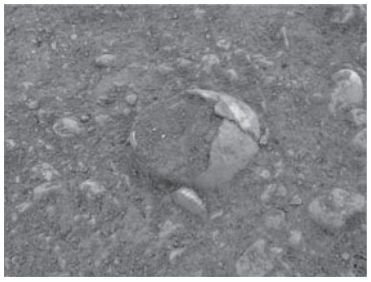
棺内覆土完掘状況（東から）


掘方完掘状況（北西から）

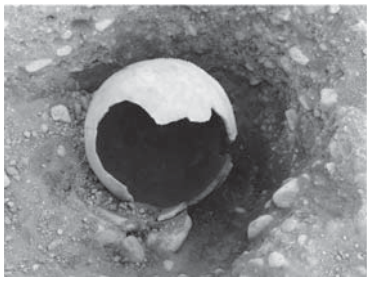
図版122　ST8遺構状況

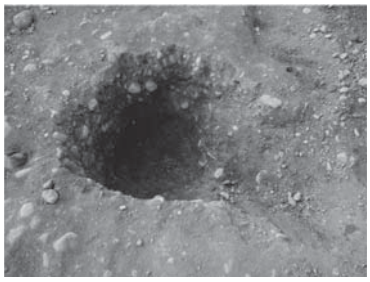
⑱ TAK201405　3区 ST9(甕棺墓)(第139・140図　図版123・124　表66)

ST9は3区7666グリッドに位置する。墓壙の平面プランは長軸0.97m、短軸0.77m、深さ0.5m を測る楕円形である。その中心に甕棺を設置している。甕棺は覆口式で南北方向に設置され45°の傾斜で埋葬されていた。上甕、下甕の規模は0.45m、幅0.35m 程である。上甕の外面一部と下甕内面に朱が塗布されていた。**208**は上甕、**209**は下甕である。いずれも口縁部は丁寧に取り除いている。**208**は頸部に三角凸帯を有し、底部は平底で、内外面を斜め方向にハケメ調整を施す。器高は45.5cm を測る。**209**は胴部全体がやや丸い形状で胴部中央に二条の刻目三角凸帯を有する。内外面は斜め方向にハケメ調整を施す。底部は平底である。器高は47.8cm である。規模から小児棺であろう。こうした形状から後期前半頃と考えられる。

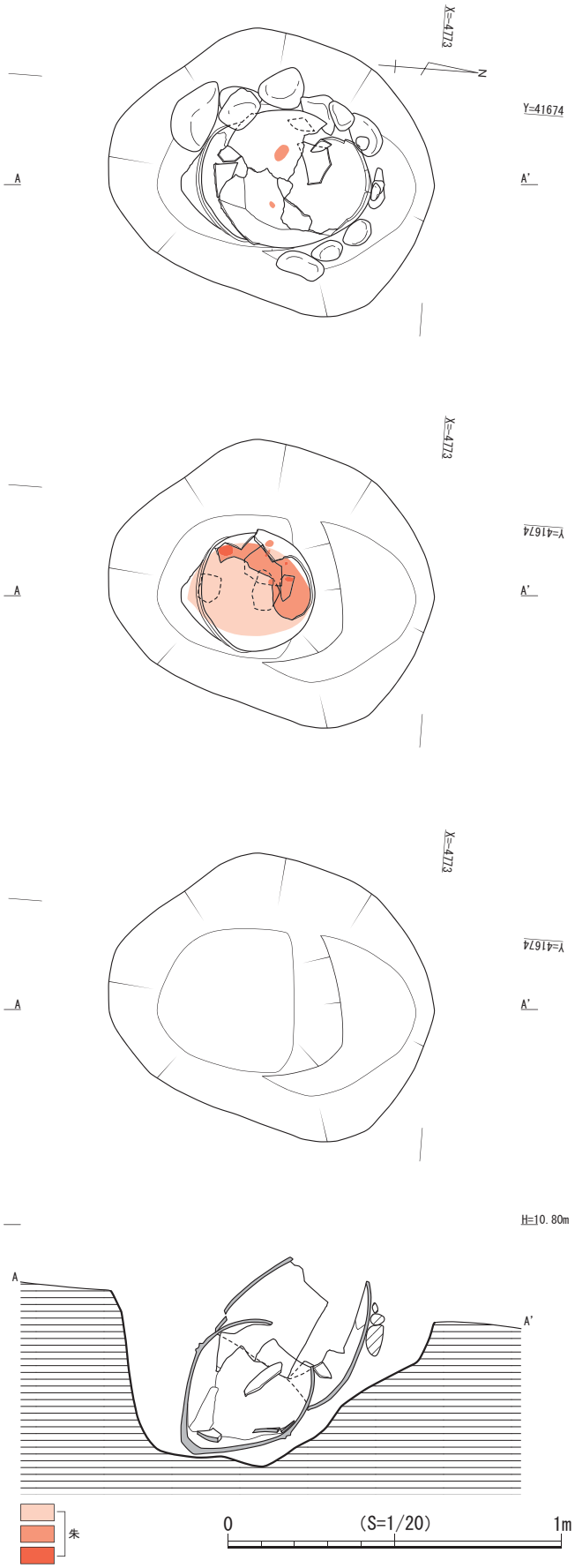

上甕検出状況（東から）

下甕検出状況（東から）

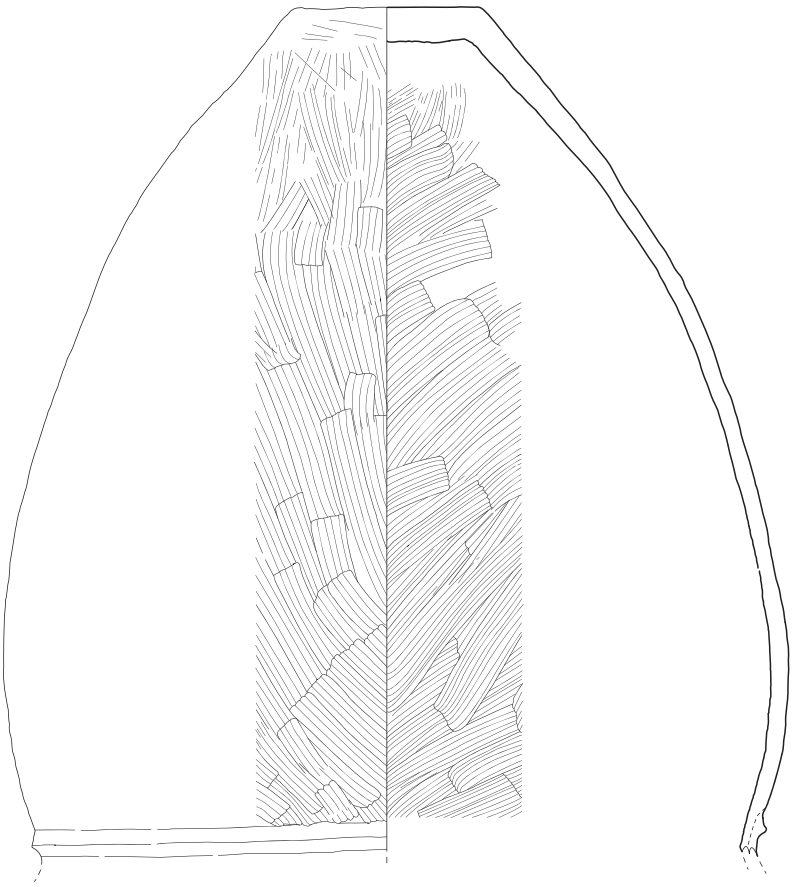

下甕内部朱検出状況（北西から）


完掘状況（東から）

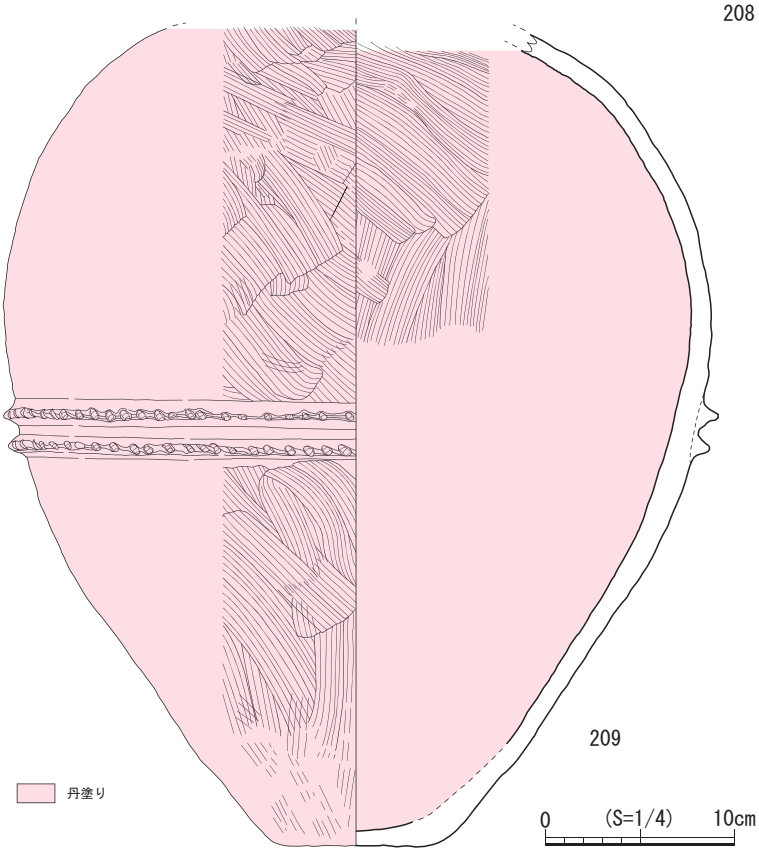
図版123　ST9遺構状況



第139図　ST9平・断面図(S=1/20)



208



第140図　ST9出土遺物実測図(S=1/4)

208

209

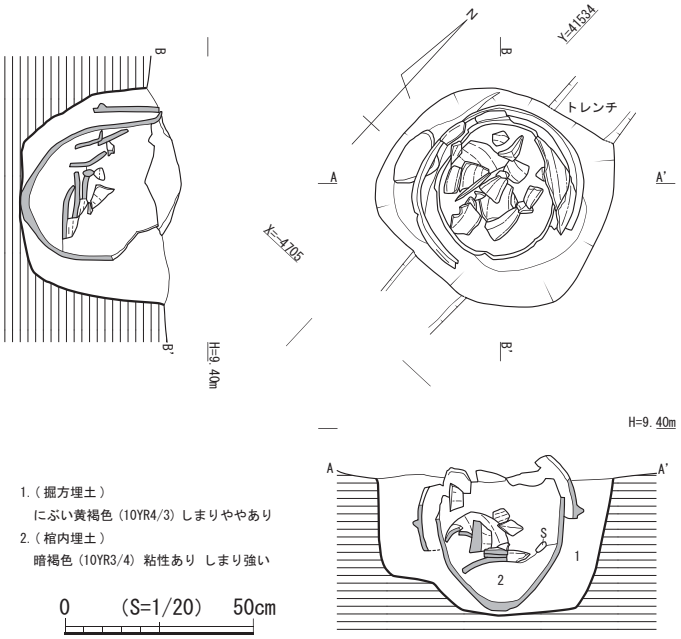
図版124　ST9出土遺物

第66表　ST9出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
208	甕棺上甕	接合 ほぼ完形	—	残存 (45.5)	9.6	ハケメ後ナデ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	石英、角閃石 長石	覆口式甕棺 上甕頸部に一条の三角凸帯あり、下甕胴部に二条の刻目凸帯あり
209	甕棺下甕	接合 ほぼ完形	—	残存 (47.8)	7.2	ハケメ	ハケメ 剥がれあり	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良好	石英、角閃石 長石	

⑲ TAK201406　2区 ST1(甕棺)(第141・142図　図版125・126　表67)

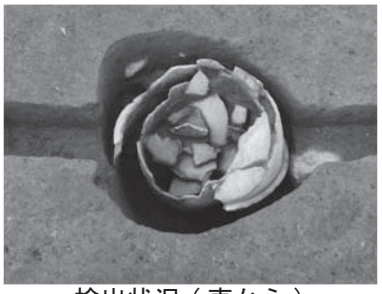
ST1は2区7052グリッドに位置する。小形の覆口式の甕棺である。墓壙は長軸0.60m、短軸0.57m、深さ0.37～0.45mを測る楕円形の平面プランを呈する。この中に40.6cm(接合復元からの器高)の下甕を垂直に設置し埋葬していた。上甕はかなり壊れており原形をなしていない。甕棺の規模から乳幼児棺であろう。**210**は上甕で口縁部、底部が欠損する。胴部だけを下甕の蓋にしている。胴部径は復元で44.7cmを測り、一条の凸帯を巡らす。外面はハケメ調整を行い、内面はかなり剥離がある。**211**は下甕で口縁部～底部まで約8割程が接合復元できた。口径36cm、器高40.7cm、底径8.7cmを測る。口縁部は、くの字口縁で端部は丸い。内外面はハケメ調整を施す。底部は僅かに凸レンズ状を呈する。甕棺の時期は下甕の口縁部及び底部形状から考えて後期前半頃であろう。



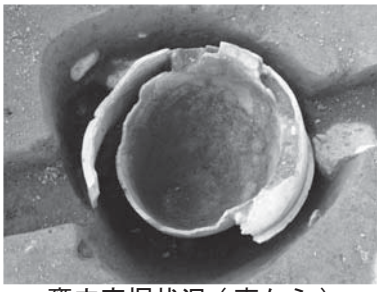
第141図　ST1平・断面図(S=1/20)

検出状況（東から）

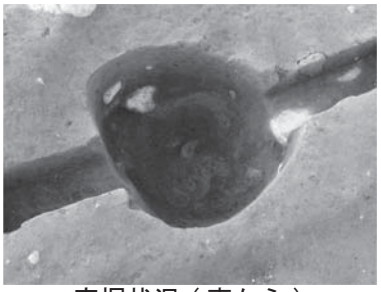
検出状況（北から）



検出状況（東から）

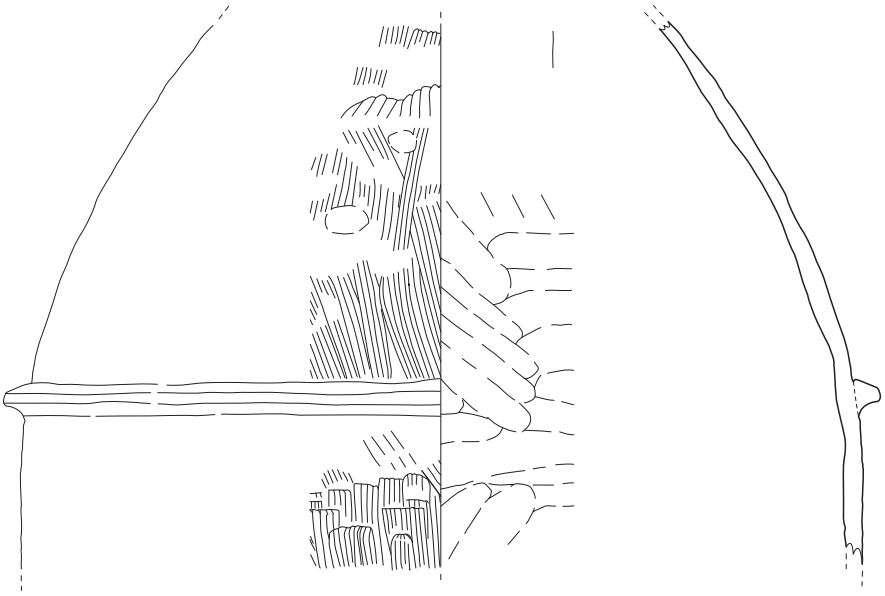


甕内完掘状況（東から）

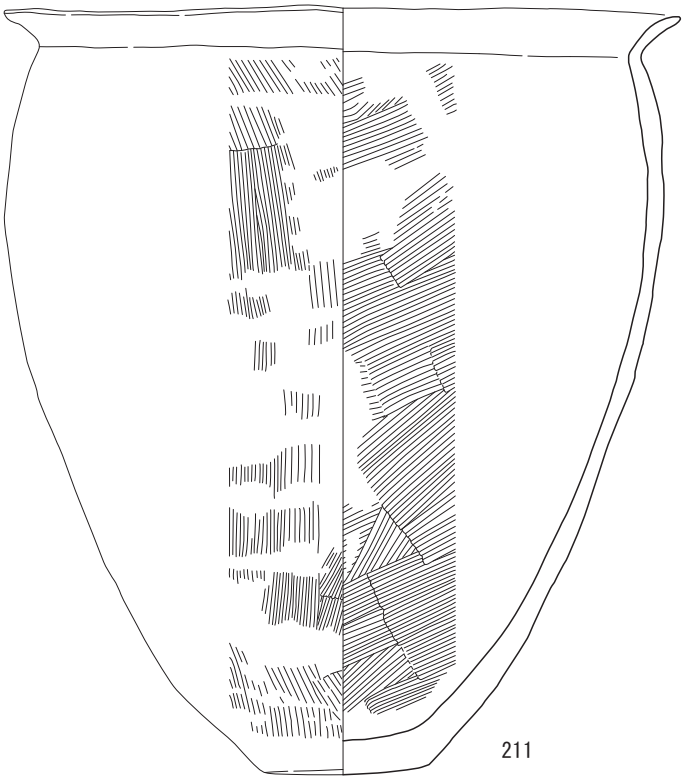


完掘状況（東から）

図版125　ST1遺構状況



210



211

0 (S=1/4) 10cm

第142図　ST1出土遺物実測図(S=1/4)

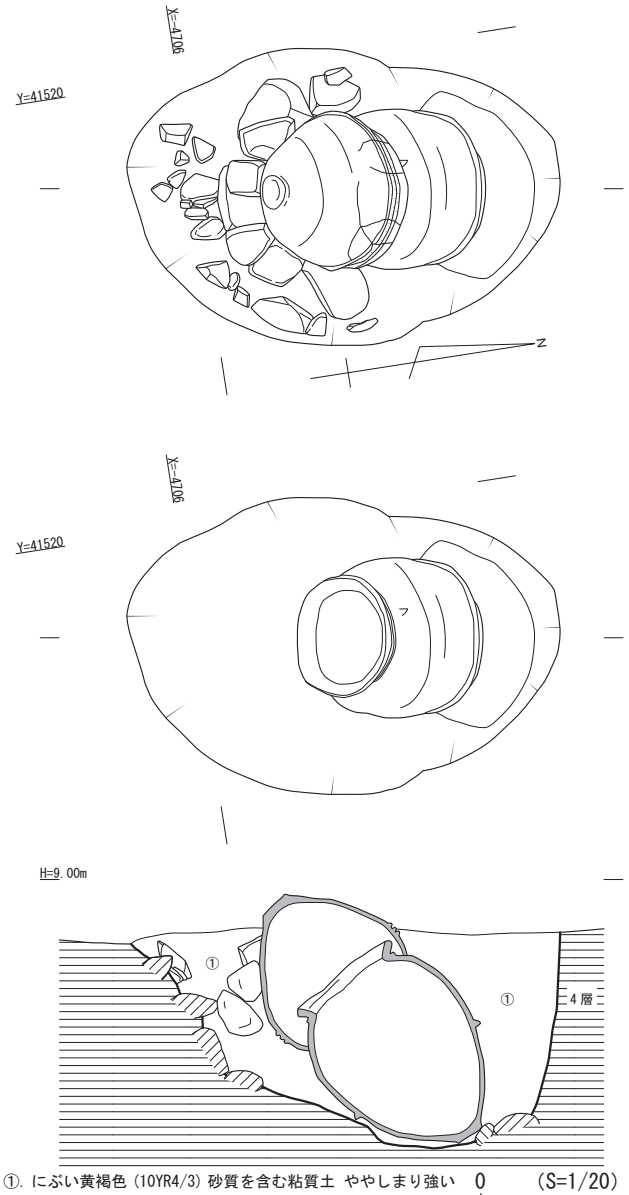
図版126　ST1出土遺物

第67表　ST1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
210	甕棺上甕	胴部	—	残存 (28.8)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良好	石英、長石 角閃石、雲母	覆口式の甕棺 上甕棺に一条の凸帯あり
211	甕棺下甕	口縁部 ～底部	(36.0)	40.7	8.7	ハケメ ナデ消し	ハケメ	5YR7/3 にぶい橙	5YR6/2 灰褐	良	赤色粒子、角閃石 石英、雲母、長石	

⑳ TAK201406　2区 ST2(甕棺)(第143・144図　図版127・128　表68)

ST2は2区7052グリッドに位置する。墓壙の規模は長軸1.15m、短軸0.78m、深さ0.57m を測る楕円形の平面プランを呈する。この墓壙に甕棺を40°傾けて設置し埋葬していた。傾けるため人頭大の礫を数個設置していた。上甕、下甕は埋葬時の状況で、ほぼ完形のまま検出できた。覆口式の甕棺である。**212**は上甕である。口縁部が欠損する。胴部～底部は接合復元でほぼ完形となった。胴部最大径は39.5cm で三条の刻目三角凸帯を施す。内外面はハケメ調整を施し、胴部やや下位に穿孔が1ヶ所確認できる。内面は剥離が目立つ。**213**は下甕でほぼ完形である。口径31.4cm、器高55.2cm、底径9.2cm を測る。口縁部は、くの字口縁を呈し、口頸部に三角凸帯、胴部はやや丸みを有し、最大部径下部に一条の台形状の凸帯を配置する。内面はケズリ調整、外面はハケメを施す。底部付近に3cm 程の穿孔が1ヶ所確認できる。底部は平底である。甕棺の規模から幼児棺であろう。時期は後期前半頃の所産であろう。

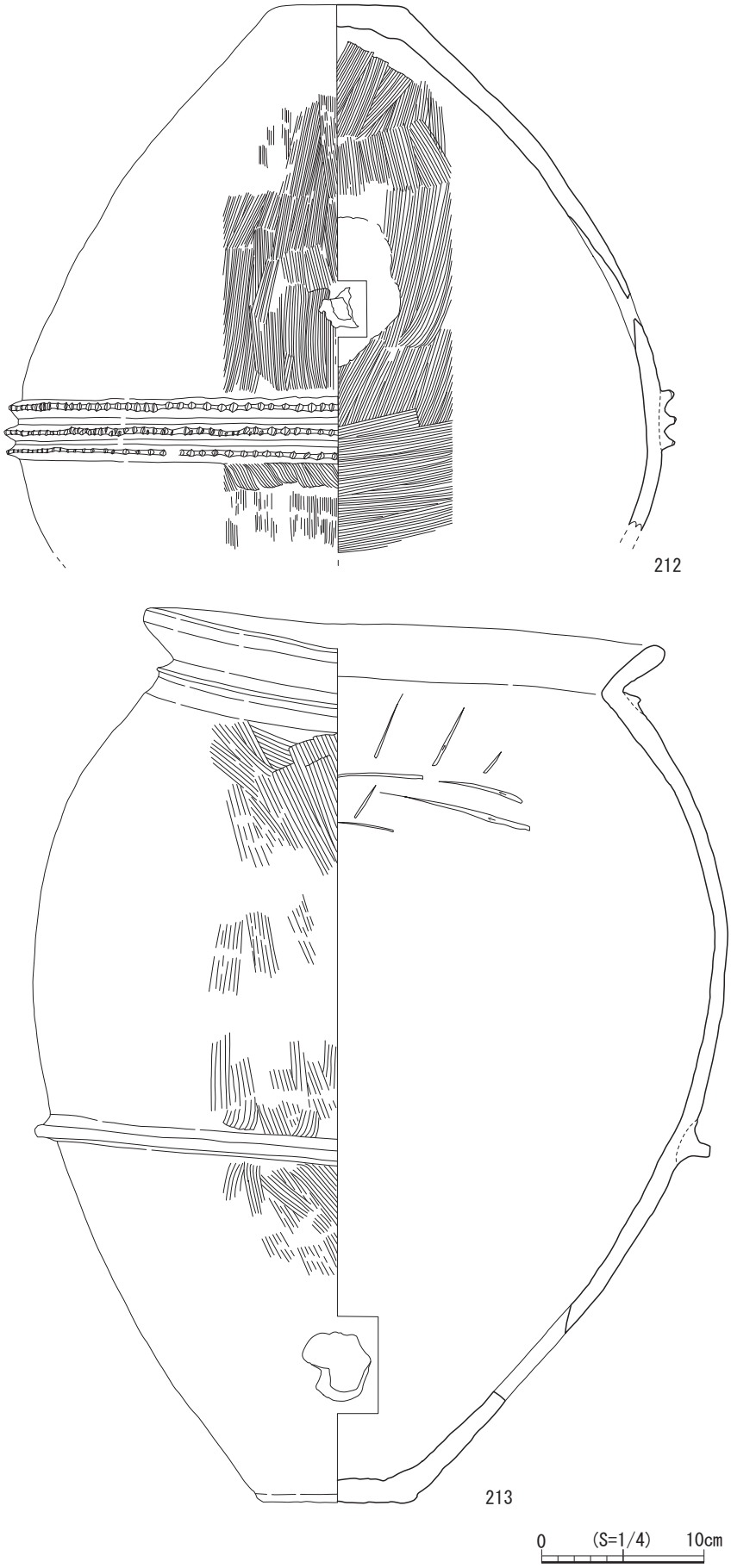


①. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質を含む粘質土 ややしまり強い
1～2mm ほどの白色粒ブロックを全体の約 15% ほど含む
(周辺と比べると多くみられる)

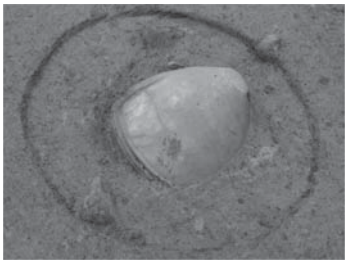
0　(S=1/20)　50cm

基本土層 4 層：
褐色 (10YR4/4) 砂質を含む粘質土 (①より若干粘性が強い) しまり強い
1～2mm ほどの白色粒ブロックを全体の約 3% 含む

第143図　ST2平・断面図(S=1/20)



第144図　ST2出土遺物実測図(S=1/4)



検出状況（西から）

下甕検出状況（東から）

断面（東から）

甕棺検出状況（東から）

上甕除去状況（南から）

掘方完掘状況（東から）

図版127　ST2遺構状況

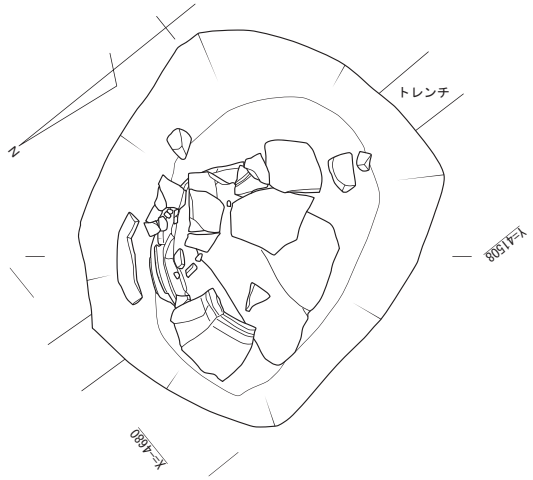
図版128　ST2出土遺物

第68表　ST2出土土器観察表

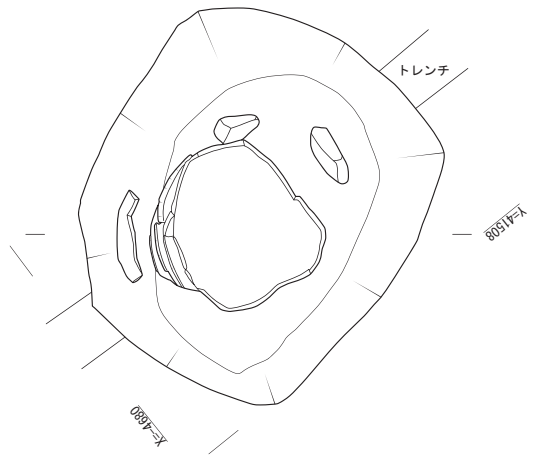
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
212	甕棺上甕	接合 ほぼ完形	—	(34.8)	8.0	斜め方向の ハケメ	斜め方向の ハケメ	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	良好	長石、石英 角閃石	覆口式の甕棺 上甕に穿孔、三条の刻目三角凸帯あり。 下甕に穿孔、一条の台形状の凸帯あり。
213	甕棺下甕	ほぼ完形	31.4	55.2	9.2	斜め方向の ハケメ	ケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石、石英	

㉑ TAK201406　3区 ST3(甕棺)(第145・146図　図版129・130　表69)

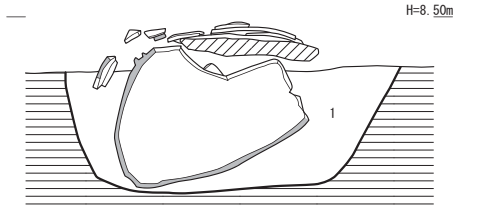
ST3は3区6850グリッドに位置する。墓壙の規模は長軸0.98m、短軸0.85m、深さ0.28m を測る長楕円の平面プランを測る。この墓壙の中に甕棺が設置されていたが、検出状況はかなり削平され甕棺も破損していた。合口だったのか単棺に石蓋等を設置していたのかは定かではない。**214**は口縁部を欠損した甕である。胴部最大径44.5cm、残存器高53.4cm、底径9.5cm を測る。頸部に三角凸帯を施し、胴部最大径のやや下位に二条の刻目三角凸帯を施す。内外面はハケメ調整を施す。底部は平底である。甕棺の規模から考えて乳幼児棺であろう。時期は胴部及び底部の形状から後期前半頃と考えられる。



板石検出状況（南東から）



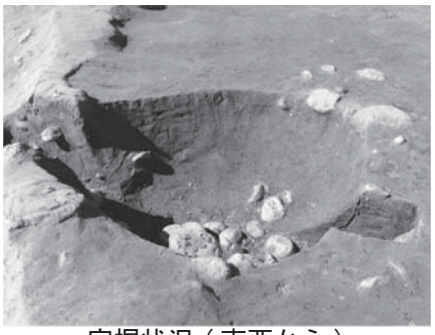
甕内部検出状況（南東から）



1. 暗褐色（10YR3/4）砂質土
ややしまりあり　やや粘質
白色粒を 3%, 炭化物を 1% 含む

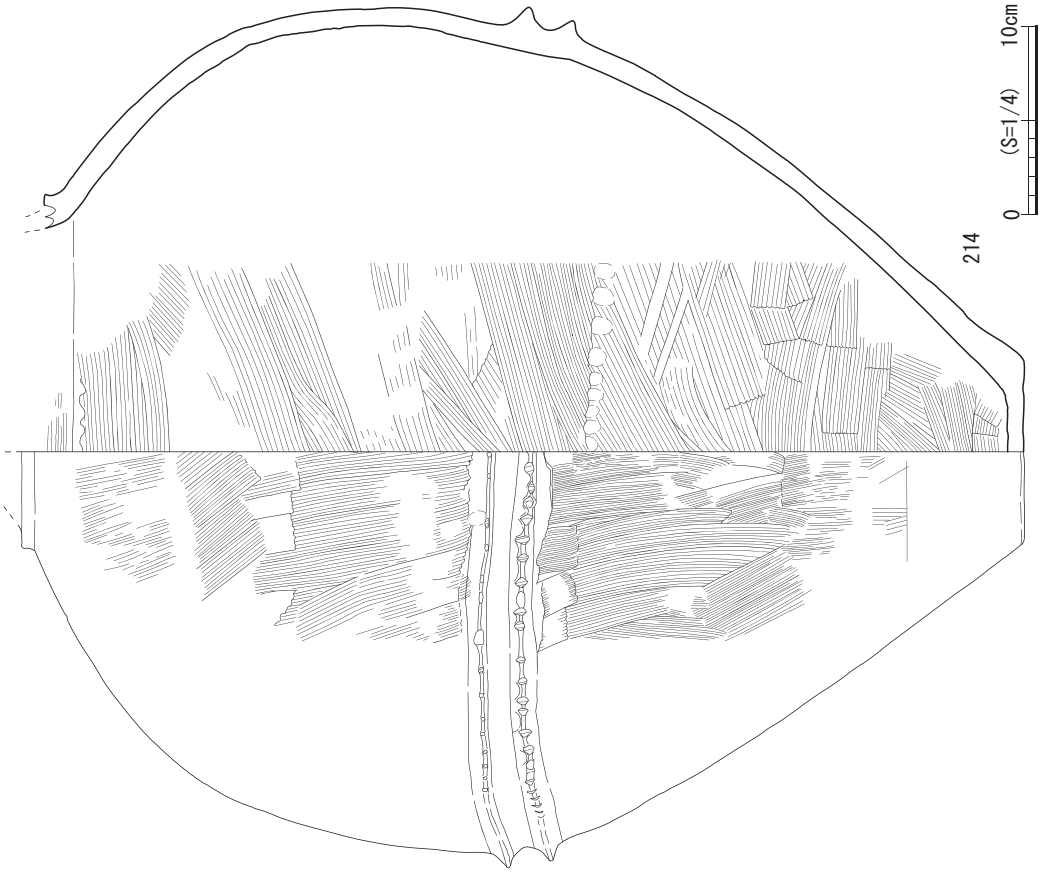
0　(S=1/20)　50cm

第145図　ST3平・断面図(S=1/20)



完掘状況（南西から）

図版129　ST3遺構状況



第146図　ST3出土遺物実測図(S=1/4)

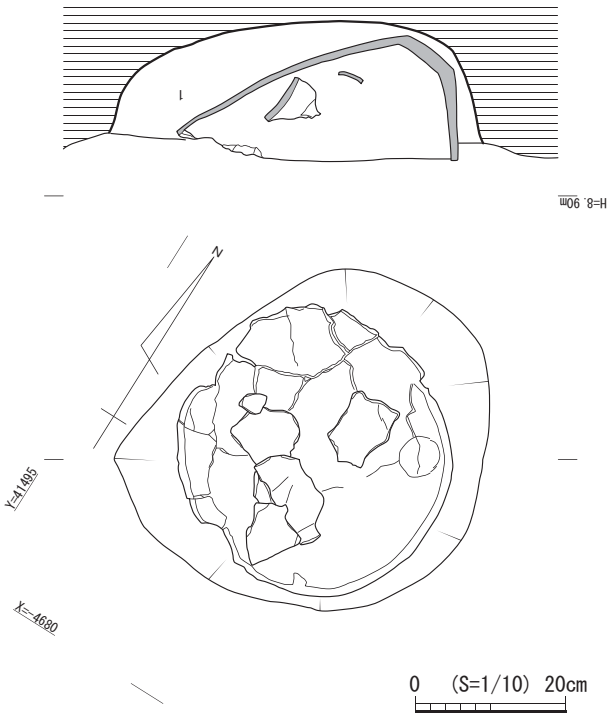
図版130　ST3出土遺物

第69表　ST3出土土器観察表

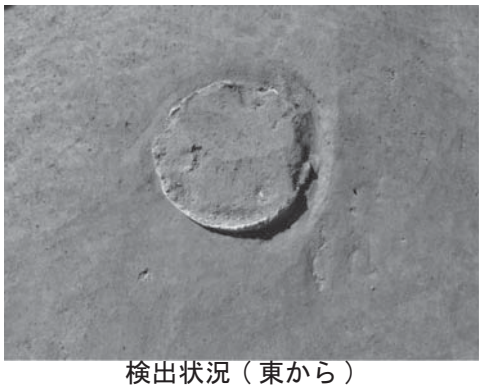
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
214	甕棺	頸部～底部	—	残存(53.4)	9.5	ハケメ	ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	長石、雲母 角閃石、赤色粒子	口縁部欠損 二条の刻目凸帯あり

㉒ TAK201406　3区 ST4(甕棺)(第147・148図　図版131・132　表70)

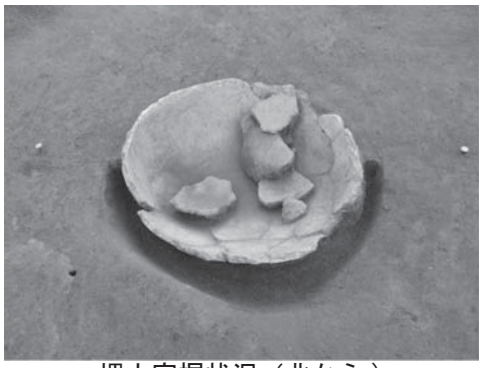
ST4は3区6648グリッドに位置する。墓壙は長軸0.49m、短軸0.45m、深さ0.18m を測る楕円形の平面プランを呈する。上面はかなり削平され甕棺も底部から25cm 程しか残存していない。甕棺は40°の傾斜で埋葬されている。甕棺は覆口式の甕棺で規模から幼児用であろう。**215**は上甕である。残存高20cm 程の台付甕の口縁部～胴部片である。くの字口縁で端部は丸い。内外面はハケメ及びナデ調整を施す。**216**は胴部～底部片である。胴部最大径36.0cm、残存器高29.2cm、底径7.6cm を測る。内外面はハケメ調整を施す。底部は平底である。甕棺の規模から乳幼児棺と思われる。甕棺の時期は胴部及び底部形状から後期前半頃が考えられる。



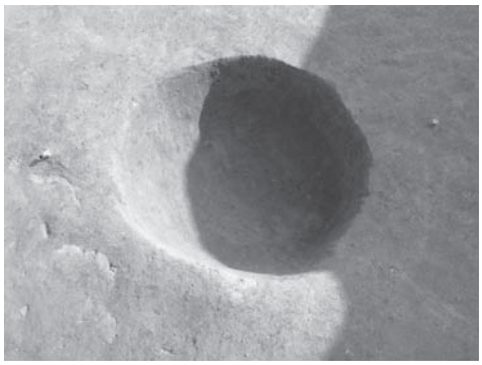
第147図　ST4平・断面図(S=1/10)



検出状況（東から）



埋土完掘状況（北から）

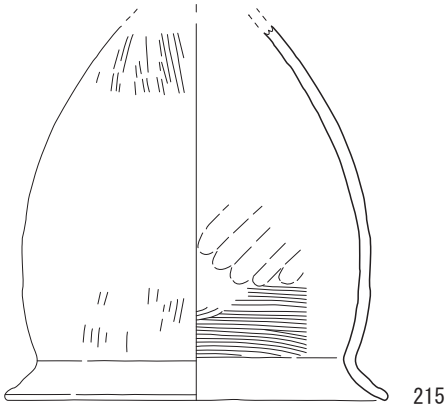


完掘状況（北から）

図版131　ST4遺構状況

第70表　ST4出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
215	甕棺上甕	口縁部～胴部	—	残存(19.9)	—	ナデ ハケメ	ハケメ後 ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	良	雲母、角閃石 長石石英	覆口式の甕棺
216	甕棺下甕	胴部～底部	—	残存(29.2)	7.6	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	石英、角閃 雲母、赤色粒子	



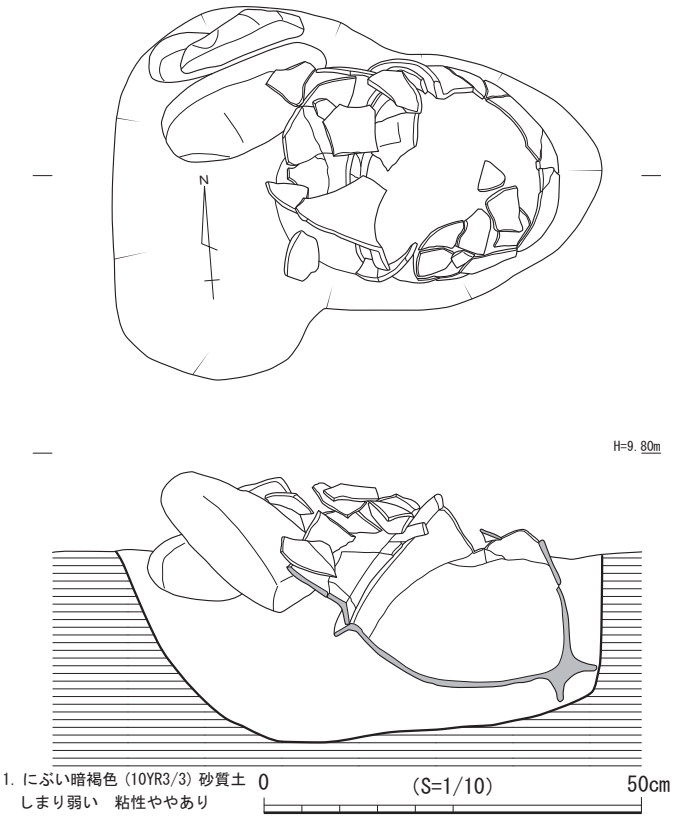
第148図　ST4出土遺物実測図(S=1/4)

図版132　ST4出土遺物

㉓ TAK201407　2区 ST1(甕棺)

(第149・150図　図版133・134　表71)

ST1は2区7058グリッドに位置し主軸をW－4°－Nにとる。規模は墓壙が長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.25m+を測る不整楕円形の平面プランを呈する。全体的に削平されているため数値は大きくなる。覆口式の甕棺で下甕はある程度形が残っていたため31cmの器高を測ることができた。甕棺は東西方向に構築され40°の傾斜で設置されていた。甕棺の規模から乳幼児用と考えられる。**218**は下甕である。台付甕を使用している。くの字口縁で内側が僅かに窪む。胴部は最大形がやや上部にあり、全体的にやや丸い。脚部は開きが狭く端部は丸い。**217**は上甕である。口縁部、胴部は下甕と類似



第149図　ST1平・断面図(S=1/10)

する。胴部下部から脚部が欠損する。時期は後期前半頃の所産と思われる。

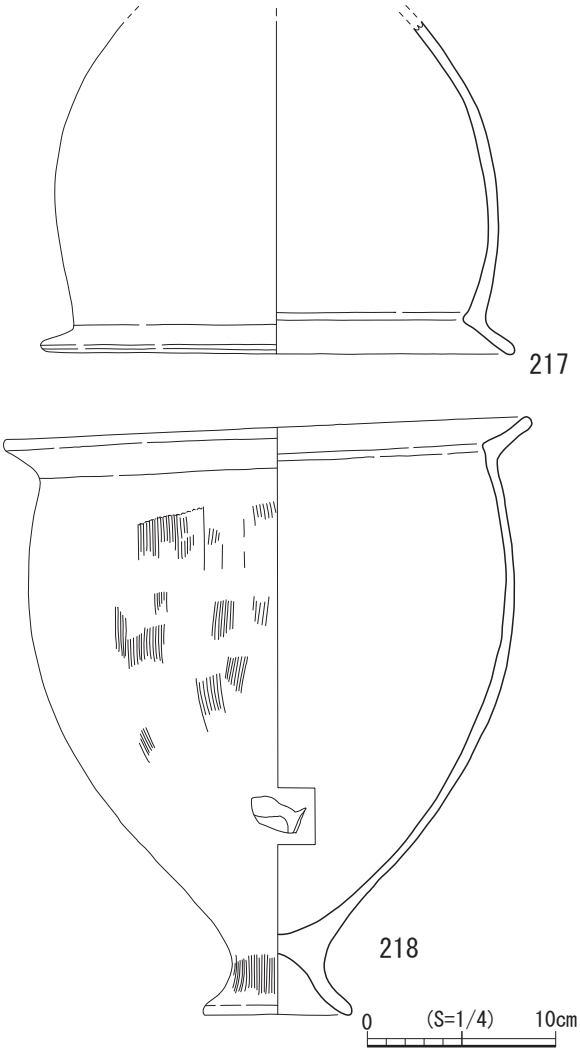
ST1～ST3位置関係（東から）

半截状況（南から）

上下甕　接点状況（東から）

土坑完掘状況（南から）

図版133　ST1遺構状況



第150図　ST1出土遺物実測図(S=1/4)

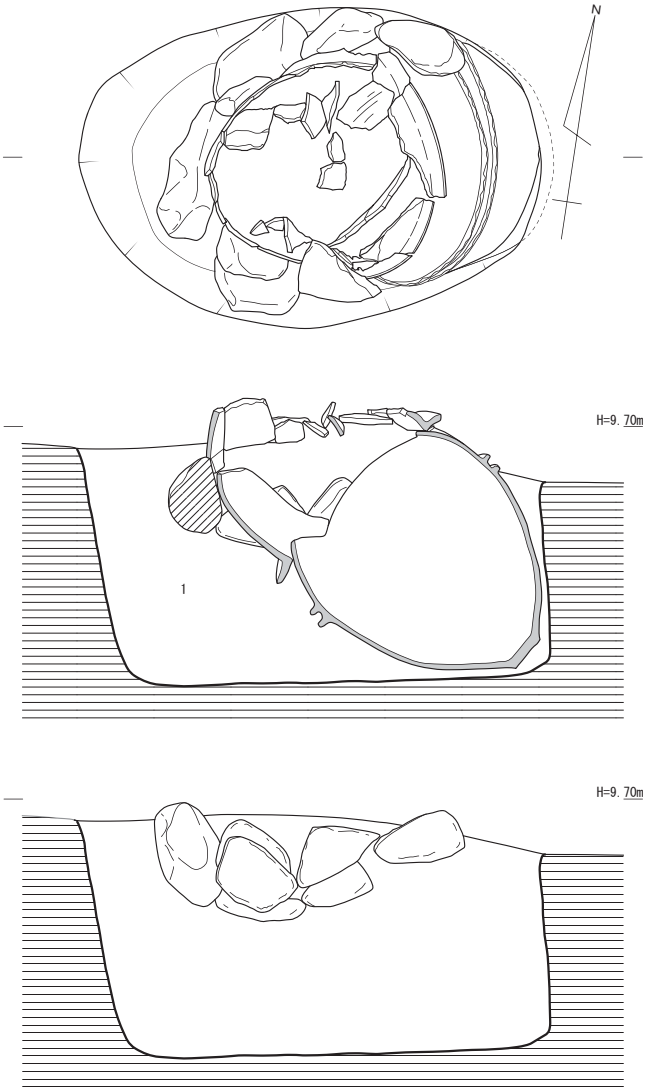
図版134　ST1出土遺物

第71表　ST1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
217	甕棺上甕	口縁部～胴部	(24.6)	残存(17.5)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良好	角閃石、長石 石英	覆口式の甕棺 小児用か？器壁が薄い
218	甕棺下甕	ほぼ完形	27.6	31.6	7.8	ハケメ ナデ消し	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	角閃石、石英 長石、雲母	

㉔ TAK201407　2区 ST2(甕棺)(第151・152図　図版135・136　表72)

ST2は2区7056グリッドに位置する。墓壙は楕円形の平面プランで規模は長軸0.61m、短軸0.42m、深さ0.29m+を測る。この墓壙の中に下甕を46°の傾きで設置している。この傾斜を保つように人頭大よりやや小さめの円礫7～8個を設置している。覆口式の甕棺である。**220**は下甕で口縁部～頸部を取り除き胴部だけに整形して棺としている。底部は平底で胴部最大径は中央部にある。そこに二条の刻目凸帯を有する。規模は器高30.3cm、口径25cm を測る。**219**は上甕で台付甕を使用している。器高32.3cm、口径28.8cm を測る。口縁部は逆Ｌ字状を呈し、外面はハケメ調整を残す。胴部最大径は頸部やや下にある。甕棺の規模から考えて乳幼児棺であろう。時期は後期初頭頃であろう。**221**は甕の口縁部小片である。端部は丸い。



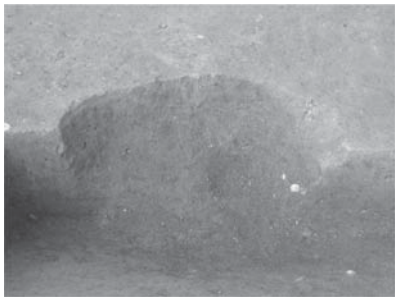
1. にぶい暗褐色 (10YR3/3) 砂質土
しまり弱い　粘性ややあり

0　(S=1/10)　50cm

第151図　ST2平・断面図(S=1/10)

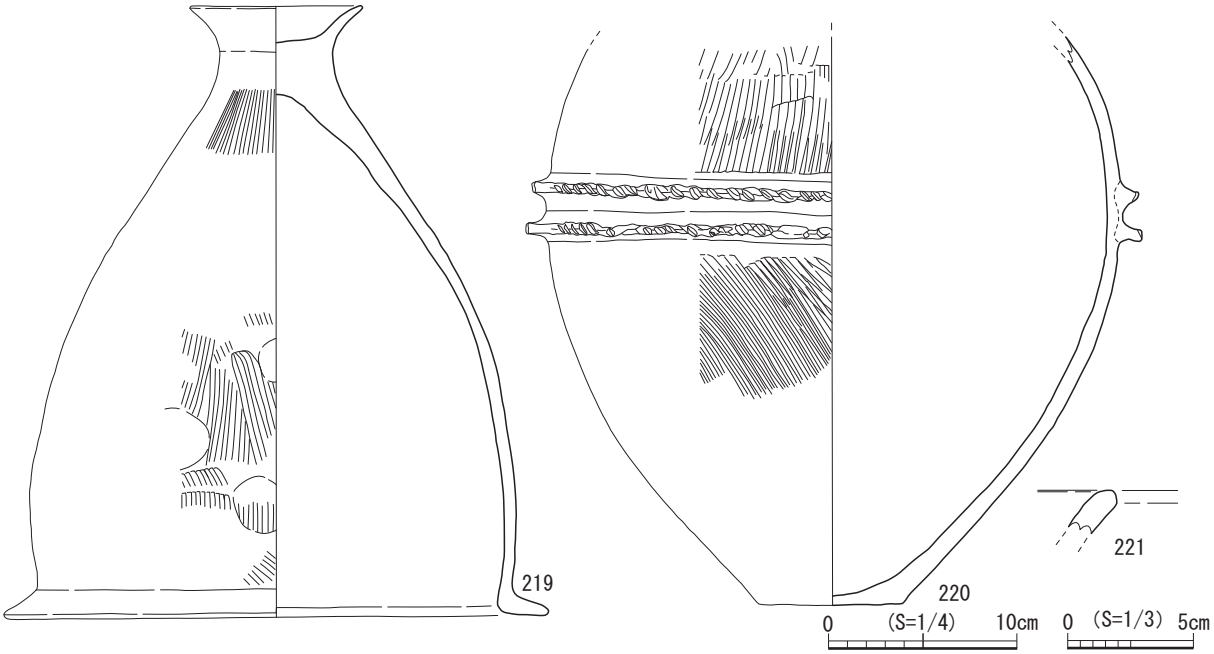
ST1～ST3位置関係（東から）

断面（南から）



土坑完掘状況（南から）

図版135　ST2遺構状況



第152図　ST2出土遺物実測図(219・220はS=1/4, 221はS=1/3)

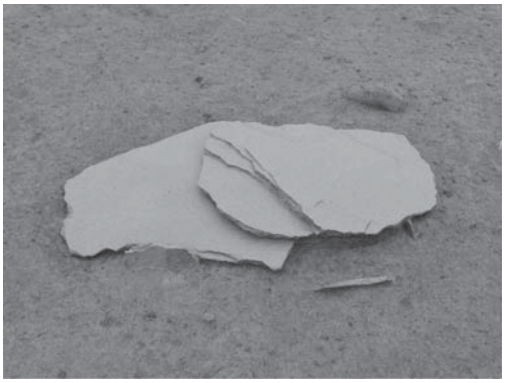
図版136　ST2出土遺物

第72表　ST2出土土器観察表

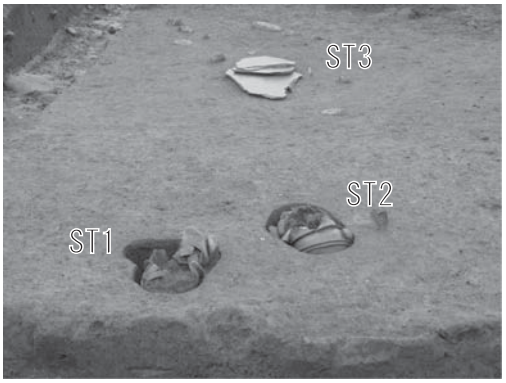
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
219	甕棺上甕	接合完形	28.8	32.3	9.0	ハケメ ナデ消し	ナデ	5YR7/2 明褐灰	5YR7/2 明褐灰	良好	雲母、石英、褐色粒子 黒色粒子、角閃石、長石	覆口式の甕棺 下甕に二条の刻目凸帯あり
220	甕棺下甕	胴部～底部	—	残存 (30.3)	7.6	ハケメ後 ナデ	ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR5/1 褐灰	良好	赤色粒子、角閃石 石英、長石、雲母	
221	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	良好	長石、石英 黒色粒子	砂粒を多く含む

㉕ TAK201407　2区 ST3（箱式石棺墓）（第153図　図版137）

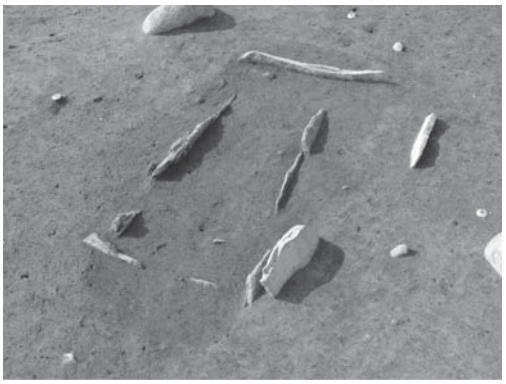
ST3は2区7056グリッドに位置し主軸をW－4°－Nにとる。墓壙の規模は長軸1.18m、短軸0.71m、深さ0.28mを測る長方形の平面プランを呈する。蓋石は2枚で両側石は2枚、両小口は1枚の板石で構築されている。石棺下端の長軸は0.86mで短軸は0.41mである。床面も板石を敷き詰め、蓋石～床面の板石までの高さは中央で22cmを測る。西側小口幅が50cm、東側小口幅は46cmであることから西側小口が頭位と考えられる。構築規模から小児用の箱式石棺墓と思われる。遺物は覆土から弥生式土器の小細片が数点出土した。ST1と主軸が同じ方向で構築されていることから同時期の可能性が高い。



検出状況（北から）



ST1～ST3位置関係（東から）



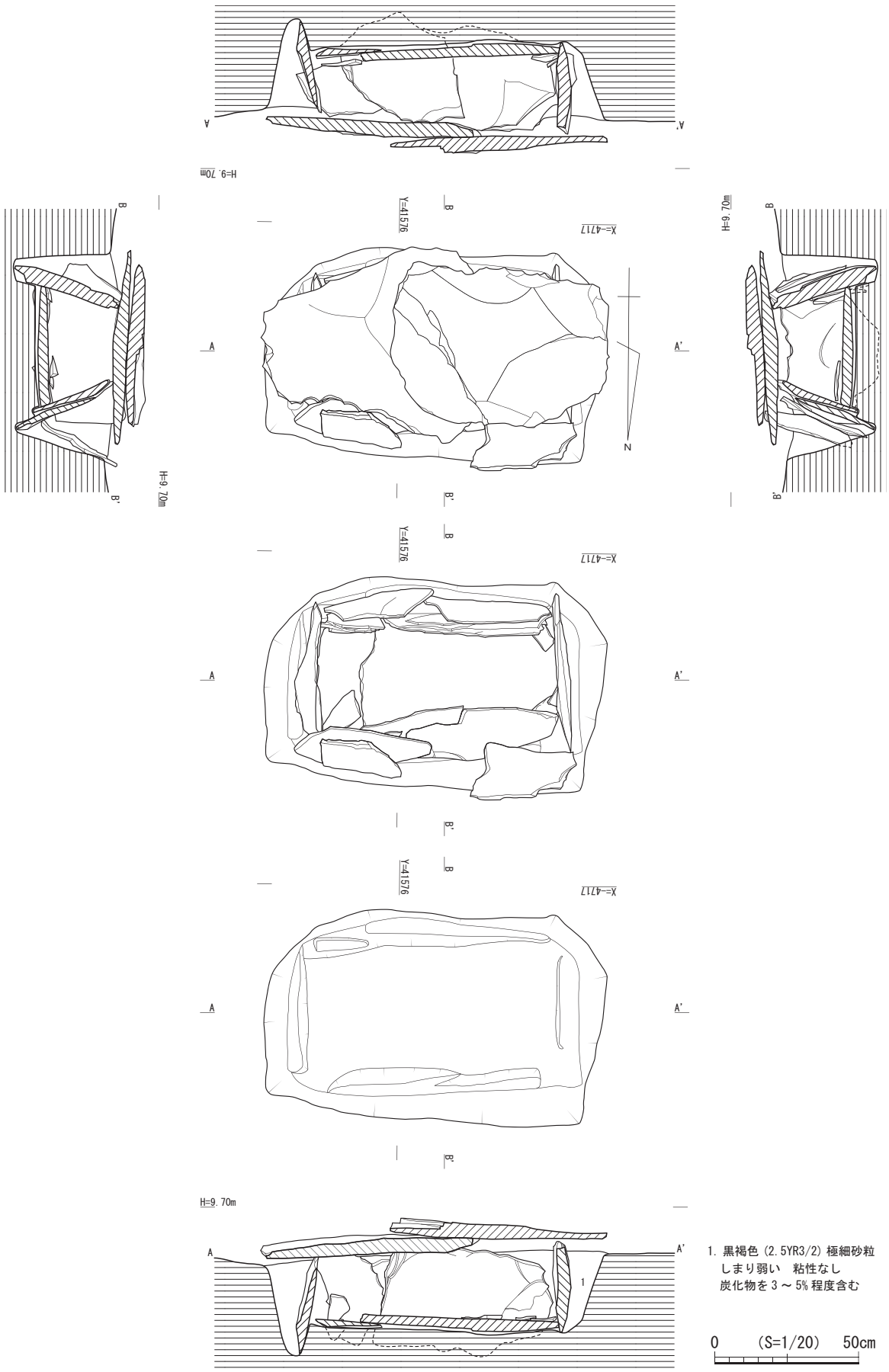
側石検出状況（北東から）

石棺完掘状況（北西から）

石棺・墓壙完掘状況（北東から）

墓壙・堀方完掘状況（東から）

図版137　ST3遺構状況

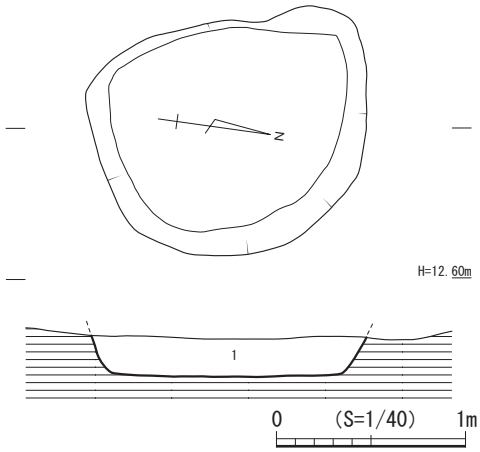


第153図　ST3平・断面図(S=1/20)

(9)不明遺構(SX)

① TAK201403　3区 SX3(不明遺構)(第154・155図　図版138・139　表73)

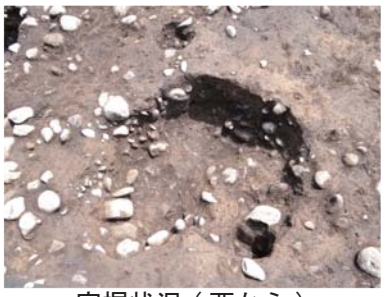
SX3は3区0868グリッドに位置する。平面形は長軸1.50m、短軸1.20m、深さ0.2m を測る楕円形のプランである。壁の立ち上がりはやや垂直で上面をかなり削平されている。出土遺物は覆土から広口壺口縁部、甕の胴部片等である。以下遺物の説明を記す。**222**は甕の口縁部片である。内外面はハケメ調整を施す。



1. 黒色 (10YR2/1) 粘質土 しまりなし 粘性強くあり
5mm 以下の円礫を約 20%、2 ～ 4cm 大の礫を 5%、白粒を約 10% 含む

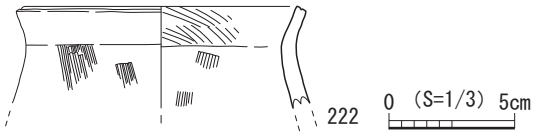
第154図　SX3平・断面図(S=1/40)

断面（東から）



完掘状況（西から）

図版138　SX3遺構状況



第155図　SX3出土遺物実測図(S=1/3)

222

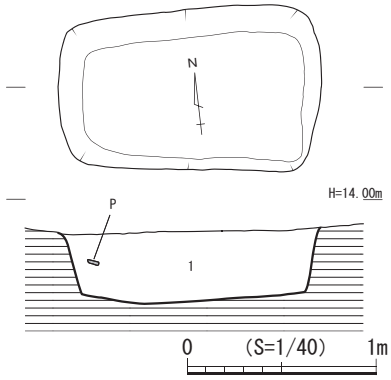
図版139　SX3出土遺物

第73表　SX3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
222	甕	口縁部	(10.8)	—	—	ハケメ	ハケメ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	角閃石	

② TAK201403　3区 SX9(土坑墓)(第156・157図　図版140・141　表74)

SX9は3区1670グリッドに位置する。平面プラン、完掘状況から土坑墓であることが確認できた。規模は長軸1.38m、短軸0.84m、深さ35cm 程で東西方向に構築された長方形の平面プランを有する土坑墓である。東側小口幅70cm、西側小口幅50cm から東側が頭位と考えられる。堆積土は一層で黒褐色粘質土である。出土遺物は覆土から台付甕脚部、甕口縁部片、弥生式土器小片が出土した。**223**は台付甕脚部片である。外面は縦方向にハケメ調整を施す。**224**は甕口縁部片である。内外面にハケメ・ナデ調整を施す。時期は弥生時代後期後半頃の所産であろう。



1. 黒褐色 (10YR2/2) 粘土質 しまり強い 遺物出土
土中に第5層(古土層)をブロック状に10%含む
※ 第 5 層：古土層 硬くしまる
第 4 層と第 6 層の間に堆積する層で、
遺物を包含しない
2 万年前～ 3 万年前に形成された土層であるとの
専門家の所見がある

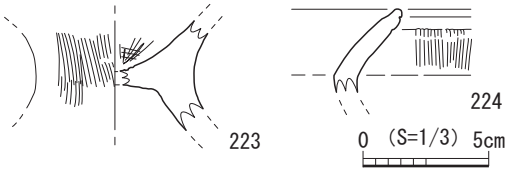
第156図　SX9平・断面図(S=1/40)

検出状況（南から）

断面（南から）

完掘状況（南から）

図版140　SX9遺構状況



第157図　SX9出土遺物実測図(S=1/3)

図版141　SX9出土遺物

第74表　SX9出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
223	台付甕	脚部	—	—	—	縦方向のハケメ	ケズリ後ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/6橙	良	石英	
224	甕	口縁部	—	残存(4.5)	—	縦方向のハケメ	ナデ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/6橙	良	長石	

③ TAK201406　2区 SX3(不明遺構)(第158～161図　図版142～145　表75・76)

SX3は2区7050、7250グリッドに位置する。SX3は円礫が直線的に並ぶ様相を呈する。また散発的に集積する。土器等は円礫の間から出土し遺物は多い。**225～236**までは壺の口縁部～胴部、底部片である。**225**、**226**は袋状口縁壺の口縁部片である。いずれも緩やかに内湾し端部は丸い。**227**、**229**は頸部片で三角凸帯を施している。**227**の外面はハケメ調整を施している。**229**は外面丹塗りを施す。**228**、**230～235**までは二条の刻目凸帯、台形状凸帯、一条～二条の三角凸帯を有した壺の胴部片である。**236**は胴部～底部片で外面はハケメ調整を施す。内面はナデ、指圧痕が薄く残る。**237**、**238**は高杯脚部片で、**238**は開きが大きく、端部は丸い。**239～259**は甕の口縁部～底部にかけての破片である。**239**は鋤先口縁を呈する甕である。**240**、**242**は甕口縁部～胴部片で緩やかなくの字口縁で端部は丸い。外、内面は縦方向にハケメ・ナデ調整を施す。**241**は頸部に三角凸帯を施す。**243～244**、**248**、**249**は、くの字口縁を呈する甕である。**245～247**は逆Ｌ字状の口縁部を呈する。**245**、**247**は黒髪式土器であろう。**250**は甕の底部片で平底である。**251～257**は台付甕の脚部片である。開脚部は広くない。端部は丸い仕上げである。**258**、**259**は甕の底部で内面はハケメ・ナデ調整を施している。いずれも平底である。**260**は石包丁でほぼ完形品である。2ヶ所に6㎜の両面穿孔を施し片刃である。石材は安山岩？か。**261**は砥石である。石材は硬質砂岩で表面、側面の2面に磨き痕が残る。**262**は扁平打製石斧で約1/2が欠損する。石材は安山岩である。**263**は甕棺で、破片を復元接合し、口径・器高が明らかになった。口縁部はくの字口縁で端部は丸い。頸部は三角凸帯を有し、胴部にも刻目三角凸帯を一条有す。内外面はハケメ調整を施す。底部は平底である。時期は中期末から後期初頭頃の所産であろう。

第158図　SX3平面図(S=1/40)

畦畔2との位置関係
（北西から）

遺物出土状況
（北西から）

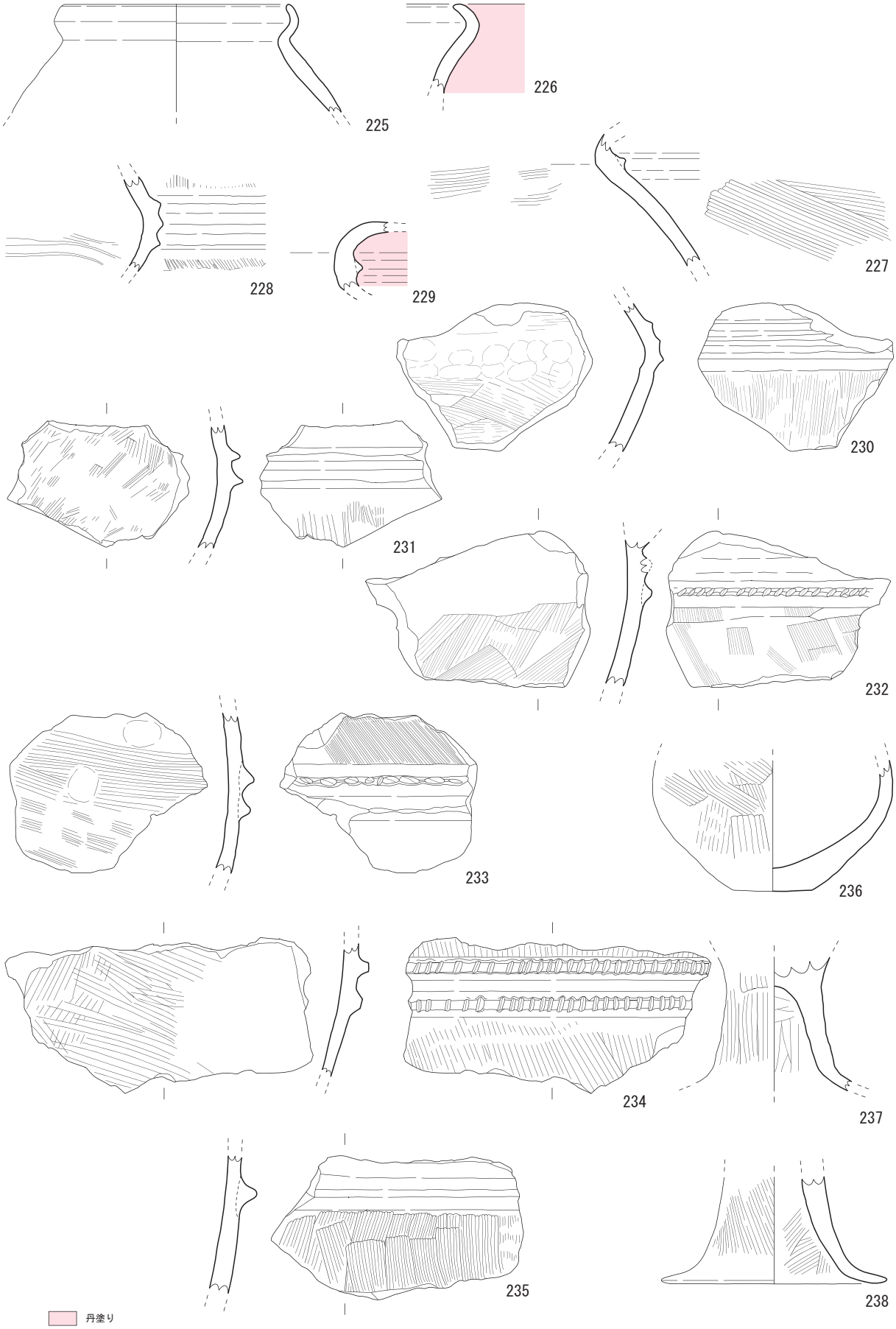
遺物出土状況
（南東から）

土器・礫集中部
（東から）

遺物出土状況

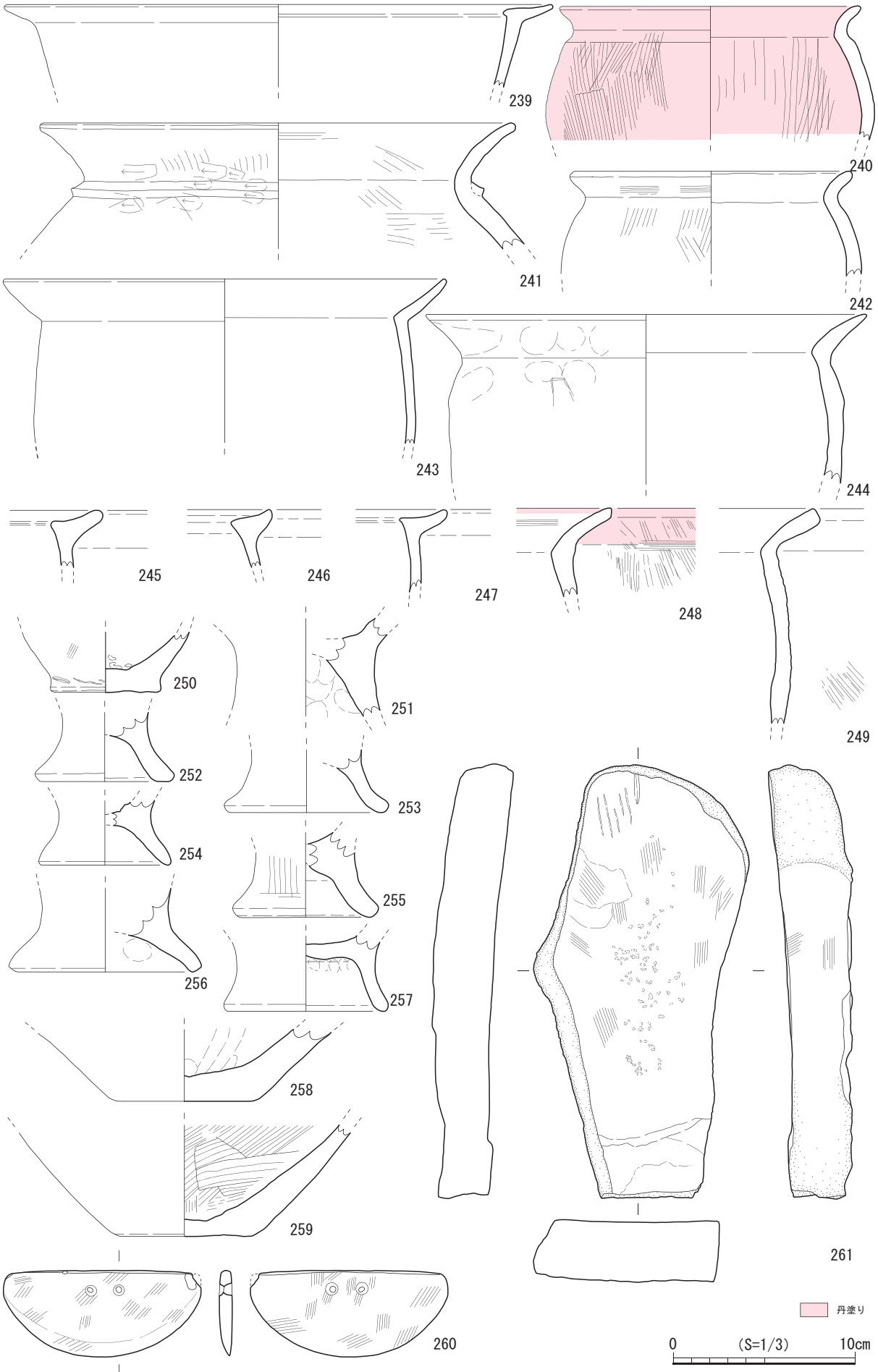
石包丁出土状況
（東から）

図版142　SX3遺構状況

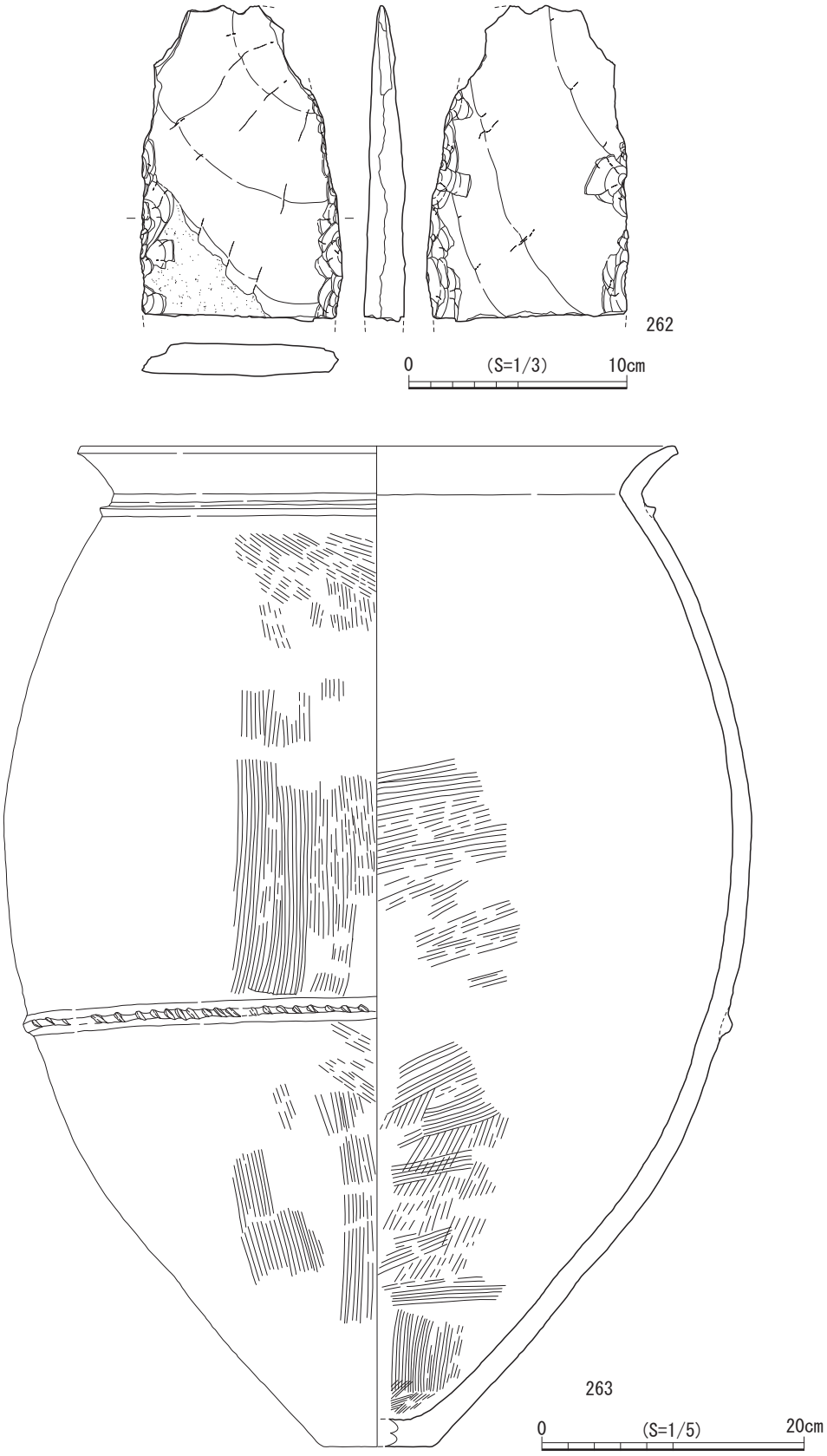


第159図　SX3出土遺物実測図 その1(S=1/3)

0　(S=1/3)　10cm

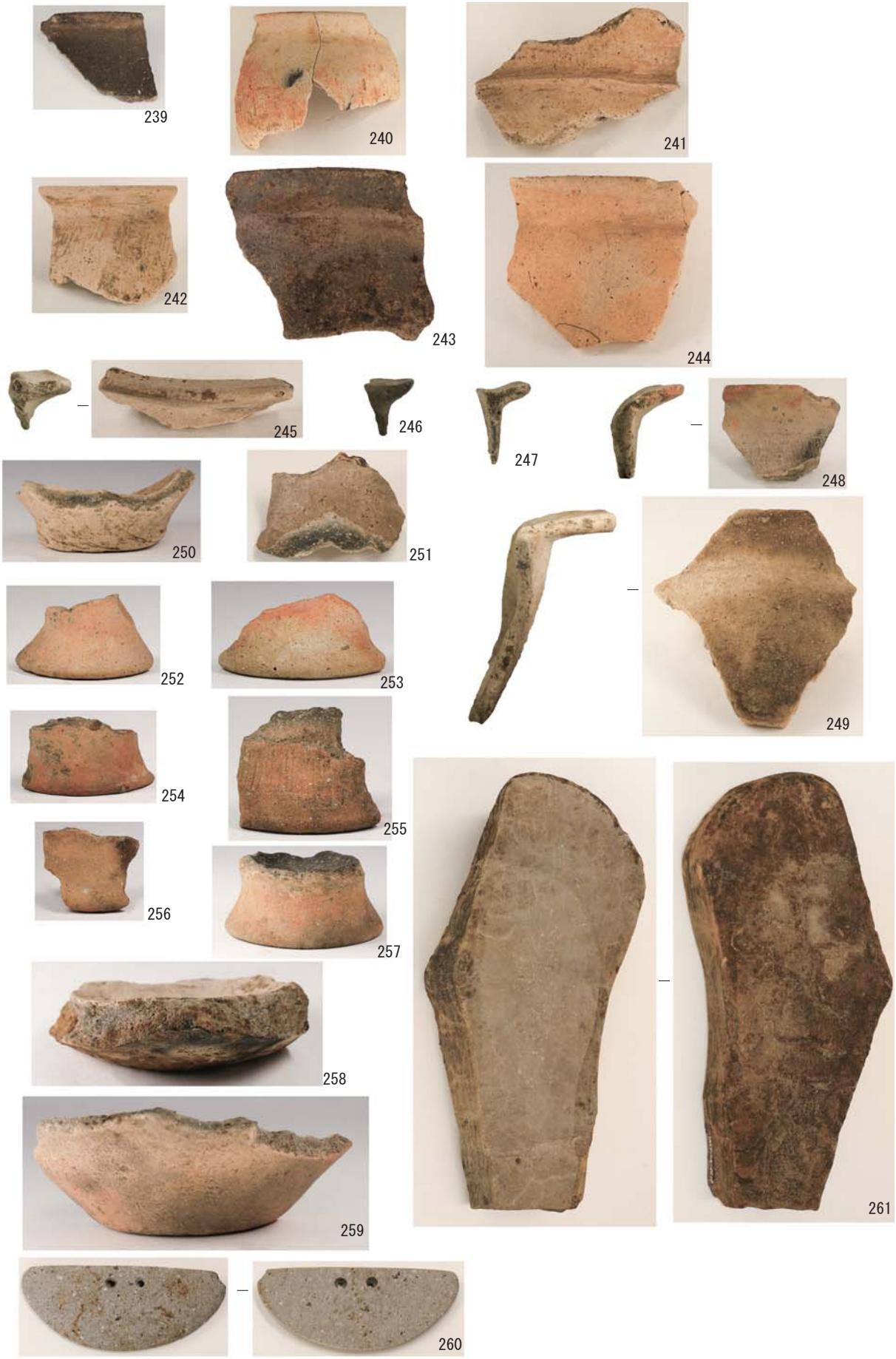


第160図　SX3出土遺物実測図 その2(S=1/3)



第161図　SX3出土遺物実測図 その3(262はS=1/3、263はS=1/5)

図版143　SX3出土遺物 その1



図版144　SX3出土遺物 その2

262

263

図版145　SX3出土遺物 その3

第75表　SX3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
225	壺	口縁部～頸部	(12.0)	残存(5.8)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、雲母 赤色粒子	袋状口縁壺
226	壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	赤色粒子、雲母 角閃石	外面丹塗り、袋状口縁壺
227	壺	頸部	—	—	—	ナデ ハケメ	ハケメ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	良	長石、金雲母	一条の三角凸帯あり 金雲母多く、強いハケメ
228	壺	胴部	—	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、雲母	三条の三角凸帯あり
229	壺	頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良	長石、赤色粒子	口縁端部欠損、外面丹塗り、一条の三角凸帯あり
230	壺	胴部	—	—	—	ハケメ ナデ	ハケメ 指オサエ	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良	長石、褐色粒子	三条の三角凸帯あり
231	壺	胴部	—	—	—	ナデ消し	ナデ消し	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母	二条の三角凸帯あり
232	壺	胴部	—	—	—	ハケメ ナデ	ナデ	5YR7/3 にぶい黄橙	5YR7/1 明褐灰	良	長石	二条の刻目三角凸帯あり
233	壺	胴部	—	—	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ 指オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/1 灰白	良	長石、石英	二条の刻目三角凸帯あり
234	壺	胴部	—	残存(7.1)	—	ハケメ	ハケメ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	金雲母、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	二条の刻目台形凸帯あり
235	壺	胴部	胴部径(41.0)	—	—	ナデ ハケメ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	良	長石、角閃石 雲母	一条の三角凸帯あり
236	壺	胴部～底部	—	—	(4.0)	ハケメ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR7/3 にぶい橙	良	長石	平底、底部は径が小さい
237	高杯	脚部	—	残存(7.2)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/2 灰褐	良	石英、角閃石 雲母	
238	高杯	脚部	—	残存(5.7)	(11.0)	ハケメ	ハケメ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	良	雲母、赤色粒子、長石 白色粒子、黒色粒子	
239	甕	口縁部	(29.8)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR6/1 褐灰	良	長石、雲母	
240	甕	口縁部～胴部	(16.2)	残存(7.3)	—	ハケメ	ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	金雲母、赤色粒子 黒色粒子、白色粒子	内外面丹塗り
241	甕	口縁部～頸部	(25.5)	残存(8.4)	—	ハケメ後 ナデ	ハケメ後 ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	良	長石、角閃石 雲母	
242	甕	口縁～胴部	(15.0)	残存(5.7)	—	ハケメ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	角閃石、雲母 赤色粒子	
243	甕	口縁部	(24.0)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	
244	甕	口縁部	(24.0)	—	—	ナデ 指オサエ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良	長石、石英 角閃石	
245	甕	口縁部	—	残存(3.1)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	石英、角閃石 雲母	黒髪式
246	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	良	長石、黒色粒子	
247	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR8/1 灰白	良	長石、雲母	黒髪式
248	甕	口縁部	(28.0)	残存(4.8)	—	ハケメ ナデ消し	ナデ消し	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、黒色粒子	内面口縁端部及び外面に丹塗り痕
249	甕	口縁部～胴部	—	残存(11.7)	—	ハケメ後 ナデ	ハケメ後 ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR8/4 浅黄橙	良	石英、角閃石 雲母	多くの砂粒を含む 被熱を受けている
250	甕	底部	—	—	(5.8)	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石、石英	
251	台付甕	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ 指オサエ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	良	石英、角閃石	
252	台付甕	脚部	—	残存(3.8)	(7.0)	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	雲母、褐色粒子 長石	
253	台付甕	脚部	—	残存(3.4)	(8.4)	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	
254	台付甕	脚部	—	残存(3.4)	(7.0)	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石、石英	
255	台付甕	脚部	—	残存(4.6)	(7.0)	ハケメ	ナデ	5YR6/8 橙	5YR5/8 明赤褐	良	長石、雲母	
256	台付甕	脚部	—	残存(4.7)	(9.4)	ナデ	ナデ 指オサエ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、角閃石	
257	台付甕	脚部	—	残存(4.2)	(8.6)	ナデ	ナデ 指オサエ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石、石英 角閃石	
258	甕	底部	—	残存(4.9)	(7.4)	ナデ	ナデ 指オサエ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/6 黄橙	良	長石、褐色粒子	
259	甕	底部	—	残存(6.1)	(7.0)	ハケメ後 ナデ消し	ハケメ	2.5YR7/4 淡赤橙	5YR8/1 灰白	良	長石、石英 黒色粒子	
263	甕棺	口縁部～底部	(44.0)	(76.5)	(8.4)	多方向のハケメ	多方向のハケメ ハケメナデ消し	10YR8/ 灰白	10YR8/ 灰白	良	角閃石、雲母 赤色粒子、長石	1/2欠損、頸部に一条の三角凸帯、胴部に刻目凸帯あり

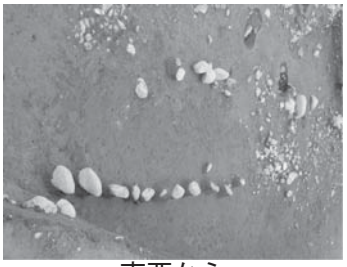
第76表　SX3出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
260	石包丁	安山岩？	4.70	10.80	0.70	54.76	
261	砥石	硬質砂岩	23.80	11.70	4.60	1,435.00	
262	扁平打製石斧	安山岩	14.4＋	9.23	1.88	282.65	刃部欠損

(10)畦畔

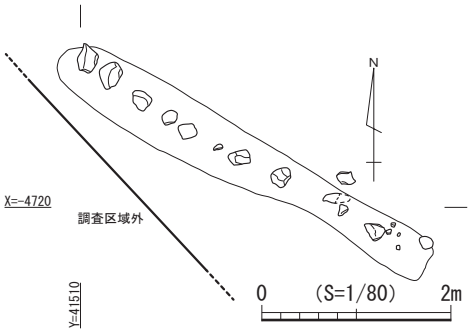
① TAK201406　2区畦畔2(水田址)(第162～164図　図版146～148　表77・78)

畦畔2は2区7050グリッドに位置する。当初発掘担当者は弥生時代の水田跡に伴う畦畔という認識がなかった。よって実測図は長さと幅しか記録していない。長軸4.4m、幅36～66cmを測り南東～北西に向かって構築された畦畔である。遺物はこの畦畔の中及び周辺から出土した。**264～270**は甕の口縁部～胴部、底部片である。**264～269**はくの字状口縁を呈し内外面はハケメ調整を施す。口縁端部は丸、方形がある。**269**は口頸部に三角凸帯を施す。**270**は底部片で平底である。**271～274**は台付甕の胴部～脚部片で、脚部は短く開脚は狭い。端部はやや尖る。**275**は甕の底部である。底部は僅かに凸レンズ状を呈する。**276**は壺胴部片である。二条三角凸帯を施している。**277**、**278**は壺で口頸部に三角凸帯を施す。口縁部は大きく外反し端部は丸い。**279**は砥石で一部欠損する。石材は硬質砂岩であろう。時期は後期前半頃であろう。



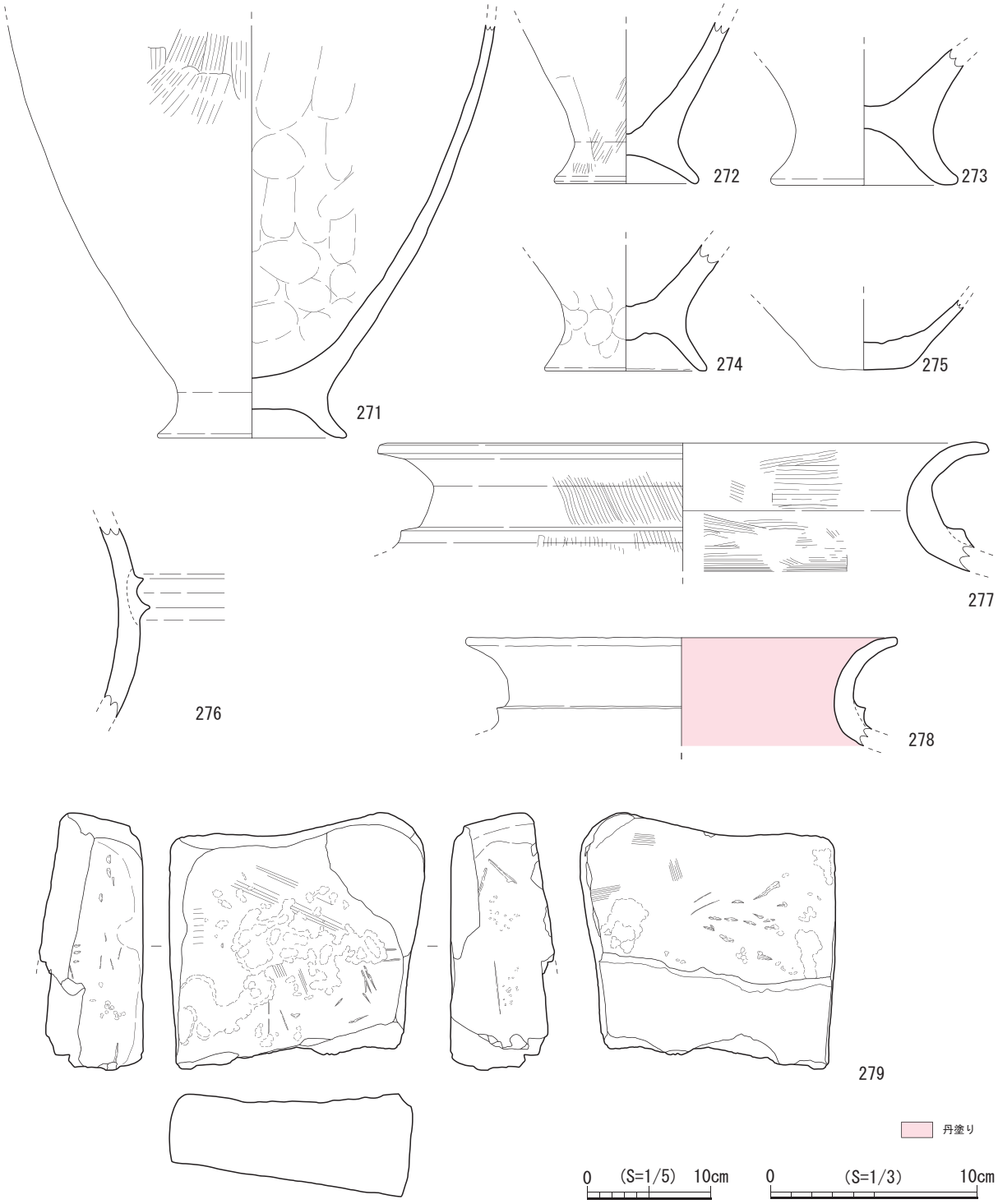
南西から

図版146　畦畔2遺構状況



第162図　畦畔2平面図(S=1/80)

第163図　畦畔2出土遺物実測図 その1(S=1/3)



第164図　畦畔2出土遺物実測図 その2(No.279のみS=1/5、他はS=1/3)

264

265

266

267

268

269

270

図版147　畦畔2出土遺物 その1

図版148　畦畔2出土遺物 その2

第77表　畦畔2出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
264	甕	口縁部～胴部	(23.6)	残存(10.4)	—	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	
265	甕	口縁部～頸部	—	残存(8.4)	—	ハケ後 ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/6 明褐	良	石英、角閃石、雲母	
266	甕	口縁部～胴部	(27.5)	残存(20.0)	—	ハケメ後 ナデ	ハケメ後ナデ 指オサエ	5YR6/4 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	良	褐色粒子、長石 石英、角閃石	
267	甕	口縁部～胴部	(18.4)	残存(15.7)	—	ハケ後 ナデ	ハケメ	2.5YR7/4 淡赤橙	7.5YR8/2 灰白	良	赤色粒子、石英	被熱を受けている
268	甕	口縁部～胴部	(23.6)	残存(24.4)	—	ハケメ	ハケメ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	角閃石、雲母 長石	
269	甕	口縁部～胴部	(22.0)	残存(22.0)	—	ハケメ後 ナデ	ハケメ後 ナデ	5YR7/2 にぶい橙	5YR7/2 にぶい橙	良	褐色粒子、長石 石英	二条の三角凸帯あり
270	甕	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	石英、長石、雲母 黒色粒子	
271	台付甕	胴部～脚部	—	残存(20.0)	9.0	ハケ後 ナデ	ナデ 指オサエ	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	良	赤色粒子、石英 角閃石	
272	台付甕	胴部～脚部	—	残存(7.5)	(7.0)	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/1 灰白	良	長石、雲母、角閃石	
273	台付甕	胴部～脚部	—	—	8.4	ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/2 明褐灰	良	長石、角閃石 雲母	
274	台付甕	胴部～脚部	—	残存(6.0)	7.8	ナデ 指オサエ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	良	長石、赤色粒子 角閃石、石英	
275	甕	底部	—	残存(3.3)	2.6	ナデ	ナデ	7.5YR5/1 褐灰	5YR5/4 にぶい赤褐	良	長石、赤色粒子	
276	壺	胴部	—	残存(6.1)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	5Y7/2 灰白	良	長石、石英	二条の三角凸帯あり
277	壺	口縁部～頸部	頸部径(24.0)	残存(6.2)	—	ハケメ	ハケメ後 ナデ	10YR8/2 浅黄橙	10YR8/1 灰白	良	長石、角閃石 雲母	一条の三角凸帯あり
278	壺	口縁部～頸部	(20.6)	残存(5.2)	—	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR5/8 明赤褐	良	金雲母、赤色粒子 白色粒子、黒色粒子	内面丹塗りあり、口頸部に一条の三角凸帯あり

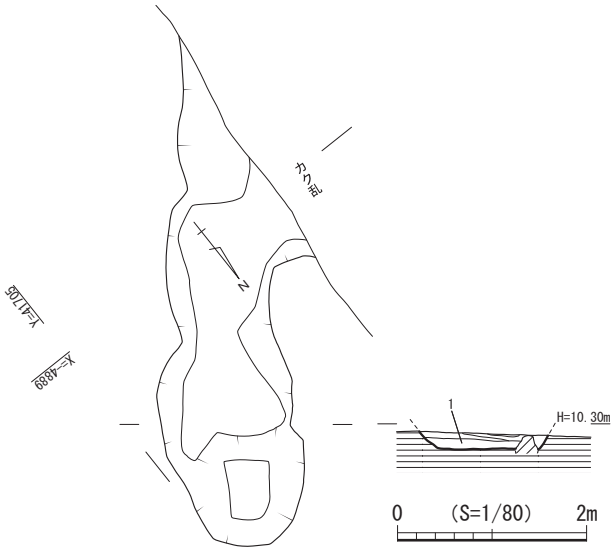
第78表　畦畔2出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
279	砥石	硬質砂岩	207.00	206.00	83.00	4,900.00	完形

(11)自然流路(NR)

①TAK201404　A6南区NR1(自然流路)(第165・166図　図版149・150　表79)

NR1はA6南区8870グリッドに位置する。規模は長さ4.6m+、幅1.1～1.2m、深さ0.3mを測る。覆土は砂質シルトで拳大の円礫が入る。遺物は甕口縁部片、底部片、壺袋状口縁、鉢等が出土した。**280**は甕口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字口縁で端部は丸い。内外面に指圧痕が残る。**281**は袋状口縁壺の口縁部～頸部片である。頸部に凸帯を有す。外面に丹塗りあり。**282**は壺の頸部で三角凸帯を有す。外面は丹塗りである。**283**は甕の口縁部～胴部片である。外面はかなり被熱を受けている。**284**は鉢で底部に短い高台が付く。内外面にやや強いハケメ調整を行い、丹塗りを施す。東九州(安国寺)系の土器であろうか。**285～286**は甕の底部である。**285**は底部がやや内湾する。**286～288**は平底である。**289**は壺の底部で平底である。土器の時期は後期前半～後半頃であろう。



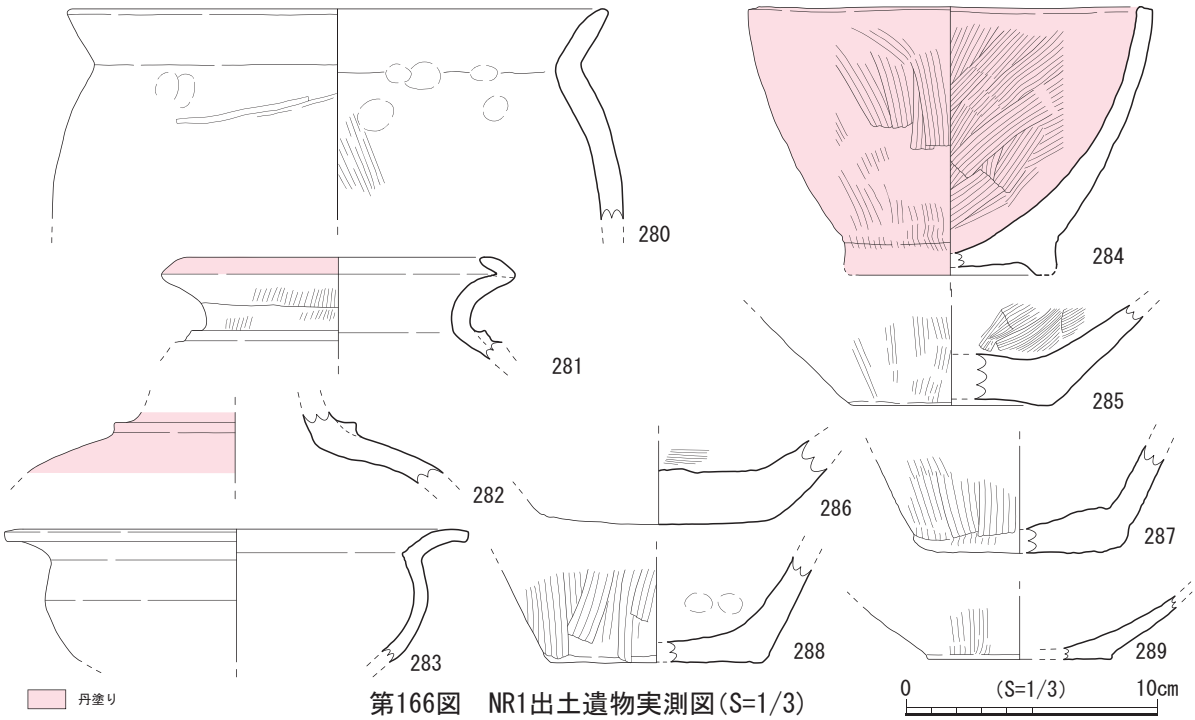
1. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト しまり強い 粘性弱い
マンガン粒10%、白色粒・炭化物(0.2～1cm大)10%未満
にぶい黄褐色土(10YR4/3 砂質シルト しまりやや強 粘性弱)が横ラミナ状に入る
下部に8～10cm大の円礫がまばらに入る

第165図　NR1平・断面図(S=1/80)

土層状況(北東から)

完掘状況(北東から)

図版149　NR1遺構状況



第166図　NR1出土遺物実測図(S=1/3)

図版150　NR1出土遺物

第79表　NR1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 外面	内面	色調 外面	内面	焼成	胎土	備考
280	甕	口縁部～胴部片	(21.0)	残存(8.3)	—	ハケメナデ消し指オサエ	ハケメナデ消し指オサエ	10YR1.7/1赤黒	5YR6/4にぶい橙	良	石英、長石、雲母	全体的に器壁が厚い
281	壺	口縁部	(11.6)	残存(4.0)	—	ハケメ後ナデ	ナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良	角閃石、長石	袋状口縁壺 口縁部外面にのみ丹塗りあり
282	壺	頸部	—	—	—	ミガキ	ケズリ後ナデ	7.5YR4/6赤	7.5YR2/1赤黒	良	長石、石英	外面に丹塗りあり
283	甕	口縁部～胴部	(18.4)	残存(5.2)	—	ナデ	ナデ	5YR3/2暗赤褐	10YR4/1褐灰	良	長石、雲母	剥離あり、外面はかなり被熱を受けている
284	鉢	口縁部～底部片	(15.0)	残存(10.5)	8.4	縦方向のハケメ	斜め方向のハケメ	5YR7/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	良	長石、角閃石	内外面丹塗りあり
285	甕	底部	—	残存(3.9)	7.6	縦方向のハケメ	多方向のハケメ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/4浅黄橙	良	角閃石	
286	甕	底部	—	残存(3.3)	9.0	ナデ	ハケメ	7.5YR8/2灰白	7.5YR7/1明褐灰	良	石英、角閃石雲母	底部はやや凸レンズ状
287	甕	底部	—	残存(4.2)	(8.0)	縦方向のハケメ	激しい摩耗	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	良	石英、長石	平底
288	甕	底部	—	残存(4.2)	(8.4)	縦方向のハケメ	ナデ指オサエ	2.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	良	石英、長石、雲母	平底
289	壺	底部	—	残存(2.5)	(7.2)	ハケメナデ消し	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/6にぶい橙	良	長石、石英	内面は剥離が目立つ

(12)包含層出土遺物

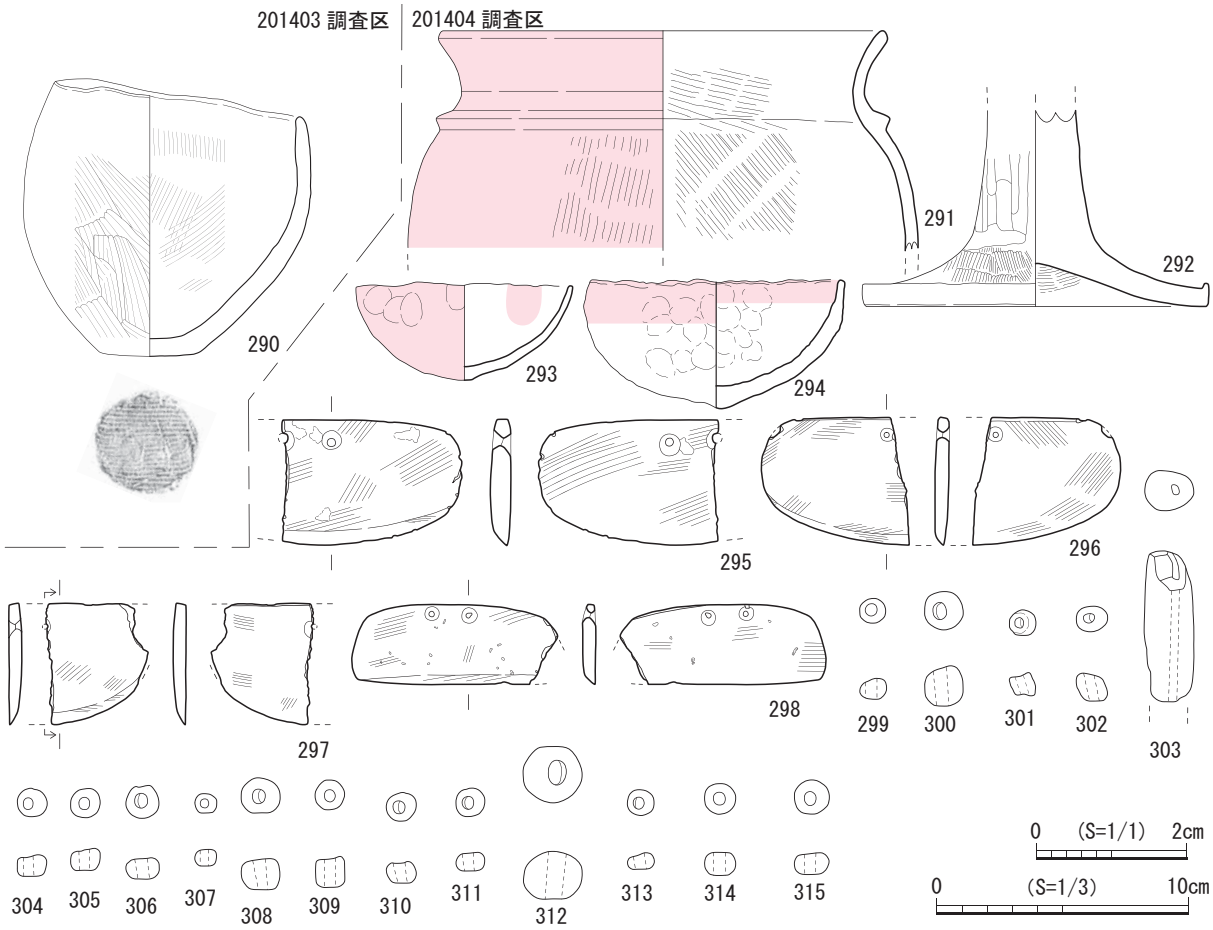
弥生時代の包含層から土器、石器、ガラス小玉、ガラス管玉が出土した。以下調査区毎に説明する。

① TAK201403調査区(第167図　図版151　表80)

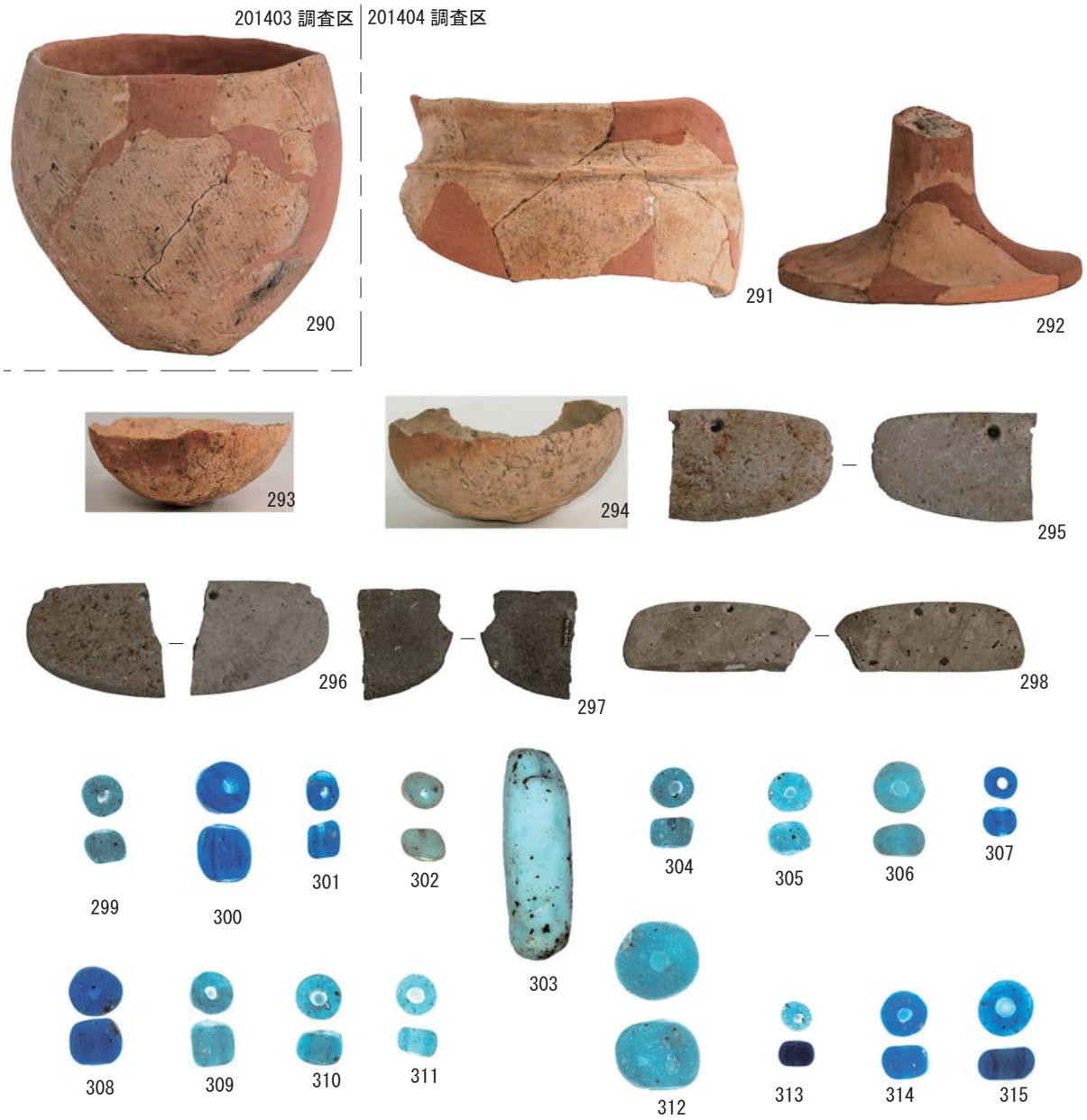
290は鉢の口縁部～底部で一部が欠損するが全体のプロポーションは判断できる。口縁部は胴部から緩やかに立ち上がり端部は丸い。底部は小さく平底である。外面は全体にハケメ調整を行い、内面はハケメ調整の後ナデ消しを行っている。やや歪んでいる。

② TAK201404調査区(第167図　図版151　表80～82)

291は甕口縁部～胴部片である。口縁部は外湾し端部は丸い。器壁は全体的に薄い。口頸部に一条の三角凸帯を有し、内外面はハケメ調整を施す。外面に丹塗り痕が残る。**292**は高杯の脚部である。脚部は円柱状で、開脚部は大きく開き端部は方形である。**293**、**294**は手づくね土器の椀である。指圧痕が多く残る。**295～298**は石包丁片である。**298**は一部欠損するが小形の石包丁でほぼ完形である。**295～298**の4点はいずれも片刃で3点は両面穿孔である。石材は安山岩と思われる。**299～315**はガラス小玉、ガラス管玉である。いずれもカリガラスで紺色、淡青色を呈する。



第167図　TAK201403・201404調査区 包含層出土遺物実測図
(No. 299～315はS=1/1、他はS=1/3)



図版151　TAK201403・TAK201404調査区 包含層出土遺物

第80表　TAK201403調査区・TAK201404調査区　包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	時期	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	層位	備考
				口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面					
290	鉢	口縁部～底部	弥生終末	(13.0)	最大(14.7)	5.4	ヨコナデ ハケメ	ハケメ後ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	雲母、角閃石 白色粒子	1070	3層	底部はやや凸レンズ状である。接合にて3/4。
291	甕	口縁部～胴部片	弥生後期 前半～中頃	(17.4)	残存(8.65)	—	ハケメナデ消し 丹塗り	ハケメナデ消し	10YR8/3 浅黄橙	10YR4/2 灰黄褐	良	長石	B6東 88708872	3a 層	一条の貼付三角凸帯あり 外面丹塗りあり
292	高杯	脚部	弥生後期 後半	—	残存(7.7)	13.5	ヘラケズリ ハケメ	ハケメ	5YR8/4 淡橙	5YR8/4 淡橙	良	長石	B6東 9072	3a 層	中実
293	椀	完形	弥生後期	8.5	3.8	—	指オサエ	指オサエ	5YR7/8 橙	5YR7/6 橙	良	長石	B6西 9270	3d 層	手づくね土器 内外面に一部丹塗り
294	椀	ほぼ完形	弥生後期	(9.9)	(5.1)	—	指オサエ	指オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、褐色粒子	B6西 9270	4d 層	手づくね土器 口縁部欠損、内外面口縁部付近に一部丹塗り

第81表　TAK201404調査区　包含層出土石器観察表

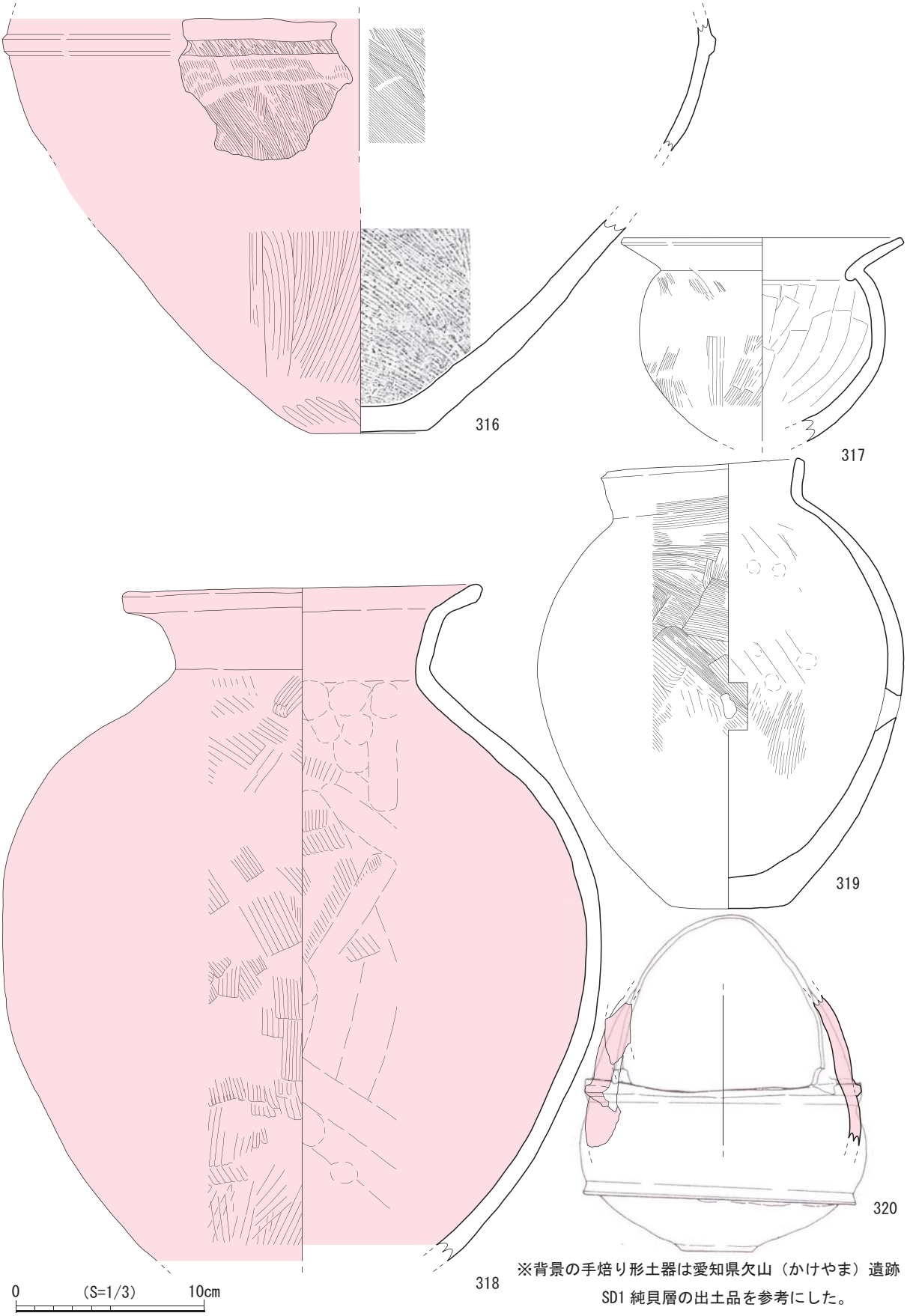
遺物番号	器種	石材	時代	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区グリッド	層位	備考
295	石包丁	安山岩	弥生後期	50.00	71.50	8.00	46.13	B6東8872	3a 層	片刃、穿孔2ヶ所あり
296	石包丁	安山岩	弥生後期	50.50	59.00	5.50	26.64	B6東9072	3a 下層	片刃、穿孔1ヶ所あり
297	石包丁	安山岩	弥生後期	48.00	41.00	5.00	13.72	B6東9474	3a 層	片刃、穿孔1ヶ所あり
298	石包丁	安山岩	弥生後期	31.50	81.50	5.00	22.84	B6西9270	2層	片刃、穿孔2ヶ所あり

第82表　TAK201404調査区　包含層出土ガラス小玉観察表

遺物番号	器種	色	時代	内径①(mm)	内径②(mm)	外径①(mm)	外径②(mm)	厚①(mm)	厚②(mm)	直径(mm)	出土区グリッド	層位	備考
299	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.247	1.296	2.990		2.558		3.111	B19074	北壁	カリガラス
300	ガラス小玉	紺	後期前半以降	1.567	1.430	4.578		4.456	5.154	4.774	B19074	3下層	カリガラス
301	ガラス小玉	紺	後期前半以降	0.930	0.969	2.964		2.662		3.050	B19076	3d 層	カリガラス　一部欠
302	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.246	955	3.854	3.208	3.063	3.469	3.438	A6南8870	2層	カリガラス 表面がすりガラス状
303	ガラス管玉	淡青	後期前半以降	0.910	1.180	3.860	5.800	19.700		4.970 (6.430)	B6東9072	3a 層	カリガラス
304	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.526	1.343	3.420		2.326	2.628	3.613	B6東9072	3a 層	カリガラス
305	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.168	1.001	3.806	3.509	2.510		3.713	B6東9074		カリガラス
306	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.434	1.341	4.156		2.249	2.652	4.170	B6東9074	3a 下半	カリガラス 表面がすりガラス状 正円に近い
307	ガラス小玉	紺	後期前半以降	0.971	0.897	2.674	2.472	1.929	2.154	2.665	B6東9074	3a 下半？	カリガラス
308	ガラス小玉	紺	後期前半以降	1.202	1.056	4.959	4.620	4.252		4.785	B6東9074	3b2層	カリガラス
309	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.040	1.174	3.671		3.253	3.836	3.518	B6東9074	3d2層	カリガラス
310	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.531	1.304	3.289		2.184		3.593	B6東9272～9274間ベルト	表採(南側3d層掘削時か)	カリガラス
311	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.548	1.322	3.447		2.219		3.366	B6東9272～9274間	SC4d 区以外？	正円に近い
312	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	2.610	2.020	5.530	6.010	5.830	6.100	7.380	B6東9274	3a 下～3d 上面	カリガラス
313	ガラス小玉	淡青	後期前半以降	1.161	1.203	3.817	3.942	2.767		4.021	B6西8870	2層相当	カリガラス
314	ガラス小玉	紺	後期前半以降	1.259	1.147	3.518	3.212	1.631	2.203	3.265	B6西9068	2層	カリガラス
315	ガラス小玉	紺	後期前半以降	1.600	4.453	4.140		2.358		4.253	B6西9070	3d 層	カリガラス 孔断面は正円に近い

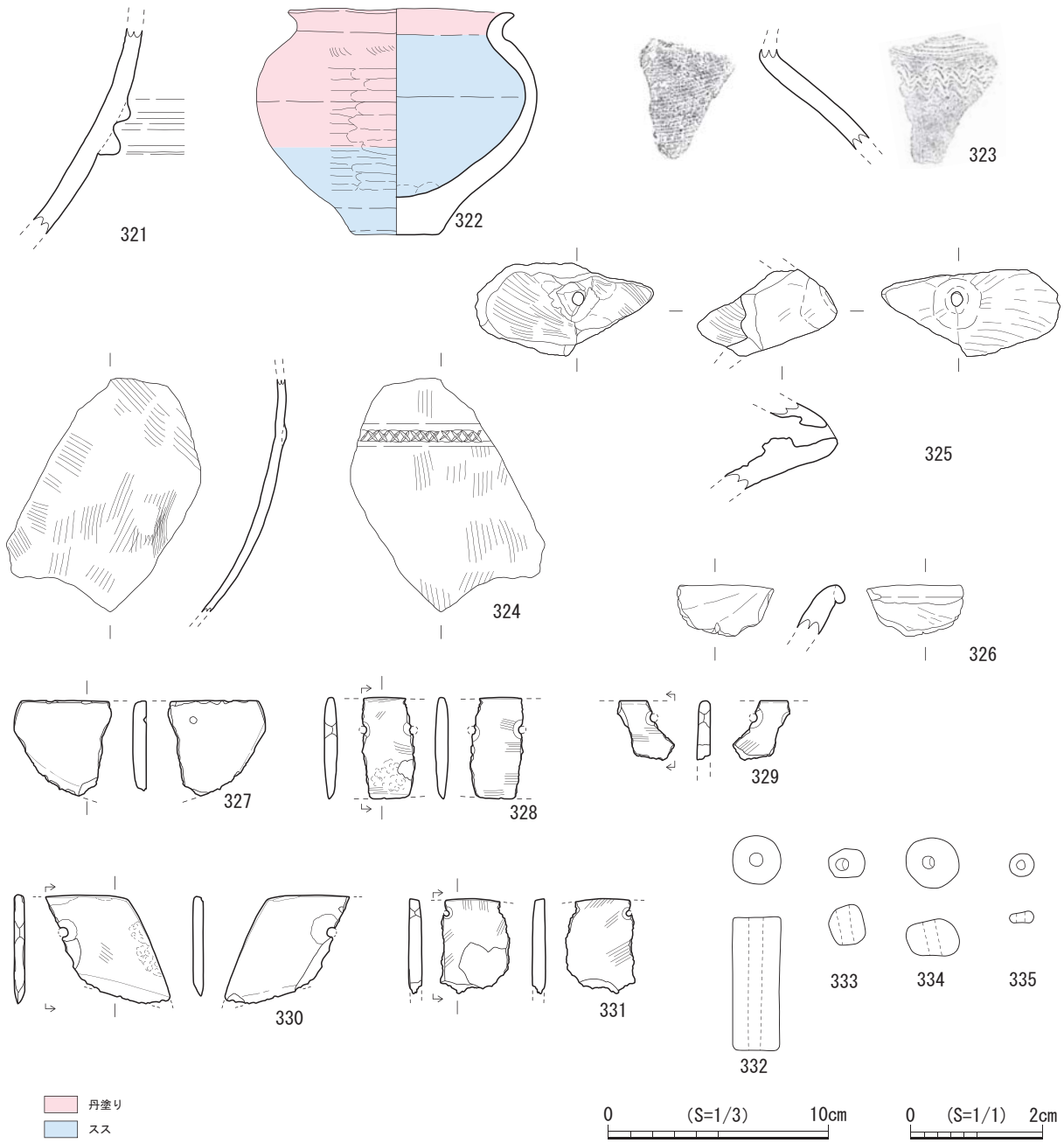
③ TAK201405調査区(第168・169図　図版152・153　表83～86)

316は甕で胴部～底部片である。胴部には一条の台形状の刻目凸帯を有す。内外面は粗いハケメ調整を施し、外面に丹塗り痕が残る。底部は平底である。大きさから考えて甕棺の破片と思われる。時期は底部形状から後期前半頃の所産であろう。**317**は甕で底部が欠損する。口縁部は直線的に大きく外傾し端部は丸い。口縁部内側に返りを有す。外面はハケメ調整を施し、内面はケズリを有す。**318**はやや大形の壺である。胴部～底部が欠損する。口縁部は直線的に外傾し端部で短く反る。内外面でハケメ・ナデ調整を施す。**319**は直口壺である。口縁部は短く垂直に立ち上がり端部は丸い。胴部最大径は中位よりやや上にある。底部は平底である。胴部中央に孔があけられている。内外面はハケメ調整を施している。**320**は手焙り形土器の覆部、口縁部、体部の破片である。全体の大きさ等はさだかではない。畿内からの搬入品か。長崎県では初の出土である。**321**は甕胴部片である。二条の三角凸帯を有し外面はハケメ調整を施す。**322**は短頸壺で口縁部～胴部の一部が欠損する。口縁部は短く外湾し端部は丸い。胴部は丸く内湾し底部は平底である。全体的に丁寧な作りで、口縁部外面から胴部にかけて丹塗りの痕跡が残る。**323**は壺？の口頸部付近の小破片である。外面はヘラ描き、その下に波状文が施され、内面にハケメ調整を施す。**324**は壺？の胴部片である。一条の凸帯が付設されその上に×を付けている。内外面は薄いハケメ調整を施し、全体的に器壁は薄い。鹿児島の松木園式と考えられる。**325**は注ぎ口土器片で先端の穿孔の部分である。器形は不明で、産地も不明である。免田式か船形土器かと言う方もおられたが決め手がない。**326**は無文土器の甕口縁部片である。口縁部は断面円形の粘土紐であることから無文土器後期前半(水石里式)である。北部九州では板付Ⅱb～城ノ越式頃と併行関係であろう。**327～331**は石包丁の破片である。いずれも1/4以下の破片で穿孔は1～2ヶ所確認できる。石材は安山岩・デイサイト・凝灰岩である。**332**は管玉で完形品である。両面穿孔である。**332～335**はガラス小玉でカリガラスである。



※背景の手焙り形土器は愛知県欠山（かけやま）遺跡
SD1 純貝層の出土品を参考にした。

第168図　TAK201405調査区 弥生時代包含層 出土遺物実測図 その1（S=1/3）



第169図　TAK201405調査区 包含層出土遺物実測図 その2（No.332～335はS=1/1、他はS=1/3）

316

318

317

319

320

図版152　TAK201405調査区 包含層出土遺物 その1

図版153　TAK201405調査区 包含層出土遺物 その2

第83表　TAK201405調査区　包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	時代	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) 底径	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土	出土区グリッド	層位	備考
316	甕	胴部～底部	弥生後期前半	12.6	—	—	横方向にハケメ	ハケメ	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/4 にぶい橙	良	長石 褐色粒子	② 8468	—	
317	甕	口縁部～胴部	弥生後期前半	(14.6)	(10.6)	—	ナデ ハケメナデ消し	ナデ ヘラケズリ	2.5YR6/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母 褐色粒子	② 8068	—	小型丸底壺、底部欠損
318	壺	口縁部～胴部	弥生後期前半	(18.6)	残存 (35.8)	—	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	雲母、石英、長石 角閃石	②③ 7666 7668	4a 層 境界ベルト	
319	直口壺	完形	弥生後期前半	10.2	23.9	6.0	ハケメ	ヘラケズリ ハケメ後ナデ	5YR7/2 明褐灰	5YR7/2 明褐灰	良好	石英、長石 赤色粒子	③ 7866	—	胴部中央に穿孔1ヶ所あり 内面に指オサエあり
320	手焙り形土器片	覆部～体部	弥生終末～古墳初頭	—	残存 (7.9)	—	ナデ 一条の凸帯	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	雲母	③ 7866	4層	手焙り土器、山陽系か？断言はできない。今宿遺跡でも出ている、赤彩は珍しいのではないか。
321	甕	胴部	弥生後期	—	残存 (9.3)	—	ナデ ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/1 灰白	良	石英、角閃石	④	—	二条の貼付三角凸帯あり
322	短頸壺	口縁部～底部	弥生後期前半	(10.0)	10.2	3.8	ヨコナデ ヘラミガキ	ヘラケズリ後ナデ	10YR8/3 浅黄橙	5YR2/1 黒褐	良好	石英、長石、雲母 角閃石	⑥ 7466	—	1/2欠損、内外面に黒褐色付着物あり、口縁部外面～口縁にかけて丹塗りあり
323	壺	頸部	弥生終末	—	残存 (4.5)	—	ヘラ描き 波状文	ハケメ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良	石英、赤色粒子 雲母、長石	② 8068	2層	加飾壺 肥後北半に分布
324	壺	胴部	弥生終末期併行	—	残存 (10.5)	—	ハケメナデ消し 凸帯(菱形模様)	ハケメナデ消し	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石	③ 8066	—	松木薗式(鹿児島県)
325	注口土器	注口	弥生後期後半	—	残存 (4.2)	—	ハケメナデ消し	ハケメ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	白色粒子、角閃石	③ 7666	4b 層	産地不明、注口土器免田式か？V様式舟形土器か？（肥後？）
326	無文土器 甕	口縁部	弥生前期末～中期初頭	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母	② 7868	3層	口縁部は粘土紐で断面円形を作る

第84表　TAK201405調査区　包含層出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	時代	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区・グリッド	層位	備考
327	石包丁	デイサイト	弥生後期	43.00	44.00	6.00	18.10	③区7866	3層	穿孔未完成
328	石包丁	デイサイト	弥生後期	45.50	24.00	6.00	10.80	③区7866	3層	片刃、穿孔2ヶ所あり
329	石包丁	安山岩	弥生後期	27.00	26.00	6.00	4.65	③区 a-南北ベルト	3a 層	穿孔1ヶ所あり
330	石包丁	凝灰岩	弥生後期	49.00	56.00	4.50	17.30	⑤区7460	2層	片刃、穿孔1ヶ所あり
331	石包丁	安山岩	弥生後期	43.00	31.00	6.00	12.27	⑤区7462	2～4層	穿孔1ヶ所あり

第85表　TAK201405調査区　包含層出土石製品（管玉）観察表

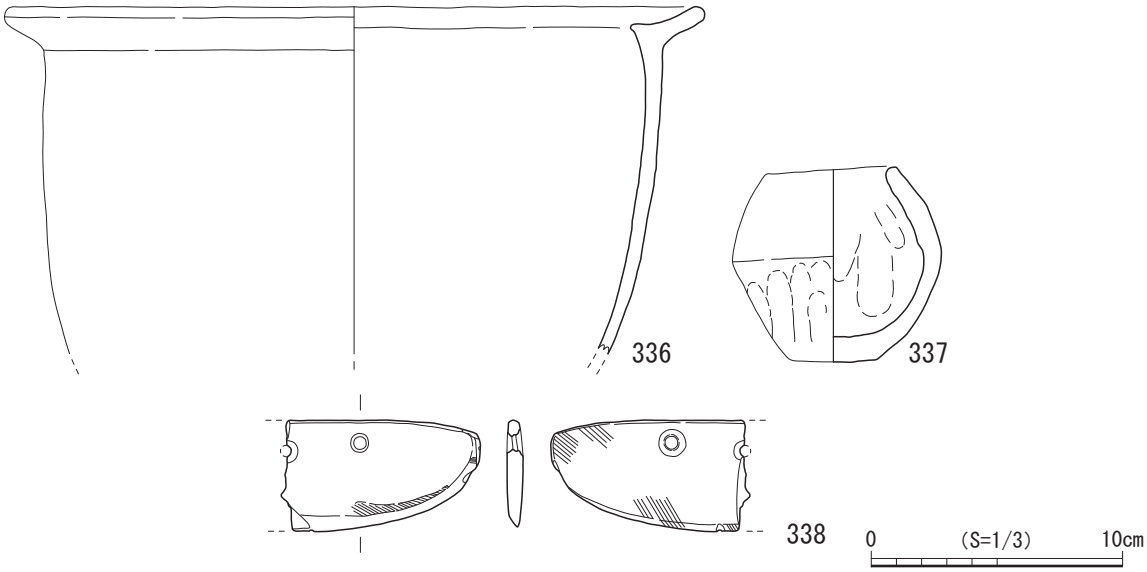
遺物番号	器種	色調	時代	内径① (mm)	内径② (mm)	外径① (mm)	外径② (mm)	厚① (mm)	厚② (mm)	直径 (mm)	出土区・グリッド	層位	備考
332	石製管玉	5GY7/1 明オリーブ	弥生後期	1.740	—	7.070	—	19.980	—	7.020	④区7862	4a 層	

第86表　TAK201405調査区　包含層出土ガラス小玉観察表

遺物番号	器種	色	時代	内径① (mm)	内径② (mm)	外径① (mm)	外径② (mm)	厚① (mm)	厚② (mm)	直径 (mm)	出土区グリッド	層位	備考
333	ガラス小玉	淡青	弥生後期	1.954	1.838	4.776	3.625	5.152	5.773	4.162	②8068	4a 層	カリガラス　歪んでいる
334	ガラス小玉	紺	弥生後期	1.310	—	6.020	—	2.570	—	7.440	③8066	4a 層	カリガラス
335	ガラス小玉	紺	弥生後期	1.158	1.222	3.549	3.518	1.658	1.926	3.593	⑥7262	4b 上層	カリガラス

④ TAK201406調査区（第170図　図版154　表87・88）

336は甕口縁部～胴部片である。口縁部は僅かに斜め方向で上面は僅かに窪む。口縁部は内側に突起を有し、口縁端部は丸い。黒髪式土器であろう。時期は中期末頃と思われる。**337**はコップ形土器で完形品である。底部は平底で胴部中央がやや尖る。口縁部は無頸で端部は丸い。**338**は石包丁の1/2欠損品である。片刃仕上げで、孔は2個で両面穿孔である。石材は安山岩系か。



第170図　TAK201406調査区 包含層出土遺物実測図(S=1/3)

図版154　TAK201406調査区 包含層出土遺物

第87表　TAK201406調査区　包含層出土土器観察表

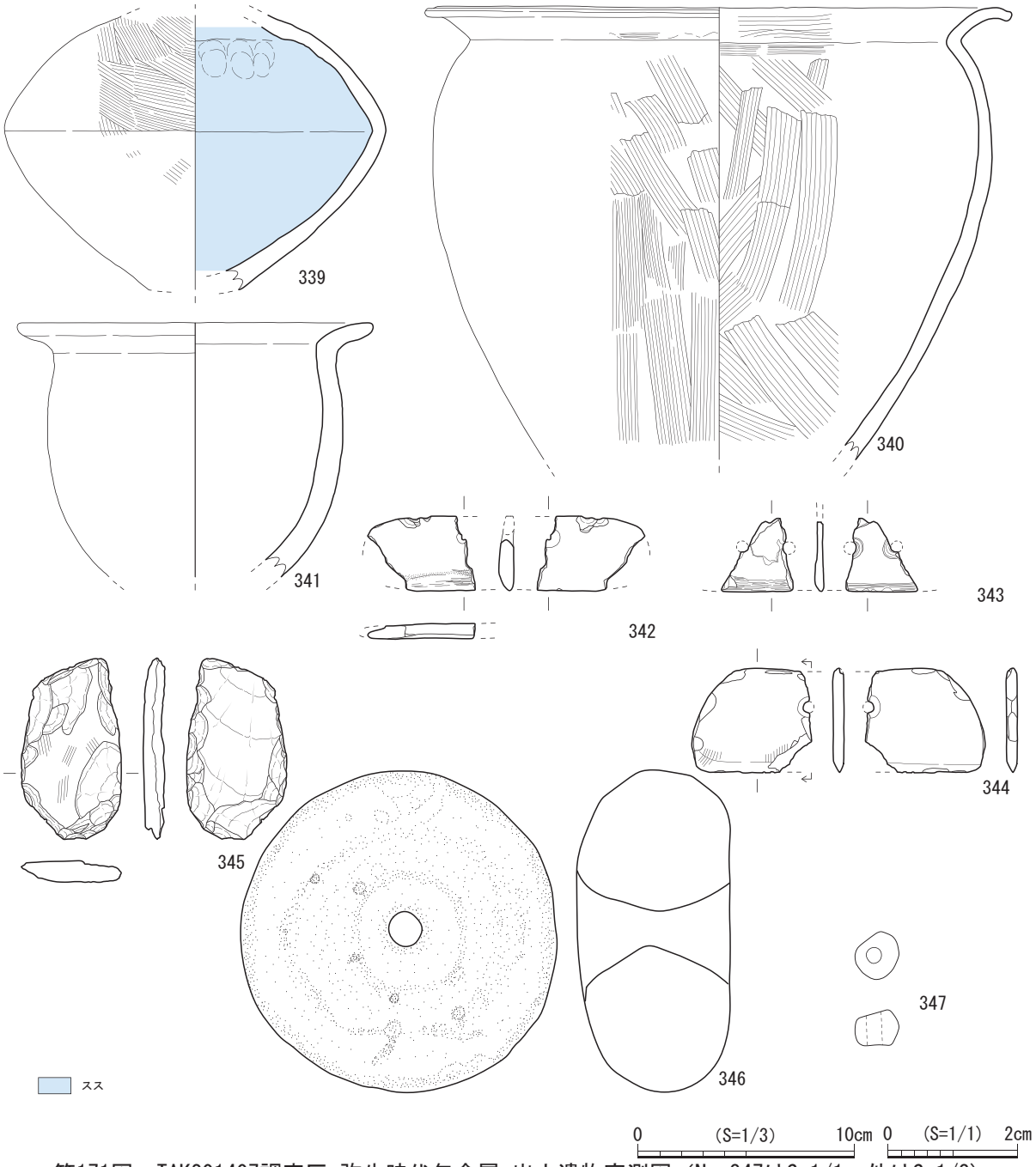
遺物番号	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	層位	備考
				口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面					
336	甕	口縁部～胴部	弥生中期末	27.0	残存(13.7)	—	ナデケシ	ナデケシ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	良好	雲母、長石、石英結晶片岩、角閃石	②区7252	礫直上	黒髪式
337	コップ形土器	完形	弥生後期前半	5.2	7.7	3.4	ナデ指オサエ	ナデ指ナデ	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/2明褐灰	良好	長石、角閃石雲母	③区6850	4層	底部平底

第88表　TAK201406調査区　包含層出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	時期	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区・グリッド	層位	備考
338	石包丁	安山岩？	弥生後期	44.00	79.00	6.50	35.00	②区7052	礫層直上	両面に穿孔あり、片刃1/2欠損

⑤ TAK201407調査区（第171図　図版155　表89～91）

339は長頸壺の体部片である。体部中央で三角方向に張り出し算盤玉形を呈する。外面はハケメ調整を施し、内面は焼成時に燻されススがかなり付着している。東瀬戸内系か。時期は後期前半頃の所産か。**340**は甕で口縁部～胴部片である。口縁部は低く外湾し端部は丸い。内外面は縦及び斜め方向のハケメ調整を施す。**341**は甕の口縁部～胴部片である。口縁部は外反し端部は丸い。**342**の孔は1ヶ所が確認でき両面穿孔である。石材は安山岩である。**343**は2ヶ所の孔を確認した。いずれも両面穿孔である。石材は蛇紋岩である。**344**は石包丁の破片である。穿孔は1ヶ所確認する。**345**は局部磨製石斧である。石材は蛇紋岩か。**346**は環状石器？で完形品で石材は安山岩である。穿孔は両面穿孔である。**347**はガラス小玉である。紺色を呈するカリガラスである。



第171図　TAK201407調査区 弥生時代包含層 出土遺物実測図（No.347はS=1/1、他はS=1/3）

図版155　TAK201407調査区 包含層出土遺物

第89表　TAK201407調査区　包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	層位	備考
				口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面					
339	長頸壺	体部	弥生後期前半	—	—	—	ハケメ ハケメ後ナデ	指オサエ ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR3/1 黒褐	良好	長石、角閃石 雲母、赤色粒子	6854	4層	東瀬戸内系か？ 内面スス付着
340	甕	口縁部 ～胴部	弥生後期前半	27.1	—	—	多方向のハケメ 後ナデ	ハケメ後ナデ 多方向のハケメ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	長石、角閃石 赤色粒子	7258	4層	底部欠損
341	甕	口縁部 ～胴部	弥生後期前半	(16.0)	残存 (11.7)	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	10YR4/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	良	雲母、長石、石英 赤色粒子、角閃石	7256	3層	

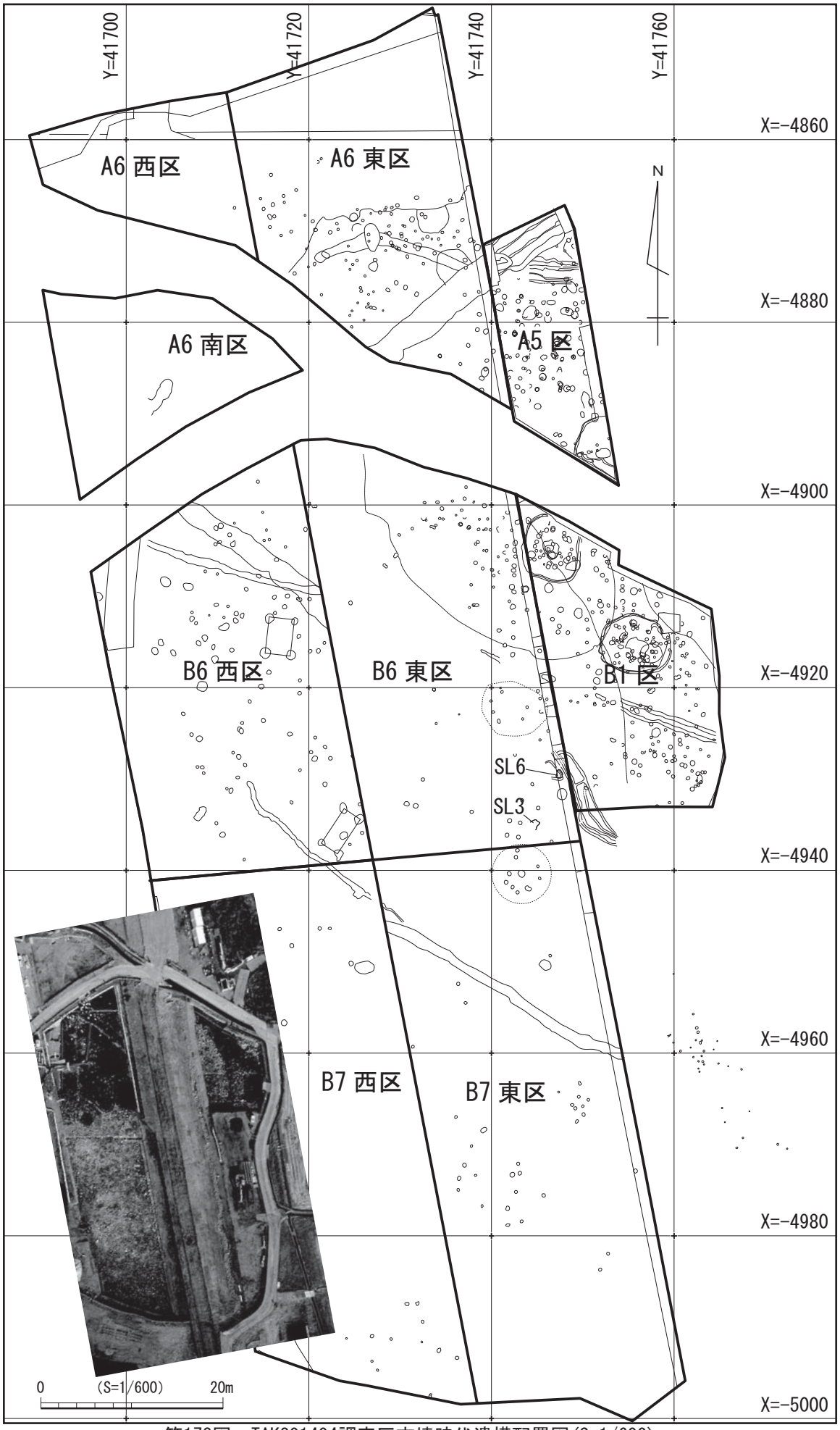
第90表　TAK201407調査区　包含層出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	時代	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区・グリッド	層位	備考
342	石包丁	安山岩	弥生後期	34.50	44.50	7.00	14.79	6654	4層	全面ていねいに研磨
343	石包丁	蛇紋岩	弥生後期	34.00	33.00	4.00	5.20	7056	3層	穿孔2ヶ所、表面風化
344	石包丁	安山岩	弥生後期	48.00	55.00	5.00	25.00	③区7652	Ⅲ層	両刃、穿孔1ヶ所あり
345	局部磨製石斧	蛇紋岩？	縄文晩期～ 弥生早期	83.00	46.00	10.00	54.21	7260	4層	
346	環状石器？	安山岩	不明	(縦)14.75	(横)14.50	7.10	1690.00	①区7258	4層	両面から穿孔あり

第91表　TAK201407調査区　包含層出土ガラス小玉観察表

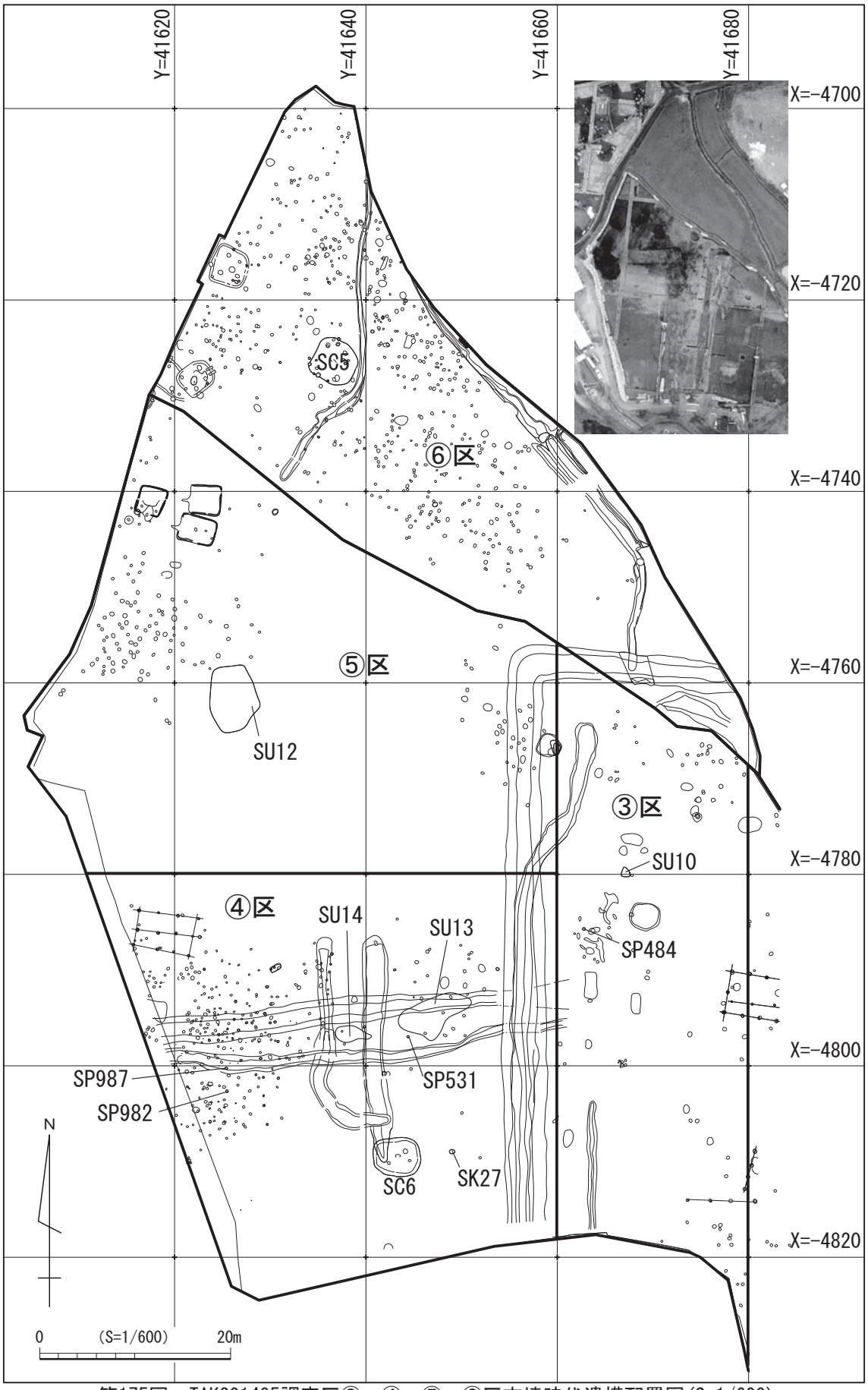
遺物番号	器種	色	時代	内径①(mm)	内径②(mm)	外径①(mm)	外径②(mm)	厚①(mm)	厚②(mm)	直径(mm)	出土区グリッド	層位	備考
347	ガラス小玉	紺色	弥生後半	2.030	—	7.310	—	—	5.420	6.780	7254	2層	重量0.31g、カリガラス

第172図　TAK201403調査区①・②・③区古墳時代遺構配置図(S=1/600)

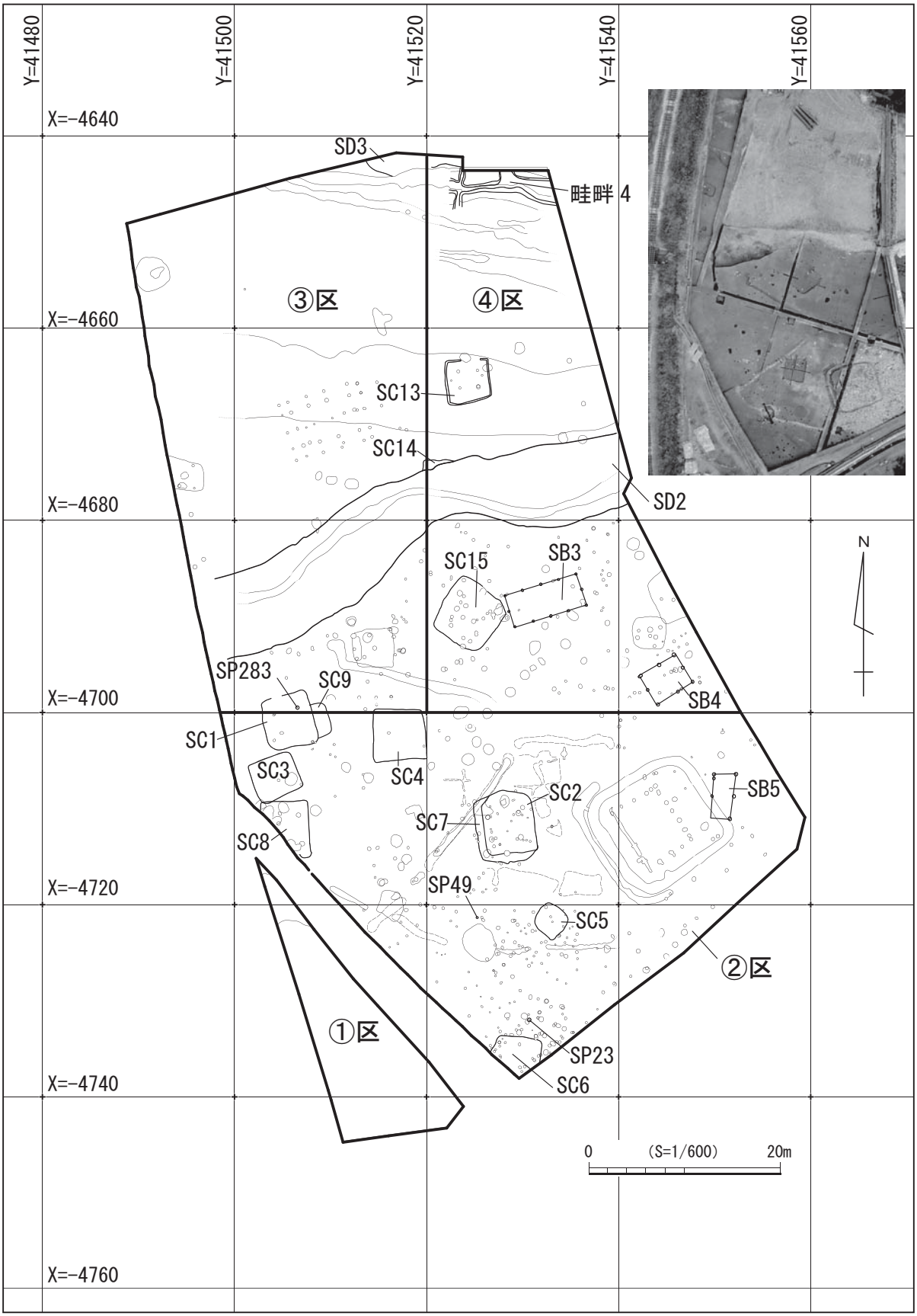


第173図　TAK201404調査区古墳時代遺構配置図(S=1/600)

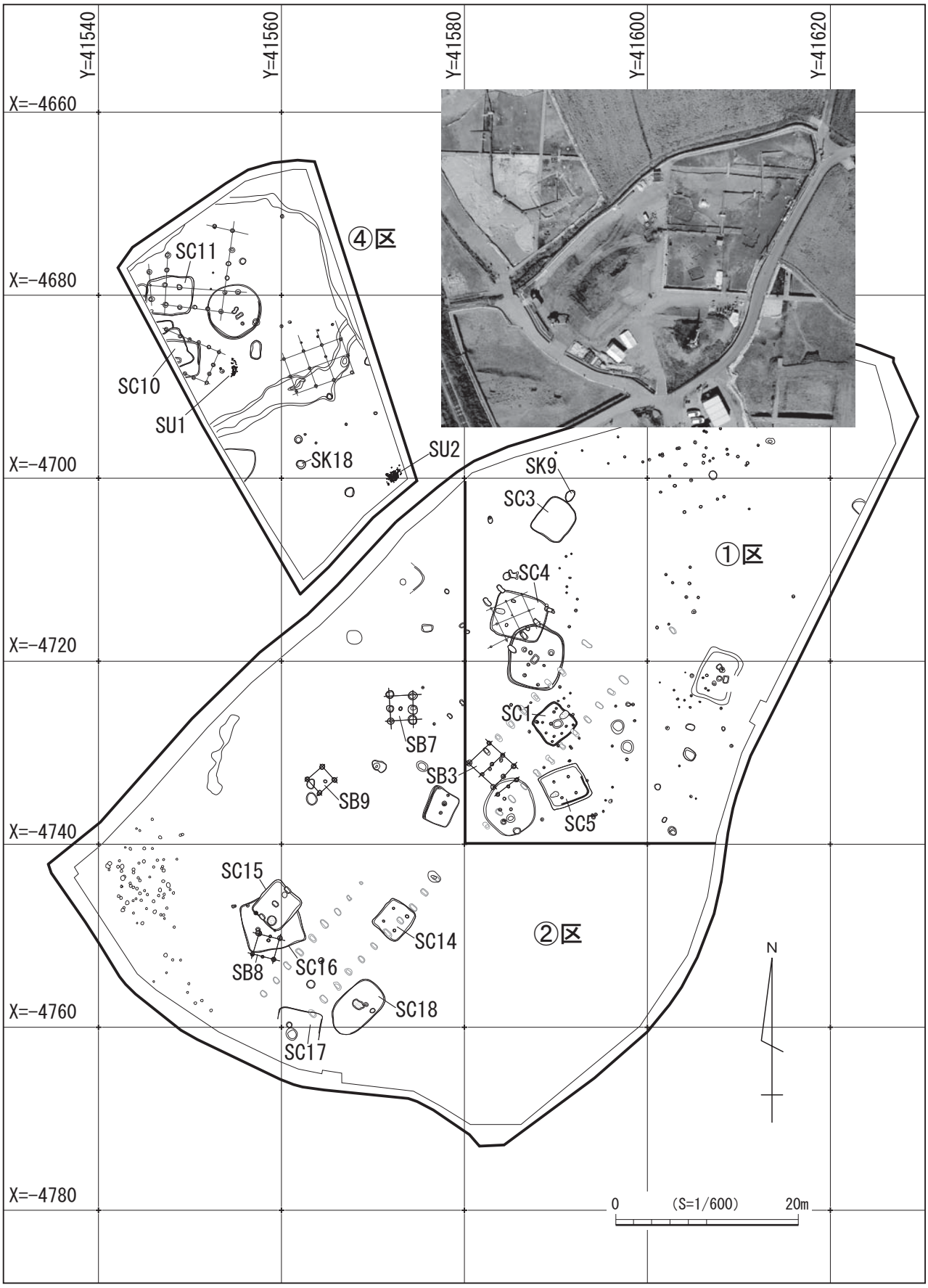
第174図　TAK201405調査区①・②区古墳時代遺構配置図(S=1/600)



第175図　TAK201405調査区③・④・⑤・⑥区古墳時代遺構配置図(S=1/600)



第176図　TAK201406調査区①・②・③・④区古墳時代遺構配置図(S=1/600)



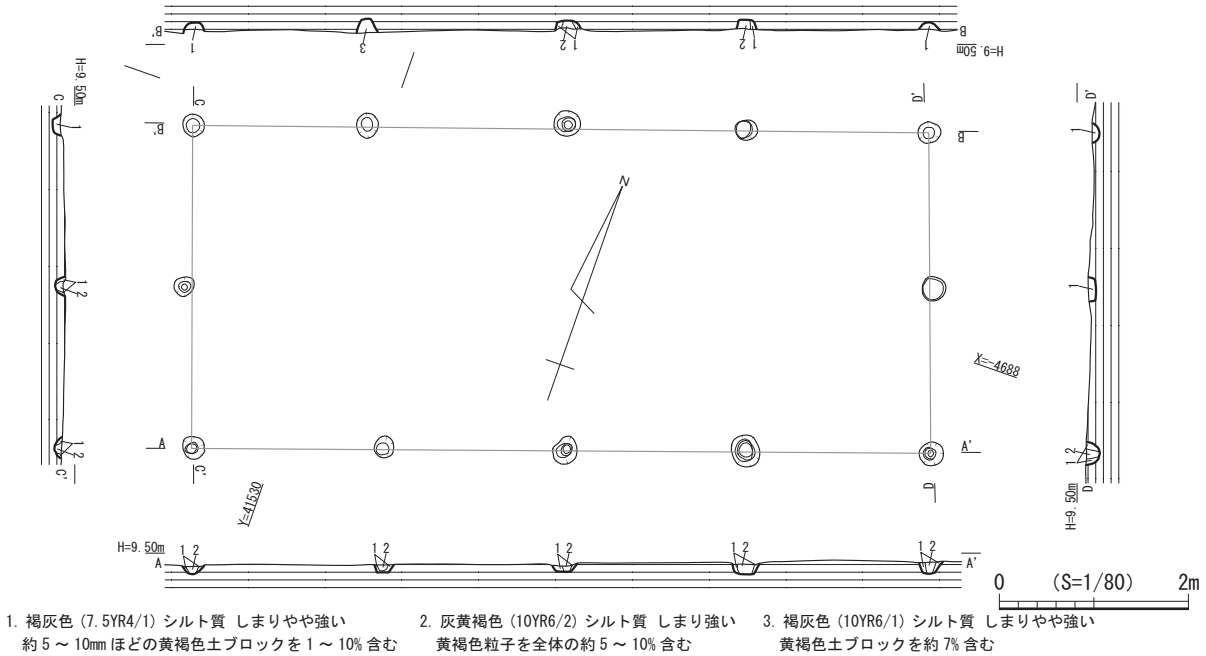
第177図　TAK201407調査区①・②・④区古墳時代遺構配置図(S=1/600)

4　古墳時代

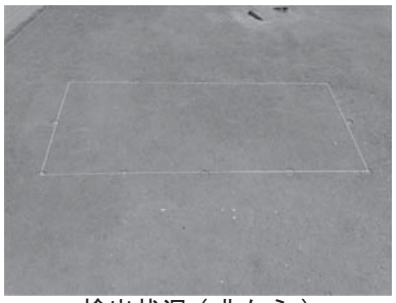
(1)掘立柱建物(SB)

① TAK201406　4区 SB3(掘立柱建物)(第178・179図　図版156・157　表92)

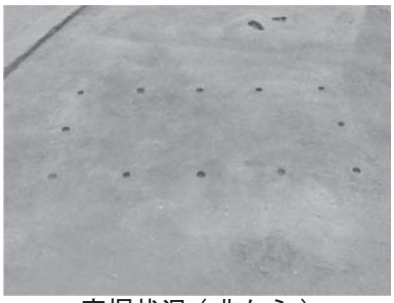
SB3は4区6852グリッドに位置する。4間×2間の側柱建物で桁行長7.95m、梁行長3.44m を測る長方形の平面プランである。桁行の芯々間距離は1.95m、2.0m で、梁行の芯々間距離は1.7m、1.74m である。掘立柱建物の主軸方向はN－69°－E で南西から北東方向に構築されており、かなり上面を削られている。柱穴間隔は桁行が1.9～2.0m、梁行が1.7m 程である。柱痕は10～14cm 程である。遺物の出土は柱穴より須恵器坏蓋、甕片、土師器甕口縁部等が出土した。**348～350**は須恵器である。**348**は甕の胴部である。内外面にタタキ痕が残る。**349**は杯蓋口縁部片である。口縁端部はやや尖る。**350**は杯蓋天井部～体部片である。天井部は平な仕上げである。時期は須恵器杯蓋片から6世紀第3四半紀頃であろう。



第178図　SB3平・断面図(S=1/80)



検出状況（北から）



完掘状況（北から）

図版156　SB3遺構状況

第179図　SB3出土遺物実測図(S=1/3)

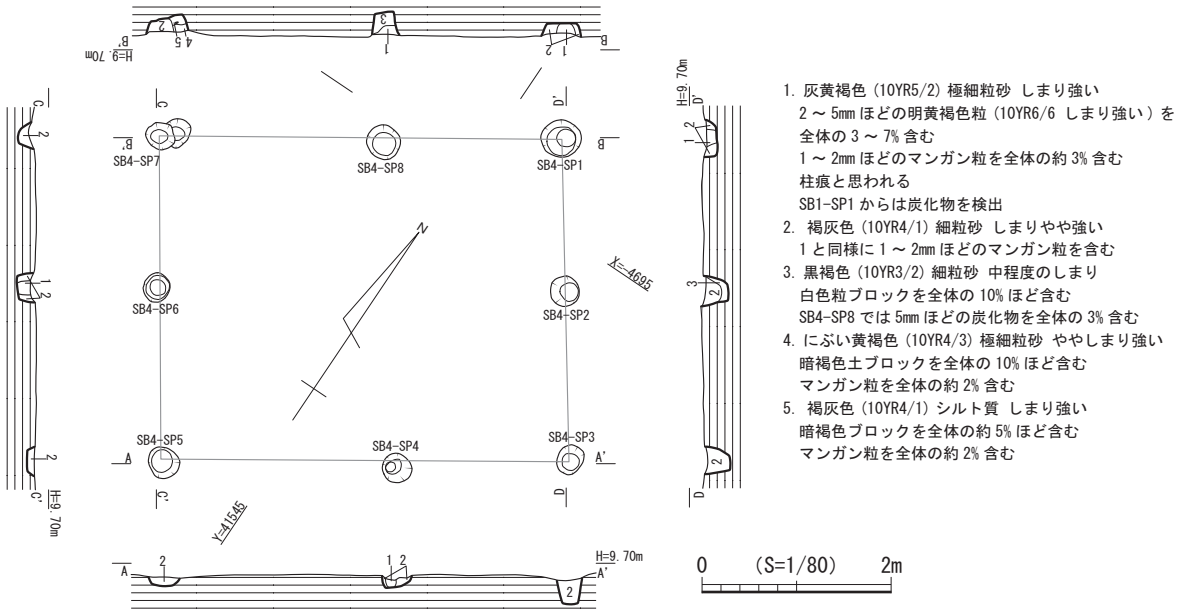
図版157　SB3出土遺物

第92表　SB3出土土器観察表

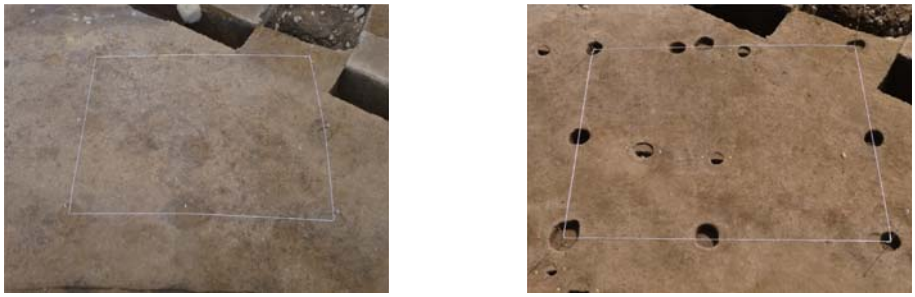
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
348	甕	胴部	—	残存(6.4)	—	多方向ハケメ	タタキ痕	5YR6/1灰	5YR6/1灰	良	石英、雲母	
349	杯蓋	口縁部	(15.8)	残存(2.4)	—	ナデ	ナデ	N6/灰	N6/灰	良	赤色粒子、白色粒子黒色粒子	
350	杯蓋	天井部～体部	—	—	—	回転ヘラケズリ	ナデ	N6/灰	N6/灰	良	長石	

② TAK201406　4区 SB 4(掘立柱建物)(第180図　図版158)

SB4は4区6854グリッドに位置する。2間×2間の側柱建物で桁行長4.4m、梁行長3.5m を測る長方形の平面プランである。桁行の芯々間距離は1.9m、2.5m で、梁行の芯々間距離は1.6m、1.9m である。主軸をN－58°－E にとり北東方向に構築された建物である。柱穴の規模は30～44cm の円形で深さは8～30cm を測る。柱痕は14cm 程である。全体はかなり削平されている。遺物は土師器小片、須恵器小片が柱穴の覆土から出土した。遺物が小片のため実測は不可能である。



第180図　SB4平・断面図(S=1/80)



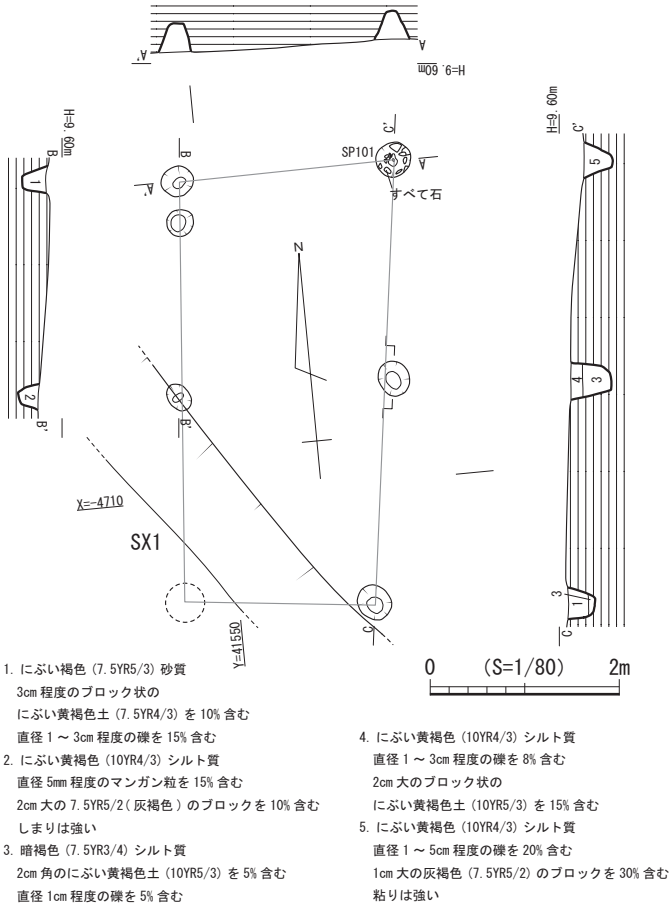
検出状況（北から）　完掘状況（北から）

図版158　SB4遺構状況

③ TAK201406　2区 SB5（掘立柱建物）（第181図　図版159）

SB5は2区7054グリッドに位置する。1間×2間の側柱建物で桁行長4.7m、梁行長2.3mを測る長方形の平面プランである。桁行主軸をN－6°－Eの南北方向に構築されている。桁行の芯々間距離は2.3～2.4m、梁行の芯々間距離は2.3mである。柱穴の1個はSX1によって切られている。柱穴の規模は24～34cmで円形及び楕円形を呈する。遺物は出土しなかった。

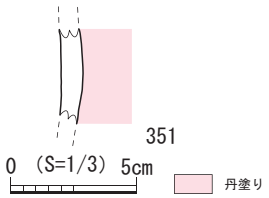
SP101 断面（柱痕）（北から）
図版159　SB5遺構状況



第181図　SB5平・断面図(S=1/80)

④ TAK201407　1区 SB3（掘立柱建物）（第182・183図　図版160・161　表93）

SB3は1区7258グリッドに位置する。規模は2間×2間で、桁行長3.8m、梁行長3.32mを測る。桁行方向の主軸はN－39°－Wの北西方向に構築された掘立柱建物である。柱穴は直径36～60cm程で、深さは40～60cmである。柱痕は14～20cmである。柱穴番号はSP4～11で柱穴はトレンチ掘削により一穴だけ欠損する。遺物は柱穴の覆土から出土した。SP4、5、6、7、8、10、11から土師器甕胴部丹塗り及び弥生式土器小片が出土した。**351**は土師器甕の胴部片である。外面は丹塗り痕が僅かにみられ、内面はケズリ痕が残る。

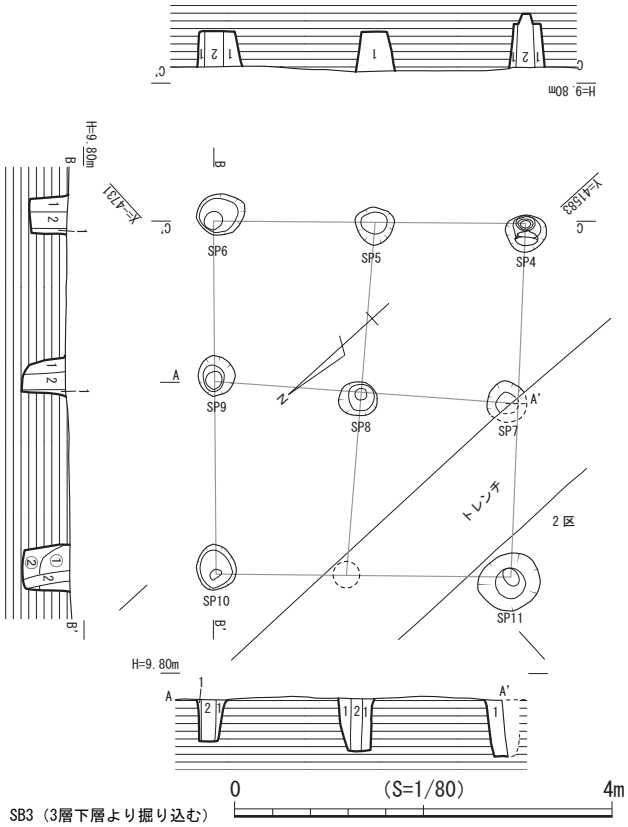


第182図　SB3出土遺物実測図(S=1/3)

351
図版160　SB3出土遺物

第93表　SB3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
351	甕	胴部小片	—	残存(3.7)	—	ナデ	ケズリ	5YR6/6橙	7.5YR8/3浅黄橙	良	長石、雲母角閃石	外面丹塗り



SB3（3層下層より掘り込む）
1.暗褐色(7.5YR3/4)粘土質
2.にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性あり　しまり弱い
①　暗褐色(10YR3/3)　他の埋土に比べて粘性が少し強い　しまり弱い
②　やや粘性あり　しまり弱い

第183図　SB3平・断面図(S=1/80)

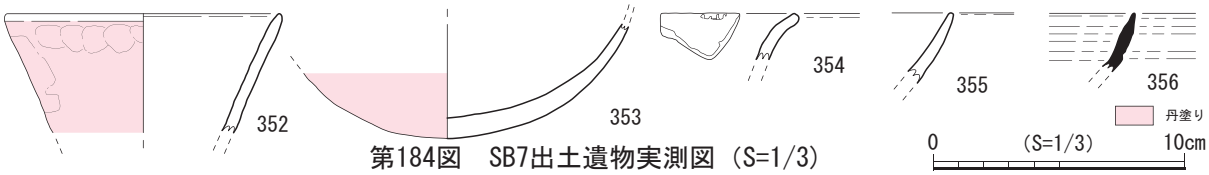
検出状況（北から）

完掘状況（北から）

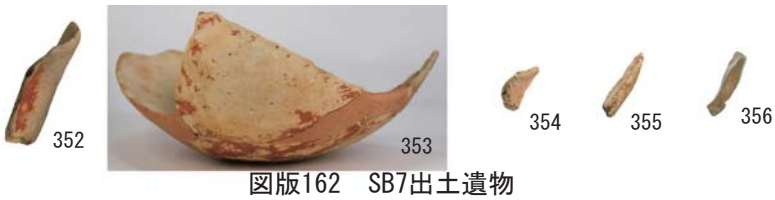
図版161　SB3遺構状況

⑤ TAK201407　2区 SB7(掘立柱建物)(第184・185図　図版162・163　表94)

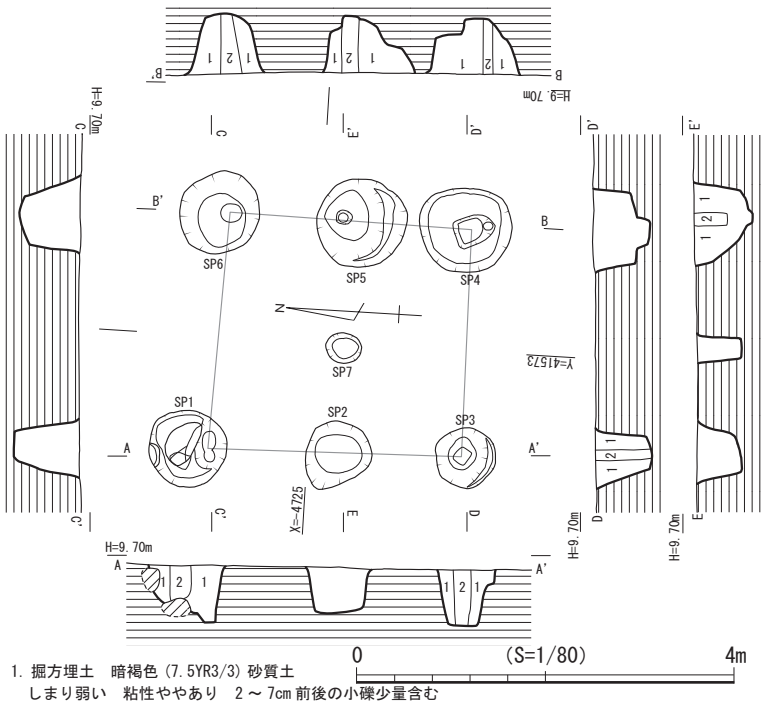
SB7は2区7256グリッドに位置する1間×2間の側柱の掘立柱建物である。桁行方向の主軸はN－6°－Eでほぼ南北方向に構築されている。桁行長は芯々で3.0m、梁行長は芯々で2.4m、桁行間隔は1.3m、1.4m、1.6m、1.4mでやや歪む。柱穴の直径は60～88cmとやや大きく、深さは44～60cmである。柱痕は16～20cm程である。建物中心に直径30cm、深さ60cmの柱穴が位置する。桁、梁の補助材の柱穴か。遺物はSP1、2、3、6の覆土から土師器小片が出土した。**352**はSP6から出土した土師器長頸壺の口縁部片である。器壁は薄く端部はやや尖る。外面に丹塗り痕が残る。**353**は土師器壺の胴部片である。器壁はやや薄くナデ調整で丁寧な作りである。外面は丹塗り痕が残る。**354**は小形の甕口縁部片でたちあがりは小さく外反し端部は方形である。**355**は土師器甕口縁部で端部は細く丸い。**356**は須恵器蓋？の口縁部小片である。口縁部内側は稜が認められ端部は細く丸い。丁寧な作りである。



第184図　SB7出土遺物実測図（S=1/3）



図版162　SB7出土遺物



1. 掘方埋土　暗褐色（7.5YR3/3）砂質土
　しまり弱い　粘性ややあり　2～7cm前後の小礫少量含む
2. 柱痕跡部　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土
　しまり弱い　粘性強い
・SP1、SP3、SP4、SP5、SP6から柱の自重による圧痕と思われる土のつまった底面が確認できた
・SP2の底面は下層の礫層
・段下げの段階で明瞭に柱痕跡を確認できたのは、SP1、SP3である

第185図　SB7平・断面図(S=1/80)

検出状況（南西から）

完掘状況（北東から）

図版163　SB7遺構状況

第94表　SB7出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
352	長頸壺	口縁部	(10.8)	残存(4.7)	—	ナデ	ナデ	5YR5/1 褐灰	10YR7/2 にぶい黄橙	良好	長石、雲母	外面に丹塗りあり
353	壺	胴部	—	残存(4.5)	—	ナデ	ナデ	5YR5/8 明赤褐	10YR8/2 灰白	良好	長石、雲母	外面に丹塗りあり
354	甕	口縁部小片	—	残存(1.8)	—	ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	長石、角閃石	
355	甕	口縁部小片	—	残存(2.8)	—	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	良	長石、雲母	
356	蓋？	口縁部小片	—	残存(2.3)	—	ナデ	ナデ	5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	良	長石	

⑥ TAK201407　2区 SB8(掘立柱建物)(第186・187図　図版164・165　表95)

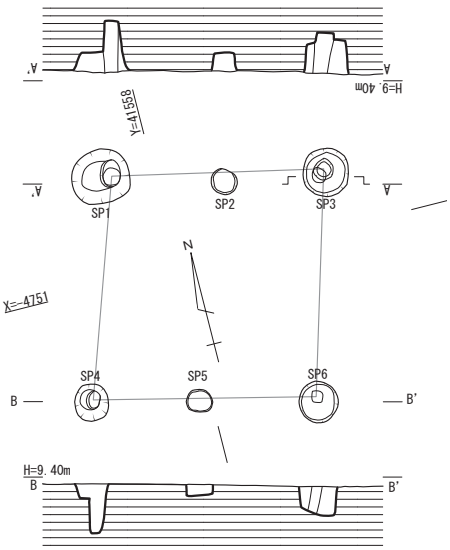
SB8は7454グリッドに位置する1間×2間の側柱の掘立柱建物でSC16を切っている。桁行方向はN－67°－Eで東北東方向に構築されている。桁行長は芯々で2.3m～2.4m、梁行長は芯々で2.4mを測るほぼ正方形の平面プランを呈する。桁行間隔は1.2m、1.1mである。柱穴の直径は28～60cm、深さ12～56cmを測る。この柱穴の中でSP2、SP5は直径が28～30cm程と小さい。柱痕は10～16cmである。遺物は柱穴の覆土内から土師器小片が出土した。**357**はSP3から出土した土師器甕の口縁部小片である。口縁部はやや肥厚で端部は丸い。

第186図　SB8出土遺物実測図(S=1/3)

図版164　SB8出土遺物

第95表　SB8出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
357	甕	口縁部小片	—	残存(2.05)	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石	



第187図　SB8平・断面図(S=1/80)

検出状況（南西から）

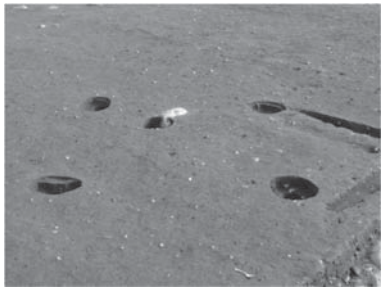
完掘状況（北から）

図版165　SB8遺構状況

⑦ TAK201407　2区 SB9(掘立柱建物)(第188・189図　図版166・167　表96)

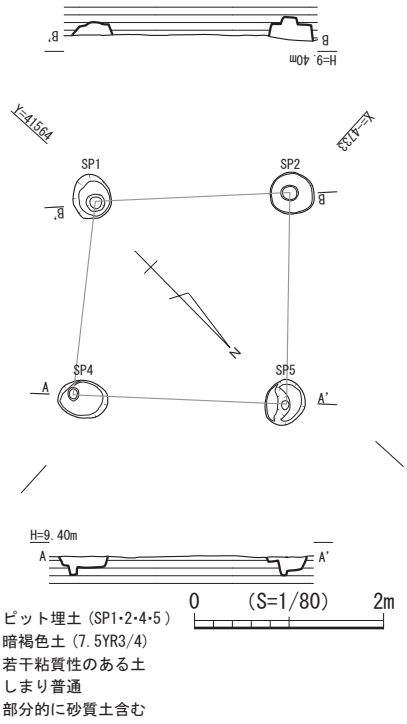
SB9は7256グリッドでSB7の南西7m程に位置する。規模は1間×1間で2.1～2.2mでほぼ正方形を呈する。桁行方向はN－74°－Eで東北東方向に構築されている。柱穴の直径は40～50cm、深さ14～22cmを測る。全体的にかなり削平されている。柱痕は10～20cmを測る。遺物はSP1、SP4の覆土から土師器の小片が出土した。**358**はSP1から出土した土師器甕胴部小片である。僅かに砂粒を含み丁寧な作りである。**359**はSP4から出土した土師器甕の口縁部片である。口縁端部は欠損し内外面は丹塗り痕が残る。

検出状況（東から）

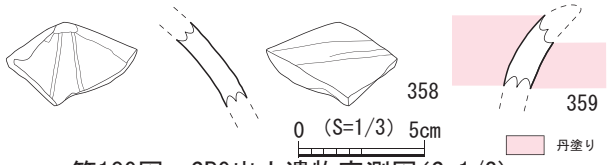


完掘状況（東から）

図版166　SB9遺構状況



第188図　SB9平・断面図(S=1/80)



第189図　SB9出土遺物実測図(S=1/3)

図版167　SB9出土遺物

第96表　SB9出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
358	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ハケメ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	石英、赤色粒子	
359	甕	口縁部	—	残存 (2.9)	—	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母	内外面に丹塗りあり

(2)竪穴建物(SC)

① TAK201403　3区 SC6(竪穴建物)(第190図　図版168)

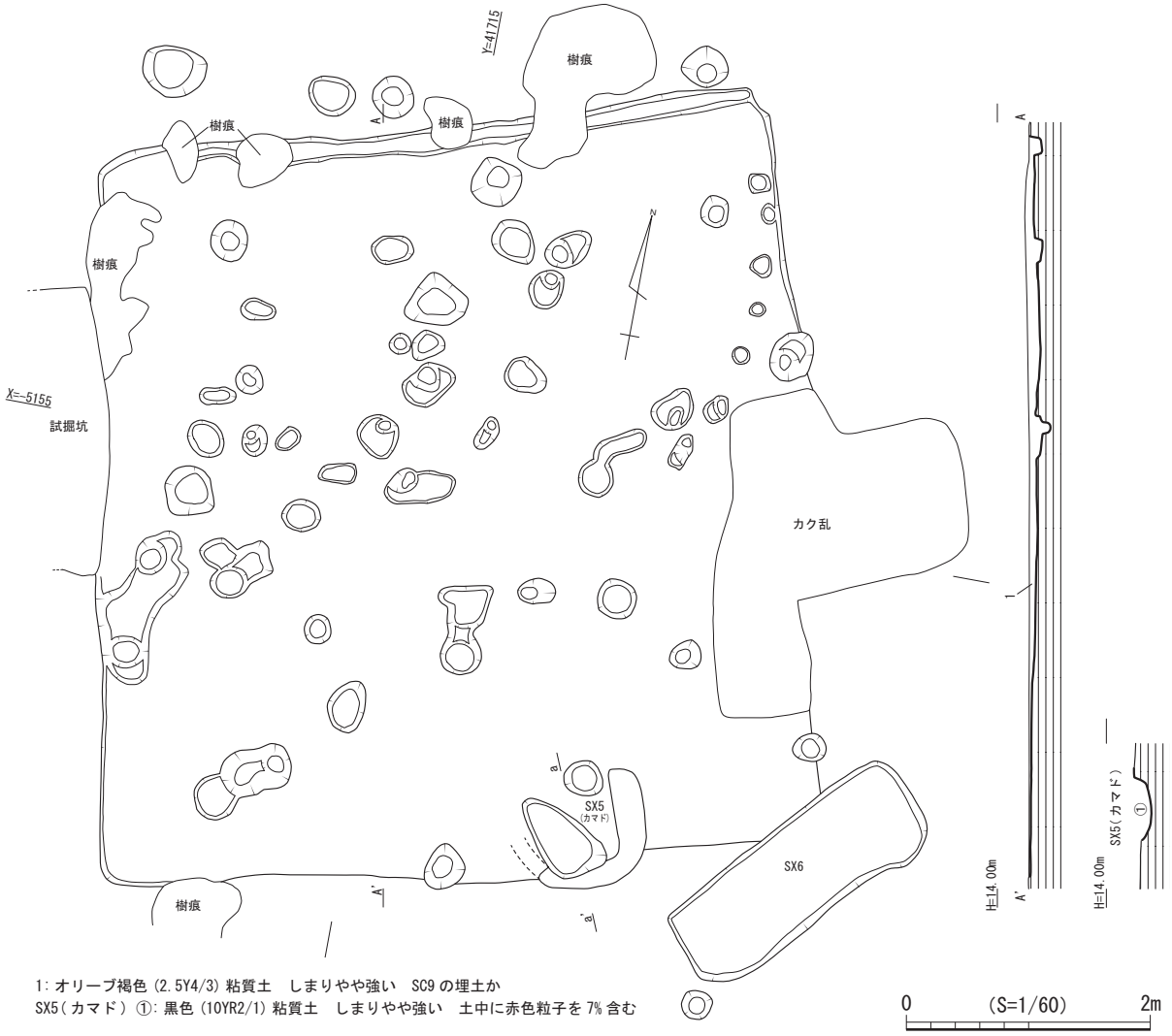
SC6は3区1670グリッドに位置する。平面プランは長軸(南北)6.16m、短軸(東西)6.0m+、深さ16cm+を測る、ややひし形を呈する。主柱穴は4本で直径40cm、深さ32cm を測る。周溝は幅32cm、深さ20cm 程で南東側に僅かに残る。カマド、炉は存在しない。遺物は出土しなかった。ややひし形の平面プランから考えて古墳時代の竪穴建物であろう。

完掘状況(北から)
図版168　SC6遺構状況

第190図　SC6平・断面図(S=1/60)

② TAK201403　3区 SC9(竪穴建物)(第191図　図版169)

SC9は3区1470グリッドに位置する。平面プランは長軸(東西)5.8m、短軸(南北)6.0m を測るほぼ方形である。屋内施設は北側のみに幅20cm、深さ10～15cm の周壁溝が構築されている。主柱は4本で直径22～40cm、深さ20～30cm を測る。中央に土坑はなく、南側にカマドの痕跡が残る(SX5)。カマドの規模は推定で東西1.0m、南北は0.8m を測る。カマド袖部は東側が残存し中央部に長さ80cm、幅40cm の土坑を伴う。カマド周辺の床面は全体的に硬く、しまりがある。また少量の焼土が確認できた。遺物は出土しなかった。カマド設置住居から考えて5世紀中頃以降の竪穴建物であろう。



第191図　SC9平・断面図(S=1/60)

SX5(カマド)断面(西から)

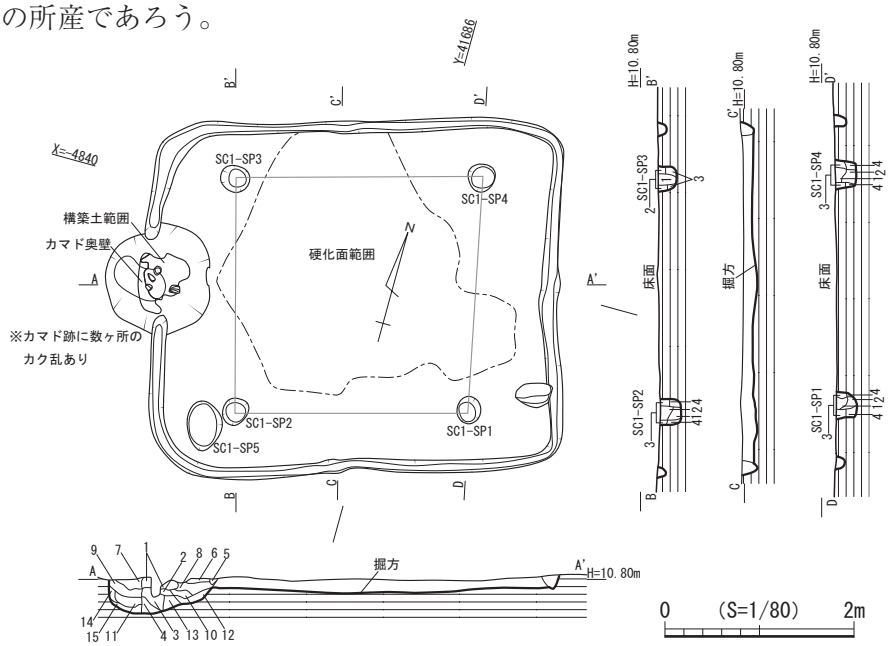
SX5(カマド)完掘状況(西から)

SC9完掘状況(北から)

図版169　SC9遺構状況

③ TAK201405　2区 SC1(竪穴建物)(第192・193図　図版170・171　表97・98)

SC1は2区8268・8468グリッドに位置する。規模は長軸4.34m、短軸3.74m、深さ14cm を測るやや長方形を呈する平面プランである。建物内施設は幅20cm、深さ14cm の周壁溝が全周している。主柱穴は4本で直径24～31cm のやや楕円形を呈する。柱痕は12～16cm を測る。硬化面は中央部から主柱穴の内側まで広がる。カマドは西壁中央に設置されている。残存状況は不良で両袖、焚口等の状況は判然としない。焚口土坑から推定の規模は長軸1.20m、短軸1.0m、深さ37cm 程であろう。カマド内覆土上面から拳大～人頭大の円礫を4点程確認した。この円礫はカマド構築の芯材なのかカマド廃絶時に使用したカマド封じの石なのか定かではない。遺物は弥生式土器、古代の土器、輸入陶磁器等が覆土上面から一部出土したが土師器甕、高杯、土師器小片を中心に古墳時代の遺物が主体をなす。**360**は土師器甕で口縁部～胴部の破片である。くの字口縁を呈し端部は丸い。**361**は土師器椀の口縁部片である。口縁部は直線的で端部はやや尖る。**362**は土師器の高杯脚部片である。脚部は大きく開脚し端部は丸い。**363**は土錘で、長さ3.6cm、幅1.0cm、重さ3.39g を測る。端部が僅かに欠損しているがほぼ完形である。全体に丹塗りを施している。この竪穴建物の時期は高杯脚部片から考えて5世紀後半頃の所産であろう。



SC1-SP1:
1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
白色粒を全体的に 20% ほど含む
焼土をわずかに含む
2. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
焼土をまばらにわずかに含む
細砂粒をわずかに含む
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土～シルト
白色粒をまばらに 10% ほど含む
4. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
細砂粒をわずかに含む

SC1-SP2:
1. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土
上部に白色粒を 20% ほど含む
炭化物をまばらに 3% ほど含む
2. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土
炭化物をわずかに含む
3. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
炭化物をまばらにわずかに含む
上部に白色粒をわずかに含む
4. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
焼土をまばらにわずかに含む
炭化物・細砂粒をわずかに含む

SC1-SP3:
1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
上部～中部に白色粒を 20% ほど含む
黄色粒と白色粒をまだら状に含む
炭化物を 2% ほど含む
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
白色粒をまばらに 5% ほど含む
炭化物をわずかに含む
3. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質土～シルト
細砂粒をわずかに含む

SC1-SP4:
1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
白色粒を全体的に 20% ほど含む
炭化物を 2% ほど含む
2. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
焼土をまばらにわずかに含む
細砂粒をわずかに含む
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土～シルト
白色粒をまばらに 10% ほど含む
炭化物をわずかに含む
4. 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土
焼土をわずかに含む

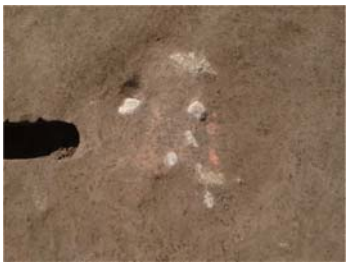
※SC1 内各 SP の各土層いずれも、しまりは強い

1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
粘土塊を 80% ほど含む
下部に焼土を 20% ほど含む
上部は焼け跡で赤みを帯びる
中部～下部には黄色粒と白色粒をまだら状に含む
2. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
焼土をまばらにわずかに含む
マンガンによるシミをわずかに含む
3. 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土～シルト
焼土をまばらに 3% ほど含む
マンガンによるシミをわずかに含む
4. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
焼土をまばらに 2% ほど含む
5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
粘土塊を 50% ほど含む
焼土をまばらにわずかに含む
マンガンによるシミをまばらに 3% ほど含む
6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
粘土塊を 80% ほど含む
マンガンによるシミを 3% ほど含む
7. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土～シルト
黄色粒と白色粒をまだら状に 5% ほど含む
マンガンによるシミを全体的に 5% ほど含む
8. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
焼土をまばらに 3% ほど含む
炭化物をわずかに含む
白色粒を 3% ほど含む
マンガンによるシミを全体的に 3% ほど含む
9. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
マンガンによるシミを 3% ほど含む
10. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土
焼土をまばらに 2% ほど含む
11. 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土～シルト
1cm 大の炭化物を含む
12. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土～シルト
焼土および白色粒をまばらに 2% ほど含む
13. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
焼土をまばらに 3% ほど含む
下部に白色粒を 3% ほど含む
14. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土～シルト
マンガンによるシミを 3% ほど含む
15. 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土～シルト
マンガンによるシミをわずかに含む

第192図　SC1平・断面図(S=1/80)

検出状況（東から）

完掘床面検出状況（東から）


カマド検出状況（北から）

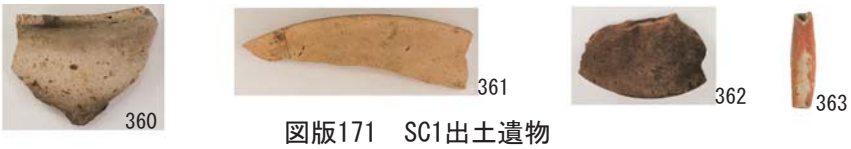
カマド土層断面（東から）

カマド完掘状況（東から）

完掘状況（東から）

図版170　SC1遺構状況

第193図　SC1出土遺物実測図（S=1/3）



図版171　SC1出土遺物

第97表　SC1出土土器観察表

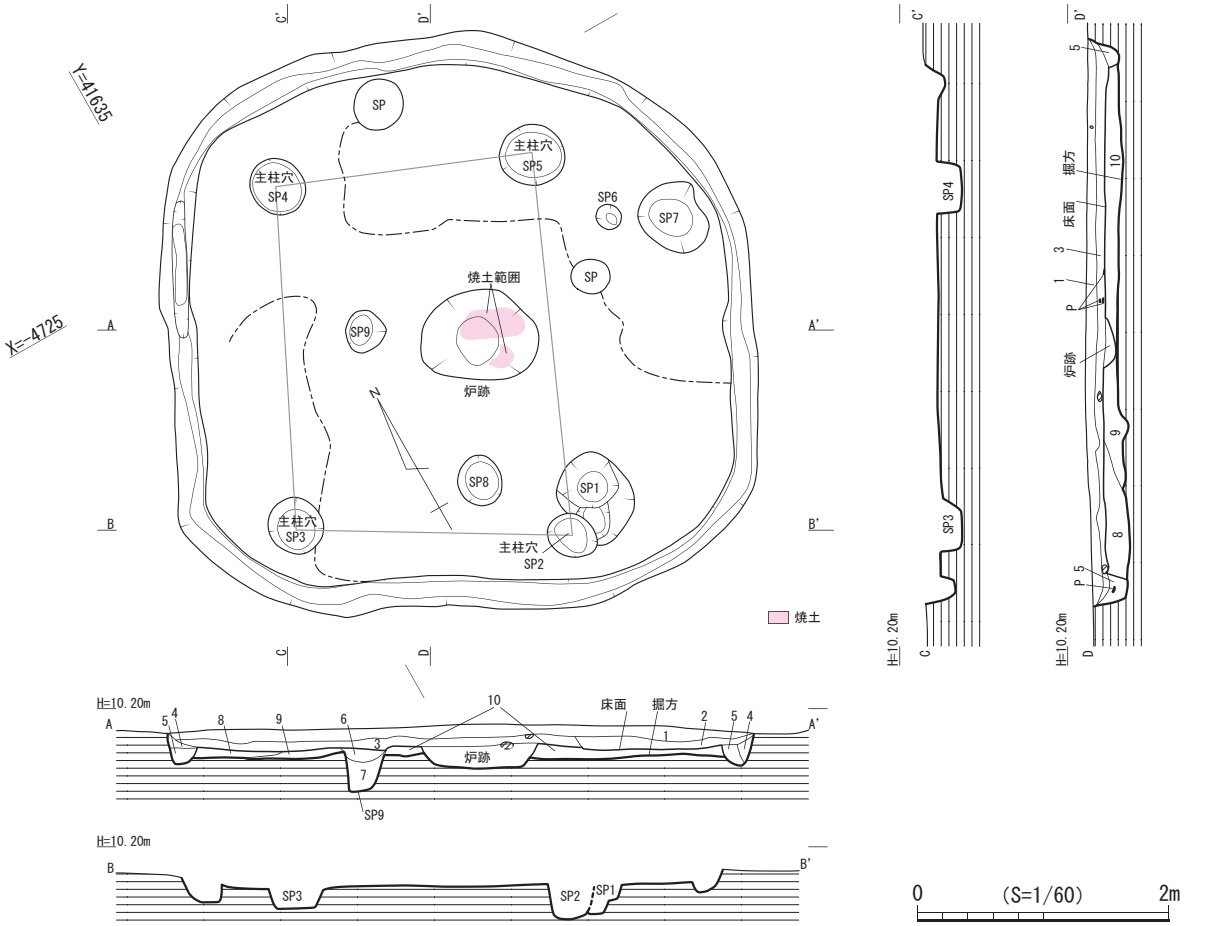
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
360	甕	口縁部～胴部	(12.2)	—	—	ナデ ハケメナデ消し	ナデ ヘラケズリ	2.5Y3/2 黒褐	2.5Y8/1 灰白	良	長石、黒色粒子	
361	椀	口縁部	(11.6)	—	—	ナデ	ナデ	7.5Y8/2 灰白	7.5Y8/1 灰白	良好	黒色粒子 赤色粒子	器壁が薄い
362	高杯	脚部	—	—	(10.8)	ナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	良	長石、雲母 赤色粒子	

第98表　SC1出土土製品（土錘）観察表

遺物番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	色調	焼成	胎土	備考
363	土錘	36.0	10.00	—	3.39	2.5YR5/6　明赤褐	良	赤色粒子、白色粒子	丹塗りあり、端欠けあり

④ TAK201405　6区 SC5（竪穴建物）（第194・195図　図版172・173　表99）

SC5は6区7262グリッドに位置する。平面プランは隅丸方形で規模は長軸4.64m、短軸4.50m、深さ0.18mを測る。周壁溝は全周し幅0.24m、深さ0.26mを測る。主柱は4本でSP2、3、4、5と考えられる。柱は円形及び楕円形で直径は0.40～0.44m、深さ0.16～0.24mを測る。中央に長軸0.90m、短軸0.80m、深さ0.18mを測る炉跡が確認できた。床面（硬化面）は北東側と南西側の一部で確認できた。壁の立ち上がりは床面から10cm程で削平が著しい。遺物は床面及び覆土からの出土である。土師器が中心で一部弥生土器が混入している。須恵器は一点もない。**364～373**までは甕の口縁部片である。口縁部が直線的で外傾するもの**364**、**367**、**368**、**370**、**373**。やや内湾するもの**365**、**371**、**372**。外反するもの**366**がある。**374**は小形丸底壺の口縁部から胴部片で底部は欠損する。口縁端部は細くやや尖る。外面はハケメ調整痕がわずかに残る。**375**、**376**は高杯脚部片である。**376**は外面・開脚部内側まで丹塗りを施している。脚部と開脚部との外面境はなだらかに仕上げるが内面の境は僅かな稜を成す。開脚端部は丸い。高杯、甕の形体から5世紀後半頃であろう。



1. 暗褐色（10YR3/3）砂質土　白・橙色粒を2%含む
細砂粒を多く含む　ややしまり強い土
2. 黒褐色（10YR3/2）砂質土
白・橙色粒及び焼土を僅かに含む
細砂粒を多く含む　ややしまり強い土
3. 黒褐色（10YR3/2）砂質土　白・橙色粒を2%含む
細砂粒を多く含む　5～10cm大の礫を僅かに含む
ややしまり強い土
4. 黒褐色（10YR3/2）砂質土～シルト
白・橙色粒を僅かに含む
細砂粒を多く含む　ややしまり強い土
5. 暗褐色（10YR3/3）砂質土～シルト
白・橙色粒を僅かに含む
細砂粒を多く含む　ややしまり強い土
6. 黒褐色（7.5YR3/2）砂質土～シルト
焼土わずか
白・橙色粒を2%含む
1～2cmの小石3%、細砂粒を多く含む
ややしまり強い土
7. 黒褐色（10YR3/2）砂質土～シルト　橙色粒を3%含む
粗砂粒を多く含む　6より柔らかい土
8. 黒褐色（10YR3/2）砂質土～シルト
黄色粒を僅かに含む　白色粒の塊を3%含む
細砂粒を多く含む　ややしまり強い土
9. 黒褐色（10YR3/2）粘質土　黄色粒を僅かに含む
白色粒の塊を5%含む
細砂粒を多く含む　8より柔らかい土
10. 暗褐色（10YR3/3）粘質土～シルト
白色粒の塊を10%含む
下部に粗砂粒を多く含む　ややしまり強い土

第194図　SC5平・断面図(S=1/60)

検出状況（北から）

床面完掘状況（北から）

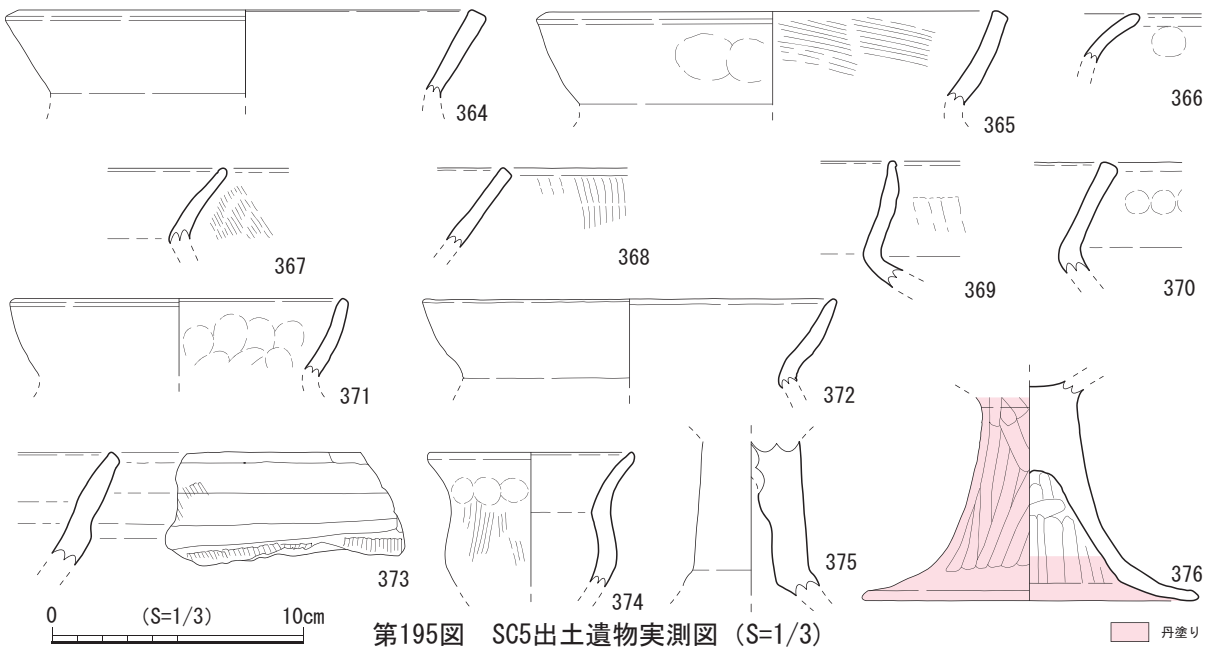
完掘状況（北から）

炉跡半截状況（北から）

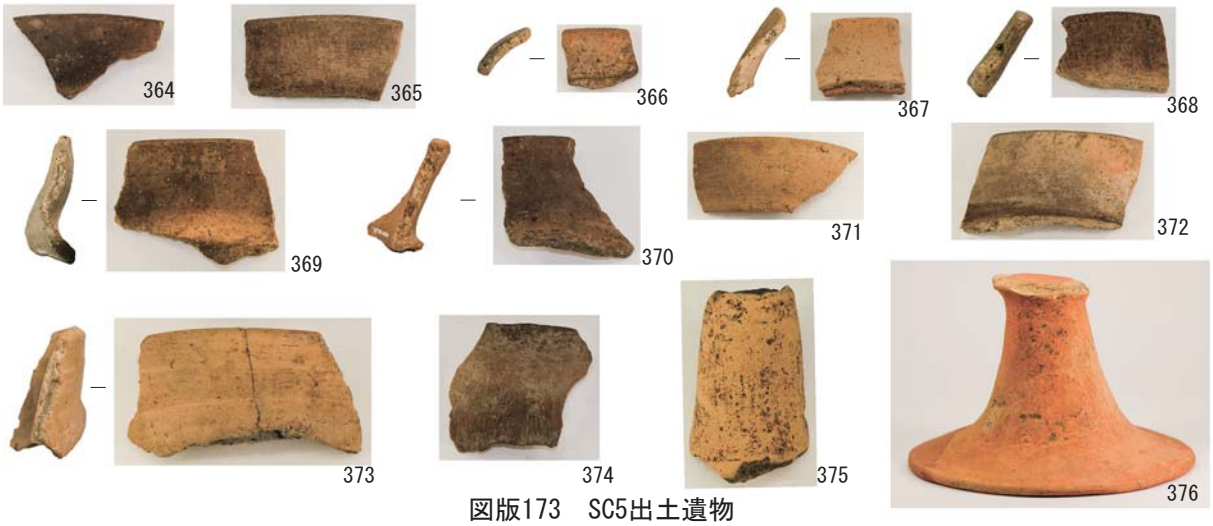
炉使用面完掘状況（北から）

炉跡半截・断面状況（北から）

図版172　SC5遺構状況



第195図　SC5出土遺物実測図（S=1/3）



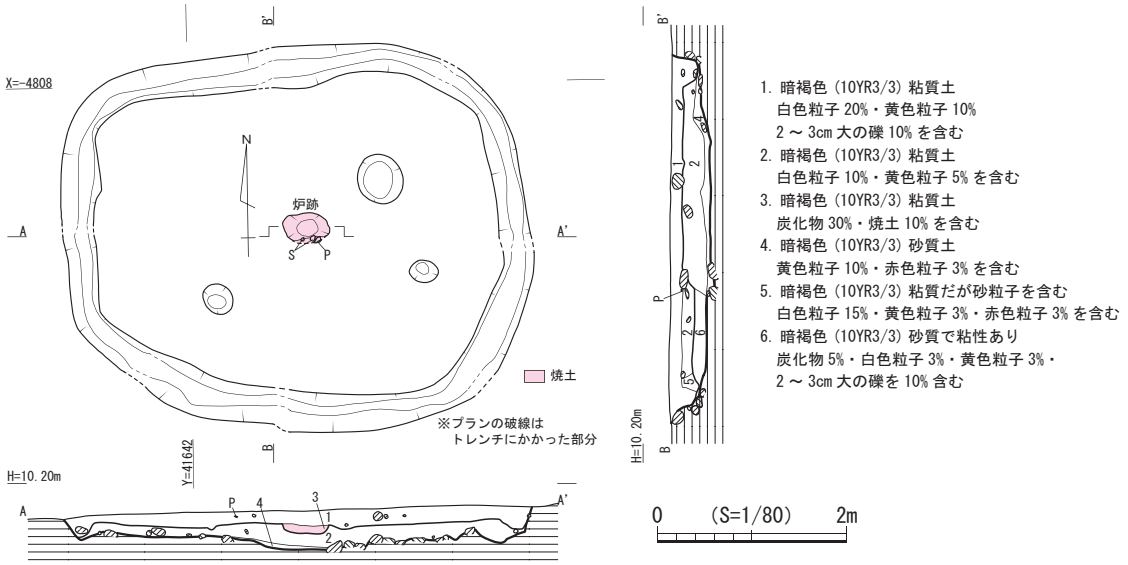
図版173　SC5出土遺物

第99表　SC5出土土器観察表

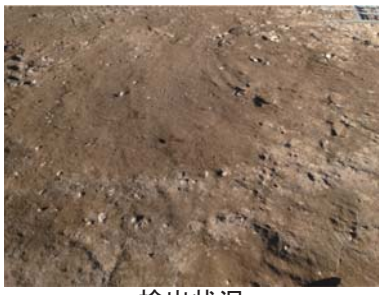
遺物番号	器種	部位	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) 底径	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土	備考
364	甕	口縁部	(18.0)	残存 (3.4)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR7/4 にぶい黄褐	良	長石	
365	甕	口縁部	(18.6)	—	—	ナデ 指オサエ	ハケメ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	
366	甕	口縁部	—	—	—	ナデ 指オサエ	ナデ	5YR7/3 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	良	長石	
367	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ ナデ消し	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石	
368	甕	口縁部	—	残存 (3.1)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	雲母、角閃石 赤色粒子	
369	甕	口縁部	—	—	—	ハケメ ナデ消し	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良	長石、黒色粒子	
370	甕	口縁部	—	—	—	ナデ 指オサエ	ナデ	5YR5/2 灰褐	5YR7/4 にぶい橙	良	長石	
371	甕	口縁部	(13.3)	—	—	ナデ消し	ナデ消し 指オサエ	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/4 にぶい黄橙	良	長石、赤色粒子	
372	甕	口縁部	(16.2)	—	—	ナデ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	良	長石	
373	甕	口縁部	—	残存 (4.4)	—	ナデ 一部ハケメ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良好	石英、長石 褐色粒子	
374	小形 丸底壺	口縁部 ～胴部	(8.0)	残存 (4.8)	—	ハケメ 指オサエ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石、褐色粒子	
375	高杯	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	赤色粒子、雲母	
376	高杯	脚部		残存 (8.6)	(13.2)	ミガキ ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/7 橙	良好	石英、長石 褐色粒子	外面・内面一部丹塗りあり

⑤ TAK201405　4区 SC6(竪穴建物)(第196・197図　図版174・175　表100)

SC6は4区8064グリッドに位置する。平面プランは楕円形で規模は中心長軸(東西)4.96m、中心短軸(南北)4.04m、深さ0.18m を測る。周壁溝は全周し幅0.24m～0.30m、深さ0.10m～0.16m を測る。中央に長軸0.50m、短軸0.30m、深さ0.18m の楕円形の炉跡が位置する。柱穴は SP1～3を確認した。規模は0.24m～0.54m を測る円形、楕円形のプランを呈する。遺物は覆土及び柱穴から出土した。**377**は甑の口縁部から胴部片である。口縁部は短く反り端部は丸い。内面は横方向のケズリ痕が残る。内外面はかなりの被熱を受けている。**378**、**379**は甕の口縁部片である。口縁部は外反し、端部は丸い。**380**は甑の把手で牛角状を呈する。形状及び胎土の状況から一対の把手と思われる。



第196図　SC6平・断面図(S=1/80)

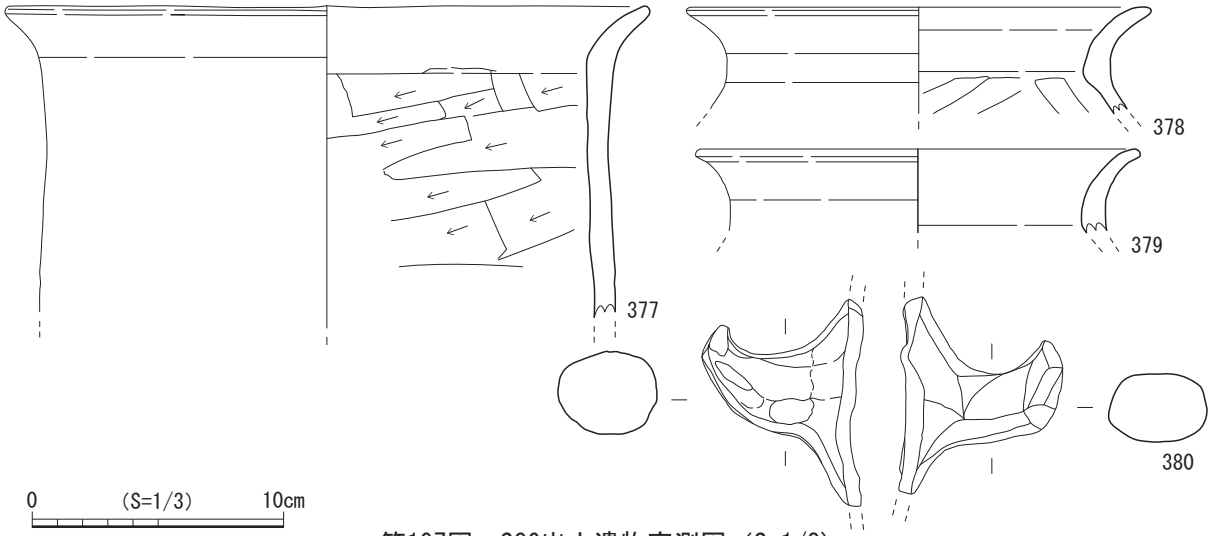


検出状況

炉半截状況(南から)

床面完掘状況(南から)

図版174　SC6遺構状況



第197図　SC6出土遺物実測図 (S=1/3)

図版175　SC6出土遺物

第100表　SC6出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
377	甑	口縁部～胴部	(25.1)	残存(12.7)	—	ナデ	横方向のケズリ	5YR7/4 橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良	石英、角閃石 長石、雲母	
378	甕	口縁部	(16.6)	残存(4.0)	—	ナデ	ナデ ヘラケズリ	2.5YR5/3 にぶい赤褐	2.5YR7/6 橙	良好	長石、石英	
379	甕	口縁部	(17.2)	残存(3.3)	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	雲母、黒色粒子 長石、赤色粒子	
380	甑	把手	—	—	—	ナデ	ナデ 指オサエ	7.5YR4/2 灰褐	5YR6/4 にぶい橙	良	銀雲母、長石 赤色粒子	一対の把手の右側
	甑	把手	—	—	—	ナデ	ナデ 指オサエ	5YR6/3 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	良	銀雲母、長石 赤色粒子	一対の把手の左側

⑥ TAK201406　2区 SC1(竪穴建物)(第198・199図　図版176・177　表101)

SC1は2区6850・7050グリッドに位置し、SC9を切っている。規模は長軸5.40m、短軸5.24m、深さ26cmを測る正方形を呈する平面プランである。北壁中央にカマドを設置している。カマドの構造は両壁に円礫を使用し構築している。残存状況は良くない。主柱穴は4本と考えられるが3本を確認した。中央部は試掘坑(TP16)によって破壊されているため硬化面はあまり残っていない。周溝は確認出来なかった。遺物は須恵器杯身、杯蓋、模倣杯身、坏蓋、土師器甕口縁部片等が出土した。**381～383**は土師器甕の口縁部～胴部片である。**381**は口縁部が外湾し端部は丸い。**384～386**は土師器壺口縁部～底部片である。いずれも口縁部は緩やかに外湾し端部は丸い。**384**はほぼ完形である。**387～389**は杯蓋である。**387**はほぼ完形の模倣坏蓋である。口縁端部はやや尖り僅かに短く外湾する。全体的に丁

検出状況（北から）

遺物出土及び床面検出状況(北から)

遺物出土状況（北から）

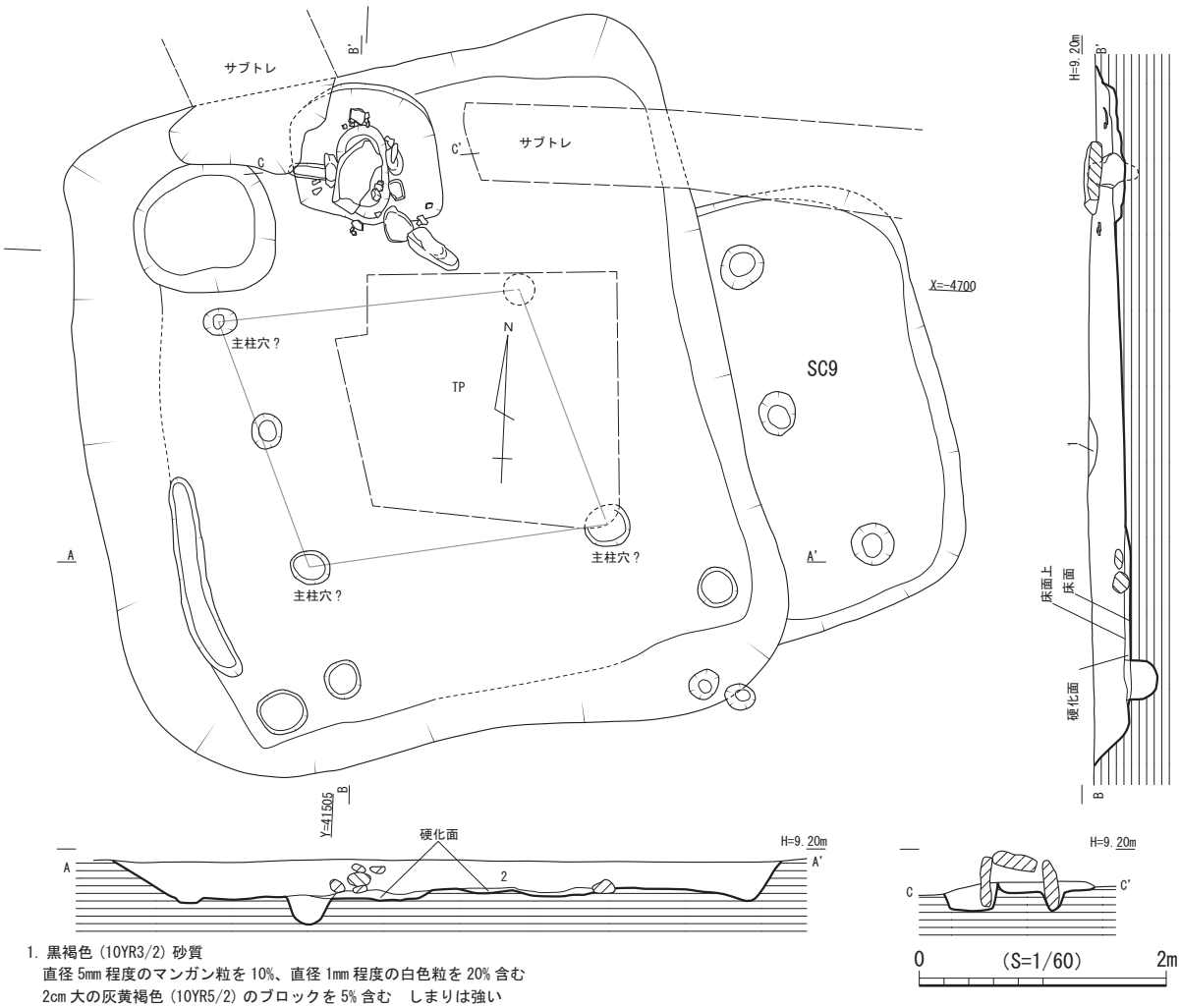
SL1 遺物出土状況（北から）

SL1 掘下状況（北から）

完掘状況（北から）

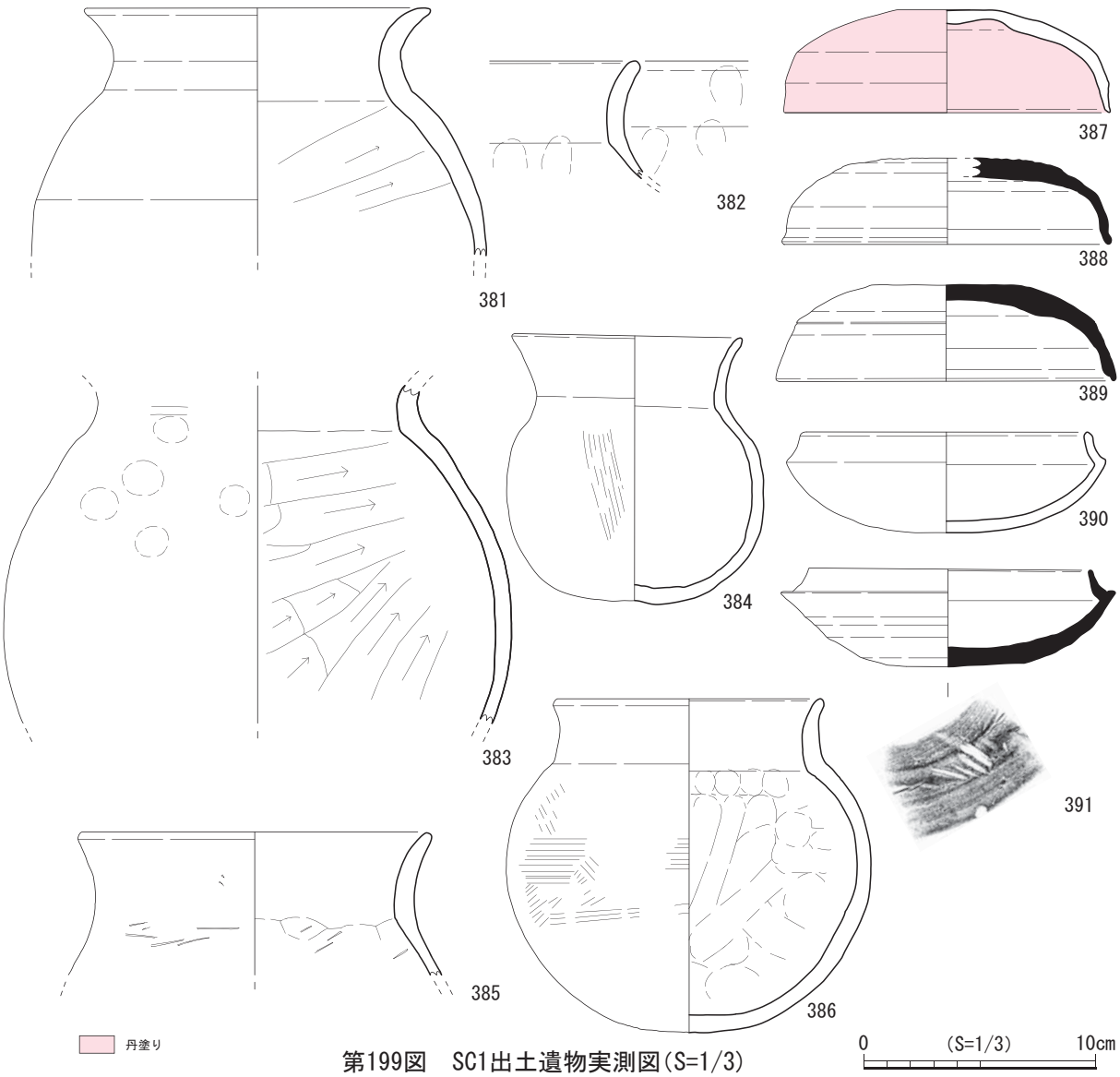
図版176　SC1遺構状況

寧な作りである。390、391は杯身である。390は模倣杯身でほぼ完形である。391は須恵器杯身でほぼ完形である。出土遺物から時期を考えると6世紀第3四半期頃であろう。



1. 黒褐色（10YR3/2）砂質
直径 5mm 程度のマンガン粒を 10%、直径 1mm 程度の白色粒を 20% 含む
2cm 大の灰黄褐色（10YR5/2）のブロックを 5% 含む　しまりは強い
2. 暗褐色（10YR3/3）砂質
直径 1 ～ 2cm 程度のマンガン粒を 20%（特に上部に多い）及び 1mm 程度の白色粒を 10% 含む
2cm 大の灰黄褐色土（10YR5/2）を 5% 及び 1cm 大のにぶい黄褐色土（10YR5/4）のブロックを 10% 含む
直径 1 ～ 10cm 大の礫を 5% 含む　しまりは強い

第198図　SC1平・断面図(S=1/60)



第199図　SC1出土遺物実測図(S=1/3)

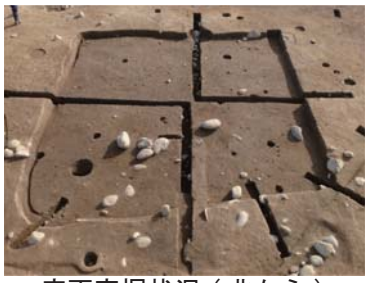
図版177　SC1出土遺物

第101表　SC1出土土器観察表

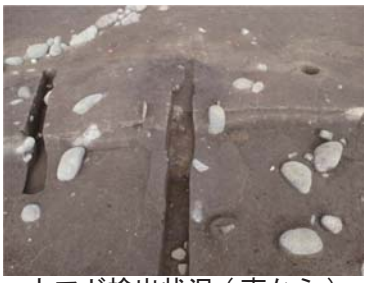
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
381	甕	口縁部～胴部	(7.5)	残存(10.6)	—	ヘラケズリ 指オサエ	ナデ ヘラケズリ	2.5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤橙	良	長石、銀雲母 赤色粒子	
382	甕	口縁部	—	—	—	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	良	石英、長石、雲母 赤色粒子	
383	甕	頸部～胴部	—	残存(14.5)	—	ナデ 指オサエ	ヘラケズリ	2.5YR5/4 にぶい赤褐	5YR7/3 にぶい橙	良	長石、石英	胴部径(21.7)cm 煮沸甕か？
384	小型壺	接合 ほぼ完形	9.7	—	—	ハケメ ナデ消し	ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	長石、石英 角閃石	丸底
385	壺	口縁部	—	—	—	ナデ ヘラケズリ	ナデ ヘラケズリ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR7/6 浅黄橙	良	雲母、赤色粒子	
386	壺	口縁部～底部	(11.2)	14.3	—	ハケメ後ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石、赤色粒子	胴部径(21.7)cm
387	杯蓋	完形	14.0	4.4	—	ナデ	ナデ	10YR8/8 黄橙	10YR8/8 黄橙	良好	赤色粒子	内外面に薄く丹塗り残る 模倣杯
388	杯蓋	口縁部～天井部	(14.0)	—	—	ナデ	ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	良	長石	
389	杯蓋	口縁部～天井部	(14.6)	残存(4.1)	—	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰白	N6/ 灰白	良	長石、赤色粒子	
390	杯身	ほぼ完形	12.0	4.3	—	ミガキ	ミガキ	10YR7/1 灰白	10YR2/2 黒褐	良	長石、石英	模倣杯
391	杯身	完形	12.2	4.2	—	回転ナデ 回転ヘラケズリ	工具によるナデ	5Y5/1 灰	7.5YR7/2 明褐灰	良	長石	6世紀後半

⑦ TAK201406　2区 SC2(竪穴建物)(第200・201図　図版178・179　表102・103)

SC2は2区7052グリッドに位置する。SC7との切り合い関係からSC2が新しく構築された竪穴建物である。規模は長軸6.6m、短軸5.3m、深さ0.38mを測る長方形の平面プランを呈する。主柱穴は4本で直径50～60cm、深さ42～60cmを測る。周壁溝は西側と南東側だけに構築されている。カマドは北壁中央に構築されている。両袖石は一部残っており、カマド内の80×50cmの範囲に炭化物を多く含む。またその上には土器片が多く散乱していた。両袖石周辺では人頭大、拳大の円礫が散乱していたことからカマドの構築芯材として利用していたものであろう。竪穴建物中央には60×60cmの不整形の焼土が位置する。硬化面はほぼ全面で検出した。遺物は覆土及び床面から検出した。**392**、**393**は甕の口縁部～胴部片である。**392**は口縁部が外湾し端部は丸い。外面はナデ、内面はケズリを施している。**394～396**は須恵器杯蓋である。**394**は1/3程の破片でやや軟質である。天井部は厚く体部と口縁部の間に僅かな稜を施す。口縁部は緩やかに内湾し端部はやや尖る。**395**は須恵器で1/4程の破片である。天井部は平たく体部と口縁部の境は稜をなす。口縁部は僅かに斜め方向で端部は内側に斜め稜線を施しやや尖る。**396**は須恵器で1/3程の破片である。天井部は平らで口縁部との境に僅かな稜をなす。口縁部はやや斜め方向に開き端部は方形である。**397**、**398**は須恵器杯身の破片である。**397**はたちあがりが1.6cmとやや長い。**398**はたちあがりが1.2cmである。いずれも口縁端部は尖り気味である。**399**は土師器の甑片である。口縁部～胴部片で把手は欠損する。復元口径26cm程で外面はハケメ調整、内面は縦、斜め方向にケズリを施す。**400**、**401**は移動式竈の破片である。部位は焚口裾部の一部であろう。**402**は扁平打製石斧で基部が欠損する。石材は安山岩である。出土遺物の須恵器杯身、杯蓋から時期を考えてみると6世紀第2四半期～第3四半期頃の所産であろう。


床面完掘状況（北から）

掘方完掘状況（北から）

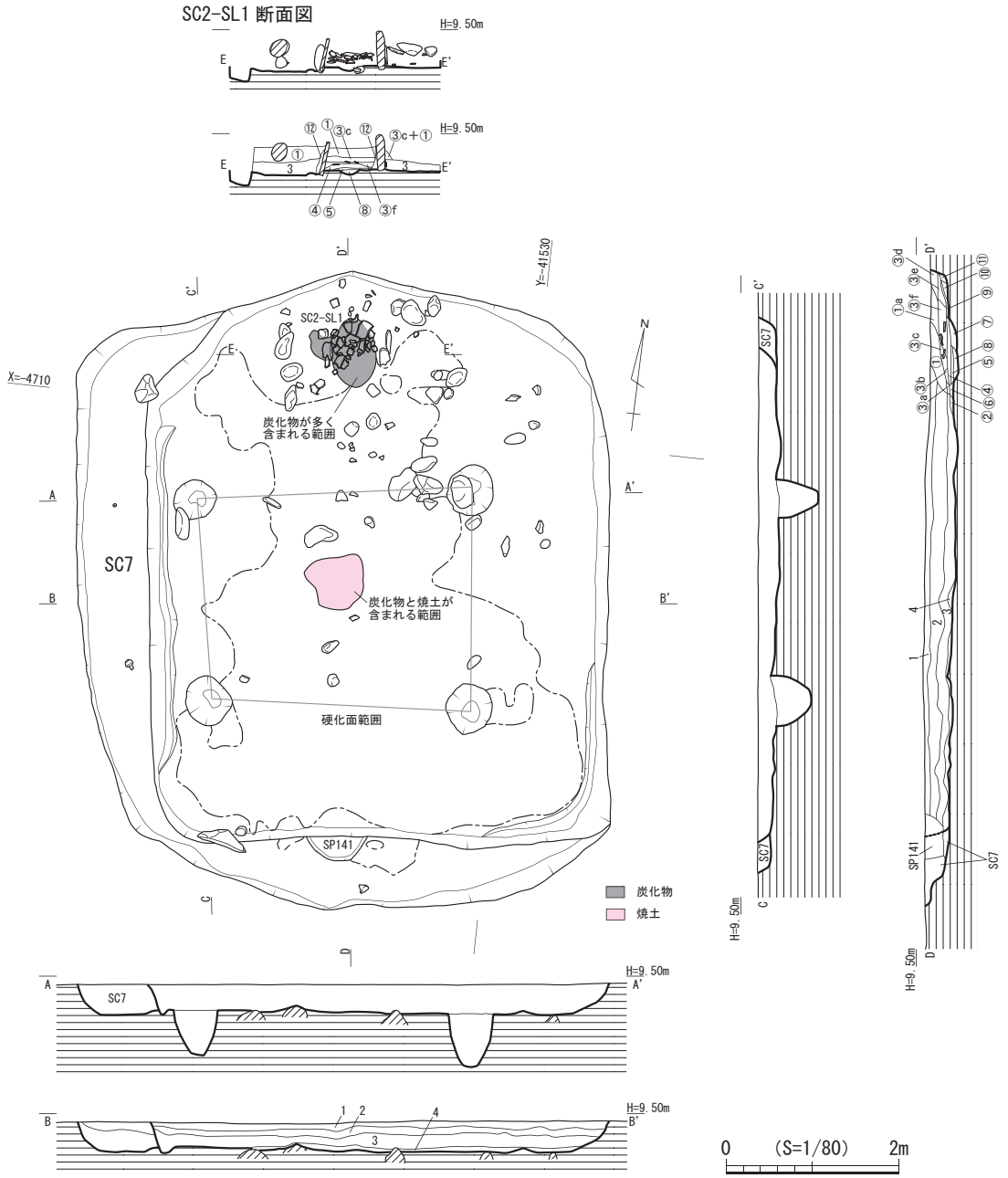

カマド検出状況（南から）

カマド断面状況（東から）

遺物出土状況（南から）

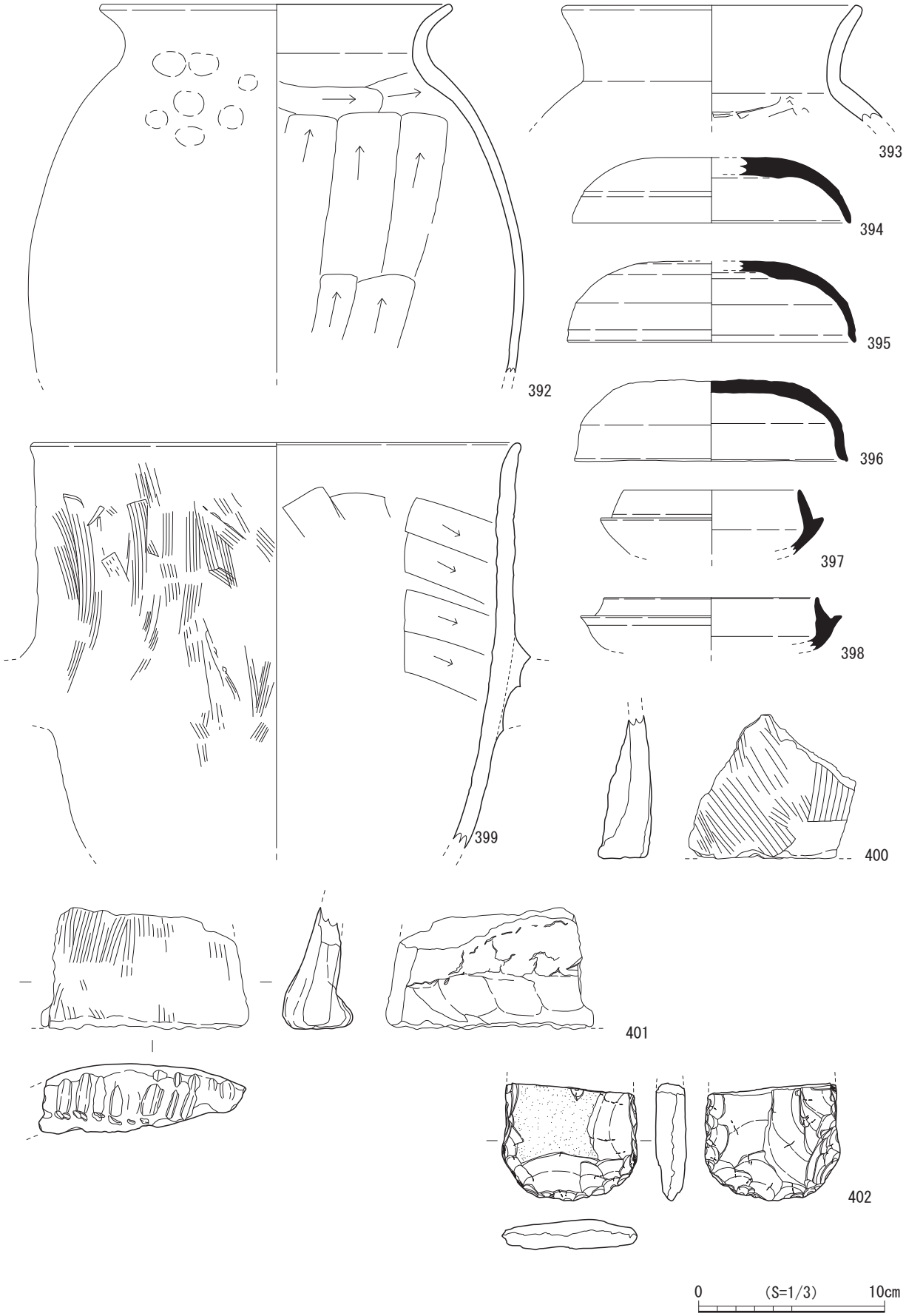
カマド内焼土（南から）

図版178　SC2遺構状況



1. 暗褐色（10YR3/3） 細粒砂質土 ややしまりあり
マンガン粒 1%, 白色粒 3%, 黄色粒 2% 含む
にじむようなブロック状ににぶい黄褐色（10YR4/3 シルト質 粘性あり）が 7% 混じる
径 2mm ほどの焼土 2%, 1cm ほどの炭化物 1% が混じる
2. 暗褐色（10YR3/3）細粒砂質土 ややしまりあり
マンガン粒 7%, 白色粒 1%, 黄色粒 1% 含む
ブロック状ににぶい黄褐色（10YR4/3 シルト質 粘性あり）が 3% 混じる
1mm ほどの焼土 2%, にじむようなブロック状に炭化物 3% が入る
マンガンは中心部に集中
3. 黒褐色（10YR3/2）細粒砂質土 ややしまりあり
マンガン粒 3% 含む
ブロック状ににぶい黄褐色（10YR4/3 シルト質 粘性あり）が 2% 混じる
下面に硬化面あり
4. にぶい黄褐色（10YR4/3） シルト質 粘性あり
鉄分の沈着が見られ，非常に強いしまりがある（硬化面）
①. 黒褐色（10YR3/2）粘質土 しまり・粘性大
1cm 大の暗赤褐色粒（5YR3/6）を 5 ～ 10%（焼土か ?），
0.5cm 大のマンガン粒を 10%, 白色粒を 7 ～ 10%, 0.1 ～ 1cm 大の礫を 5 ～ 10%,
3 ～ 5cm 大の礫を 3%, 1 ～ 5cm 大の黒褐色（10YR3/2 シルト土）ブロックを 15 ～ 20%
※おそらく土層 3 に近いが、SL1 付近にあるため、焼土などを多く含む
①a. 黒褐色（10YR2/2）粘性シルト しまり・粘性大
0.5cm 大の暗赤褐色粒（5YR3/6）を 10%, 0.5cm 大のマンガン粒を 10 ～ 15%,
白色粒を 5%, 3 ～ 5cm 大の礫を 3% 含む ①より粘性弱い
②. 黒（10YR2/1）粘質土 しまり・粘性大 ①より粘性強い
0.5 ～ 1cm 大の焼土粒を 5 ～ 10%, 0.5cm 大のマンガン粒を 3 ～ 5%,
0.5cm 大の暗赤褐色粒を 3 ～ 5%, 白色粒を 2%,
1 ～ 5cm 大の灰黄褐色ブロック（シルト土）を 10%, 炭化物を 1 ～ 2%, 土器片あり
下面に硬化面あり
③a. 黒褐色（10YR3/2）粘性シルト しまり・粘性大
0.5cm 大の焼土を 5%, 0.5cm 大の④のブロックを 5 ～ 10%, 白色粒を 7%,
極細砂を 5% 含む マンガン無し
③b. ③a よりも粘性強い 細砂を 5%, 0.5cm 大の焼土を 10%, 白色粒を 7%,
0.5cm 大のマンガンを 3 ～ 5%, 0.5cm 大の④のブロックを 5% 含む
③c. ③a に似るが、①が入り込む ③a より粘性弱い
0.5cm 大のマンガン粒を 10%, 0.5cm 大の④のブロックを 5%, 白色粒を 5%,
しまり大 0.3 ～ 0.5cm の焼土粒を 10% 含む
③d. 黒褐色（7.5YR2/2）粘性シルト土 しまり・粘性大
0.1 ～ 1cm 大の礫を 5 ～ 7%, 0.5cm 大の焼土を 5%,
0.5cm 大の④のブロックを 5%, 0.5cm 大のマンガン粒を 5% 含む
③e. ③d より粘性大 0.1 ～ 0.5cm の焼土を 1 ～ 2%,
0.1 ～ 0.5cm の④のブロックを 3 ～ 5%, 極細砂粒を 5%,
0.5cm 大のマンガン粒を 3%, 白色粒を 3% 含む
③f. ③e より粘性大 1cm 大の礫を 2%, 土器片あり
④. にぶい黄橙（10YR7/2）シルト質 しまり大 粘性とても強い
1 ～ 2cm 大の③a のブロックを 15 ～ 20%, 焼土を 10% 含む
⑤. 赤褐色（5YR4/6）シルト質 しまり・粘性大
1 ～ 3cm 大の④のブロックを 10%, 1 ～ 2cm 大の③a のブロックを 3 ～ 5% 含む
下面に硬化面存在（火床の可能性大）
⑥. 黒褐色（5YR3/1）細砂を 10% 含むシルト土 しまり・粘性大
炭化物を 10%, 焼土を 5 ～ 10%, 1 ～ 3cm 大の⑤のブロックを 10 ～ 15% 含む
下面に硬化面が存在
⑦. 暗赤褐色（5YR3/3）極細・細砂を 10% 含むシルト土 しまり・粘性大
1 ～ 2cm 大の④･⑤のブロックを各々 5 ～ 10%,
上面に 0.5cm 大のマンガン粒を 5 ～ 10% 含む
⑧. ④＋⑤＋⑥。暗赤褐色（5YR3/3）砂質土 中砂メイン マンガンなし
④の 0.5cm 大のブロックを 20%, ⑤の 0.5cm 大のブロックを 50%, 炭化物を 1% 含む
上面に硬化面あり 下面は SL1 の掘方の下面になる
⑨. ⑤と⑦が均等に混ざり、③e のブロックが 20% 混入
⑩. 黒（10YR2/1）シルト土 しまり・粘性大 炭化物を 5 ～ 10%,
④の 0.5cm 大のブロックを 3 ～ 5%, ⑤の 0.5cm 大のブロックを 2%, 0.5cm の焼土を 10%
⑪. ⑦と⑩が混ざったもの。黒褐色（10YR3/2）砂質土
⑫. 黒褐色（10YR2/2）粘性シルト土 しまり中・粘性大
他の土よりも粘性を若干強く感じる
0.5cm 大の灰黄褐粒（10YR4/2）を 5 ～ 10%, 白色粒を 1%, マンガン粒を 1%,
0.5cm 大の黄褐色粒（10YR5/6）を 5 ～ 10% 含む

第200図　SC2平・断面図(S=1/80)



第201図　SC2出土遺物実測図

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

図版179　SC2出土遺物

第102表　SC2出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
392	甕	口縁部～胴部	(18.2)	残存(19.7)	—	ナデ 指オサエ	ナデ ケズリ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石	
393	甕	口縁部	(15.4)	残存(6.2)	—	ナデ	ナデ	10YR6/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	良	長石	
394	杯蓋	口縁部～天井部	(15.0)	残存(3.5)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 灰白	7.5YR7/2 灰白	良	長石	焼成不足
395	杯蓋	口縁部～天井部	(15.4)	残存(4.3)	—	ナデ	ナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	良	黒色粒子、赤色粒子 白色粒子、長石	
396	杯蓋	口縁部～天井部	(15.3)	残存(4.4)	—	ナデ	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石、雲母	
397	杯身	口縁部～体部	(9.3)	残存(9.5)	—	ナデ	ナデ ヘラケズリ	5B5/1 青灰	5B6/1 青灰	良	長石	
398	杯身	口縁部～体部	(11.8)	残存(2.8)	—	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	7.5Y6/1 灰	良	灰色粒子	
399	甑	口縁部～胴部	(26.0)	残存(21.7)	—	ハケメナデ消し	ヘラケズリ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良好	石英	把手欠損
400	移動式竈	脚部 裾部片	—	残存(7.6)	—	ハケメ	ナデ	N4/ 灰	7.5YR7/3 にぶい橙	良	結晶片岩、長石	
401	移動式竈	脚部 裾部片	—	残存(6.5)	—	ナデ 指オサエ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、石英	

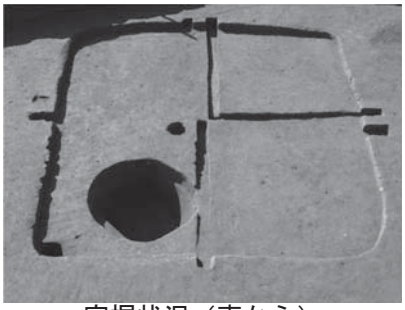
第103表　SC2出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
402	扁平打製石斧	安山岩	6.28+	7.2	1.65	99.14+	基部欠損

⑧ TAK201406　2区 SC3(竪穴建物)(第202図　図版180)

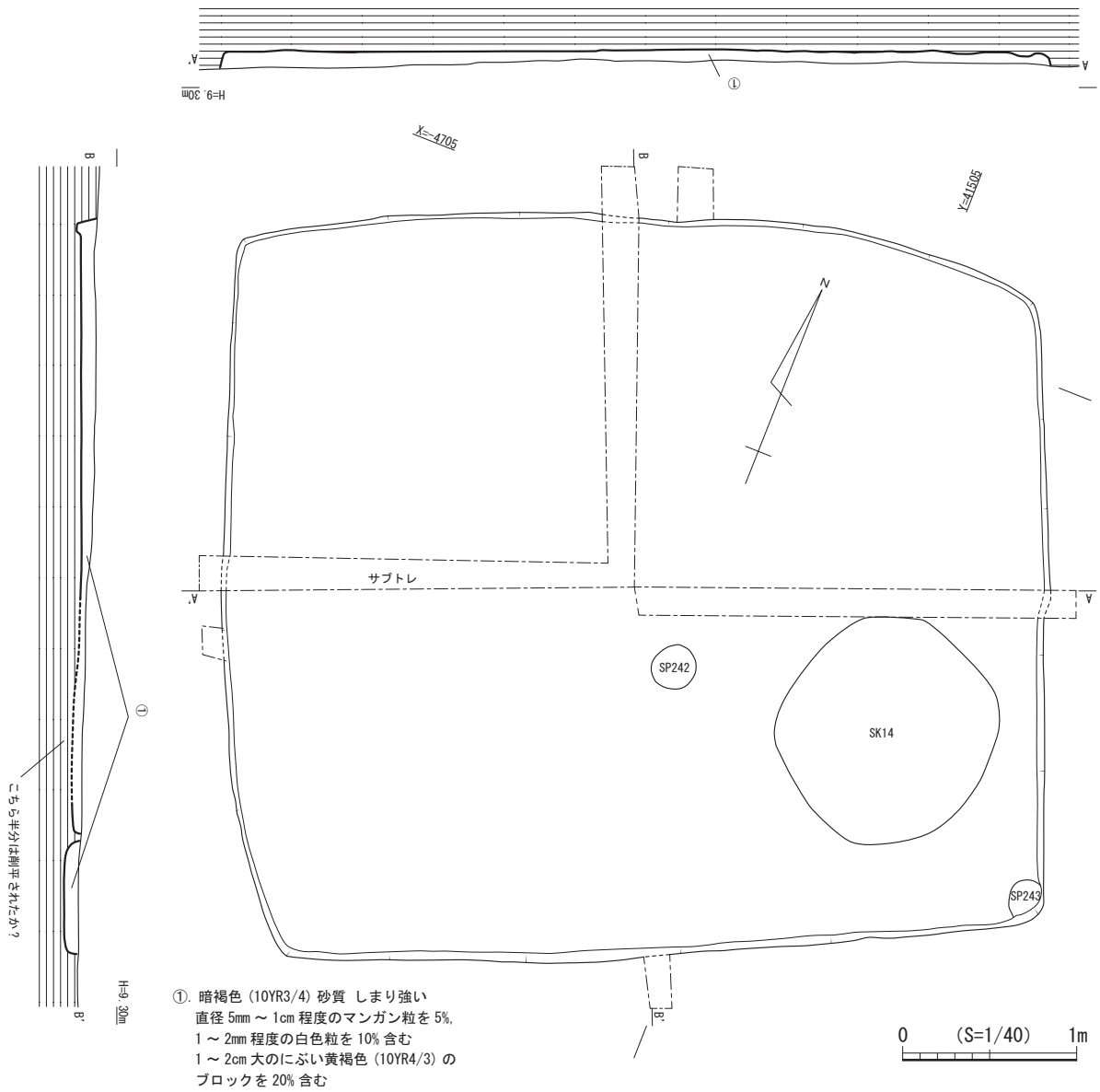
SC3は2区7050グリッド内でSC1の南側に位置する。規模は中心で長軸4.78m、短軸4.30m、深さ8～13cm程のほぼ正方形の平面プランを呈する。竪穴内施設は中央付近に直径24cm程の柱穴が2個あるだけでその他の施設は見当たらない。遺物は僅かで覆土から弥生式土器と土師器が出土した。全てが破片で実測に耐えられる破片は3点で弥生式土器の三角凸帯を有する壺胴部片である。土師器は胴部の破片及び小細片のため実測は不可能である。周辺の竪穴建物の構築状況から考えてみるとSC1、SC4、SC8と隣接する。この3軒の竪穴建物の規模に比べるとSC3は一回り小さい建物である。また屋内施設は柱穴2個だけでその他は検出できなかった。こうしたことから居住の場所ではなく、作業場的な様相を呈するものと思われる。隣接する竪穴建物との平面プラン及び構築規模から古墳時代の遺構と判断した。

検出状況（東から）



完掘状況（東から）

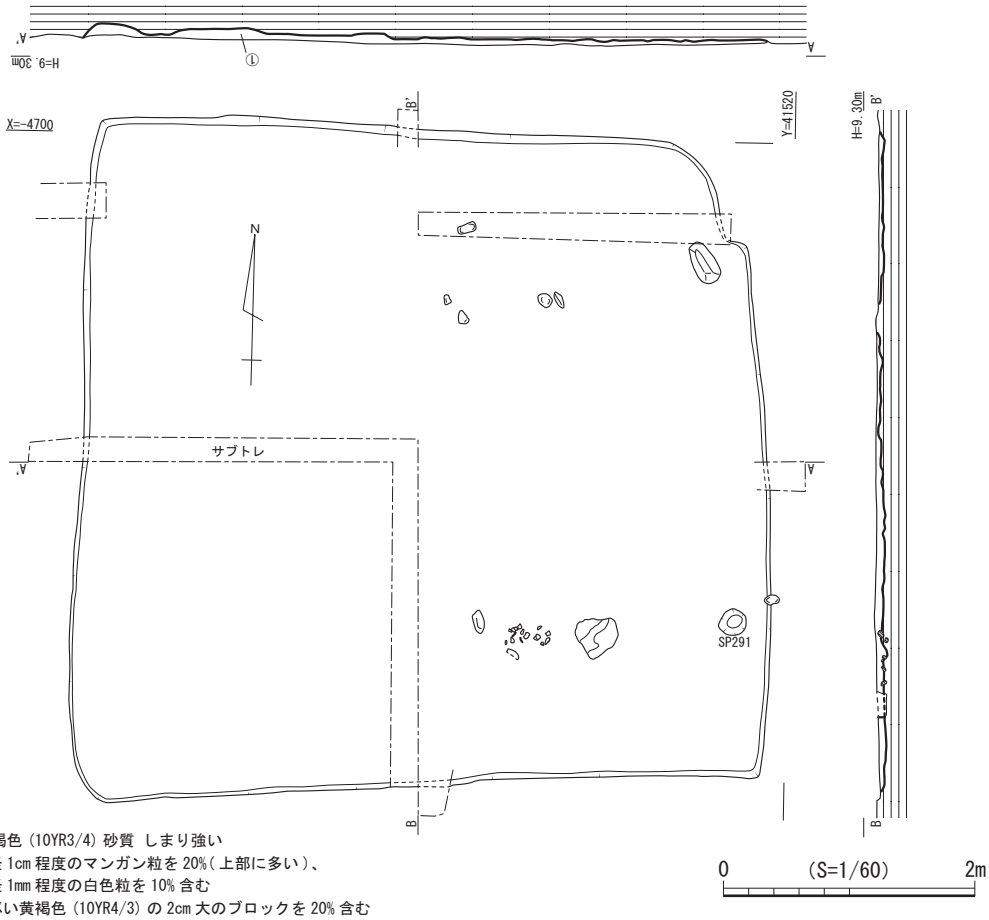
図版180　SC3遺構状況



第202図　SC3平・断面図(S=1/40)

⑨ TAK201406　2区 SC4(竪穴建物)(第203・204図　図版181・182　表104)

SC4は2区6850、7050グリッドに位置する。規模は中心で長軸5.4m、短軸で5.3m を測る正方形の平面プランを呈する。深さは3～8cm と浅くかなり削平を受けている。建物南側で土器小片の出土を見た。建物屋内の施設として柱穴、溝、土坑等はない。SC3と屋内の状況は類似する。こうしたことから考えて居住の場ではなく、作業場等の建物であろうか。出土遺物は覆土から破片が出土した。**403**は甕の口縁部片である。口縁部は外湾し端部は丸い。時期は6世紀第3四半期頃であろうか。



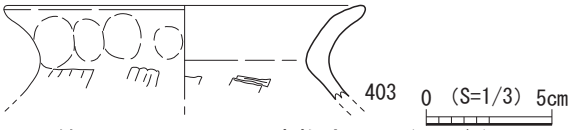
①. 暗褐色（10YR3/4）砂質 しまり強い
直径 1cm 程度のマンガン粒を 20%（上部に多い）、
直径 1mm 程度の白色粒を 10% 含む
にぶい黄褐色（10YR4/3）の 2cm 大のブロックを 20% 含む
（集中はせず、広く散らばる）

第203図　SC4平・断面図(S=1/60)

検出状況（北から）

完掘状況（北から）

図版181　SC4遺構状況



第204図　SC4出土遺物実測図(S=1/3)

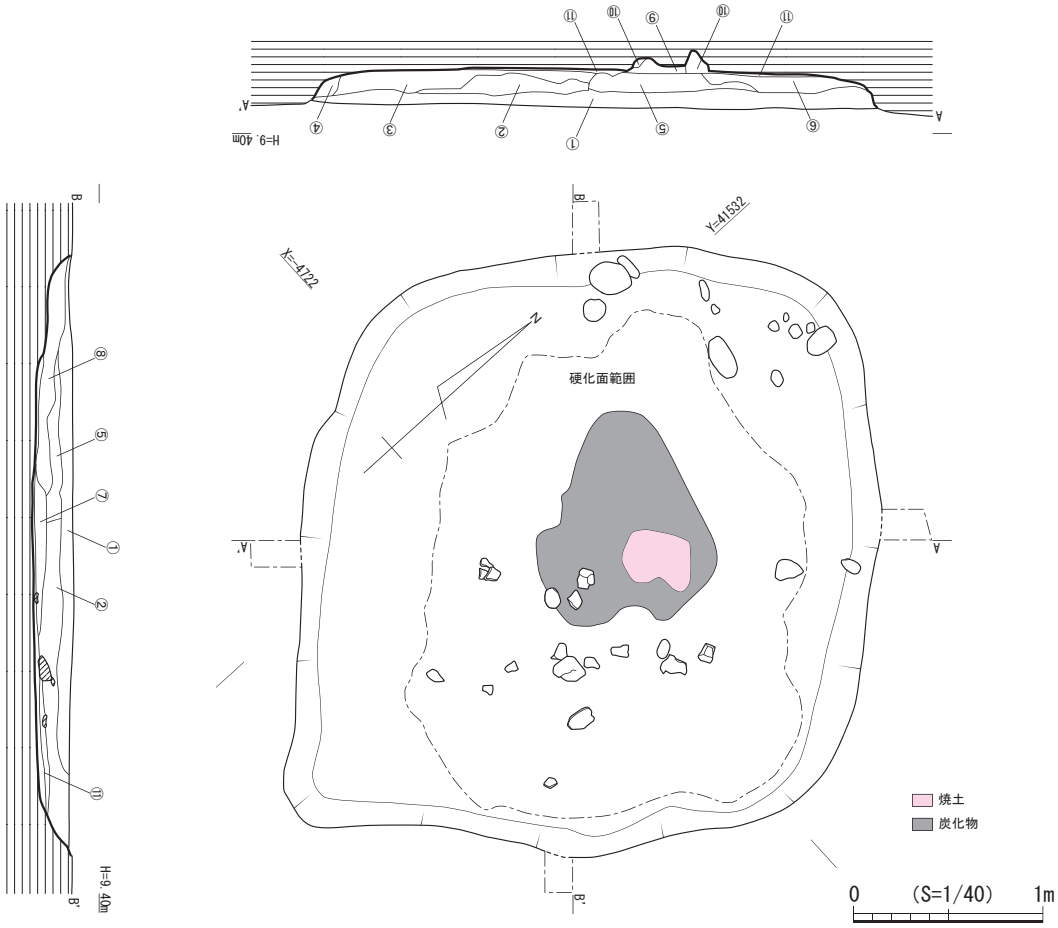
図版182　SC4出土遺物

第104表　SC4出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
403	甕	口縁部	(14.0)	残存(3.7)	—	ナデ 指オサエ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、石英 角閃石	

⑩ TAK201406　2区 SC5(竪穴建物)(第205・206図　図版183・184　表105)

SC5は2区7052・7252グリッドに位置する。規模は長軸3.2m、短軸3.06m、深さ20cm を測るほぼ正方形の平面プランを呈する。中央付近に30cm×24cm 程の広さで焼土を確認した。更に1m×1.1m の不整形プランで炭の堆積を確認した。硬化面は長軸2.6m、短軸2.0m の不整形の範囲で確認した。土器は散発的な出土で破片が多い。柱穴は確認出来なかった。遺物は覆土及び床面付近から出土した。**404**、**405**は土師器甕の口縁部～胴部片である。いずれもくの字口縁を呈し、端部はやや丸い。**404**は外面全体に被熱を受けている。胎土は多くの砂粒を含み粗い作りである。**406**は須恵器つまみ付の蓋である。1/4程が残存し口縁部、体部が不明で全体の様相は判然としない。土師器は5世紀代、須恵器は8世紀代であるが周囲の状況から SC5の時期は6世紀第3時半期～第4四半期頃であろう。



①. 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 しまり・粘性大
0.3 ～ 0.5cm 大のマンガン粒を 10%, 白色粒を 10 ～ 15%,
0.1 ～ 3cm 大の灰黄褐色土 (10YR4/2 砂質) ブロックを 3 ～ 5% 含む
②. ①より砂質増える 粘質土 しまり・粘性大
0.1 ～ 3cm 大の灰黄褐色の砂質ブロックを 5 ～ 10%,
マンガン粒を 7%, 3 ～ 15cm 大の礫を 5% 含む　土器片あり
③. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 しまり・粘性大
②よりも小礫 (1 ～ 5cm 大) が増加し 10%, 0.5cm 大のマンガン粒を 15%,
白色粒を 5%, 0.5 ～ 3cm 大の灰黄褐色砂質土を 5 ～ 7% 含む
④. ③よりも粘性増す 砂質土 しまり・粘性大 色は③と同じ
⑤. ③よりも粘性増す 粘質土 しまり・粘性大
1 ～ 5cm 大の礫を 5%, マンガン粒を 10%, 焼土や炭化物が 5%(下面に多い)
灰黄褐色砂質ブロックを 5 ～ 7%, 白色粒 5% 含む
⑥. ⑤よりも粘性増す 砂質土 しまり大・粘性中
マンガン粒を 5 ～ 10%, 灰黄褐色ブロックを 15 ～ 20%,
白色粒を 10%, 1 ～ 5cm 大の礫を 1% 含む
⑦. 粘質土　⑤よりも炭 (0.5 ～ 3cm 大) が増加し、10 ～ 15% 含む
白色粒も 15% に増加し , マンガン粒 5%, 白色粒 10%,
0.5 ～ 1cm 大の灰黄褐色砂質粒を 7% 含む
⑧. ⑦より砂質増加 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘性の強い砂質土
炭化物 (0.5 ～ 3cm 大)10%, マンガン粒を 10 ～ 15%, 白色粒を 15%,
0.5 ～ 1cm 大の灰黄褐色砂質ブロックを 5%, 0.1 ～ 1cm 大の礫を 5% 含む
⑨. 焼土 赤褐色 (5YR4/8)
⑩. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質 (目が細かい)
直径 0.1cm 程度の白色粒 2%, 0.1 ～ 1cm 程度の礫 1% を含む

第205図　SC5平・断面図(S=1/40)

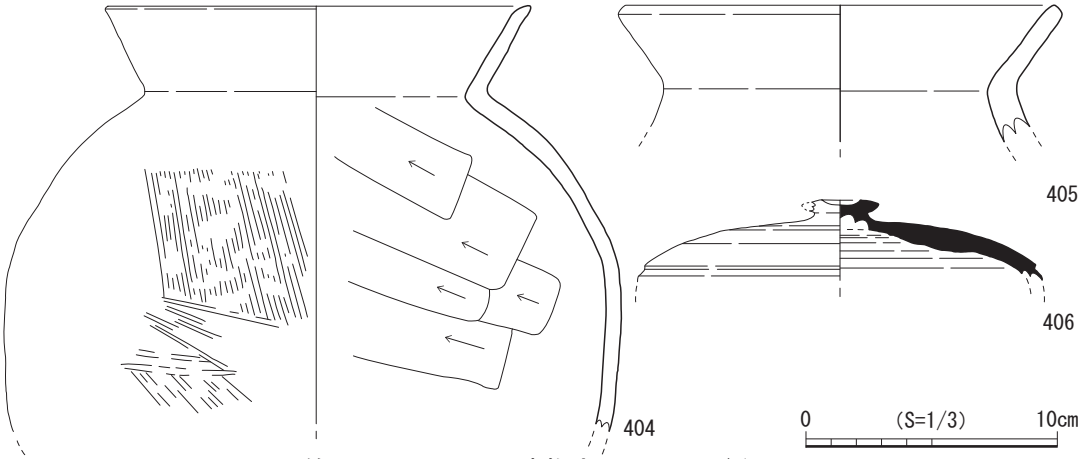
検出状況（北東から）

床面・炉完掘状況（北東から）

炉半截状況（北西から）

床完掘状況（北東から）

図版183　SC5遺構状況



第206図　SC5出土遺物実測図（S=1/3）

404

405

406

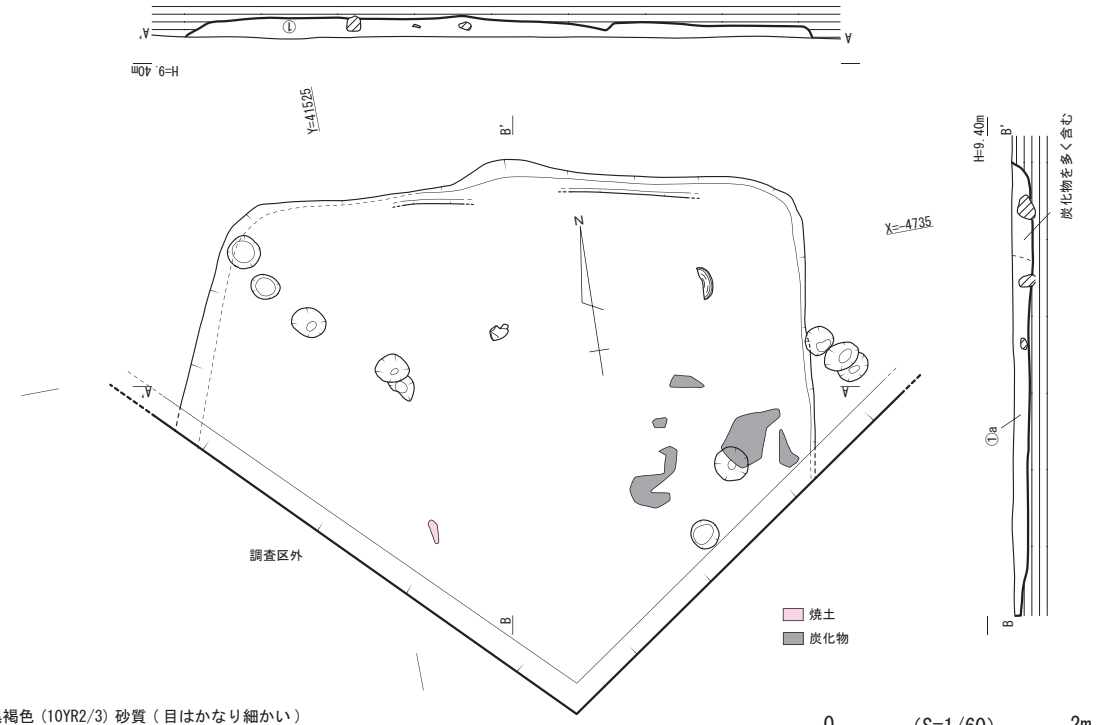
図版184　SC5出土遺物

第105表　SC5出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
404	甕	口縁部～胴部	(16.6)	残存(16.8)	—	ナデ ハケメ	ナデ ヘラケズリ	2.5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	良	長石、石英	煮沸具。内面に粗い砂粒を多く含み仕上げは粗い
405	甕	口縁部～頸部	(17.0)	残存(5.4)	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	黒色粒子、長石 赤色粒子、石英	
406	杯蓋	体部～天井部	—	—	—	回転ヘラケズリ	回転ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰白	良	長石	つまみあり

⑪ TAK201406　2区 SC6(竪穴建物)(第207・208図　図版185・186　表106)

SC6は2区7252グリッドで調査区の南端に位置する。規模は長軸5.0m、短軸4.0m+、深さ14cm を測る方形(推定)の平面プランであろう。北側に幅8cm 程の周壁溝が一部確認された。北側壁の中央部で僅かに湾曲した状況を検出したことからカマドの痕跡と考えられる。しかしながら両袖、焼土痕などが検出されなかった。竪穴建物に伴う柱跡も6ヶ所検出したがランダムな配置で主柱を構成していない。遺物は覆土及び床面から出土した。器種は須恵器杯身、蓋、土師器椀、高杯、模倣杯身等が出土した。**407**は土師器甕口縁部～頸部片である。口縁部は僅かに反り、端部は丸い。**408**は須恵器甕口縁部で直線的に延び口縁端部はやや反る。外面に波状文を施す。**409**は須恵器甕の胴部である。外面は格子タタキ、内面は青海波文を呈する。**410**は高杯杯部である。全体に被熱を受けている。口縁部は内湾し端部は短く外湾し薄く丸い。**411**は高杯脚部で開脚部は欠損する。**412**は須恵器杯蓋で天井部、口縁部が欠損する。**413～415**は須恵器杯身である。**413**は模倣杯である。**414**は須恵器杯身で1/2が残存する。口縁部のたちあがりは1.5cm、たちあがり端部内側は稜をなす。6世紀第2四半期頃の所産か。**415**は須恵器杯身で受け部、たちあがりだけの破片である。口縁部のたちあがりは1.2cm で端部はやや尖る。**414**の須恵器杯身より一回り小さい。時期は6世紀第3四半期頃の所産であろう。**416**は土師器椀である。口縁部～底部にかけての破片である。底部は丸底で口縁部は緩やかに内湾し端部は短く外湾しやや丸い。内外面はナデ調整で丁寧なつくりである。



①. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質 (目はかなり細かい)
直径 1mm 程度の白色粒 2%, 5mm 程度の炭化物 3%,
直径 2 ～ 10cm 程度の礫を 5%, 2cm 程度のにぶい黄褐色土 (10YR4/3 ①よりやや粒子が粗い) のブロックを 5% 含む
やや粘りあり
①a. 基本的には①と同じだが、南側に灰黄褐色 (10YR4/2) の 3mm ～ 1cm 大のブロックを 5% 含む
掘り込み部分の北側に炭化物を多く含む (10%)

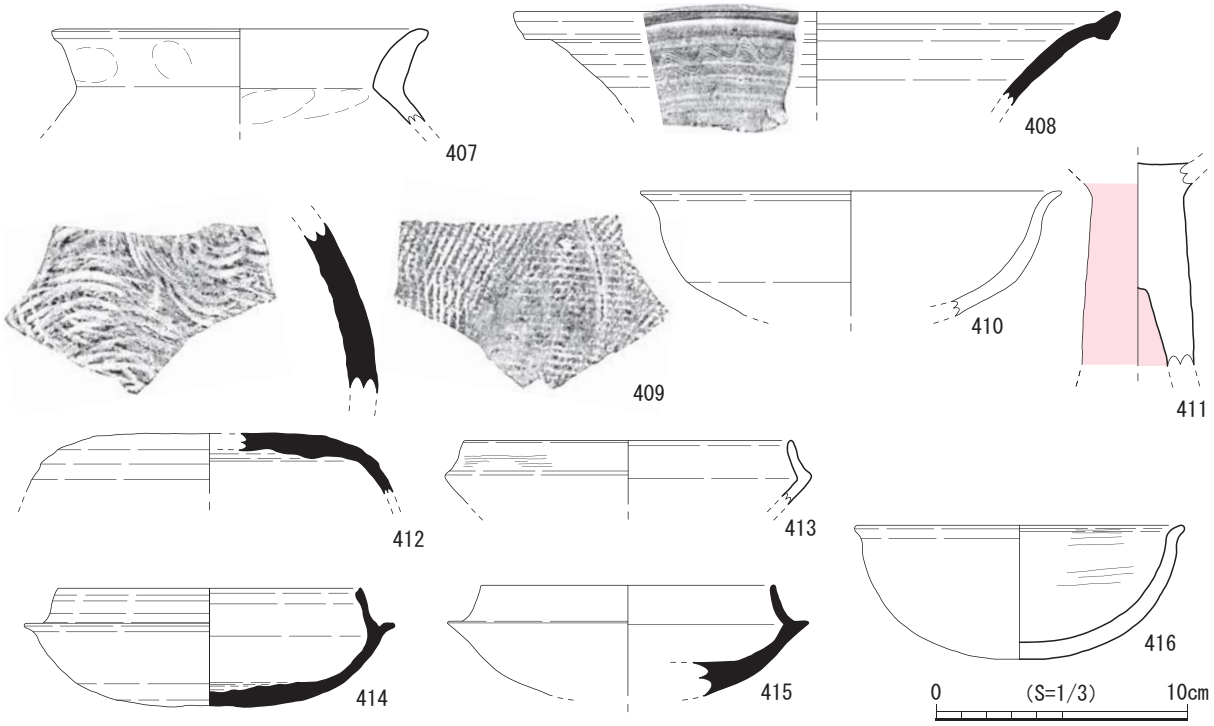
第207図　SC6平・断面図(S=1/60)

検出状況（北から）

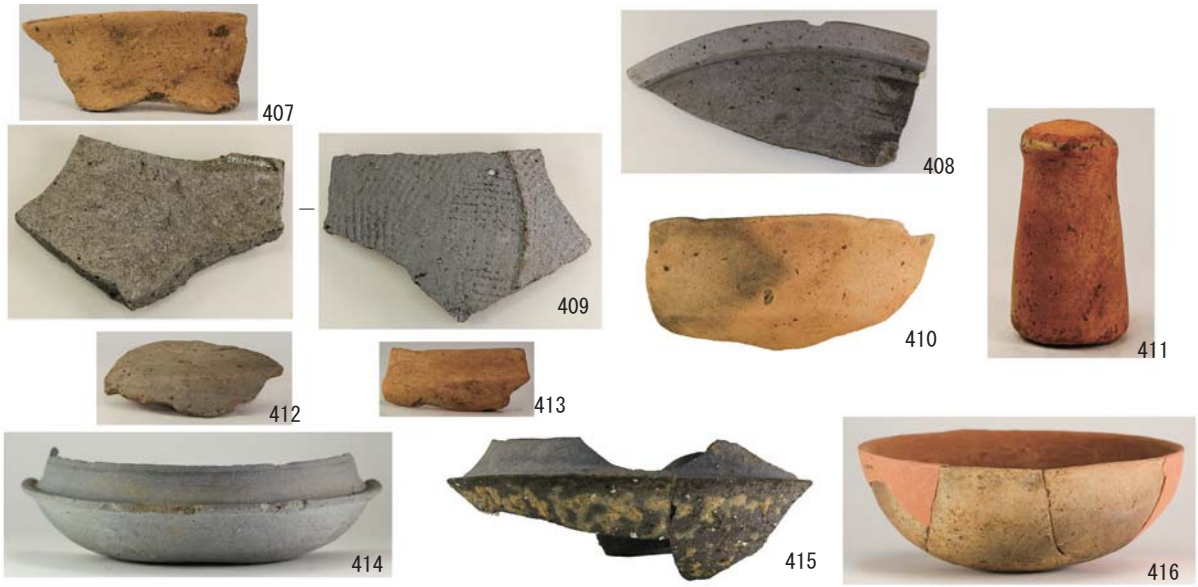
遺物出土及び炭化物・焼土検出状況(西から)

完掘状況（北から）

図版185　SC6遺構状況



第208図　SC6出土遺物実測図(S=1/3)



図版186　SC6出土遺物

第106表　SC6出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
407	甕	口縁～頸部	(15.0)	—	—	ナデ 指オサエ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、黒色粒子	
408	甕	口縁部	(24.0)	残存 (3.2)	—	ナデ	ナデ	N6/ 灰	N5/ 灰	良	長石、黒色粒子	外面に波状文あり
409	甕	胴部	—	—	—	タタキ	アテ具痕	5PB7/1 明青灰	7.5Y7/1 灰白	良	長石	
410	高杯	杯部	(16.5)	残存 (4.9)	—	ナデ	ナデ	10YR6/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	
411	高杯	脚部	—	残存 (7.9)	—	ナデ	ナデ	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	良	細粒子、褐色粒子 黒色粒子	内外面に丹塗りあり
412	杯蓋	体部～天井部	—	残存 (2.4)	—	ヘラケズリ後 ナデ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐	5YR6/4 にぶい橙	良	長石、雲母	焼成不足
413	杯身	口縁部	(12.8)	—	—	ハケメ ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、石英	模倣杯
414	杯身	口縁部～底部	(12.0)	4.7	—	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	黒色粒子、白色粒子 赤色粒子	1/2欠損、6C 後半
415	杯身	口縁部～体部	(11.4)	残存 (4.4)	—	ナデ	ナデ	5P6/1 紫灰	5P6/1 紫灰	良	長石	6C 後半
416	椀	口縁部～底部	(12.8)	—	—	ナデ	ハケメ ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR5/1 褐灰	良	長石、雲母	6C 後半

⑫ TAK201406　2区 SC7(竪穴建物)(第209・210図　図版187・188　表107・108)

SC7は2区7052グリッドに位置する。SC2(古墳時代竪穴建物⑦)と切り合い関係にありSC7は切られている。SC7は西壁、南壁が残存する。長軸(南北)6.88m、深さ34cm、短軸(東西)6.18m、深さ28cmを測る。この残存状況から長方形の平面プランと考えられる。遺物は覆土及び床面から出土した。須恵器杯身、瑕、土師器甕口縁部片、蓋、石製紡錘車が出土した。**417**、**418**は土師器甕口縁部である。いずれも口縁部は外湾し端部は丸い。**419**は手づくね土器で椀である。**420**は土師器模倣蓋の口縁部片である。端部は丸い。全体的に丁寧な仕上げである。**421**、**422**は須恵器杯身である。**421**は接合でほぼ完形となった。**422**は1/4ほどの口縁部片である。いずれも口縁部たちあがりは1.7cm程で端部は丸い。**422**は口縁端部内側に稜をなす。この杯身2点は6世紀第3四半期頃の所産であろう。**423**は瑕で胴部、底部が残存する。口縁部は欠損している。口縁部下の広口部に波状文、その下部に二重の沈線を施す。胴部には1ヶ所の穿孔が施されておりその上下に二重の沈線を有する。全体的に丁寧な仕上げである。**424**は石製の紡錘車で一部は欠損するがほぼ完形である。石材は滑石で形状は截頭円錐形である。

検出状況（北から）

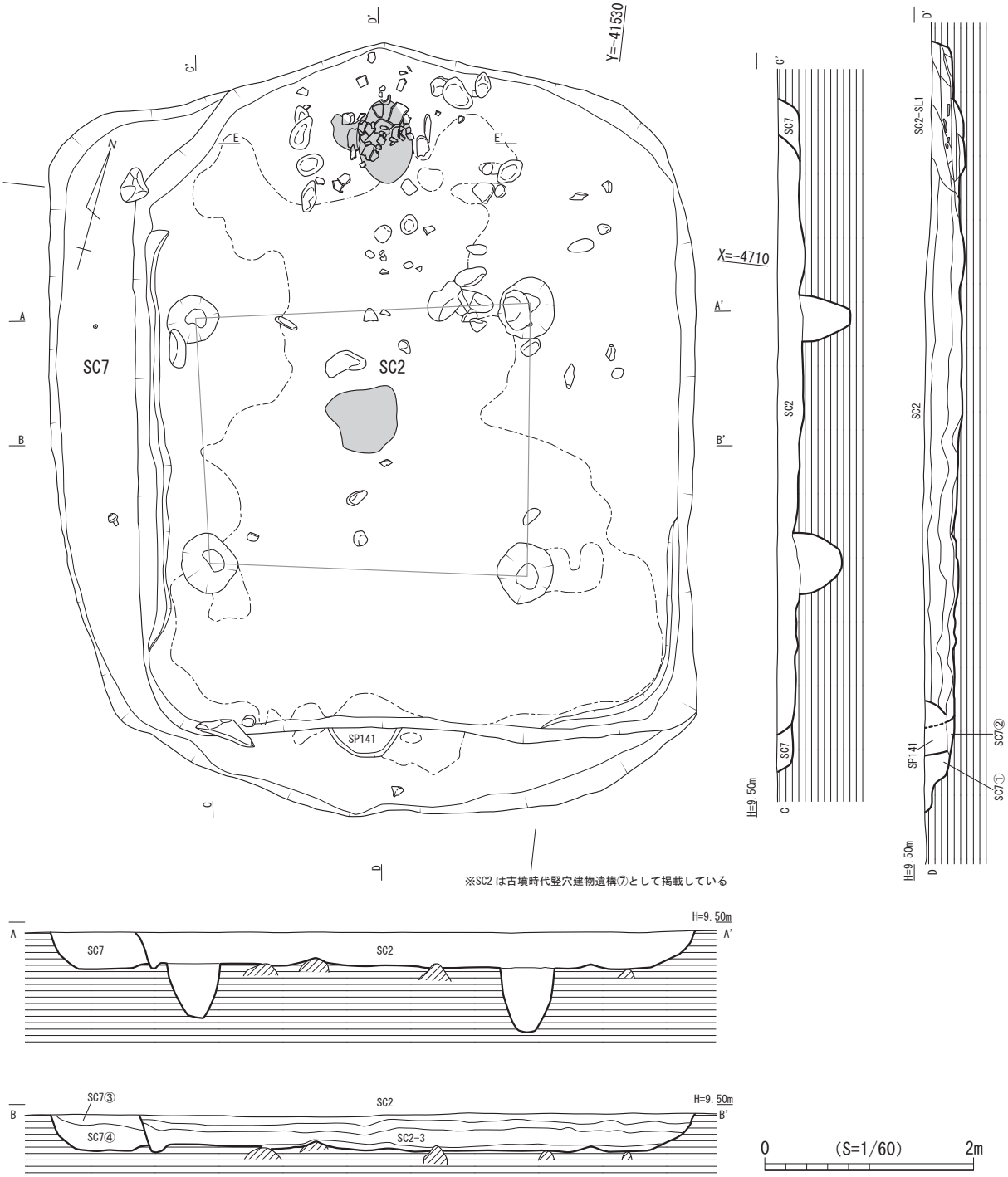
床面完掘状況（北から）

完掘状況（北から）

遺物出土状況 (1)（南東から）

遺物出土状況 (2)（西から）

図版187　SC7遺構状況



SC7:

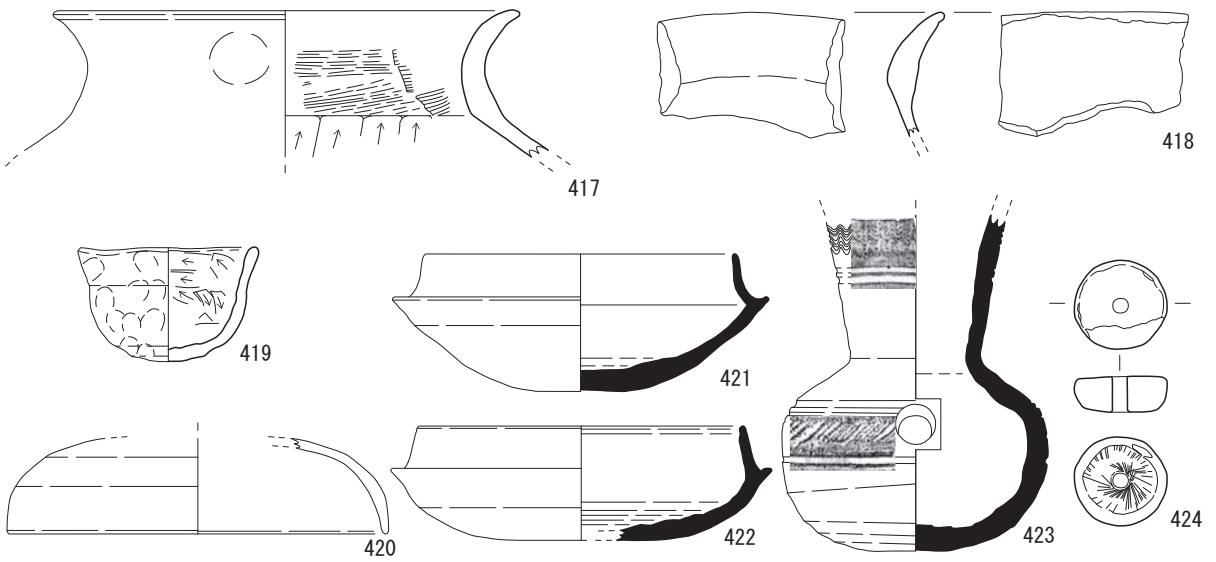
① 黒褐色（10YR3/1）粘性シルト土 しまり・粘性大
0.5cm大のマンガン粒を5%，1～3cm大の礫を3～5%，
白色粒を3%，0.3cm大の褐色粒（7.5YR4/6）を10%，
0.5～3cm大の灰黄褐色粒（10YR4/2 砂質 粘性あり）ブロックを10%含む

② 黒褐色（10YR3/2）粘性シルト土 細砂混じり しまり・粘性大
1～3cm大の灰黄褐色砂質ブロックを15～20%，マンガン粒を5～7%，
白色粒を3%，3～5cm大の礫を2%含む

③ 黒褐色（10YR3/2）粘性シルト土 しまり・粘性大
灰黄褐色（10YR4/2）粘質ブロック1～5cm大を30%，
0.5～1cm大のマンガン粒を10%，
白色粒を3%，3～5cm大の礫を2%含む

④ 黒褐色（10YR3/2）細粒砂質土 ややしまりあり マンガン粒3%含む
ブロック状ににぶい黄褐色（10YR4/3 シルト質 粘性あり）が2%混じる
（SC2-3と同じ）
土器片あり

第209図　SC7平・断面図(S=1/60)



第210図　SC7出土遺物実測図(S=1/3)

0　(S=1/3)　10cm

図版188　SC7出土遺物

第107表　SC7出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
417	甕	口縁部	(32.8)	残存(5.8)	—	ナデ 指オサエ	ヘラケズリ	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/2 明褐灰	良	長石、石英	
418	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ 指オサエ	10R6/6 赤橙	10R6/4 にぶい赤橙	良	雲母	
419	ミニチュア椀	口縁部 ～底部	(7.0)	残存(4.5)	—	ナデ ケズリ後指オサエ	ナデ ケズリ後あり	5YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、雲母、角閃石	手づくね土器
420	杯蓋	口縁部	(14.9)	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/2 明褐灰	5YR7/4 にぶい橙	良	石英	模倣杯蓋
421	杯身	接合 ほぼ完形	(12.1)	5.4	—	ナデ	ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	良好	長石	
422	杯身	口縁部～ 底部	(12.8)	4.5	—	回転ヘラ削り	ナデ	5B6/1 青灰	5B6/1 青灰	良	長石、黒色粒子	
423	瓶	胴部～ 底部	—	残存(13.2)	3.1	波状紋 ロクロメ	ナデ	7N7/ 灰白	7N6/ 灰白	良	長石	口縁部欠損 穿孔1ヶ所あり

第108表　SC7出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
424	紡錘車	滑石	3.5	3.7	1.35	29.88	ほぼ完形

⑬ TAK201406　2区 SC8（竪穴建物）（第211～213図　図版189～191　表109・110）

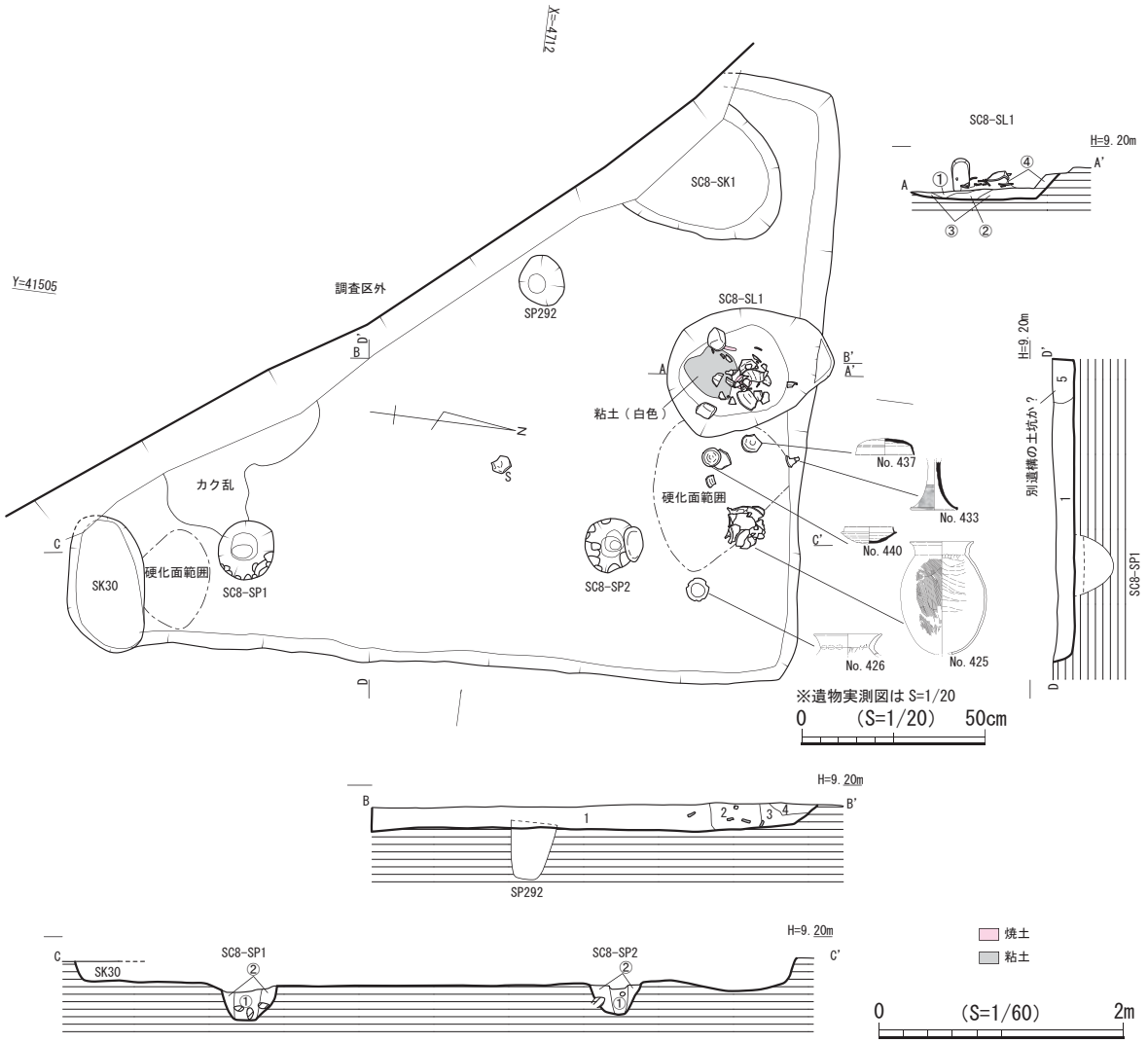
SC8は2区7050グリッドに位置する。南北方向に構築された竪穴建物で南北の長軸5.3m+、東西の短軸5.0m、深さ20cm で長方形の平面プランを呈する。内部施設は北西隅付近に1.0m+×0.9m 程の土坑が所在し、一部硬化面を僅かに確認した。柱穴は3ヶ所検出した。この内 SP1、2が主柱穴を構成するものと考えられる。北壁中央にカマドが設置されている。両袖焚口部に縦長の円礫をそれぞれ1個設置しカマドの構築材としている。焚口部幅は50cm、長さ1.0m の規模である。カマド内は土器片が残存し、高杯の脚部が支脚となっていた。遺物はカマド付近で散発的に出土した。器種は須恵器杯身、蓋、高杯脚部、土師器甕、鉢、模倣杯等が出土した。**425～430**は土師器甕の口縁部～胴部片である。**425**、**426**、**429**は口縁部がやや斜め方向にたち上がり端部が大きく外反する。口縁内面は頸部付近で稜をなす。内面はヘラケズリの後ナデ調整を施す。**427**は口縁部が直線的にたちあがり端部は丸い。**428**は口縁部が外湾し端部は丸い。**430**は口縁部～胴部の破片である。口縁部は外湾し端部は丸い。口頸部に指圧痕、内面はヘラケズリ痕が残る。**431**は手づくね土器で椀である。接合によりほぼ完形となった。**432**、**433**は高杯の脚部で**432**は土師器、**433**は須恵器である。**432**は緩やかに開脚し脚端部は方形である。全体的に器壁は厚い。瀬戸内系の高杯か。**433**は脚部1/3程が残存する。脚部～裾部にかけて波状文を施している。**432**、**433**の時期は6世紀第3四半期頃であろう。**434**は土師器椀の口縁部～体部片である。口縁部は緩やかに内湾し端部はやや尖る。内面は丹塗りを施している。**435**、**436**は土師器の杯口縁部～体部片である。内外面はミガキを施し、指圧痕も残る。**437～439**は須恵器の蓋である。口径が13～16cm 程で口縁端部内面に稜をなす。**440～443**は須恵器杯身である。**440**は一部口縁部が欠損しているがほぼ完形である。口径13.2cm、たちあがり1.3cm で僅かに反り端部は細く丸い。全体的に粗雑で歪んでいる。**441**は、たちあがり～受け部、体部の破片である。たちあがりは1.4cm で受け部との間に細い沈線を施す。**442**は1/3が欠損する。口径は12.2cm、たちあがりは1.3cm である。たちあがりは僅かに内側に傾斜し直線的で端部は丸い。**443**は口縁部～体部片である。たちあがり1.7cm、復元口径15.0cm を測る。受け部は短く、体部は丸みがある。時期は6世紀第2四半期頃であろう。**444**は移動式竈片である。裾部片と廂片？であろう。**445**は砥石で半分が欠損している。石材は砂岩である。

検出状況（北から）

遺物出土状況（北から）

遺物出土状況（南から）

図版189　SC8遺構状況

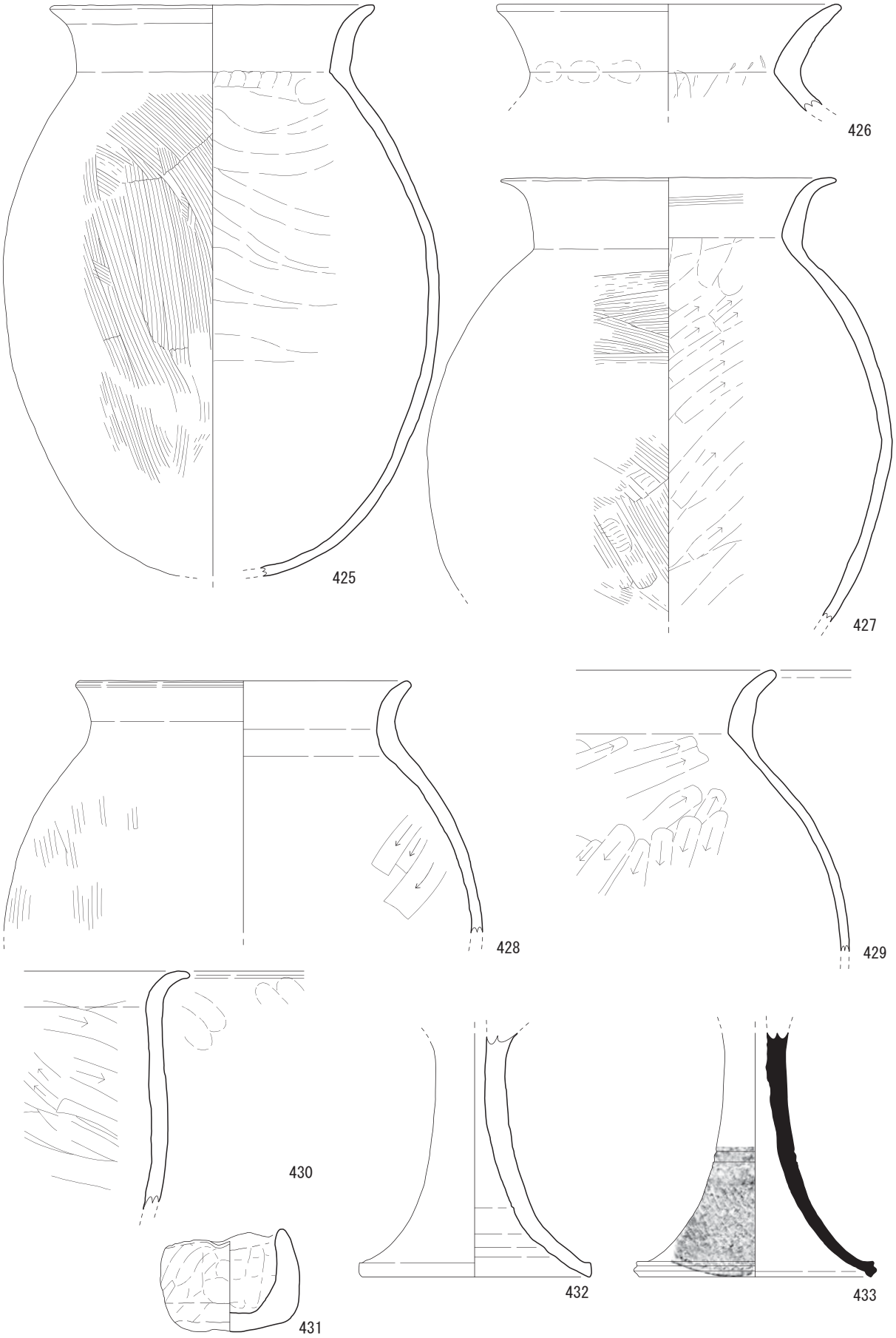


1. 暗褐色土（10YR3/3 シルト質） しまりあり
白色粒 3%, 黄色粒 2%, 炭化物 2%, 炭化物 2% 含む
水の影響による鉄の沈着がみられる
にぶい黄褐色土（10YR4/3 シルト質）が
ブロック状に 3% 入る
2. 土質は 1 と同じ 焼土 5%, 炭化物 1% を含む
3. 土質は 1 と同じ 焼土 40%, 炭化物 7% を含む
4. 土質は 1 と同じ 焼土 20%, 炭化物 3% を含む
5. にぶい黄褐色土（10YR4/3 砂質シルト） ややしまりあり
黄色粒を 3% 含む 別遺構の土坑か？

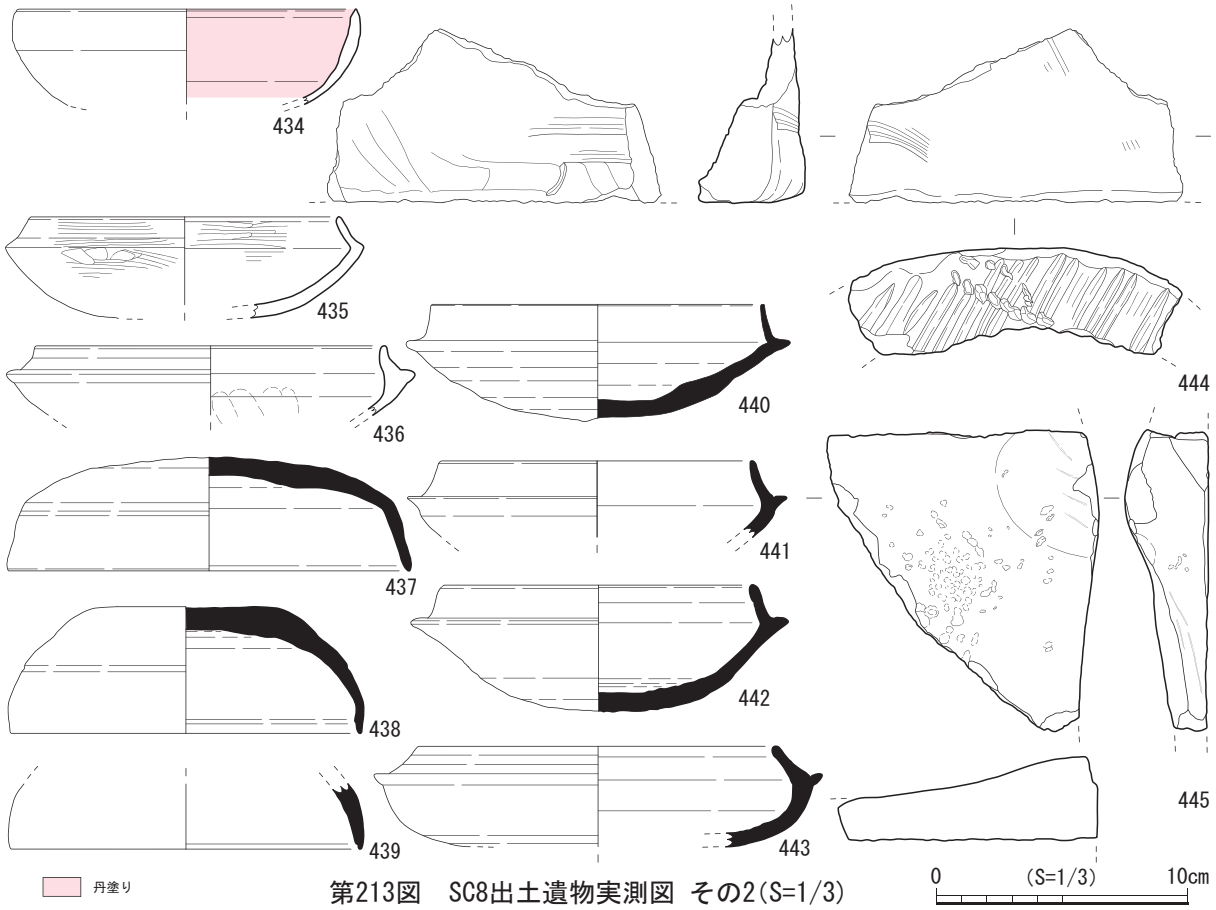
SC8-SP1:
①褐色（10YR4/4）粘質土 ややしまり弱い
白色粒を全体の約 2% ほど含む
1mm ほどの炭化物を全体の約 1% 含む
柱痕と思われる
②灰黄褐色（10YR4/2）粘質土 中程度のしまり
1mm ほどの炭化物を全体の約 2% 含む
SC8-SP2:
①SP1 の 1 に同じ
②SP2 の 2 に同じだが、炭化物はみられない

SC8-SL1:
①灰白色（7.5YR8/2 シルト質） 粘りあり
上部において、黒褐色土（7.5YR3/1）が混じる（1 より目の粗い砂質土 上の層か？）
②赤褐色（5YR4/6 砂質） 1 よりやや目は粗い（1 に混じる黒褐色土よりは細かい） しまりは強い
直径 0.5 ～ 1mm 程度の炭化物を含む（1% 以下）
1 ～ 2cm 大の①及び褐灰色土（10YR4/1）のブロックを 5% 含む
（特にポイント A から 16 ～ 28cm 北上した部分）
③暗褐色（10YR3/3 砂質） ②より細かいが、①よりは粗い層 粘りあり
直径 1 ～ 2mm 程度の礫を 2% 含む
褐灰色土（10YR4/1）の 1 ～ 2cm 程度の大きさのブロックを 5% 含む
直径 1 ～ 3mm 程度の炭化物を含む（1% 以下）
④暗褐色（10YR3/3 シルト質） 粘りあり
白色粒 3%, 黄色粒 2%, 炭化物 2%,
にぶい黄褐色土（10YR4/3 シルト質）が
ブロック状に 3% 入る
焼土ブロックが 7% 入る

第211図　SC8平・断面図(S=1/60)



第212図　SC8出土遺物実測図 その1（S=1/3）



第213図　SC8出土遺物実測図 その2(S=1/3)

図版190　SC8出土遺物 その1

図版191　SC8出土遺物 その2

第109表　SC8出土土器観察表

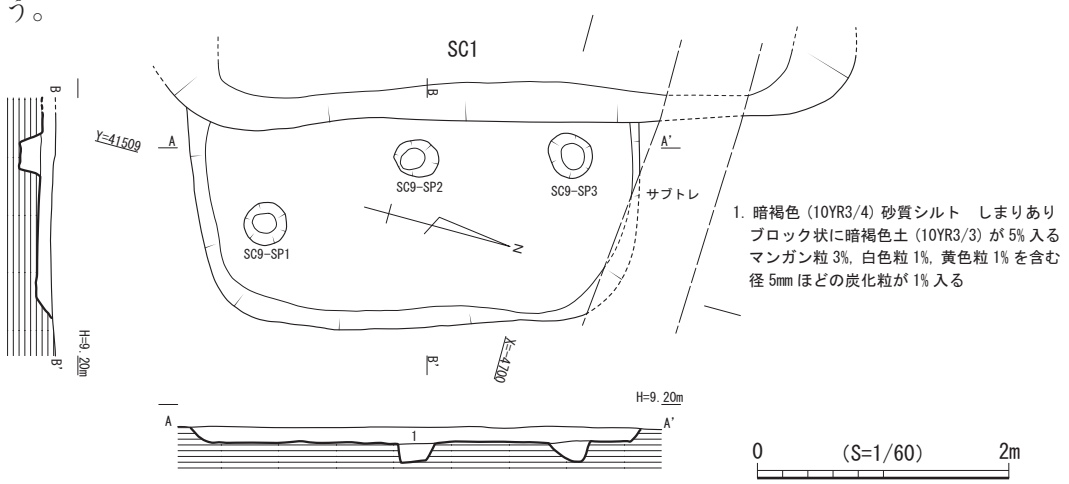
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
425	甕	ほぼ完形	17.2	残存(30.7)	—	ナデ ハケメ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	良	赤色粒子、雲母 長石	底部欠損
426	甕	口縁部	18.5	残存(6.8)	—	ナデ 指オサエ	ナデ ヘラケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/2 灰白	良	長石、赤色粒子 雲母	口縁部完形 胴部、底部欠損
427	甕	口縁部 ～胴部	17.4	残存(23.7)	—	ハケメナデ消し	ヘラケズリ後ナデ	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	良好	雲母、赤色粒子 石英、長石	
428	甕	口縁部 ～胴部	(17.6)	残存(13.5)	—	ナデ ハケメ	ナデ ヘラケズリ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	石英、雲母	
429	甕	口縁部 ～胴部	(19.0)	—	—	ナデ	ケズリ	10R5/4 赤褐	10R6/4 にぶい赤橙	良	長石、雲母	
430	甕	口縁部 ～胴部	(15.0)	—	—	ナデ 指オサエ	ヘラケズリ	2.5YR4/3 にぶい褐	2.5YR5/4 にぶい褐	良	石英、長石	
431	ミニチュア椀	ほぼ完形	6.0	最大5.5	—	ナデ、指オサエ ヘラ起こし	ナデ 指オサエ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	石英、褐色粒子	手づくね土器
432	高杯	脚部	—	残存(13.5)	(12.8)	ナデ	ナデ	10R5/8 赤	5YR6/8 橙	良	長石、石英	瀬戸内系
433	高杯	脚部	—	残存(13.0)	—	波状文	ナデ	5YR7/1 赤褐灰	5YR7/1 赤褐灰	良	長石	
434	椀	口縁部 ～体部	(13.6)	残存(3.7)	—	ヘラケズリ	ナデ 丹塗り	10YR8/4 浅黄橙	10Y5/8 赤	良好	褐色粒子	内面に丹塗りあり
435	杯身	口縁部 ～体部	(12.2)	残存(4.0)	—	ミガキ	ミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	良	雲母、赤色粒子 白色粒子、黒色粒子	模倣杯　6世紀後半
436	杯身	口縁部	(14.0)	残存(2.7)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	良	長石、赤色粒子	模倣杯　6世紀後半
437	杯蓋	ほぼ完形	(15.8)	4.5	—	ナデ	ナデ	10YR7/1 灰白	5YR7/4 にぶい橙	不良	長石、赤色粒子	焼成不足　6世紀後半
438	杯蓋	口縁部～ 天井部	(13.7)	5.0	—	回転ヘラケズリ	ナデ	7.5YR7/1 明褐灰	7.5YR7/1 明褐灰	良	長石	6世紀中～後半　口縁部一部欠損
439	杯蓋	口縁部	(13.8)	—	—	ナデ	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石	
440	杯身	ほぼ完形	13.2	4.5	—	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	N5/ 灰	N6/ 灰	良	長石	左向けに回転させ、ヘラケズリを施している 6世紀後半
441	杯身	口縁部	12.2	残存(3.0)	—	ナデ	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良好	長石	6世紀後半
442	杯身	口縁部～ 底部	(12.2)	5.0	—	ヘラケズリ後 ナデ	ヘラケズリ後 ナデ	N7/ 灰白	N1/ 灰	良	長石	6世紀後半
443	杯身	口縁部 ～体部	(15.0)	残存(4.4)	—	ナデ	回転ヘラケズリ	5B4/1 暗青灰	5B4/1 暗青灰	良	長石	6世紀中～後半
444	移動式竈	脚部 裾部片	—	残存(6.8)	—	ヘラケズリ後 ナデ	ナデ	2.5Y7/1 黄灰	7.5YR7/3 にぶい橙	良	長石	破片

第110表　SC8出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
445	砥石	砂岩	11.9	10.8	3.3	385.0	

⑭ TAK201406　2区 SC9(竪穴建物)(第214・215図　図版192・193　表111)

SC9は切り合い関係によりSC1から切られ1/3程が残存する。6850・7050グリッドに位置し、規模は長軸3.6m、短軸1.4m+、深さ12cmを測る。平面プランは方形か長方形であろう。柱穴は3個検出した。SP1、3が壁際に配置することから主柱穴を構成するものと思われる。柱穴の規模は円形で直径34～36cm、床面から14cm程の深さである。遺物は須恵器杯身片、土師器椀口縁部片等が出土した。**446**は土師器椀口縁部片である。口縁部は緩やかに外反し端部はやや尖る。外面は磨耗している。**447**は須恵器杯身片である。立ち上がりは直線的に内傾し端部はやや尖り気味である。時期は6世紀第4四半期頃であろう。

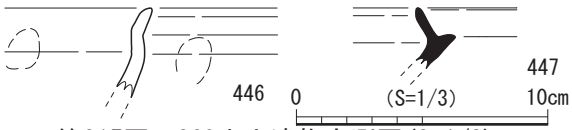


第214図　SC9平・断面図(S=1/60)

検出状況（東から）

完掘状況（東から）

図版192　SC9遺構状況



第215図　SC9出土遺物実測図(S=1/3)

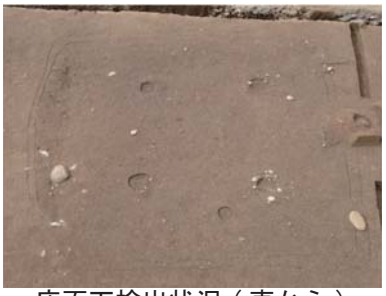
図版193　SC9出土遺物

第111表　SC9出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
446	椀	口縁部	—	—	—	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR5/1 褐灰	良	長石、石英	
447	杯身	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石	6世紀後半

⑮ TAK201406　4区 SC13(竪穴建物)(第216・217図　図版194・195　表112)

SC13は4区6652グリッドに位置する。南北方向の構築された竪穴建物で規模は南北4.5m、東西4.6m、深さ5～10cmを測る、正方形の平面プランを呈する。建物内施設は幅14cm、深さ6cmの周壁溝が全周する。カマドは北壁中央に設置され両袖の壁体が一部残存していた。規模は幅0.7m、長さ1.0mで楕円形を呈する。カマド内は土器片が散乱していた。柱穴は6ヶ所確認し、その内主柱穴はSP1～4である。形状は円形で直径30cm程である。SP5、6は補助材であろう。全体的に削平が著しい。土器は覆土及び床面、カマドから出土した。器種では須恵器杯蓋、土師器高杯、甕胴部片等が出土した。**448～450**はカマド内出土である。いずれも土師器の甕で胴部～底部片である。これらの土器はいずれも被熱を受けている。胎土は結晶片岩粉を多く含む。**451**は土師器無蓋高杯で脚部の一部が欠損するが杯部はほぼ完形である。全体的に器壁は薄く、内外面に丹塗り痕が僅かに残る。**452**、**453**は須恵器の杯蓋である。いずれも口縁部の一部が欠損するがほぼ完形にちかい。口縁端部内側にわずかに稜を有する。口径は**452**が16.8cm、**453**が14.6cmである。時期は杯蓋から6世紀第3四半期頃と思われる。

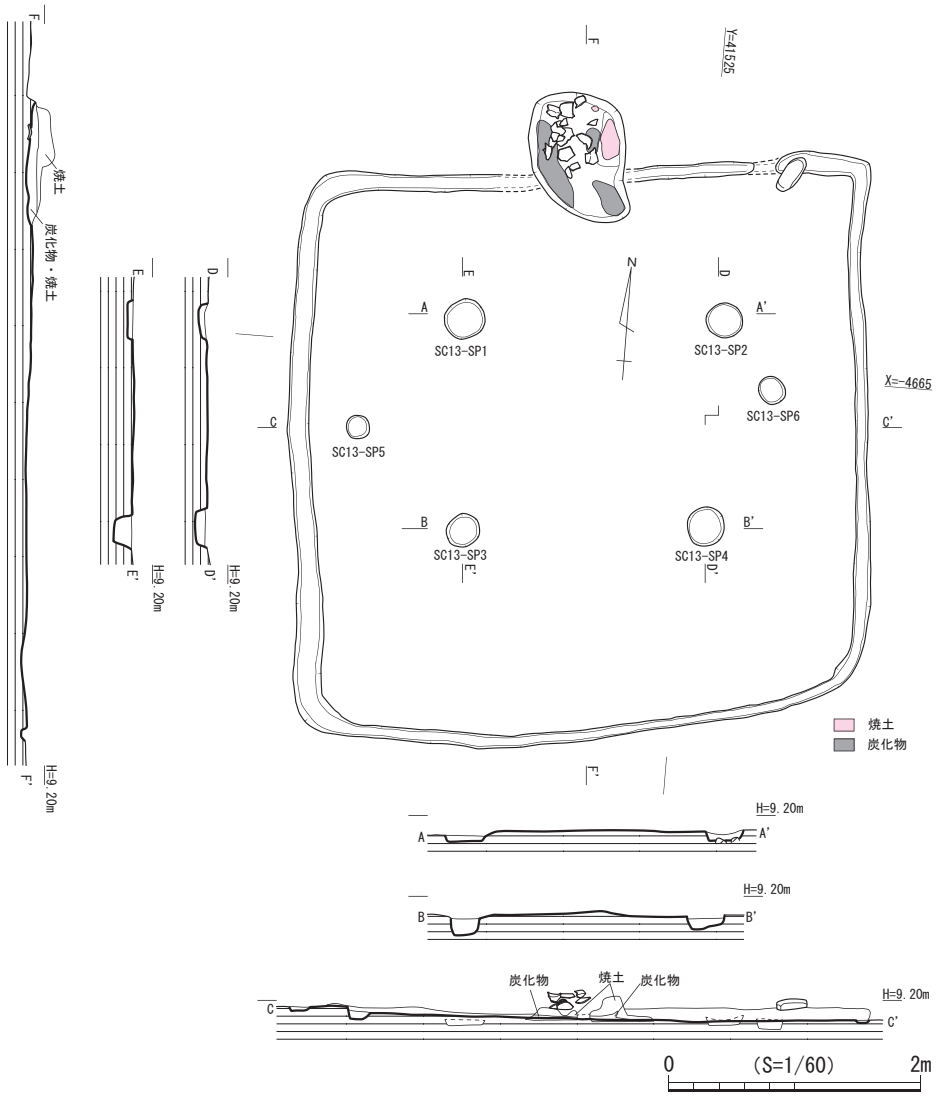


床面下検出状況（東から）

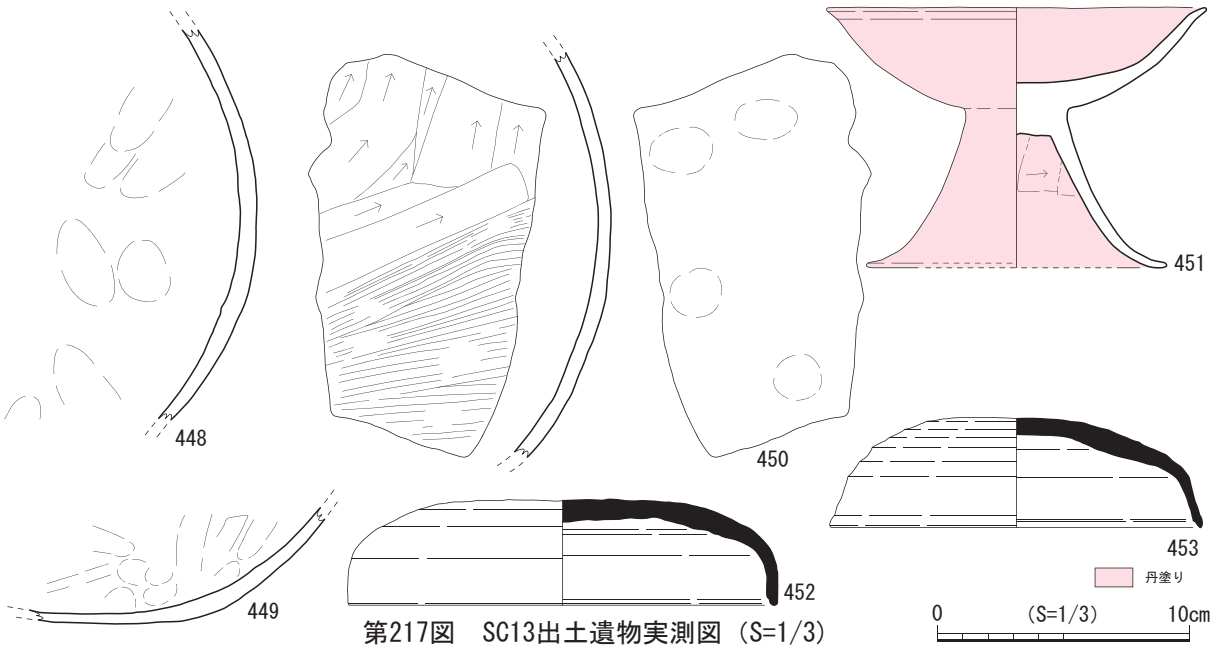
カマド跡検出状況（南から）

図版194　SC13遺構状況

完掘状況



第216図　SC13平・断面図(S=1/60)



第217図　SC13出土遺物実測図 (S=1/3)

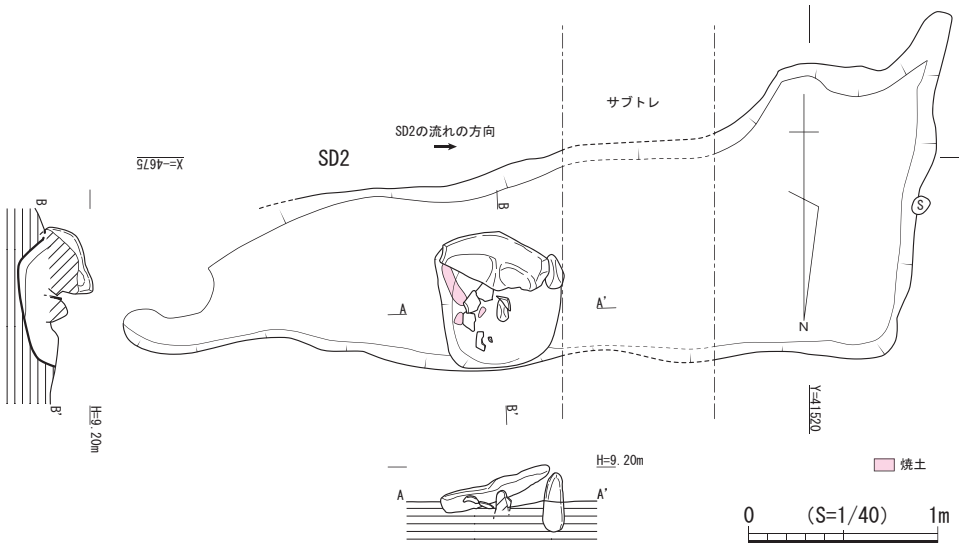
図版195　SC13出土遺物

第112表　SC13出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
448	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ 指オサエ	2.5YR5/3 にぶい赤褐	2.5YR5/3 にぶい赤褐	良	長石、石英	
449	甕	底部	—	—	—	ナデ 指オサエ	ヘラケズリ 指オサエ	5YR3/4 暗赤褐	5YR2/2 黒褐	良	石英	器壁が薄い
450	甕	胴部	—	残存 (16.0)	—	ナデ 指オサエ	ヘラケズリ ハケメ	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	長石、石英	結晶片岩粉を含む
451	高杯	接合 ほぼ完形	15.0	残存 (0.3)	(10.6)	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5YR7/6 橙	良好	長石	内外面に丹塗りが残る
452	杯蓋	ほぼ 完形	16.8	4.1	—	回転ヘラナデ	ナデ	2.5YR6/1 黄灰	2.5YR6/1 黄灰	良	長石、灰色粒子	口縁部一部欠損 6世紀後半
453	杯蓋	ほぼ 完形	14.6	4.3	—	回転 ヘラケズリ	回転ナデ	2.5YR6/2 灰黄	2.5YR6/2 灰黄	良	雲母、黒色粒子 赤色粒子、長石	6世紀後半

⑯ TAK201406　4区 SC14(竪穴建物)(第218・219図　図版196・197　表113)

SC14は4区6652グリッドに位置する。SD2により竪穴建物の2/3以上が削平されており、全体の様相が定かではないが方形か長方形であろう。残存の規模は北壁長軸4.1m+、東壁短軸1.4m+、深さ2～8cm程である。北壁中央にカマドが設置している。袖焚口部に長さ30cm、幅10cmの楕円礫を1ヶ確認した。またその上に長さ60cm程の礫が設置している。カマドの構築材であろう。カマド床面では土器片が少量出土した。遺物は覆土及びカマド内、床面から出土した。須恵器蓋、壺？、土師器壺底部、高杯脚部片等が出土した。**454**は土師器甕胴部～底部片である。底部は丸く、外面は僅かにハケメ調整後ナデ調整を施す。内面はケズリ調整を施す。**455**は須恵器で壺の高台部片？である。小さな凸帯を有し小さな縄目文様がみえる。**456**は土師器高杯の脚部片で杯部が僅かに残る。**457**は須恵器杯蓋口縁部片である。内側に僅かな稜をなし端部はやや尖る。須恵器杯蓋片から6世紀第3四半期頃の所産か。

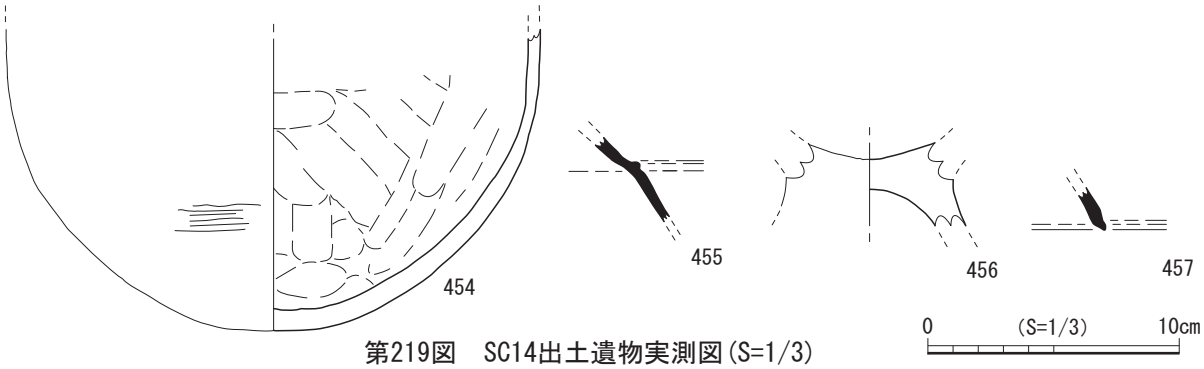


第218図　SC14平・断面図(S=1/40)

カマド検出状況（北から）

カマド完掘状況（東から）

図版196　SC14遺構状況



第219図　SC14出土遺物実測図(S=1/3)

図版197　SC14出土遺物

第113表　SC14出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
454	甕	胴部～底部	—	残存(11.8)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/2 明褐灰	良	雲母、角閃石 石英、褐色粒子	
455	台付壺	脚台部片か	—	—	—	ナデ	ナデ	5B5/1 青灰	5B6/1 青灰	良	石英	
456	高杯	杯部～脚部	—	残存(3.3)	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐	良	雲母、角閃石 赤色粒子、長石	
457	杯蓋	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5PB4/1 暗青灰	5PB4/1 暗青灰	良	長石、石英	

⑰ TAK201406　4区 SC15(竪穴建物)(第220・221図　図版198・199　表114)

SC15は4区6852グリッドに位置する。規模は長軸6.4m、短軸6.3m、深さ10～12cmを測るほぼ方形の竪穴建物である。屋内施設は東壁に幅24cm、深さ4cm程の周溝が残る。カマドは北壁中央に設置され長軸1.0m、短軸0.6mの範囲に焼土痕、土器片が残っていたことからカマドの範囲と考えられる。カマドの構造は両袖焚口及び天井石が残る。焚口前の土坑は土器片が散乱し、支脚は高杯を設置していた。柱穴は5ヶ所確認した。いずれも円形で36～56cmを測る。5ヶ所の柱穴の配置はランダムで企画性はない。しかしながら東側のSP3、4は可能性がある。遺物は須恵器杯身、杯蓋、甕、土師器高杯小形壺等が出土した。**458**、**459**は土師器の甕である。いずれも口縁部は緩やかに外湾し端部は丸い。**458**は胴部がやや長い。**460**は須恵器甕の胴部片である。外面は格子タタキ、内面は正海波である。**461**は土師器長頸壺頸部片である。**462**は土師器小型丸底壺の胴部片である。内面は指圧痕が残る。**463**は土師器椀の口縁部～体部片である。口縁部は緩やかに内湾し端部は丸い。**464**は土師器高杯である。開脚端部が一部欠損するが、杯部、脚部はほぼ完形である。口縁部は直線的に外傾し端部は丸い。**465**は土師器模倣杯蓋片である。口縁端部は平たい。**466**は須恵器杯蓋片で、体部～天井部にかけての破片である。天井部は水平である。口縁端部は欠損する。**467**は須恵器杯身で口縁部のたちあがりが3/4欠損する。その他は完形である。たちあがりは1.4cmで直線的で内傾する。口縁端部は細くやや尖る。この須恵器杯身から時期は6世紀第3四半期頃と考えられる。

検出状況(南西から)

SL1遺物出土状況(北東から)

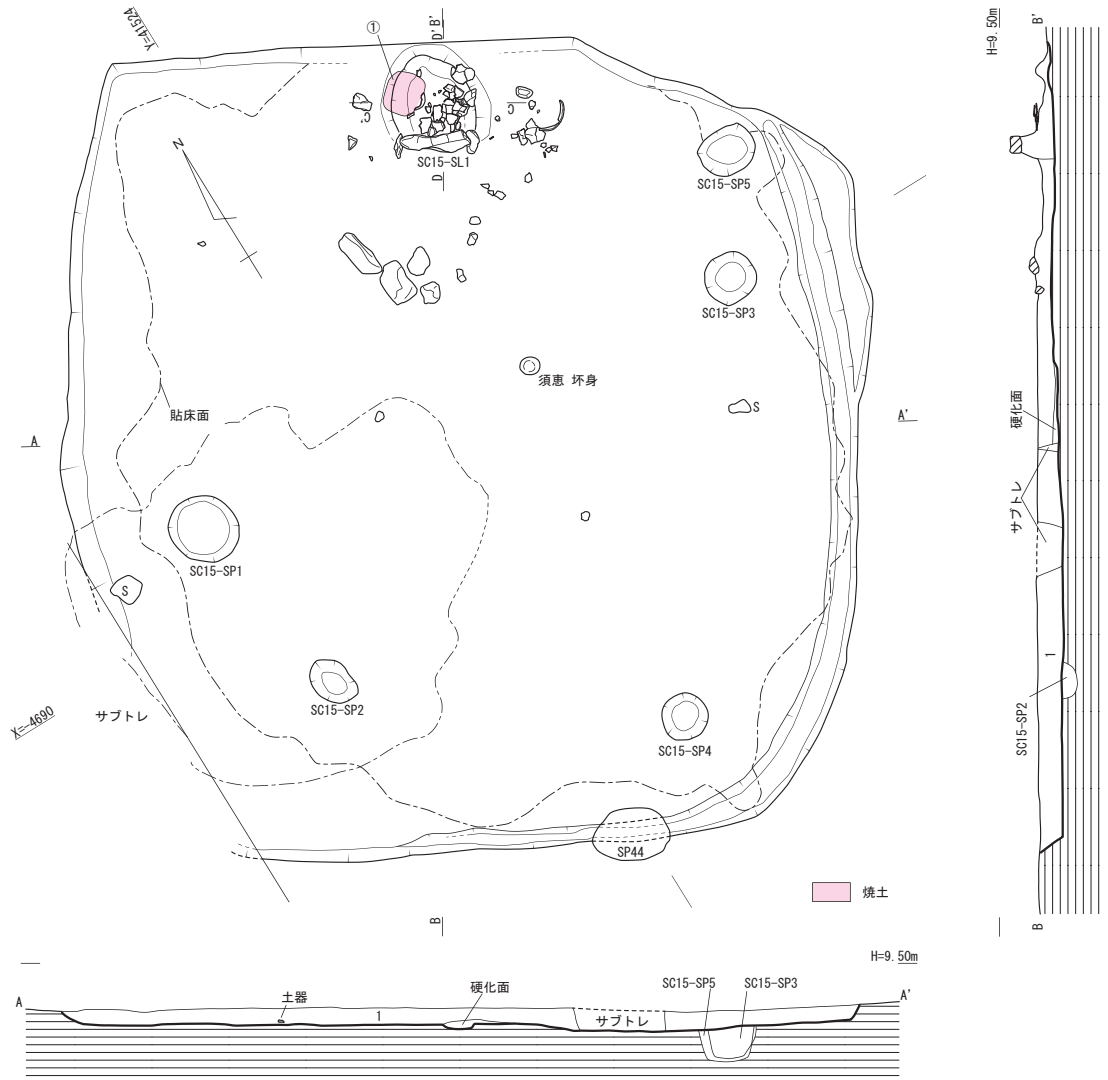
SL1遺物出土状況(東南東から)

遺物出土状況

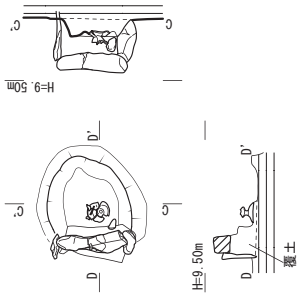
完掘状況(西南西から)

SL1(炊き口)(南西から)

図版198　SC15遺構状況



SC15-SL1 平・断面図 (S=1/60)

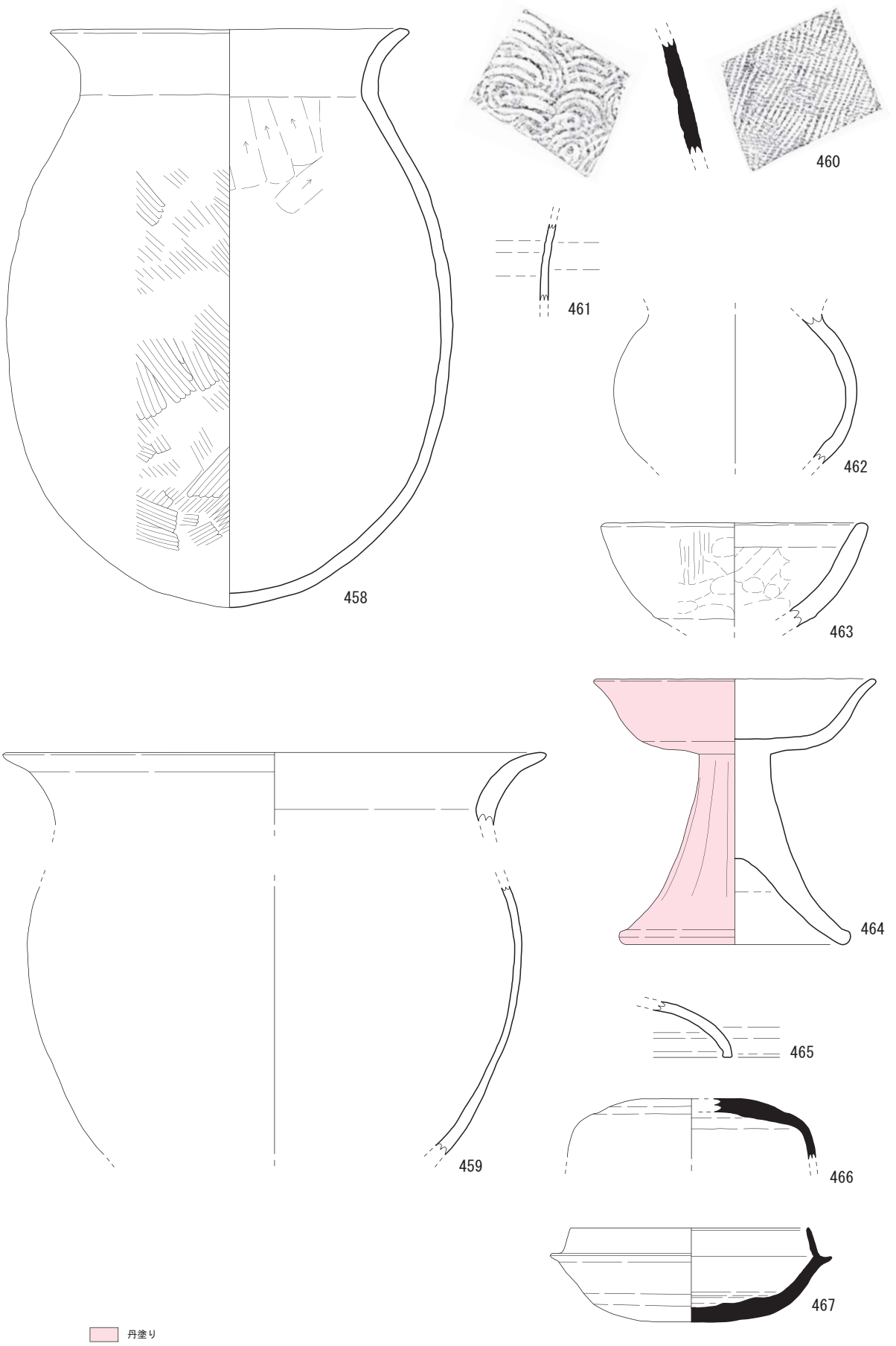


①（平面図に図示）焼土を含む範囲
明赤褐色土（5YR5/6 赤土の焦土）の
1～5mmほどのブロックを全体の約10%含む
黒褐色土（10YR2/2 黒土の焦土）を一部、
径20～50mmほどの角柱状に含むほか、
5～10mmの粒状に全体の約15%含む
この黒褐色土は、炭などの炭化物と思われる
その他に黄褐色土（10YR5/6）の0.5～1mmほどの
粗粒砂が全体の3%ほど1ヶ所に固まって確認された

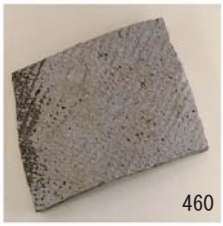
1.（断面図に図示）
黒褐色（10YR2/3 シルト質 ややしまりあり）
径5mmほどの黄褐色粒が15%混じる
2cmの礫1%，2mm程の炭化物2%，
マンガン粒7%が混じる
硬化面より下部にはにぶい黄褐色
（10YR4/3 極小砂質土 しまりなし）が
中ブロック状に20%入る
また、硬化面周辺には強い鉄分の沈着が見られる

0 (S=1/60) 2m

第220図　SC15平・断面図(S=1/60)



第221図　SC15出土遺物実測図(S=1/3)



図版199　SC15出土遺物

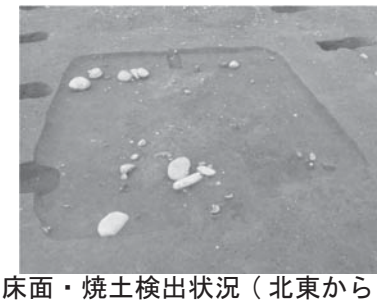
第114表　SC15出土土器観察表

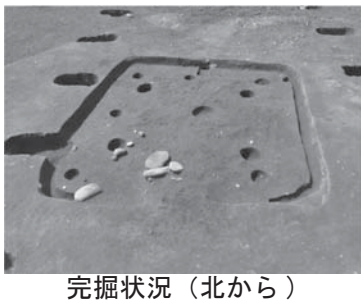
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
458	甕	口縁部～底部	(18.6)	残存(30.9)	—	ハケメ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	5YR5/2 灰褐	5YR7/3 にぶい橙	良	雲母、石英 赤色粒子、角閃石	
459	甕	口縁部～胴部	(28.4)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良	長石、石英	
460	甕	胴部	—	—	—	平行タタキ	同心円文	N7/ 灰	N7/ 灰	良好	長石、黒色粒子	
461	長頸壺	頸部片	—	—	—	ナデ	ナデ	5PB7/1 明青灰	N7/ 灰白	良	長石	
462	小型壺	胴部	胴部径(13.0)	残存(7.8)	—	ナデ	ユビナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR3/3 暗褐	良	長石、雲母	丸底
463	椀	口縁部～体部	(13.6)	残存(5.5)	—	ナデ・ハケメ 指オサエ	ナデ 指オサエ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	結晶片岩、石英 雲母、赤色粒子	
464	高杯	ほぼ完形	14.6	14.1	11.4	ナデ ヘラケズリ	ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	長石	開脚部一部欠損 外面に丹塗り痕あり
465	杯蓋	口縁部	(15.0)	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR7/2 灰黄	10YR7/3 にぶい黄	良	長石、石英	模倣杯蓋
466	杯蓋	体部～天井部	—	残存(3.2)	—	ナデ	ナデ	5PB7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	良	長石、赤色粒子	6世紀後半
467	杯身	ほぼ完形	12.7	3.6	4.9	ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰	良	長石	口縁部3/4欠損　6世紀後半

⑱ TAK201407　1区 SC1(竪穴建物)(第222・223図　図版200・201　表115)

SC1は1区7258グリッドに位置する。竪穴建物の規模は長軸中央で4.0m、短軸3.92m、深さ床面まで18cm、構築面まで28cm を測るほぼ正方形に近い平面プランである。建物内の施設は主柱穴4本、主柱穴の補助7本で構成されている。周壁溝は全周しており、規模は幅14～20cm、深さ10cm 程である。東壁中央には長軸84cm、短軸76cm、深さ26cm を測る楕円形の焼土痕を検出した。また30～40cm 程の長円礫を3個検出した。カマドに伴う袖石、焚口の天井石であろうか。硬化面は中心から僅かに周辺に広がる。中央には長軸1.20m、短軸0.94m、深さ12cm を測る楕円形の平面プランを有す土坑が位置する。遺物は床面、カマド、覆土から出土した。**468～470**は土師器甕の口縁部～胴部片である。**468**は口縁部が緩やかに外反し、端部はやや尖る。**469**は僅かに外湾し端部は丸い。**470**は口縁部が大きく外反し端部は丸い。**471**は鉢である。口縁部～体部片で、口縁部は大きく内湾し口縁端部は僅かに短く反る。**472**は土師器椀で、口縁部～体部にかけての破片である。体部は緩やかに内湾し、口縁端部は丸い。**473**は模倣杯身片である。受け部が僅かに段差を設け口縁部のたちあがりは短く端部は丸い。時期は模倣杯身から6世紀第4四半期頃であろう。

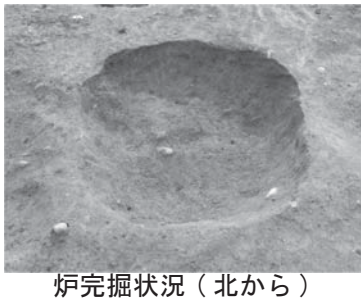
検出状況（北東から）


床面・焼土検出状況（北東から）


完掘状況（北から）

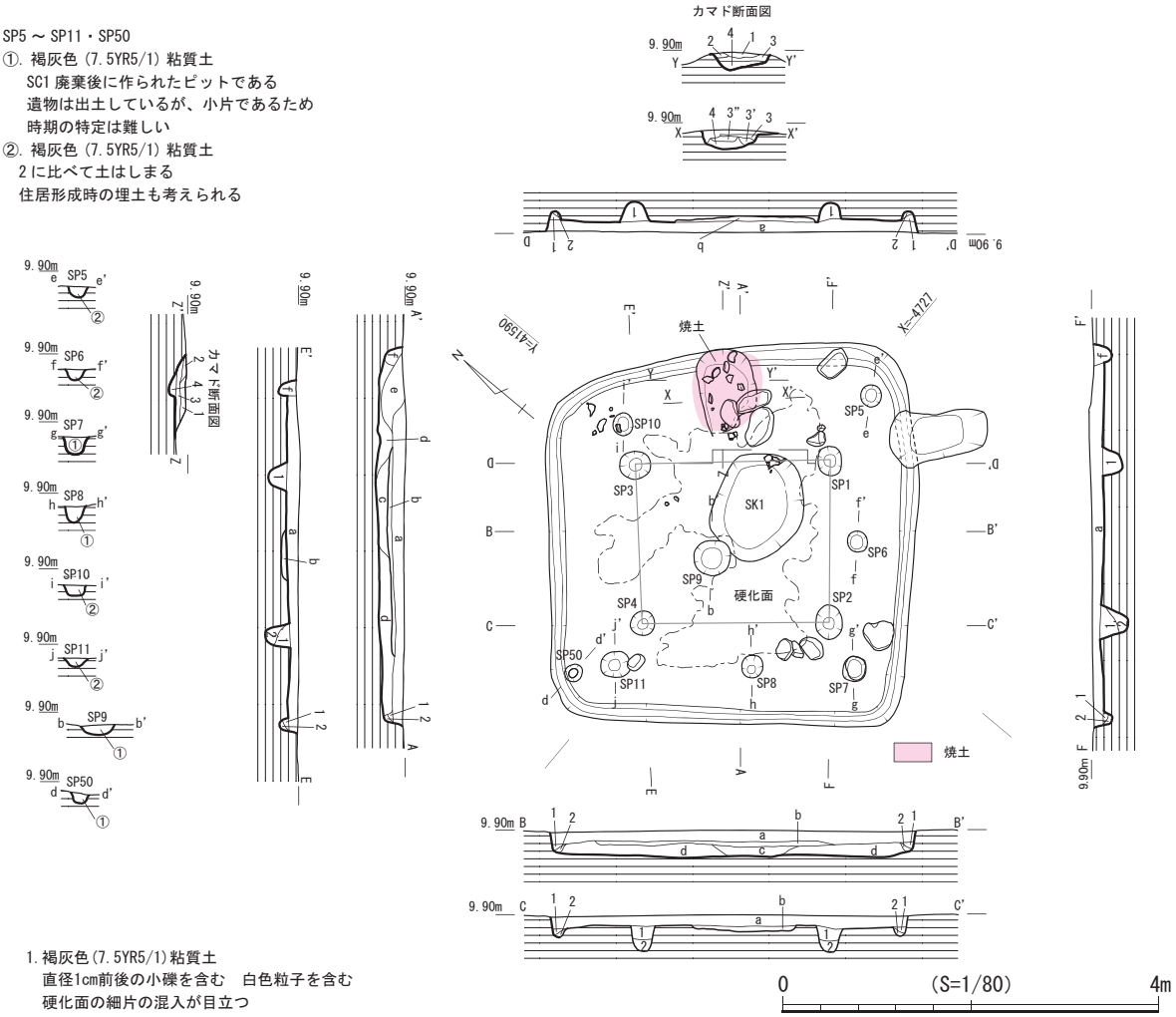
遺物出土状況（北から）

炉検出状況（北から）


炉完掘状況（北から）

図版200　SC1遺構状況

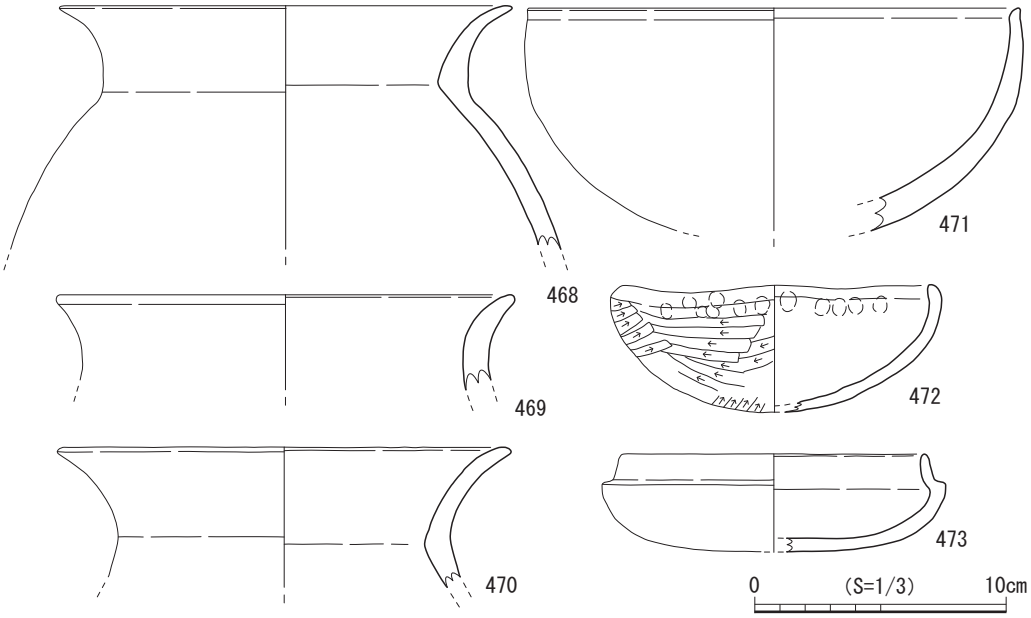
SP5 ～ SP11・SP50
①. 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土
SC1 廃棄後に作られたピットである
遺物は出土しているが、小片であるため
時期の特定は難しい
②. 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土
2 に比べて土はしまる
住居形成時の埋土も考えられる



1. 褐灰色(7.5YR5/1)粘質土
直径1cm前後の小礫を含む　白色粒子を含む
硬化面の細片の混入が目立つ
住居廃棄後の堆積と考えられる
2. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
1層に比して土のしまりがある　また、直径2cm前後の小礫を含む
住居廃棄以前の堆積も考えられる
a. 灰色 (5Y5/1) 粘質土
土のしまりは弱い　住居廃棄後の埋土
b. 褐色 (7.5YR4/4) 硬化土
硬化土ブロック　生活面
c. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
土坑　上面に遺物あり
d. 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土
住居形成時の埋土
e. 焼土堆積土
f. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土
SK1. 生活面形成の際の埋土の一部と考えられる　詳細は不明

カマド内土層：
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
土のしまりは良い　無遺物層　炭化物を少量含む
2. 明赤褐色 (5YR5/8) 粘質土
焼土ブロックを多く含む　炭化物も混じるが焼土ブロックの割合が多い
下位で遺物が出土する　土は 1 に比べて固い
3. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
2 と比べて焼土の混入は少ない　また、2 同様炭化物は含まれる
無遺物層
4. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土
ソデの質に似る　砂質が強い　遺物の出土はない
3'. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
3 と同様であるが、炭化物が多く含まれる点が異なる
3". 明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土
火床である　下位ほど柔らかい　4 が熱変性を受けた層である

第222図　SC1平・断面図(S=1/80)



第223図　SC1出土遺物実測図(S=1/3)

図版201　SC1出土遺物

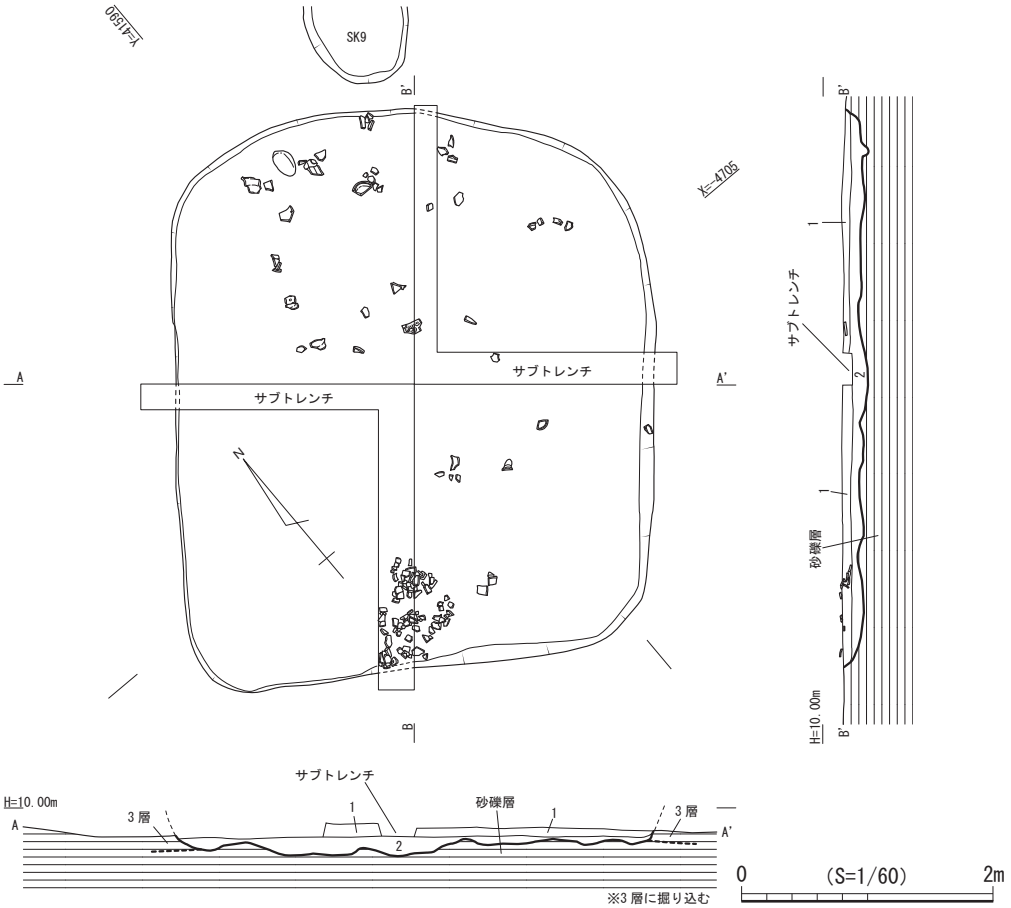
第115表　SC1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
468	甕	口縁部～胴部	(17.4)	残存(9.6)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石	
469	甕	口縁部	(18.0)	残存(3.7)	—	ナデ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/3 にぶい黄橙	良	石英	
470	甕	口縁部	(17.4)	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR4/1 褐灰	良	雲母、長石 赤色粒子	
471	鉢	口縁部～体部	(19.7)	残存(8.8)	—	ナデ	ナデ ケズリ	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙	良	長石、角閃石	
472	椀	口縁部～体部	(12.6)	—	—	ヘラケズリ	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	良	長石、雲母、角閃石 赤色粒子	模倣椀　6世紀後半 2/3残存
473	杯身	口縁部～底部	(12.0)	残存(3.9)	—	ナデ ヘラケズリ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/6 明褐	良	長石、石英	模倣杯　6世紀後半

⑲ TAK201407　1区 SC3(竪穴建物)(第224・225図　図版202・203　表116)

SC3は1区7058グリッドに位置する。規模は長軸中央で4.46m、短軸3.82m、深さ6cm を測る隅丸長方形の平面プランを呈する。全体的にかなり削平を受け柱穴、周壁溝、土坑等の建物内施設は検出できなかった。遺物は床面直上及び覆土から出土し建物内全体から出土した。**474～481**は土師器甕の口縁部～胴部片である。**474**は口縁部が大きく外湾し端部は細くやや尖る。**475～480**は口縁部が緩やかに

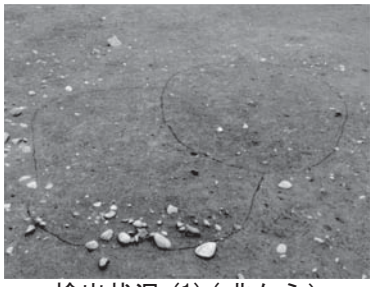
外反し端部は丸い。**481**は口縁部～頸部で直線的に外傾し端部は丸い。**482**、**483**は土師器模倣杯身で口縁部～体部の破片である。いずれも受け部は短く、立ち上がりは1cm 程で直線的に内傾し端部は丸い。**484**、**485**は須恵器杯蓋で口縁部～体部の破片である。口縁部はやや開き気味で端部は丸い。**486～489**は須恵器杯身の口縁部～底部片である。立ち上がりは1～1.2cm で直線的に内傾し端部は丸い。復元口径は11.0～13.2cm である。**490**は口縁部立ち上がりが欠損しているため測定できない。**491**は甑の把手である。須恵器杯身から時期を考えると6世紀中頃～後半が考えられる。



1. 暗褐色（10YR3/3）粘質土
　しまりやや強い　粘性あり
　黄褐色土ブロック（1～3cm 大）少量
　円礫（1～5cm 大）少量混じる
　炭化物・土師を中心に土器片をやや多く含む　覆土
2. 灰黄褐色（10YR4/2）粘性砂質土
　しまり強い　粘性ややあり
　粗砂粒中量　円礫（1～5cm 大）やや多く含む
　炭化物微量に混じる　堀方か
砂礫層．暗灰黄色（2.5Y4/2）円礫（3～20cm 大）多量含む

※SC3 の覆土は他の SC と比較すると円礫が多量混入し、
　生活面に伴う硬化面や床面も明確に検出されなかった
　SC3 南東側には流路（NR）が検出されていることから、
　流路によって乱された可能性もある
※北壁に隣接する SK9 との関連性として、北壁に張り出したカマド的要素も窺える
　SK9 は古墳時代土坑として掲載している（249 頁）
　SC3 の外部施設か？
※第 3 層：暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）
　　3mm～6cm 程度の砂粒・礫を含む 上部にマンガン粒を多く含む

第224図　SC3平・断面図(S=1/60)

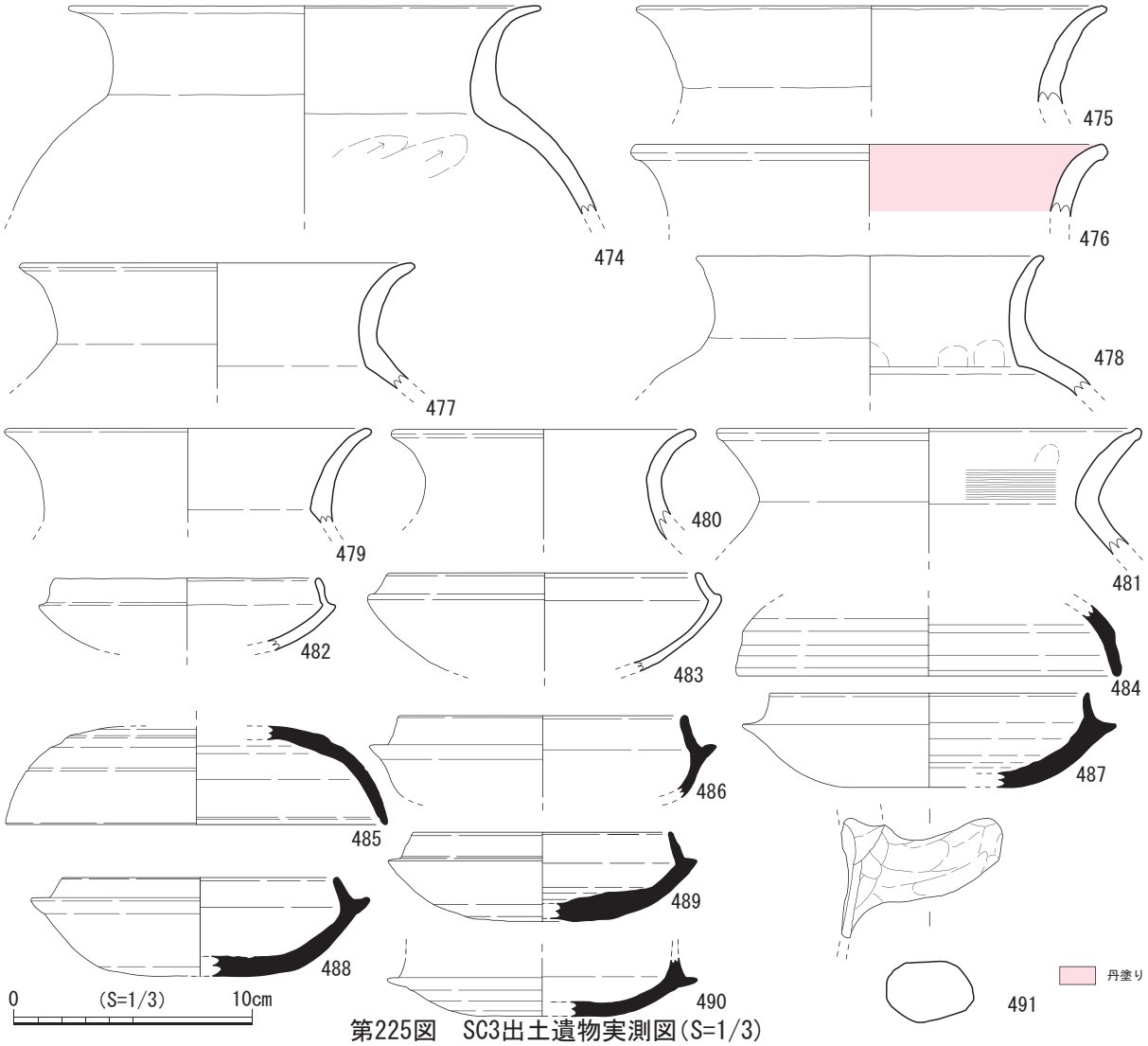


検出状況（1）（北から）

検出状況（2）（北から）

完掘状況（北東から）

図版202　SC3遺構状況



第225図　SC3出土遺物実測図(S=1/3)

図版203　SC3出土遺物

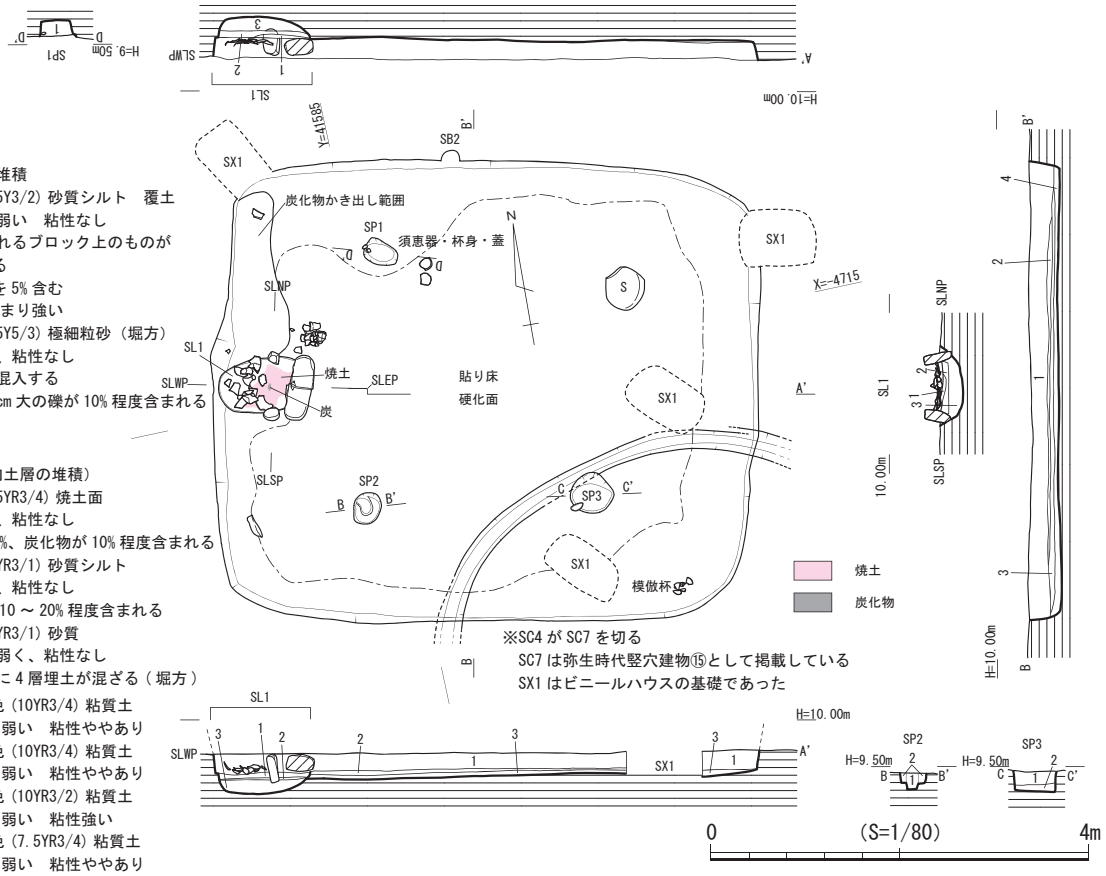
第116表　SC3出土土器観察表

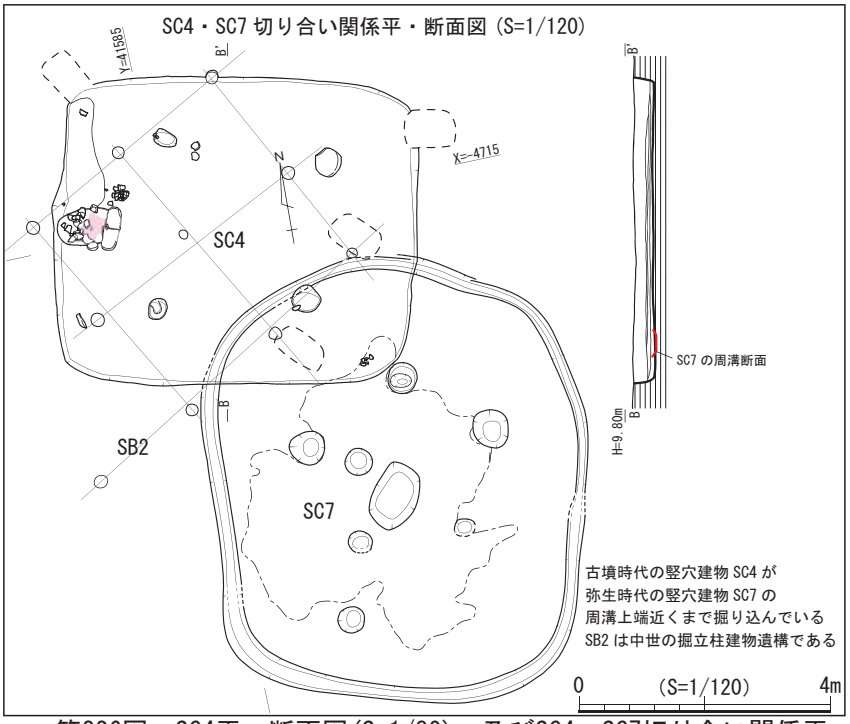
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
474	甕	口縁部～胴部	(19.4)	残存(8.6)	—	ナデ	ナデ	10R5/6 赤	5YR6/1 橙	良	雲母	
475	甕	口縁部	(19.4)	残存(4.0)	—	ナデ	ナデ	2.5YR6/8 橙	5Y5/6 褐灰	良	雲母、長石 褐色粒子	
476	甕	口縁部	(19.7)	残存(3.0)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	良	長石、結晶片岩	口縁部内面に丹塗りあり
477	甕	口縁部～頸部	(16.5)	残存(5.25)	—	ナデ 指オサエ	ナデ ヘラ消し	5YR3/1 黒褐	5YR6/6 橙	良	長石、石英	
478	甕	口縁部～頸部	(14.7)	残存(5.85)	—	ナデ ヘラケズリ	ナデ 指オサエ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、石英	
479	甕	口縁部	(14.8)	残存(3.9)	—	ナデ	ナデ	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	良	長石、石英	
480	甕	口縁部	(12.2)	残存(4.65)	—	ナデ	ナデ	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	良	長石、石英	
481	甕	口縁部～頸部	(17.4)	残存(5.25)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/8 橙	良	雲母、長石 赤色粒子	
482	杯身	口縁部～体部	(11.3)	残存(3.0)	—	ナデ	ナデ	5YR7/4 にぶい橙	15Y6/2 褐灰	良	長石、石英	模倣杯　6世紀後半
483	杯身	口縁部～体部	(13.2)	残存(4.1)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石	模倣杯　6世紀後半
484	杯蓋	口縁部～体部	(16.0)	残存(3.1)	—	ナデ	ハケメ	N6/ 灰	N7/ 灰	良	長石	6世紀後半
485	杯蓋	口縁部～天井部	(15.8)	残存(5.1)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石	
486	杯身	口縁部～体部	(12.0)	—	—	ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	5B6/ 青灰	5B7/ 明青灰	良	長石	6世紀後半
487	杯身	口縁部～底部	(13.2)	—	—	回転ヘラケズリ	ナデ	N7/ 灰	N6/ 灰	良	長石	6世紀後半
488	杯身	口縁部～底部	(11.4)	残存(4.1)	—	ナデ	回転ヘラケズリ	5PB6/1 青灰	5GY6/1 オリーブ灰	良	石英、長石	6世紀後半
489	杯身	口縁部～底部	(10.8)	残存(3.7)	—	ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	N7/ 灰	N7/ 灰	良	長石、灰色粒子	6世紀後半
490	杯身	口縁部～底部	—	残存(2.4)	—	ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	良	雲母、赤色粒子 白色粒子、黒色粒子	6世紀後半
491	甑	把手	—	—	—	ヘラケズリ後 ナデ	ナデ	2.5YR6/6 橙	10YR8/6 黄橙	良	雲母、赤色粒子	

⑳ TAK201407　1区 SC4(竪穴建物)(第226・227図　図版204・205　表117・118)

SC4は1区7058グリッドに位置する。SC7(弥生時代竪穴建物⑮)を切っている。規模は長軸中央で5.80m、短軸4.86m、床面までの深さ18cm、構築面までの深さは30cm を測る。平面プランは隅丸長方形を呈する。建物内施設は、主柱が直径20～48cm を測り、楕円形～円形を呈する3本で構成されている。西壁にカマドが設置され規模は、長軸1.0m、短軸0.58m、深さ18cm を測る。両袖石、焚口の天井石が残存していた。天井石は焚口を塞ぐように置かれ、カマド封じを行った様相である。カマド内は土器片が散乱しその中で高杯の脚部が出土した。支脚と思われる。硬化面は2～4cm の厚さでほぼ全面に施されている。遺物は覆土及び床面からで、床面からの出土場所はカマド周辺、SP1周辺、南東コーナー付近からである。**492～495**は土師器甕の口縁部～胴部片である。**492**は口縁部が緩やかに外反し端部は丸い。口頸部内側はやや器壁が厚く稜をなす。復元口径は16.8cm、残存高は23.7cm である。胎土に結晶片岩粉を含み、赤褐色を呈す。**493**、**494**は口縁部が直線的の外傾し端部は短く外反する。端部は細く丸い。いずれも外面は丹塗りを施す。**495**は口縁部が緩やかに外反し端部が短く外反し細く丸い。結晶片岩粉を含み、赤褐色を呈す。**496**は壺の胴部～底部片である。器壁は薄く外面は薄いハケメ調整を施す。内面は斜め方向のケズリ痕が残る。布留式系土器である。**497**は高杯脚部で開脚部は緩やかに外反し端部は丸い。底径は10cm を測る。**498**は模倣杯蓋である。口縁部の一部が欠損するものの、その他は接合しほぼ完形となった。口径12.8cm、器高3.8cm を測る。天井部から体部にかけて緩やかに丸く傾斜し、口縁部との境に稜をなす。口縁部は短く垂直で端部は丸い。**499**、**500**は須恵器杯蓋である。**499**は口縁部の破片である。口縁部は直線的に外傾し端部はやや尖る。体部と口縁部の境は稜をなす。**500**は口縁部が1/2程欠損する。天井部、体部はほぼ残存する。天井部から体部にかけ

て緩やかに丸く仕上げられ口縁部との境で僅かな凹線をなす。口縁部は垂直気味で端部は短く反る。端部内側は稜をなす。**501**は須恵器杯身である。口縁部の2/3程が欠損する。復元口径13.0cm、器高4.4cmを測る。たちあがりは1.3cmでやや内傾し端部は丸い。**502**は圭頭形鉄鏃片で鏃身下部が欠損する。この竪穴建物の時期を考えると**500**、**501**の須恵器杯蓋、杯身から6世紀第3四半期頃が考えられる。





第226図　SC4平・断面図(S=1/80)、及びSC4・SC7切り合い関係平・断面図(S=1/120)

床面・柱穴検出状況（北から）

遺物出土状況（1）（西から）

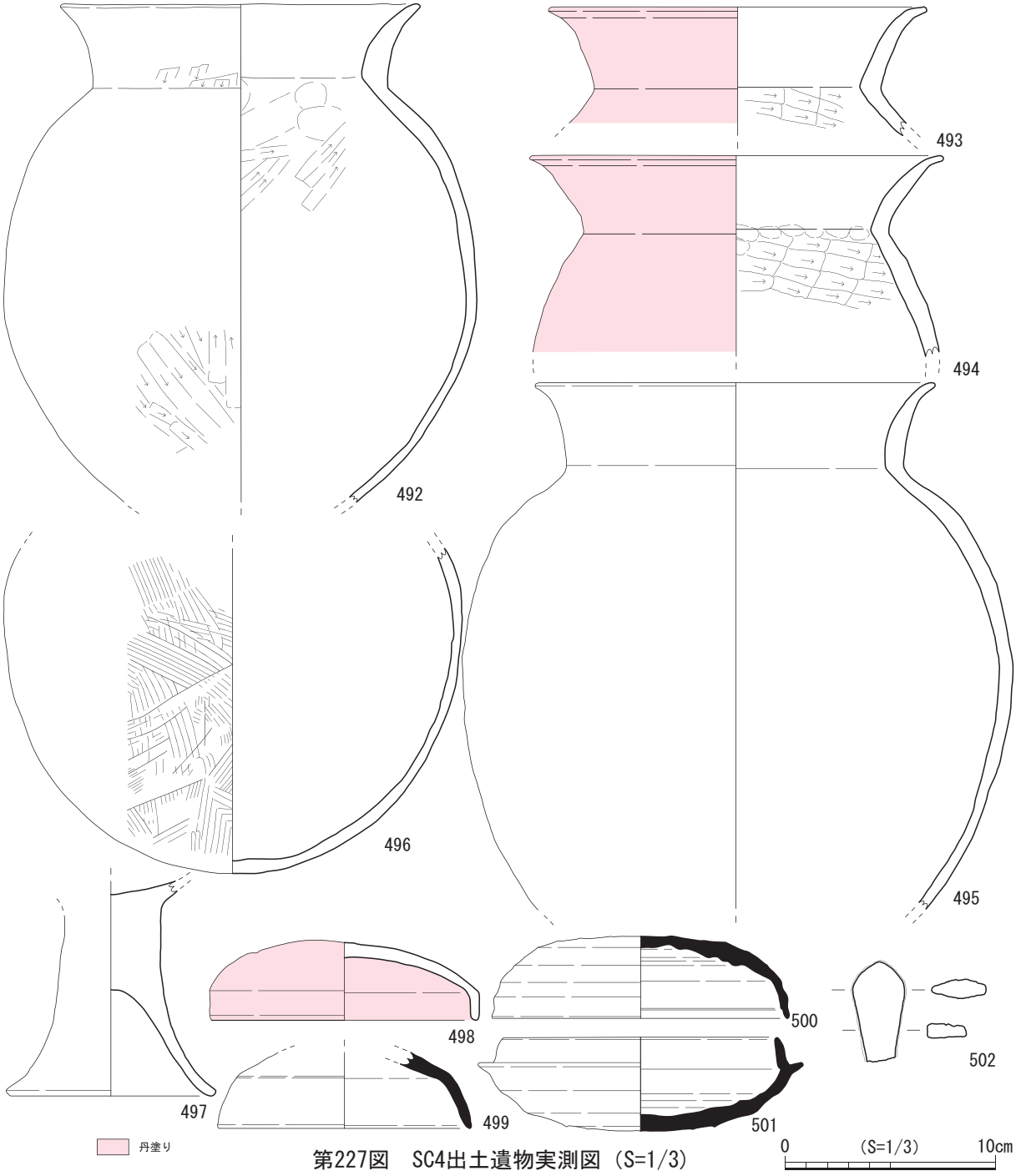
遺物出土状況（2）（西から）

遺物出土状況（3）（東から）

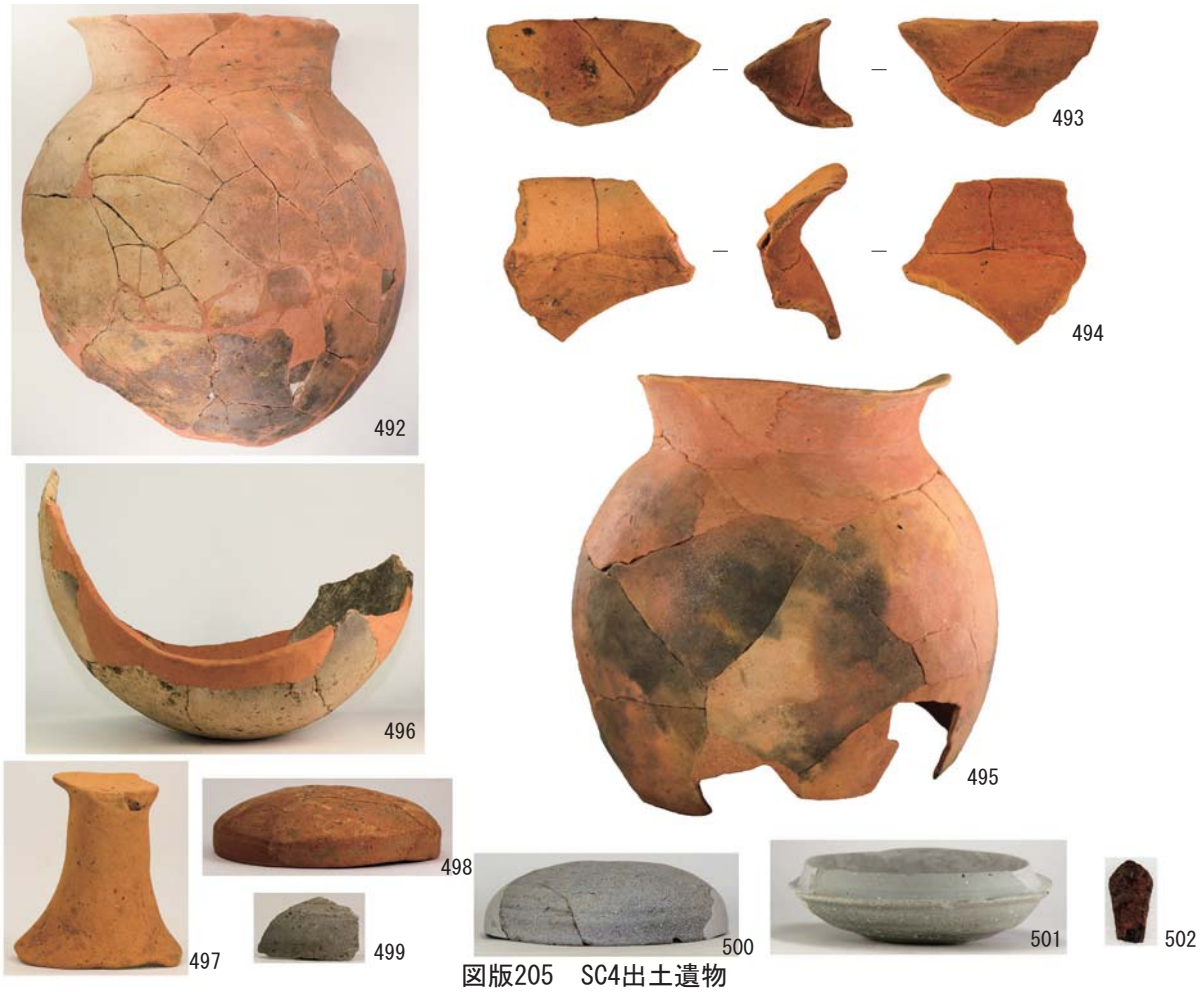
SL1（東から）

完掘状況（北から）

図版204　SC4遺構状況



第227図　SC4出土遺物実測図（S=1/3）



図版205　SC4出土遺物

第117表　SC4出土土器観察表

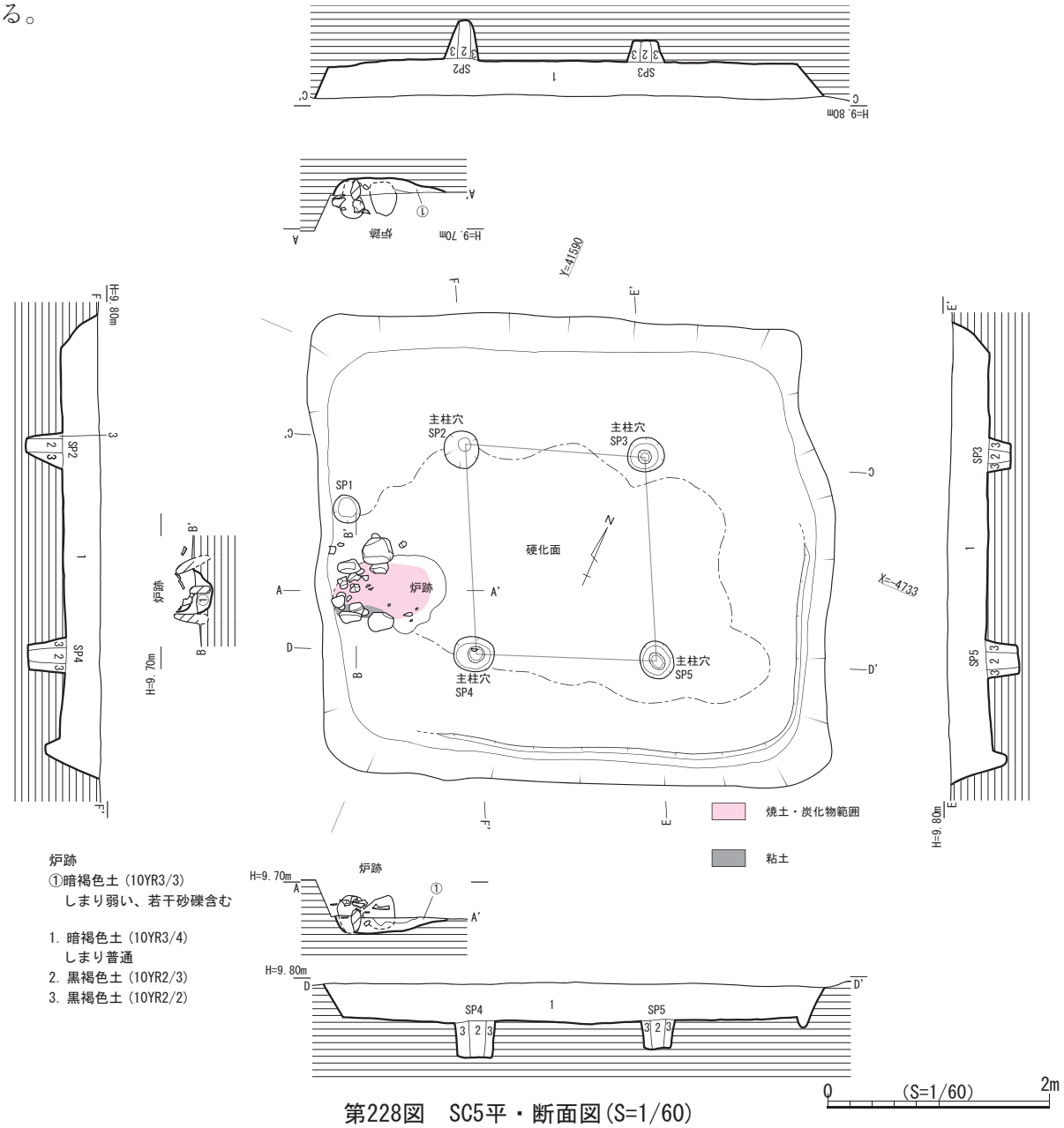
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
492	甕	口縁部～胴部	(16.8)	残存(23.7)	—	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ指オサエ	10R6/6赤橙	10R7/1明赤灰	良	雲母、石英褐色粒子	
493	甕	口縁部～頸部	(17.6)	残存(6.1)	—	ナデ	ケズリ	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR6/6橙	良好	雲母、角閃石、長石、赤色粒子	外面に丹塗り
494	甕	口縁部～胴部	(19.4)	残存(9.5)	—	ナデ指圧痕	指圧痕ケズリ	2.5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	良好	雲母、角閃石、長石、赤色粒子	外面に丹塗り
495	甕	口縁部～胴部	(18.5)	残存(25.0)	—	丁寧なヨコナデ	ナデ指オサエ	10R6/6赤橙	10R6/6赤橙	良	雲母、長石、石英褐色粒子	底部欠損
496	壺	胴部～底部	—	残存(15.4)	—	ハケメ	ケズリ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	良	赤色粒子、石英、長石	一部黒褐色のスス付着あり
497	高杯	脚部	—	残存(10.1)	(10.0)	ナデ	ナデ	7.5YR7/6橙	2.5YR6/6橙	良好	長石、雲母	開脚部欠損
498	杯蓋	接合ほぼ完形	12.8	3.8	—	ナデ	ナデ	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	良	長石、赤色粒子	内外面に丹塗りあり 模倣杯蓋　6世紀後半
499	杯蓋	口縁部～体部	(11.6)	残存(3.6)	—	ナデ回転ヘラケズリ	ナデ	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	良	長石	6世紀後半
500	杯蓋	口縁部～天井部	(14.0)	残存(3.9)	—	ナデ回転ヘラケズリ	ナデ	N6/灰	N6/灰	良	長石、石英	口縁部1/2欠損　6世紀後半
501	杯身	口縁部～底部	(13.0)	残存(4.4)	—	ナデ回転ヘラケズリ	ナデ	N6/灰	N7/灰白	良	長石	口縁部2/3欠損　6世紀後半

第118表　SC4出土金属製品観察表

遺物番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
502	鉄鏃片	鉄	48.00	26.50	9.00	12.24	圭頭形鏃

㉑ TAK201407　1区 SC5(竪穴建物)(第228・229図　図版206・207　表119)

SC5は1区7258グリッドに位置する。規模は長軸中央で4.68m、短軸4.24m、床面までの深さは34cm、構築面まで44cmを測る長方形の平面プランを呈する。主柱は4本で柱痕から10～15cm程の木材を使用していた可能性がある。周壁溝は東側～南側に残存する。幅10～16cm、深さ8～12cmを測る。カマドは西壁中央に構築されている。規模は長軸1.0m、短軸0.7m、深さ15cm程である。両袖石は残存し、中心に石の支脚を設置している。その周りに土器片の散乱を確認する。硬化面は中心から柱穴付近に広がる。遺物は覆土及び床面からの出土である。**503**、**504**は土師器甕の口縁部～胴部片である。**504**は口縁部を欠損する。**503**は口縁部が外湾し端部は丸く、器壁は厚い。**503**、**504**ともに胴部全体に被熱を受けており剝離が著しい。**505**は須恵器蓋で口縁部片である。口縁部は緩やかに内湾し端部は丸い。**506**、**507**は須恵器杯身である。**506**は完形品でやや全体的に歪む。口径は12.2cm、器高5.0cmを測る。立ち上がりは9mmと短い。**507**は底部が欠損する。復元口径14.6cmで口縁部は直線的で内傾し、端部は丸い。立ち上がりは1.0cm程である。建物の時期は須恵器杯身から6世紀第4四半期頃が考えられる。



第228図　SC5平・断面図(S=1/60)

床面検出状況（北東から）

床面・柱穴検出状況（北東から）

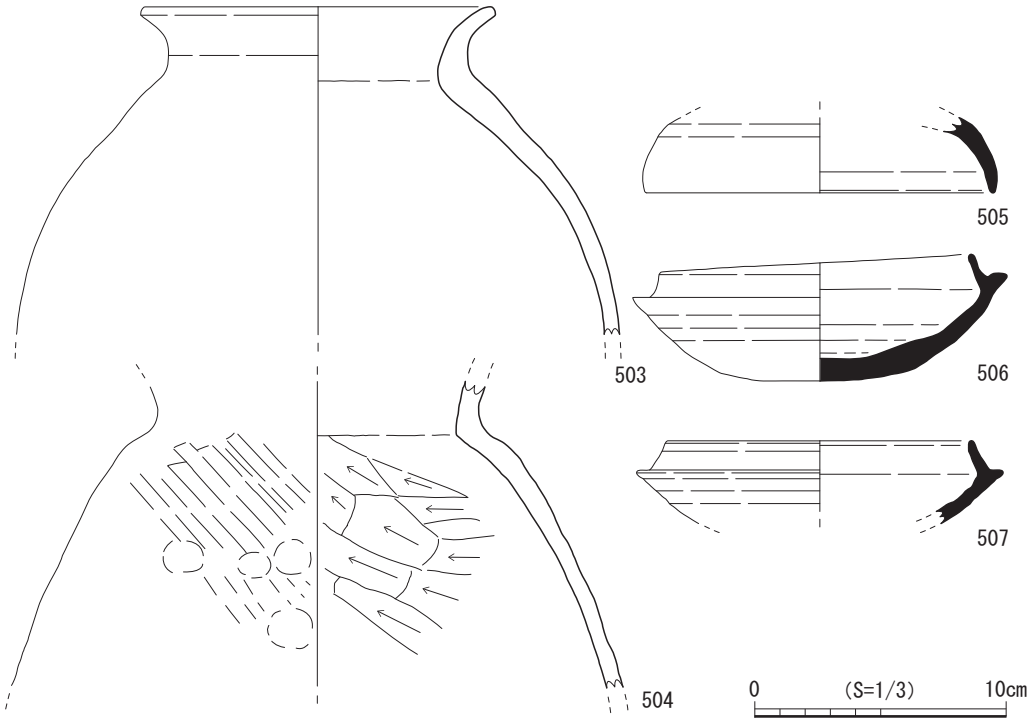
完掘状況（北東から）

炉検出状況（東から）

炉完掘状況（東から）

遺物出土状況（東から）

図版206　SC5遺構状況



第229図　SC5出土遺物実測図(S=1/3)

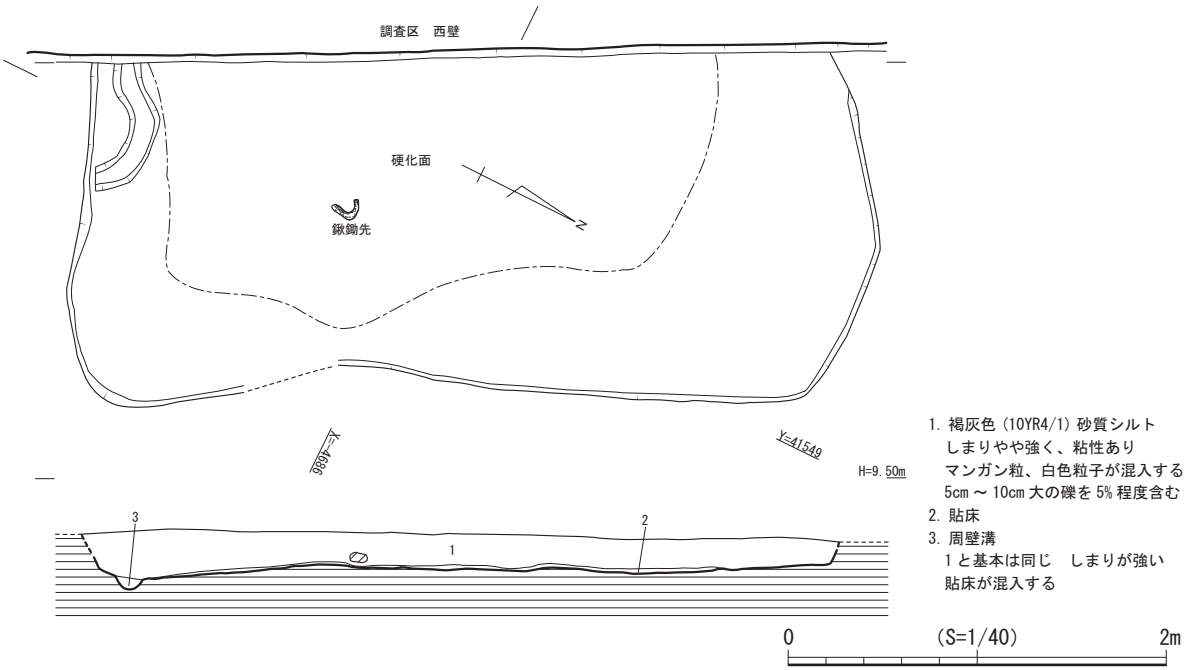
第119表　SC5出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
503	甕	口縁部～胴部	(13.6)	残存(12.95)	—	ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	良	長石	
504	甕	頸部～胴部	胴部径(24.2)	残存(12.0)	—	ナデ・ヘラケズリ指オサエ	ナデヘラケズリ	5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	良	長石、石英	
505	杯蓋	口縁部	(13.8)	残存(3.0)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	N6/灰	N6/灰	良好	長石	6世紀後半
506	杯身	完形	12.2	5.0	—	回転ヘラケズリ	回転ナデ	2.5YR7/6灰黄	5Y7/1灰白	良	長石	6世紀後半
507	杯身	口縁部～体部	(14.6)	残存(3.2)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	N6/灰	N6/灰	良好	灰色粒子	6世紀後半

図版207　SC5出土遺物

㉒ TAK201407　4区 SC10(竪穴建物)(第230・231図　図版208・209　表120～123)

SC10は4区6854グリッドに位置する。SC12(弥生時代竪穴建物⑱)を切っている。規模は長軸4.28m、短軸1.72m+、深さ18cm を測る。平面プランは方形か長方形であろう。2/3程は調査区外である。硬化面と周壁溝の確認が出来た。硬化面は2～4cm 程で周壁溝は幅16cm、深さ6cm 程を測る。出土遺物は床面直上から鉄製鍬鋤先が出土した。その他は覆土、床面からの出土である。**508**は土師器甕口縁部片である。口縁部はくの字で端部は丸い。外面はハケメ調整を施す。**509**は須恵器杯身口縁部片である。立ち上がりは先端部が欠損するが短い。**510**は鉄鏃の柄？断面形状は丸い。**511**はＶ字形鉄製鍬鋤先でほぼ完形品である。全長10.7cm、全幅14.4cm、風呂長6.8cm、風呂幅8.8cm、刃幅4.0cm、中央の刃幅1.5cm を測る。**512**は石製紡錘車である。石材は滑石製で削り、磨き痕が残る。形状は載頭円錐形で穿孔は両方からである。時期は須恵器杯身から6世紀第4四半期～7世紀第1四半期頃であろう。



第230図　SC10平・断面図(S=1/40)

検出状況（北東から）

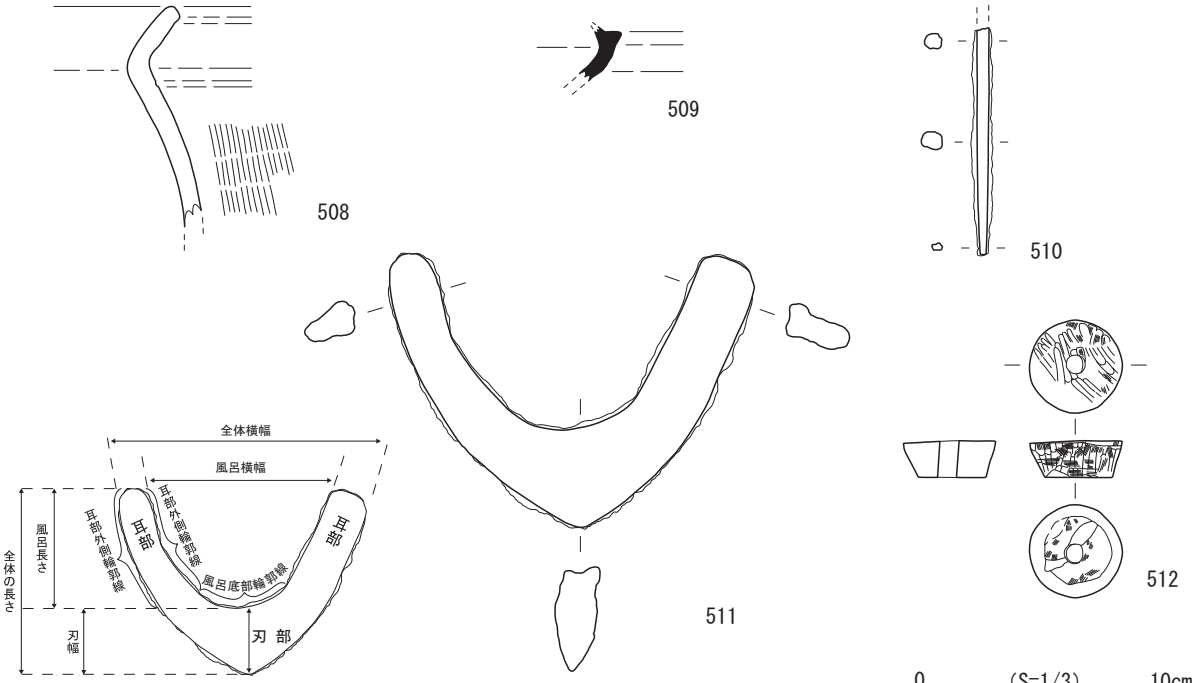
完掘状況（北から）

紡錘車出土状況

鉄鏃柄遺物出土状況

鍬鋤先遺物出土状況

図版208　SC10遺構状況



第231図　SC10出土遺物実測図（S=1/3）

図版209　SC10出土遺物

第120表　SC10出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
508	甕	口縁部	(27.7)	残存(8.7)	—	ナデ ハケメ	ナデ	5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石	
509	杯身	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰	良	長石	口縁部先端欠損　6世紀後半

第121表　SC10出土金属製品観察表

遺物番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
510	鉄鏃柄	鉄	90.00	8.00	7.00	8.11	

第122表　SC10出土金属製品（鍬鋤先）観察表

遺物番号	器種	材質	全長(mm)	全幅(mm)	風呂長(mm)	風呂幅(mm)	刃幅(mm)	重量(g)	備考
511	鍬鋤先	鉄	107.00	144.00	68.00	88.00	40.00	135.00	V字形鍬鋤先

第123表　SC10出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
512	紡錘車	滑石	37	36.5	14.5	28.5	完形

㉓ TAK201407　4区 SC11(竪穴建物)(第232図　図版210)

SC11は4区6654、6854グリッドに位置する。規模は長軸中央で5.04m、短軸4.40m、深さ12cm を測る長方形を呈する平面プランである。南西コーナーが一部調査区外である。柱穴、周壁溝、硬化面、カマド等の屋内施設は確認できていない。南壁近くに円礫が3個検出した。カマドの袖石かもしれない。遺物は覆土から出土した。遺物は弥生式土器の甕胴部片、底部片、頸部片等の小細片。土師器の甕胴部片等である。しかしながら時期を決定する決め手の土器がないため弥生時代か古墳時代かの判断がつかない。竪穴建物が長方形の平面プランのため弥生後期の建物も考えられるし、古墳時代の建物と考えても不自然ではない。今回は古墳時代の建物跡としておく。

第232図　SC11平・断面図(S=1/60)

検出状況（北から）

完掘状況（北から）

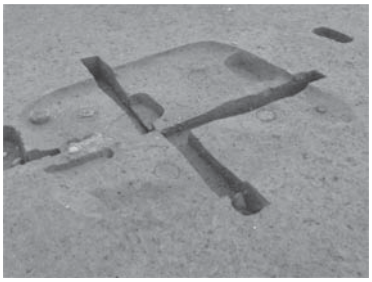
台石か？

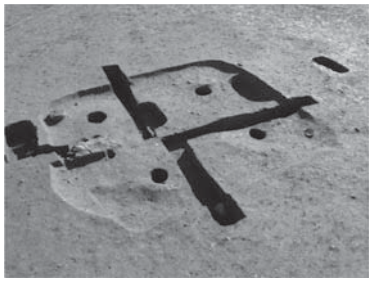
図版210　SC11遺構状況

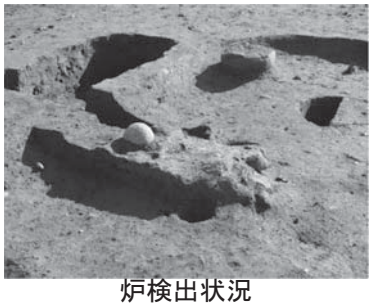
㉔ TAK201407　2区 SC14(竪穴建物)(第233・234図　図版211・212　表124)

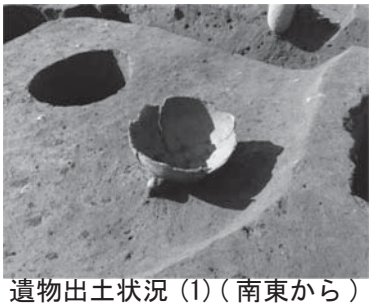
SC14は2区7456グリッドに位置する。規模は長軸中央で3.72m、短軸3.50m、深さ16cm を測る正方形の平面プランである。主柱は4本で直径22～40cm、深さ36～50cm を測る。焼土が北壁中央で長軸0.60m、短軸0.44m、深さ12cm の範囲で確認した。この焼土には中央に円礫が位置していたことからカマドの支脚と思われる。カマドの残りは悪く、全体が判然としない。遺物は覆土及び床面からの出土である。**513**は土師器甕の胴部～底部である。破片は接合し胴部～底部はほぼ完形となった。内面はケズリ痕が残る。**514～516**は口縁部の破片である。**517**は土師器甕の口縁部～胴部片である。口縁部は僅かに外傾し端部は丸い。**518**は土師器の壺で胴部片である。外面はナデ、内面はケズリ痕が残る。**519**は土師器の椀で1/2が欠損する。底部は丸く、口縁端部は短く反りやや尖る。**520**は須恵器の蓋？である。口縁端部内側を僅かにつまみ上げている。**521**、**522**は土師器の甑把手である。**521**は牛角状で**522**は断面が丸く楕円形である。胴部へは**521**が挿入法で**522**が貼り付け法である。**523**は土師器甕である。口縁部～底部にかけて1/2が残存し、口縁端部は欠損する。外面はハケメ調整を施し内面は荒いケズリ痕が残る。胎土に結晶片岩粉を含む。全体的に粗いつくりである。**524**、**525**は土師器で模倣杯蓋である。**524**は口縁部は1/4残存する。口径14.2cm、器高は4.3cm。**525**は1/3が残存する。復元口径13.9cm、器高は4.1cm である。口縁端部はいずれも丸い。**526**、**527**は土師器で模倣杯身である。**526**は口縁部が僅かに欠損するがほぼ完形である。外面はケズリ痕が残り、内面はナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは短く内傾し端部は丸い。受け部は僅かに稜をなす。全体的に粗雑である。**527**は口縁部の小破片である。立ち上がりは**526**よりやや長く直線的に内傾し端部は丸い。受け部は短く稜をなす。時期は模倣杯身、蓋から6世紀第4四半期～7世紀第1四半期頃と考えられる。

検出状況（北北西から）


床面検出状況（北北西から）

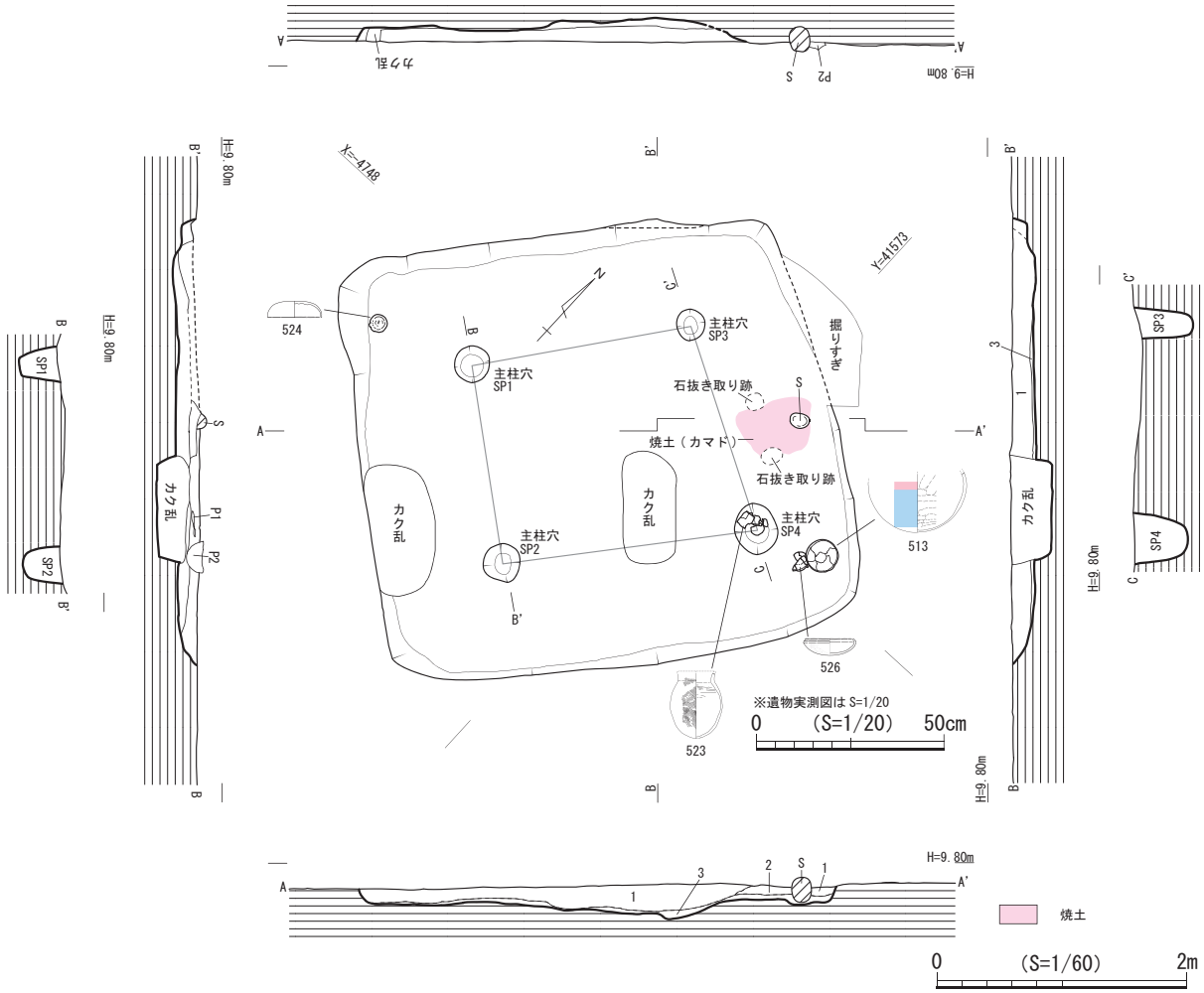

完掘状況（北北西から）


炉検出状況


遺物出土状況 (1)（南東から）

遺物出土状況 (2)（北から）

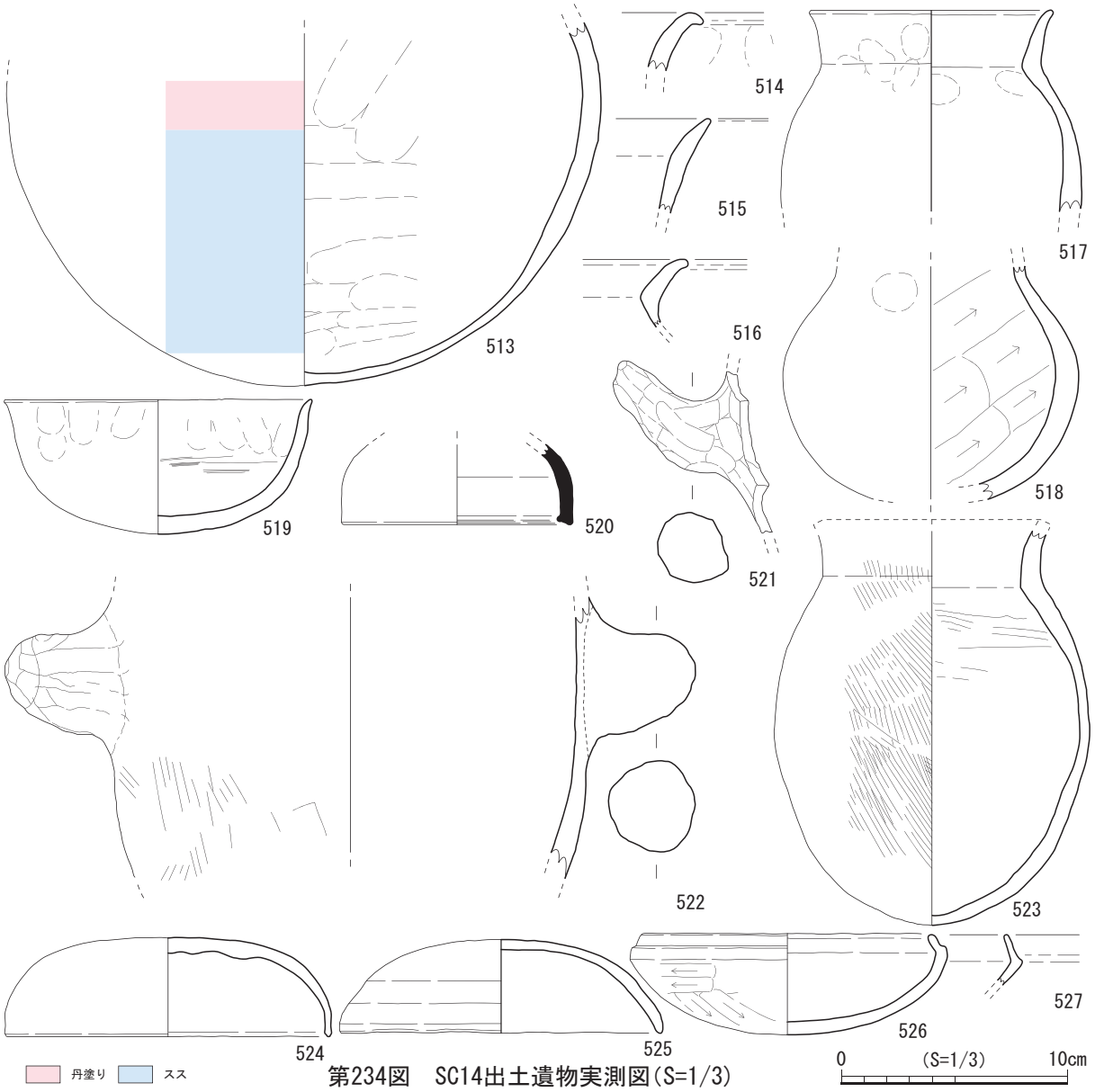
図版211　SC14遺構状況



1. 黒褐色土（10YR3/2）しまりあり　粘性強い
   5mm ～ 2cm の炭化物を約 2% 含む
   3 ～ 40cm 程の礫（板石含む）を含む
   土器含む
2. 浅黄橙色土（7.5YR8/4）しまりあり　粘性強
   橙色土（7.5YR6/6）を約 10% 混入する
   炭化物含む　炉跡
3. 極暗褐色土（7.5YR2/3）しまり強い　粘性あり
   中央付近に集中して 5 ～ 10cm 大の石を含む
   床面整地層と考えられる
   硬化した面は確認できない

SP1 ～ SP4: 主柱穴と考えられる
SP1: 暗褐色土（10YR3/3）しまり弱い　粘性強い　粘質土
　2cm 大の小石を約 2% 含む
SP2: 暗褐色土（10YR3/3）しまり弱い　粘性強い　粘質土
　2 ～ 6cm 大の小石を約 2% 含む
SP3: 黒褐色土（10YR3/2）しまり弱い　粘性強い　粘質土
　1cm 大の小石を約 1% 含む
SP4: 暗褐色土（10YR3/3）しまり弱い　粘性強い　粘質土
　2 ～ 3cm 大の小石含む

第233図　SC14平・断面図(S=1/60)



第234図　SC14出土遺物実測図(S=1/3)

第124表　SC14出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
513	甕	胴部～底部	胴部径(26.2)	残存(16.1)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	良	赤色粒子、雲母 石英、結晶片岩	外面に黒褐色のスス付着あり
514	甕	口縁部	—	—	—	ナデ 指オサエ	ナデ	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	良	長石、雲母	
515	広口壺	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR5/2 にぶい褐	5YR5/3 にぶい赤褐	良好	金雲母、赤色粒子 石英、結晶片岩	
516	小型壺	口縁部	(11.4)	残存(2.0)	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR5/2 灰褐	良	長石、石英	
517	壺	口縁部～胴部	(10.6)	残存(9.7)	—	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	2.5YR5/8 明赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	良	雲母、長石 褐色粒子	
518	壺	胴部	—	残存(10.2)	—	ナデ 指オサエ	ヘラケズリ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、石英 角閃石	
519	椀	口縁部～底部	(13.4)	—	—	ハケメ・ヘラ消し 指オサエ	ナデ 指オサエ	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/1 褐灰	良	長石、石英	1/2欠損
520	椀か蓋？	口縁部	(10.0)	残存(3.6)	—	自然釉	回転ナデ	5Y6/2 灰オリーブ	2.5Y7/1 灰白	良好	長石、黒色粒子	
521	甑	把手	—	—	—	ケズリ後ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5YR5/8 明赤褐	良	赤色粒子、雲母	
522	甑	把手	—	残存(12.3)	—	ケズリ後ナデ ハケメ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/3 にぶい橙	良	石英、雲母 角閃石	
523	甕	口縁部～底部	—	残存(17.3)	—	ハケメ	ケズリ 指オサエ	5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/2 灰褐	良	雲母、長石、赤色粒子 黒色粒子、白色粒子	口縁部先端欠損
524	杯蓋	ほぼ完形	14.2	4.3	—	ヘラケズリ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、赤色粒子	模倣杯。風化激しく外面はウロコ状に剥離している
525	杯蓋	口縁部～体部	(13.9)	残存(4.1)	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	長石、雲母 赤色粒子	模倣杯蓋
526	杯身	ほぼ完形	12.6	4.4	—	ヘラケズリ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	赤色粒子、角閃石	模倣杯 6世紀後半～7世紀前半
527	杯身	口縁部	(16.6)	残存(2.2)	—	ミガキ	ミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	良	赤色粒子、雲母	模倣杯 6世紀後半～7世紀前半

図版212　SC14出土遺物

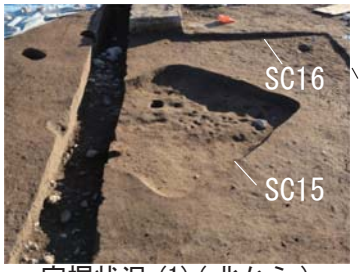
㉕ TAK201407　2区 SC15(竪穴建物)(第235～237図　図版213～215　表125)

SC15は2区7454、7456グリッドに位置しSC16を切っている。規模は長軸中央で4.44m、短軸4.16m、深さ20cmを測る長方形の平面プランである。柱穴は1本を確認した。直径40cm程である。周壁溝は痕跡を確認出来なかった。北壁付近に焼土と炭化物の堆積を検出したがカマドらしき様相ではない。遺物は床面及び炉、覆土から出土し建物内部のほぼ全域から出土した。掲載土器は床面、炉跡から出土した土器を中心に記載する。**528～539**は土師器の甕口縁部～底部片である。**528～533**は口縁部～頸部片である。**528**、**532**は直線的に外傾し、端部は丸い。**529**はやや内湾し、端部は丸い。**530**、**531**は直線的に外傾し端部は短く反る。端部は方形である。**533**は直線的に外傾し端部は丸い。頸部は緩やかなくの字を呈する。**534**は口縁部は直線的に外傾し、端部は丸い。内外面は薄いハケメ調整が残る。**535**は頸部～胴部片である。内外面は僅かにハケメ調整が残る。**536～538**は胴部～底部片でいずれも丸底である。**539**は口縁部～胴部片である。口縁部は直線的に外傾し、端部は窪む。胴部はやや張り器壁は薄い。**540～545**は壺の口縁部～胴部片である。**540**、**541**は短頸壺の口縁部片で直線的に短く外傾する。端部は丸い。**542**は口縁部片で端部は丸い。**543**は二重口縁壺で端部は丸い。**544**は頸部～胴部片である。口縁端部は欠損する。内外面はハケメ調整が残る。**545**は広口壺の口縁部～胴部片である。口縁部は短く外反する。端部は方形を呈する。内面は僅かにケズリ痕が残る。**546**、**547**は鉢の口縁部～体部片である。**546**は口縁部が短く外反し、端部は丸い。**547**は口縁部が僅かに内湾し端部は丸い。**548～552**は高杯杯部片～脚部片である。**548**、**549**は杯部片である。いずれも口縁部が直線的に外傾し、端部は丸く器壁は薄い。**550～552**は高杯脚部片である。**550**は脚柱状部はやや開き、開脚部は低く開き、内側は鋭角な稜を成す。**551**は緩やかな八の字を呈し開脚部は短く開く。端部は丸い。**552**は大きく八の字に開く。開脚部端部は欠損する。**553～555**はミニチュア土器である。**553**は小形丸底壺で口縁部、底部が欠損する。**554**は椀で口縁部が欠損する。**555**は椀で完形品である。これらの土器から時期を考えると4世紀後半～5世紀前半頃が考えられる。

検出状況（北から）

床面検出状況（北から）

SC15 遺物出土状況（北から）

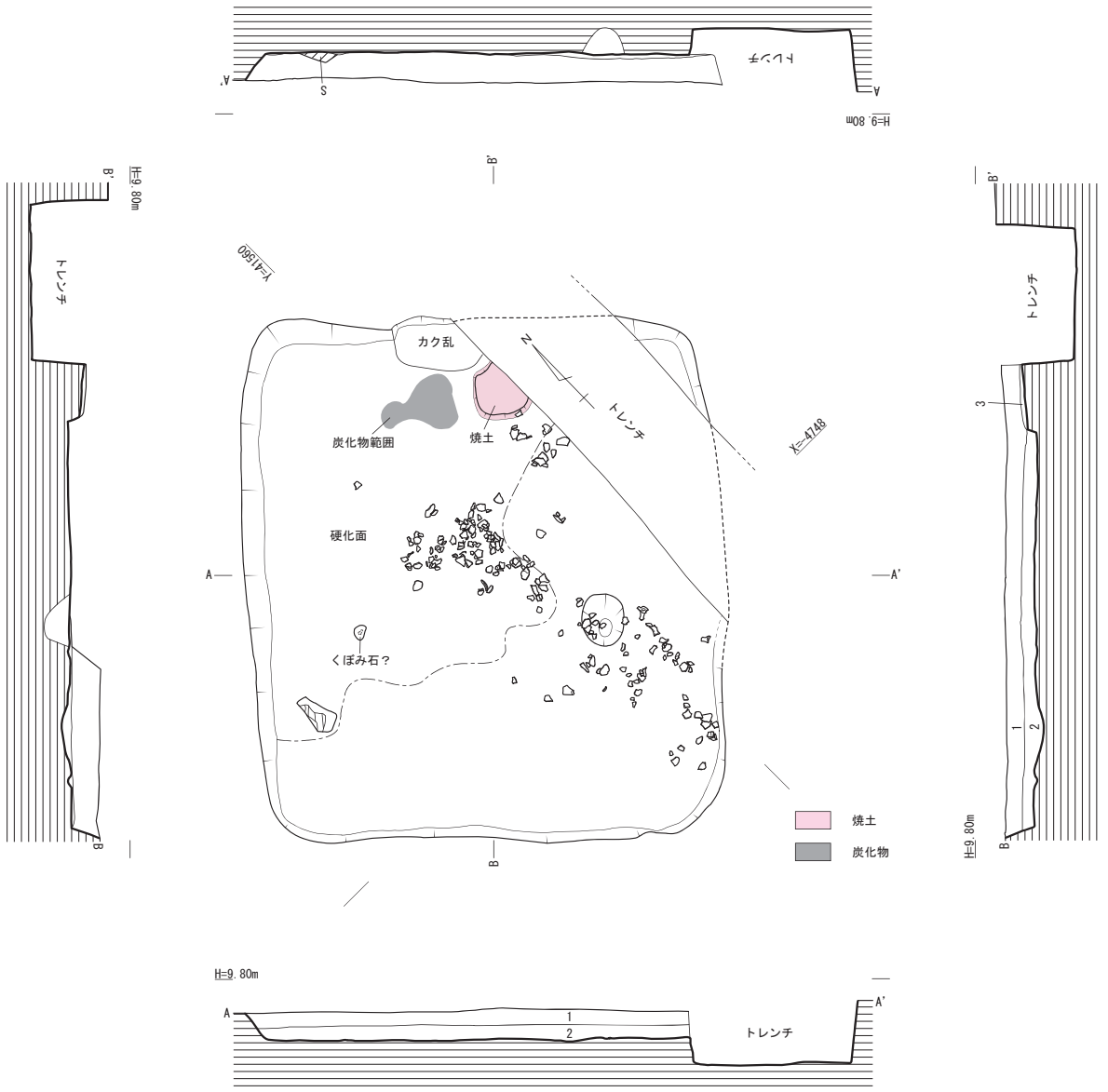


完掘状況 (1)（北から）

完掘状況 (2)（北から）

焼土断面状況（南東から）

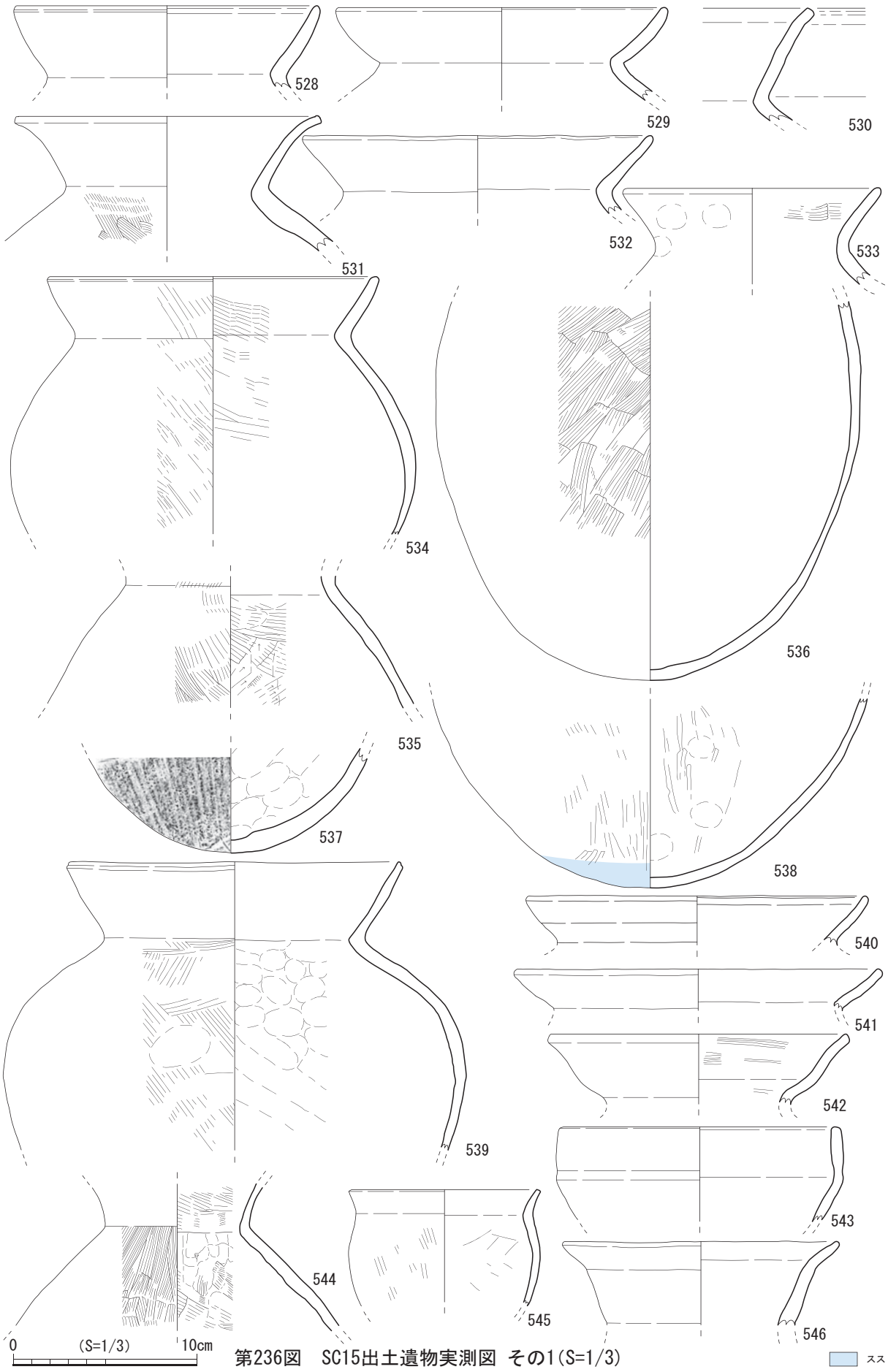
図版213　SC15遺構状況



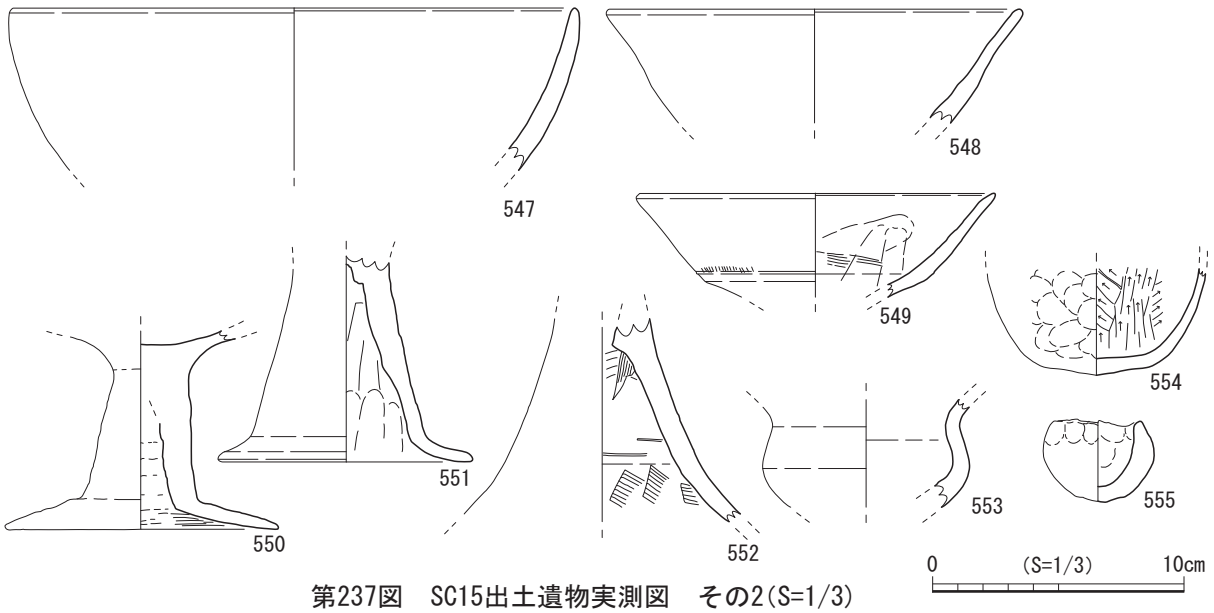
1. 黒褐色 (2.5Y3/1) 極細粒砂　しまりやや強い　粘性弱い
焼土粒・炭化粒を約 5% 含む
2. 黒褐色 (2.5Y3/2) 極細粒砂　しまりやや弱い　粘性やや有
炭化粒を約 5% 含む
3. 焼土面

0　(S=1/60)　2m

第235図　SC15平・断面図(S=1/60)



第236図　SC15出土遺物実測図 その1(S=1/3)



第237図　SC15出土遺物実測図　その2(S=1/3)

第125表　SC15出土土器観察表

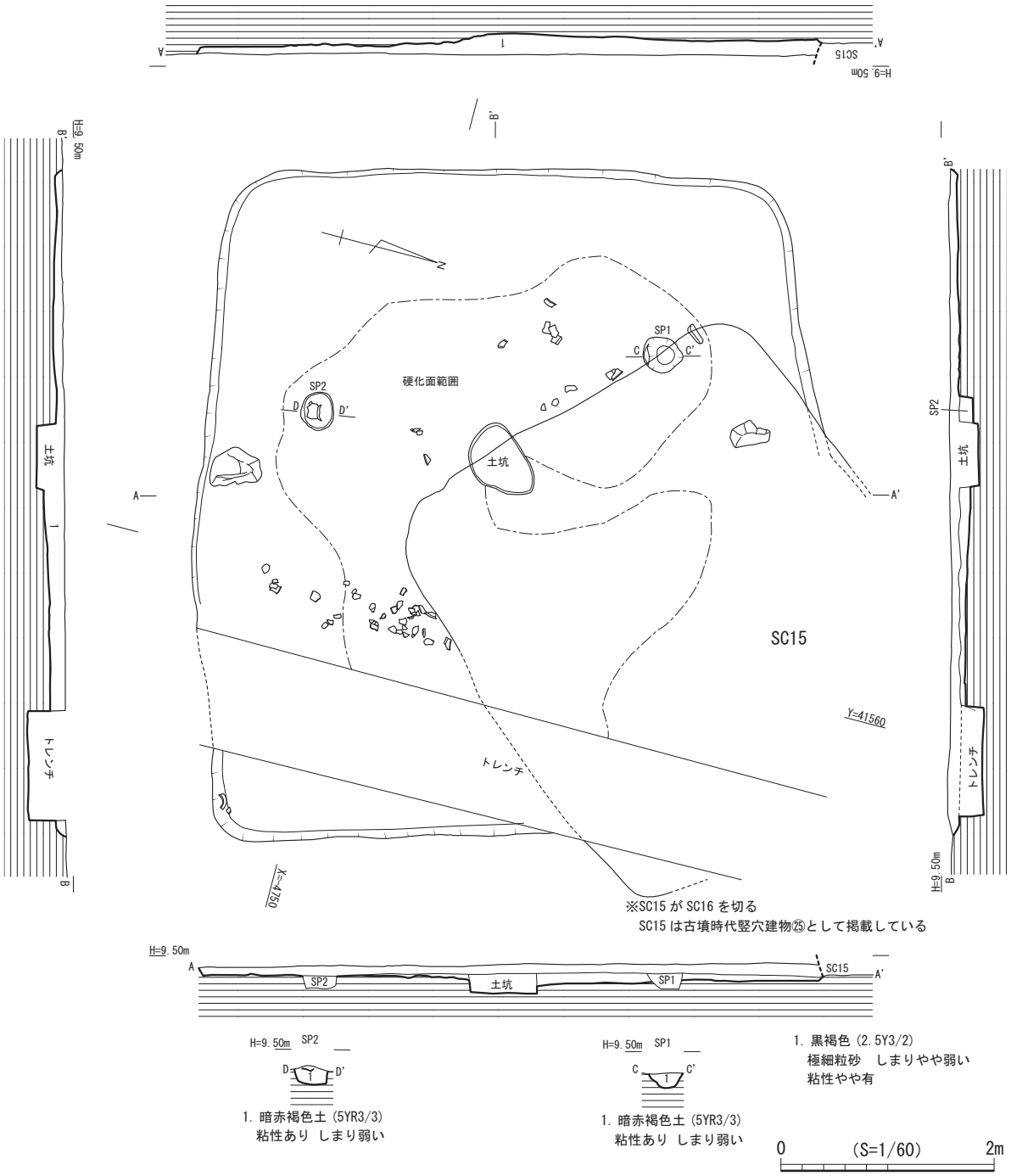
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
528	甕	口縁部～頸部	(16.6)	残存(4.3)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/6橙	良	結晶片岩　黒色粒子　灰色粒子　白色粒子　赤色粒子	
529	甕	口縁部～頸部	(17.6)	—	—	ハケメ　ナデ消し	ハケメ　ナデ消し	7.5YR7/4にぶい橙	5YR7/6橙	良	石英　褐色粒子	
530	甕	口縁部～頸部	—	残存(6.1)	—	ナデ	ナデ	10YR8/2浅黄橙	10YR7/2にぶい橙	良	石英　赤色粒子	
531	甕	口縁部～頸部	(16.1)	残存(7.2)	—	ナデ　ハケメ	ナデ	7.5YR8/2灰白	7.5YR8/2灰白	良	長石	
532	甕	口縁部～頸部	(18.8)	残存(4.2)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR8/4浅黄橙	良	石英　褐色粒子	
533	甕	口縁部～頸部	(13.5)	残存(5.2)	—	ナデ　指オサエ	ハケメ　ナデ消し	10YR8/3浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	良	長石	
534	甕	口縁部～胴部	(17.8)	残存(13.5)	—	ハケメ　ナデ	ハケメ　ナデ	5YR7/6褐灰	5YR7/8橙	良	結晶片岩　黒色粒子　角閃石　白色粒子　赤色粒子　長石	
535	甕	頸部～胴部	—	残存(7.1)	—	ハケ　ナデ	ハケ　ナデ	10YR7/2にぶい橙	10YR7/2にぶい橙	良	石英　雲母　角閃石　褐色粒子	
536	甕	体部～底部	—	残存(20.5)	—	ハケメ	ナデ	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR7/2明褐灰	良好	石英　雲母　角閃石　褐色粒子　長石	
537	甕	底部	—	—	—	カキメ	指圧痕　ナデ	7.5YR7/2明褐灰	5YR7/4にぶい橙	良	石英　雲母　角閃石　褐色粒子	器壁が薄い　布留式系甕
538	甕	胴部～底部	—	残存(10.2)	—	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/1灰白	良	石英　雲母　角閃石長石　褐色粒子	器壁が薄い　布留式系甕
539	甕	口縁部～胴部	(17.8)	残存(15.6)	—	ハケメ	ナデ	5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	良好	角閃石　長石　石英　褐色粒子	布留式系甕
540	壺	口縁部	(18.2)	—	—	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	良	雲母　石英　褐色粒子	
541	壺	口縁部	(19.6)	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	良	角閃石　長石　石英　褐色粒子	
542	壺	口縁部	16.0	—	—	ナデ	ハケメ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	良	雲母　角閃石　長石　赤色粒子	
543	壺	口縁部	(14.8)	残存(5.1)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	10YR8/56黄橙	良	長石　褐色粒子	二重口縁
544	壺	頸部～胴部	—	—	—	ナデ　ハケ	ナデ	10R4/1暗赤灰	10R5/4赤褐色	良	石英　長石	
545	壺	口縁部～胴部	(10.0)	残存(6.3)	—	ナデ	ナデ　ケズリ	10YR4/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	良	雲母　赤色粒子　白色粒子　黒色粒子	
546	鉢	口縁部～体部	(14.6)	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/2灰褐	良	褐色粒子　石英	
547	鉢	口縁部	(22.2)	残存(6.4)	—	ナデ	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	良	赤色粒子　石英	
548	高杯	杯部	(16.2)	残存(6.4)	—	ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐色	5YR6/8橙色	良	砂粒を含む	
549	高杯	杯部	(14.0)	—	—	ハケメ　ナデ消し	ハケメ　ナデ消し　指ナデ	2.5YR6/6橙	2.5YR5/4にぶい赤褐	良	長石	
550	高杯	脚部	—	残存(7.8)	(10.7)	ハケメ　指ナデ	絞り痕	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	良好	長石　雲母　角閃石	
551	高杯	脚部	—	—	(10.0)	ナデ	ケズリ　指ナデ	2.5YR7/4浅黄橙	2.5YR6/4にぶい橙	良	長石　黒色粒子	
552	高杯	脚部	—	—	—	ハケメ　ナデ消し	ヘラケズリ	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	良	長石	
553	ミニチュア壺	体部～底部	—	残存(4.2)	—	ナデ	ナデ	7.5YR4/3明褐灰	7.5YR5/2灰褐色	良	砂粒を含む	手づくね土器
554	ミニチュア椀	頸部～体部	—	残存(4.2)	—	指圧痕　ナデ	ヘラケズリ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	良	赤色粒子　石英	手づくね土器
555	ミニチュア椀	完形	3.5	3.2	—	ハケメ　ヘラ消し　指オサエ	ナデ　指オサエ	10YR5/4にぶい赤褐	10YR4/2灰黄褐	良好	長石　雲母	手づくね土器

図版214　SC15出土遺物 その1

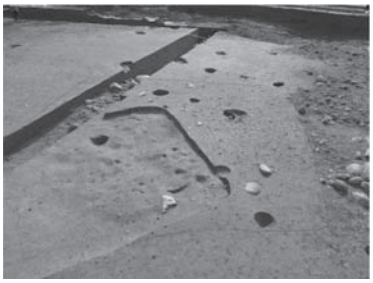
図版215　SC15出土遺物　その2

㉖ TAK201407　2区 SC16(竪穴建物)(第238・239図　図版216・217　表216)

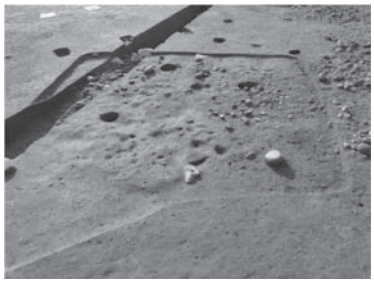
SC16は2区7454・7456グリッドに位置しSC15から切られている。規模は長軸中央で6.24m、短軸5.8m、深さ8～20cmを測る長方形の平面プランである。竪穴建物内の付帯施設は柱穴SP1、2で直径30～32cm、深さ15cm程である。中央に長軸0.7m、短軸0.5m、深さ20cmの楕円形の平面プランを呈する土坑が位置する。土器は覆土及び床面、柱穴から散発的に出土し、南東端にやや土器集中を見た。全体的にかなり削平されている。遺物は覆土、床面から出土した。**556～560**は土師器の甕の口縁部～胴部片である。**556**は甕の口縁部～胴部片で口縁部はくの字で直線的に外傾し端部は丸い。内外面はやや粗いハケメ調整を施す。**557**は甕口縁部～胴部片である。口縁部の立ち上がりは途中まで僅かに内湾し、そこから口縁端部に向かって外反する。端部は丸い。**558**は口縁部～頸部片である。口縁部の立ち上がりは僅かに内湾し端部は方形である。**559**は甕口縁部～胴部片である。口縁部はくの字で端部は丸い。口縁端部内側に僅かに丸いつまみ上げを有す。布留式系土器である。**560**は口縁部～胴部片である。口縁部はくの字で端部は丸い。**561**は小形の壺の口縁部片である。口縁部は直線的に外傾し端部は丸い。**562**は手づくね土器で椀である。**563～566**は高杯杯部～脚部片である。**563**は口縁部で直線的に外傾し端部は丸い。内外面に丹を施している。**564**は口縁部が僅かに内湾し端部はやや尖る。**565**は高杯杯部片である。杯部口縁部は直線的に外傾し、端部付近で短く外反する。**566**は高杯杯部、脚部片で杯部の口縁部と脚部は欠損する。内外面に丹塗りを施している。土師器甕口縁部の形体から時期は4世紀後半～5世紀初め頃と思われる。



第238図　SC16平・断面図(S=1/60)

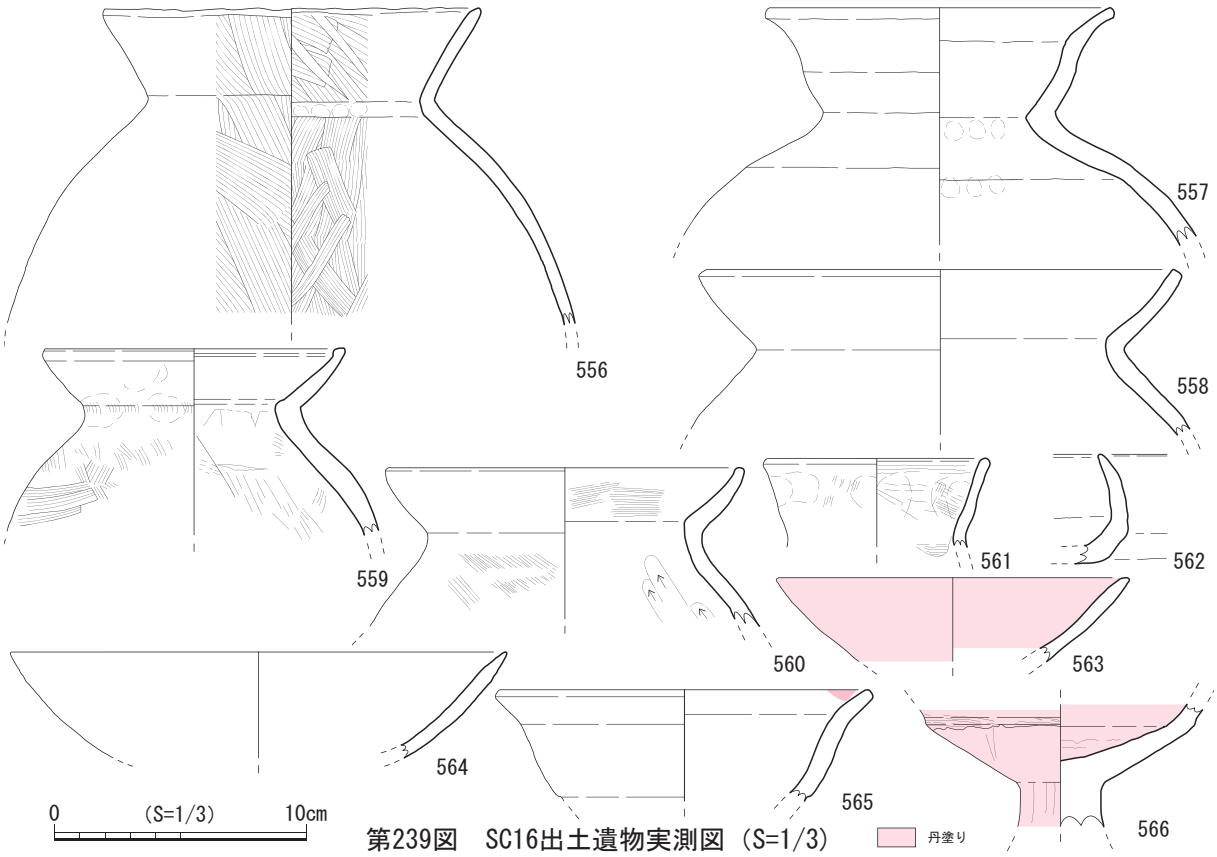


床面検出状況 (1)(北から)

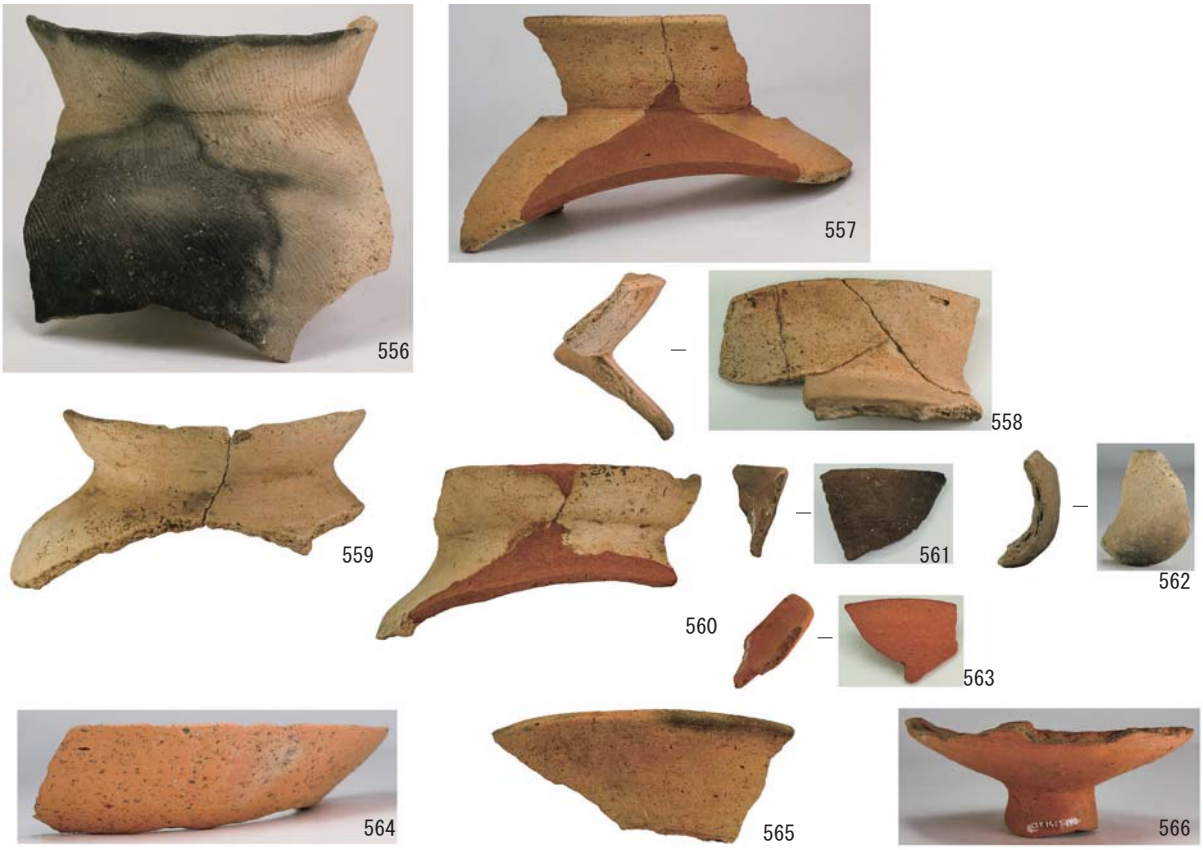


床面検出状況 (1)(北から)

図版216　SC16遺構状況



第239図　SC16出土遺物実測図（S=1/3）



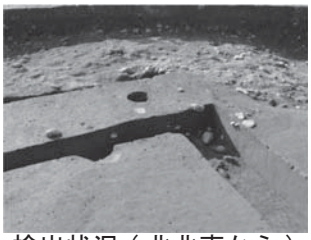
図版217　SC16出土遺物

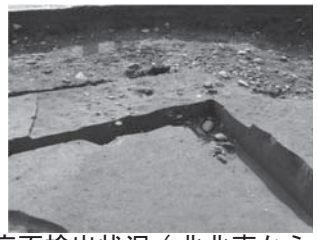
第126表　SC16出土土器観察表

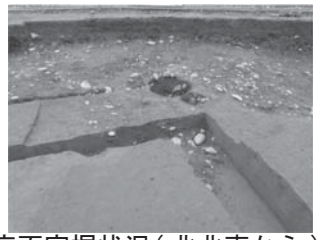
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
556	甕	口縁部～胴部	(14.8)	残存(12.4)	—	ハケメ	ハケメ指オサエ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	良	長石、雲母	布留式系甕
557	甕	口縁部～胴部	(13.6)	残存(9.0)	—	ナデ	ナデ指オサエ	5Y7/6橙	5Y7/6橙	良	長石、雲母	布留式系甕
558	甕	口縁部～頸部	(18.4)	残存(6.5)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/6浅黄橙	7.5YR8/6浅黄橙	良	長石	布留式系甕
559	甕	口縁部～胴部	(12.0)	残存(7.4)	—	ナデ　指オサエハケメナデ消し	ナデヘラケズリ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	良	長石、雲母、石英角閃石	布留式系甕
560	甕	口縁部～胴部	(13.9)	残存(6.3)	—	ナデハケメナデ消し	ナデケズリ	7.5YR8/2灰白	10YR8/3浅黄橙	良	長石、雲母	布留式系甕
561	壺	口縁部	(8.9)	残存(3.6)	—	ハケメナデ消し指オサエ	ハケメナデ消し指オサエ	5YR3/3暗赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	良	長石、雲母黒色粒子	
562	ミニチュア椀	口縁部～底部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	良	長石、褐色粒子	手づくね土器
563	高杯	杯部	(13.7)	残存(3.25)	—	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR7/6橙	2.5YR7/6橙	良好	長石	内外面丹塗りあり
564	高杯	杯部	(19.4)	残存(4.2)	—	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR7/6橙	2.5YR7/6橙	良	長石	
565	高杯	杯部	(14.6)	残存(4.4)	—	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/8黄橙	7.5YR7/8黄橙	良	長石、雲母褐色粒子	
566	高杯	杯部脚部	—	—	—	ナデケズリ	ナデ	5YR5/8明赤褐	5YR5/8明赤褐	良	雲母、長石、赤色粒子黒色粒子、白色粒子	内外面丹塗りあり

㉗ TAK201407　2区 SC17(竪穴建物)(第240・241図　図版218・219　表127)

SC17は2区7454・7456・7656グリッドに位置する。規模は残存壁が北壁の一部、北西コーナーの一部、東壁の一部だけである。そのため規模は推定で記載する。推定長軸4.68m、短軸4.40mのほぼ方形の平面プランと思われる。僅かに残存する平面の中に土坑が2基存在する。SK1、2である。SK1は長軸1.38m、短軸1.12m、深さ49cmを測る楕円形の平面プランである。覆土は黒褐色粘質土で土坑床面は炭化物を多く含んでいた。この中の覆土から土器がやや多く出土した。**567～570**は土師器甕の口縁部～胴部片である。**567**は口縁部が僅かに外湾し端部が短く反る。**568～570**は口縁部が直線的に伸び端部は細く丸い。**571～573**は土師器椀で口縁部～体部片である。いずれも体部～口縁部にかけて大きく内湾し端部は細く丸い。**574**は広口壺の口縁部から胴部片である。口縁部は短く外反し端部は丸い。**575**は小形丸底壺の口縁部から胴部片である。口縁部は短く外傾し端部は細く丸い。**576**は小形丸底坩の口縁部から胴部片である。口縁部はやや長く外傾し端部は丸い。**577～580**はミニチュア土器である。

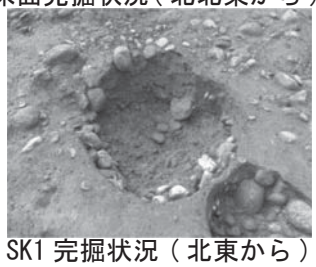

検出状況（北北東から）


床面検出状況（北北東から）

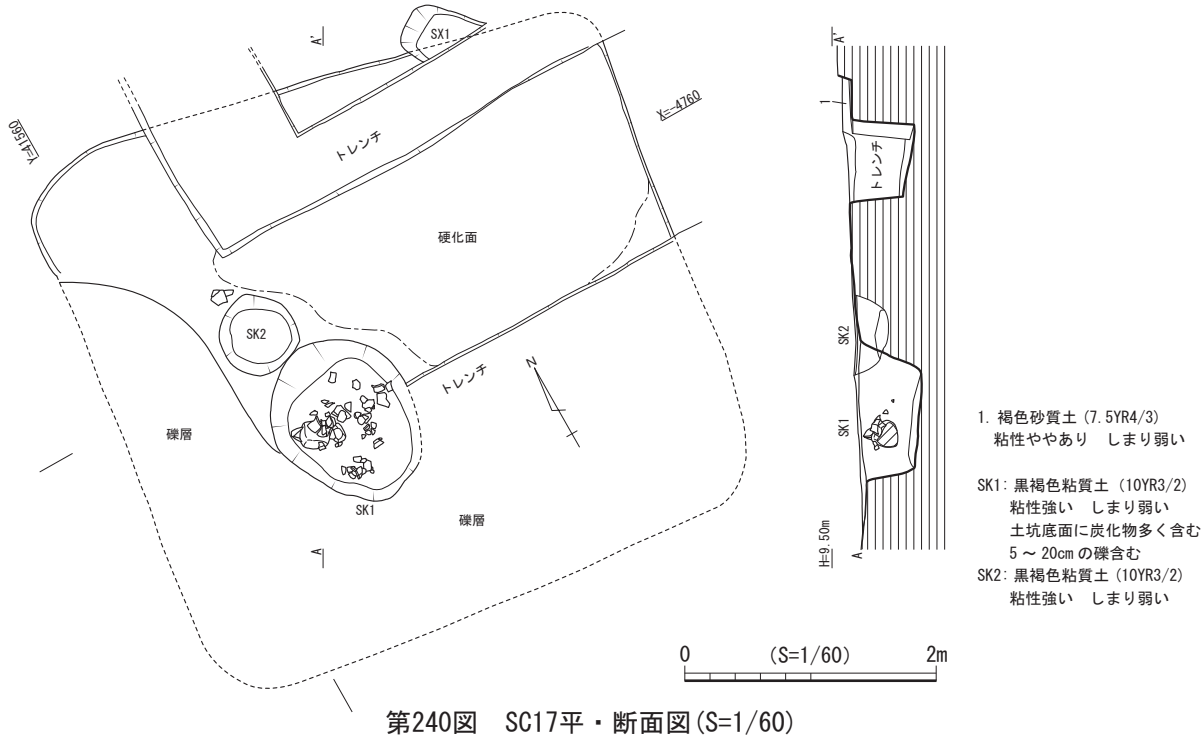

床面完掘状況（北北東から）

SK2 断面（南東から）

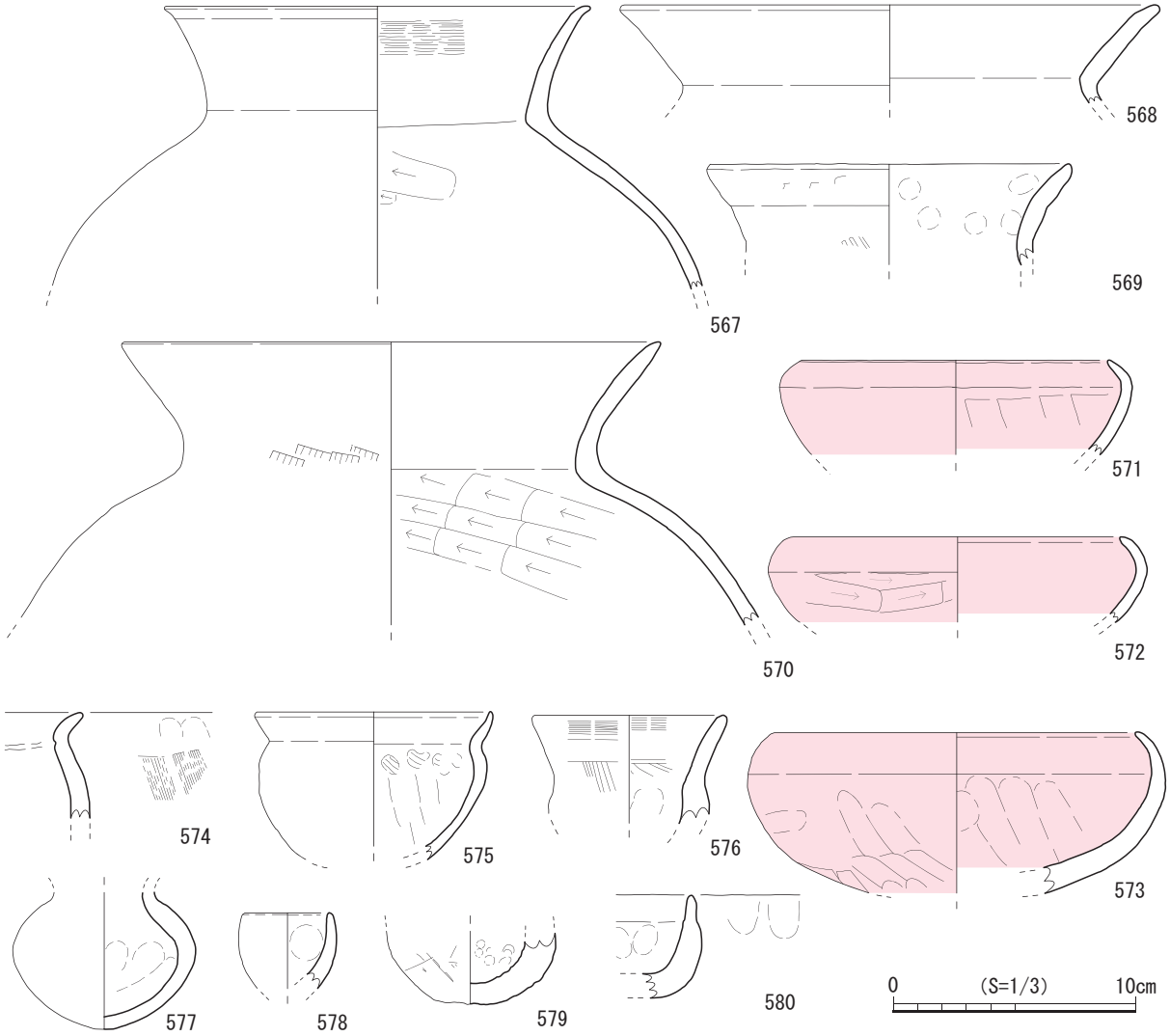
SK1 掘削状況（北から）


SK1 完掘状況（北東から）

図版218　SC17遺構状況



第240図　SC17平・断面図(S=1/60)



第241図　SC17出土遺物実測図 (S=1/3)

図版219　SC17出土遺物

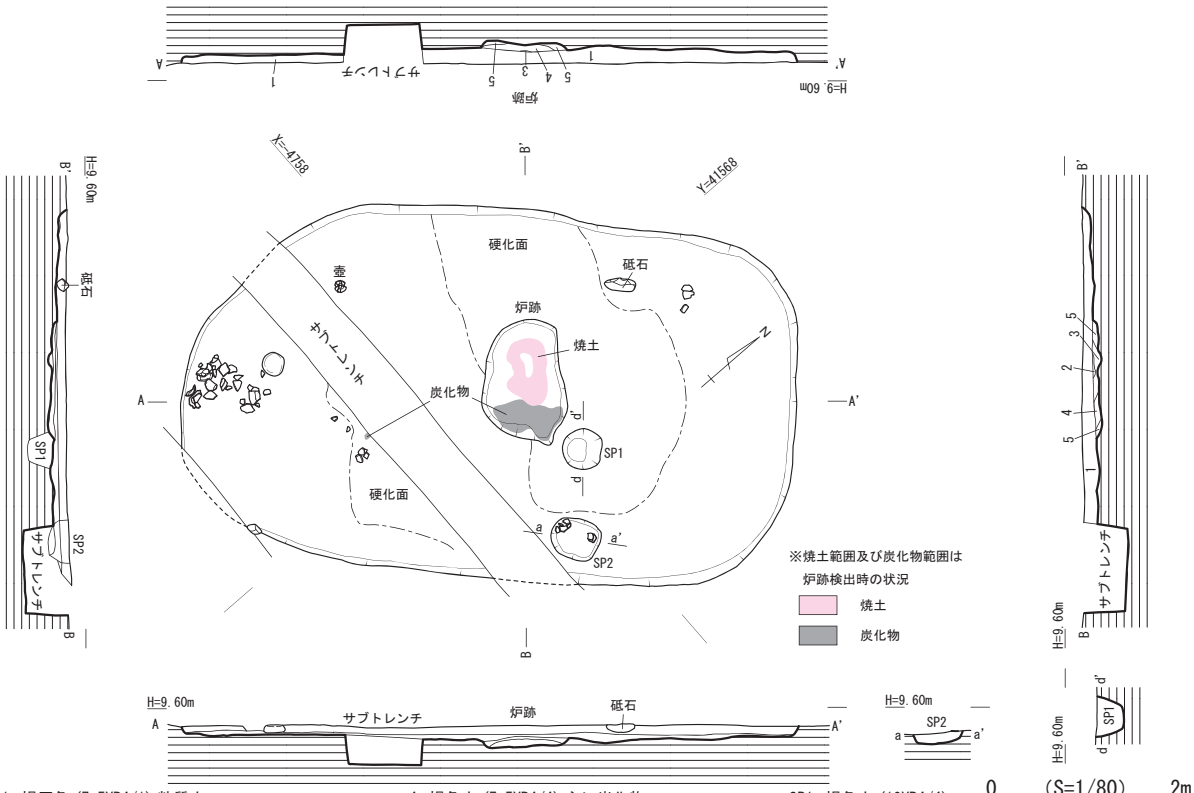
第127表　SC17出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
567	甕	口縁部～胴部	(18.0)	残存(11.6)	—	ナデ	ナデ ヘラケズリ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 浅黄橙	良	長石、石英	
568	甕	口縁部	(21.8)	残存(4.0)	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	雲母、赤色粒子、長石 黒色粒子、白色粒子	剥離が目立つ
569	甕	口縁部	(14.8)	—	—	ヘラ消し	指オサエ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/2 明褐灰	良	長石、雲母	
570	甕	口縁部～胴部	(21.8)	残存(11.5)	—	ナデ	ナデ ケズリ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良	長石、石英	
571	椀	口縁部	(12.6)	—	—	ナデ	ナデ ヘラ消し	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/8 橙	良	長石	内外面丹塗りあり
572	椀	口縁部	(13.2)	残存(3.4)	—	ナデ ヘラ消し	ナデ	10R6/6 赤橙	10R6/6 赤橙	良好	長石	内外面丹塗りあり
573	椀	口縁部～体部	(15.2)	残存(6.6)	—	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	5YR4/1 褐灰	2.5YR6/8 橙	良	赤色粒子、雲母	内外面丹塗りあり
574	壺	口縁部～胴部	—	—	—	ハケメ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	良	雲母、角閃石 長石	
575	壺	口縁部～胴部	(9.8)	残存(6.1)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	良	長石、石英 赤色粒子	底部欠損
576	小型丸底坩	口縁部～胴部	(7.8)	残存(4.0)	—	ハケメ	ハケメ 指オサエ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、赤色粒子	
577	ミニチュア土器	頸部～底部	胴部径(7.6)	—	—	ナデ	指オサエ	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙	良	長石、角閃石	手づくね土器
578	ミニチュア土器	口縁部～胴部	(3.4)	残存(4.0)	(7.8)	ナデ	指オサエ	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙	良	長石	手づくね土器
579	ミニチュア土器	底部	—	—	—	指オサエ	指オサエ	10YR4/2 灰黄褐	5YR5/4 にぶい赤褐	良	長石、赤色粒子	手づくね土器
580	ミニチュア土器	口縁部～胴部	—	—	—	指オサエ ナデ	ナデ 指オサエ	5YR5/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい橙	良	長石	手づくね土器

㉘ TAK201407　2区 SC18(竪穴建物)(第242・243図　図版220・221　表128・129)

SC18は2区7456・7656グリッドに位置する。規模は長軸中央で6.56m、短軸4.0m、深さ12cm を測る横長楕円形の平面プランである。中央に炉跡と考えられる長軸1.28m、短軸0.80m、深さ6cm の不整楕円形が存在する。北側に焼土が集中し南側に炭化物が集中する。柱穴は3ヶ所確認するがランダムで建物を構成する配置ではない。遺物は覆土及び床面から散発的に出土した。**581**、**589**は二重口縁壺である。**581**は口縁部片で、**589**は口縁端部が欠損するが胴部、底部と全体のプロポーションは判断でき

る。**581**は口縁部がやや外傾し端部は細く丸い。**589**は胴部中位が最大で、底部は丸い。**582**は壺で胴部片である。口縁部、底部が欠損する。**583**～**587**は甕口縁部から胴部片である。**583**は口縁部が直線的に外傾し端部は細く丸い。胴部最大径は中位にある。底部は欠損する。**587**は布留式系甕で口縁部は外湾し端部内側は僅かにつまみ上げを施す。**588**は椀で手づくね土器である。指圧痕が多く残る。**590**は砥石で石材は硬質砂岩である。



1. 褐灰色（7.5YR4/1）粘質土
粘性ややあり　しまり弱い
2. にぶい赤褐色土（5YR4/4）
しまりややあり　粘性あり
赤褐色焼土・黄褐色土ブロックが少量混じる
3. 赤褐色土（5YR4/8）主に焼土
しまりややあり　粘性あり
赤く焼き締まったブロック（1cm大）を少量含む
炭化物粒子微量含む
4. 褐色土（7.5YR4/4）主に炭化物
しまりややあり　粘性ややあり
炭化物ブロック（1～5cm）を多量含む
また、4層ブロック（5cm程度）も中量混じる
5. 褐色土（10YR4/4）
しまりやや弱い　粘性なし
炭化物粒（1～2cm）微量含む
基本層序4層よりやや暗めか

SP1：褐色土（10YR4/4）
しまりあり　粘性あり
SP2：褐色土（10YR4/4）
しまりあり　粘性あり
炭化物粒（0.5～1.0cm大）微量含む

第242図　SC18平・断面図(S=1/80)

検出状況（北東から）

床面検出状況（北東から）

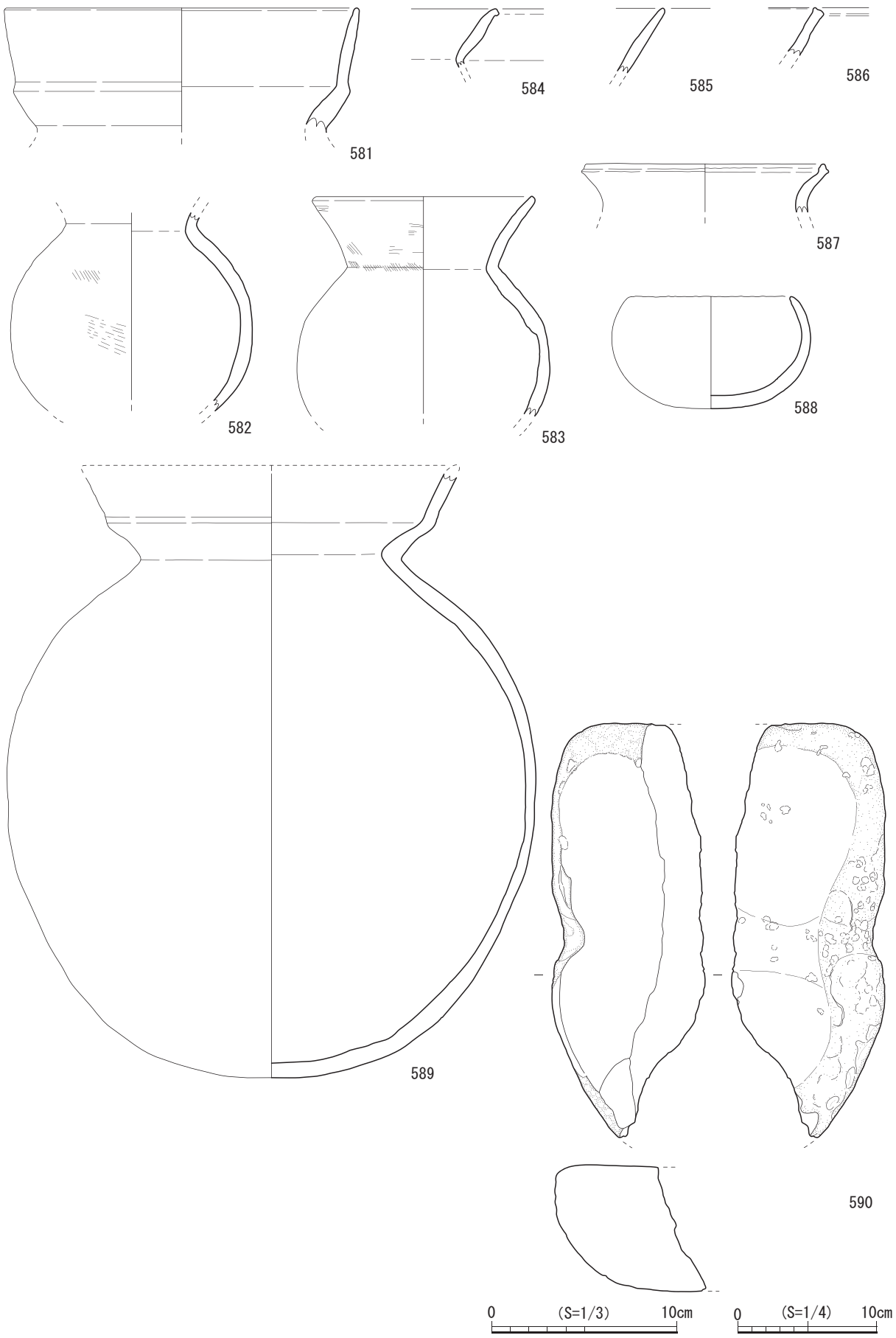
炉跡検出状況（北東から）

遺物出土状況(1)(北東から)

遺物出土状況(2)（東北東から）

床面完掘状況（北東から）

図版220　SC18遺構状況



第243図　SC18出土遺物実測図(No.590のみS=1/4、他はS=1/3)

図版221　SC18出土遺物

第128表　SC18出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
581	壺	口縁部	(18.8)	残存(6.7)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	良	雲母、長石 褐色粒子	二重口縁壺
582	壺	胴部	—	残存(10.6)	—	ナデ	ケズリ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	良	雲母、長石、赤色粒子 黒色粒子、白色粒子	
583	壺	口縁部～胴部	(12.0)	残存(11.8)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ　ナデ消し 指オサエ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	良	長石、褐色粒子	
584	甕	口縁部	—	残存(3.1)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/6浅黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	良	長石、	
585	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4浅黄橙	良	石英、角閃石	布留式系甕
586	甕	口縁部	—	残存(2.6)	—	ナデ	ナデ	7.5YR5/3にぶい橙	10YR8/4にぶい黄橙	良	褐色粒子	布留式系甕
587	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/4にぶい橙	5YR7/5橙	良	長石	布留式系甕
588	椀	口縁部～底部	(8.6)	6.0	—	ナデ 指オサエ	指オサエ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	良	長石	
589	壺	接合ほぼ完形	胴部径(28.6)	残存(32.5)	—	ナデ消し	ナデ消し	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	良	雲母、角閃石 石英、結晶片岩	二重口縁壺

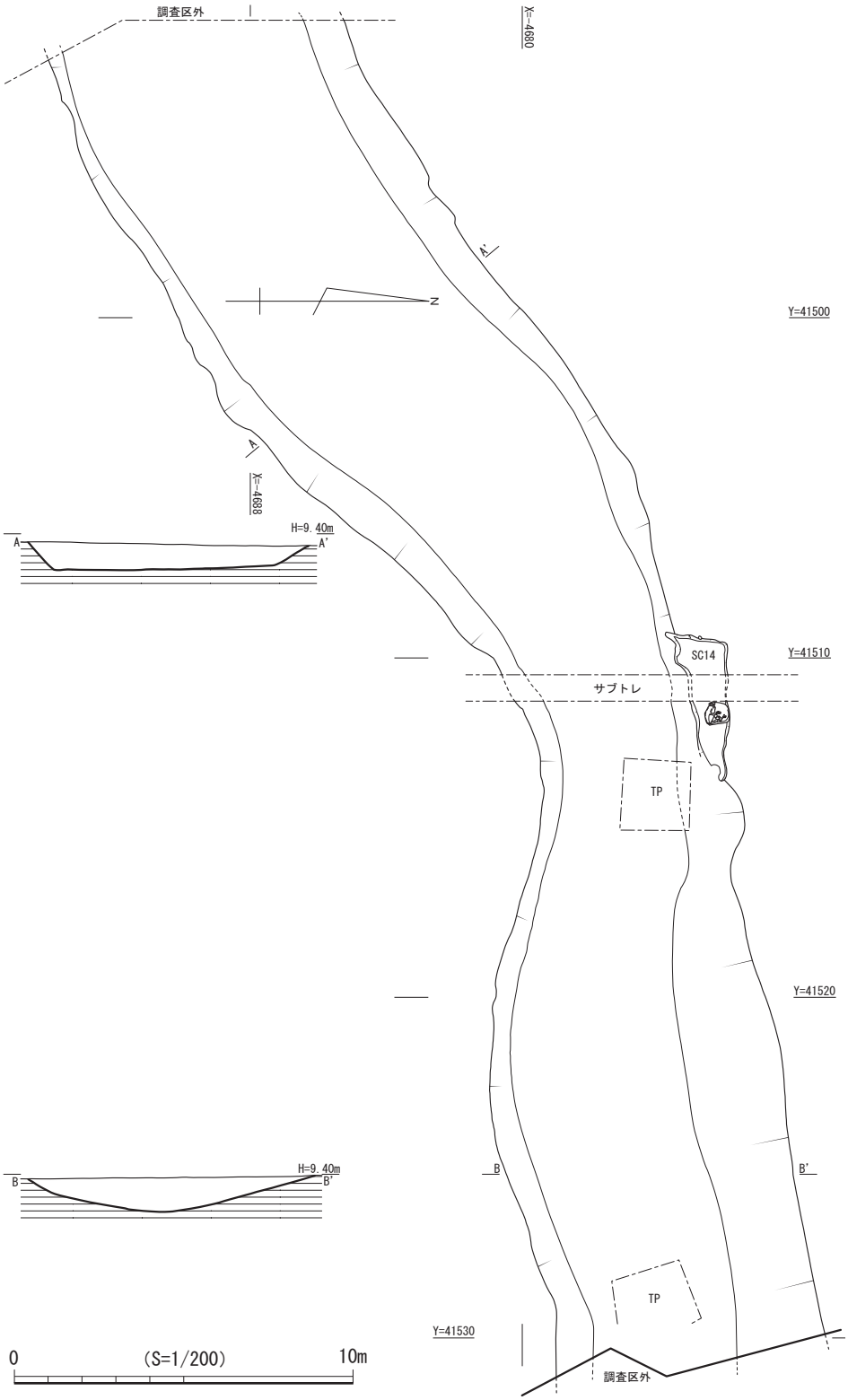
第129表　SC18出土石器観察表

遺物番号	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
590	砥石	砂岩	297.00	111.0	91.50	3,365.00	

(3)溝(SD)

①TAK201406　3・4区SD2(溝)(第244・245図　図版222・223　表130)

SD2は3・4区6650・6652・6850グリッドに位置する。流れは東～南西方向に延びており、長さ45.0m+、幅9.0m、深さ1.0mを測る。遺物は須恵器杯身、土師器椀等が出土した。**591**は土師器椀口縁部～体部片である。口縁部は僅かに内湾しながら端部は丸い。内外面に丹塗り痕が残る。**592**、**593**は須恵器杯蓋片である。**592**は天井部片、**593**は口縁部～天井部片である。天井部から体部にかけて「ハ」の字の線刻らしき痕跡がある。口縁端部は丸い。**594～599**は須恵器杯身である。いずれも口縁部～体部の破片である。たちあがりは0.8～1.1cmで口縁部は直線的で内傾し短いもの**596**、**597**、**598**、**599**。やや長い1.3～1.6cmのもの**594**、**595**がある。これらの時期は、**594**、**595**が6世紀第3四半期頃。**596**、**597**、**598**、**599**が6世紀第4四半期頃であろう。



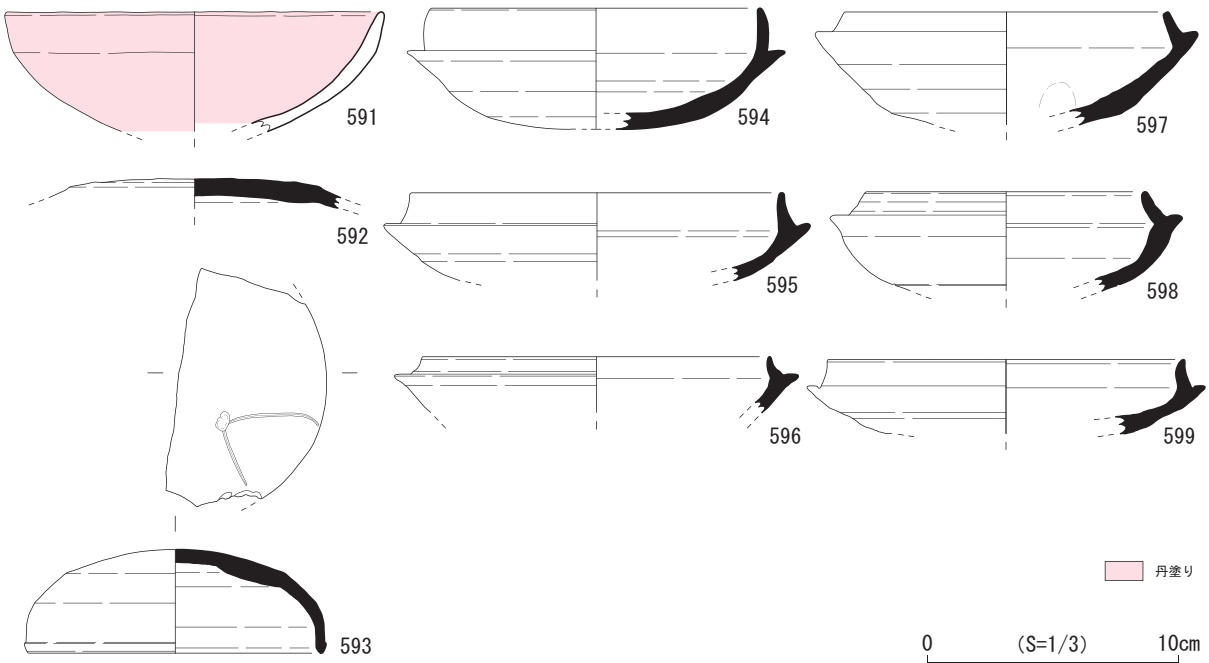
第244図　SD2平・断面図(S=1/200)

掘削状況（西側）

掘削状況（東から）

完掘状況

図版222　SD2遺構状況



第245図　SD2出土遺物実測図（S=1/3）

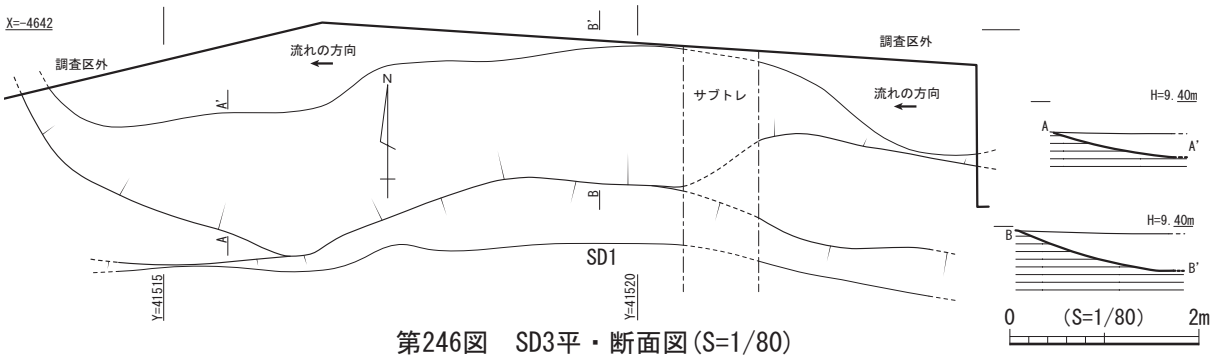
図版223　SD2出土遺物

第130表　SD2出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
591	椀	口縁部～体部	(14.8)	残存(4.7)	—	ナデ 丹塗り	ナデ 丹塗り	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙	良	石英、長石 褐色粒子	丹塗りは大半が剥げ落ちている　6世紀後半
592	杯蓋	天井部	—	残存(1.1)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	7.5YR7/1 明褐灰	7.5YR6/1 褐灰	良	長石	
593	杯蓋	口縁部～天井部	(11.6)	残存(4.1)	—	右回転 ヘラケズリ	ナデ	7.5YR6/2 灰黄	7.5YR6/2 灰黄	良	赤色粒子、黒色粒子 白色粒子、長石	線刻あり　6世紀後半
594	杯身	口縁部～底部	(13.0)	—	—	ナデ ヘラケズリ	ナデ	N6/ 灰	N7/ 灰	良	長石	6世紀後半
595	杯身	口縁部	(14.5)	残存(3.4)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	良	長石	6世紀後半
596	杯身	口縁部	(13.7)	残存(2.1)	—	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	10Y6/1 褐灰	10Y6/1 褐灰	良	長石	6世紀後半
597	杯身	口縁部～底部	(15.2)	残存(4.4)	—	回転ヘラ消し	ナデ 指オサエ	5PB6/1 青灰	5PB5/1 青灰	良	長石	6世紀後半
598	杯身	口縁部	(11.0)	残存(3.9)	—	ヘラケズリ ナデ消し	ナデ	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	良	長石、石英	6世紀後半
599	杯身	口縁部	(14.2)	残存(3.9)	—	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	良	長石、灰色粒子	6世紀後半

② TAK201406　3区 SD3(溝)(第246・247図　図版224・225　表131)

SD3は3区6450・6452グリッドに位置し、畦畔4と隣接する溝である。溝は長さ10m程を検出したが溝の続きは調査区外に位置するため全体像は判然としない。遺物は覆土からの出土である。**600**は土師器椀である。口縁端部が2/3程欠損している。その他は残りが良好である。復元口径15.4cm、器高6.4cmで内外面に丹塗り痕が残る。口縁部は緩やかに内湾し、端部は丸い。底部は丸く厚い。このことから在地産の椀であろう。**601～603**は高杯脚部片である。**601**、**602**は土師器で**603**は須恵器の脚端部である。**604**は須恵器長頸壺の頸部片である。**605**は土師器甕の頸部片である。**606**、**607**は須恵器杯蓋口縁部片である。**606**は口縁端部内側に稜が入る。**607**の口縁部は緩やかに内湾し端部は丸い。**608～614**は須恵器杯身の受け部～口縁部のたちあがりである。たちあがりは1cm程で短く、欠損したものもある。こうした形態から時期は6世紀第4四半期頃であろう。**615**は甑の把手である。結晶片岩粉を含む。



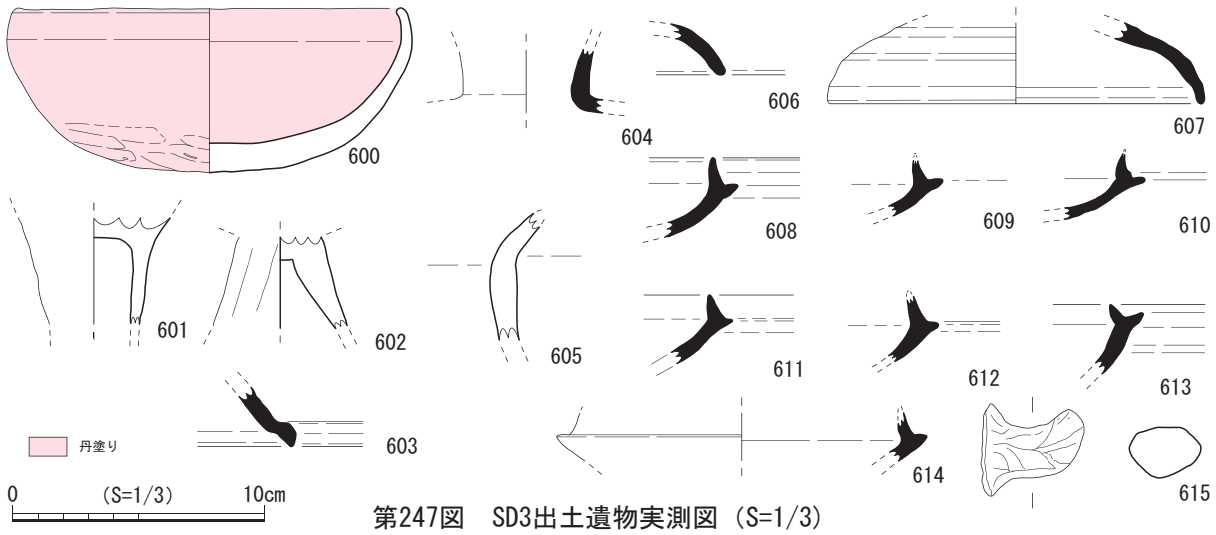
第246図　SD3平・断面図(S=1/80)

遺物出土状況（北から）

完掘状況（東から）

完掘状況（南東から）

図版224　SD3遺構状況



第247図　SD3出土遺物実測図（S=1/3）

図版225　SD3出土遺物

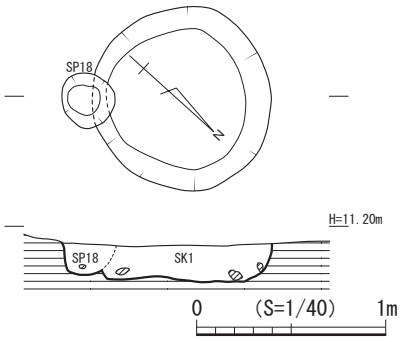
第131表　SD3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
600	椀	ほぼ完形	(14.6)	5.8	—	ユビナデ 丹塗り	ナデ 丹塗り	10YR5/4 赤褐	10R5/8 赤	良好	長石、雲母	口縁部欠損　6世紀後半
601	高杯	脚部	—	—	—	ナデ 指オサエ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR5/1 褐灰	良	長石、石英	
602	高杯	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	5B6/ 青灰	5B6/ 青灰	良	長石	
603	高杯	脚部	—	残存 (2.3)	—	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y4/1 灰	10Y3/1 オリーブ黒	良	長石、灰色粒子	
604	長頸壺	頸部	—	残存 (2.5)	—	ナデ	ナデ	10YR4/3 にぶい黄橙	10YR5/1 褐灰	良	長石	
605	甕	頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR7/4 にぶい黄橙	良	銀雲母	
606	杯蓋	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	N3/ 暗灰	N4/ 灰	良	長石	
607	杯蓋	口縁部	(14.6)	残存 (3.2)	—	ナデ	ナデ	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	良	長石	
608	杯身	口縁部～体部片	—	—	—	ナデ	ナデ	5B6/ 青灰	5B6/ 青灰	良	長石	6世紀後半
609	杯身	口縁部～体部片	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	良	長石	6世紀後半
610	杯身	口縁部～体部片	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	良	長石	6世紀後半
611	杯身	口縁部～体部片	—	—	—	ナデ	ナデ	10GY6/1 緑灰	7.5GY7/1 明緑灰	良	長石	6世紀後半
612	杯身	口縁部～体部片	—	—	—	ナデ	ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	良	長石、石英	6世紀後半
613	杯身	口縁部～体部片	—	—	—	ナデ	ナデ	N7/ 灰	N6/ 灰	良	長石	6世紀後半
614	杯身	口縁部～体部片	—	残存 (1.8)	—	ナデ	ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	良	石英、長石	6世紀後半
615	甑	把手	残存長 (4.1)	残存幅 (3.6)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	雲母、褐色粒子	牛角状

(4)土坑(SK)

① TAK201405　2区 SK1(土坑)(第248・249図　図版226・227　表132)

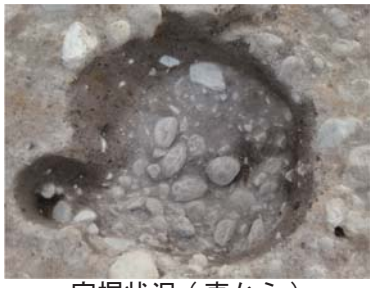
SK1は2区8268グリッドに位置する。平面プランは長軸0.98m、短軸0.90m、深さ0.24m を測り、ほぼ円形を呈する。SP18が東側を切っている。**616**は甕で口縁部～頸部片である。頸部は大きく内湾し、口縁部は緩やかに外傾しながら開く。端部はやや丸い。



SK1：黒褐色（10YR3/2）粘質土
マンガンブロックを含む　暗褐色ブロックを含む
1～5cm 大の礫を僅かに含む
炭化物・赤色粒をごくまれに含む
中～微砂を含む
SP18：黒褐色（7.5YR3/1）粘質土
赤色・橙色粒をまれに含む
マンガンブロックを僅かに含む　微砂を含む

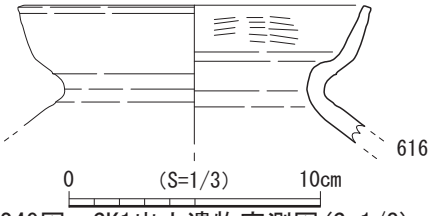
第248図　SK1平・断面図(S=1/40)

半截・断面状況（東から）



完掘状況（東から）

図版226　SK1遺構状況



第249図　SK1出土遺物実測図(S=1/3)

図版227　SK1出土遺物

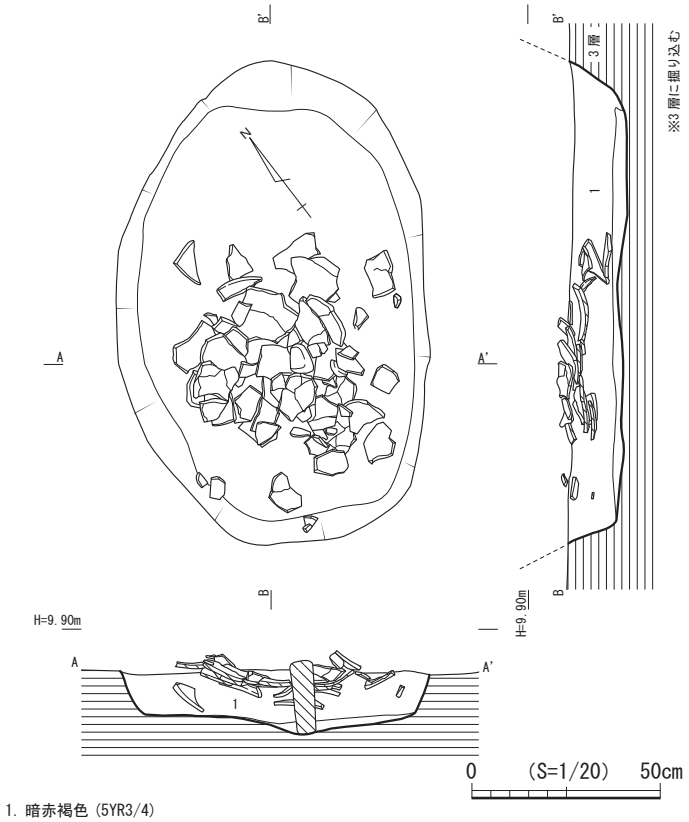
第132表　SK1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
616	壺	口縁部～頸部	(14.1)	—	—	ナデ	ハケメ ナデ消し	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR4/4 にぶい黄褐	良	結晶片岩、長石	山陰系土器をイメージしたものか

② TAK201407　1区 SK9(土坑)(第250・251図　図版228・229　表133)

SK9は1区7058グリッドに位置する。SC3と20cm の距離である。規模は長軸中央で1.28m、短軸0.82m、深さ13cm を測る楕円形の平面プランである。覆土は単層で暗赤褐色粘質土である。遺物は床面及び覆土上面から出土し、かなり被熱を受けた土器が多く出土した。土器片を取り除いた直下に厚さ2～3cm 程の帯状に広がる焼土面が存在し、更にその下面には炭化物と焼土ブロックを多量に検出した。中央やや南寄りに検出した幅8×6cm、長さ20cm の台形状の石柱は床面から直立し、表面は被熱痕を確認した。こうした状況から考えて SC3の付帯施設(カマド)の可能性もある。

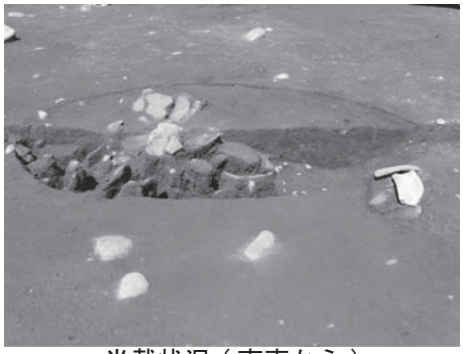
617は土師器甕の口縁部片である。口縁部はやや外反し端部は丸い。口縁部内外面に薄いハケメ痕が残る。また内外面に丹塗り痕が薄く残る。618～623は土師器の胴部片で全体的に被熱を受けている。618、621、622は結晶片岩粉を混ぜた胎土で器壁は薄い。619、623はやや多くの砂粒を含み被熱を受けている。620は丁寧な作りで細かな砂粒を含む。焼成は良好である。時期は6世紀後半頃の所産であろう。



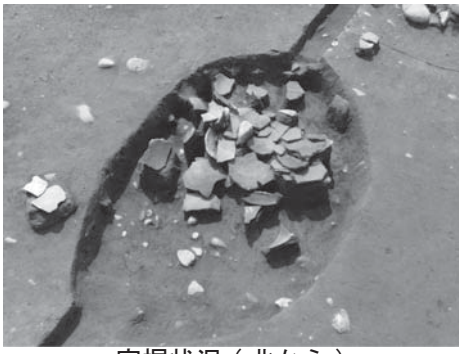
1. 暗赤褐色（5YR3/4）
しまりあり　粘性ややあり
にぶい黄褐色土ブロック（2～5cm大）を少量
焼土ブロック（2cm大）を中量含む

◎土器は胴部片が多く、被熱している
※覆土は単層
※出土遺物は全て一括取り上げを行った

第250図　SK9平・断面図(S=1/20)

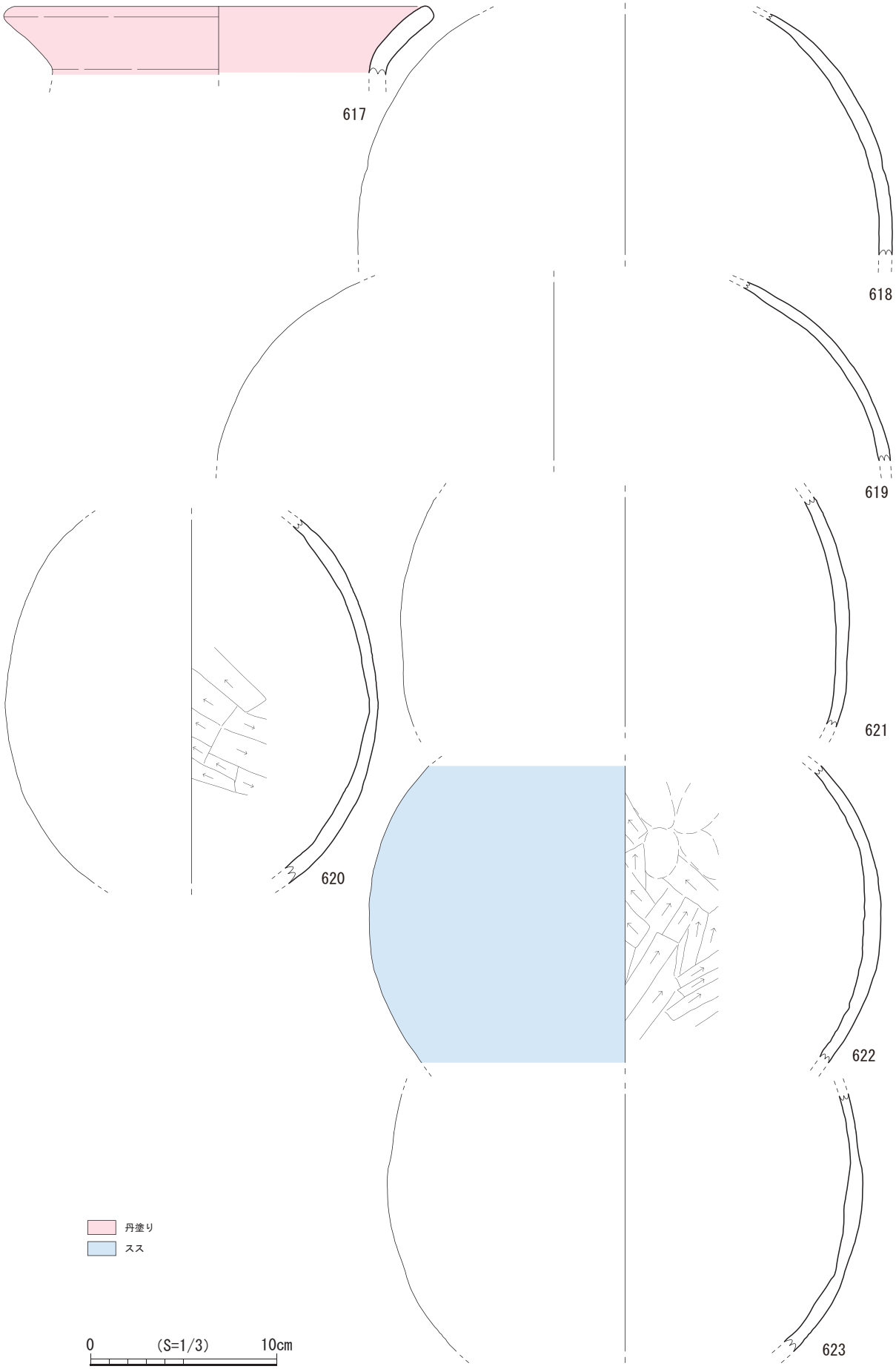


半截状況（南東から）



完掘状況（北から）

図版228　SK9遺構状況

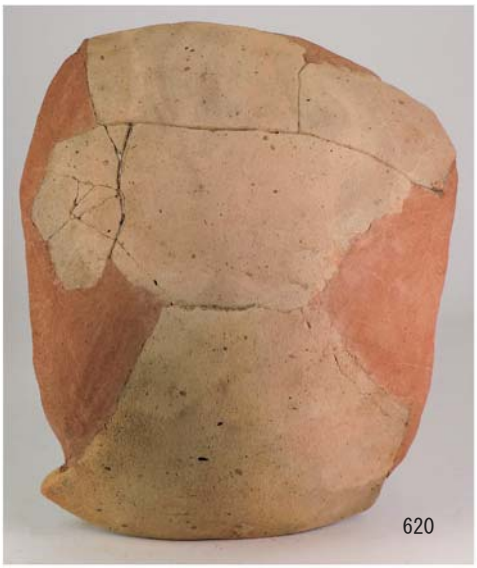


第251図　SK9出土遺物実測図(S=1/3)

617

618

619


620

621

622

623

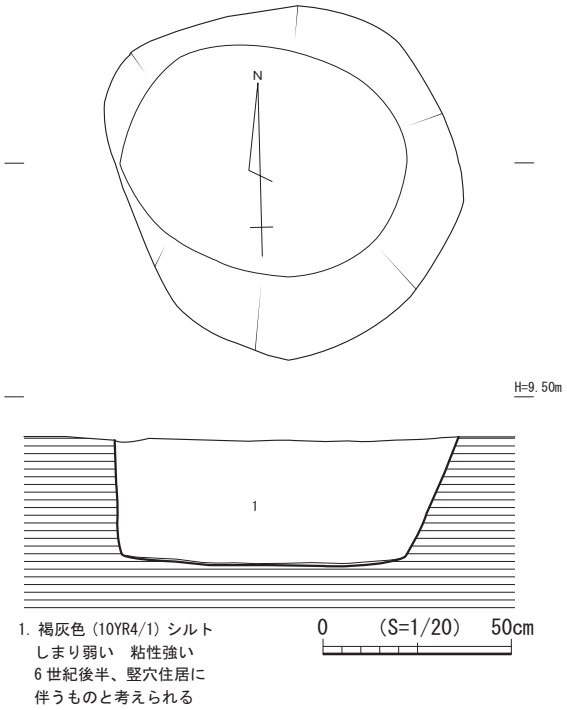
図版229　SK9出土遺物

第133表　SK9土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
617	甕	口縁部	(22.0)	残存 (3.65)	—	ナデ 指オサエ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	良	長石、石英 角閃石	内外面に丹塗りあり
618	甕	胴部	胴部径 (28.6)	残存 (12.8)	—	ナデ	ケズリ後ナデ	10YR5/6 赤	2.5YR6/4 にぶい橙	良	雲母、石英 褐色粒子	器壁が薄い
619	甕	胴部	胴部径 (36.0)	残存 (9.5)	—	ナデ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	良	雲母、結晶片岩 石英、褐色粒子	全体的に被熱している
620	甕	胴部	胴部径 (20.0)	残存 (19.4)	—	ナデ	ケズリ後ナデ 指オサエ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	雲母、石英 褐色粒子	器壁が薄い
621	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	雲母、石英 赤色粒子	器壁が薄い
622	甕	胴部	胴部径 (27.4)	残存 (15.8)	—	ナデ	多方向のケズリ 後ナデ	5YR4/1 褐灰	5YR5/1 褐灰	良	雲母、褐色粒子 石英、結晶片岩	外面にススの付着あり 内面に炭化物の付着あり
623	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR5/6 にぶい黄褐	10R6/4 にぶい黄橙	良	雲母、石英 角閃石	被熱を受けている

③ TAK201407　4区 SK18(土坑)(第252・253図　図版230・231　表134)

SK18は4区6856グリッドに位置する。規模は長軸0.93m、短軸0.91m、深さ0.33m を測る楕円形の平面プランである。覆土から土師器片が出土した。**624**は甕口縁部片で端部は丸い。**625**は鉢の口縁部片である。口縁部は直線的でやや外傾し端部は丸い。



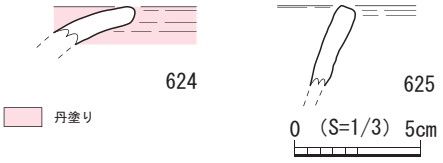
第252図　SK18平・断面図(S=1/20)

検出状況（北から）

半截状況（南から）

完掘状況（北から）

図版230　SK18遺構状況



第253図　SK18出土遺物実測図(S=1/3)

図版231　SK18出土遺物

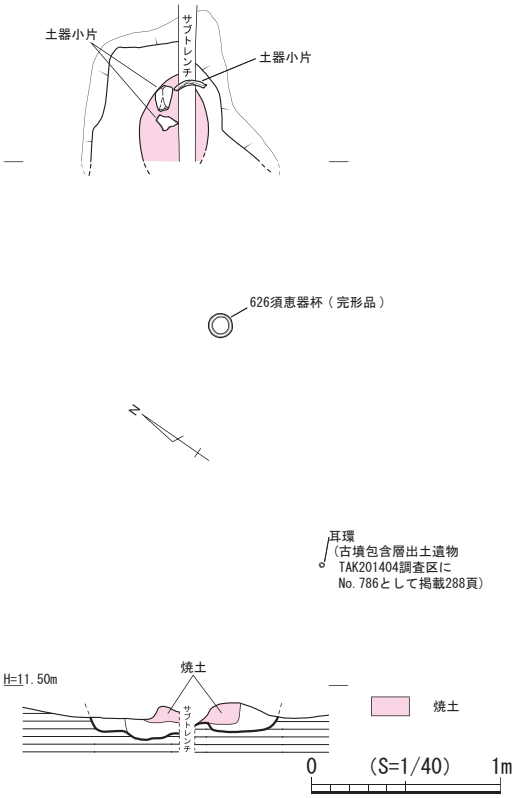
第134表　SK18出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
624	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5YR7/4 淡赤橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良	長石、赤色粒子 褐色粒子	内外面に丹塗りあり
625	鉢	口縁部	—	残存 (3.2)	—	ナデ	ナデ	2.5YR8/3 淡黄	2.5YR8/3 淡黄	良	長石、赤色粒子	

(5)カマド・焼土(SL)

①TAK201404　B6東区SL3(カマド)(第254・255図　図版232・233　表135)

SL3はB6東区9274グリッドに位置する。残存形状からカマド跡と考えられる。長軸0.60m+、短軸0.90mの範囲で焼土痕が確認でき、その中に両袖の一部と焚口部、支脚の石が残る。焼土内から小骨片が出土した。動物の骨片か。本遺構は竪穴建物に伴うものと考えられるが、平面プラン等の検出は後世の洪水等で削平されていたため不可能であった。土器はカマド焚口部から南に80cmの所で完形の須恵器杯身が出土した。**626**は完形の須恵器杯身で正位の状態で出土した。底部外面に×印のヘラ記号が存在する。須恵器は6世紀後半～7世紀初頭頃であろう。



第254図　SL3平・断面図(S=1/40)

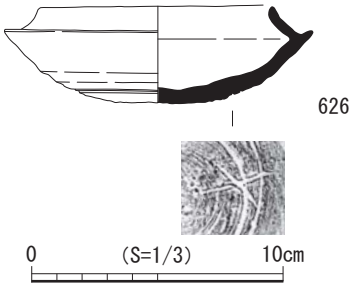
杯身出土状況

検出状況（北北東から）

カマド体部、支脚?燃焼部検出状況(南西から)

焼土内骨粒

図版232　SL3遺構状況



第255図　SL3出土遺物実測図(S=1/3)

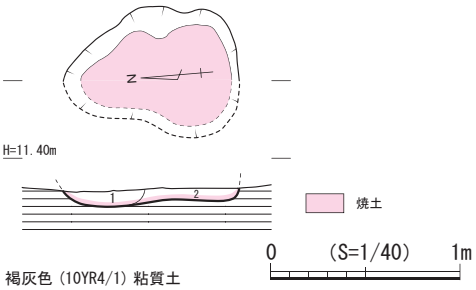
図版233　SL3出土遺物

第135表　SL3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
626	杯身	完形	9.2	3.8	3.5	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	良好	長石	「X」のヘラ記号あり 6C後半

② TAK201404　B6東区 SL6(焼土)(第256・257図　図版234・235　表136)

SL6はB6東区9274グリッドに位置する。焼土は長軸0.94m、短軸0.60m+、深さ6cmを測る不整楕円形である。遺物は土師器の椀口縁部～胴部片が覆土から出土した。**627**は土師器椀の口縁部～胴部片である。口縁部は緩やかに内湾し、端部は丸い。復元口径10.3cmを測る。外面は指圧痕が残る。



1. 褐灰色(10YR4/1)粘質土
しまりやや強い 粘性やや強い
小礫(2～3cm大)5割・焼土・焼土粒子1割・炭化物片1割・
白色粒子が極小入る 燃焼部なし
2. 褐灰色(10YR4/1)粘質土
しまりやや強い 粘性やや強い
白色粒子・焼土粒子1割・炭化物4割・
中心部に4×2cm大の炭化材が入る

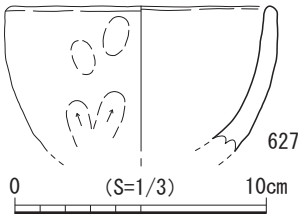
第256図　SL6平・断面図(S=1/40)

検出状況(南から)

焼土部断面(西から)

半截状況(北西から)

図版234　SL6遺構状況



第257図　SL6出土遺物実測図(S=1/3)

627

図版235　SL6出土遺物

第136表　SL6出土土器観察表

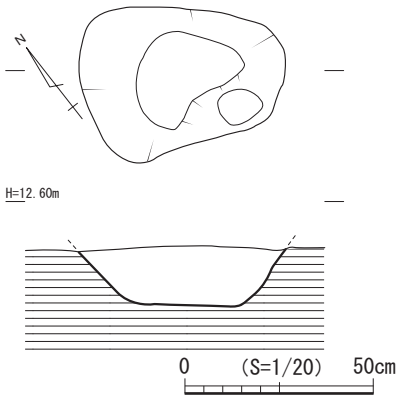
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
627	椀	口縁部～胴部	10.3	残存(5.7)	—	ナデ 指オサエ	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR7/3 にぶい橙	良	長石、雲母	

(6)柱穴(SP)

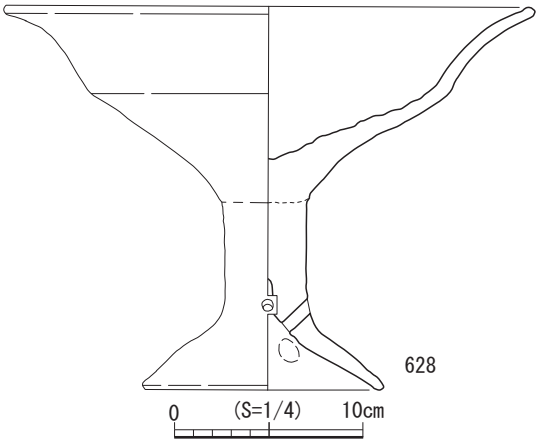
① TAK201403　3区 SP143(柱穴)(第258・259図　図版236　表137)

SP143は3区1068グリッドに位置する。平面は0.5×0.3mの楕円形を呈し、深さ10cm程である。覆土の黒色弱粘質土から高杯破片が出土し接合復元の結果8割ほどが復元できた。**628**は高杯である。器

高20.2cm、口縁部口径28.0cm、底径12.8cmを測る。脚部から開脚部に3ヶ所の穿孔を施す。杯部が大きく、開脚部が小さく脚部は中実である。杯部内側、外面下段は剥離が目立つ。B系統（近畿第Ⅴ様式系土器群）で3世紀後半頃から末頃の所産であろう。(註1)



第258図　SP143平・断面図(S=1/20)



第259図　SP143出土遺物実測図(S=1/4)

図版236　SP143出土遺物

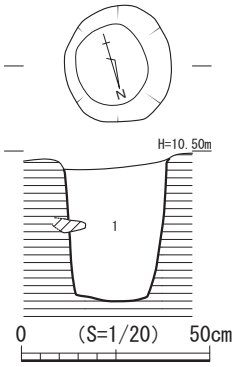
第137表　SP143出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
628	高杯	接合完形	28.0	20.2	12.8	ケズリ・ナデ剥離あり	ミガキ剥離あり	5YR6/6橙	5YR6/6橙	良	長石、赤色粒子	脚部中実 B系統（Ⅴ様式系統） 屈曲部を目指して透かしをあける（註1）

註1　九州前方後円墳研究会長崎大会(2017年10月)土師器見学会より

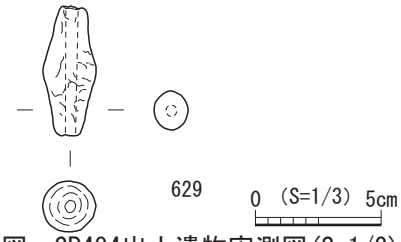
② TAK201405　3区 SP484(柱穴)(第260・261図　図版237　表138)

SP484は3区7866グリッドに位置する。円形の平面プランで直径0.30m、深さ0.32mを測る。遺物は覆土から土錘が出土した。**629**は土錘の完形品である。円柱で中央部が膨らむ形状である。



1. 暗褐色（10YR3/3）粘質土
赤色粒子3%・黄色粒子1%を含む

第260図　SP484平・断面図(S=1/20)



第261図　SP484出土遺物実測図(S=1/3)

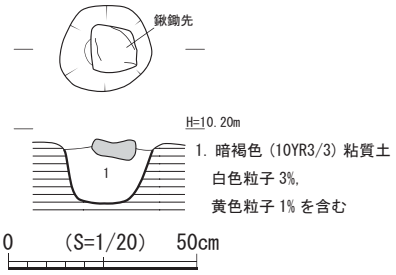
図版237　SP484出土遺物

第138表　SP484出土土製品（土錘）観察表

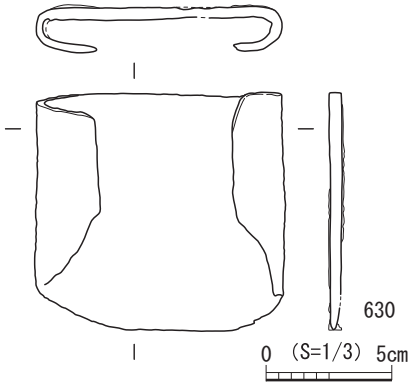
遺物番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	色調	焼成	胎土	備考
629	土錘	5.10	2.10	—	15.00	N6/　灰	良	赤色粒子、白色粒子	完形品

③ TAK201405　4区 SP531(柱穴)(第262・263図　図版238・239　表139)

SP531は4区7864グリッドに位置する。形状は円形で直径24cm、深さ16cmを測る。覆土は暗褐色粘質土の単層である。その覆土の上面から鉄製方形鍬鋤先完形品が出土した。**630**は鉄製方形鍬鋤先完形品である。縦9.4cm、横幅9.95cm、厚さ5.0cm、折り返し高1.8cmを測る。方形鍬鋤先1類である(川超哲志1993)。



第262図　SP531平・断面図(S=1/20)



第263図　SP531出土遺物実測図(S=1/3)

図版238　SP531出土遺物

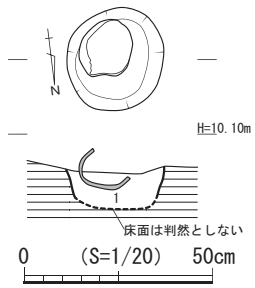
遺物出土状況
図版239　SP531遺構状況

第139表　SP531出土金属製品(鍬鋤先)観察表

遺物番号	器種	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
630	鍬鋤先	鉄	94.00	99.50	5.00	597.70	完形品

④ TAK201405　4区 SP982(柱穴)(第264・265図　図版240・241　表140)

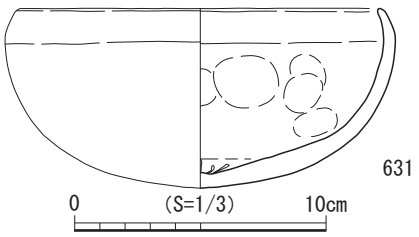
SP982は4区8062グリッドに位置する。円形の平面プランで直径0.24m、深さ0.10m を測る。遺物は覆土から出土した。**631**は土師器の椀である。口縁部が一部欠損するだけでほぼ完形である。口縁端部はやや内湾し細くやや尖る。底部は丸底で在地産であろう。



1. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト
褐色 (7.5YR4/6) 砂質土 7%
明褐色 (7.5YR5/8) シルト 7% 混じる
やや粘性をもち、しまり強い

第264図　SP982平・断面図(S=1/20)

遺物出土状況（北から）
図版240　SP982遺構状況



第265図　SP982出土遺物実測図(S=1/3)

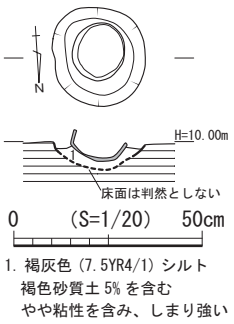
図版241　SP982出土遺物

第140表　SP982出土土器観察表

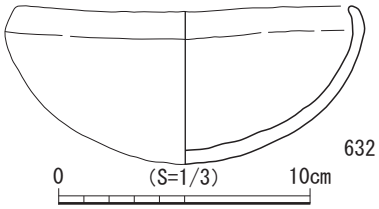
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
631	椀	ほぼ完形	14.2	7.1	3.0	ナデ ヘラ痕	ナデ 指オサエ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	良好	雲母、褐色粒子 長石、石英	口縁部一部欠損

⑤ TAK201405　4区 SP987(柱穴)(第266・267図　図版242・243　表141)

SP987は4区8062グリッドに位置する。円形の平面プランで直径0.22m、深さ8cm を測る。遺物は覆土から土師器椀が出土した。**632**は土師器椀である。口縁部が僅かに欠損しているだけでほぼ完形品である。口縁端部はやや内湾し、細く尖り気味である。底部は丸いことから在地産であろうか。



第266図　SP987平・断面図(S=1/20)



第267図　SP987出土遺物実測図(S=1/3)

遺物出土状況（北から）
図版242　SP987遺構状況

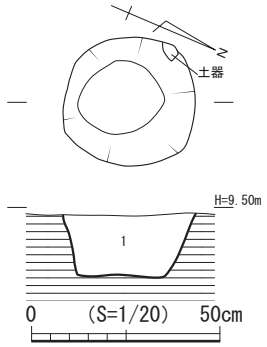
図版243　SP987出土遺物

第141表　SP987出土土器観察表

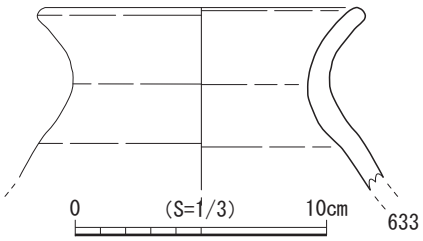
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
632	椀	完形	13.3	6.2	—	ナデ	ナデ	5RY7/6 橙	5RY6/6 橙	良	石英・長石 褐色粒子	口縁部が僅かに欠損

⑥ TAK201406　2区 SP23(柱穴)(第268・269図　図版244　表142)

SP23は2区7252グリッドに位置する。直径35cm、深さ15cm を測る円形の平面プランである。覆土は砂質土の単層である。遺物は土師器甕片が出土した。**633**は土師器甕口縁部～頸部片である。口縁部は緩やかに湾曲し端部は丸い。内外面はナデ調整で内面に一部指圧痕が残る。



第268図　SP23平・断面図(S=1/20)



第269図　SP23出土遺物実測図(S=1/3)

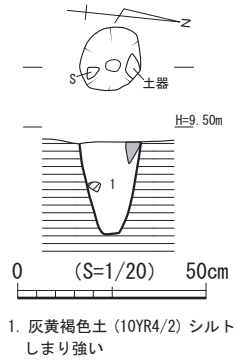
図版244　SP23出土遺物

第142表　SP23出土土器観察表

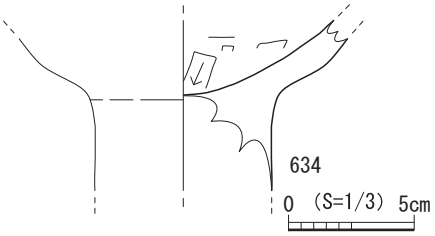
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
633	甕	口縁部～頸部	(12.4)	残存 (7.2)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	雲母、石英、長石 角閃石、褐色粒子	

⑦ TAK201406　2区 SP49(柱穴)(第270・271図　図版245　表143)

SP49は2区7252グリッドに位置する。直径16cm、深さ25cmを測る円形の平面プランを呈する。遺物は高杯片が出土した。**634**は高杯杯部及び脚部片である。胎土に結晶片岩を含む。



第270図　SP49平・断面図(S=1/20)



第271図　SP49出土遺物実測図(S=1/3)

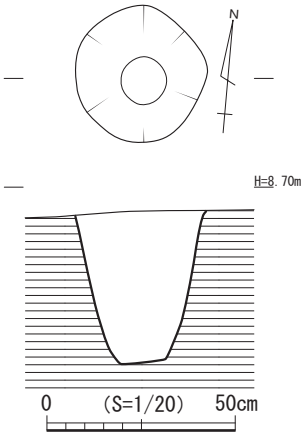
図版245　SP49出土遺物

第143表　SP49出土土器観察表

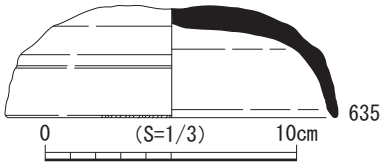
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
634	土師器 高坏	杯部～ 脚部	—	—	—	ナデ	ナデ ヘラケズリ	2.5YR7/4 淡赤橙	10YR6/6 赤橙	良	長石、石英、 結晶片岩	

⑧ TAK201406　2区 SP283(柱穴)(第272・273図　図版246　表144)

SP283は2区7050グリッドに位置する。直径34cm、深さ40cmを測る円形の平面プランを呈する。遺物は覆土から須恵器杯蓋片が出土した。**635**は須恵器杯蓋片である。復元口径13.2cm、器高4.4cmを測る。口縁端部はやや丸い。時期は6世紀第4四半期頃であろう。



第272図　SP283平・断面図(S=1/20)



第273図　SP283出土遺物実測図(S=1/3)

図版246　SP283出土遺物

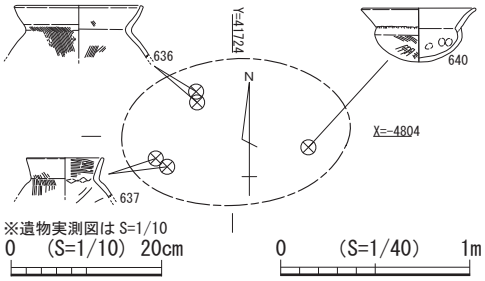
第144表　SP283出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
635	杯蓋	口縁部～ 天井部	(13.2)	4.4	—	回転ナデ	回転ナデ	N11/ 灰白	N11/ 灰白	良	長石、黒色粒子	口縁端部に刻目あり 6世紀後半

(7)遺物集積(SU)

① TAK201405　1区 SU1(遺物集積)(第274・275図　図版247・248　表145)

SU1は1区8072グリッドに位置する。SU2、3とも隣接する。規模は長軸1.24m、短軸0.73mの範囲に土器が集中する。**636～638**は土師器の甕の口縁部～胴部片である。**636**は布留式系の甕で口縁部がくの字で端部内側に僅かにつまみ上げを行っている。端部は方形である。全体的に金雲母を多く含み胎土は砂粒が多く粗い。内外面はハケメ調整を行う。**637**、**638**は小形の甕で口縁部は僅かにくの字を呈し、外面はハケメ調整を行う。**639**は土師器椀の口縁部片である。端部は丸い仕上げである。**640**は土師器坩のほぼ完形品である。口縁部は大きく直線的に外傾し、端部は丸い。底は丸く、細かなケズリの後ナデ調整を施す。**641**は小形丸底壺で口縁部～胴部片である。口縁部は直線的に外反し端部はやや尖る。時期は4世紀後半～5世紀初め頃であろう。

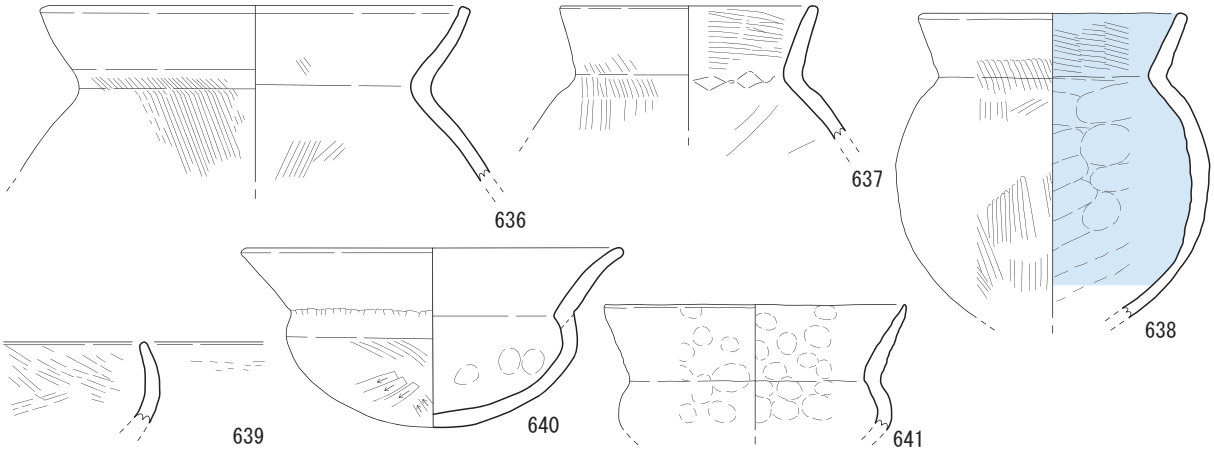


第274図　SU1平面図(S=1/40)

SU1～SU3(北から)

SU1(北から)

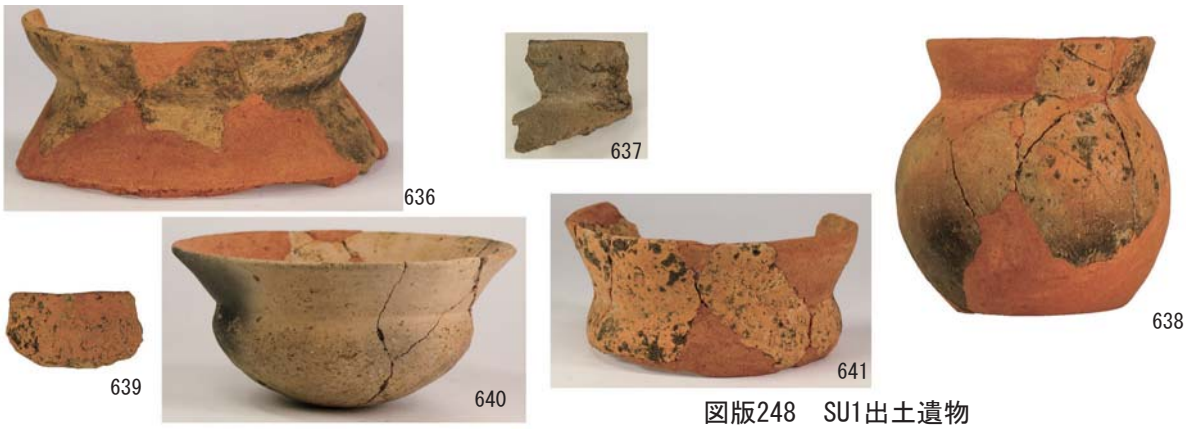
図版247　SU1遺構状況



ススス

第275図　SU1出土遺物実測図(S=1/3)

0　(S=1/3)　10cm



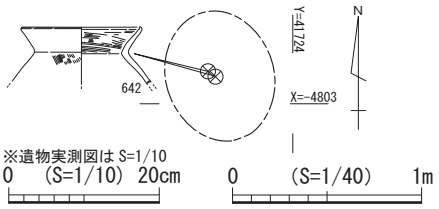
図版248　SU1出土遺物

第145表　SU1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
636	甕	口縁部	(17.3)	残存(7.1)	—	ナデ 下ハケメ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	雲母、長石 角閃石	布留式系甕 全体的に雲母が多く、粒子が大きい。佐賀平野からの搬入品か。
637	甕	口縁部	(10.0)	残存(5.0)	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR5/2 灰褐	5YR2/1 黒褐	良	長石、角閃石 赤色粒子	
638	甕	口縁部 ～胴部	(10.0)	残存(12.0)	—	ハケメ後ナデ	ナデ 指オサエ	7.5YR6/4 橙	2.5YR2/1 赤黒	良	長石、石英	外面底部にスス付着、内面は全体的に黒褐色の付着物あり
639	椀	口縁部	—	残存(3.2)	—	少々のミガキ	少々のミガキ	5YR6/6 にぶい橙	5YR6/6 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	
640	坩	ほぼ完形	14.8	7.1	1.5	ケズリ後 ナデ	ナデ 指オサエ	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	良	石英、角閃石 赤色粒子	口縁部一部欠損
641	壺	口縁部 ～胴部	(11.8)	残存(4.9)	—	ナデ	ナデ	2.5YR6/4 淡赤橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	長石、石英 褐色粒子	小型丸底

② TAK201405　1区 SU2(遺物集積)(第276・277図　図版249・250　表146)

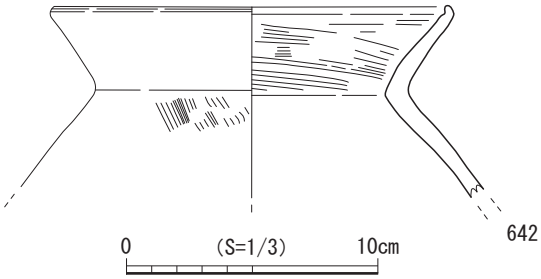
SU2は1区8072グリッドに位置する。長軸0.71m、短軸0.56mの範囲に土器の集中をみた。**642**は布留式系の甕で口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字口縁で端部は方形で内側を僅かにつまみ上げる。内外面に僅かなハケメ調整の後ナデ調整を施す。器壁は薄い。時期は4世紀後半頃の所産であろう。



第276図　SU2平面図(S=1/40)

SU2(北から)

図版249　SU2遺構状況



第277図　SU2出土遺物実測図(S=1/3)

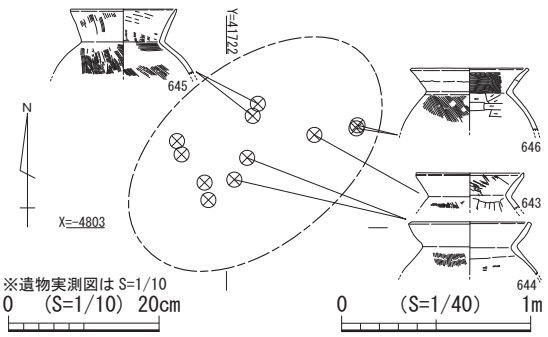
図版250　SU2出土遺物

第146表　SU2出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
642	甕	口縁部 ～胴部	(16.1)	残存(7.65)	—	ナデ ハケメ	ハケメ ナデ消し	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	良	長石、石英	B系統 布留式系甕の模倣甕

③ TAK201405　1区 SU3(遺物集積)(第278・279図　図版251・252　表147)

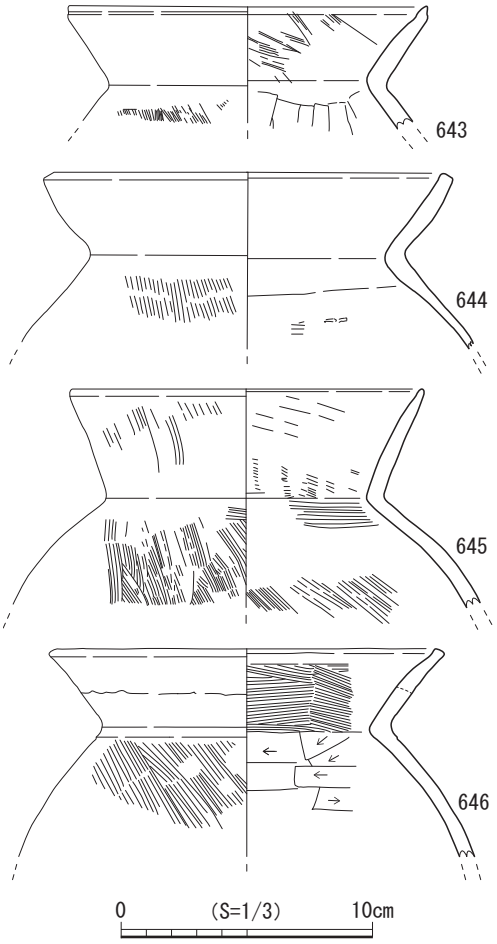
SU3は1区8072グリッドに位置する。長軸1.53m、短軸0.97mの範囲に土器が集中する。**643～646**は布留式系の甕で口縁部～胴部片である。いずれもくの字口縁で端部は方形の**644**、**646**、やや尖る**643**、**645**である。外面はハケメ調整を行い、内面はケズリ及びハケメ調整を施す。全体的に器壁は薄い。時期は4世紀後半～末頃であろう。



第278図　SU3平面図(S=1/40)

SU3(北から)

図版251　SU3遺構状況



第279図　SU3出土遺物実測図(S=1/3)

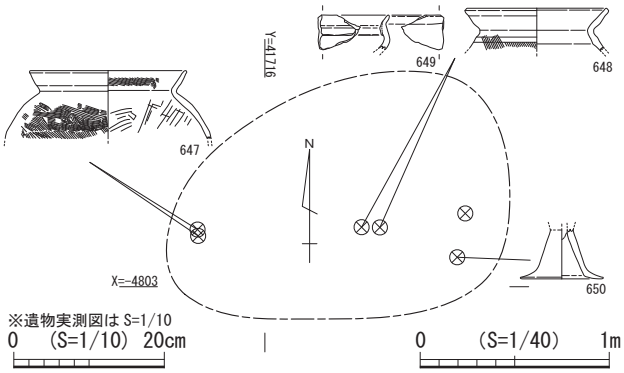
図版252　SU3出土遺物

第147表　SU3出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
643	甕	口縁部～胴部	(14.4)	残存(4.7)	—	ハケメナデ消しナデ	ハケメナデ消しヘラナデ	10YR5/2 灰赤	5YR7/1 明褐灰	良	長石、雲母	布留式系甕 全体的に器壁が薄い
644	甕	口縁部～胴部	15.4	残存(7.1)	—	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石、金雲母 長石	口縁部水平。胴部は球胴 布留式系甕 全体的に器壁が薄い
645	甕	口縁部～胴部	(13.8)	残存(8.9)	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR8/8 黄橙	7.5YR8/8 黄橙	良	赤色粒子、長石 雲母、角閃石	布留式系甕 全体的に器壁が薄い
646	甕	口縁部～胴部	(15.0)	残存(8.3)	—	ナデ ハケメ	ハケメ ケズリ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	長石、石英、赤色粒子	布留式系甕 全体的に器壁が薄い

④ TAK201405　1区 SU4(遺物集積)(第280・281図　図版253・254　表148)

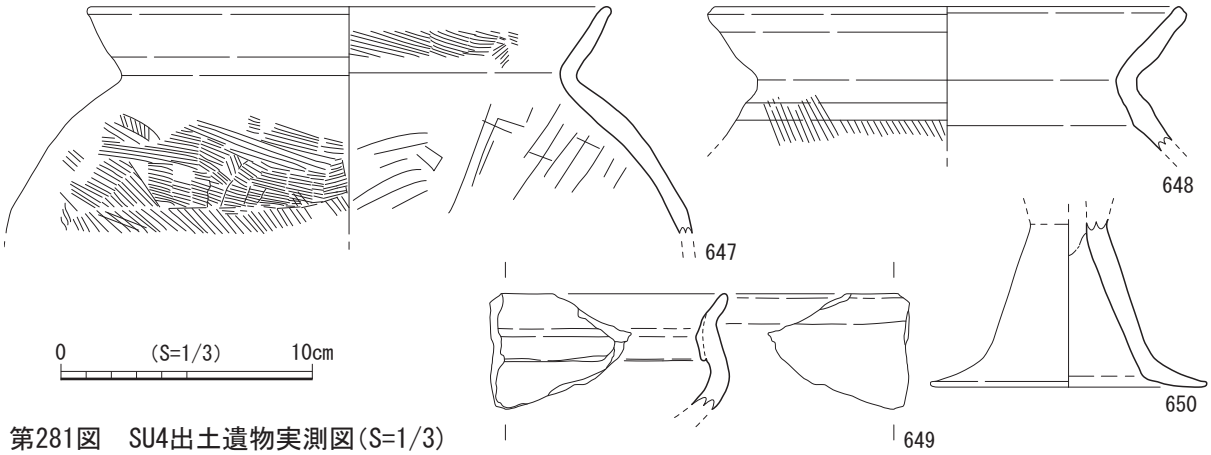
SU4は1区8070グリッドに位置する。SU5と隣接する。規模は長軸1.89m、短軸1.32m の範囲に土器集中を確認した。器種は土師器甕、小形壺、高杯等である。**647**、**648**は布留式系の甕口縁部片である。いずれもくの字口縁で口縁部内側に僅かに器壁は薄い。外面はハケメ調整を施す。**649**は小形丸底壺の口縁部～胴部片である。**650**は高杯脚部片である。開脚は直線的で内面ははっきりした稜を施している。開脚端部はやや鋭角に開く。全体的に丁寧な作りである。時期は5世紀前半頃であろう。



第280図　SU4平面図(S=1/40)

遺物出土状況

図版253　SU4遺構状況



第281図　SU4出土遺物実測図(S=1/3)

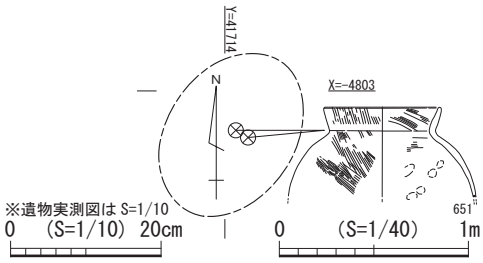
図版254　SU4出土遺物

第148表　SU4出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
647	甕	口縁部～胴部	(20.9)	—	—	ハケメ	ヘラケズリ ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石	器壁が分厚い。布留式系甕の最後。古墳中期初め
648	甕	口縁部	(18.4)	残存 (5.7)	—	ハケメ ナデ消し	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	雲母、長石、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	布留式系甕
649	小形壺	口縁部～胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR4/6 褐	良	長石	
650	高杯	脚部	—	—	(11.0)	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石、石英	

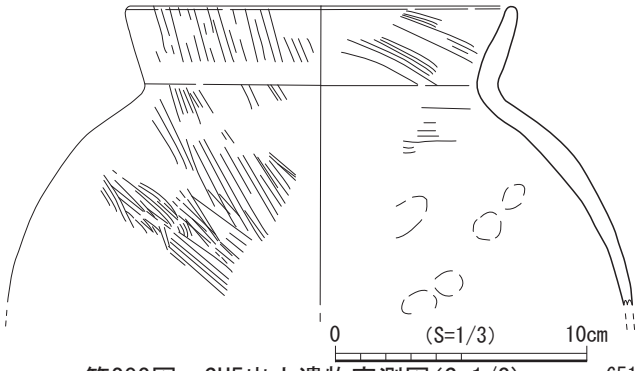
⑤ TAK201405　1区 SU5(遺物集積)(第282・283図　図版255・256　表149)

SU5は1区8070グリッドに位置する。SU4と隣接する。規模は長軸0.94m、短軸0.66m の範囲に土器集中を確認した。**651**は甕口縁部～胴部片である。口縁部は直線的でやや外傾し、穏やかなくの字である。外面はハケメ調整を行い内面はケズリを施す。丁寧な作りである。



第282図　SU5平面図(S=1/40)

SU5(北から)
図版255　SU5遺構状況



第283図　SU5出土遺物実測図(S=1/3)

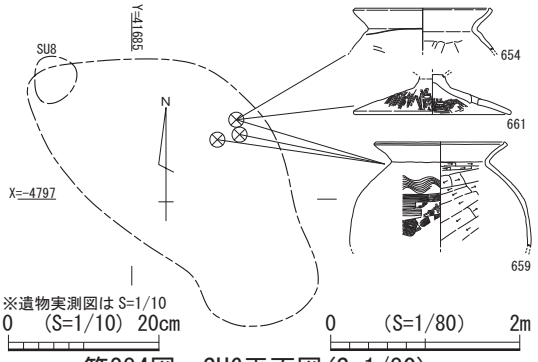
図版256　SU5出土遺物

第149表　SU5出土土器観察表

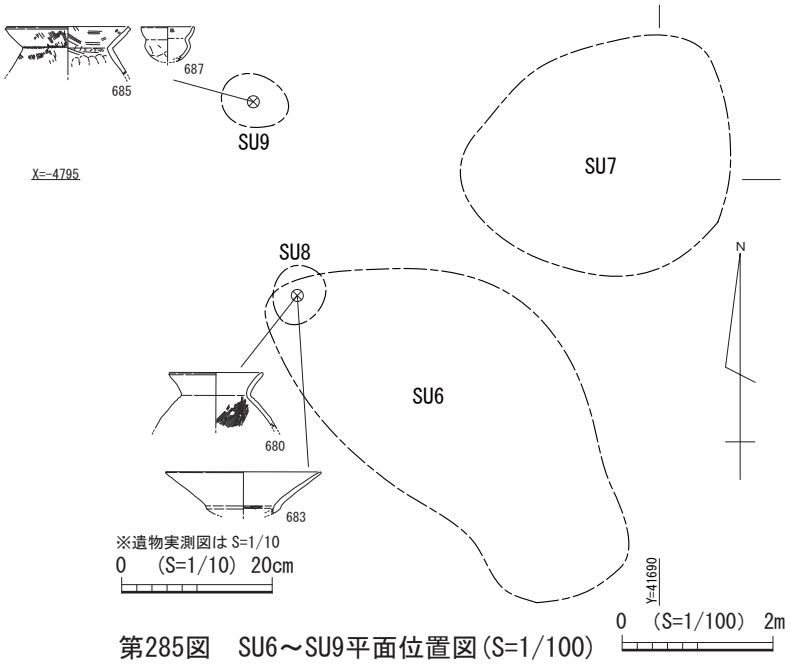
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
651	甕	口縁部～胴部	(15.6)	残存(11.9)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメナデ消し 指オサエ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	長石・雲母	

⑥ TAK201405　2区 SU6(遺物集積)(第284・285図　図版257・258　表150)

SU6は2区7868グリッドに位置する。SU7と隣接する。長軸5.79m、短軸3.08m の楕円形の範囲に土器集中を確認した。土器は布留式系の甕を中心とするものである。**652～659**は布留式系の甕口縁部～胴部片である。いずれもくの字口縁で器壁は薄い。口縁端部内側は僅かなつまみ上げを行っている。**655**は外面に波状文を呈する。**660**、**661**は高杯杯部、開脚高杯脚部片である。**659**は体部が僅かに内湾し、口縁部は僅かに外反し端部は丸く仕上げられている。内外面は斜め方向に細かなケズリを施し暗文状を呈する。丁寧な仕上げである。**660**は脚部で3個の穿孔が残存する。配置的には4個の穿孔であろう。本遺構から出土した土器は全て外来系要素を多く含む土器である。これらの土器の時期は4世紀後半～5世紀初め頃の所産であろう。

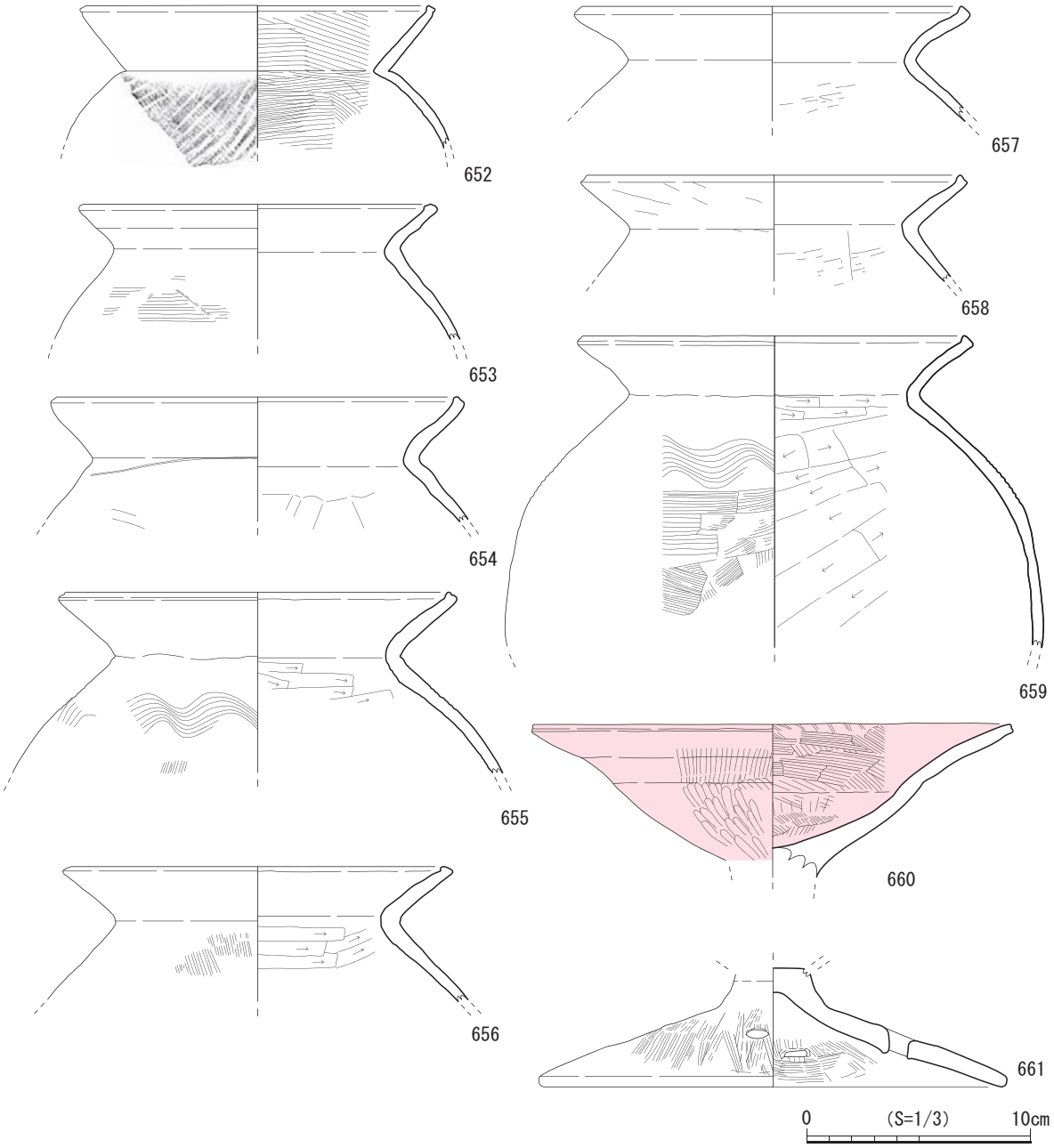


第284図　SU6平面図(S=1/80)



第285図　SU6～SU9平面位置図(S=1/100)

検出状況（東から）
図版257　SU6～SU9遺構状況



第286図　SU6出土遺物実測図(S=1/3)

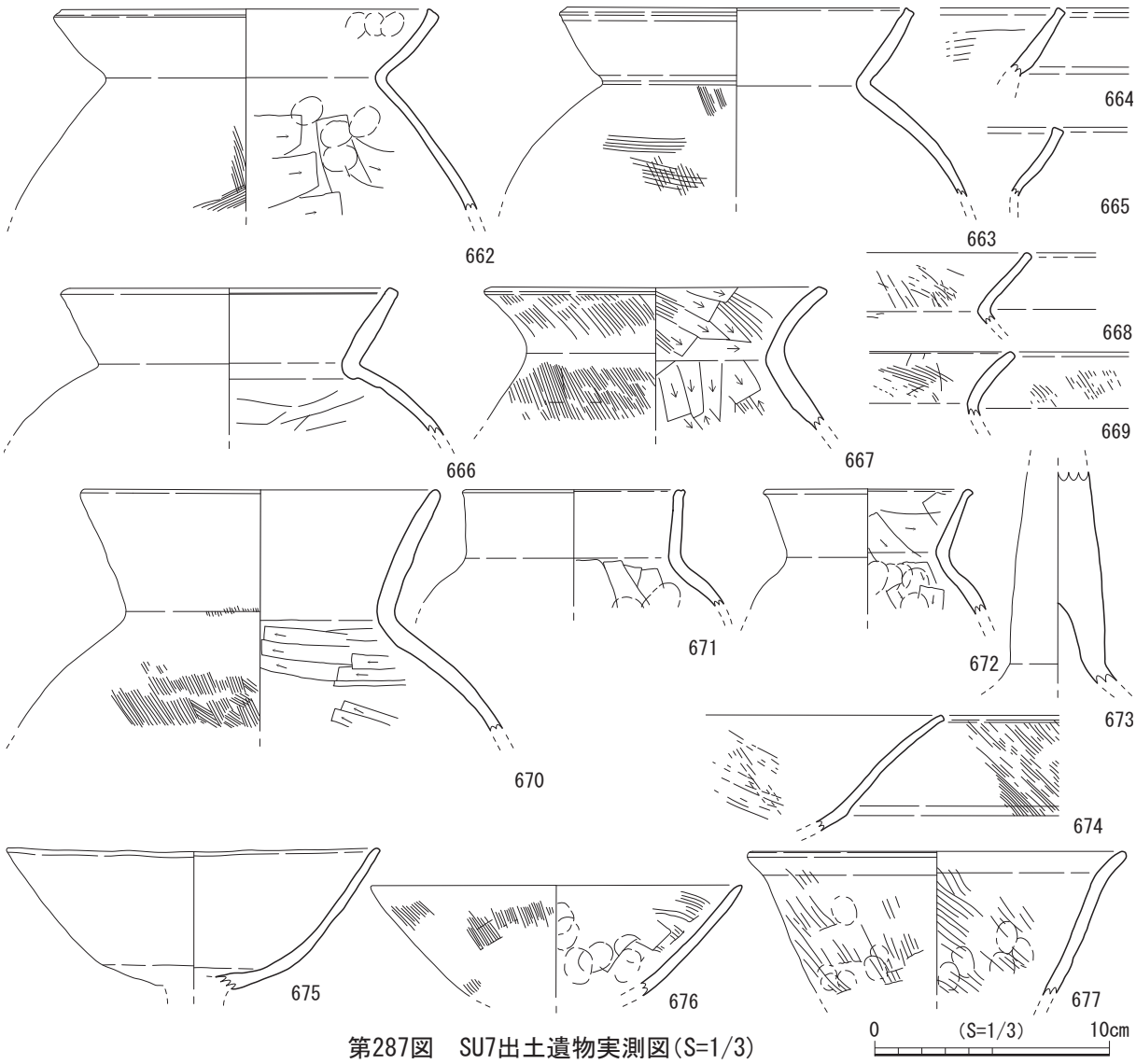
図版258　SU6出土遺物

第150表　SU6出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
652	甕	口縁部～胴部	(15.2)	残存(6.3)	—	ナデ タタキ	ハケメ	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	良好	雲母、赤色粒子 白色粒子	布留式系甕
653	甕	口縁部～胴部	(15.9)	残存(6.0)	—	ハケメ ナデ消し	ヘラケズリ後 ナデ	10YR8/6 黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	長石、雲母	布留式系甕
654	甕	口縁部～胴部	(17.8)	残存(5.7)	—	ナデ	ナデ ヘラケズリ後ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/8 橙	良好	長石、角閃石、雲母 赤色粒子　結晶片岩	布留式系甕
655	甕	口縁部～胴部	(17.0)	残存(8.0)	—	ナデ	ケズリ後ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	石英、角閃石 結晶片岩、長石	布留式系甕
656	甕	口縁部～胴部	(16.6)	残存(6.0)	—	ナデ 縦方向ハケメ	ケズリ後ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、結晶片岩 石英、角閃石	布留式系甕 ハケ工具による波状紋 搬入品か
657	甕	口縁部～胴部	(16.8)	残存(5.1)	—	ナデ	ナデ ケズリ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子、長石 赤色粒子、白色粒子	布留式系甕
658	甕	口縁部～胴部	(11.6)	残存(4.7)	—	ナデ	ナデ ケズリ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子、長石 赤色粒子、白色粒子	布留式系甕
659	甕	口縁部～胴部	(17.0)	残存(13.8)	—	ナデ ハケメ	ケズリ後ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良好	石英、角閃石 結晶片岩、長石	布留式系甕 波状紋あり
660	高杯	杯部	(21.2)	—	—	ハケメ ナデ消し	多方向の ハケメ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良好	長石、石英 角閃石	内外面に放射暗文か 内外面丹塗り
661	高杯	脚部	—	—	(21.0)	ハケメ	ハケメ ナデ消し	7.5YR8/2 灰白	5YR7/3 にぶい橙	良好	長石、雲母	開脚高杯　ハケメを残し、磨いていない

⑦ TAK201405　2区 SU7(遺物集積)(第285・287図　図版259　表151)

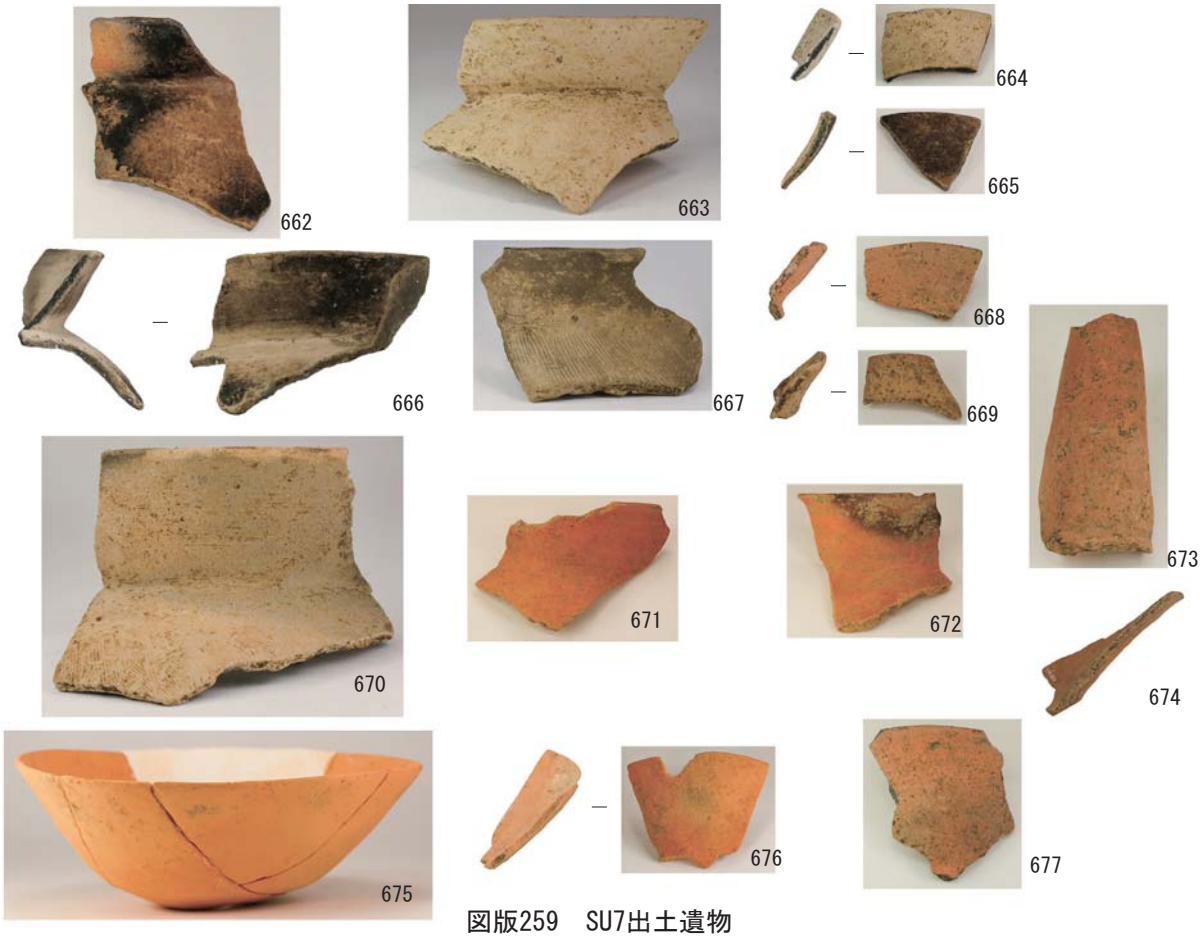
SU7は2区7868グリッドに位置する。SU6と隣接する。長軸3.69m、短軸3.12m を測る、楕円形の範囲に土器集中を確認した。土器の器種では壺口縁部片、高杯杯部片、甕口縁部片等が出土した。**662～669**は布留式系の甕である。口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字で端部は方形で内側に僅かにつまみ上げを行っている。器壁は薄く外面はハケメ調整後、ナデ調整を行っている。内面はケズリ調整を施している。**670～672**は壺の口縁部～胴部片である。口縁部は垂直及び斜め方向に直線的で端部は丸い。内面はケズリ調整を施し全体的に器壁は薄い。**673～676**は高杯の杯部～脚部片である。杯部片は器壁が薄く、斜め方向に直線的に延びる。端部はやや丸い。**675**は布留式系の長頸高杯である。精製品で福岡平野からの搬入品の可能性がある。**677**は土師器の鉢口縁部～胴部片である。口縁部はやや反り端部は丸い。内外面は薄いハケメ調整を施し、指圧痕も残る。時期は4世紀前半～中頃であろう。



第287図　SU7出土遺物実測図(S=1/3)

第151表　SU7出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) 底径	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土	備考
662	甕	口縁部～胴部	(15.7)	残存(8.5)	—	ナデ ハケメ後ナデ	ナデ ヘラケズリ 指オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	石英、角閃石 雲母	布留式系甕
663	甕	口縁部～胴部	(14.4)	残存(7.9)	—	ナデ 縦横のハケメ	ケズリ後 ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	結晶片岩、石英 長石	布留式系甕
664	甕	口縁部	—	残存(2.9)	—	ナデ	ケズリ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	雲母、黒色粒子、長石 白色粒子、赤色粒子	布留式系甕
665	甕	口縁部	—	残存(2.4)	—	ナデ	ナデ	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR7/4 にぶい橙	良	雲母、長石、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	布留式系甕
666	甕	口縁部～胴部	(13.7)	残存(6.2)	—	ナデ	ナデ ヘラケズリ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良好	長石、角閃石 雲母	布留式系甕
667	甕	口縁部～胴部	(13.9)	残存(6.0)	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後 ヘラケズリ	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	長石、角閃石 雲母、赤色粒子	布留式系甕
668	甕	口縁部	—	残存(3.0)	—	ナデ	ケズリ	5YR7/6 橙	7YR7/4 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	布留式系甕
669	甕	口縁部	—	残存(2.7)	—	ハケメ後 回転ナデ	ハケメ後 回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子、長石 白色粒子、赤色粒子	
670	壺	口縁部～胴部	(15.0)	残存(10.0)	—	ナデ 多方向のハケメ	ナデ ケズリ後ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良	角閃石、長石 石英	
671	壺	口縁部～胴部	(9.3)	残存(5.0)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	5YR6/6 橙	5YR7/4 にぶい橙	良	長石、角閃石 雲母	
672	壺	口縁部～胴部	(8.6)	残存(5.3)	—	ナデ	ケズリ	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	良	長石、角閃石 雲母	
673	高杯	脚部	—	残存(8.9)	—	ナデ	ナデ	2.5YR5/8 明赤褐	5YR6/4 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	
674	高杯	杯部	—	残存(4.9)	—	ハケメ後ナデ	薄いケズリ	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	良好	雲母、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	布留式系土器
675	高杯	杯部	(15.7)	残存(5.9)	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良好	石英、褐色粒子	口縁部一部欠損 布留式系長頸高杯 精製で福岡平野からの搬入品の可能性あり
676	高杯	杯部	(15.7)	残存(4.7)	—	ナデ ハケメ後ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	長石、角閃石 雲母	長頸高杯、布留式系土器 精製で福岡平野からの搬入品の可能性あり
677	鉢	口縁部～胴部	(15.8)	残存(6.0)	—	ナデ　ハケメ 指圧痕	ナデ　ハケメ 指圧痕	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	良	石英、雲母 角閃石	

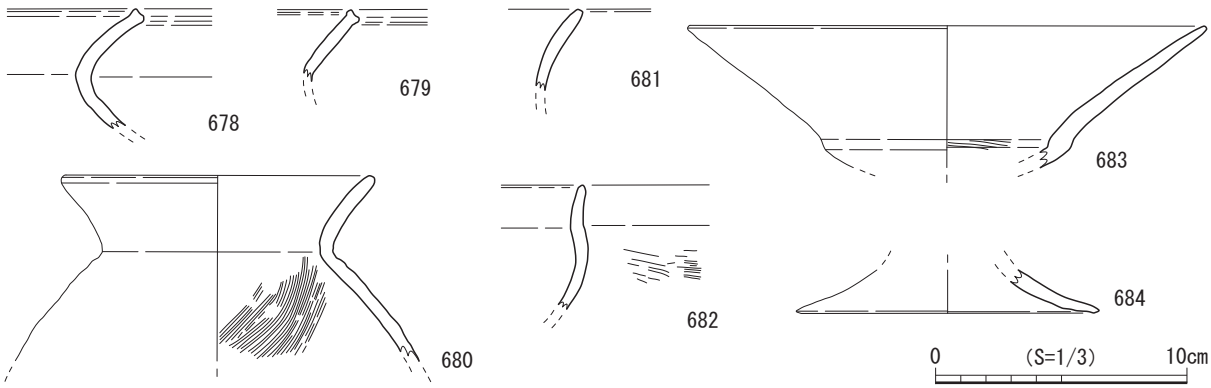


図版259　SU7出土遺物

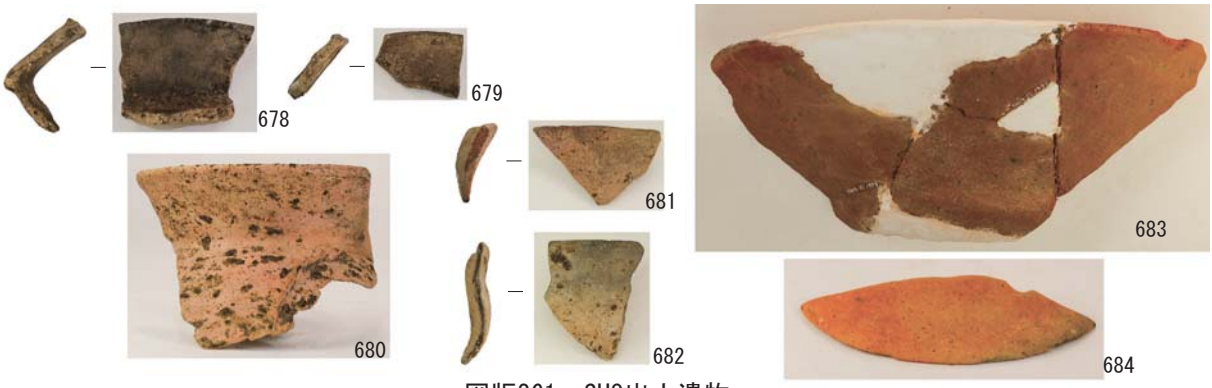
⑧ TAK201405　2区 SU8(遺物集積)(第285・288図　図版260・261　表152)

SU8は2区7868グリッドでSU6の北側に位置する。長軸0.80m、短軸0.70mの楕円形の範囲に土器が集中を確認した。土器は甕、壺口縁部片、高杯等が出土した。**678～680**は甕の口縁部～胴部片である。くの字口縁を呈し端部は丸く仕上げられている。内面は斜め方向にハケメ調整を施す。**680**はB系統(近畿第Ⅴ様式系土器群)である。**681**、**682**は壺口縁部片である。**682**は広口の壺片で口縁端部はやや尖る。**683**、**684**は高杯の杯及び脚部片である。**683**は口縁部が直線的に外傾し端部は細く丸い。時期は4世紀後半頃の所産であろう。

SU8(北から)
図版260　SU8遺構状況



第288図　SU8出土遺物実測図(S=1/3)



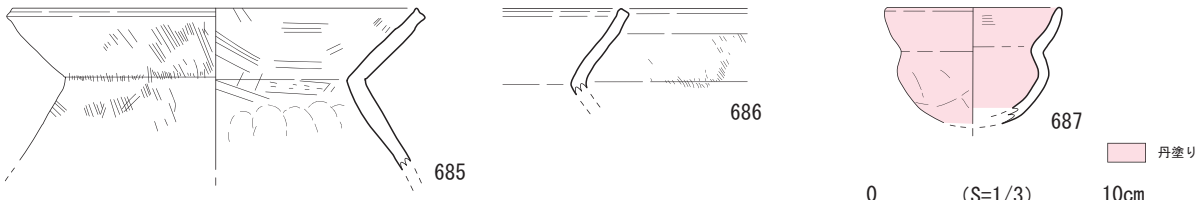
図版261　SU8出土遺物

第152表　SU8出土土器観察表

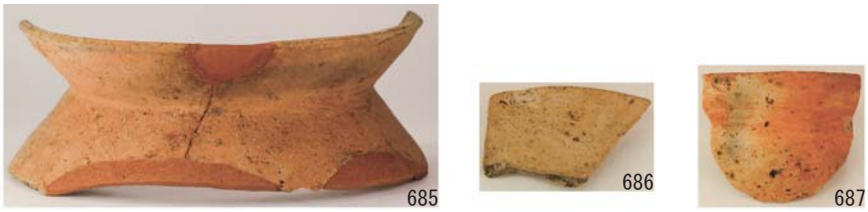
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
678	甕	口縁部	—	残存(4.7)	—	ナデ	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	良	雲母、赤色粒子 黒色粒子、長石	布留式系甕
679	甕	口縁部	—	残存(2.8)	—	ナデ	ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR3/2 黒褐	良	雲母、赤色粒子 黒色粒子、長石	布留式系甕
680	甕	口縁部～胴部	(12.0)	残存(7.3)	—	ナデ	斜め方向のハケメ	5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい橙	良	角閃石、長石、石英	
681	壺	口縁部	—	残存(3.2)	—	ナデ	ナデ	2.5YR6/4 にぶい褐	2.5YR6/4 にぶい褐	良	雲母、赤色粒子 黒色粒子、長石	
682	広口壺	口縁部	—	残存(4.9)	—	ナデ	ナデ	2.5Y5/1 黄灰	7.5YR7/4 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	
683	高杯	杯部	(20.4)	残存(5.6)	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	良	雲母、赤色粒子 黒色粒子	
684	高杯	脚部	—	残存(1.7)	(11.6)	ナデ	ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	良好	雲母、赤色粒子 黒色粒子、長石	

⑨ TAK201405　2区 SU9(遺物集積)(第285・289図　図版262　表153)

SU9は2区7868グリッドでSU8の北側に位置する。長軸0.91m、短軸0.72mの楕円形の範囲に土器集中を確認した。**685**は布留式系の甕口縁部～胴部片である。くの字口縁で直線的に外反し端部は方形で、端部内側を僅かにつまみ上げている。全体的に器壁が薄い。**686**は布留式系の甕口縁部片である。**687**は小形の坩で精製ミニチュア土器である。内外面に丹塗りが施されている。復元口径6.8cm、推定器高4.6cmで祭祀用に作製された器種であろう。時期は4世紀後半～末頃であろう。



第289図　SU9出土遺物実測図(S=1/3)



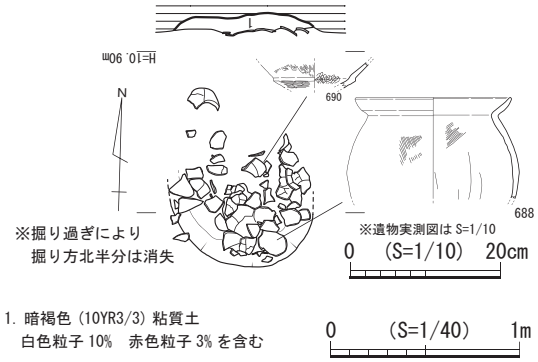
図版262　SU9出土遺物

第153表　SU9出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
685	甕	口縁部～胴部	(16.0)	—	—	ハケメナデ消し 指オサエ	ナデ	2.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	長石、雲母 赤色粒子	布留式系甕
686	甕	口縁部	—	残存(3.4)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子 白色粒子、赤色粒子	布留式系甕
687	坩	口縁部～体部	(6.8)	—	—	ナデ	ハケメ ナデ消し	5YR7/6 橙	5YR7/8 橙	良好	長石	内外面に丹塗りあり

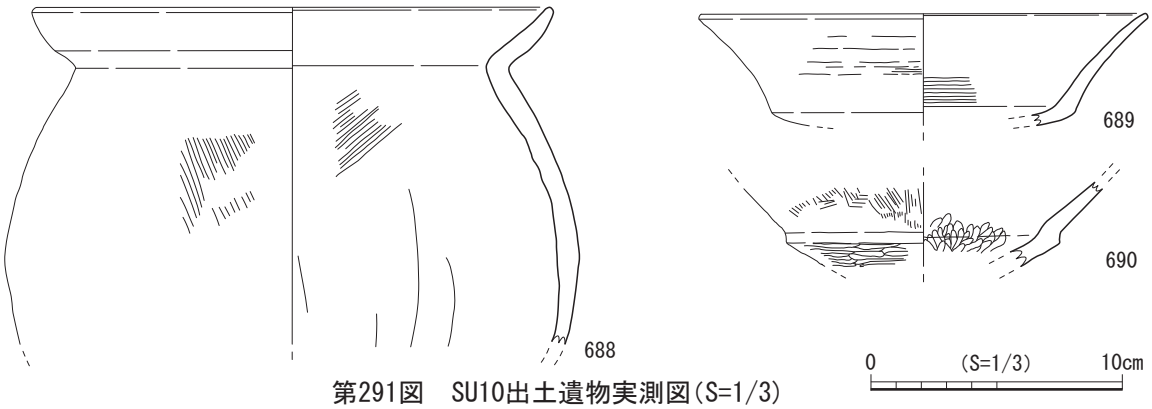
⑩ TAK201405　3区 SU10(遺物集積)(第290・291図　図版263・264　表154)

SU10は3区7666、7866グリッドに位置する。長軸1.11m、短軸0.92m の楕円形の範囲に土器集中を確認した。土師器甕、壺、高杯片が出土した。**688**は土師器の甕で口縁部～胴部片である。口縁部は、くの字口縁で端部は丸い。内外面はハケメ調整を施している。**689**、**690**は土師器高杯杯部片である。**690**は杯体部から底部付近で一段を有する。内面は細かなミガキを施す。時期は4世紀後半頃であろう。



第290図　SU10平・断面図(S=1/40)

検出状況（西から）
図版263　SU10遺構状況



第291図　SU10出土遺物実測図(S=1/3)

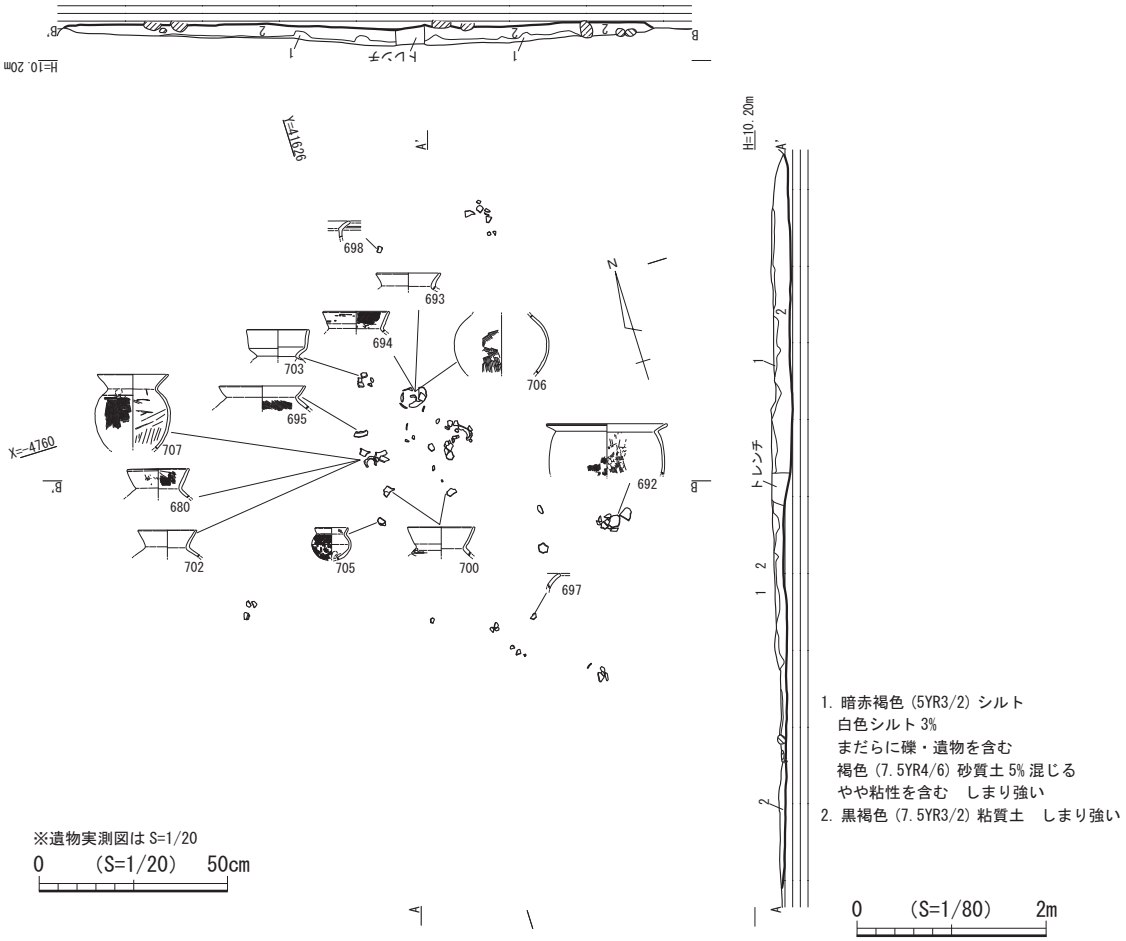
図版264　SU10出土遺物

第154表　SU10出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
688	甕	口縁部～胴部	(23.2)	残存(13.3)	—	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	雲母、赤色粒子 長石、角閃石	
689	高杯	杯部	(17.6)	残存(4.4)	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/5 にぶい橙	良	雲母、赤色粒子 長石、角閃石	
690	高杯	杯部	(10.8)	残存(3.3)	—	ハケメ ミガキ	ハケメ ミガキ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	良	石英、角閃石 雲母	庄内式高杯か

⑪ TAK201405　5区 SU12(遺物集積)(第292・293図　図版265・266　表155)

SU12は5区7462・7662グリッドに位置する。長軸6.89m、短軸5.24m の楕円形の範囲に土器集中を確認した。弥生式土器と古墳時代の土師器が出土した。しかし圧倒的に土師器が多い。ここでは土師器を中心に記す。**691～702**、**707**は土師器の甕である。口縁部及び口縁部から胴部片である。口縁部が直線的で外傾する**692**、**693**、**694**、**699**、**700**、**701**、**702**、**707**がある。**691**、**695**は口縁部がやや内湾する。**696**、**697**、**698**は口縁部がやや外反する。**703**は二重口縁で口縁部～頸部にかけての破片で口縁端部は丸い。**704**は頸部～胴部片で口縁部が欠損しているため器種は不明である。**705**は小形丸底壺の破片である。底部は欠損する。外面はハケメ調整を施す。**706**は壺の口縁～胴部片である。外面は斜め方向にハケメ調整を施す。内面は指圧痕が残る。

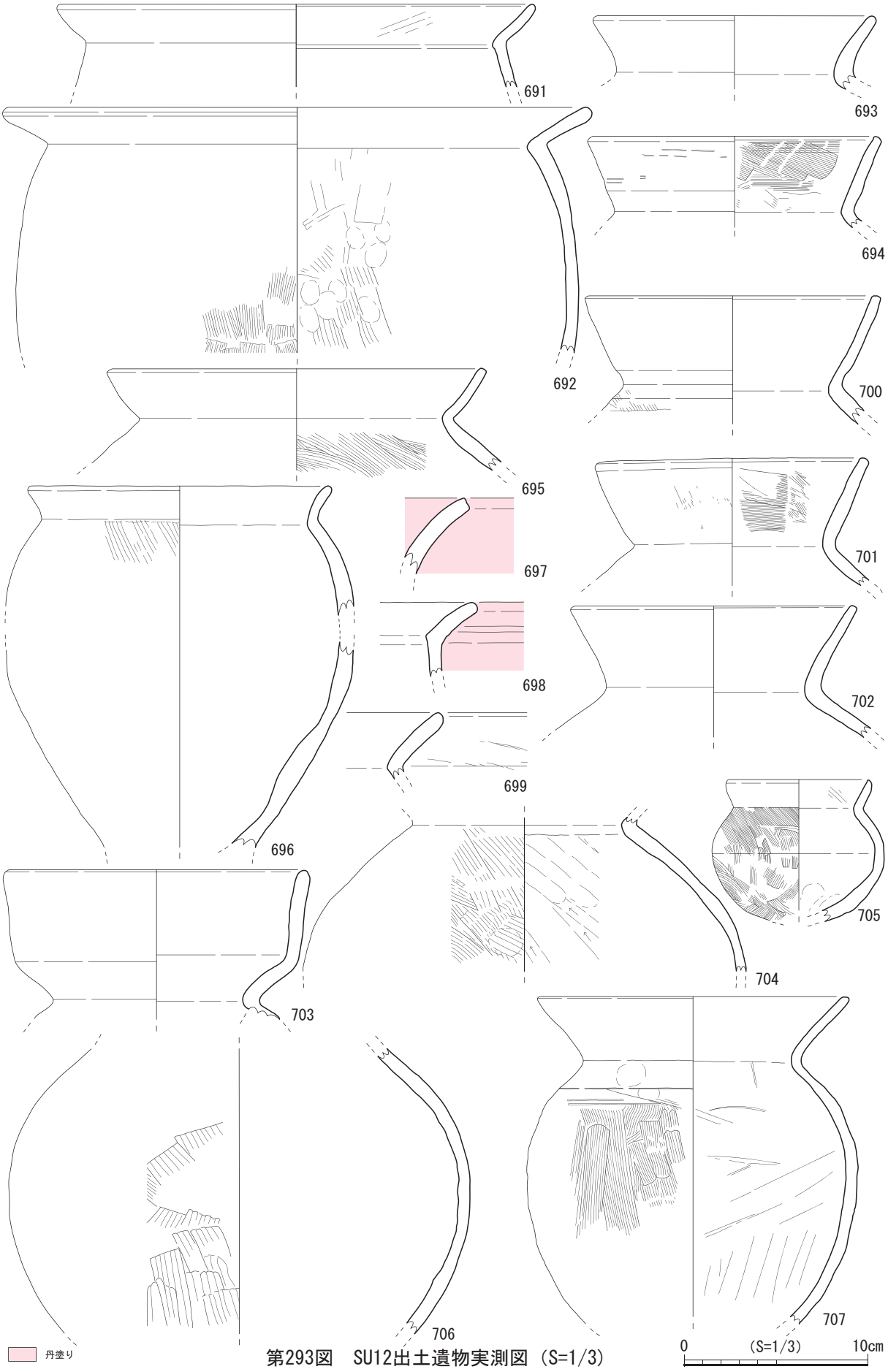


第292図　SU12平・断面図(S=1/80)

検出状況（北から）

断面状況（北から）

図版265　SU12遺構状況



第293図　SU12出土遺物実測図（S=1/3）

691

693

692

694

695

696

697

700

698

701

699

702

703

704

705

706

707

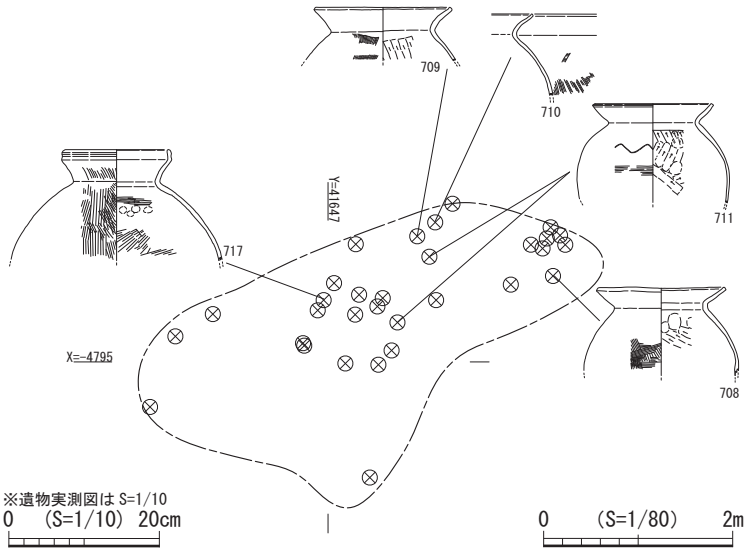
図版266　SU12出土遺物

第155表　SU12出土土器観察表

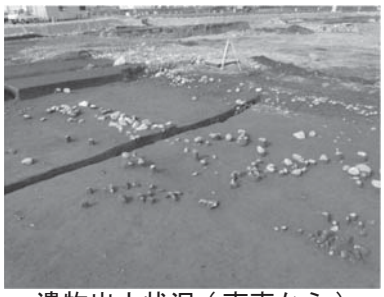
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
691	甕	口縁部～頸部	(25.6)	残存(4.5)	—	ナデ	ナデ	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR5/4 にぶい褐	良	雲母、角閃石 長石、赤色粒子	
692	甕	口縁部～胴部	(31.8)	—	—	ナデ	ナデ ハケメ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	長石	
693	甕	口縁部～頸部	(14.9)	—	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石	
694	甕	口縁部～頸部	(15.4)	—	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良	長石、石英	
695	甕	口縁部～頸部	(20.4)	—	—	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母	
696	甕	口縁部～胴部	(16.8)	残存(19.5)	—	ハケメ ナデ消し	ケズリ 横ナデ	5YR5/2 灰褐	5YR6/6 橙	良	石英、赤色粒子 長石	
697	甕	口縁部	—	残存(4.1)	—	ナデ	ナデ	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	良	雲母、角閃石、長石 赤色粒子、石英	内外面全面丹塗りあり
698	甕	口縁部	—	残存(4.0)	—	回転ヘラケズリ 丹塗り	ナデ	5YR5/8 明赤褐	10YR4/4 褐	良	雲母、角閃石、長石 赤色粒子、石英	外面丹塗りあり
699	甕	口縁部	—	残存(3.6)	—	ナデ	ナデ	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR3/1 黒褐	良	雲母、角閃石 赤色粒子、長石	
700	甕	口縁部～頸部	—	—	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	長石、黒色粒子	
701	甕	口縁部～頸部	(14.2)	残存(6.9)	—	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、雲母、石英	
702	甕	口縁部～頸部	(15.0)	残存(7.1)	—	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石、褐色粒子	
703	壺	口縁部～頸部	(16.0)	残存(8.2)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	良	長石	二重口縁壺
704	不明	頸部～胴部	—	残存(8.3)	—	ハケメ 指オサエ	ヘラケズリ後 ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良	褐色粒子、石英 雲母	
705	壺	口縁部	(7.8)	—	—	多方向の ハケメ	ナデ 指オサエ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰	良	長石	小型丸底
706	壺	胴部	—	残存(15.5)	—	ハケメ後ナデ	ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	良	雲母、長石 石英、角閃石	
707	甕	口縁部～胴部	(16.4)	—	—	ハケメ	ナデ ヘラケズリ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	長石、石英	

⑫ TAK201405　4区 SU13(遺物集積)(第294・295図　図版267・268　表156)

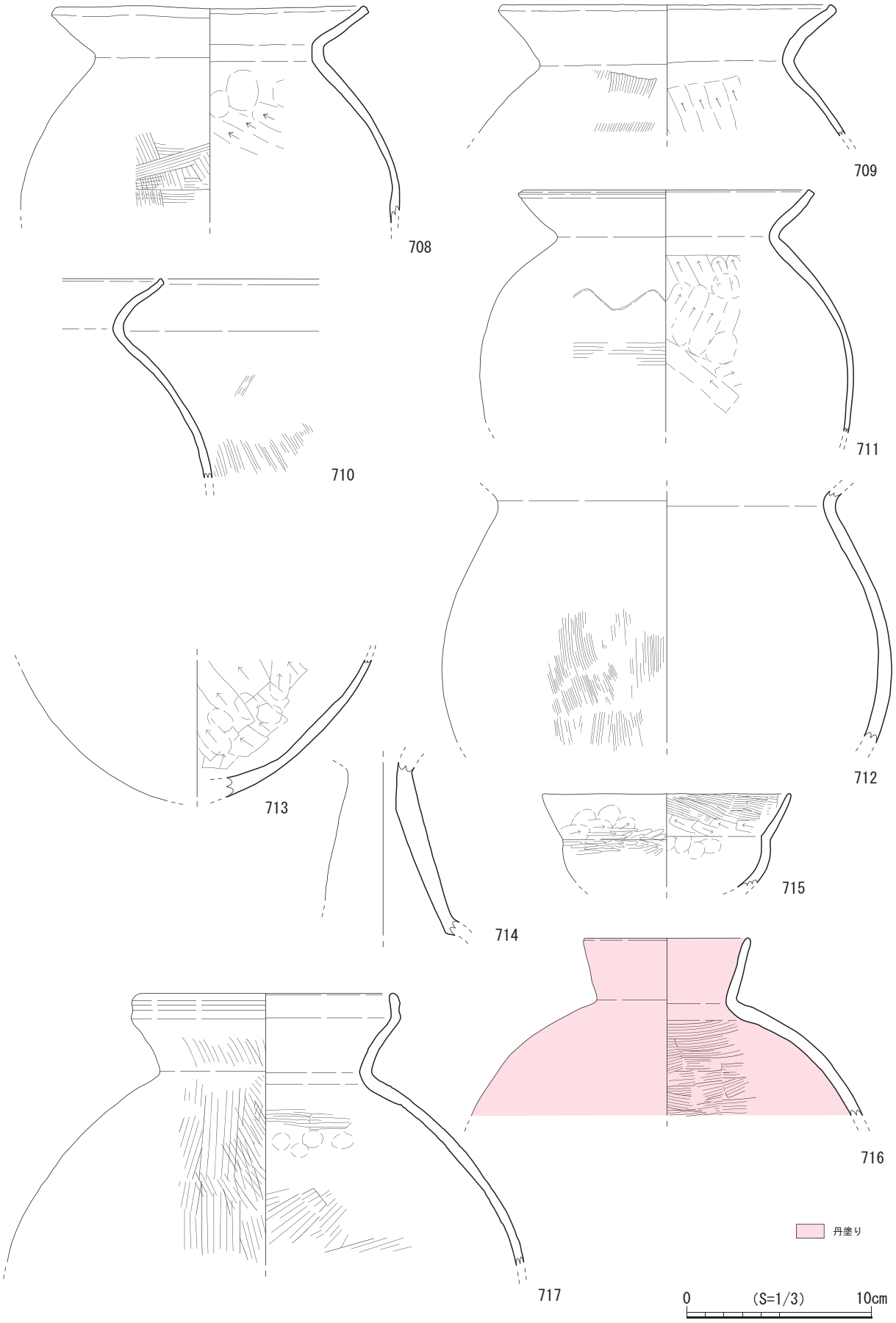
SU13は4区7864グリッドに位置する。長軸7.93m、短軸4.11m の不正楕円形の範囲に土器集中を確認した。甕、壺を中心に出土した。特に甕は布留式系の土器である。**708～711**は布留式系の甕で、口縁部～胴部の破片である。口縁部は、くの字で端部は方形である。端部内側を僅かにつまみ上げている。外面は薄いハケメ、波状文を施し、内面はケズリを施す。器壁は薄い。**712**は甕の頸部～胴部片である。**713**は甕底部片で丸底を呈する。**714**は高杯脚部片である。**715**は坩の口縁部～体部片である。**716**は直口壺の口縁部～胴部片である。**717**は二重口縁壺の口縁部～胴部片である。二重口縁部は垂直で短い。端部は丸い。土器の時期は布留式系土器及び二重口縁壺から4世紀前半～中頃と思われる。



第294図　SU13平面図(S=1/80)



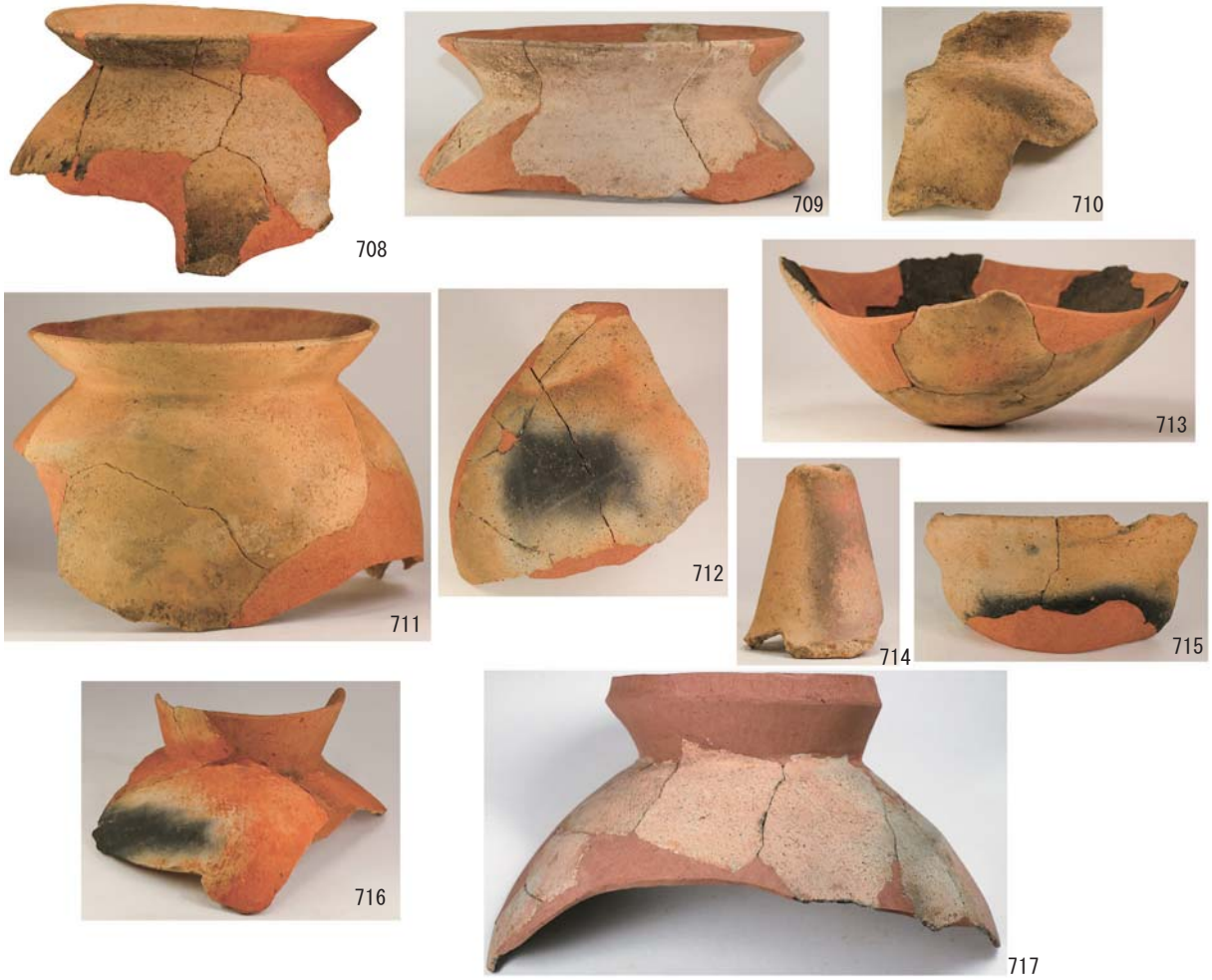
遺物出土状況（南東から）
図版267　SU13遺構状況



第295図　SU13出土遺物実測図(S=1/3)

第156表　SU13出土土器観察表

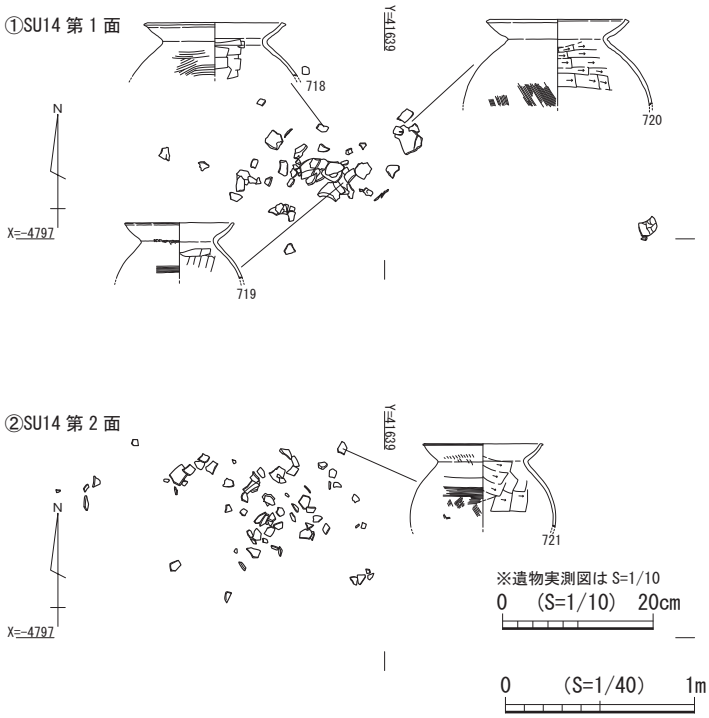
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
708	甕	口縁部～胴部	(16.6)	残存(11.6)	—	横ナデ ハケメナデ消し	ケズリ後ナデ 指オサエ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR6/2 にぶい褐	良好	雲母、長石、石英 赤色粒子	布留式系甕
709	甕	口縁部～胴部	(17.6)	残存(7.0)	—	ナデ ハケメナデ消し	ケズリ後ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR6/2 灰褐	良好	石英、長石、雲母 褐色粒子	布留式系甕
710	甕	口縁部～胴部	—	残存(10.6)	—	ナデ ハケメ	ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5YR6/3 にぶい黄	良好	石英、長石 赤色粒子	布留式系甕
711	甕	口縁部～胴部	15.4	残存(13.0)	—	ナデ ハケメ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	金・銀雲母、石英 長石、赤色粒子	布留式系甕 口縁部が短い、胎土が異なる 一重の波状文あり 胴部最大径以下が急激に薄くなる　糸島地域からの搬入品の可能性あり
712	甕	頸部～胴部	—	残存(13.5)	—	ハケメ後ナデ	ハケメナデ消し	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/2 灰白	良	石英、雲母 角閃石	
713	甕	底部	—	残存(7.3)	—	ナデ	ケズリ後ナデ 指オサエ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR3/1 黒褐	良	長石、雲母 角閃石	布留式系甕
714	高杯	脚部	—	残存(9.3)	—	ナデ	ケズリ	5YR6/6 橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	石英、角閃石 雲母、赤・白色粒子	
715	坩	口縁部～胴部	(13.2)	残存(5.0)	—	ナデ ミガキ	ハケメ後ナデ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母 角閃石	
716	直口壺	口縁部～胴部	(8.8)	残存(9.5)	—	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	良好	長石、雲母	布留式系土器 外面に丹塗りあり
717	壺	口縁部～胴部	(13.6)	—	—	ナデ ハケメ	ナデ 指オサエ	5YR8/3 淡橙	10YR8/2 灰白	良好	石英、角閃石 雲母、赤色粒子	庄内系壺 器壁が薄い



図版268　SU13出土遺物

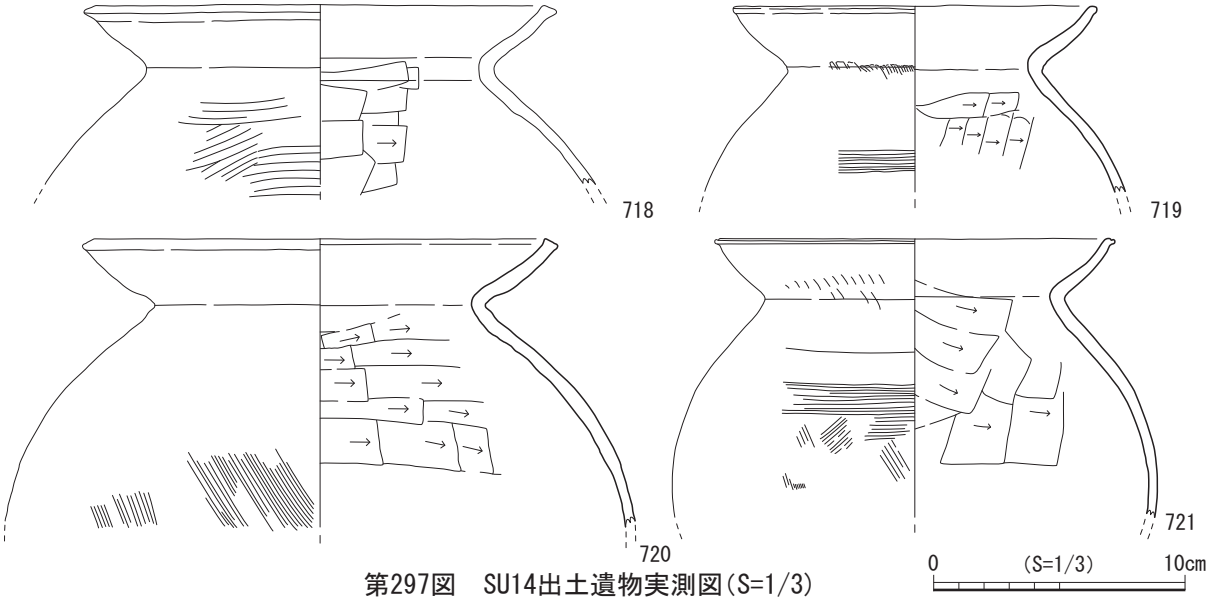
⑬ TAK201405　4区 SU14(遺物集積)(第296・297図　図版269・270　表157)

SU14はSU13の西側に位置する。長軸3.78m、短軸1.81mの不正楕円形の範囲に土器集中を確認した。**718～721**は布留式系の甕口縁部～胴部片である。口縁部はくの字で、内側に僅かに内湾する。端部は**718**、**720**が方形で**719**、**721**がやや丸い。全体的に器壁は薄く丁寧な作りである。



第296図　SU14平面図(S=1/40)

遺物出土状況（北から）
図版269　SU14遺構状況



第297図　SU14出土遺物実測図(S=1/3)

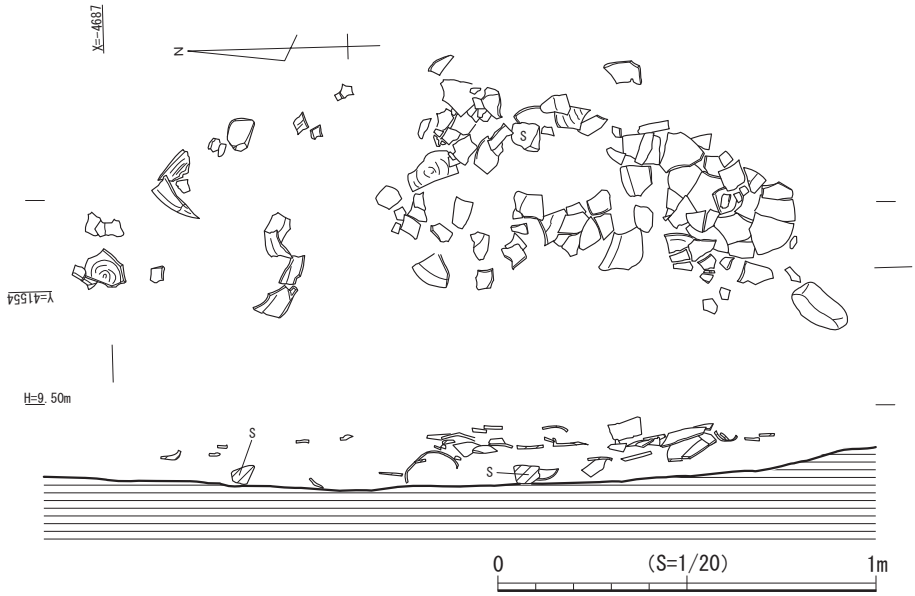
図版270　SU14出土遺物

第157表　SU14出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
718	甕	口縁部～胴部	(17.7)	残存(7.1)	—	ナデ ハケメ後ナデ	ナデ ケズリ後ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良好	長石、雲母 角閃石	布留式系甕
719	甕	口縁部～胴部	(14.4)	残存(7.3)	—	ハケメ後 回転ナデ消し タタキ痕	横位のケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	良好	赤色粒子、長石 石英、雲母	胎土に大振りの金雲母を含む　胴部最大径付近にタタキ痕あり　佐賀平野のどこからかの搬入品か
720	甕	口縁部～胴部	(17.9)	残存(11.4)	—	ナデ ハケメ後ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石、雲母 角閃石	布留式系甕 外面にタタキ痕あり
721	甕	口縁部～胴部	(15.5)	残存(11.0)	—	ナデ ハケメ後ナデ	ナデ ケズリ後ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	石英、雲母 角閃石	布留式系甕

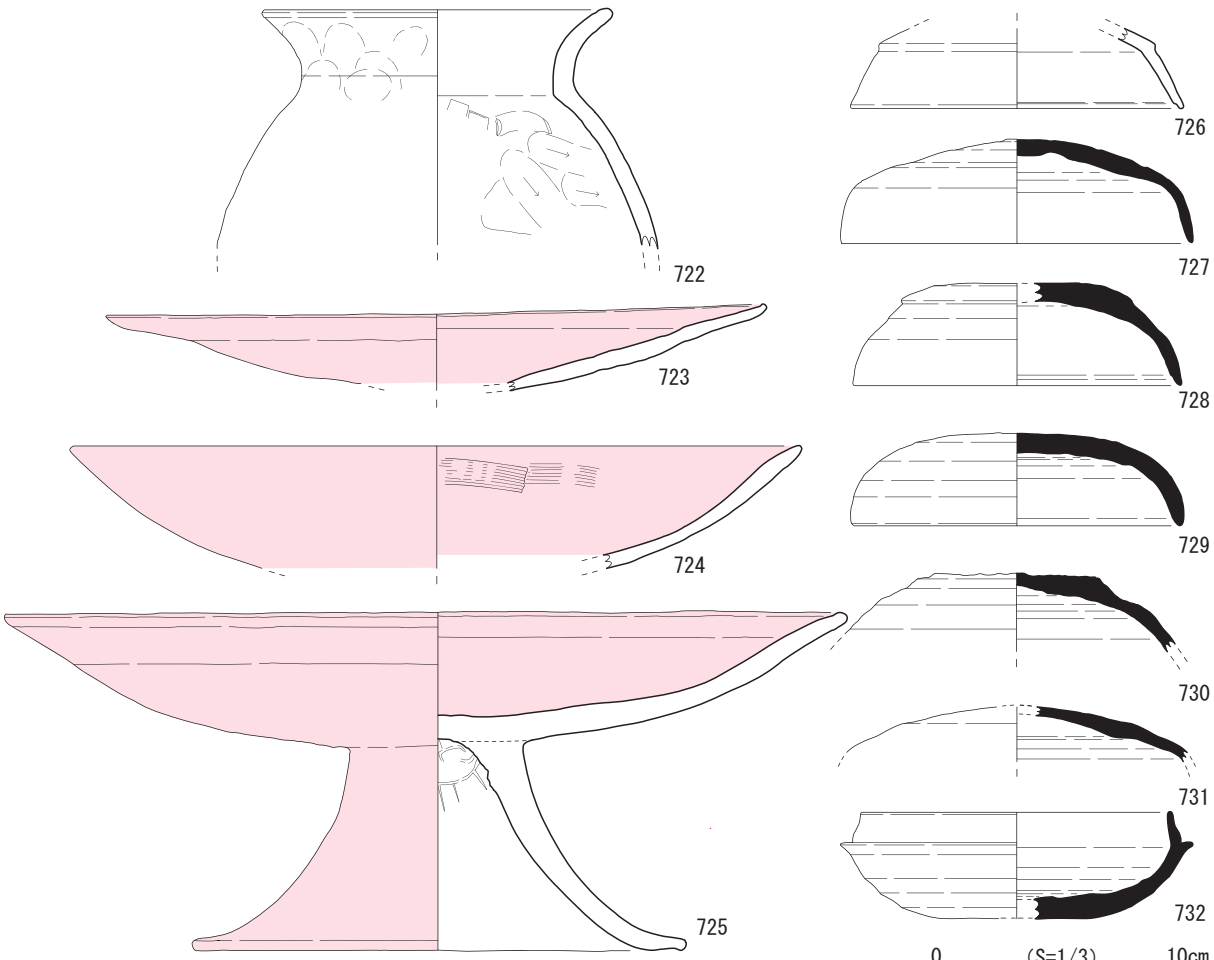
⑭ TAK201407　4区 SU1(遺物集積)(第298・299図　図版271・272　表158)

SU1は4区6854グリッドに位置する。長軸2.1m、短軸0.75mの範囲に須恵器、土師器片の集中を見た。遺物は須恵器杯身、杯蓋、土師器高杯、甕、壺等が出土した。丹塗りの土器も多く出土した。**722**は土師器の甕口縁部から胴部片である。口縁部は外湾し端部は丸い。**723～725**は高杯である。**723**、**724**は浅く、広い杯部である。**725**は接合でほぼ完形品となった。杯部は浅く、広い。脚部は大きく開脚する。**723～725**は杯部内面全体に丹塗りが施されている。**726**は土師器で模倣杯蓋口縁部片である。口縁部は細く端部はやや尖る。大部との境は稜をなす。**727～731**は須恵器の杯蓋である。**728**は完形の杯蓋である。**728**、**730**は天井部が平たく、それ以外は丸い。**732**は須恵器杯身で口縁部～底部片である。立ち上がりは1.1cmで受け部は短い。時期は須恵器杯身から6世紀中頃であろう。



第298図　SU1平・断面図(S=1/20)

遺物出土状況（北から）
図版271　SU1遺構状況



第299図　SU1出土遺物実測図（S=1/3）

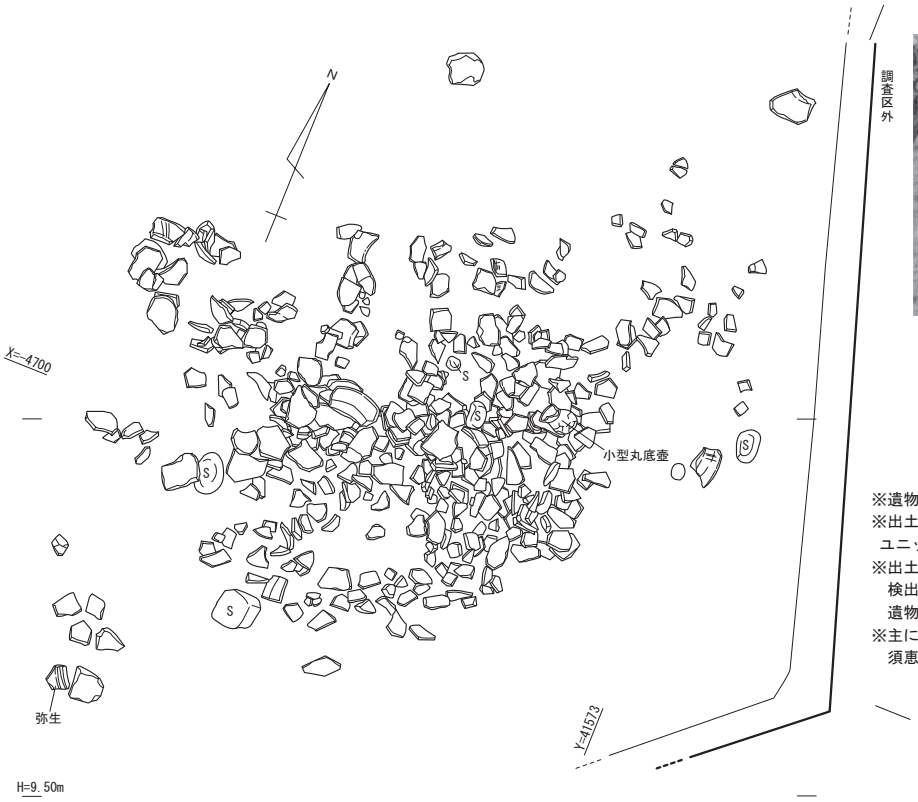
図版272　SU1出土遺物

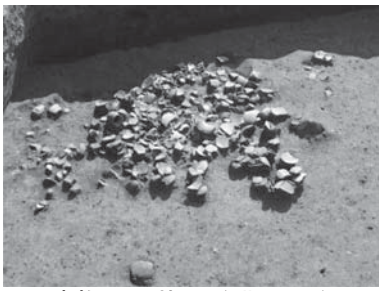
第158表　SU1出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
722	甕	口縁部～胴部	(14.0)	残存(9.4)	—	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	2.5YR6/6 橙	5YR5/1 褐灰	良	長石、石英 角閃石	被熱を受けている
723	高杯	杯部	(26.1)	残存(3.4)	—	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	雲母	内外面に丹塗りあり
724	高杯	杯部	(28.9)	残存(4.8)	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	10YR8/4 浅黄橙	5YR7/6 橙	良	長石	内外面に丹塗りあり
725	高杯	接合完形	33.2	13.6	(19.2)	ナデ	ヘラオサエ痕	10YR5/1 褐灰	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	雲母、長石	内外面に丹塗りあり
726	杯蓋	口縁部	(13.0)	残存(3.2)	—	ナデ	ナデ	2.5YR8/3 淡黄	2.5YR8/3 淡黄	良	褐色粒子	模倣杯
727	杯蓋	口縁部～天井部	14.0	4.1	—	ナデ 回転ヘラ削り	ナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	良	長石	6世紀後半
728	杯蓋	口縁部～天井部	(13.0)	4.05	—	回転ヘラ削り	ナデ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良	長石、長石	1/2欠損　6世紀後半
729	杯蓋	口縁部～天井部	(12.8)	3.7	—	回転ヘラ削り	ナデ	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	良	長石、灰色粒子	6世紀後半
730	杯蓋	体部～天井部	(6.0)	残存(2.9)	—	回転ヘラ削り	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石、黒色粒子	6世紀後半
731	杯蓋	天井部	—	残存(12.1)	—	回転ヘラ削り	ナデ	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	良	長石	6世紀後半
732	杯身	口縁部～底部	(12.3)	—	—	ナデ 回転ヘラ削り	ナデ	N7/ 灰白	5PB6/2 青灰	良	長石	6世紀後半

⑮ TAK201407　4区 SU2(遺物集積)(第300・301図　図版273・274　表159)

SU2は4区6856グリッドで4区の南東端に位置する。長軸2.1m、短軸1.8mの範囲に土師器が多量に出土した。土器は手づくね、甕、壺口縁部等が出土した。**733～743**は甕の口縁部片である。**733**、**734**は布留式系の甕で口縁端部内側に僅かなつまみ上げがある。**744**は広口壺の口縁部～胴部片である。口縁部は僅かに外反し端部は丸い。**745**はミニチュア土器で小形丸底壺である。口縁部が一部欠損しているがその他は完形である。時期は布留式系の甕、小型丸底壺から4世紀中頃～後半頃と思われる。



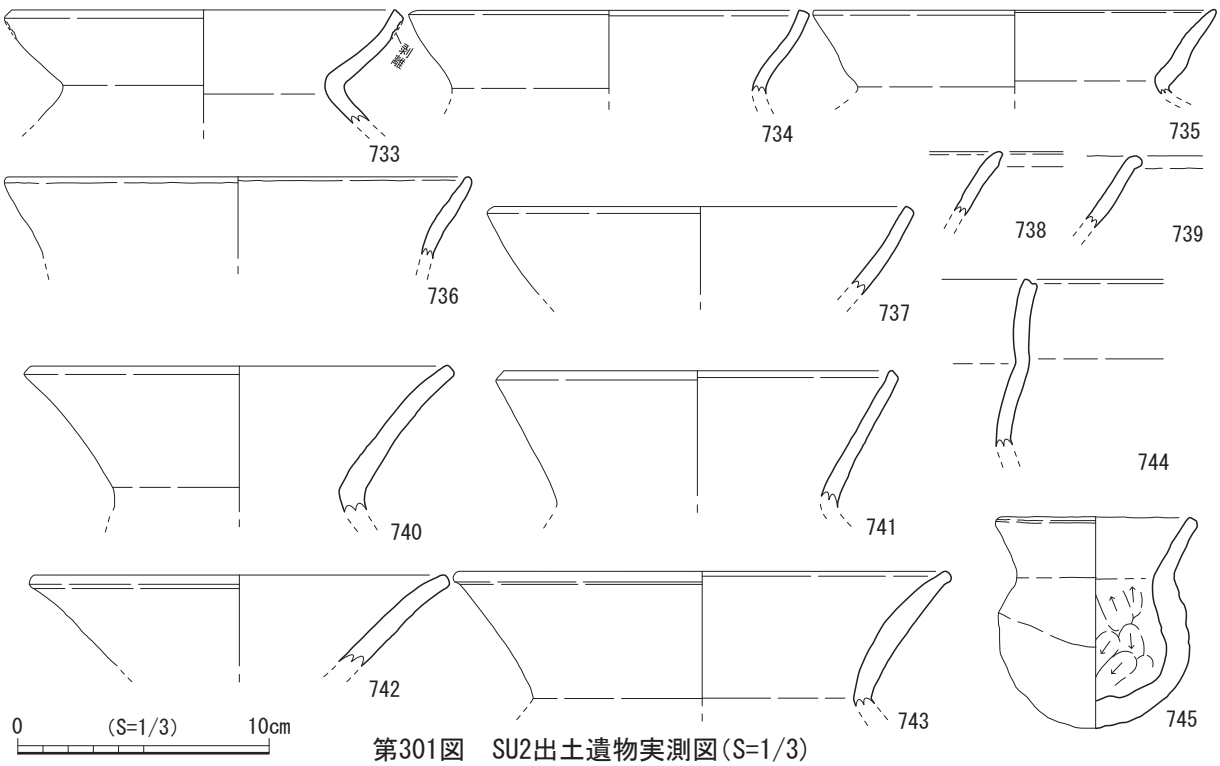


遺物出土状況（北から）
図版273　SU2遺構状況

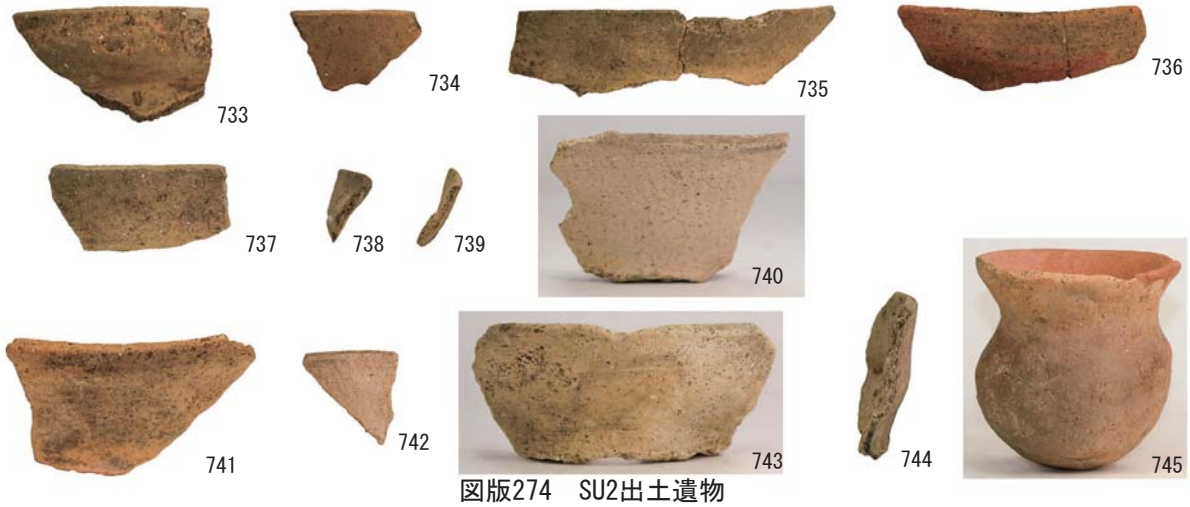
※遺物は3層上面で検出
※出土遺物は北東・北西・南東・南西部のユニット別で一括取上げを行った
※出土遺物周辺には堀方の平面プランは検出されなかったため、遺物集中箇所(SU)として取り扱った
※主に土師器破片のみの出土　数点弥生土器も須恵器は1点も出土しなかった

0　(S=1/20)　50cm

第300図　SU2平・断面図(S=1/20)



第301図　SU2出土遺物実測図(S=1/3)



図版274　SU2出土遺物

第159表　SU2出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
733	甕	口縁部	(16.7)	残存(4.3)	—	ハケメ 指オサエ	ナデ ヘラケズリ	7.5YR4/3 褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	長石、褐色粒子	布留式系甕
734	甕	口縁部	(15.2)	残存(3.3)		ナデ	ナデ 指オサエ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、石英	布留式系甕
735	甕	口縁部	(16.0)	残存(3.3)	—	指オサエ	ハケメ ナデ消し	7.5YR5/2 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良	角閃石、長石 褐色粒子	
736	甕	口縁部	(18.2)	残存(3.2)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/8 黄橙	5YR6/8 黄橙	良	雲母、長石 赤色粒子	
737	甕	口縁部	(16.4)	残存(3.5)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英 角閃石	
738	甕	口縁部	—	残存(2.6)	—	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	褐色粒子	
739	甕	口縁部	—	残存(2.8)	—	ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	雲母、長石、赤色粒子 黒色粒子、白色粒子	
740	甕	口縁部	(16.5)	残存(5.9)		ハケメ ナデ消し	ナデ 指オサエ	10YR8/1 灰白	10YR8/3 浅黄橙	良	長石	
741	甕	口縁部	(16.0)	残存(5.4)	—	指ナデ	指ナデ 指オサエ	7.5YR6/3 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	長石、雲母 赤色粒子	
742	甕	口縁部	(16.4)	残存(3.6)	—	ハケメ ナデ消し	ナデ	7.5YR5/2 灰褐	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、雲母 赤色粒子	
743	甕	口縁部	(19.2)	残存(5.3)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	雲母、黒色粒子、石英 赤色粒子、白色粒子	
744	壺	口縁部 ～胴部	—	—	—	ハケメナデ消し 指オサエ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	長石、石英	二重口縁壺
745	ミニチュア壺	接合 完形	(7.5)	(8.3)	1.6	ナデ 指オサエ	指ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	良	石英、雲母 角閃石	小形丸底壺

(8)古墳周溝(SZ)

① TAK201403　3区 SZ1(SD3周溝)(第302・303図　図版275・276　表160)

SZ1は3区1270・1470グリッドに位置する。本遺構は円墳の周溝である。盛り土部分は削平され周溝部のみが残る。規模は周溝までを含めると東西15.1m、南北14.8mで、内側盛り土部分の規模は東西12.5m、南北12.4mを測るほぼ円形の平面プランである。周溝の断面形は北側が半月状で南側は浅くかなり削平されている。遺物は周溝の覆土から弥生式土器、壺胴部片、台付甕脚部片、器台片等が出土した。また庄内式系の土器では高杯、壺、甕等が出土した。**746**は甕口縁部～頸部片である。口縁部は直線的に外傾し端部は方形である。器壁は薄い。**747**は甕の胴部～底部片である。外面は細かなハケメ調整を施し、内面は黒色を呈する。底部は完全な丸底ではない。**748**は壺で口縁部の一部が欠損するがその他はほぼ完形である。底部は完全な丸底ではない。外面は細かなハケメ調整で、胴部下位はミガキとケズリ痕が残る。内面はやや粗いハケメ調整を施す。庄内系の様相を呈する。**749**は高杯の杯部である。内外面はミガキ痕が残る。暗文状の文様が残る。**750**は高杯の脚部片である。ミガキ、ケズリ、ハケメ調整を施している。**751**は高杯杯部片である。内面はミガキを施され暗文状を呈する。外面は細いハケメを施す。**752～755**は高杯脚部片である。**752**、**753**は北部九州タイプの在地系の高杯である。**754**は脚部片でB系統(近畿第Ⅴ様式系土器群)である。**755**は最下層から出土した。脚部内面はヘラケズリである。穿孔は2ケ所(全体は4ヶ所)を確認した。全体的な土器の様相から考えて佐賀平野における編年の夕ヶ里式で3世紀中～後半頃の所産と考えられる。(註2)

註2　周溝内の土器については2017（平成29年）の第19回九州前方後円墳研究会長崎大会に参加された研究者の方々の所見をもとに記述した。

検出状況 (1)

検出状況 (2)

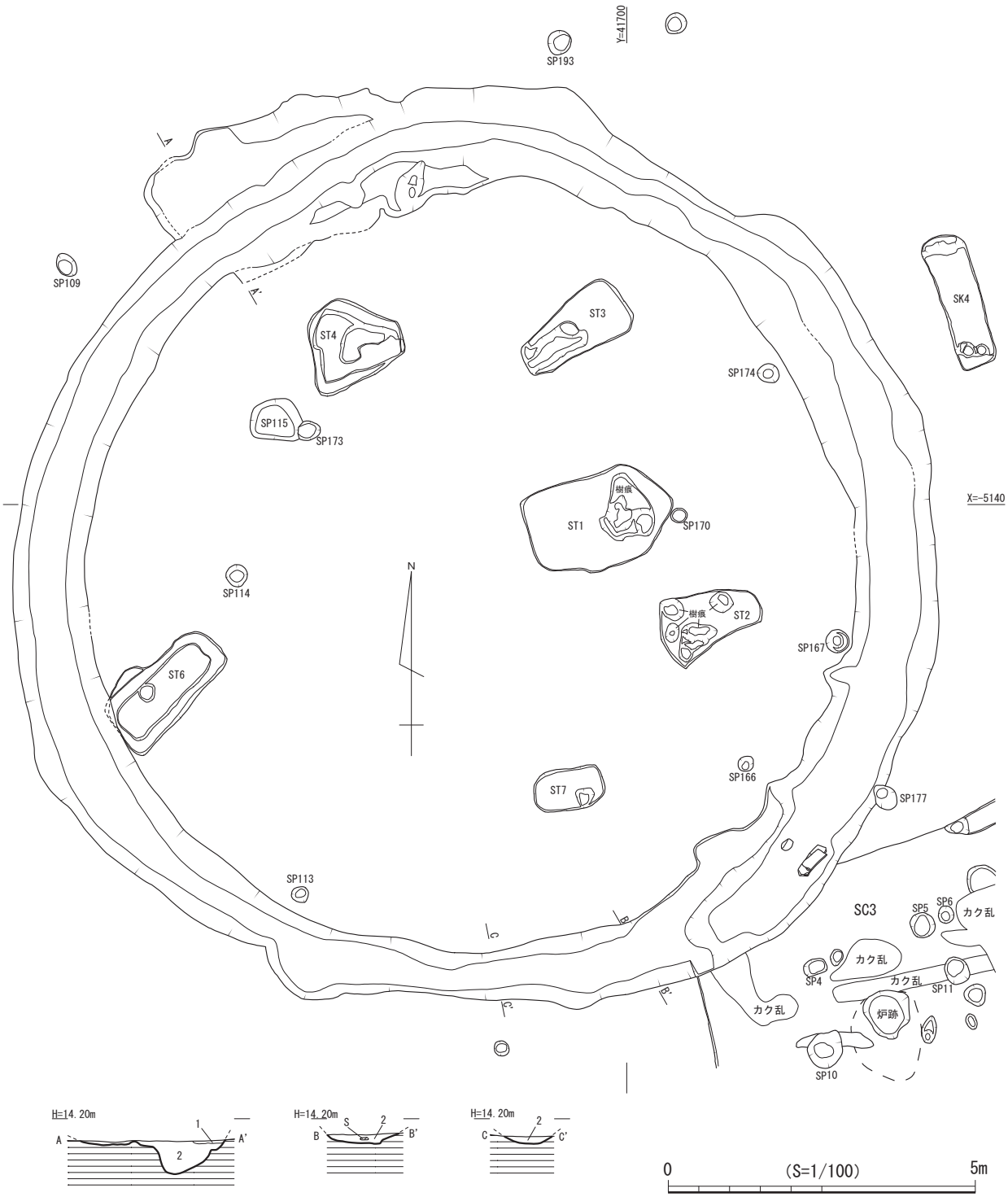
遺物出土状況 (1)

遺物出土状況 (2)(南から)

遺物出土状況 (3)

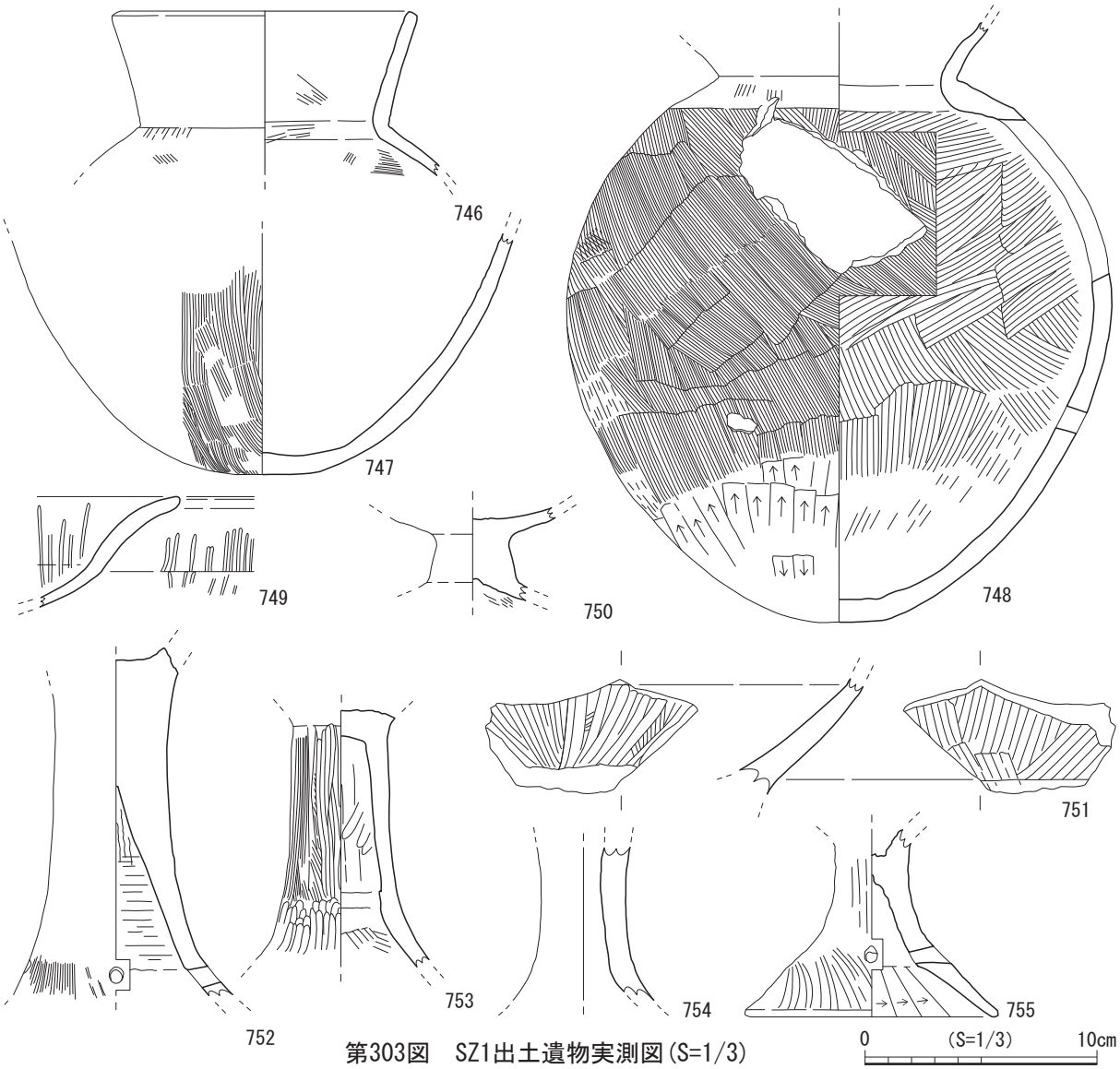
完掘状況(北東から)

図版275　SZ1遺構状況



1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 粘性あり　しまりやや強い 3 ～ 7cm 大の礫を 2% 含む カク乱である
2. 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性あり　しまりやや強い 1 ～ 3cm 大の礫を 3% 含む
　下層部に、にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土をブロック状に 5% 含む 周溝の埋土

第302図　SZ1平・断面図(S=1/100)



第303図　SZ1出土遺物実測図(S=1/3)

図版276　SZ1出土遺物

第160表　SZ1出土土器観察表

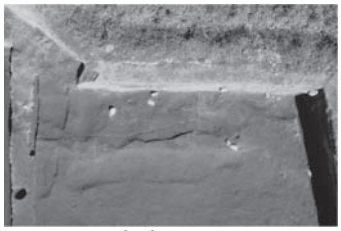
遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
746	甕	口縁部～頸部	(12.4)	—	—	ナデ	ハケメ	5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	石英	
747	甕	胴部～底部	—	残存 (10.3)	4.0	ハケメ	ハケメ ナデ消し	7.5YR7/6 橙	10YR2/1 黒	良	雲母、石英 赤色粒子	
748	壺	ほぼ完形	胴部径 (23.4)	—	—	斜め方向 ハケメ	多方向の ハケメ	2.5Y5/6 明赤褐	10YR5/2 灰黄褐	良好	長石、石英 角閃石	口縁部一部欠損 甕に近い壺　完全な丸底ではない　口縁部端部を少し上げるのは、庄内甕を意識か？頸部直下の胴部に段があり、粘土帯が狭いことが分かる　胴部下半はミガキ　内面のハケメの向きはＢ系統とは逆になるが、Ｂ系統の変容形態か（註2）
749	高杯	杯部	—	残存 (4.7)	—	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	良	長石、赤色粒子 角閃石、	
750	高杯	脚部	—	残存 (3.9)	—	ミガキ ハケメ	ケズリ後 ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	良	長石、雲母 角閃石	
751	高杯	杯部	—	—	—	ハケメ	ハケメ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	赤色粒子、石英 角閃石、	
752	高杯	脚部	—	—	—	ハケメ 全体的に摩耗	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良	長石、赤色粒子	穿孔2ヶ所あり
753	高杯	脚部	—	残存 (10.3)	—	ハケメ後 ミガキ	ハケメ後 ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/8 橙	良	雲母、赤色粒子	
754	高杯	脚部	—	—	—	摩耗	ケズリ後 ナデ	5YR7/6 橙	10YR4/1 褐灰	良	長石	全体的に剥離が目立つ
755	高杯	脚部	—	残存 (8.0)	(10.8)	ミガキ・ケズリ 表面摩耗	ケズリ	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	良好	角閃石、長石	穿孔2ヶ所あり

註2　周溝内の土器については2017(平成29年)の第19回九州後円墳研究会長崎大会に参加された研究者の方々の所見をもとに記述した。

(9)畦畔

①TAK201406　4区　畦畔4(水田址)(第304・305図　図版277・278　表161)

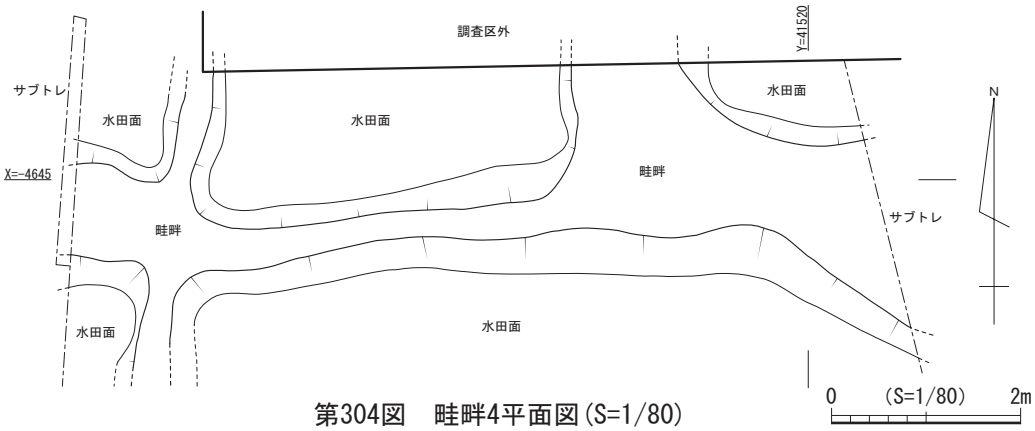
畦畔4は4区6452グリッドの調査区北端に位置する。3a、b層から検出した畦畔及び水田で調査区の北、東側に広がる様相を呈する。畦畔は東西方向に1本(東西1)、南北方向に2本(南北1、2)を検出した。畦畔はほぼ真北に沿って構築されている。畦畔の幅は一定ではなく、南北1が幅0.30m～0.40m、南北2が幅1.15mを測り大畦畔の様相である。東西1は幅0.30m～1.0mを測る。水田は5枚検出した(水田1～5)。5枚全て全容が判断できるものはなく、調査区外、又は後世の削平等で全容が把握できない状態である。水田平面がやや判断できるものは水田2で規模は東西3.6m、南北1.4m+である。また規模が大きなものは水田5である。東西6.0m+、南北1m+である。土器は水田内覆土及び畦畔内から出土した。**756**は土師器高杯である。杯部は1/2欠損、脚部は開脚部3/4が欠損する。杯部は緩やかに内湾し、端部はやや尖る。杯部内外、脚部外面には多くの丹塗り痕が残る。**757**は土師器椀口縁部片である。器壁は薄く端部は丸い。**758**、**759**は土師器甕の口縁部片である。**760**、**761**は須恵器杯蓋口縁部片である。口縁部は緩やかに内湾し端部は丸い。**762**は須恵器杯身で口縁部～体部片である。口縁部のたちあがりは短く、やや外反し、端部は丸い。時期は6世紀第4四半世紀頃である。



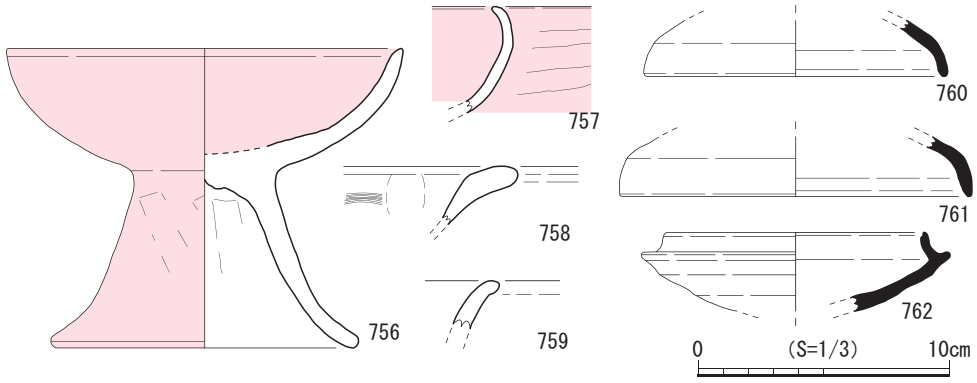
畦畔４（1）

畦畔４（2）

図版277　畦畔4遺構状況



第304図　畦畔4平面図(S=1/80)



第305図　畦畔4出土遺物実測図(S=1/3)

図版278　畦畔4出土遺物

第161表　畦畔4出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
			口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
756	高坏	接合	(15.6)	残存(11.8)	(12.0)	ナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	10YR8/2 灰白	10YR2/3 浅黄橙	良	長石、赤色粒子	口縁部欠損 内外面に丹塗りあり
757	椀	口縁部	—	残存(4.2)	—	ケズリ	ナデ	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	良	黒色粒子、白色粒子 雲母、赤色粒子	内外面に丹塗りあり
758	甕	口縁部	—	残存(2.3)	—	ハケメ ナデ消し	ハケメ ナデ消し	2.5YR5/8 明赤褐	2.5Y6/8 橙	良	長石	
759	甕	口縁部	—	残存(1.9)	—	ナデ	ナデ	2.5Y7/4 浅黄	5Y5/6 明赤褐	良	長石、石英	
760	杯蓋	口縁部	(11.8)	残存(3.2)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	5Y6/ 灰	5Y6/ 灰	良	長石、石英	6世紀後半
761	杯蓋	口縁部	(14.1)	—	—	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石、石英	6世紀後半
762	杯身	口縁部～体部	(10.2)	残存(3.1)	—	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ ナデ	N7/ 灰白	7.5Y6/ 灰	良	長石、石英	6世紀後半

(10)包含層出土遺物

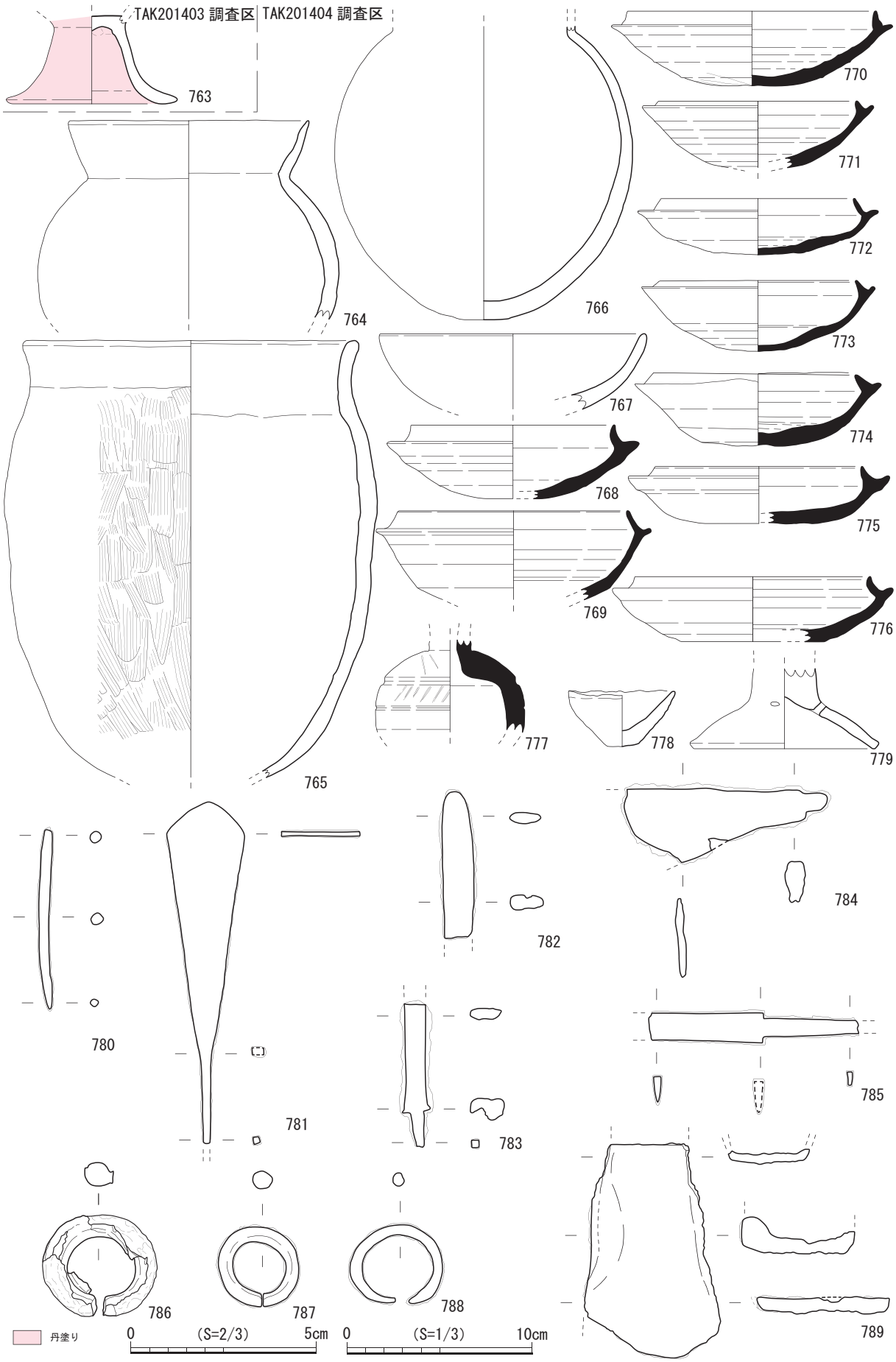
古墳時代の包含層から土器、石器、金属器が出土した。調査区毎に以下説明する。

① TAK201403調査区(第306図　図版279　表162)

763は土師器高杯の脚部で、一部欠損するがほぼ完形である。脚部は9.2cmで開きはやや広い。端部は細く丸い。内外面は丹塗りを施す。丁寧な作りである。

② TAK201404調査区(第306図　図版279　表162・163)

764は土師器小形の甕の口縁部～胴部片である。口縁部はくの字口縁を呈し、わずかに内湾し端部は細く丸い。胴部は細いハケメ調整を施す。布留式系の甕であろう。**765**は土師器の甕で口縁から胴部にかけての破片である。口縁部は緩やかに外湾し端部は丸い。外面はハケメ調整、内面はケズリ痕が残る。**766**は土師器壺の頸部～底部片である。口縁部は欠損しているが頸部～底部は接合復元できた。底部は丸底で内外面は僅かにハケメ調整を施している。**767**は土師器椀の口縁部～体部片である。口縁部は僅かに内湾し端部は丸い。**768～776**までは須恵器杯身で**777**は瓦体部片である。杯身の立ち上がりは4mm～9mmで短く、内傾又は外湾し端部は細く丸い。口径は10cm前後で、**770**だけが復元口径13.5cmとやや大きい。また砂粒を多く含む。時期は6世紀第3四半期～第4四半期頃と考えられる。**778**は手づくね土器である。**779**は小形の高杯脚部で開脚部付け根に二ヶ所の穿孔が確認できる。開脚部はやや内湾気味で端部は方形を呈する。**780～789**は金属製品である。**780**は青銅製の針？か。先端が鋭く尖り基部は欠損している。断面は円形である。残存長は4.9cmである。**781**は圭頭形の無頸有茎鏃である。鏃身部断面は平造りで、茎部断面は方形である。松木編年の10期6世紀前葉～中葉頃と思われる。**782**は柳葉形鉄鏃で頸部、茎部は欠損する。断面は両丸造りか。**783**は鉄鏃の頸部、茎部片である。頸部は角関で断面は長方形で、茎部断面は方形である。**784**は刀子片か。**785**は刀子片である。刃身部は両面仕上げである。頸部は角関で断面は長方形を呈する。**786～788**は耳環である。**786**は銀耳環である。**787**、**788**は銅の中身だけが残存した状態である。かなり劣化している。6世紀後半頃の所産であろう。**789**は鉄製鍬鋤先片か。全体的に薄く端部の折り返しが一部確認できる。



第306図　TAK201403・TAK201404調査区 包含層出土遺物実測図(No.780～No.789はS=2/3、他はS=1/3)

図版279　TAK201403・TAK201404調査区 包含層出土遺物

第162表　TAK201403調査区・TAK201404調査区　包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	時期	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	層位	備考
				口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面					
763	高坏	脚部	5C 半頃か？	—	—	9.2	ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良好	細かな砂粒を含む	3区 1470	4層 上面	内外面に丹塗りあり
764	甕	口縁部～胴部	6C 後半	(6.5)	残存 (10.6)	—	ナデ ハケメ	指ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、雲母 黒色粒子	A6東	砂層	
765	甕	口縁部～胴部	6C 後半	(17.6)	残存 (23.5)	—	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ 指オサエ	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/2 明黄褐	良	雲母、石英、長石 角閃石、褐色粒子	B6東 9272	3層	内外面にススの付着あり
766	壺	頸部～底部	6C 後半	—	残存 (15.7)	—	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	5YR7/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	良	長石	B6西 9270	3d 層	丸底
767	椀	口縁部～体部	6C 後半	(14.2)	残存 (4.05)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良	長石、雲母	B6東 9272	3d 層	
768	杯身	口縁部～底部	6C 後半	(10.4)	残存 (3.9)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	良	長石	—	表採	
769	杯身	口縁部～体部	6C 後半	(12.2)	—	—	回転ヘラケズリ 指オサエ	回転ヘラケズリ	N3/ 暗灰	7.5YR4/2 灰褐	良	長石	B6東 9272	3a 層	
770	杯身	口縁部～底部	6C 後半	(13.5)	—	—	ナデ ヘラケズリ	ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰	良	長石	B6東 9272	3a 層	ヘラ記号あり 砂粒を多く含む
771	杯身	口縁部～底部	6C 後半	(10.6)	残存 (3.8)	—	回転ヘラケズリ ナデ	ナデ	5R7/1 明赤灰	5R7/1 明赤灰	良	長石	B6東 9272	3a 層	
772	杯身	口縁部～底部	6C 後半	(10.4)	—	—	ナデ	ナデ	5GY6/1 オリーブ灰	N6/ 灰	良	長石	B6東 9272	3d 層	
773	杯身	口縁部～底部	6C 後半	(10.6)	残存 (3.8)	—	ナデ	ナデ	2.5Y4/1 黄灰	7.5YR7/1 明褐灰	良	長石	B6東 9272	3d 層	
774	杯身	完形	6C 後半	10.8	3.8	—	ナデ	ナデ 指オサエ	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰	良	長石、黒色粒子	B6東 9272	3d 層	
775	杯身	口縁部～底部	6C 後半	(11.0)	残存 (3.1)	—	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石、灰色粒子	B6東 9274	3a 下層	
776	杯身	口縁部～底部	6C 後半	(12.8)	—	—	ナデ	回転ヘラケズリ	10Y7/1 灰白	N5/ 灰	良	長石	B7東 9472	2層	外面自然釉
777	瓶	肩部～胴部	6C 後半	—	残存 (4.8)	—	刻目・沈線	ナデ	5PB7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	良	長石、灰色粒子	B6東 9276	3d 下半	肩部、胴部に斜め刻目 肩部から胴部に二条の沈線
778	ミニチュア椀	完形	古墳	5.6	3.0	1.7	手づくね	手づくね 指オサエ	10YR7/6 明黄褐	7.5YR7/4 にぶい橙	良	結晶片岩、長石 褐色粒子	B6西 9070	東西ベルト	手づくね土器
779	高坏	脚部	古墳前期	—	—	脚部径 (10.0)	ナデ	ナデ	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/4 にぶい橙	良	長石	B7東 9472	2層	穿孔2か所あり 内外面に丹塗り痕あり

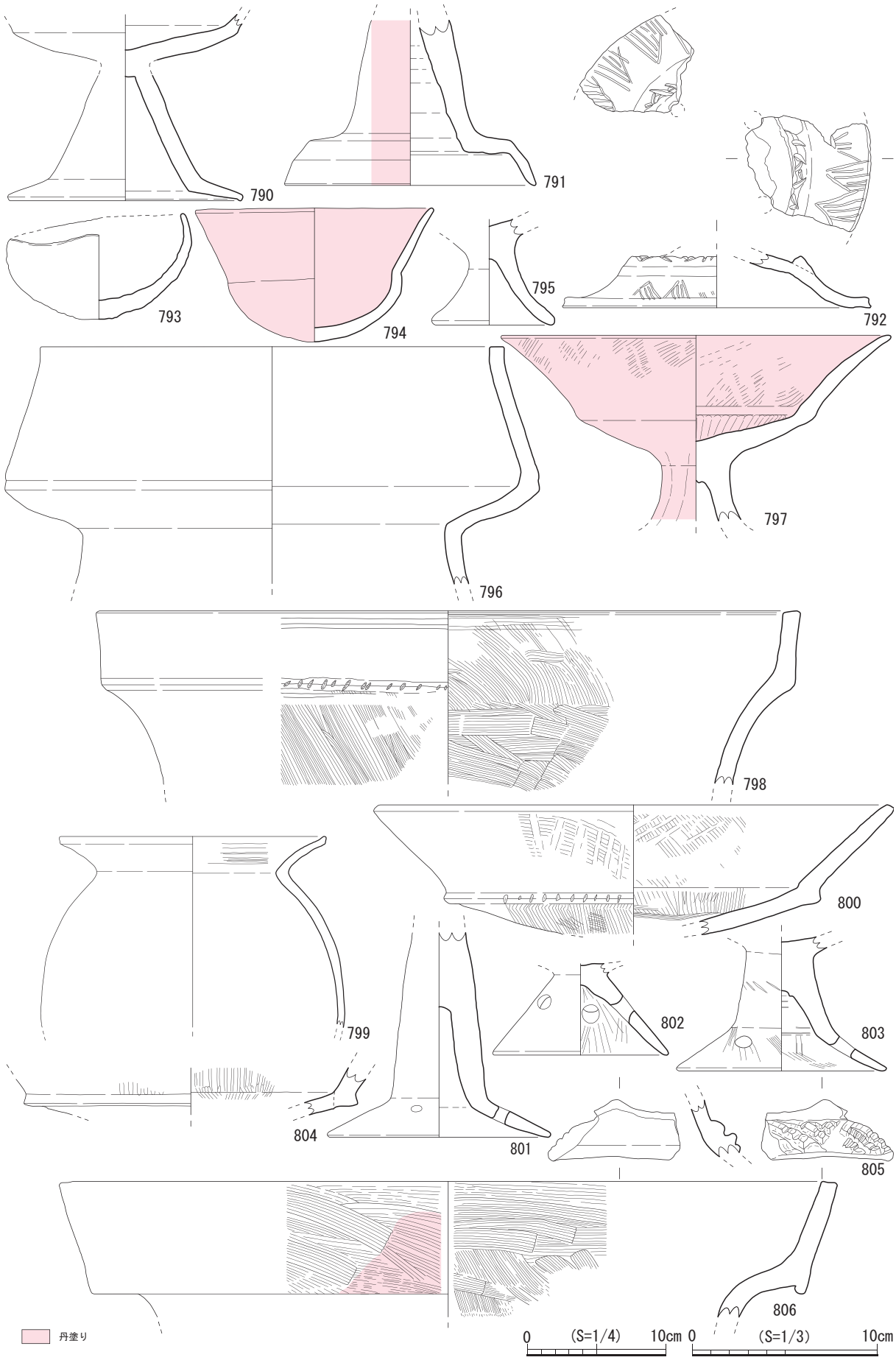
第163表　TAK201404調査区　包含層出土金属製品観察表

遺物番号	器種	材質	時代	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区・グリッド	層位	備考
780	針？	銅	—	49.00	3.50	3.00	2.17	B6東　9272	3a 層	
781	鉄鏃	鉄	6C 前葉～中葉	91.50	21.00	3.00	6.35	B7西　9074	3d 層	平根式
782	鉄鏃	鉄	—	40.00	9.00	4.00	2.42	B6東　9274	3d 上部	柳葉
783	鉄鏃茎部	鉄	—	39.00	9.00	6.00	3.24	B8北　0077	3層	
784	刀子刃片	鉄	—	57.00	21.00	5.50	7.34	B7B 西　9672	3d 層	
785	刀子茎部	鉄	—	56.50	9.50	3.00	2.80	B8北　0178	3d 層	
786	銀耳環	銀・銅	6C 後半～末	(縦) 27.00	(横) 31.00	7.50	12.86	B6東　9274	3a 層	地金は銅
787	耳環	銅	6C 後半～末	(縦) 22.00	(横) 22.50	4.50	6.58	B6西　9068	2層	
788	耳環	銅	6C 後半～末	(縦) 22.00	(横) 26.00	3.50	2.88	B8北　0177	3d 層	
789	鍬鋤先片	鉄	—	58.00	35.50	5.00	18.07	B6東　9274	3a 層	

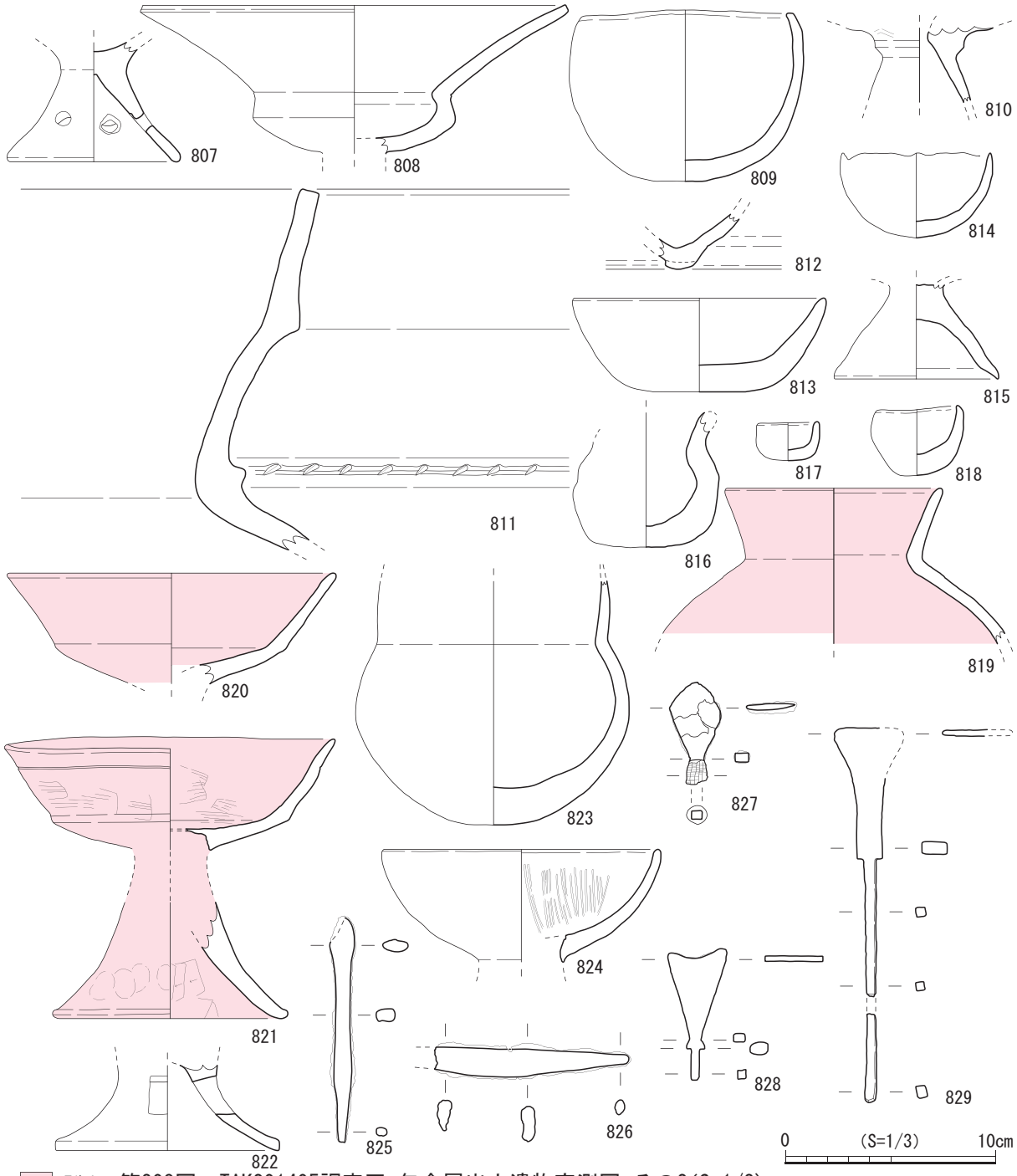
③ TAK201405調査区(第307・308図　図版280・281　表164・165)

790～792、**795**、**797**は高杯の杯部～脚部の破片である。**790**は杯部の口縁部が欠損し、脚部の開脚部の一部が欠損する。脚部は直線的に開き、開脚部はやや斜め下方向に短く広がる。端部は丸い。**791**は脚部のみで杯部は欠損する。開脚部は二重造りで端部はやや開き丸い。外面は丹塗り痕が残り、内面はヘラケズリを呈する。全体的に丁寧な作りである。この土器は南九州系の土器である。**792**は脚部の開脚部の破片2点である。開脚部は緩やかに内湾し端部は方形を呈する。開脚部には鋸歯文を呈する。開脚部と脚部との間は刻目三角凸帯が付設され境となす。脚部側はややフラットの面があり穿孔が2ヶ所確認できる。もう1点の破片についても穿孔が1ヶ所確認できた。こうした特徴から中部瀬戸内系の土器と考えられ庄内(古)併行段階の時期と思われる。**793**は手づくね土器の椀である。口縁部が一部欠損するがほぼ完形である。**794**は小形丸底坩である。口縁部の一部が欠損するがほぼ形状は確認できる。器壁は極めて薄い。外面底部から口縁部にかけて丹塗り痕が残る。**795**は手づくね土器で高杯脚部片である。**796**は讃岐系大型壺の口縁部片である。口縁部は二重口縁で内傾し端部は方形である。外面は薄いハケメ調整が残る。**797**は高杯杯部、脚部片である。杯体部は直線的に外傾し口縁部との境に稜をなす。口縁部の立ち上がりは緩やかに外湾し端部は細く丸い。内面は僅かにハケ

メが残る。全体的に丁寧な作りである。内外面は丹塗り痕が残る。**798**、**806**は豊前系大型壺？の口縁部片である。口縁部の直径は**798**が38cm、**806**が54cmと大きい。いずれも内外面に粗いハケメ調整を行う。**798**は二重口縁部に刻み目を施す。**799**は布留式系の甕口縁部～胴部片である。口縁部はくの字を呈し口縁端部内側に僅かにつまみ上げている。器壁は薄い。**800**は高杯杯部片である。口縁部は直線的で端部は丸い。屈曲部に刻み目を施す。壺口縁部の屈曲部に刻み目を施す例はあるが、高杯の屈曲部に刻み目を施す。産地は不明である。**801～803**は高杯の脚部片である。**801**は脚部が開脚部に向かってやや径が大きくなり、開脚部は低くやや内湾し、2ケ所の穿孔が確認された。**802**は脚部がなく開脚部は直線的に開く。1cm程の穿孔を3ヶ所確認した。**803**は4cm程の脚部と直線的に開く開脚部からなる。穿孔は1cm程で3か所確認した。**804**は壺底部片であろう。内外面にミガキを施し、外面はナデ調整を行う。時期は3世紀後半～4世紀前半頃と思われる。**805**は器種不明で、部位も不明である。斜め格子の刻目がある。防長系（西部瀬戸内）の土器か。**807**は高杯脚部片で脚部はなくいきなり開脚部となる。開脚部は直線的で端部は丸い。4ヶ所の穿孔を施している。外面は薄いハケメ調整を施す。**808**は高杯杯部片で有段高杯である。杯体部は浅い椀形を造りそこから口縁部が直線的に伸びる。端部内側は僅かにつまみ上げを行っている。全体的に丁寧なつくりである。この高杯の産地は不明である。時期は庄内の時期であろう。**809**は椀で丸底である。口縁部に僅かに欠損するがほぼ完形品である。口縁部は緩やかに内湾し端部は丸い。端部は僅かに内側に入る。内外面に僅かなハケメ調整痕が残る。**810**は器台か。上下欠損しているため全体の様相が判然としない。**811**は二重口縁壺の口縁部片である。頸部に刻み目凸帯が付設する。**812**は伝統的Ｖ様式の鉢又は甕の破片である。天外面にタタキ痕が残る。シボリが左上向きのタタキが本来とは向きが逆になる。時期は久住氏編年ⅡＡ期以降であろう。**813**は椀である。口縁部が一部欠損するがほぼ完形品である。底部は凸レンズ状でやや丸い。外面はハケメ調整を施す。内面はナデ調整を施す。口縁部は緩やかに内湾し端部は丸い。**814～818**は手づくね土器で椀、高杯、壺である。**819**は壺口縁部～胴部片である。内外面に丹塗りを施す。口縁部は直線的でやや外傾し端部は丸い。内外面にハケメ調整の痕が残る。**820～822**は高杯杯部～脚部片である。**820**、**821**は杯部の口径15.5cm、器高5.0cmがほぼ同じ作りである。杯部は体部と口縁部の屈曲部から直線的に外傾し端部は丸い。**822**は脚部片である。脚部は短く開脚部は10cm程である。長方形の透かしを施す。器壁は薄い。古式須恵器を模倣か。時期は古墳中期頃か。**823**は小形丸底壺(坩)である。1/2が残存する。口縁端部は欠損する。口縁部は僅かに内湾し立ち上がる。底部は丸底で、外面は全体にハケメ調整を施す。内面はナデ調整である。時期は4世紀末頃～5世紀初頭頃であろう。**824**は脚付の鉢で口縁部～底部にかけての破片である。体部は内湾し、端部は丸い。内面は暗文を施す。南九州系の土器で、庄内併行期であろう。**825**は柳葉式鉄鏃で鏃身部先端が一部欠損している。鏃身部断面は両丸造で鏃身関部はナデ関である。頸部は無関で断面は楕円である。**826**は刀子片である。刃部が一部欠損する。**827**は圭頭形鉄鏃で頸部、茎部が一部欠損する。鏃身部断面は平造である。頸部断面はは長方形を呈する。**828**は雁股式鉄鏃で頸部、茎部の一部が欠損する。鏃身部断面は平造で頸部は台形関である。頸部断面は正方形を呈する。**829**は方頭形鉄鏃である。鏃身部先端部分が一部欠損する。頸部は棒状で角関を呈する。鏃身部断面は平造で頸部断面は正方形である。こうした鉄鏃の時期は6世紀後半～7世紀前半頃と思われる。



第307図　TAK201405調査区 包含層出土遺物実測図 その1（No.806のみS=1/4、他はS=1/3）



第308図　TAK201405調査区 包含層出土遺物実測図 その2(S=1/3)

790

791

792

793

794

795

796

797

798

799

800

801

802

803

804

805

806

図版280　TAK201405調査区 包含層出土遺物 その1

図版281　TAK201405調査区 包含層出土遺物 その2

第164表　TAK201405調査区　包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	層位	※備考(註3)
				口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面					
790	高杯	底部～脚部	5C 前半	—	—	—	ミガキ	ミガキ	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	良好	長石、石英	① 8070	—	
791	高杯	脚部	古墳前期	—	—	(13.8)	ヘラケズリ ナデ	ヘラケズリ	2.5Y6/6 橙	2.5Y7/6 橙	良好	黒色粒子	① 8070	2層	外面丹塗り、内部はヘラケズリ　南九州系の土器？　産地不明
792	高杯	脚部	庄内(古)併行段階	—	残存 (2.85)	(16.6)	ナデ 穿孔あり	ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	石英、角閃石	① 8070	2層	穿孔、刻目凸帯、鋸歯文あり 中部瀬戸内周辺か？
793	椀	ほぼ完形	4C 後半	9.4	5.7	1.4	指オサエ	指オサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	良	長石、褐色粒子	① 8070	3層上面	口縁部欠損、手づくね
794	坩	ほぼ完形	4C 後半	12.8	7.1	—	ナデ 指オサエ	ナデ ヘラケズリ後ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	良好	長石、褐色粒子	① 8070	3層	
795	高杯	脚部	—	—	—	(6.6)	ナデ	ナデ 指オサエ	10YR8/2 灰白	10YR6/1 褐灰	良	長石	① 8070	3層	手づくね土器
796	壺	口縁部	古墳前期前半	(23.4)	—	—	ハケメ	ナデ	7.5YR7/6 橙	5YR6/8 橙	良	石英	① 8270 №24	—	讃岐系大型二重口縁壺、博多50次(SX945)で出土例あり。大阪や博多湾岸、播磨などで出土。広域に分布。大分・佐賀・唐津では出土なし。
797	高杯	杯部～脚部	4C 後半	(21.3)	—	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し ミガキ	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/6 黄橙	良好	長石	① 8270		
798	壺	口縁部	4C 後半	(38.0)	残存 (9.3)	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	7.5YR7/6 橙	2.5YR5/1 赤灰	良好	長石	① 8270	3層	二重口縁
799	甕	口縁部～胴部	—	(14.6)	—	—	ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	10YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良	赤色粒子、雲母	① 8270	3層	布留式系甕
800	高杯	杯部	—	(27.8)	—	—	ハケメ　ミガキ ハケメ	ハケメ　ミガキ ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良好	長石	① 8270	3層流路	高杯(産地不明) 豊後や肥後(八代)では壺に刻みを付ける例はあるが、高杯の屈曲部を刻む例はない。
801	高杯	脚部	—	—	残存 (11.0)	(11.8)	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石	② 7868	3層	穿孔1ヶ所あり
802	高杯	脚部	3C 後半～4C 前半	—	—	9.6	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	良好	長石、褐色粒子	② 8068	3層	穿孔3ヶ所あり
803	高杯	脚部	—	—	—	11.3	ナデ ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良好	長石、雲母 赤色粒子	② 8068	4a 層	
804	壺	底部	佐賀編年タヶ里式～土師器本村Ⅰ式	—	—	—	ミガキ ナデ	ミガキ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/3 淡黄	良	長石	② 8068	4a 層	
805	?	部位不明	弥生終末期～古墳前期前半	—	—	—	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石	② 8268	2層	斜め格子、刻目あり 防長系(西部瀬戸内)
806	壺	口縁部	—	(54.0)	—	—	ハケメ	ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5YR7/4 淡赤橙	良好	長石、石英、雲母	② 8468	—	豊前・豊後系(宇佐周辺)大型壺の可能性大、安国寺系ではない。
807	高杯	脚部	—	—	—	7.9	ハケメ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石	③ 7666	4b 層	穿孔4ヶ所あり
808	高杯	杯部	—	20.0	—	—	ミガキ	ハケメナデ消し	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	良	長石、石英 角閃石	③ 7866	—	(畿内系？)有段高杯、精製器B軍。庄内系、肥後系にしては口縁部が開きすぎる。産地不明。
809	椀	完形	古墳前期	9.4	8.0	2.3	ハケメナデ消し ハケメ	ハケメナデ消し	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	長石、石英	③ 7866	—	
810	器台？	坏部～開脚部片	—	—	—	—	ナデ	ナデ	2.5Y6/6 橙	2.5Y6/6 橙	良	長石、雲母、角閃石	③ 7866	4層	産地不明。 上下欠損のため全体的に判然としない
811	壺	口縁部～頸部片	古墳前期	—	—	—	ハケメ	ハケメナデ消し	5YR8/3 淡橙	7.5YR8/2 灰白	良	長石	③ 7866	4c 層	
812	鉢 or 甕	底部？	—	—	残存 (2.6)	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR7/2 明褐灰	良	長石、雲母	③ 8066	2層	伝統的なⅤ様式の鉢(または甕)。変容品シボリ、左上向きのタタキ(本来とは向きが逆になる)、佐賀平野に入るとタタキの向きが逆になる。
813	椀	ほぼ完形	—	11.8	4.5	—	ナデ ハケメ	ナデ	5YR7/3 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	良	長石	③ 8066	4b 層	口縁部一部欠損
814	椀	ほぼ完形	—	7.0	4.0	—	指オサエ	指オサエ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	雲母、角閃石 長石、赤色粒子	③ 8266	—	手づくね土器 口縁部一部欠損
815	ミニチュア高杯	脚部	—	—	残存 (5.5)	—	ナデ 指オサエ	ナデ 指オサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、褐色粒子	④ 7862	2層	手づくね土器
816	ミニチュア壺	ほぼ完形	—	—	—	—	ナデ 指オサエ	指ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	良	長石、雲母 金雲母	④ 7862	3層	手づくね土器
817	ミニチュア椀	完形	—	2.8	1.8	1.0	ナデ	ナデ	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	良	長石、褐色粒子 黒色粒子	④ 7862	3層	手づくね土器
818	椀	ほぼ完形	—	7.0	4.0	—	指オサエ	指オサエ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	雲母、角閃石 長石、赤色粒子	④ 8062	4層	手づくね土器 口縁部一部欠損
819	壺	口縁部～胴部	(10.4)	—	—	—	ミガキ	ミガキ ハケメナデ消し	2.5YR7/8 橙	2.5YR7/8 橙	良好	長石	④ 7864	4層	内外面に丹塗りあり
820	高杯	杯部	(15.8)	(15.6)	残存 (5.2)	—	ナデ ハケメナデ消し	ハケメナデ消し	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	良好	長石、黒色粒子	⑤ 7462	—	内外面に丹塗りあり
821	高杯	杯部～脚部	(15.8)	(15.35)	(13.2)	(10.6)	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	良好	長石、雲母 角閃石	⑤ 7462	—	内外面に丹塗りあり
822	高杯	脚部	古墳中期のどこか	—	残存 (4.0)	(10.8)	ナデ 透かし	ナデ 透かし	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良好	長石、雲母	⑤ 7664	2層	古式須恵器の模倣高杯か？
823	壺 or 坩	口縁部～底部	—	—	—	—	ハケメ	ナデ	2.5YR4/8 赤褐	2.5YR4/8 赤褐	良	結晶片岩、長石 赤色粒子、雲母	⑥ 7262	4a 層	1/2欠損
824	脚付鉢	口縁部～底部	古墳前期初頭	(13.0)	(5.3)	—	ケズリ後ナデ	暗文	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良	石英	① 8270	3層流路	広義の庄内式。Ⅴ様式(B系統) 在地で変容したもの (九州のどこか) 内面に暗文あり

註3　土器について、2017(平成29)年の第19回九州前方後円墳研究会長崎大会に参加された研究者の方々の所見を元に記述した。

第165表　TAK201405調査区　包含層出土金属製品観察表

遺物番号	器種	材質	時代	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区・グリッド	層位	備考
825	鉄鏃	鉄	—	107.00	12.00	6.00	79.55	②7868	4c 層	柳葉式
826	刀子	鉄	—	93.00	17.00	7.00	73.75	②7868・8068 境界ベルト	3層	
827	鉄鏃	鉄	6C 後半～7C 前半	4.80	24.00	6.00	10.88	②8468	4b 層	圭頭式
828	鉄鏃	鉄	—	62.00	2.75	5.50	23.20	②7866	4b 層	雁股式
829	鉄鏃	鉄	—	177.00	(残存)21.00	6.00	88.95	③8066	3層	柄部欠損あり

④ TAK201406調査区（第309図　図版282　表166・167）

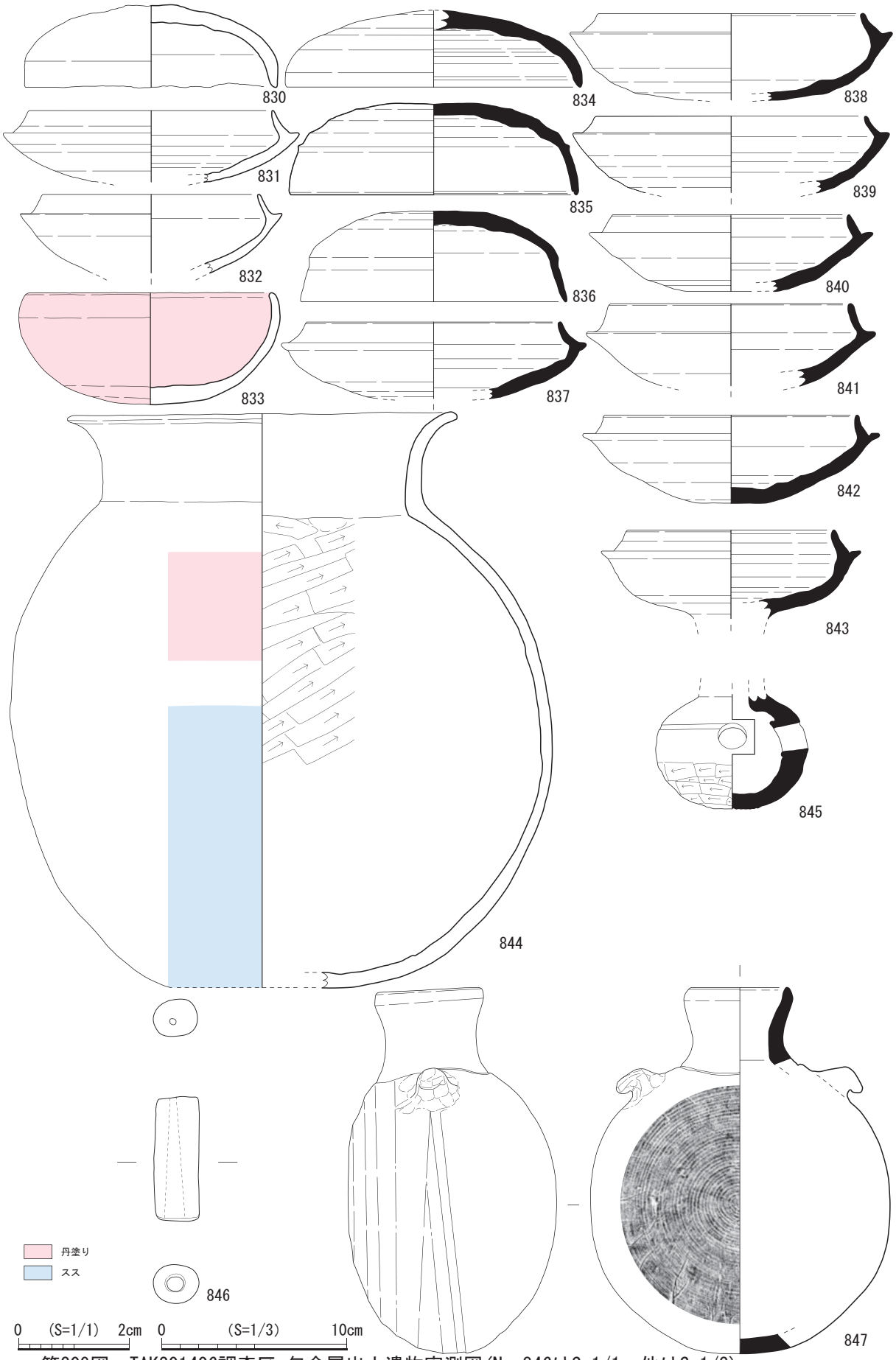
830～832は土師器で模倣杯蓋、杯身である。**833**は土師器の椀である。1/2が欠損する。口縁部は内湾し端部は丸い。内面は丹塗りを施している。**834～836**は須恵器杯蓋片である。復元口径は14cm～16cmである。**834**は天井部が丸く、**835**、**836**はやや平らである。**837～842**は須恵器杯身片である。復元口径11～16cmを測る。つまみ上げは1～1.5cmと短く、内傾する。時期は6世紀第3四半期～第4四半期頃であろう。**843**は有蓋高杯杯部片である。復元口径11cm、立ち上がり1.2cmである。**844**は土師器の壺で底部は欠損する。口縁部は緩やかに外反し端部は丸い。内面はケズリ痕が残る。全体的に器壁は薄い。**845**は瑯の体部片である。穿孔は1ヶ所である。**846**は管玉で片面は中央に穿孔が掘られているが片面は穿孔が針の孔程度しか掘られていない。このことから穿孔途中と考えられる。**847**は須恵器提瓶の完形品である。器高は19.6cm、口径5.2cm、端部幅11.2cmを測る。体部外面内側は右回転によるカキメ調整を施す。把手は角状である。全体的な形状から時期は6世紀後半頃であろう。

第166表　TAK201406調査区　包含層出土土器観察表

遺物番号	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区グリッド	層位	備考
				口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面					
830	杯蓋	口縁部～天井部	6C後半	(13.6)	—	—	ナデ	ナデ	5YR7/2 明褐灰	2.5Y6/4 にぶい橙	良	長石	②区 7252	2層	
831	杯身	口縁部～底部	6C後半	(16.0)	残存 (3.8)	—	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	長石、黒色粒子	②区 7252	2層下	模倣杯
832	杯身	口縁部	6C後半	(11.5)	残存 (4.2)	—	ナデ	ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	良	長石	③区 6850	2層 最下層	模倣杯
833	椀	口縁部～底部	6C	(13.0)	6.0	—	ヨコナデ	丁寧なナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	良	石英、赤色粒子 褐色粒子、長石	③区 6450	3a層	内外面に丹塗りあり
834	杯蓋	口縁部～天井部	6C後半	(16.0)	残存 (4.1)	—	ナデ	ナデ 指オサエ	10YR8/2 灰白	10YR6/1 褐灰	良	長石、黒色粒子	②区 7252	2層 最下層	
835	杯蓋	口縁部～天井部	6C後半	(15.4)	残存 (4.9)	—	回転ヘラケズリ ナデ	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	雲母、長石 赤色粒子	②区 7252	3a層	
836	杯蓋	口縁部～天井部	6C中頃	(14.3)	4.85	—	回転ヘラケズリ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石	③区 6850	—	
837	杯身	口縁部～底部	6C後半	(13.6)	残存 (4.1)	—	回転ヘラケズリ ナデ	回転ヘラケズリ ナデ	N5/ 灰	N5/ 灰	良	雲母、長石 赤色粒子	②区 7052	2層	
838	杯身	口縁部～底部	6C後半	(14.1)	残存 (4.3)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	10Y5/1 灰	10R6/3 にぶい赤橙	良	長石	②区 7052	3a層	
839	杯身	口縁部～底部	6C後半	(14.4)	残存 (4.1)	—	回転ヘラケズリ	回転ナデ	N5/ 灰	N7/ 灰白	良	長石	②区 7252	3a層	
840	杯身	口縁部～底部	6C後半	(12.7)	残存 (4.1)	—	ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ	N7/ 灰	N7/ 灰	良	長石、角閃石 灰色粒子	②区 7252	3b層	
841	杯身	口縁部～底部	6C後半	(12.8)	残存 (4.4)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石	③区 6850	3a層	
842	杯身	口縁部～底部	6C後半	(13.6)	残存 (4.7)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	7.5Y7/1 灰	7.5Y6/1 灰	良	長石、赤色粒子 黒色粒子	④区 6854	4層	
843	有蓋高杯	杯部	6C後半	(11.0)	—	—	ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰	良	長石	③区 6850	2層 最下層	
844	壺	口縁部～胴部	6C後半	(20.4)	(31.0)	(9.8)	ナデ 丹塗り	ケズリ後ナデ	10R5/4 赤褐	10R5/4 赤褐	良好	雲母、赤色粒子 結晶片岩、石英	③区 6850	3a層	底部欠損、外面一部に黒褐色のスス付着、丹塗りあり
845	瑯	胴部～底部	6C後半	—	—	2.8	手持ちケズリ	ナデ	10YR6/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	良	長石、雲母 角閃石	②区 7252	2層	線刻あり
847	提瓶	完形	6C後半	5.2	19.6	—	回転ヘラケズリ	—	5B4/1 暗青灰	5B4/1 暗青灰	良好	長石	④区 6650, 6652, 6850	—	体部幅11.2cm

第167表　TAK201406調査区　包含層出土石製品（管玉）観察表

遺物番号	器種	材質	時代	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区・グリッド	層位	備考
846	管玉	メノウ	—	21.700	8.000	2.500	2.210	②区7052	2層	両面穿孔あり

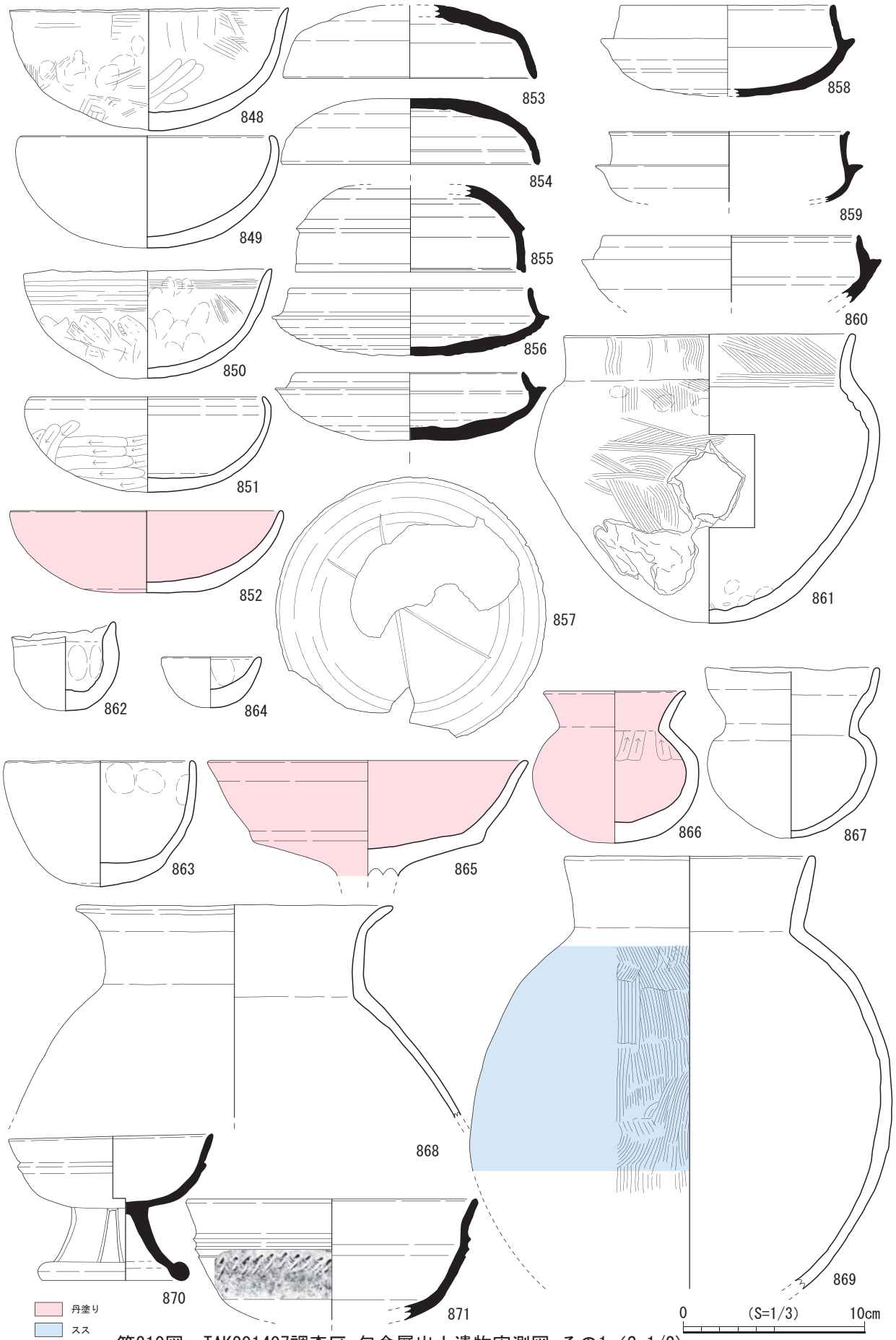


第309図　TAK201406調査区 包含層出土遺物実測図(No.846はS=1/1、他はS=1/3)

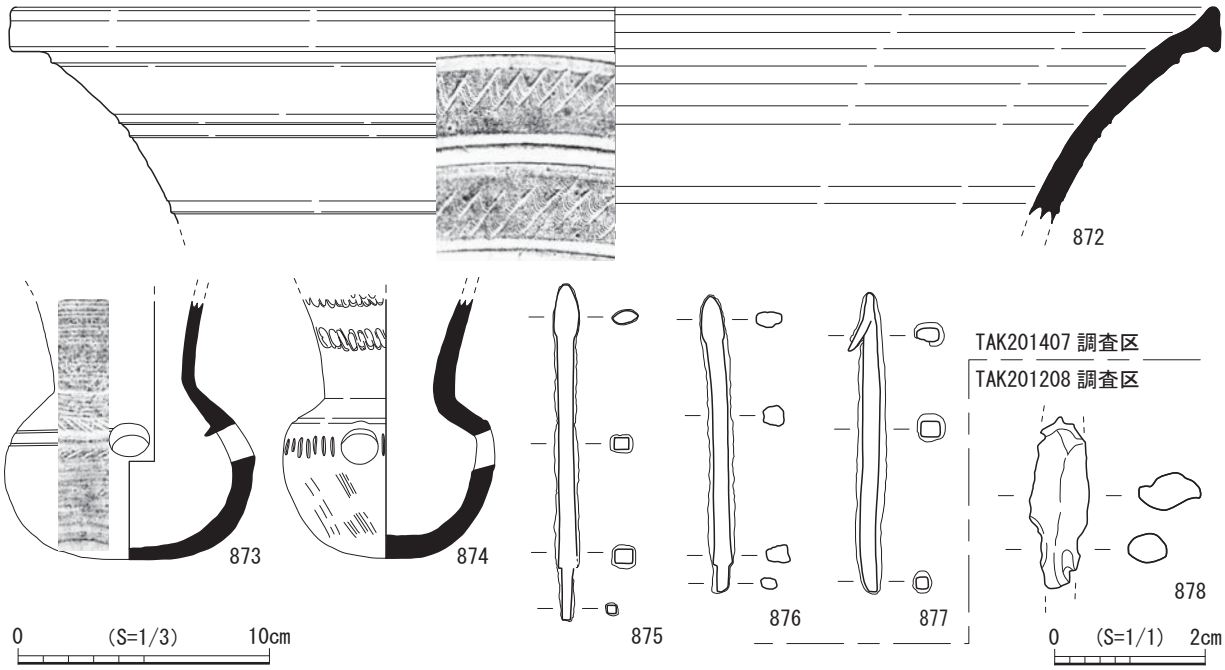
図版282　TAK201406調査区 包含層出土遺物

⑤ TAK201407調査区（第310・311図　図版283・284　表168・169）

848～852は土師器の椀である。口径が13～15cm、器高は4.7～6.7cmとやや高い。口縁部は端部がやや内湾する**849**、**851**。やや反る**848**。やや直線的な**850**、**852**がある。**852**は内外面に丹塗りを施している。**853～855**は須恵器の杯蓋である。**855**は口縁部と体部との境に明確な稜を付ける。口縁端部内側にも稜を成す。**856～860**は須恵器の杯身である。この中で**858**、**859**はやや古い様相を呈する。立ち上がりが**858**は1.9cm、**859**は1.8cmで口縁端部内側には明確な稜を成す。こうした形状から6世紀第1四半期頃であろう。**856**、**857**、**860**は6世紀第3四半期頃であろう。**861**は広口短頸壺でほぼ完形である。口縁部は垂直に立ち上がり端部は丸い。底部は丸底である。胴部中央に1ヶ所人工的な孔痕を確認した。**862**、**864**は手づくね土器で椀である。**863**は椀でほぼ完形品である。手づくね感が強い。**865**は高杯の杯部で完形である。内外面に丹塗り痕が残る。体部と口縁部との境に稜を成し、口縁部は直線的に外傾し端部は短く反る。内外面はナデ調整で丁寧な作りである。**866**、**867**は小形丸底壺である。**867**は完形である。**866**は口縁部が短く直線的に外傾する。端部は丸い。底部は丸底である。**867**は口縁部が緩やかに内湾し端部は丸く薄い。**868**は土師器の甕で口縁部～胴部片である。口縁部は頸部から垂直に立ち上がり端部付近で大きく反る。端部はやや尖る。胴部内面はケズリ痕が残る。器壁は薄い。**869**は土師器の壺で口縁部～胴部片である。口縁部は直線的に立ち上がりやや外傾する。端部は丸い。胴部は丸く外面はハケメ調整を行い、内面は粗い横ナデ調整を施す。**870**は須恵器の小形高杯で完形である。体部と口縁部の境に明確な稜を成し口縁部はやや外傾気味に立ち上がる。器壁は薄く端部はやや尖る。脚部は開脚し4か所の縦長三角形の透かしを施す。端部は丸い。丁寧な作りである。時期は5世紀第4四半期頃であろう。**871**は須恵器高杯の杯部片である。体部と口縁部との境に二重の稜を成す。口縁部はやや反り気味に立ち上がり端部は丸い。体部に櫛描波状文を施す。時期は5世紀第4四半期頃であろう。**872**は須恵器大甕の口縁部片である。復元口径47.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し端部は丸く、直下に断面三角形の貼付け凸帯を1条持つ。また口縁部の立ち上がりから口縁端部直下にかけて稜が2条、2条、1条と作られその間に波状文を施している。全体的に丁寧な作りである。一部に自然釉がかかっている。**873**、**874**は瓶である。いずれも口縁部が欠損する。穿孔は1ヶ所で底部は丸い。時期は6世紀第4四半期頃であろう。**875**、**876**は柳葉形鉄鏃である。鏃身部断面は両丸造、頸部は棒状形で角関である。頸部断面は長方形で茎部断面は丸い。**877**は片腸抉の鉄鏃である。頸部断面は方形で関は認められない。**878**は銅鏃である。『竹松遺跡Ⅱ』で未報告であったため今回報告する。鏃身部、茎部が一部欠損する。全体の様相は判然としない。鏃身部断面は両丸造で茎部断面は丸い。



第310図　TAK201407調査区 包含層出土遺物実測図 その1 (S=1/3)



第311図　TAK201407 調査区 古墳時代包含層 出土遺物実測図 その 2(S=1/3)・
TAK201208 調査区 古墳時代包含層 出土遺物実測図（No. 878 のみ S=1/1）

図版283　TAK201407調査区 包含層出土遺物 その1

図版284　TAK201407調査区 包含層出土遺物 その2・TAK201208調査区 包含層出土遺物

第168表　TAK201407調査区　包含層出土土器観察表

遺物境界ベルト番号	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	出土区境界ベルトグリッド	層位	備考
				口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面					
848	椀	接合 ほぼ完形	—	(15.6)	(6.7)	—	ハケメナデ消し 指オサエ	ハケメナデ消し 指ナデ	5YR7/3 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	良	黒色粒子 赤色粒子	3区	Ⅲ層	
849	椀	完形	—	13.1	6.1	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良好	長石、雲母	3区	Ⅲ層	口縁部一部欠損 内外面に丹塗りあり
850	椀	口縁部 ～底部	—	(13.4)	6.0	—	ハケメナデ消し ヘラケズリ	ナデ消し 指オサエ	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	長石、石英、雲母	3区	Ⅲ層	1/2欠損
851	椀	完形	—	14.8	4.5	—	ナデ	ナデ	5YR7/8 橙	5YR7/8 橙	良好	赤色粒子	3区	Ⅲ層	内外面に丹塗りあり
852	椀	完形	—	14.8	4.5	—	ナデ	ナデ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	良好	長石、雲母	3区	Ⅲ層	内面に剥離あり 内外面に丹塗りあり
853	杯蓋	口縁部 ～天井部	—	(14.0)	3.6	—	回転ナデ	回転ナデ	5B6/1 青灰	5B6/1 青灰	良	長石、褐色粒子	4区 6854	3層	
854	杯蓋	口縁部 ～天井部	6C 後半	9.4	5.7	1.4	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	10YR5/1 褐灰	5Y6/1 灰	良	長石、赤色粒子	4区 6854	3層	
855	坏蓋	口縁部～ 天井部	6C 中頃	(12.6)	残存 (4.7)	—	ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	5PB4/1 暗青灰	5PB6/1 青灰	良好	長石、黒色粒子	3区	Ⅲ層	
856	杯身	口縁部 ～底部	6C 後半	(13.2)	3.7	—	ナデ	ナデ	N6/ 灰	7.5YR6/1 灰	良	雲母、長石	4区 6854	3層	
857	杯身	接合 ほぼ完形	6C 後半	12.6	3.7	—	回転ヘラケズリ	ナデ	5PB6/1 青灰	5PB6/1 青灰	良	雲母、長石	4区 6854	3層	底部に剥離あり
858	杯身	口縁部 ～底部	5C 末～ 6C 初	(11.6)	5.0	—	ヘラケズリ	ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	良好	褐色粒子	3区 7652	Ⅲ層	
859	杯身	口縁部	6C 初頭	(13.0)	—	—	回転ヘラケズリ	ナデ	10YR7/1 灰白	10YR6/1 褐灰	良	長石	3区 7654	Ⅲ層	
860	杯身	口縁部	6C 後半	(14.0)	残存 (3.6)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	長石	3区 7852	Ⅲ層	
861	短頸壺	接合 ほぼ完形	4C 前半	16.0	15.8	—	ナデ 指オサエ	ヘラケズリ後 ナデ	10YR8/4 黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	良好	黒色粒子、雲母 褐色粒子	1区 6860	4層	胴部に穿孔あり、外面に 焼成時にはじけた跡あり
862	ミニチュア椀	ほぼ 完形	—	507	4.9	—	ナデ	指オサエ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	良	雲母、長石 赤色粒子	1区 7058	2層	手づくね土器
863	椀	接合 ほぼ完形	—	(10.1)	(6.9)	—	ナデ	ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	良好	長石、雲母	1区 7058	3層	手づくね土器か
864	ミニチュア椀	ほぼ 完形	—	(5.4)	2.8	—	ナデ	指オサエ	10YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	良	長石、雲母	3区 7652	Ⅲ層	口縁部欠損　手づくね土器
865	高杯	杯部	4C	(17.3)	残存 (6.35)	—	ナデ	ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	良好	長石	3区 7652	Ⅲ層	内外面丹塗りあり
866	小型丸底壺	口縁部 ～底部	—	11.8	4.5	—	ナデ	ナデ ヘラケズリ	5YR8/2 灰白	5YR7/4 にぶい橙	良好	長石、雲母	3区 7652	Ⅲ層	
867	小型丸底壺	接合 ほぼ完形	4C	9.4	9.3	—	ナデ ハケメ	ナデ 指オサエ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	良好	赤色粒子、雲母	2区 7454	3層	
868	甕	口縁部 ～胴部	—	(17.8)	残存 (11.5)	—	ヨコナデ ハケメ後ナデ	ヘラケズリ後 ナデ	5YR7/3 にぶい橙	5YR6/1 褐灰	良好	長石、石英、雲母 褐色粒子	3区	Ⅲ層	
869	壺	口縁部 ～胴部	—	(13.6)	残存 (23.7)	—	丁寧なヨコナデ ハケメ	粗いヨコナデ 指オサエ	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	良	石英、長石、雲母 赤色粒子、角閃石	3区	Ⅲ層	外面に黒褐色のスス 付着
870	高杯	完形	5C 中頃	11.2	7.9	3.6	回転ヘラケズリ ナデ	ナデ	N6/ 灰	5PB6/1 青灰	良好	褐色粒子	3区 7652	Ⅲ層	脚部4方向に透かし孔 あり
871	高杯	杯部	5C 後半	(15.8)	残存 (6.6)	—	回転ヘラケズリ	ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/1 黄灰	良	雲母、角閃石 長石、赤色粒子	3区	Ⅲ層	外面に櫛描文あり
872	大甕	口縁部	—	(47.6)	残存 (8.6)	—	波状紋	ナデ	5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	良好	長石	3区	Ⅲ層	内外面全体的に自然釉付着 外面に波状文あり
873	瓏	ほぼ 完形	6C 後半	—	残存 (10.2)	—	横、斜め方向 ハケメ	ナデ	N4/ 灰	7.5Y6/1 灰	良好	長石	1区 7058	3層	口縁部欠損 胴部最大径9.8cm
874	瓏	頸部～ 底部	6C 後半	—	残存 (10.2)	—	ナデ 刻目	ナデ	N7/ 灰白	N5/ 灰	良好	長石	3区 7652	Ⅲ層	口縁部欠損 胴径8.4cm

第169表　TAK201407調査区・TAK201208調査区　包含層出土金属製品観察表

遺物番号	器種	材質	時代	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	出土区・グリッド	層位	備考
875	鉄鏃	鉄	—	133.00	10.50	9.50	15.86	2区7256	3層	柳葉式
876	鉄鏃	鉄	—	118.00	10.00	8.00	16.63	3区	Ⅲ層	柳葉式
877	鉄鏃	鉄	—	119.00	12.00	11.00	26.98	3区	Ⅲ層	
878	銅鏃	青銅	4C 初頭	23.00	8.00	5.00	2.08	4区南0676	4層	※TAK201208調査区出土

(11)まとめ

竪穴建物、墳墓について

2014年度の竹松遺跡の調査は5調査区35.323㎡を実施した。この中で弥生、古墳時代の竪穴建物、墳墓を中心に考えまとめとしたい。

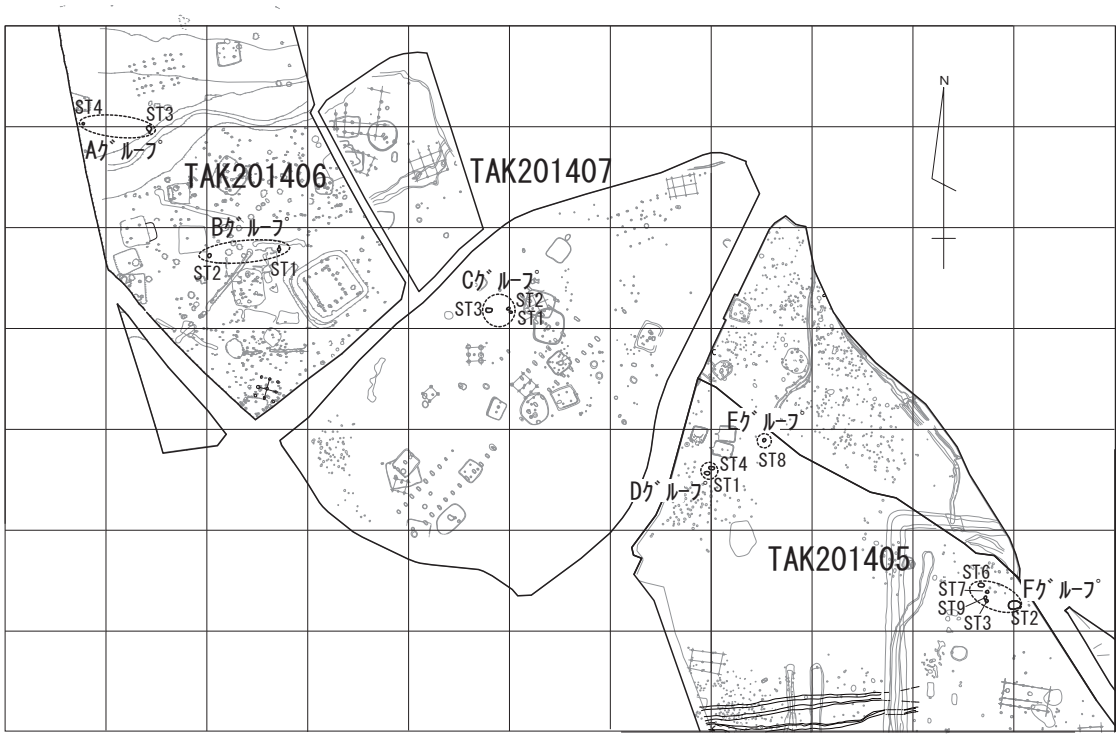
①竪穴建物について(第313～316図　第170～173表)

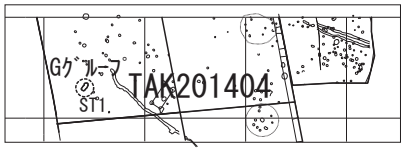
2014年度の全調査区(TAK201403～07までの5調査区)で弥生時代の竪穴建物は21軒を検出した。時期は中期後半～後期終末までである。また古墳時代の竪穴建物は全調査区(TAK201403～07までの5調査区)で28軒を検出した。時期は4世紀後半頃～7世紀前半頃である。その他縄文時代晩期の竪穴建物も2軒、古代9世紀後半頃の竪穴建物3軒も検出している。それでは2014年度に調査した弥生、古墳時代の竪穴建物を考えて行くことにする。

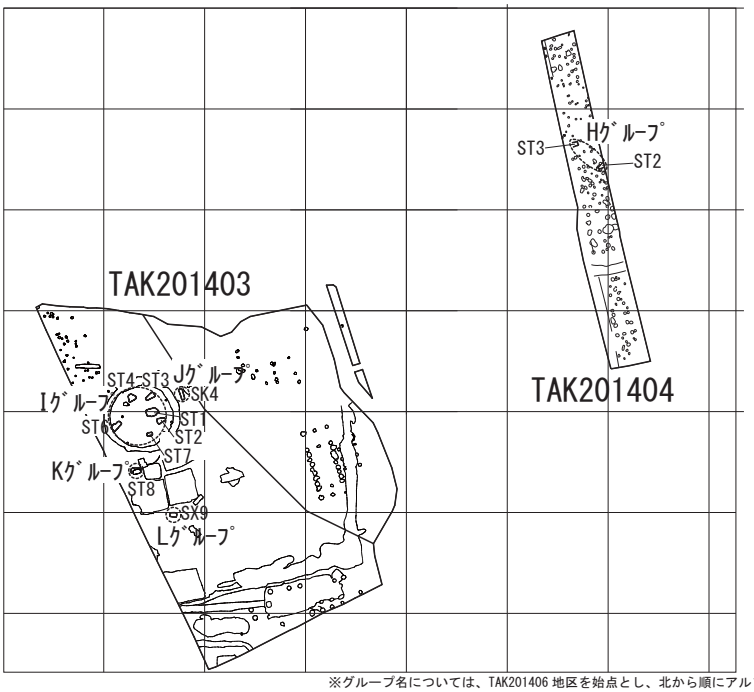
弥生時代の竪穴建物の21軒の時期は中期末が2軒、中期末～後期初頭が1軒、後期前半が8軒、後期後半～終末が3軒、時期不明及び詳細な時期が確定できないものが7軒である。この中で後期前半頃が8軒と最も多い。8軒のうち長軸が6m を超える大形竪穴建物が3軒、5m 台の中形竪穴建物が1軒、残り4軒は4m 未満の小形竪穴建物である。各竪穴建物の時期及び構築の配置状況からグルーピングを考えてみると大形(円形 SC13、楕円形 SC8、隅丸楕円形 SC7)と小形(方形 SC12、長方形 SC19、20)の1軒の組み合わせが中心であることが見えてくる。特に TAK201407調査区が顕著である。この状況から3グループ以上が血縁的に極めて近い集団(世帯共同体)を構成していたと思われる。(詳細なグルーピングは②のｂ項で記述する)

古墳時代の竪穴建物28軒の時期は、4世紀後半～5世紀前半が2軒、5世紀中頃以降が2軒、5世紀後半2軒、6世紀中頃～後半が2軒、6世紀後半が14軒、6世紀後半～7世紀前半が2軒、時期不明及び詳細な時期が確定できないものが4軒である。この中で6世紀後半が14軒と最も多い。14軒の内一辺が6m を超える大型の竪穴建物が3軒あり共同体内の階層差が窺える。(詳細なグルーピングは②のｃ項で)

弥生時代の竪穴建物の平面プランは円形→隅丸方形又は隅丸長方形→方形又は長方形と変化する。中期末頃までは円形又は隅丸方形、隅丸長方形が混在するが、北部九州においては後期前半頃までに円形の竪穴建物は姿を消し、後期中頃から方形に変化し始める。長崎本土部においては終末期まで円形が残る。よって長崎本土部域は古墳時代前期初頭になって竪穴建物の平面プランは方形、長方形に移行する。(第315図　竹松遺跡の弥生時代竪穴建物の平面プランの変遷、第316図　竹松遺跡の古墳時代竪穴建物の平面プランの変遷)。







※グループ名については、TAK201406 地区を始点とし、北から順にアルファベットの大文字で A,B, ～K,L までの 12 グループとした

0 (S=1/1,500) 100m

第312図　弥生時代墳墓グルーピング図(S=1/1,500)

②弥生時代の墳墓について

a　弥生時代の墳墓とグルーピングについて（第312図　第173表）

2014年度に調査した弥生時代の墳墓は27基で内訳は箱式石棺墓6基、甕棺墓12基（単棺4基、覆口式8基）、土坑墓9基である。これらの墳墓のグルーピングを考えてみたい。（第317・318図　弥生時代墳墓の変遷、第173表　弥生時代墳墓一覧表）27基の内、後期前半の墓は16基、後期後半～終末期の墓は8基、不明3基である。この27基を墳墓の位置関係、構築方向、切り合い関係、出土遺物等からグルーピングを考えてみた。グループの番号は調査区の北側から順次付けていった。

TAK201406調査区は4基で3（A、B）グループを検出した。A グループは後期前半の2基で ST3、4である。B グループは後期前半の2基で ST1、2である。全て乳幼児墓である。

TAK201407調査区は3基で1（C）グループを検出した。C グループは後期前半の3基で ST1、2、3である。全て乳幼児墓である。

TAK201405調査区は8基で3（D、E、F）グループを検出した。D グループは後期前半の2基で ST1、4である。E グループは後期前半の1基で ST8である。F グループは後期前半の5基で ST2、3、6、7、9である。ST2だけが成人墓でその他は乳幼児墓である。

TAK201404調査区は3基で2（G、H）グループを検出した。G グループは1基で時期不明の ST1。H グループは2基で後期前半の ST2、時期不明の ST3である。ST1、3は成人墓、ST2は幼児墓？である。

TAK201403調査区は9基で4（I、J、K、L）グループを検出した。I グループは6基で後期後半～終末期頃の ST1、2、3、4、6、7である。J グループは1基で後期後半頃の SK4である。K グループは後期後半頃の1基で ST8である。L グループは後期後半頃の1基で SX9である。ST7、SX9は幼児墓でそれ以外は成人墓である。

I グループの6基の土坑墓はのちに古墳が構築される周溝内に位置している。6基の構築状況は、主軸方位、構築位置の状況、墓の平面形態、出土遺物等から考えて規則性は見当たらないことから、構築にやや時間差がありそうである。しかしながら同一のエリア内を占有している状況から血縁的に近い関係が窺える。この中で ST1が規模的に最も大きいことから小集団の首長と考えられる。この ST1が構築された時期は出土遺物から後期終末頃（3世紀初頭～前半）である。その後 SZ1が3世紀中～後半頃に構築される。前時代に構築された弥生墳墓6基を意識的に取り囲むように構築されている。

b　弥生時代の竪穴建物のグルーピングについて（第313図　第172表）

弥生時代の竪穴建物は全調査区で21軒を検出した。時代は中期末～終末までである。この21軒を構築位置関係、構築規模、構築方向、切り合い関係、出土遺物等からグルーピングを考えてみた。グループの番号は調査区の北側から順次付けていった。

TAK201406調査区は3軒で3グループを検出した。a グループは後期前半の1軒で SC11である。b グループは中期末から後期初頭の1軒で SC12である。c グループは後期前半（？）の SC16であり、TAK201407調査区の後期前半の SC9、12、13の3軒と合わせたグループである。

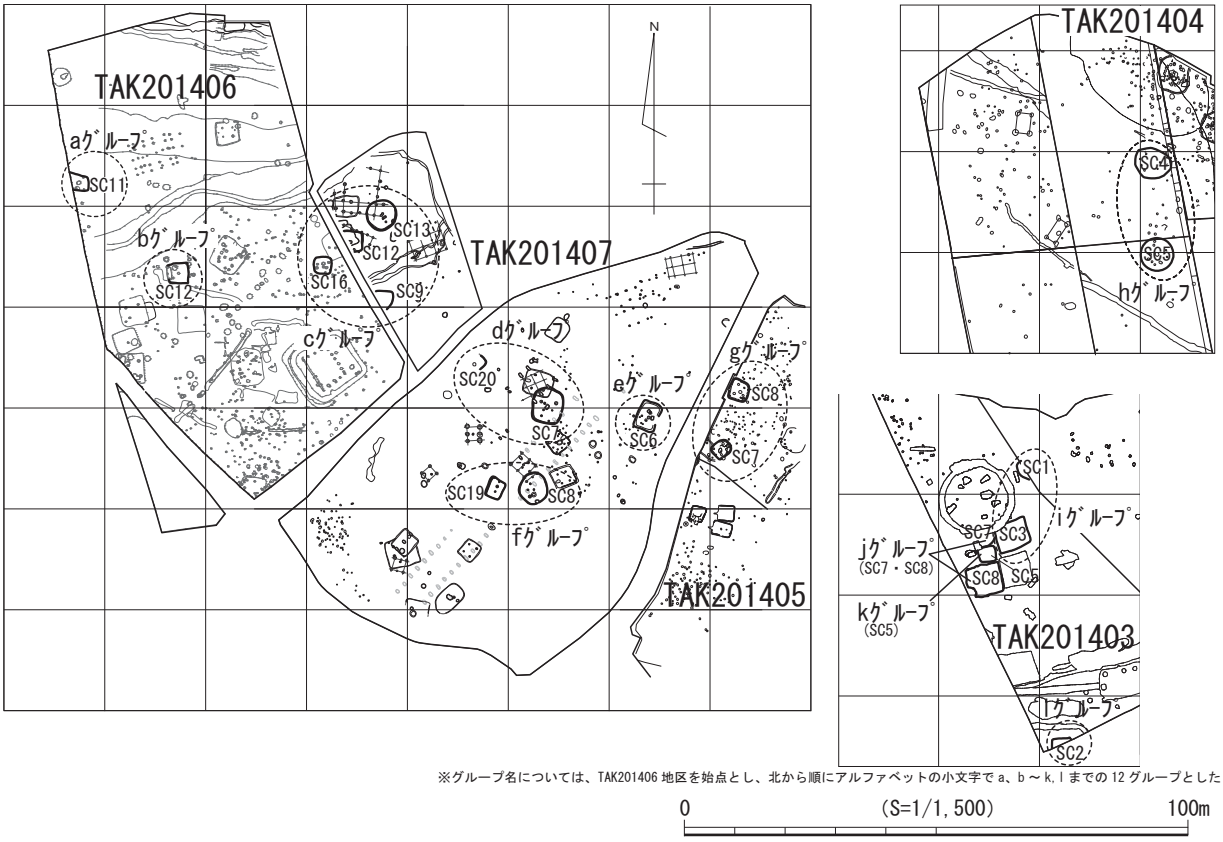
c グループ以外の TAK201407調査区は5軒で3（d、e、f）グループを検出した。d グループは2軒で後期前半の SC7と時期不明の SC20である。e グループは1軒で中期末～後期初頭の SC6である。f グループは2軒で後期前半の SC8、19である。

TAK201405調査区は2軒で1(g)グループを検出した。g グループは中期末の2軒で SC7、8である。

TAK201404調査区は2軒で1(h)グループを検出した。h グループは後期前半の2軒で SC4、5である。この隣接地には昨年度 TAK201304の報告で4軒(SC1、SC123、124、125)の竪穴建物を検出している。ここ内 SC125(時期不明)を除く3軒は後期前半頃である。よって4軒は同一グループと考えられる。

TAK201403調査区は6軒で4(i、j、k、l)グループを検出した。i グループは後期終末の2軒で SC1、SC3である。j グループは後期終末の2軒で SC7、8である。k グループは時期不明の1軒で SC5である。l グループは後期終末(？)の1軒で SC2である。

以上12グループが考えられる。その他時期不明の竪穴建物を考えてみる。TAK201403の SC5、TAK201407の SC20の2軒である。SC20は北東コーナーしか残存していないが、おそらく方形か長方形の平面プランであろうと思われる。すなわち大形竪穴建物の楕円形＋小形竪穴建物の方形、長方形の組み合わせである。この組み合わせは f グループの(SC8、19)と c グループの(SC12、13)に見ることが出来る。こうした状況から考えて d グループの SC20は SC7と同一時期に存在した同一グループであると思われる。



第313図　弥生時代竪穴建物グルーピング図(S=1/1,500)

c　古墳時代の竪穴建物のグルーピングについて（第314図　第171表）

古墳時代の竪穴建物は全調査区（TAK201403～07までの5調査区）で28軒を検出した。内訳は4世紀後半～末が1軒、4世紀後半～5世紀前半1軒、5世紀中頃以降2軒、5世紀後半2軒、6世紀中頃～後半が2軒、6世紀後半が14軒、6世紀後半～7世紀前半が2軒、不明が4軒である。以下調査区毎に構築位置関係、構築規模、構築方向、切り合い関係、出土遺物等からグルーピングを考察する。グループの番号は調査区の北側から順次付けていった。

TAK201406調査区は12軒で7（Ⅰ～Ⅶ）グループである。Ⅰグループは2軒で6世紀後半頃のSC13、14である。Ⅱグループは1軒で6世紀後半頃のSC15である。Ⅲグループは2軒で6世紀後半頃のSC1、6世紀中頃～後半のSC8である。Ⅳグループは2軒で6世紀後半頃（？）のSC3、9である。Ⅴグループは2軒で6世紀後半頃のSC4、7である。Ⅵグループは2軒で6世紀後半頃のSC2、5である。Ⅶグループは1軒で6世紀後半頃のSC6である。12軒の内10軒は主軸方向を北西～南東方向に構築されているが、ⅦグループのSC6とⅡグループのSC15の2軒だけは他の10軒と主軸方位を異にし北東方向～南西方向に構築している。この2軒は大形竪穴建物で他を圧倒する。

TAK201407調査区は11軒で6（Ⅷ～ⅩⅢ）グループである。Ⅷグループは2軒で6世紀後半～7世紀前半頃のSC10、時期不明のSC11である。Ⅸグループは2軒で6世紀中頃～後半のSC3、4である。Ⅹグループは2軒で6世紀後半のSC1、5である。XI グループは1軒で6世紀後半～7世紀前半のSC14である。XII グループは2軒で4世紀後半～5世紀前半頃のSC15、17である。ⅩⅢグループは2軒で4世紀後半～末頃（？）のSC16、18である。

TAK201405調査区は3軒で3（ⅩⅣ～ⅩⅥ）グループである。ⅩⅣグループは1軒で5世紀後半頃のSC5である。ⅩⅤグループは1軒で6世紀後半頃のSC6である。ⅩⅥグループは1軒で5世紀後半頃のSC1である。TAK201403調査区は2軒で1（ⅩⅦ）グループである。ⅩⅦグループは2軒で5世紀中頃以降のSC6、9である。TAK201404調査区は古墳時代竪穴建物は存在しない。

以上グルーピングを行った結果は、大形竪穴建物1軒＋小形竪穴建物1軒。大形竪穴建物1軒＋中形竪穴建物1軒がセット関係になるケースが見られる。大形竪穴建物1軒＋小形竪穴建物1軒は弥生時代のケースと類似する。こうした状況はTAK201406調査区、TAK201407調査区に顕著に顕れている。

③弥生時代墳墓と弥生時代竪穴建物の関係について（第312・313図　第170～173表）

弥生時代墳墓27基と弥生時代竪穴建物21軒の関係について検討した。27基の墳墓は成人墓10基、乳幼児墓17基である。17基の乳幼児墓の内訳は4基が単体の甕棺、8基が覆口式甕棺、3基が土坑墓、箱式石棺墓が2基である。17基の内1.1m未満の15基は乳幼児墓で後期前半頃の構築である。15基の内、甕棺は単棺、覆口式甕棺を合せて12基、箱式石棺墓2基、土坑墓1基である。乳幼児墓とは本来、胎児墓、乳児墓、幼児墓、小児墓と分けなければならないであろうが、墓内から人骨、歯などが出土していないこと及び甕棺が完形ではなく破損状況であるため器高が判然としないこと等から詳細に分けることが出来ない。そのため乳幼児墓との表記にした。こうした乳幼児墓の甕棺及び壺棺、箱式石棺墓は竪穴建物の周辺に埋葬されている状況が窺える。

竪穴建物21軒は中期末～後期終末までの構築である。この中で甕棺と構築時期（後期前半）が同じ竪穴建物は10軒である。特にTAK201406、07調査区で甕棺と竪穴建物とのグルーピング関係を見ること

が出来る(第312図、第313図)。

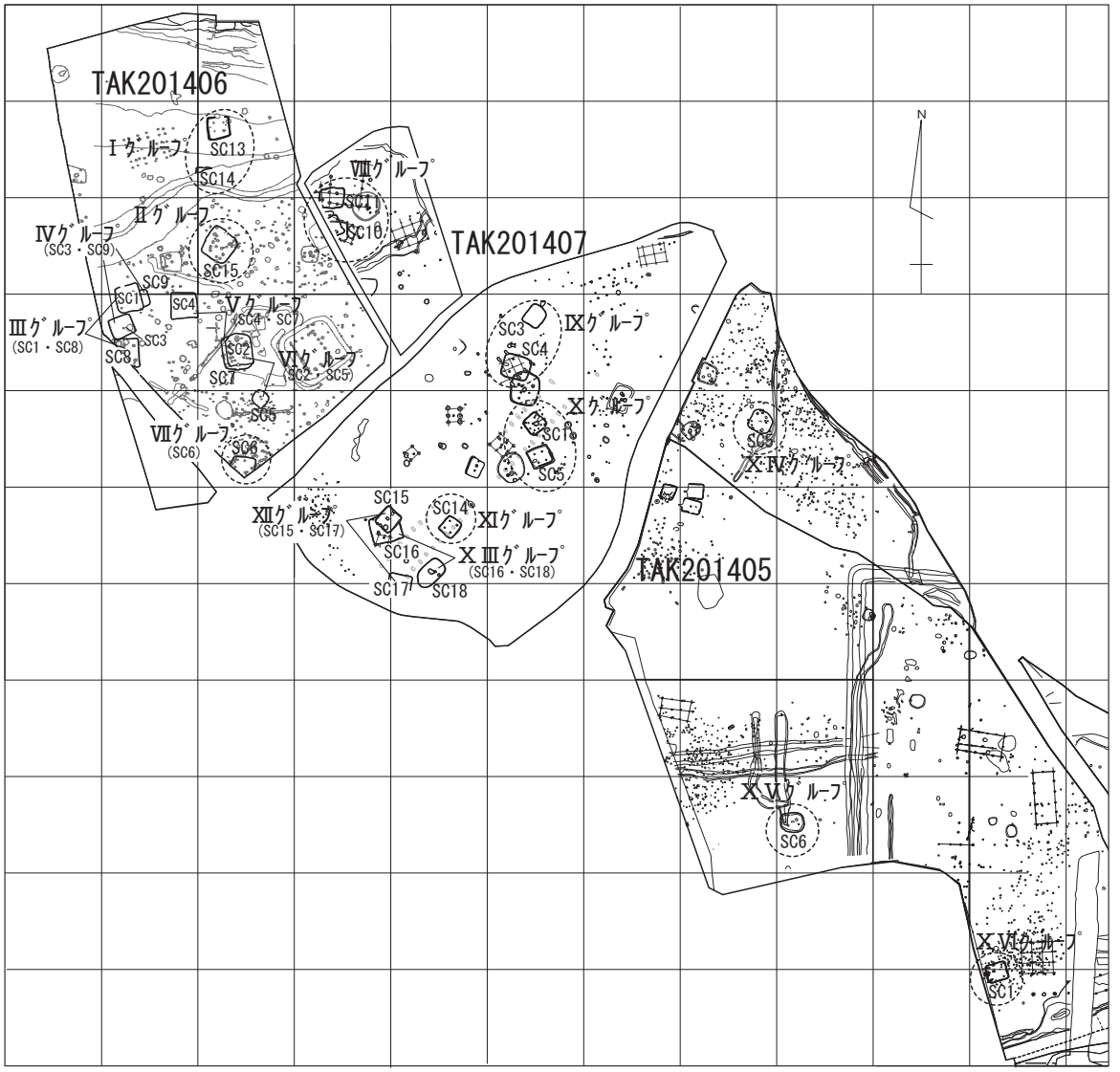
TAK201406調査区の竪穴建物は3軒で3(a、b、c)グループを検出した。aグループは後期前半で1軒、SC11である。この隣接地に構築されている墳墓が乳幼児墓Aグループの ST3、4である。bグループは中期末～後期初頭(？)の1軒、SC12である。cグループは後期前半(？)の1軒 SC16と TAK201407調査区の3軒 SC9、12、13で合計4軒である。TAK201406調査区の墳墓は4基で2(A、B)グループを検出した。内訳は、Bグループの後期前半の2基で ST1、2である。Aグループは後期前半の2基で ST3、4である。全て乳幼児墓である。この調査区ではaグループの SC11とAグループの ST3、4。bグループの SC12とBグループ ST2が竪穴建物と墳墓との構築時期及び構築位置関係から考えて極めて近い関係が窺える。

次に TAK201407調査区の竪穴建物は7軒で4(c、d、e、f)グループを検出した。内訳は、cグループは後期前半で4軒、SC9、12、13、16（SC16は TAK201406調査区）である。dグループは後期前半で2軒、SC7、20である。eグループは中期末～後期初頭で1軒、SC6である。fグループは後期前半で2軒、SC8、19である。TAK201407調査区の墳墓は3基で1グループを検出した。内訳は、Cグループは後期前半の3基で ST1、2、3である。全て乳小児墓である。この調査区ではdグループの SC7と SC20の間に墳墓3基のCグループ ST1、2、3が位置する。この状況から竪穴建物と墳墓との関係は極めて近い関係が窺える。

東大阪市の西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡を調査した芋本隆裕氏の見解では「壺を棺身とする場合は胎児が、甕を棺身とする場合は乳児が葬られ、棺の器種で意味がある。またこれらの土器棺がいずれも旧河岸付近から見つかったことより、早産や死産あるいは生後間もなく死亡した乳児などは、集落構成員の墓域には埋葬せず意識的に川岸に葬られた可能性がある」という(芋本1984、1992)。

2013年度の TAK201302調査区で出土した弥生墳墓群の集団墓では弥生後期後半の4基の甕棺墓が出土した。いずれの甕棺も器高は復元で50～70cm程であったことから乳幼児用と思われる。集団墓への埋葬は後期前半から開始され、後期後半で終焉を迎える。この集団墓には後期前半段階までは乳幼児の甕棺の埋葬はなく、全て成人用の箱式石棺墓と土坑墓等である。よってこの時期までは乳幼児甕棺は竪穴建物の周辺域に埋葬され、集団墓には埋葬されていない状況である。しかしながら後期後半には集団墓に乳幼児墓が埋葬される状況に変化している。

竹松遺跡から南西に1kmに位置する富の原遺跡では中期末～後期初頭までのA地点墓地で甕棺墓10基(成人墓3基、小児墓6基、不明1基)石棺墓22基(成人墓8基、小児墓8基、不明6基)祭祀遺構2ヶ所。中期前半～後期初頭のB地点墓地では甕棺墓20基(成人墓7基、小児墓13基)、石棺墓36基(成人墓13基、小児墓10基、不明13基)である。いずれの墓地群でも箱式石棺墓と甕棺墓で構成された共同墓地で乳幼児墓も一緒に構成員として埋葬されている。周辺域の集団墓の化屋大島遺跡、滑川遺跡、溝口遺跡、中江遺跡、本明石棺群、五反田遺跡、麻生瀬遺跡、門前遺跡、出津遺跡などでは甕棺を伴わない。幼児用甕棺が伴う遺跡は白井川遺跡の第22号甕棺墓(幼児用、後期初頭)だけである。竹松遺跡のように集団墓に乳幼児墓は埋葬するようになるのは後期後半になってからである。よって富の原遺跡(中期前半～後期初頭)と竹松遺跡(後期前半・後期後半)では共同墓地に埋葬する年齢が違う様相を呈している。これは単なる集落的規模の差なのか、時代的な差なのか、年齢的な差なのか。地域的な差なのか。今後の検討を要する課題であろう。



※グループ名については、TAK201406 地区を始点とし、北から順にローマ数字でⅠ,Ⅱ…ⅩⅥ,ⅩⅦとした

0 (S=1/1,500) 100m

第314図　古墳時代竪穴建物グルーピング図(S=1/1,500)

④弥生時代における竪穴建物の平面形態の変遷について（第315・316図　第170～173表）

長崎県本土部における弥生時代の竪穴建物の変遷を発掘調査例が多い、旧彼杵郡、高来郡を中心に考えてみた。遺跡数は17遺跡である（第170表）。

彼杵郡、高来郡内で弥生時代集落が形成されるのは中期中頃以降である。中期中頃～後半段階の富の原遺跡、十園遺跡、佃遺跡、竹松遺跡、立小路遺跡でその様相が窺える。この時期の竪穴建物の平面形態は、円形、方形、隅円形、隅丸方形など様々な形態が存在する。富の原遺跡、十園遺跡において既に方形の竪穴建物が存在していることが注目される。この状況は吉野ケ里遺跡においても確認されており拠点集落ではこの段階で方形竪穴建物を受け入れている。吉野ケ里遺跡では長方形及び方形の竪穴建物 SH0033～37、SH0642、SH1002、SH1034,1035が中期前半から存在している。中期後半まで円形、方形、長方形が混在し、中期末で円形竪穴建物は消滅し、方形、長方形と変化をする。

後期初頭～前半段階の開遺跡、佃遺跡、一野遺跡、今福遺跡、竹松遺跡では、円形、方形、隅丸円形、隅丸方形、隅丸楕円形、隅丸長方形、長方形が見られる。この時期から長方形が加わり、張り出し住居が出現する。

後期中頃～後半段階になると白井川遺跡、十園遺跡、陣ノ内遺跡、西ノ角遺跡、竹松遺跡では円形、方形となる。この時期も張り出し住居が見られる。

弥生時代終末期段階の白井川遺跡、冷泉遺跡、龍王遺跡、今福遺跡、竹松遺跡では、円形、方形、隅丸方形となる。円形はこの時期で終焉を迎える（註1）。

古墳時代前期初頭段階の門前遺跡、龍王遺跡では方形、隅丸方形がみられ、円形はすでに存在しない。これ以降の古墳時代後期終末期までは方形、長方形、隅丸方形、隅丸長方形が主流となる。

長崎県本土部では弥生時代終末期まで円形の竪穴建物が存在し、古墳時代前期初頭頃から方形の竪穴建物に変化する状況が窺える。

こうした状況を他地域で見ていくと壱岐の「原の辻遺跡」では後期には円形住居跡が消滅し、方形、長方形が主体となり本県本土部より早く方形化が進む（山口優　2005原の辻遺跡総集編Ⅰ　Ⅳ遺構5.住居跡　小結）。しかしながら後期のいつごろかは判然としない。北部九州の状況は吉野ケ里遺跡を見ていくと中期前半まで円形竪穴建物が残り、それ以降は長方形、方形の竪穴建物に変化する。しかしながら後期前半頃まで円形住居跡が残る下稗田遺跡Ⅰ　2号住居等もあるため、総じて北部九州は後期中頃以降に方形竪穴建物に変化すると思われる（註2）（註3）。

【註】

［註1］宮崎貴夫氏は「有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流」の中の『長崎本土地域の状況について』において「長崎県本土地域では平面円形の住居跡が弥生終末まで残る特徴がある」と指摘している。2015、7.11～12長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会

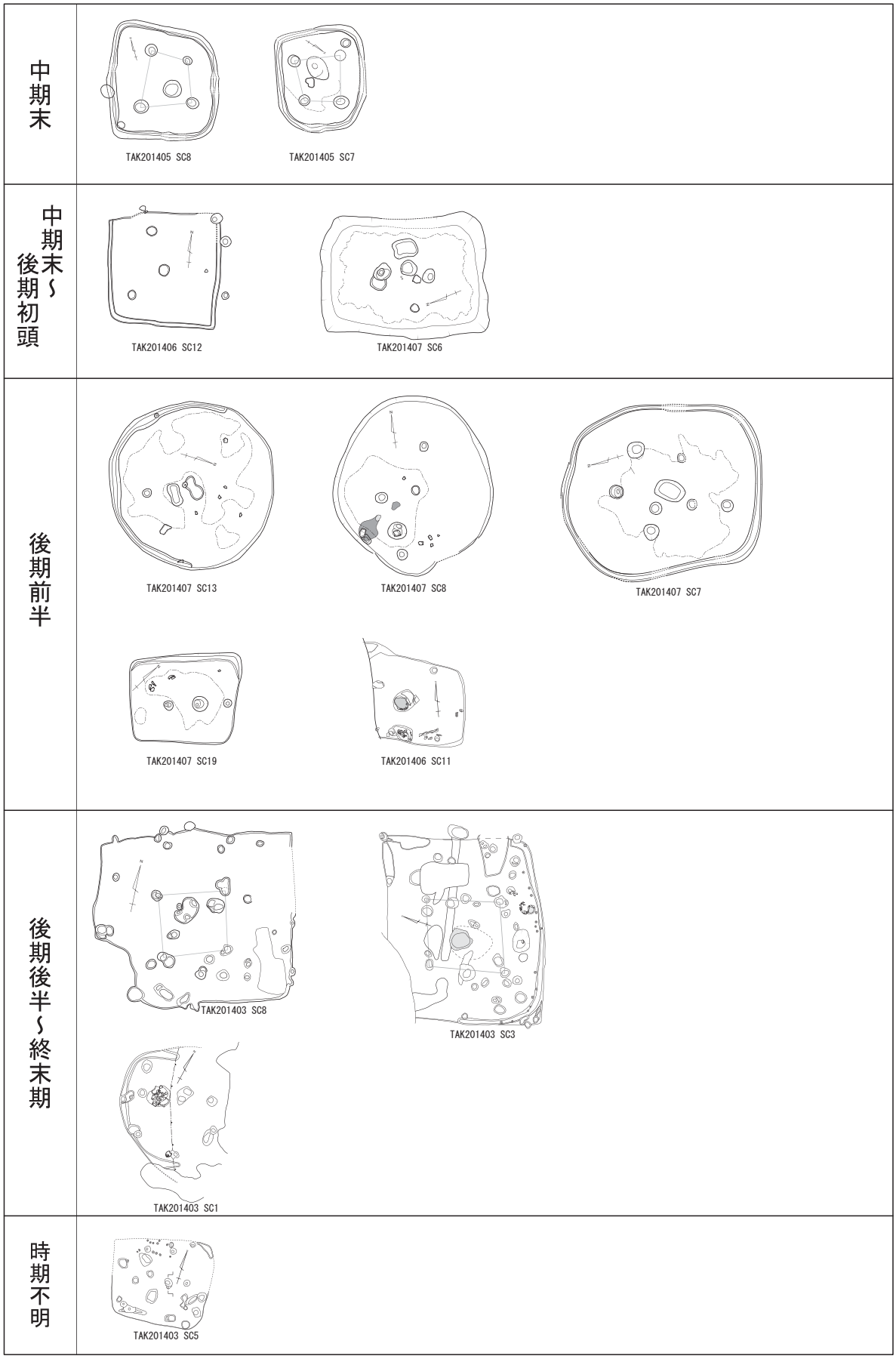
［註2］来年度に TAK201501、02、06調査区の調査報告書の刊行予定である。これらの調査区から弥生、古墳時代の竪穴建物が検出されているため、それらを含めて竹松遺跡全体のグルーピングを行う事とし、墳墓と竪穴建物との関係を明らかにしていきたい。今回は概括的なまとめとする。

［註3］『竹松遺跡Ⅲ』2018新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集 P250の TAK201302　① ST36（甕棺）で時期を後期前半頃としているが後期後半頃の誤りである。

第170表　長崎県本土部の弥生から古墳時代の竪穴建物の平面形の変遷

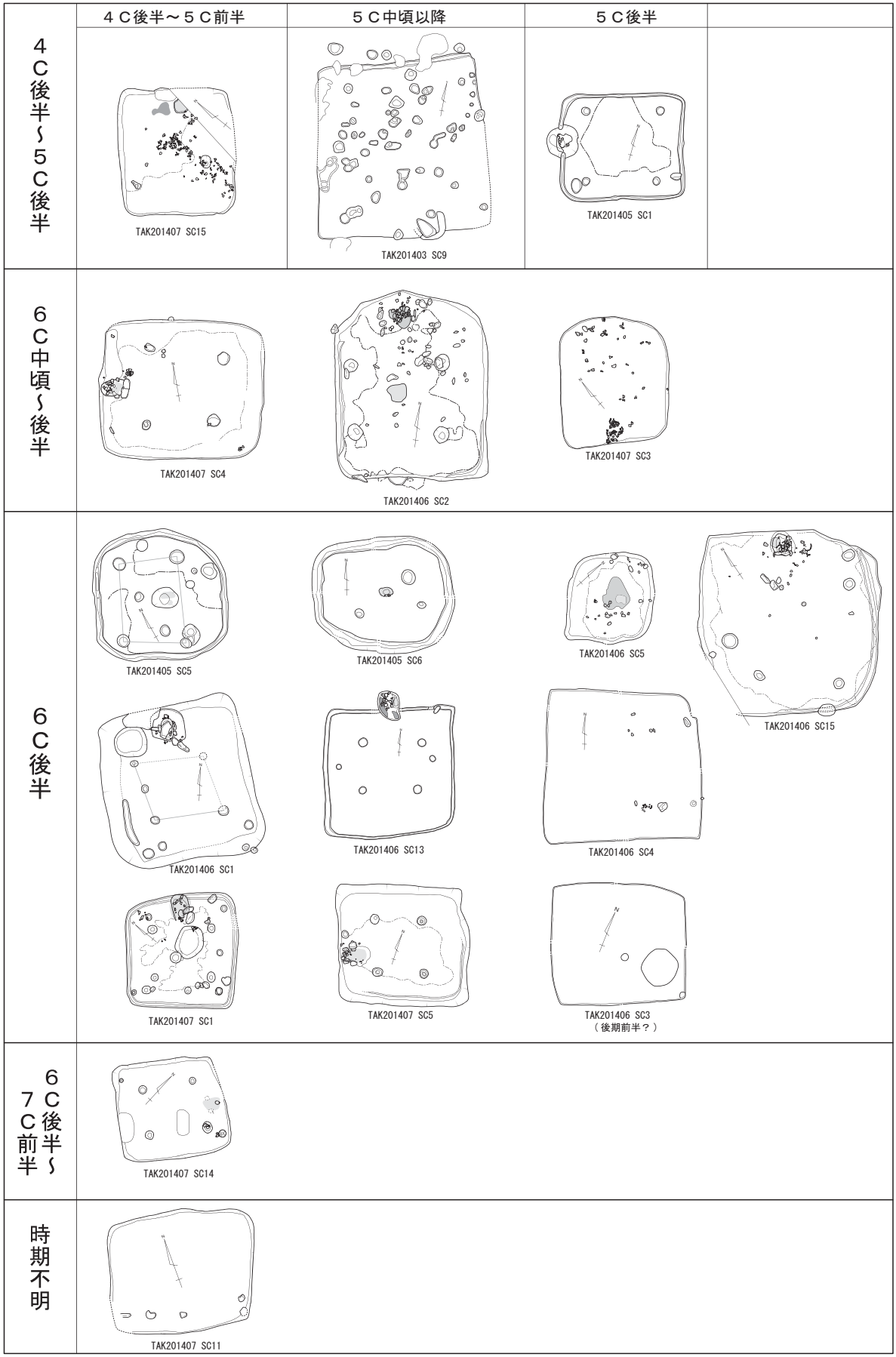
時代・時期	遺跡名	所在地	遺構名	竪穴建物の平面形態				備考
				円形	方形	長方形	隅丸方形	
弥生中期中葉～後葉（須玖Ⅱ式併行）	富の原遺跡	大村市	TJ　1		方形			3m×3m の小形である
	富の原遺跡	大村市	TJ　2		方形			2.2×2.2m の小形である
	富の原遺跡	大村市	1号・2号住	円形				中央穴
	富の原遺跡	大村市	TJ　1	楕円				2019市内遺跡発掘調査概報
	十園遺跡	雲仙市	32区 SB1	円形				中央部未掘　　径12m
	十園遺跡	雲仙市	4区 SB1		方形			中央浅い穴
	十園遺跡	雲仙市	4区 SB2				隅丸方形？	中央部未掘
	佃遺跡	雲仙市	87区 SB7				隅丸方形	確認されず
	竹松遺跡	大村市	TAK201405SC7				隅丸方形	中央土坑　周壁溝
	竹松遺跡	大村市	TAK201405SC8				隅丸方形	中央土坑　周壁溝
	立小路遺跡	大村市	SC01	不整楕円形				竪穴建物？
	立小路遺跡	大村市	SC02	楕円形				
弥生後期初頭～前葉（高三潴式併行）	開遺跡	諫早市	SH1				隅丸方形	中央穴炭化物
	佃遺跡	雲仙市	87区 SB1	円形(13m)				中央穴
	佃遺跡	雲仙市	78区 SB1	円形(8m)				中央穴
	佃遺跡	雲仙市	80区 SB1	円形				中央穴
	佃遺跡	雲仙市	81区 SB1	円形(10m)				中央穴
	佃遺跡	雲仙市	84区 SB1	円形				中央穴
	一野遺跡	島原市	2号住				隅丸方形	確認されず
	今福遺跡	南島原市	B 地区住				隅丸方形	確認されず南端焼土
	竹松遺跡	大村市	TAK201302⑩ SC1				隅丸長方形	中央炉
	竹松遺跡	大村市	TAK201303SC1	楕円形？				焼失住居　中央土坑
	竹松遺跡	大村市	TAK201303SC123	楕円形				中央土坑　炉
	竹松遺跡	大村市	TAK201303SC124	長楕円形				中央土坑　炉
	竹松遺跡	大村市	TAK201404SC4	円形				
	竹松遺跡	大村市	TAK201406SC11			長方形		焼失住居　中央土坑
	竹松遺跡	大村市	TAK201406SC12		方形			中央土坑　周壁溝
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC6			長方形		中央土坑　中期末～後期初頭頃
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC7	隅丸楕円形				中央土坑　周壁溝
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC8	楕円形				
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC9	楕円形？				
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC12			長方形		炉跡　周壁溝
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC13	円形				中央土坑　周壁溝
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC19			長方形		
	竹松遺跡	大村市	TAK201408SC01	円形＋長方形				張り出し住居
	竹松遺跡	大村市	TAK201408SC02			長方形		
	竹松遺跡	大村市	TAK201505SC2		方形			後期？
	竹松遺跡	大村市	TAK201505SC4		方形4.9m×4.9m			中央炉　後期？
	竹松遺跡	大村市	TAK201505SC5		方形			後期？
弥生後期中頃～後半（下大隈式併行）	白井川遺跡	東彼杵町	2号住	円形				中央炉
	十園遺跡	雲仙市	27区 SB1		方形			ゆるい擂鉢状穴
	陣ノ内遺跡	雲仙市	1D2号住		方形			中央穴
	西ノ角遺跡	雲仙市	住居（番号なし）		方形			中央浅い穴炭化物
	竹松遺跡	大村市	TAK201403SC8		方形			張り出し住居
弥生終末（庄内式併行）	白井川遺跡	東彼杵町	3号住	円形				中央炉
	冷泉遺跡	大村市	6号住		方形			地焼炉
	龍王遺跡	雲仙市	13・14区 SB5	円形				
	龍王遺跡	雲仙市	13・14区 SB6				隅丸方形	
	龍王遺跡	雲仙市	14区 SB1		方形			地焼炉、焼土
	今福遺跡	南島原市	C 地区住	円形(径10m)				地焼炉、焼土
	竹松遺跡	大村市	TAK201403SC1	楕円形				中央土坑
	竹松遺跡	大村市	TAK201403SC3		方形			中央炉
古墳前期初頭（布留0式併行）	門前遺跡	佐世保市	2号住				隅丸方形	中央炉
	龍王遺跡	雲仙市	14区 SB2		方形			地焼炉、焼土
古墳前期初頭～前葉（布留1式併行）	長畑馬場遺跡	平戸市	2号住			歪な長方形		中央穴、炭
	稗田遺跡	大村市	3号住		方形			地焼炉、焼土
	有喜上原遺跡	諫早市	1号住				隅丸方形	中央炉
	有喜上原遺跡	諫早市	2号住				隅丸方形	地焼炉、被熱赤変
	龍王遺跡	雲仙市	12区 SB1				隅丸(長)方形？	中央部未掘
	佃遺跡	雲仙市	86区 SB1		方形？			地焼炉、中央焼土
古墳前期中葉　（布留2式）	龍王遺跡	雲仙市	5区 SB1		方形(ベット)			中央穴・焼土含む
古墳前期後葉　（布留4式）	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC15		方形			カマド痕跡、周壁溝
古墳中期中葉～	竹松遺跡	大村市	TAK201403SC9		方形			カマド痕跡、周壁溝
古墳中期後葉	竹松遺跡	大村市	TAK201405SC1			長方形		カマド痕跡、周壁溝全周
古墳後期中葉～後葉	竹松遺跡	大村市	TAK201406SC2			長方形		カマド痕跡　中央土坑　周壁溝
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC4			長方形		カマド痕跡
古墳後期　後葉～終末	竹松遺跡	大村市	TAK201405SC5				隅丸方形	中央炉、周壁溝全周
	竹松遺跡	大村市	TAK201405SC6				隅丸方形	中央炉、周壁溝全周
	竹松遺跡	大村市	TAK201406SC1		方形			カマド痕跡
	竹松遺跡	大村市	TAK201406SC4		方形			5.4m×5.3m
	竹松遺跡	大村市	TAK201406SC5		方形			中央土坑、焼土　周壁溝
	竹松遺跡	大村市	TAK201406SC13		方形			カマド痕跡、周壁溝全周
	竹松遺跡	大村市	TAK201406SC15		方形			カマド痕跡、周壁溝(東)
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC1		方形			カマド痕跡、中央土坑、周壁溝全周
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC3				隅丸長方形	
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC5			長方形		周壁溝
	竹松遺跡	大村市	TAK201407SC14		方形			カマド

※　宮崎貴夫氏の「長崎県本土地域の状況について」の表2『本土部の住居跡の炉と甕・器台』　2015.7.11に追加加筆したものである。『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会



第315図　竹松遺跡の弥生時代竪穴建物平面プランの変遷(S=1/200)

0　(S=1/200)　5m



第316図　竹松遺跡の古墳時代竪穴建物平面プランの変遷(S=1/200)

0　(S=1/200)　5m

第171表　弥生時代竪穴建物一覧表

調査区	遺構名	時期	平面プラン	平面形	規模	屋内施設	主柱	出土遺物	グループ	備　考
TAK 201403 6軒	SC1	後期終末	楕円形		長軸4.0m+、短軸2.0m+	中央土坑、周壁溝(北・南)		壺、甕	i	
	SC2	後期終末？	方形又は長方形		長軸3.8m+、短軸1.6m+	中央土坑、周壁溝(北・南)			l	
	SC3	後期終末	長方形		長軸6.48m、短軸5.28m+	炉跡、周壁溝	6本	壺、堆、器台、砥石	i	削平が著しい
	SC5	不明	長方形か？		長軸3.5m+、短軸3.0m+			小片	k	
	SC7	終末か？	円形か楕円形		長軸3.2m+、短軸1.1m+			甕片	j	
	SC8	後期終末	方形		長軸6.0m+、短軸5.8m+	中央土坑	4本		j	長方形の張り出し部を有す
TAK 201404 2軒	SC4	後期前半	円形		長軸6.82m、短軸5.4m+	中央土坑		甕、鉄製品、磨石 ガラス小玉	h	
	SC5	後期前半？	円形か楕円形		長軸4.6m	中央土坑		土器片	h	
TAK 201405 2軒	SC7	中期末	隅丸方形		長軸3.6m、短軸3.1m	中央土坑、周壁溝(全周)	4本	甕、砥石、石皿	g	
	SC8	中期末	隅丸方形		長軸4.0m、短軸3.9m	中央土坑、周壁溝(全周)	4本	甕、鉢	g	
TAK 201406 3軒	SC11	後期前半	長方形		長軸3.2m+、短軸2.9m	中央土坑		台付甕、壺	a	焼失住居
	SC12	中期末～後期初頭？	方形		長軸4.0m、短軸4.0m	中央土坑、周壁溝(東・西・南)		甕、壺、台付甕	b	
	SC16	後期前半？	方形		長軸3.58m、短軸3.36m	中央土坑		なし	c	
TAK 201407 8軒	SC6	中期末～後期初頭	長方形		長軸5.66m、短軸4.16m	中央土坑	2本	甕、台付甕、砥石、 打製石斧	e	松菊里型住居に類似
	SC7	後期前半	隅丸楕円形		長軸7.0m、短軸6.06m	中央土坑、周壁溝(全周)	2本	甕、台付甕	d	
	SC8	後期前半	楕円形		長軸6.32m、短軸5.64m			甕、台付甕、壺、鉢	f	
	SC9	後期前半	楕円形か？		長軸3.46m+、短軸3.30m+			台付甕、甕	c	
	SC12	後期前半	長方形		長軸3.74m+、短軸3.94m	炉跡、周壁溝(東)		台付甕、壺、甕	c	
	SC13	後期前半	円形		長軸5.92m、短軸5.74m	中央土坑2基、周壁溝(南)		甕、壺、凹石	c	
	SC19	後期前半	長方形		長軸3.76m、短軸3.10m	土坑、周壁溝(西)		甕	f	
	SC20	不明	長方形か？			土坑			d	削平が著しい

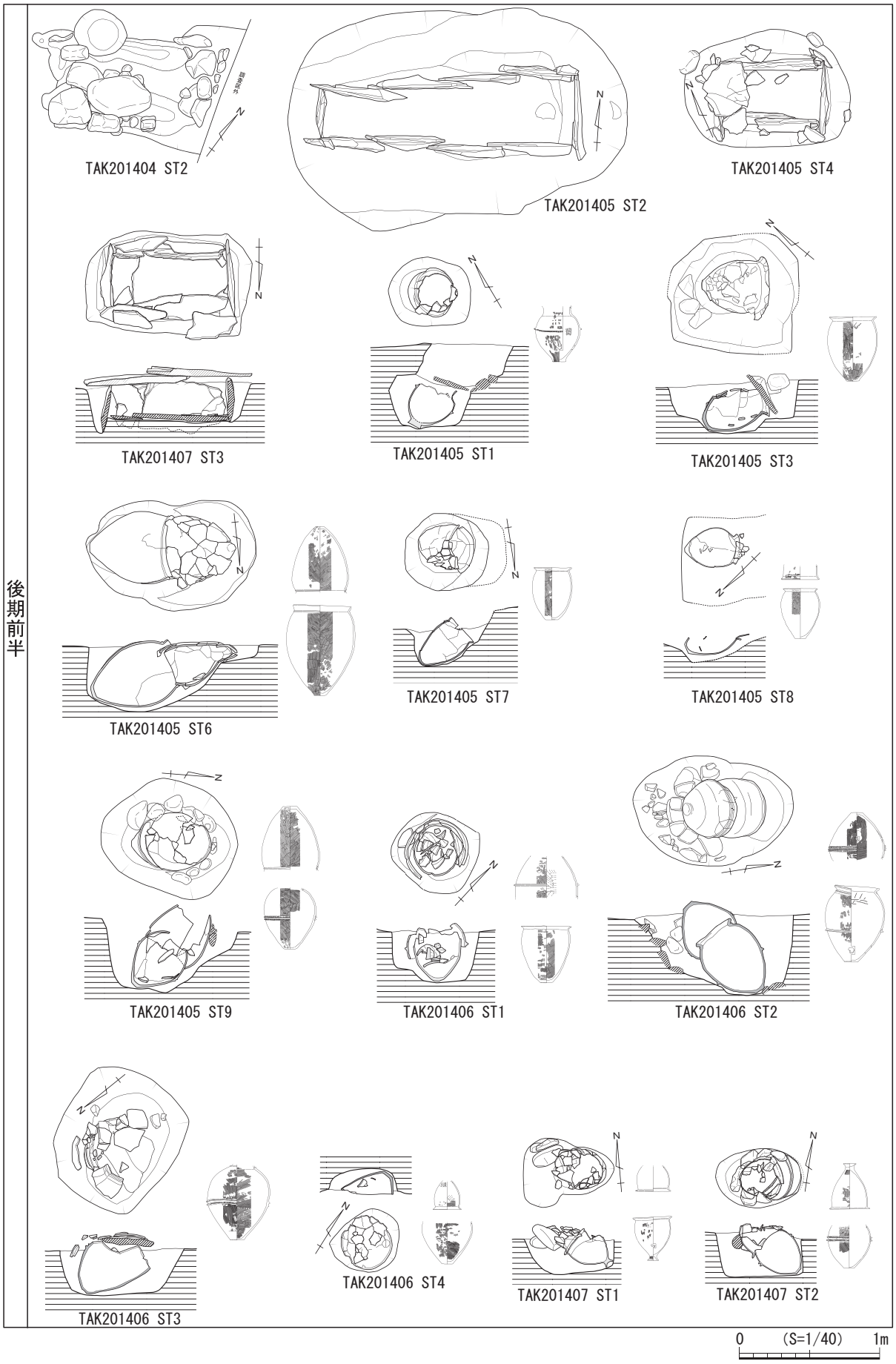
第172表　古墳時代竪穴建物一覧表

調査区	遺構名	時期	平面プラン	平面形	規模	屋内施設	主柱	出土遺物	グループ	備　考
TAK 201403 2軒	SC6	5C 中頃以降	台形か？		長軸6.16m、短軸6.0m+	周壁溝(南東)	4本	なし	XⅦ	
	SC9	5C 中頃以降	正方形		長軸6.0m、短軸5.8m	カマド(南側)、周壁溝(北)	4本	なし	XⅦ	
TAK 201404	なし									
TAK 201405 3軒	SC1	5C 後半	長方形		長軸4.34m、短軸3.74m	カマド、周壁溝(全周)	4本	土師器甕、椀、高杯、土錘	XⅥ	
	SC5	5C 後半	隅丸方形		長軸4.64m、短軸4.50m	中央土坑(炉跡)、周壁溝(全周)	4本	土師器甕、高杯	XⅣ	高杯は丹塗り
	SC6	6C 後半	隅丸方形		長軸4.96m、短軸4.04m	中央土坑(炉跡)、周壁溝(全周)	3本	甑、甕、甑把手	XⅤ	
TAK 201406 12軒	SC1	6C 後半	正方形		長軸5.40m、短軸5.24m	カマド	3本	須恵器杯身・蓋、土師器甕、壺、模倣杯身	Ⅲ	SC9を切っている
	SC2	6C 後半	長方形		長軸6.60m、短軸5.30m	カマド、中央土坑(焼土)、周壁溝(西・南東)	4本	土師器甕、甑、須恵器杯身・蓋、移動式竈、石斧	Ⅵ	SC7を切っている。硬化面は全面に敷設
	SC3	6C 後半？	正方形		長軸4.78m、短軸4.30m			土師器小片、弥生土器壺胴部片	Ⅳ	
	SC4	6C 後半	正方形		長軸5.40m、短軸5.30m	なし	なし	土師器甕片	Ⅴ	
	SC5	6C 後半	正方形		長軸3.20m、短軸3.06m	中央土坑(焼土)	なし	土師器甕、須恵器蓋	Ⅵ	
	SC6	6C 後半	正方形		長軸5.0m、短軸4.0m+	カマド、周壁溝(北)		須恵器杯、蓋、甕、土師器甕、模倣杯、椀	Ⅶ	
	SC7	6C 後半	長方形		長軸(南北)6.88m、短軸(東西)6.16m			須恵器杯身、瓻、土師器甕、蓋、石製紡錘車	Ⅴ	SC2が切っている
	SC8	6C 中頃～後半	長方形		長軸(南北)5.30m、短軸(東西)5.0m	カマド、屋内土坑	2本	土師器甕、手づくね土器、高杯、須恵器杯身・蓋、移動式カマド片、砥石	Ⅲ	
	SC9	6C 後半	正方形か長方形		長軸3.60m、短軸1.4m+		2本	土師器椀、須恵器杯身	Ⅳ	
	SC13	6C 後半	正方形		長軸(東西)4.6m、短軸(南北)4.5m	カマド、周壁溝(全周)	4本	須恵器杯蓋、土師器高杯、甕	Ⅰ	
	SC14	6C 後半	正方形か長方形		長軸4.1m+、短軸1.4m+	カマド		須恵器蓋、壺？、土師器壺、高杯	Ⅰ	
	SC15	6C 後半	正方形		長軸6.4m+、短軸6.3m	カマド、周壁溝(東)	2本	須恵器杯身・蓋、甕、土師器高杯、小形壺、模倣杯蓋	Ⅱ	

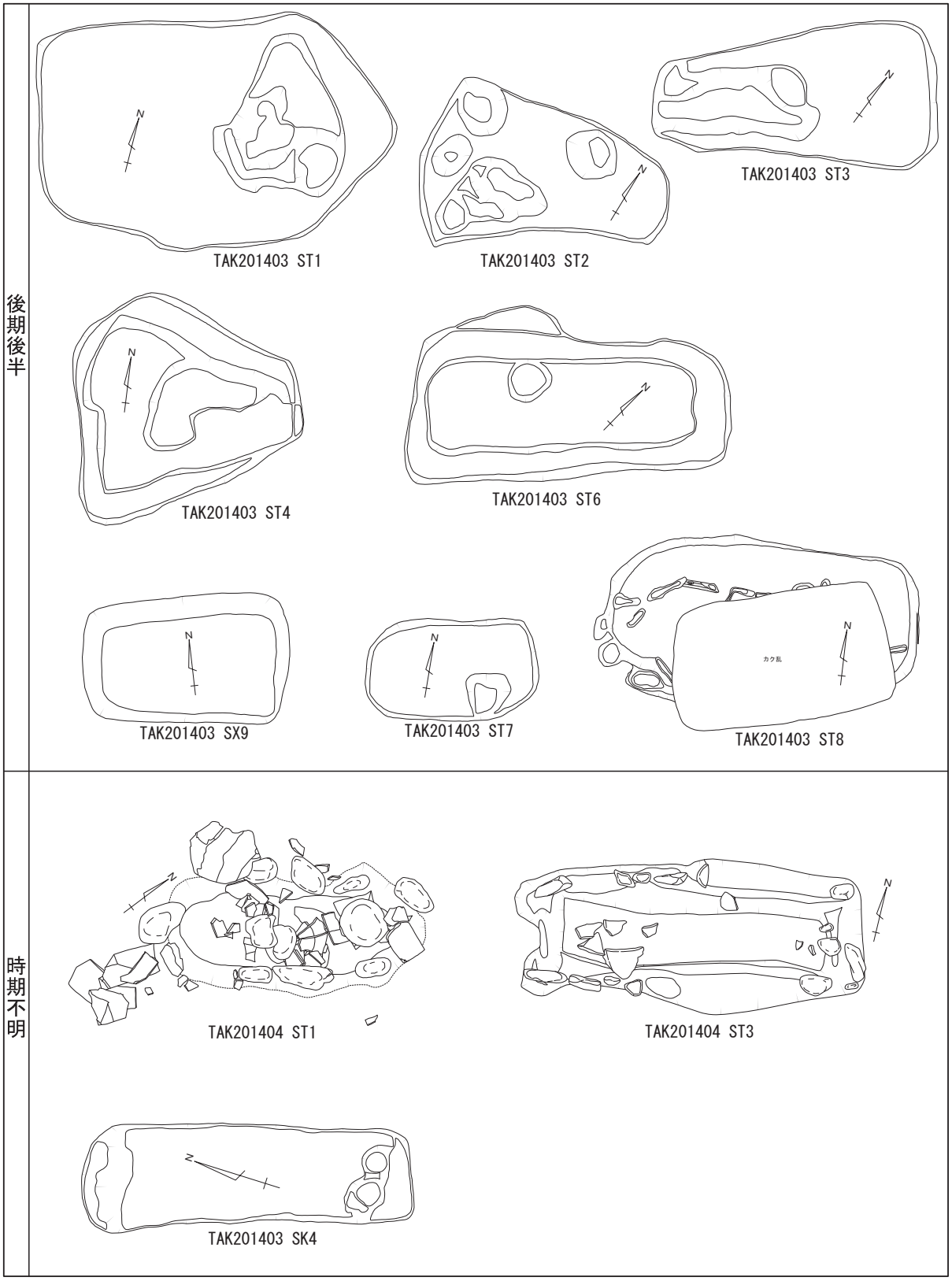
調査区	遺構名	時期	平面プラン	平面形	規模	屋内施設	主柱	出土遺物	グループ	備　考
TAK 201407 11軒	SC1	6C 後半	正方形		長軸4.0m+、短軸3.92m	カマド、中央土坑、周壁溝(全周)	4本	土師器甕、鉢、椀 模倣杯身	Ⅹ	
	SC3	6C 後半	隅丸長方形		長軸4.46m+、短軸3.82m	なし		土師器甕、甑把手、模倣杯身、須恵器杯身	Ⅸ	
	SC4	6C 中頃～後半	長方形		長軸5.80m、短軸4.86m	カマド	3本	土師器甕、高杯、模倣杯蓋、須恵器杯身、蓋、鉄鏃	Ⅸ	
	SC5	6C 後半	長方形		長軸4.68m、短軸4.24m	周壁溝(東・南)	4本	土師器甕、須恵器杯身・蓋	Ⅹ	
	SC10	6C 後半～7C 前半	正方形か長方形		長軸4.28m、短軸1.72m+	周壁溝		土師器甕、須恵器杯身、鉄鏃柄、石製紡錘車、鉄製Ｖ字形鍬鋤先	Ⅷ	
	SC11	不明	長方形		長軸5.04m、短軸4.40m	なし	なし	弥生式土器甕小片、土師器甕小片	Ⅷ	古墳時代の遺構としているが、弥生時代の遺構かもしれない
	SC14	6C 後半～7C 前半	正方形		長軸3.72m、短軸3.50m	カマド	4本	土師器甕、壺、椀、甑把手、模倣杯身・蓋、須恵器蓋？	ⅩⅠ	
	SC15	4C 後半～5C 前半	長方形		長軸4.44m、短軸4.16m			土師器甕、壺、鉢、手づくね土器、高杯	ⅩⅡ	SC16を切っている
	SC16	不明 (4C 後半～末？)	長方形		長軸6.24m、短軸5.80m	中央土坑	2本	土師器甕、小形壺、手づくね土器、高杯	ⅩⅢ	
	SC17	不明 (4C 後半～5C 前半？)	正方形		長軸4.68m、短軸4.40m	屋内土坑(SK1・2)		土師器甕、椀、広口壺、小形丸底壺、手づくね土器	ⅩⅡ	SK1は炭化物を多く含む。この覆土から土器が出土
	SC18	4C 後半～4C 末	横長楕円形		長軸6.56m、短軸4.0m	中央土坑		土師器二重口縁壺、甕、手づくね土器、砥石	ⅩⅢ	布留式系甕が出土している

第173表　弥生時代墳墓一覧表

番号	調査区	遺構略号	墳墓の種類	区	グリッド	主軸方位	墓壙及び埋葬壙平面形	赤彩	副葬品	頭位	墓壙法量（中心軸 m）			埋葬壙法量（中心軸 m）			甕棺の法量（cm）			石棺法量（中心軸 m）							時代	グループ	備考
											上端 長軸 下端	上端 短軸 下端	高さ	上端 長軸 下端	上端 短軸 下端	高さ	口径	器高	底径	上端 長軸 下端	上端 短軸 下端	高さ	頭位小口幅	頭位小口高さ	足位小口幅	足位小口高さ			
1	TAK 201403 9基	ST1	土坑墓	3	1272 1470	N−76°−E	楕円形	−	−	北東				2.40＋ 2.34	1.52＋ 1.46	0.10											後期終末	I	成人墓
2		ST2	土坑墓	3	1470	S−58°−W	先細り長方形	−	−	西				1.70 1.62	0.80 0.76	0.05～ 0.08											後期後半	I	成人墓
3		ST3	土坑墓	3	1270	N−53°−E	先細り長方形	−	−	北東				1.90 1.80	0.80 0.76	0.15～ 0.18											後期後半	I	成人墓
4		ST4	土坑墓	3	1270	N−83°−E	不正三角形	−	−	不明				1.60 1.44	1.30 1.16	0.30							0.70				後期後半	I	成人墓
5		ST6	土坑墓	3	1470	S−44°−W	長方形	−	−	南西	2.14 2.06	0.92 0.84	0.08～ 0.20	1.80 1.76	0.60 0.54	0.09～ 0.12											後期後半	I	成人墓
6		ST7	土坑墓	3	1470	N−81°−E	隅丸長方形	−	−	東				1.16 1.08	0.68 0.60	0.12											後期後半	I	幼児墓
7		ST8	箱式石棺墓	3	1470	S−83°−W	横長楕円形	−	ガラス小玉1点	西										2.10 1.92	1.10＋	0.25					後期後半	K	成人墓　後世のカク乱により削平されている覆土から板材が出土したこと及び床面の側石痕、小口石痕から箱式石棺墓と思われる。
8		SK4	土抗墓	3	1270	N−21°−W	長方形	−	−	北西				2.22	0.65	0.25											時期不明	J	成人墓
9		SX9	土坑墓	3	8658	E−6°−S		−	−	東				1.38 1.16	0.84 0.64	0.38											後期後半	L	成人墓
10	TAK 201404 3基	ST1	箱式石棺墓	B6西区	9270	S−37°−W	楕円形	−	−	南西										1.75 1.45	0.78 0.48	0.3～ 0.4					時期不明	G	成人墓
11		ST2	土坑墓	B8南区	0878	N−66°−E	長方形	−	−	北東				1.20＋ 1.00＋	0.76 0.68	0.30											後期前半	H	幼児墓　朱の塊が出土
12		ST3	箱式石棺墓	B8南区	0878	S−75°−W	横長形	−	管玉	北西										2.18 1.76	1.06 0.74	0.18					時期不明	H	成人墓
13	TAK 201405 8基	ST1	甕棺墓	5	7460	E−31°−S	楕円形	−	−	南東	0.60	0.50	0.25					残高39.0	9.0								後期前半	D	幼児墓　単棺の甕棺墓。蓋は安山岩の平石を使用している。
14		ST2	箱式石棺墓	2・3	7668 7666	N−86°−E	楕円形	−	−	東	2.48	1.44	0.65							1.80	0.40	0.25	0.45	0.25	0.33	0.20	後期前半	F	成人墓　頭蓋骨片が出土
15		ST3	甕棺墓	3	7666	E−50°−S	台形状	−	−	南東	0.90	0.85	0.30				33.4	46.1	9.0								後期前半	F	幼児墓　単棺の甕棺墓。蓋は安山岩の平石を使用している。
16		ST4	箱式石棺墓	5	7460 7462	E−24°−S	楕円形	−	−	南東	1.20 0.85	0.87 0.56	0.30							0.82 0.74	0.56 0.40	0.28	0.44	0.36	0.36	0.26	後期前半	D	幼児墓　小形の箱式石棺墓
17		ST6	覆口式甕棺墓	3	7666	W−5°−N	楕円形	上甕 下甕	−	西	1.20	0.75	0.95＋				下甕42.7	上甕 残高46.9 下甕64.9	上甕6.2 下甕8.4								後期前半	F	乳幼児墓
18		ST7	甕棺墓	3	7666	W−6°−N	楕円形	−	−	西	0.58	0.55	0.25～ 0.30				27.0	37.4	9.0								後期前半	F	乳幼児墓 単棺
19		ST8	覆口式甕棺墓	5	7462	S−45°−W	−	−	−	南西	−	−	−	−			上甕26.4 下甕23.6	上甕 残高9.7 下甕35.6	下甕7.8								後期前半	E	乳幼児墓
20		ST9	覆口式甕棺墓	3	7666	W−86°−N	楕円形	下甕	−	北	0.97	0.77	0.50				−	上甕45.5 下甕47.8	上甕9.6 下甕7.2								後期前半	F	乳幼児墓
21	TAK 201406 4基	ST1	覆口式甕棺墓	2	7052	W−46°−N	楕円形	−	−	北西	0.60	0.57	0.37～ 0.45				下甕36.0	上甕 残高28.8 下甕40.7	下甕8.7								後期前半	B	乳幼児墓
22		ST2	覆口式甕棺墓	2	7052	S−8°−W	楕円形	−	−	南	1.15	0.78	0.57				下甕31.4	上甕 残高34.8 下甕55.2	上甕8.0 下甕9.2								後期前半	B	乳幼児墓
23		ST3	甕棺墓	3	6850	E−38°−S	長楕円	−	−	南	0.98＋	0.85＋	0.28＋				−	下甕 残高53.4	下甕9.5								後期前半	A	乳幼児墓 単棺。石蓋あり
24		ST4	覆口式甕棺墓	3	6648	S−58°−W	楕円形	−	−	南西	0.49	0.45	0.18＋				上甕20.0	上甕 残高19.9 下甕 残高29.2	下甕7.6								後期前半	A	乳幼児墓
25	TAK 201407 3基	ST1	覆口式甕棺墓	2	7058	W−4°−N	不正楕円形	−	−	西	0.60	0.50	0.25＋				上甕24.6 下甕27.6	上甕 残高17.5 下甕31.6	下甕7.8								後期前半	C	乳幼児墓
26		ST2	覆口式甕棺墓	2	7056	S−82°−W	楕円形	−	−	西	0.61	0.46	0.29＋				上甕28.8	上甕32.3 下甕 残高30.3	上甕9.0 下甕7.6								後期前半	C	乳幼児墓
27		ST3	箱式石棺墓	2	7056	W−4°−N	長方形	−	−	西	1.18	0.71	0.28							0.86	0.22	0.41					後期前半？	C	小児墓



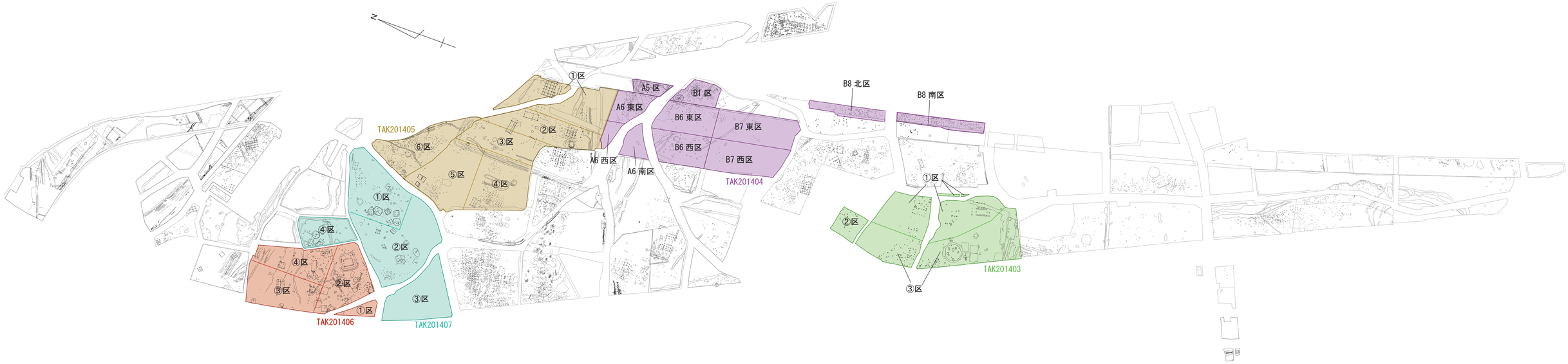
第317図　竹松遺跡の弥生時代墳墓の変遷　その1(後期前半)(S=1/40)



第318図　竹松遺跡の弥生時代墳墓の変遷 その2(後期後半・時期不明)(S=1/40)

引用・参考文献

芋本隆裕・松田順一郎編1984『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3』㈶東大阪市文化財協会
大村市教育委員会1987『富の原遺跡』大村市冨の原1・2丁目に所在する遺跡群の範囲確認調査　大村市文化財調査報告書第12集
寺沢薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社
石野博信1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
武末純一1991『土器からみた日韓交渉』学生社
芋本隆裕1992『西之辻遺跡第23次発掘調査報告』東大阪市教育委員会・㈶東大阪市文化財協会
角南聡一郎1993『西日本の土器棺墓と埋葬遺体』奈良大学大学院研究年報Vol.4号
川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版出株式会社
杉井　健1994『甑形土器の基礎的研究』待兼山論叢　史学篇28　P31～56
船山良一・松本敏三・池田瑩史編1996『須恵器集成図録』第5巻　西日本編
橋口達也1999『弥生文化論　－稲作の開始と首長権の展開－　』雄山閣出版株式会社
菅原康雄・梅木謙一編2000『弥生土器の様式と編年』四国編　木耳社
柳田康雄2002『九州弥生時代の研究』学生社
加納俊介・石黒立人編2002『弥生土器の様式と編年』東海編　木耳社
川村浩司編2003『古墳出現期土器の研究』高志書院
橋口達也2005『甕棺と弥生時代年代論』　雄山閣出版株式会社
野島　永2010『弥生時代における鉄器保有の一様相』　九州・四国地方の集落遺跡を中心として京都府埋蔵文化財論集第6集京都府埋蔵文化財調査研究センター
長崎県考古学会・肥後考古学会2012『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会資料
長崎県考古学会・肥後考古学会2014『肥前型器台について』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会資料
長崎県考古学会2014『長崎県本土地域における古墳の様相』
河野正則2014『古墳時代の農具研究』－鉄製刃先の基礎的検討をもとに－　雄山閣出版株式会社
長崎県考古学会・九州考古学会2015『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同大会資料
長崎県教育委員会2016『原の辻遺跡　総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集
蒲原宏行2017「九州島における古式土師器」『佐賀・唐津平野』第19回九州前方後円墳研究会　長崎大会発表要旨・資料集
長崎県教育委員会2017『竹松遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　長崎県文化財調査報告書第214集
長崎県教育委員会2018『竹松遺跡Ⅲ』九州新幹線西九州ルート(長崎ルート)建設工事に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　新幹線文化財調査事務所調査報告書第6集



第319図　竹松遺跡全体遺構配置図（1／1500）

0　(S=1/1,500)　100m

報告書抄録

ふりがな	たけまついせき　よん　ちゅうかん　やよい・こふんへん
書名	竹松遺跡Ⅳ　中巻　弥生・古墳編
副書名	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	ＸＩ
シリーズ名	新幹線文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	中川潤次
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎県長崎市尾上町3番1号　TEL095－824－1111
発行年月	西暦2019年7月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
竹松遺跡（たけまついせき）	長崎県（ながさきけん） 大村市（おおむらし） 竹松町（たけまつまち） 676番地 3他	42205	086	32° 57′ 15″	129° 56′ 45″	20140528～ 20150306	35,323㎡	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）に係る車両基地建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹松遺跡	包含地	弥生 古墳	古墳周溝 竪穴建物跡 石棺墓 土坑墓 小児甕棺墓 竈 土坑 柱穴	弥生土器 弥生石器 古式土師器 土師器 須恵器 ガラス小玉 耳環 滑石製紡錘車	

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第11集
九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＩ

竹松遺跡Ⅳ（中巻）弥生・古墳編

令和元年（2019）年7月発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850－8570　長崎市尾上町3番1号
TEL095－824－1111

印刷所　株式会社　昭和堂
長崎県諫早市長野町1007－2
TEL0957－22－6000